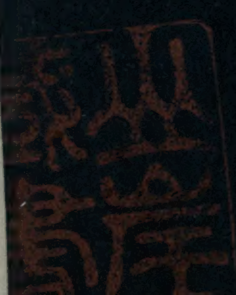


「宗門の維新」○二個の眞理○偉人と凡人との別○價値と我○惡を憎むこと何ぞ甚しき○瘋狂院○ニイチエの批難者○ニイチエの嘆美者○自然の兒○病と醫學○中江兆民居士○道學先生の理想的人物○教科大學○麵麭の比較研究○迷信と眞信○麵麭を欲して石を得たり○先づ人たらむことを要す○年若き人よ○事後の註釋、理前の是認○菅公一千年祭○怯夫に非ざれば偽人○單に一個の題顱を有するの故に○醜なる哉東京市○靜思錄○無題錄○宗教談○坪内氏の自意識論○古き眞理○法則と生命○吾人の理想○永き戀・早き死○イゴイスト○裸體の盛裝○己れの立てるところ○無題錄○グリーンと道學先生○故大橋佐平氏（大橋圖書館の開始に際して感あり）○雜談○無題錄○雜談

樗牛全集第五卷 想華及消息

△高山博士墳墓筆蹟挿入▽

紙數六〇二頁　正價金壹圓五拾錢
小包送料金拾五錢

歴史小説　瀧口入道

感想

吾妹の墓○戀情論○故鄉論○雪中梅○今樣三首、敦盛、忠度、小督○准亭郎の悲哀○傷心錄○亡弟良太病中書簡の首に書す○わがそでの記○原積薄發○冷鐵のひゞき○送年の辭○秋色○歲暮○無題○詹々錄○無題集○清見寺の鐘聲○思ひ出の記○乙羽兄を憶ふ○無題集○況後錄

雜篇

○鳥海山紀行○序詞○夏季の學生○海の文藝○

清見潟日記○鎌倉の話○鄉里の弟を羨むる書○猶多○人と愛情○疑
放言　斷片　問○日蓮上人

消息

明治二十四年九月十四日附の手翰より明治三十五年十月三十日附の手翰まで其數百二十通を撰載せり

外篇

倫理教科書○世界文明史○論理學○近世美學（以上）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

過去一年（明治三十一年）の國民思想
倫理敎育問題
無主義の敎育
誰か我國を西班牙に比するものぞ

罪惡の千八百九十八年
殖民的國民としての日本人
帝國主義と殖民
北米合衆國の國情如何
日本主義と大文學

時勢と詩人
人の天分
死と永世
外山博士を悼む
東本願寺と村上專精氏
十九世紀總論

○序論○第一革命（佛國西革命）○第二革命（千八百四十八年）○第三革命（中部歐羅巴の改造）○東方問題（東部歐羅巴の改造）○極東問題（歐亞の衝突）○歐洲文明の普及○學術及び文藝○物質的進步○當今の問題

（雜編）歷史と人種○成敗と正義○社會問題○國家的宗敎○基督敎徒の逢迎主義○士の德操○社會的制裁の薄弱○無題（一）（二）○人道何處にある○私立學校を論じて當局者の注意を促す○國樂制定の必要○公開書（西園寺文相に呈する書）○吾人の宗敎觀○笑ばざる國民と文學美術○紳士と高利貸○死學者○國家の要求○大西祝氏を送る○異人種同盟○大スラブ主義○國民道德の危機○愛國を罵る者に告げむ○宗敎の眞精神と新宗敎○Verlassung ssünde（怠慢罪）○羅面將に落ちむとす○大人物と私德○少年國○大人物の生死○殖民地と歷史の敎訓○高價なる美譚○罪惡の首府○日本人と能辯○幽靈的宗敎○彼は彼たり我は我たり○寧ろ民を愚にせむ乎○新紙の墮落○悔悟の時機來るや遲し○田園將に蕪せむとす○西鄕南洲の銅像○近時の銅像○大人物の墓○グラハベル氏○逐客康有爲○無趣味の家庭○沙漠の如し○西班牙の近時○勝海舟○權利思想の發達と本邦の道德○剪栽の花○新しき日本○無定見の國民○佛蘭西共和國の近世史○勝地の俗化○人心の倦怠○恐ろしき沈默○好意の缺乏○奢侈○東北の遺利○新聞時弊○專門學の智識を普及せよ○奇怪なる保守主義○腐敗せる宗敎家○國民の歌○最も危險なる思想○新聞紙の無勢力○學界危言○進步の呪咀○少年に寄語す○世と馬○眞理の罪惡○一大刷新の覺悟○聲無き國民○名譽ある成敗○一種の魔力○帝國大學と世評○本年の二大問題（國字問題と論理問題）○板垣伯と福澤氏○不公平なる批評○學風に就いて○人格の力○慈善と死○卒業諸子に告ぐるの辭○詹々錄

第三期

信仰覺醒の時代

（三十四年八月より三十五年終焉まで）

美的生活を論ず
現代思想界に對する吾人の要求

日蓮上人とは如何なる人ぞ（日蓮上人と上行菩薩）
日蓮上人と日本國（日蓮上人の眞面目を見よ）
日蓮と基督（其一）（其二）
吾が好む文章

日蓮研究會を起すの議
感慨一束（姉崎嘲風に與ふる書）

（雜編）○無題錄○學說と人格○人々自ら悟らざるべからず○空腹高心○道義亡國○笑はむ乎狂せむ乎○吾をして詩人たらしめば○言論畢竟人物のみ○米と砂○其愚や及ばず○道學先生の世界○何ぞ一に煩瑣なる○口耳の學○罪は貧者にあり○田中智學氏

文藝評論　補遺

戯曲に於ける悲哀の快感を論ず○日本民族○特種と文學美術○青年小説を讀む○喜ぶべき文壇の一傾向○吾が文學界に於ける道義的傾向○古寺院の寶物○新聞雜誌の時代○人才と我文學界○美術に對する購買力○一刀兩斷の制裁曲學阿世○今の論文家○西鄕南洲の銅像を評す○新建築と美術○天地有情を讀みて○詩歌の所縁と其對象に關して難者に答ふ○同上再び宙外に答ふ○博物館論○古社寺及古美術の保存に就て○美術と富豪○大佛露佛説○藝術の鑑査を論ず○美術の保護者○美術に於ける人物の理想的表現○將來美術界の一大問題○消息○漫評○雜談○無題録○藝苑瑣談○裝飾と日本美術○藤原時代以後の日本美術史概觀（以上）

樗牛全集第四卷　時勢及思索

△高山博士寫眞挿入▽

紙數千百餘頁　正價金壹圓五拾錢　小包送料金貳拾錢

目次

〔雜　論〕

文學會漫評○青年文人の厭世觀○武島羽衣の「小夜砧」を評す○演劇界の風潮と劇評家の責任○美術と道德○「文學界」の諸君子に寄する書○敢て日本美術史の編纂を促す○批評眼○明治二十八年の文學界○少壯漢學者に告ぐ○宗教小說○裏面の觀察とは何ぞや○女性作家に望む○賞鑑家と國民○時好と批評家○春の家が「桐一葉」を讀みて○寫生と寫意○意想と畸形○大塚文學士を送る○今日の新體詩家を警醒す○書談一策○美學史及美術史○一葉女史の「たけくらべ」を讀みて○俳句及狂詩○俳句と符號○俳句○鑑定家と批評家○鷗外に答ふ○一葉女史の「われから」○德富蘇峰君を送る○市川新藏○今戶心中と情死○能樂會○能樂の性質○脚本の批評法○田山花袋の「わすれ水」

〔第二期〕　三十年六月より三十三年七月

我國現今の文藝界に於ける批評家の本務○明治の小說○所謂社會小說を論ず○支那文學の價値○春の家主人の「牧の方」を評す○坪內逍遙が「史劇に於ての疑」を讀む○小說革新時機○曲亭馬琴○詩的の兩面と其利弊○カーライル氏の英雄論の翻譯に就きて○ワルト、ホイトマンを論ず○同（再び）○僞詩人とは何ぞや○文明の裏面○時代精神と大文學○友人某に與へて昨今の文壇を論ずるの書○土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずるの書

〔雜　論〕

齋藤綠雨の色道論を讀む○泉鏡花に與ふ○「先秦文學」を讀む○藤田劍峯を送る○文學に對する根本的誤解○現今美術家の精神的敎育○美術家の絕好課目○歷史を題目とせる美術○佛像陳列の可否如何○閱歷と空想○小說中に現はれたる現代の女性○德富蘇峰○市川新藏を悼む○少年演劇に警告す○髑髏の末路○柳浪の「畜生腹」を讀む○晩翠の詩○今の滑稽文學○最も悲しき聲○詩人唱はず○老人時代○作家自衞法○實在と空想○詩歌の誘惑○新聞記者の資格　○ヒヨルワンとゾラ　○たそかれの辭○「國民の友」を惜む○滑稽小說の作者に告ぐ○自己の修養○漢文を書き換へよ○民族傳說の蒐集○評家及作家としての不知庵○藝術界の尙古主義○詩人と批評家○木村鷹太郎君に與ふ（富士新聞の發刊に際して）○明治卅二年に於ける小說界の傾向を論ず○漣山人の「日本お伽噺」○言文一致の標準○自國の作を讀まざる風○小說の意義○少年の文學熱○煩瑣學風○煩瑣學風と文學者○人名辭書中の文學者○人の出處進退○學者と文章○詹々錄（一）（二）○無題錄（一）（二）（三）（四）

〔第三期〕　三十四年七月より三十五年一月

文明批評家としての文學者（本邦文壇の側面觀）○姉崎嘲風に與ふる書○作文論○現代文章私見○嗚呼凡俗改革○笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す○「元祿時勢粧」を讀む○土井晩翠を送る○大橋乙羽を悼む○留學生諸君を送る○無題錄○三十四年の文藝界○文藝雜談○藝苑瑣談○裝飾と日本美○雜談

詩歌の所緣と其對象

日本畫の過去及び將來に就いて

歷史畫題論 ○序論○屈原○歷史的屈原史○契點の撰擇○信仰畫と歷史畫

歷史畫の本領及び題目 ○序言（繪畫の一般性質より由來せる畫題の制限—歷史畫の本領—歷史畫題撰擇の標準—歷史畫の形式—歷史畫の內容—「東洋歷史畫題」に就て）

再び歷史畫の本領を論ず ○序言（予は抽象理想論者に非ず—二種の理想說に對する予の態度—坪內氏の所謂歷史畫とは何ぞや。名稱威權說の謬謬—歷史畫の本領）

坪內先生に與へて三度歷史畫の本領を論ずる書 ○歷史畫の意義○歷史畫の資料たり得べき歷史的事實○藝術に要する史蹟觀の一致は歷史其物の威嚴に非ず○時代の特相を現するは具象美の要件也

天平時代 ○奈良朝の文化概見○奈良朝の佛教○彫刻（美術上の後業、彫刻家、東大寸大佛、是の時代の優秀なる製作）○繪畫○本邦佛像の形式と希臘佛教式との關係（印度と希臘との歷史上の交涉、健駄邏の佛像、本邦佛像に於ける印度希臘式）

平安朝時代 ○平安前期△延喜以前（總論、繪畫、彫刻）△延喜以後（總論、繪畫、彫刻）○平安後期△總論、彫刻

挿入參考畫目次

○古代石器畫模樣○古代石槨內の畫○鞍部鳥作法隆寺金堂釋迦三尊○法隆寺金堂壁畫○天壽國曼荼羅○藥師寺藥師三尊○在法華堂大佛雛形○東大寺三月堂執金剛神○同梵天像○同堂本尊不空羅索觀音立像○東大堂戒壇院四天王像○法華寺十一面觀音像○藥師寺東院堂聖觀音立像○新藥師寺藥師十二神將○彌勒菩薩○佛陀○同上○同上○鎌倉大佛○南方印度の女神○興福寺中金堂世親無着像○藤原隆能畫○惠心僧都筆二十五菩薩來迎圖○定朝作平等院本尊阿彌陀如來

樗牛全集
第二卷
文藝及史傳 上

△高山博士寫眞挿入▽

紙數一千頁 正價金壹圓五拾錢 小包送料金貳拾錢

目次

文藝評論

文藝及人生

近松巣林子 ○諸論○批評及其方法○戲曲及び之に對する近松の意見○近松戲曲の種類及び結構○近松戲曲の材料に就て○近松に於ける人物性格○巣林子の人生觀○……○巣林子の女性

〔第一期〕二十八年九月より二十九年九月

運命と悲劇○歷史的精神○研究の道念と觀念○詩人と摸倣と天然○文學と美術○日本西洋兩畫風の折衷○文化の關聯○天才論○敍事詩と抒情詩○何故に敍事詩は出でざるか○戲曲に於ける幽靈○退壇に臨みて吾等の抱懷を白す

見よ!! 樗牛全集 完結 自第一卷至第五卷 總目次!!

故文學博士高山林次郎君著

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 姉崎正治君 文學士 齋藤信策君共編

樗牛全集第壹卷 美學及美術史

△高山博士寫眞挿入▽

紙數五百五十二頁 正價金壹圓五拾錢 小包送料金拾五錢

目次

（樗牛全集第四卷時勢及思索）
定價金壹圓五拾錢

明治三十八年八月廿一日印刷
明治三十八年八月廿四日發行
明治三十八年十一月再版發行
明治三十九年四月三版發行
明治三十九年十月四版發行
明治四十年四月五版發行
明治四十年九月六版發行
明治四十一年一月七版發行

明治四十一年八月八版發行
明治四十一年十二月九版發行
明治四十二年五月十版發行
明治四十二年十二月十一版發行
明治四十三年六月十二版發行
明治四十三年十一月十三版發行
明治四十四年五月十四版發行
明治四十四年十月廿四日十五版發行



編輯者　齋藤信策

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

（工場製本）

五、本會ノ爲ニ金壹圓以上ヲ寄附シタル人及本會ノ爲ニ盡力シタル人ヲ本會々員トス

會員ハ本會ノ集會ニ出席シ及ビ園ヲ使用スルヲ得

六、紀念園開園式ヲ擧グルノ日ヲ期シテ本會ヲ財團組織トナス

發起人

長谷川誠也　藤井健治郎
登張信一郎　姉崎正治
畔柳都太郎

明治三十六年十月

贊成人

井上哲次郎　井上圓了　井上準之助　巖谷季雄
大町芳衛　大橋新太郎　長田忠一　玉蟲一郎一
田中喜一　田中智學　坪内雄藏　坪谷善四郎
上田萬年　上田敏　桑木嚴翼　佐々政一
笹川種郎　三浦菊太郎　島文次郎　新城新藏
守本文靜　菅沼達吉

追て本會會員となり本會の爲に義金を投ぜらるゝ諸君は出金額と住所氏名とを東京小石川指ヶ谷町七十八番地姉崎正治に申込みありたし又本會は勸誘員集金人の類を差出さゞるにつき出金は直接右姉崎に申込み又は送金あらん事を乞ふ

本會學術講演に第一回を明治三十六年十月廿一日第二回を一月廿四日に開き其より以後便宜東京諸區幷に地方諸都市を巡回す地方にて右講演開會希望の向は右姉崎に申込みを乞ふ

故高山樗牛歿してよりまさに一ヶ年たらむとするの今日吾等同人相寄りてこゝに樗牛會を組織し敢て大方の賛助を請ふ所以のものは畢竟故樗牛のために紀念事業を起こし其紀念の庭園を以て宗教文藝に志ある人の自由なる集會所となし此に依て亡友の志業を繼紹せむと欲する微意に外ならず想ふに清新の氣風、宗教、文藝の勃興天才の憧憬等は吾等の推奬を俟たずして自から生れ出でんことは自然の數なるべけれども聊か亡友の紀念事業を中心として精神上の文明の爲に努力したき念願と故人に對する吾等の友情とは期せずして同人の一致する所と成り終に左の如き規約の下に樗牛會の成立を見るに至りぬ願くは吾等の愚衷を洞察してこゝに此擧に賛同あらん事を江湖諸兄姉に祈る

樗牛會規約

一、本會ハ故高山樗牛ノ爲ニ紀念事業ヲ擧ゲ幷ニ之ニ必要ナル金額ヲ募集スル爲ニ組織ス

二、紀念事業ハ當分左ノ事項ヲ目的トシ便宜ニ從テ之ヲ遂行ス

一、樗牛ニ關係アル地(多分鎌倉)ニ紀念ノ庭園ヲ開ク

二、園内ニ紀念標ヲ建テ及ビ本會ノ家屋ヲ建築シ之ヲ樗牛關係ノ書類ヲ蒐集スル場所及ビ本會會員ノ集會所ニ宛ツ

三、龍華寺ナル樗牛埋骨地ノ造園ヲナス

三、本會ノ事務ハ當初ノ發起人ヨリ成ル幹事會ニテ處理ス

四、當初ノ贊成人ヲ以テ本會ノ評議會ヲ組織ス

評議會ノ開閉ハ幹事會之ヲ管シ幹事會ハ其決議ニ從テ本會ノ事業ヲ擧グ

樗牛全集第四卷終

さであらう。

◎大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小さきを悟るは其の一つである。己れの大いなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である。彼れは釋迦基督の教義にして、此れは奈破翁、ニイチェの信條である。

◎人を脱して神となる、己れの小さきを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大いなるを信ずる所以である。

（三十五年十一月）

を飲ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はショペンハウエル、ニイチェを苦めたのも、皆是の道德說の爲せる業だ。

◎昔は犧牲は少數の偉人に限られたが、今や多數の凡人が是れに代ることゝなつた。彼等の口無きが故に世は平和に見ゆれども、實は死滅に近づきつゝあるのである。

◎迷信は力である。ダンバーの戰を人が出來事と言つたのに對し、『是れ人事に非ず神事也』と怒りたるクロムエルは、恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうが、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は三災七難の佛讖を叫むで一世を警めたが、今日の學者などの眼には是れ程大いなる迷信者は無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

◎我輩は斯ふ思ふのである。迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりはどちらでも好いのである。唯必要なるは精神である、赤誠である不惜身命の大勇猛心である。

◎今の人は祈ることを忘れた。是れこそは今の世の最も大いなる禍と謂ふべ

なりたるの觀あるは、現に吾々が是まで數々見たる所の事實である。かへす〴〵も不思議な現象だ。

◎鵞鳥は幾たび萊因河を渡つても鳳凰にはなれるものでない。老廢者や無能者は幾度び世界を巡つて來ても、矢張り素の老廢者無能者に過ぎないのだ。歡迎追從するものは素より爲にする所があるからであらう。然れども彼等の淺薄なる觀察談などを珍らしげに世の中に吹聽させるのは、最も惡い洒落と謂はなければならぬ。

* * * * * *

◎あらゆる學術は常に奴隷的のものである。問題は常に外より與へられる。彼れは是の與へられたる問題に對つて解釋を提供すれば、それで好いのである。

◎問題の提供者は時としては自然である、又時としては天才である。學術は常に是れ二者の何れかの奴隷である。

◎迷信は世人が騷ぐほど左程怖るべきものでは無い。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道德說である。基督を十字架に上せたのも、ソクラテースに鴆毒

と廣言して居るのである。

◎其れで渡航後の消息を聞くに、或は帝室の晩餐に招かれたとか、優渥なる勅語を賜はつたとか、某の大臣と會見したとか、某の學者、事業家に面談したとか、到る處の官民に盛大なる歡迎會を受けたとか、銀行や製造場を見るに都合がよかつたとか――まあ斯んな風な紋切形に過ぎないのである。何處の國に通り一遍の客に滿腔の經綸を傾けて話しをする人もあるまいし、其の談話、意見、演說なるものは、つまりは互に御定まりの外交的辭令を交換するに過ぎないことは論のない事である。斯んな風で世界の國を巡つたとて決して世界文明の上に幾何の知見を開拓することが出來やうか。

◎然るに驚くべきは、是の如き漫遊者にして、半年一年の後其の本國に歸り來れば、我邦人は所謂る新歸朝者として非常なる熱心を以て彼れを歡迎するのである。新聞記者は上陸するや否や爭つて彼を圍繞して其の意見を叩き、諸種の協會團體は爭つて彼れを招請して其の新知識を聞かむ事を望み、數月前までは殆ど世の記憶外に在つた彼れは、是の漫遊によりて俄に新生命を持たらしく、社會の一勢力と

(前略)此日予は例の如く大英博物館の書廊に於て半日を暮らしぬ。會々東洋某國の元老伯爵と稱する白髮の老人が一二の從者を隨へて予の坐せる椅子の前を通過せり。あゝ君よ、少しく文藝に志ある吾等の如きものにとりて一日二日其の前に立ちつくすも飽くことを覺えざらむとする此の稀代の傑作の前をば、かの老伯爵とやらむは傍目も振らず過ぎ去り給へる也。云々。

◎吾々は是の手紙に描かれた樣な老伯爵が我邦の元老中にあらうとは素より想はない。然しながら彼れ等老朽者の多くが是の老伯爵と相去ること甚だ遠からざる人物であることは、蓋し疑ふことの出來ぬ事實であらう。一枚の畫などは素より如何でも好い。唯事一國の文藝に關はるものとしては、文明の觀察者にとりて極めて重大なる意義を有し來るのである。文明は法制や軍隊や財政や工業の上にのみ現はるゝものでない、其の心髓は文藝、宗教、社會、學術等の幺微に於て初めて認識し得らるゝのである。深大なる素養と同情とを要するは言ふまでも無い。然るに我邦の政治家や元老などゝ呼ばるゝ輩は、政家年鑑一冊を懐にして、其送別の席上では及ばずながら歐米文明の内部に立ち入つて其の眞相を觀察するなど

教育法であるか。是れによりて所謂る不品行を防遏することに於て多少の効能があるかも知れぬ。然しながら同時に卑屈、因循、姑息、無責任の惡氣習を是等女學生に吹き込むことの如何に大なるべきかを考ふれば、其の利害得失果して何れに在るか、蓋し智者を待つて知るを要せざることであらう。

◎要するに今日の女子教育者は勿論のこと、世上の批評家新聞記者などもイマ少し肝玉を大きくして貰いたいものである。

◎外國漫遊が吾人に新知識を與ふるや素より論は無い。唯近時頻りに吾邦に見る所の如き無學無能なる老廢者の一輩が、志を國內に得ざる時、もしくは忘却せられむとする恐れある時には、則ち事に托して海外に遊び、半年一年にして歸り來れば、先に其無能無識を笑ひたる世間では所謂る新歸朝者として盛に彼れを歡迎し、其の人物の上に新しき値價でも生じたかの如く、追從尊敬至らざる所無きが如きは頗る奇怪の現象と謂はなければならぬ。

◎數月前、在倫敦の我輩の一友人が送り越した手紙の端に斯んな意味の文字があつたのである。

◎我輩が今の女子教育に慊焉たらざるは、斯様な些々たる不品行の點に非ずして、寧ろ其の取締の嚴酷に失するの點にあるのである。例へば高等女子師範學校の例を見るが好い。學生は一歩でも門外に出る時は必ず保證人の證印を要するのである。即ち何時何分より何時何分までは某々の處に居つたと云ふ事實を認めて、是に一々保證人の證明を附せねばならぬのである。又例へば夏季休業で歸省すると云ふ樣な場合には學生の乘用に供する人力車夫は保證人の證明を持つて居るものに限るのである。一にも保證人、二にも保證人、學生の身體は場所に於ても、時間に於ても、殆ど凡ての自由を失つて居る實に憐れな有樣にあるのである。

◎是の如く憐れなる處女より其のあらゆる自由を取り去らねば、女子教育は果して成し得られざるものであるか。學校當局者は其の學生を見るや殆ど前科者兇狀持の如くである。一個婦人の人格の上に大侮辱を加へつゝあるのである。彼等は女學生各個に相當の自由を與へて應分の責任を有たしむることを考へず、唯々外より是を束縛して倖々として過ち無からむことを期するのみである。あゝ是の如き個人の獨立、責任を沒却して徒に外より是を壓迫するは、果して二十世紀の

◎序に云ふが、會頭又は總裁等の名の下に緣も、ゆかりも、能力も誠意も無い高位高爵の人などを戴くはそも〳〵何の必要があるのであるか。唯是れ其の所屬會員の風俗卑劣なる心情を暴露するの外に果して何の意味があるのであるか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◎先達來女學生の醜聞と云ふことが殆ど社會の一つの呼聲となつて居るが、斯んな譯の分らぬ話は無い。女學生とて何も天人やエンヂェルばかりではあるまいし、百人と千人と聚まつた中から十人や二十人の不品行者を出したからとて、尋常一樣の世間並の出來事、何の不思議も無いのである。

◎男子の學生を觀るが好い。帝國最高の敎育府たる帝國大學の學生中で、少くとも一割は花柳病に冒されて居ると云ふ事實は果して何事を示して居るのであるか。社會は驚きもせず、敎育者は怪みもせず、其の狀恰も男兒には不品行を行ふの特權があることを認めて居るものゝ如しである。而して一方に於ては、百中一人の不品行あれば即ち直に女學生の墮落呼はりをするのは沒分曉の極みと言はなければならぬ。

して居るからである。個人の價値、尊嚴を自覺せざる人が幾人集まらうとも決して有効なる團體の組織せらるべき謂はれは無いのである。

◎其の證據には文藝學術等の社會に於て幾何なる大事業が今日の所謂る會なるものによりて成し遂げられたる實例があるか。大いなる著述、もしくは發見をなしたるものは常に個人であるでは無いか。久しい以前より何々調査會と云ふ樣なものは世間に隨分あるが、其の所謂る調査なるものゝ結果が世人を滿足せしめた例しは果して一回だにも有つたのであるか。其の任命せらるゝ委員の顔觸れなどは實に立派な者であるが、彼等は政府の與ふる長き歳月と厚き待遇とによりて、吾々を滿足する樣な報告をもたらしたことは一度も無いでは無いか。

◎凡そ如何なる事業に於ても、個人の精神の籠らぬものには決して眞の生命があり得るものでない。獨立心なく、無責任なる多くの頭數ががや〳〵集まつて飣餖補綴して拵へたものなぞは造り花や寄木細工の樣なものだ。我輩は今日流行する會を惡むものである。彼等は多數の名の下に責任を沒し、時間を徒費し、誠實を切賣りし、延いて一般個人的事業の上にも是の惡風を及ぼしつゝあるのである。

々會、曰く何々協會、曰く何々研究會——もし各部面に渉つて仔細に計へるならば、恐らくは驚くべき多數を示すであらうと想はれる。實に今日は會の全盛時代である。少しく地位名聲ある人にして兩個三個の會員を兼ねないものは殆んど無いであらう。

◎凡そ會なるものゝ設立の趣旨は極めて尤もだ。團體結合の力によりて個人の力にて成し遂げ難き事業を成し遂げやうとする、趣旨や實に明瞭適切を極めて居る。然しながら我輩等の眼から今の所謂る會なるものゝ實狀を見るに、其の多數のものは是の目的を達することの望みより頗る遠ざかつて居るのみならず、却て其の會員たる各個人の獨立心を消耗し、無責任の惡風を助長し、延いて着實誠意の氣習を減殺しつゝあると云ふ極めて歎かはしき事實を認むるのである。

◎人々相依賴するは素より可、唯自家應分の責任を分たずして漫に人によりて事を成さむとするは、既に是れ碌々たる小人の根性である。今の所謂る會なるものには概ね是の弊がある。是れは會其物に規律なく制裁なきの致す所でもあらうが、其の大いなる病根は、會員たる個人各個が、個人としての獨立心、責任感に缺乏

生きずして抑々何物の爲に生くべき乎。吾人は必ずしも社會國家を輕しとせざるも、而かも吾れ自らの重きに比すべからざるを思ふ。他愛可也、博愛又妨げじ。畢竟唯是れ意識上の問題のみ。換言すれば、一個の客體としての社會等は吾れに於て沒交渉也。唯是の客體にして吾が主觀上の事實となり、玆に吾が生存の上に於て多少の價値を認めらるゝに及びて、吾と彼等と初めて亦多少の關係を有し來るべきのみ。吾人は是の意味に於て輿衆を認容し、國家を認容す。畢竟外より吾を折くに非ずして、內より彼等を攝するのみ。是の攝折の意義を解せざる人は、未だ曾て個人の尊嚴を解せざるの人也。

吾人曾て曰へらく、三千法界を以て是の一念に攝す、道義初めて語るべしと。即ち是の謂のみ。嗚呼今の道學先生の幾人か、果して能く這般の消息を解し得べき。

（卅五年十月）

雜談

◎今の時、文藝、學術、宗教、教育等の社會に會と名のつくものが甚だ多い。曰く何

難く力以て傳へ難く、言說理解を超絕して人々自ら自得するの外無きのみ。換言すれば、價値は自ら創造し得る者にして、初めて其の所有者たり得べきのみ。

人生既に價値也、而して價値の主觀的にして個人的なる、亦既に是の如し。畢竟生を此の世に享けて茲に自ら人生の價値を造り、其の價値の最も大いなるものに隨つて安住の地を求めむと欲す。人生の意義又盡せりと謂ふべし。他の目して善と云ひ、惡と云ふ、吾に於て何の關はる所ぞ。若し道德の目的にして最大の幸福を與ふると云ふにあらば、吾人は既に是の如き道德の實行者たるに非ずや。豈啻に實行家たるに止まらむや、更に又其の創造者たるに非ずや。

試に是の言を錄して道學先生の座右に呈せむは如何に。

○

是の如く言はゞ難者必ず言はむ、無數の民衆は汝と共に此世に共存せり。社會是が爲に起り、國家是が爲に立つ。所謂る道德は是等凡ての民衆の幸福の爲に存する也。汝の言ふ所の如きは是れ汝一人の事のみと。

嗚呼汝一人の事は何故に爾かく重しとせられざる乎。吾れは吾れ自らの爲に

看來れば事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く、生くるは價値の爲也。即ち最大の價値と共に生き又死するは、理の當然にして事の必至也。是の如くにして吾人は是の世に生死する能はざる乎。

○

世に道德なるものあり、吾人の行爲を判決して善惡是非の目を立つ。人は是の判決を懼れて偏に其の則に違はざらむことを是れ力む。知らず、是れ果して何の意ぞ。

人生の價値なるは既に是を了す。而して記せよ、價値はそを有する者のみの價値也。能持の主體を離れて世間又價値なる者の存せざること、猶ほ眼を去りて色なく、耳を外にして音無きが如し。即ち價値の物たる、主觀的也。

啻に主觀的なるのみに非ざる也。價値は畢竟個性の反應に外ならざるを以て、同一事物は必ずしも凡ての人に對して同一價値を有すること能はず。即ち價値は主觀的なると共に個人的也。

既に個人的也、是を以て價値の物たる、與ふべからず、受くべからず。辯以て強ゐ

小兒の心乎。

吾人素と學無く才無し。唯野性の生まれながらにして移し難きもののあるのみ。年來人に離れ世と絶し、藐然として天地の間に嘯く。潜に想ふ、是の心それ或は小兒の心に邇からむ乎。願はくて依て以て聊か平生の疑惑を陳べ、録して大方の教を請はむか。

○

人の生を求むるは此生に價値を認むれば也。即ち知る、人生畢竟價値に外ならざるを。

人生既に價値也、是を以て人生の歸趣は常に最大の價値と相伴ふ。最大の價値の存する所、即ち是の價値の所有者にとりて人生の全意義の包括せらるゝ所也。至上の幸福玆にあり最高の道義亦玆にあり。絶對也、無上也。苟も自我の存在する限り、天上天下無二亦無三の尊貴也。人は是が爲めの故に執着し、欲求し、煩悶し、戰闘す。時として繼ぐに死を以てして悔ゐざる也。豈啻に悔ゐざるのみならむや、彼れは是の如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶ也。

充ち滿つれども、彼等恬として省みず。たゞ〳〵名聞利養の外に世間又疑惑なるものゝ存するを解せざるものゝ如く然り。嗚呼人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

○

現世に於ける一切の學智と道德とは、其の根底に於て既に現世を是認す。彼等は現世を超越せずして附隨し、審判せずして讃美し、戒飭せずして阿從す。一代の文敎詮し來れば現世の註釋に外ならざるのみ。

山に入て山を見ず。此の世の眞相を知らむと欲せば、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。斯くて一切の學智と道德とを離れ、生まれながらの小兒の心を以て一切を觀察せざるべからず。

○

嗚呼小兒の心乎。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず、形式、方便、習慣に充ち滿てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人爲の道德、學智の繫縛に累はされず、たゞ〳〵本然の至性を披いて天眞の流露に任かすもの、あゝ獨り夫れ

を不幸とすべきではあるまいか。迷信、僞善、奢侈、淫佚、墮落、腐敗、一切の惡徳の積聚とも見るべく、新時代の人心を傾到せしむる譯には行かないのである。一日是の如き宗門の存在を長うせば、一日我が宗教の腐敗を甚しくするのみだ。我輩一個の考では、今の老法主君が益々健全で、其の法位に居り、ます〳〵其の淫侈を極め、ます〳〵其の負債を殖やし、是の老賣女の如き宗門を一日も早く瓦解し了らむことを希望するものである。

（卅五年十月）

無題錄

吾人は想ふ、平和は餘りに長く此世に續きたり、斯くて人は是の平和の世の長きに慣れて、餘りに平氣になり過ぎたるに非ざる乎。

怪むを要せざる也。鮑魚の中に入るもの、久しうして其の臭きを忘るゝが如く彼等は凡ての物に對して驚きの心を喪へりと覺ぼし。憂へあれども憂へず、悲みあれども悲まず、疑ふべきに安じ、惑ふべきに住まる。文明の苦痛は此世の上下に

◎ブランデスは是等の事實を擧げて、國民主義や人種主義の行はれつゝある今の時にかゝる事實の存することは左程怪むべきでは無い。人道主義、非國民主義の大いなる眞理が是間に其の一端を現はして居るのであると結論した。

（三十五年十月）

* * * * * * * * * *

◎東本願寺は何時までごたつく事か。世間では恰も國家の大事件でゝもあるかの樣に騷ぎ立てるが、謂はゞ地方の豪家の相續爭の樣なもので、左右甲乙何れでも好いではないか。

◎東本願寺は一個の宗門として果して改革し得らるるものであるか。是れ我輩の大に疑ひ怪む所である。今の所謂る改革運動の如きは、俗僧等が俗權財力の分配を爭ひて種々の醜態を演ずるに過ぎずして、毫も宗門信仰の問題と關はるゝ所がない。

◎今日東本願寺の如き大宗門が滅亡することは其の僧侶信徒、乃至關係者にとりて非常の打擊であるであらうが、日本の宗教の爲には寧ろ是の如き宗門の存在

の他、學者ではカントは蘇格蘭人、スピノザは猶太人。又近くは社會主義の泰斗たるフェルデナンド・ラサールやカルル・マルクスも、又天才論を以て名高き人類學者ロムブロゾも皆何れも猶太人である。

◎第四。一國の司配者若くは權勢者が外國人である事例の甚だ多いとは、最も興味ある事實である。魯國を司配するロマノフ家は素と獨逸のホルシタインから出たので、瑞典、那威の司配者たるベルナトット家はガスコニーから出たのだ。支那人の帝王と仰ぎつつあるは漢人種に非ずして滿洲人である。璉馬の皇子と魯西亞の皇女とは希臘皇太子の兩親であつて、獨逸帝室の一公子とキード公女とは何の因緣も無きルマニア人の上に君臨し、澳太利の大公女は西班牙の攝政となり、ブルガリアの國母は佛蘭西のオルレアン家の出である。王室以外に就いて見ても、マザリンも、奈破翁も、ガンベッタも何れも素を糺せば佛蘭西人では無い、英吉利のデスレーリは云ふまでもなく猶太人であつた。愛蘭の無冠の王とまで稱せられたパーネルは愛蘭人で無いのは素より、愛蘭人の屬して居るケルト人でもなく、全く彼等の敵なる英吉利人であつた。

素とはプロイセンと云ふスラブの一蠻族の名で、十二世紀の終り頃に獨逸に入つたのである。

◎第二。所謂る國民的英雄の多くのものは他國人若しくは他國人の子孫であ る。例へば澳地利のオイゲン公はサボイの人で、チリーはバイエルンの人。又匂牙利の英雄ベムは波蘭人で、佛蘭西のモリッツは獨逸人である。奈破翁は伊太利人で、璉馬の豪傑トルデンスキョルドは那威人である。斯んな類は外にも中々多い。

◎第三。所謂る國民的詩人、美術家の中にも外國人が甚だ多いのである。瑞典の國民詩人ベルマンはブレーメンの人で、璉馬國の大彫刻家トルワルゼンはイスランドの人。又オーレンシレーゲルは父側も母側も共に獨逸人である。同じ國の作曲家として名高きクーラウもエーゼも何れも皆獨乙人の子孫だ。ヘンリック・イブゼンと云へば那威を人が想出だすであらうが實は璉馬の漁師の家から出た人で、血統上からは純然たる獨逸人だ。魯西亞の大彫刻家たるアントコルスキーは父母とも純然たる猶太人である。獨逸人の誇りとするハイネもビョルネも共に猶太人で其

觀察があつた。今左に其の概略を諸君に紹介しやう。

◎十九世紀の中頃より今日に到るまで世界の大勢の國民主義であるとは言ふまでも無い。國民主義は言ひ換れば人種主義だ。同人種互に相結合して各々血族團體を造つたのが、畢竟前世紀の主要なる政治上の事件であつたので、國民の爭ひも所詮は人種の爭ひに外ならぬのである。斯かる世の中で、是の國民主義と矛盾せる幾多の事實が公々然として認められて居ることを見るのは頗る面白いでは無いか。

◎第一。少くとも歐羅巴の四大國民の名は何れも皆外國の名である。即ち佛蘭西と云ふ名稱は、萊因河の兩岸に棲んで居つたフランク人から來たもので、是の國民の祖先たる古のケルト人とは何の因緣も無いものだ。本來ならば、ガリアとかラテンとか名告るべきであるのがフランスとは實に奇だ。英吉利の名は素と獨逸の一地方から來た名で、アングロサクソン民族と何等血族上の聯絡が無いのである。魯西亞てふ名は素と北方の起原で、スカンヂナビアの一民族たるロゼル子から轉訛したのであるから、無論今の魯國人の祖先とは關係は無い。普魯西は

知識で得られるが、高尚なる學術、高尚なる哲學、又は高尚なる藝術は、金を出して買うべき寶で、決してパンの爲に賣るべき貨物では無い。國民教育の爲には大に費すべきであるが、是に依て得る所のものは金でなくて人物であることを覺悟せねばならぬ。此の人物は即ち諸君の金に値するもの、英國の寶である。』

◎我邦の教育者、殊に私立學校の教育者はラスキンの是の言葉に深く省みる所があらなければならぬ。彼等は教育と云ふことを餘りに廉い者と心得て居る。高が生徒の月謝で維持が出來、三十萬圓もあれば三個の大學をすら建立することが出來るものと心得て居る。斯んな風であるから教育を以て一種の商賣と考へて、是の考へを實行して居る所謂教育家が甚だ多い。東京市内の私立學校の大多數は即ち其れなのだ。つまり彼等は米屋となり下駄屋とならない代りに學校屋となつたのみで、其の外に何の意味も無いのだ。斯う云ふ連中が如何にしてラスキンの所謂國家の寶を作り出すことが出來やうぞ。

(卅八年五月稿)

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◎先頃ゲオルグ・ブランデスの論文を讀むだ所が、中に國民主義に關して面白い

是れは邪宗の輩と祈禱を共にせず、謗法の君主の外護を賴まずと云ふ一大決心を示したものだ。斯樣に主權の制裁を無視した廉で、上人は十三年の間對馬に流されて非常の迫害に遇はれたのである。

* * * * * * * * * *

◎本號に掲げた姉崎嘲風の七月五日の手紙に續いて同じく六日の手紙もあつたが都合によりて引離して公にした。此の終りの手紙にはラスキンの演説を引いて、英吉利の國民が如何に其の警醒者の言葉に耳を傾くるかを稱揚して居る。此の演説の一節は我邦の敎育界の時弊に適中して居ると思はるゝによつて左に拔萃しやう。

◎『英國人は一般に敎育に對して大なる誤解を抱いて居る。即ち敎育を以て生活の一方便と心得て居る事がそれである。敎育は利益の多い商賣どころでは無い、實に多くの費へを要するものである。最も立派な敎育は利益の最も少い、到底金錢上の勘定に合はぬものだ。何れの國民か其の偉大なる美術、其の偉大なる智慧でパンをもうけたものがあらうか。パンは小さな技倆や製造や又は實用上の

續は茲に述ぶる遑は無いが日宗學者の夙に心附いて居らるゝ所であらう。

◎若し日蓮宗にして嚴正に率直に其の祖師の主義を實行したならば、現世に其の法皷を鳴らし續くることが頗る難事と云はなければならぬ。國家は畢竟野獸の大なるもので、到底是の如き信仰の弘通を看過するの雅量などのあるものでは無い。幸か不幸か從來の日蓮宗僧侶はこの嚴正率直の意氣がなく、妙宗信徒の盡すべき本分を盡さなかつたが爲に兎も角一宗派としてお茶を濁して來られたのである。今日此の宗門の革命的維新を論じつゝある人は即ちかゝる曖昧なる態度を捨てゝ祖師上人の原始的精神を復活せよと唱ふる復古的運動であるのだ。

◎日蓮宗中に不受不施派と稱ふる一派があつて今日のところでは祖師の精神を尤も忠實に傳へて居る門派であるとの評判であるが、其の狀態は實に見る影も無い。僅に備前の金川に妙覺寺と云ふ一寺を有するの外、日本中に一末寺をも有たぬ。是れが原始日蓮宗の必然の運命を示して居ると我輩は思ふのである。是の派の開祖の日奥上人と云ふのは固く祖師の折伏主義を遵奉して豐太閤の大佛の千僧供養にも、家康の發起した大阪の千僧會にも固く執つて出席しなかつた。

るが、さりとて今の大學に謳歌するものでは決して無い。此の邊の精しい所は他日必ず世に公表するの機會があらうと想はれる。

◎前號に掲げた日蓮上人と日本國と題する論文に就いて意見を寄せられた人が少からずあるが、中には日蓮宗の僧侶と覺ぼしき人から嚴しき叱責を被つたのもある。成程國家的宗教を賣物にしやうとする人から見れば我輩の論旨はいさゝか好都合でないかも知れぬが、我輩の眼中には日蓮上人あるの外、別に今の日蓮宗と云ふものが無いから仕方がない。そして又眞に其の祖師上人の人物を會得せる人であるならば、我輩の意見に賛成をこそすれ、反對すべき理由は毫も無い筈と我輩は思ふのである。

◎日蓮上人の教理にはその根底に於て現世の主權と相容れざる明瞭なる特色がある。故に是の宗門の歴史を案じても其の最も盛大を極めたのは戰國時代で、取も直さず一國の主權が定まらず、是の宗門と衝突すべき當體が未だ世に現はれざる時代だ。然るに信長より秀吉、家康と、日本國がやうやく一主權の下に統率せらるゝと同時に是の宗門は追ひ／＼迫害によりて衰頽に赴いた。その精しい史

に其の敎師は如何にして是等學生の人物を養成することが出來やうか。

◎人物養成と云ふ樣な事に一番緣の近いのは法科と文科とであると誰も思ふであらう。然しながら是れとても工科や醫科と同じことだ。商法や訴訟法の講義中に人物養成も何もあつたものでない。實驗心理やフォ子チックの講義によりて人物が高まるものならば、それこそ摩訶不思議と云はねばなるまい。

◎つまり人物養成と云ふことは抽象的に大言する時は尤もらしい事ではあるが、その實際に立入つて考へて見ると今日の學制では決して行ひ得べきことでは無い。畢竟今日の大學は天下の人才を集めて職業上の敎育を施す所と見るの外は無い。それ以上を望むは今日の國狀に伴へる大學の實際を知らぬものと云はなければならぬ。

◎斯んなことを言ふと、何やら敎育家先生の口吻に似て居る樣だが、世間の誤解に對して一應辯じ置くのみだ。然らば大學には缺點が無いかと云ふに、それは大有りだ。我輩の眼から見れば、世間の攻擊などよりも遙に根本的な遙に實質的な批難が多々あるべきと思はれる。我輩は大學出身者として、學閥論者の一人であ

焔にある。小說としての技倆は大に未だしき處があるが、著者が其の平生の主張を托せるものとしては多少の成功を認むべきである。唯著者の大學觀の餘りに單純なる、如何ばかり青年學生以外の例へば大學當事者の如き人々を動かし得べきかは頗る疑問と云はなければならぬ。

◎世間で大學の攻擊をする人は隨分多いが其の攻擊の肯綮に中れるものとては極めて稀に見る所だ。畢竟ロクに大學の門戶をも窺はぬ人が不十分なる材料を嫉妬や憎惡の偏見でコネ廻はした結果に過ぎないからだ。我輩は大學出身の故を以て辯護するものでは決して無いが、淺薄な見當違いの批難には同意することが出來ない。

◎例へば世間の攻擊で一番聲の高いのは今の帝國大學が人物を養成しないと云ふにある。成程一應は尤もに聞えるが扨て大學の事業として如何にして人物の養成が出來やうか。例へば工科の學生が器械や製圖、もしくは採鑛冶金や土木工學を學びつゝある間に、如何にして其の學問によりて人物を養成せらるゝことを望み得べきであるか。醫科の學生に生理學や解剖學の講義を授けつゝある間

人は天然界また人間界に於て自心を確立し是自心の爲に始終活動すべきもの也。

人は自心を堅固にすれば清淨極樂なるべき者也。

是れ取りも直さず彼の一生によりて實現せられたる信念主義たる也。彼れは是の信念と主義とを說くに口を以てせずして身を以てせり。所謂る身讀體達の旨義是に到りて至しと謂ふべし。言說徒に煩はしく見思の惑未だ去らざる吾人の如きもの深く彼れに就いて學ぶ所あるべき也。

(三十五年七月)

雜談

◎當代の煩瑣凡俗なる思想界に反抗して美育社の一團體を組織したる黑田湖山君はこの頃大學攻擊と云ふ一小說を著はした。讀むで表題の如く今の帝國大學の攻擊を目的とせるもので、一篇の主腦は最後の章に於ける人本義之進の大氣

信ずる所を枉げざりき。内にありて一心の是認に背かず、外に向つて文明の大勢に循ふものゝ事業は必ず最終の勝利を收むべしとは彼の常に確信したる所なりき。彼れは是の確信に本づき、疑惧なく躊躇なく斷々乎として其の欲する所を行ひたり。爾來十數年にして彼れの贏ち得たる金錢の成功は素より岩崎、三井の倫に非ずと雖も、尚ほ一個人が其赤手と信念と意志と勤勉とによりて得たる淸淨なる資産としては眞に敬服すべきものなりき。

然れども是を社會に得たる利益は亦是を社會に報ひざるべからずとは彼れの平生の所志なりき。是に於て彼をして書肆の主人たらしめたる同一の志願は、茲に彼れをして圖書館を設立して社會に寄與せしめたりき。蓋し十二萬五千圓は岩崎、三井の資産より見れば、殆ど零碎の高なるべしと雖も彼れは永く日本に於ける最も大いなる寄附者の一人たるを失はざるべし。彼れの事業は是に於てか始あり、又終りありと謂つべし。

是の如くにして彼れは其の信ずる所を行ひ、爲さむと欲する所を爲して靜に此世を去りぬ。終りに臨みて彼れの遺したる文書中に左の文字あり。

信仰を失ひたるロバートは、復び彼の影護によりて其の新信仰を求むるを得たり。彼れは今の道學先生の如く朝夕道義を講ずるを職業とするものに非ず。彼れ自らの身讀し體達したるものおのづから外に現はれて所謂る道義の說を成せるのみ。其の說の出て來る所蓋し深重なりと謂ふべし。今の道學先生の知る所は『プロレゴメナ』にありてグリーンにあらず。漫に口耳の擬似を事として其人物の本來を見ず。口を開いて輙ち道と云ひ德と云ふ。道德の事何ぞ夫れ容易なるや。

(上、一〇三四頁參照)　(三十五年七月)

故大橋佐平氏

(大橋圖書館の開館に際して感あり)

吾人は故大橋佐平氏を大なりとする者也。其の富貴を論じ其權勢を說かば、世間其人に乏しからざるべし。唯其の人物の一徹にして其の事業に終始ある點に於て吾人は氏に於て一個の眞人を見る。

三圓八十錢の家賃を以て其の商店を本郷弓町に開きしより、彼れは一度びも其

先づ我が有たらざるべからず。

三千法界を以て是の一念に攝折す。忠孝節義初めて共に語るべき也。

（卅五年六月）

グリーンと道學先生

西晉一郎氏グリーンの倫理學入門を翻して近時の好譯述と稱せらる。あゝグリーンを譯する者は是れあり、グリーンの如き人は何處にある。

道學先生と雖も、ハンフレー・ワード女史に『ロバート・エルスメア』の著ありしことは聞き及べるなるべし。是の小説の主人公たるロバートの師、ヘンリー・グレーは實にグリーン其人を描寫せるものなりと云ふに非ずや。オクスフオード大學に於ける彼れの感化は其講莚に於けるよりは寧ろ其人物にありき。新舊信仰の變遷時代に際して思想界の木鐸となり、能く一世懷疑の風潮に卓立して殊に青年學生の指導者となれる彼れの如きは眞に古の哲人に近しと謂ふべし。彼れの感化によりて其舊

◎社會は多く其の寵兒を殺す、是を以て眞人は多く死して而して初めて活く。人よ、汝を殺すものは必ずして刀杖に非ざる也、鴆毒に非ざる也。俗人に擁護せられ、惡世に讃美せらる、是れ永遠の死滅也。『肉に死するものは肉に活くるを得む』たゞ靈の滅ぶるもの吾れ是れを如何ともする無き也。

◎吾が說や多くの人に容れられじ、然れども何人にも破られじ。

吾が言に聽いて喜ぶ人は少からむ、然れども世界の人のすべての歡びも吾れ自らの滿足に比すべからざる也。

此處に吾あり、彼處に日月あり、かの紛々擾々たるもの夫れ是の事實を如何せむとするや。

◎人に訓ふるは吾れの能くする所に非ず、人に與ふるも亦吾れの能くする所に非ず。吾は唯水の如く流れ、鳥の如く歌はむのみ。宿因若し空しからずんば、願くは吾と同じきものと共に是の天賦の榮光を讃美せむかな。

◎我は我自らの爲に活く。若し社會國家にして與かるあらむと欲せば、彼等は

○道學先生よ何ぞ盛に英雄豪傑の非常の事蹟を以て汝の子弟に敎へざる。彼等をして英雄豪傑たらしむべくむば素より大いに可也。依て以て夫の凡俗の小人をして自ら耻ぢしむる所ある尚ほ可ならずや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

○人は輙ち眞理と言ふ。請ひ問はむ、そは汝の眞理か、將た吾の眞理か。若し汝と吾と互に見る所を同じうせば、是れ多數決の眞理のみ。汝と吾と共に與らず。嗚呼世の所謂眞理は道德と等しく畢竟多數決に非ざる乎。ジュピテルの彼方に於ても一と二との必ず三を成すことを誰れか保し得るや。

○自ら道德を造る者のみ能く善惡を口にし得べし。エミール・アンリが判官に答へたる言葉に聽け。吾人をさばく者は吾人自らならざるべからず。暫く他を許して其の所謂る善惡を言はしめむ。而かも爾等の中罪なきもの唯かく言ひ得べきのみ。

○曾て吾れ多くの人の意味を知りしが、而も吾れ自らの誰れなるかを知らざりき。吾が眼は吾れ自らを觀むには餘りに吾れに近かりき。貴いかな是の覺醒や。

の道是を教ふる、平日に於てに非ずむば果して何れの時に於てぞ。且夫れ道德は、摸倣に非ずして感應也。英雄豪傑の事蹟を体するの時、現はるゝところは大なる理想の光被也、新たなる生命の化育也。夫の道學先生の如きもの畢竟是の三昧を解せざるの弊に坐するのみ。

◎凡人を作るのみが教育の目的には非ざるぞかし。天才無き人類を想像せよ、是れあらゆる想像中の最醜最惡なるものに非ずや、釋迦、基督、プラトー無く、ミケランヂェロ、沙翁、ゲーテなく、クロムエル、奈破翁なく、孔子、日蓮なき世界の歷史を想像せよ。嗚呼誰れか是の如き想像に勝え得るものぞや。

◎世に若し天才を作るの道あらば、そは天才を崇拜することに外ならず。凡俗に甘ずる人をして欲するがまゝに凡俗ならしめよ。天若し一個の天才を降さむが爲に吾人に要むる處あらば、吾人は如何なる犠牲をも貴しとせざらむ也。

◎蠢々乎として生死するもの世に幾億兆ありとするも、永遠なる人道に於て何の德とするところぞ。百萬の生靈は斃れたり、然れども一奈破翁の名を歷史に留めんが爲めの代償として何の悔ゆる所ぞや。

認めたり。殊に今の俗惡なる國民に向つて其の祖先の中に是の如き大人物ありしことを訓ふるは、道學先生が千萬回の講話にも優りて偉大なる精神的感化を與ふべきを認めたり。是を以て予は自ら計らず、予が認めて日蓮の眞相とする所のものを書して世に問はむとの決心を固めたり。

◎予が日蓮研究の因緣は略々右に說けるが如し、如今不幸にして病の爲に長論文を草する能はざるを以て、暫く續稿の掲載を見合はせたりと雖も、佛天の加護によりて予が素志の貫徹せらるべき日の早晩來るべきことは、予の疑はざる所也。

(三十五年五月)

* * * * * * * * * *

◎道德を說くに日常市井に見る所の平凡の事實を以てせよ。何人にも學むで得らるべく力めて達し得べき類例を以てせよ。非常異例の事を語る勿れ。英雄豪傑の傳奇の如き兒童の心を動搖するものは力めて是を避けよ。――是れ今の道學先生の吾人に訓ふる所也。甚い哉今の倫理敎育の俗惡凡庸を極めたるや。

◎平凡の人を作るに何ぞ故らに敎育の煩はしきを待たむ。非常の時に處する

は力めて「御書」の精讀と教理の研鑽とに從事し、時に田中氏と會して判釋を聞くことを樂めり。予の領解は果して多少の進境を示したりや、日蓮上人と予と果して相近きつゝありや。予自ら是を知らず。唯是の研究が予に從來未だ曾て知覺せざりし一種の滿足を與へたる事は、予にとりて至大の報酬と謂はざるべからず。而して是の間に於て田中氏が予に與へられたる多大の厚意は予の實に感謝に堪えざる所也。

◎研究の進歩するに隨ひて、予は先づ日蓮上人に對して從來予が有せる概念の甚だ謬れることを覺りたり。想ふに世人の有する所の概念も亦是の如きに過ぎざるべし。然らば則ち日蓮の人物は殆ど全く世に知られずと謂ふも過言に非ざらむ。予は是を以て甚だ遺憾なる事なりと思惟したりき。

◎日蓮をして通常の人ならしめば、其の知らるゝと知られざると世に於て關はる所無けむ。然れども予は彼れの人物に於て眞に世人の無知を遺憾とするの偉大を認めたり。想ふに彼れを世に知らしむるには多くの困難あらむ、而かも予は如何なる困難も彼れの眞相を世に知らしむるの功德に比較すべからざることを

受けぬ。是の書は予が其後本誌上に紹介せしが如く、祖師上人の垂示せる大理想に本づきて今の日蓮宗を改革し、以て世界を統一する一大宗教となさむとする著者の抱負と計畫とを述べたるもの也。予は是の書を讀み、著者が熱烈なる精神の上に及ぼせる日蓮上人の勢力を想ひて、深く心に感ずるところあり、更に上人の文章を研究せむと欲せし往年の志願を憶ひ起し、この一念の發起に乘じて是の偉人の組織的研究を思ひ立ちぬ。

◯予は是の目的の爲に十月の末より鎌倉に移り越しぬ。以爲へらく、鎌倉は日蓮の生涯に於て最も重大なる紀念を留めたるの地、其の遺跡に對すれば追懷の想念おのづから新たなるべく、冥應の感化亦其の間に現はれむ。且つ是の地は序に『宗門の維新』を寄せたる田中氏の住する處、未だ一面の識無しと雖も、若し告ぐるに情を以てせば、必ず予が研究に對して有益なる指導を與へらるゝならむと。

◯斯くて鎌倉に移りたる後、予は田中氏を訪うて面會を求め、告ぐるに來意を以てせり。氏は予の志を諒とし、研究の方法に就いて審に示す所あり、且つ必要なる書籍を貸與せられたり。是の如くにして予が日蓮研究の端緒は開かれぬ。爾來予

までもなし。所謂る予の好奇心を動かしたる一節は單に其文字の雄壯にして語調の豪快なる、太だ平生見る所の國學者の文章に異なるものありしが爲のみ。後來數々是の事を追懷せしことあれども、間もなく是の一節の文字すらも遺却し去りたりき。然れども何時かは日蓮上人の文章を研究するの機會に遭遇せむことは、是より永く予の希望の一つとなりたりき。

◎今日より想へば、往年予が偶目したる文章は敎行證抄にして、所謂る好奇心を動かしたる一節は、『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れ〲の經々と、法華經と、勝劣、淺深、成佛、不成佛を判せむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず。いかに況むや夫れ以下の等覺の菩薩をや、況して權宗の者共をや』と云へる有名なる一段なりし也。

◎されど予は專修の學科に忙はしく、この志願も心に任せず。凡そ六七年間の間は忘れたるが如くにして過ぎ去りき。然るに去年病を養はむが爲に大磯に在りし時、日蓮研究の素願を果すべき機緣はゆくりなく現はれぬ。

◎去年の秋の初なりき、予は田中智學氏より『宗門の維新』と題する一冊の寄贈を

說法、曰く龍口法難、曰く佐渡遠流。人は唯是の種の三四の事相に據りて、剛情我慢の一英雄僧を想ふに過ぎず。其預言に關しては比するにサボナロラを以てし、其折伏の態度を以ては日本のルーテルに擬するの類、多少の識見を有する者の批評亦是の如きに過ぎざるのみ。誣妄も亦甚矣。

◎是の凡俗至極なる惡世に於て、日蓮の如き人物を祖先として追懷し得るは、吾人にとりてそも〳〵何の幸ひぞや。政治家が良心を濁ぎ、道學先生が道德を受賣する時に妙經身讀の行者が此土即寂光の大理想の爲に天下を敵として戰へる風姿を想望するを得るは、吾人にとりて何等の祝福ぞや。

◎是の祝福の吾人に降りたるは實に近時の事に屬す。試に後に來る者の爲に吾人の經歷を語らむか。

◎六七年前のことなりき、予は或處に於て偶々日蓮の文章と稱する者を見たる事あり。當時の予は日蓮に就いて何等特殊の感興を有せざりしが、其の文章の一節がいたく予の好奇心を動かしたるは忘れもせざる事實なりき。然れども予は未だ佛教の教理に通せず、日蓮の教判等に就いて何等會得する所無かりしは言ふ

◎『天下萬民諸乘一佛乘と成りて、妙法獨り繁昌せむ時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉りて、吹く風、枝を鳴らさず、雨、壤を碎かず、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理り顯はれむ時を御覽ぜよ。現世安穩の證文疑ひあるべからざるもの也』。是れ即ち『此土即寂光』の事觀の敎相を現實的に表彰したるの言なりき。

* * * * * * * *

◎人あり、前號掲げたる吾人の日蓮論を見、其讃美の太だ過ぎて日蓮宗徒の言と擇ぶところ無きを笑ふ。知らず、吾人を笑ふ者と、日蓮を知るに於て果して孰れぞ。

◎前號掲ぐる所は、謂はゞ序論のみ。日蓮と日本國、預言者としての日蓮、宗教史上に於ける日蓮の地位、日蓮と其の宗門、日蓮と基督、――是等は吾人が次を追うて世に問はむと欲するところ。而かも病の爲に長文を草すること能はざるの故に、暫く腹笥に藏むるのみ。吾人の日蓮論は尙ほ未だ大方の批判を受け得べき迄に分明ならざる也。所謂る讃美の太だ過ぎたりと云ふもの果して何の謂ひぞ。

◎遮莫、日蓮上人の世に知られざるは疑ひも無き事實也。曰く四個格言、曰く辻

◎若し所謂る中正を以て旨となさむか、事是れより容易きは無けむ。唯平淡和樂の辭は時弊に對するの立言として人を動かすの力無きを如何。人往々矯激を以て吾人を責む、吾人不肖と雖も豈駁者の言を待つて所謂る平穩の理を解せむや。

◎餘事は暫く措かむ。甫水論集中吾人は「余が所謂宗教」の一篇を推さむ。是れ曾つて哲學雜誌に掲げられたるもの、近時の宗教論中色讀體達の旨義に於て尤も吾人の意を得たるに近し。

◎氏は佛教々理に於て、台家の所謂る事觀の妙法によるものゝ如し。佛教の厭世教に非ざるを主張し、眞如開發の現實世界に即して直に安立の地盤を求むべきを説くところ、淨土念佛の厭離思想を取らずして、寧ろ日宗哲學の一念三千の眞意に近しと謂ふべし。將來の佛教に就いて日蓮宗諸師に望むの一篇亦氏の思想の傾くところを見るべき也。

◎予は佛教々理に於て全く門外漢たり。然れども台家一流の此土寂光の妙理を擴充して一大現世教を建立したるの一事は、實に日蓮上人の大卓見なることを認めざるべからず。井上氏の眼を是點に着けたるは吾人の同意を表する所也。

したりき。

◎あゝマルストンの戰塲に臨みダビデの詩篇を誦したる人の信仰を解し得る人に非ずむば、恐らくは吾人の言に首肯し能はざらむ。殆い哉吾が言や。

* * * * * * * *

◎井上圓了氏の甫水論集は必ず世上に歡迎せらるべし、所謂護國愛理の二主義を標榜し、野にありて哲學的知識の普及に力めたる氏が二十年來の經歷は、今の操持なき學者間には兎も角も珍しき事例たるを失はず。其の言概ね平明にして解し易く、事を淺近に假りて理を高遠に托す、用意見るべきものあり。其の說に服せざるものをして尙ほ快く其の言に聽かしむる圓通滑脫の技倆は氏に於て特に推重すべしとす。氏も亦所謂る老大家の風ありと謂ふべし。

◎然れども吾人は所謂る老大家に於て幾多の慊らざる所あり。其の說の中正を求めて斷案の多く曖昧なる、世故閱歷に長ずるの弊として青春の理想を失へる、敵を作らむとことを恐れて故らに圓滑の辭令を用ふる、文情共に平穩に過ぎて讀者を動搖するの力無き、概ね皆然らざるは無し。

乎。

◎是の如き國民も尙ほ其の祖先の中に日蓮上人の如き人を有したりき。宗教家よ、六百年の往時を顧みよ、少しく自ら耻づる所あらずや。

◎日蓮佐渡より赦され歸るや、鎌倉の殿中に激語して曰く、日蓮生を王土に受けたれば、身は隨ひ奉るとも、心は隨ひ奉るべからずと。是れまさしく四福音書中最大の宣言たる神の物は神に歸せの意に非ずや。身は是れ佛子法臣たり、何ぞ一俗吏の爲に大覺世尊の告敕に違ふべき。神の國は遂に人の國に非ざる也。

◎されば日蓮にとりて實在せるものは宗教のみ。唯この宗教を護持する處に國家の職能あり、榮光あり。一切世間の權勢威力の如き、正法護持の因緣を離れては一も存在の意義ある無し。是れ獨り日蓮のみならず、釋迦、基督の眞意にして、乃至一切の宗教の依て樹立する所の第一義也。

◎是の故に謗法の國土は一日も存在せしむべからず。佛天の威力は是の膺懲の爲に世界を監視しつゝあり。恰もクロムエルがダンバーの戰を目して『神事』と稱せし如く、日蓮は蒙古の來侵を以て謗法の國土に對する當然の佛罰なりと思惟

の心の中に求むるところあれよ、世は即ち汝の物ならむ。

然れども悲しき哉、多くの人は己れの立てる處を知らず、何處に自らの心を求むべきやも覺らざる也。

(卅五年五月)

無題錄

◎英の僧正パーカー大に皇帝を罵つて曰く、帝は日曜日に教會に行かずして劇場に行く。是れ基督の罪人に非ずして何ぞ。予は皇帝の忠臣たらむと欲するも而かも基督に不忠なる能はずと。

◎僧正の言や太だ佳し。而かも是の激語に喝采せる英國民は福ひなる哉。アングロサクソン民族の前途尙ほ多望なりと謂ふべし。

◎是を我邦宗教家の競々として時勢の迎合に務むるに比す、そも〳〵何等の相違ぞや。彼等は神の物をも尙ほカイザルに還さずむば已まず。超世の理想永く消え失せて靈は翼なきものとなりぬ。あゝ是の如きをしも尙ほ宗教と謂ふべき

がら、何の違ありてか人の爲にし世の爲にせむ。是の如きは世の謂はゆる惡人ならむ、然れども予は予自らの善人なれば則ち足ると。吾人聞いて答ふるところを知らず。唯憮然として謹に點頭けるのみ。

裸體の盛裝

今の所謂る道徳が方便、形式、慣習を離れて如何ばかり個人が中心の要求に應ずるものなるかを檢覈するは、吾人の見て現下の急務とする所也。人々各々自己の意識に點火して靈性の聲に聽くところあれ。昔者裸體にして盛裝せりと想へる一人の王ありき。王の愚は可し、裸體を觀て尙ほ齊しく其の盛裝を讃美せる群臣百性に到りては忍ぶべからざる也。あゝ人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

己れの立てるところ

哲人敎へて曰く、己れの立てるところを深く掘れ、其處には必ず泉あらむ。自ら

造り出だす。是を以ての故也、所謂る法則の榮ゆる處、そこには必ず生命の死滅あるは！

吾人の理想

吾人に三つの理想あり。一に曰く完全なる生慾。二に曰く安眠。三に曰く平和。

唯是れのみ、あゝ唯是のみ。

永き戀、早き死

此の生の憂苦を免るゝの道、たゞ三つあり。永き戀か、早き死か、然らざれば狂。あゝ吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎。

イゴイスト

人あり吾人に言つて曰く、予はイゴイスト也。是の活き甲斐もなき生を享けな

古き眞理

年若き人よ、如何なれば是の麗はしき春の日を尙ほも名利の巷に走り暮さむとはするぞ。さらばこの涙の谷に住みながら尙ほ愁ひの泉、底淺しと歎たむとや。まことに、是れ古き眞理也。されど春風年ごとに面を吹く每に、人は乃ち老ゆるを如何せむ。聲あるものよ、何ぞ歌はざる。歌ひ得べき日は此世に幾何もなきぞかし。口あるものよ、何ぞ飲まざるや。酒杯に對して漫に其の泡を吹く勿れ、其の泡の消えざる前に汝の命の終りを告げざることを誰れか保し得るや。

年若き人よ、胸に靑春の炎を宿するもの、口に道義を說いて何にかせむ。炎は他を焚かずむば自らを焚かむのみ。其の髮尙ほ綠にして其の心死灰の如くならむ、醜くからずや。

法則と生命

新しき聲の最早や響かずなりたる時、人は死語の中より所謂る法則なるものを

今や日蓮宗の道俗やゝ活氣を呈し來り、日蓮、日親の遺業にならひて辻説法を試むるもの少からず。知らず彼等の中、燒鏝を冠りて晏如たるの覺悟を有せるものありや。將軍吾れに歸依せずむば斷じて獄を出でじと傲語し得るものありや。

（卅五年四月—五月）

坪内氏の自意識論

自意識の過度を以て時代精神の痼疾となすは坪内博士が年來の宿論、近時當來の娯樂を論ずるの主旨亦此に本づく。吾人の首肯し難き所也。

如何なる塲合に於ても、自己が存在の意識を離れて人生の幸福を求め得べしとは吾人の思料し能はざるところ、所謂る忘我と云ふものも亦是の意識との對比を離れては其淨樂を現じ得べしとは想はれず。若し夫れ深刻なる自意識が時にいはゆる個人主義に幸ひするの故を以て、社會道德の見地より是を排斥するが如きは、素より取るに足らざるの俗論のみ。然れども、坪内氏と吾人と互に其の立脚の地盤を異にせり。理を爭ふも固より益する所無けむ。

他方より見れば、凡そ一個人の信念の力が如何なる點まで外來の勢力に反抗し、折伏し、且つ是に打勝ち得るものなるか、又一念の信力が靈性に安慰を與へたるの結果として、如何に肉體の苦惱を忍受し、且つこの苦惱によりて受けたる傷害を無效ならしめ得るものなるかの絶好の事例として見るを得む。（以下日親の事蹟全集第三巻四六九―四八六頁參照）

* * * * * *

◎あゝ日親の如きは眇たる一沙門に過ぎざれども、其の信念の力によりて國家を折伏し、個人の勢力が時としては地上の如何なる權力にも匹敵して其の威嚴と榮光とを保ち得るものなることを現示せる人道上の一大事實として見るを得べし。殊に人間の力として殆ど堪え忍び得べくも覺えざる酷烈なる傷害も、一念の信力によりて優に是を忍受し、是れに打勝ち、獨り精神の獨立のみならず、肉體の健全をも保全し得たるは、實に目ざましき事例と謂はざるを得ず。世人往々曰く『人は氣で生きる』と。日親の如きは眞に是の套語を事實の上に現はしたるものと謂ふべし。

◎因に曰ふ、日親は八十二歳の天壽を以て、其の開きたる京都の本法寺に逝きぬ。

代五十年の永き間の說法によりて其の敎を立てたるに比すれば、彼此兩敎が其の信仰の性質に於て根本的に相違せる所あるを知るべし。（中略、上九五〇頁參照）

◎此頃日蓮宗の青年信徒の中にて、祖師が立宗の紀念會を機會として道路演說を爲せるもの尠からざるが、是の道路演說は我邦の宗敎史上にては是の宗旨の特有にして、他宗には殆ど絕えて其の例を見ざるが如し。先づ其の第一の模範を開きたるものは宗祖日蓮其人なりとす。

◎日蓮が當時天下の覇府たる鎌倉の、今の東京にて云へば日本橋通とも云ふべき小町の辻に於て、路傍の石に腰掛けながら、天下を敵として折伏の大法螺を鳴らせしは世人の熟く知るところ、現に今は本化妙宗の優婆塞田中智學氏の周旋によりて其の遺跡に立派なる紀念碑をさへ立てられたれば、茲に申し述ぶるまでも無し。

◎日蓮の以後に於て道路演說にて有名なるは久遠成院と謚せられ、京都本法寺の開祖として是の宗の道俗には其名かくれもなき日親上人也。この上人の事蹟は、時の政府より大迫害を受けたる點に於て本邦宗敎史上に一異彩を放てり。又

知るに由無し。是の事は佛敎者と雖も尙ほ易しとせざる所、況してや門外の世人より見れば極めて難事と謂はざるべからず。是れ日蓮上人の眞相が廣く世に知られざるの第二の、又主なる原因なるべし。

◎佛敎と基督敎とは是の點に於て最も相違を有するを見るべし。基督敎の敎祖たる耶蘇の信仰は最も單純なる感情に本けるものにして、人生自然の要求を直下に感應せしむるを主とせり。隨つて其の宗敎には本來敎理なるもの無く、唯純潔なる人性本然の感情あるのみ。されば耶蘇自らの說く所は苟も人性あらむものゝ凡てが各々其の胸底に於て直下に會得し得べき最簡最明の事實にして、そを會得せむが爲には哲學を要せず、傳說を要せず、唯人の心あれば足る。故に彼れの敎に最も耳を傾けたるものは、多くは漁夫村民等無智無學なる小兒の如き心を有するものにして、彼等に說ける耶蘇其人も亦當時の學者、僧侶などの眼より見れば實に無學無智なる大工の息子に過ぎざりし也。彼れが僅か三年の短日月の間に後世歐洲を一統すべき大宗敎の根本を建立し得たるは畢竟其の信仰の單純にして解し易きが爲め、一言すれば感情的なりしが爲めに外ならず。今是を釋迦が一

とゝて流石に深く研究せる人はあれども、概ね同一門流の間に會通せらるゝのみにて、門外の人には多く傳はらず、斯くて世間には其の人物の眞相の弘く知らるる機會なくして過ぎ來れる也。

◎日蓮上人の世に知られざる他の原因は、其の研究の困難なるが爲也。こは日蓮上人に關してのみならず、すべての佛教者の研究に共通せる困難也。そを如何にと云ふに、抑々佛教は基督教などゝ違ひ、主として道理の上に建立せられたる宗教なるが故に、其の教理の判釋は極めて複雜にして且難澁なるもの也。隨つて古來諸高僧の有せる信仰も單純なる感情に非ずして何れも是の複雜難澁なる教理の中に根底を有せざるは無く、隨つて又是の信仰に本づける其人物性行を會得し批判するに當りても、すべて其の根本たる教理の判釋を離れ難き場合多し。是の故に日蓮上人の研究に於ても、單に世間に現はれたる事業の側より其の人物を觀破することは思ひも寄らず、少くとも法華經の教理上より其の人格の根本を明かにせむことを要す。この教理上の研究を離れては上人の遺文は一句一字も其の眞味を解し得べからず。其の世間に現はれたる一言一行も亦其の根本の動機を

◎人の產み得るものは唯己れの子のみ。あゝ今の時墨工塹人の類にして詩人と稱し、文學者と號する者何ぞ一に多きや。（三十五年四月）

宗教談

◎日蓮上人と云へば人は皆エラキ坊主なるを知れども、扨て如何にエラキかを知れるは極めて稀にして、大方は日本のルーテル位の漠然たる概念の外は有たざるが常也。何故に斯くは名のみ傳はりて實の知られざるやと尋ぬるに、其の主なる原因二つあるが如し。一つは日蓮の宗旨は本來他宗と兩立せざる性質のものなるが故に、佛教徒の中にても同宗門徒の外は蛇蝎の如く憎み嫌ひて初めより耳目を假さず、況して深く其人物性行に立ち入りて研究するが如きは押しなべて想ひも寄らざる事也。故に試に今日淨土眞宗等の名高き學者に向つて、御身は日蓮の御書を讀みたりやと問はゞ、十中の八九は讀まずと答ふべし。かゝる有樣なれば他宗の僧俗は殆ど絕えて日蓮の爲人を知らず。同宗の門徒間には其の祖師のこ

◎然れどもニイチェを解する者は所謂る倫理學を知らざるも可也、認識論に通ずるを必とせず。彼れは唯少くとも文藝宗教の趣味を解し、現代人生の甚深なる苦悶を身讀したるものならざるべからず。此の如きは獨りニイチェを解するのみならず。亦人々相解するの道也。

◎ニイチェは人也、然れども人は必ずしも學者、文人、宗教家等と分たるゝを要するものに非ず。ニイチェにして是等の何者に非ずとするも何の累する所ぞ。各自は知解に本づく、然れども世には知解以上の證悟によりて初めて了し得べき幾多の事物あることを知らざるべからず。

◎今の文章の多くは僞文のみ。意誠語朴の眞に人を動かすもの極めて稀也。詩人キーツ言あり、曰く、己れの脉搏の上に試みられたるに非ざれば公理も公理と稱するを得ずと。嗚呼戀愛と云ひ、希望と云ひ、慰藉と云ふ、何れも人生の最大事實也。自らの血と涙とを以て是を解釋したる人にして初めて是を口にするを得む。

◎文字は符號のみ、そを註解するものは作者自らの生活ならざるべからず。文は是に至りて畢竟人也、命也、人生也。

◎借問す、東西三千年の歴史中に於て、道學先生の所謂る道德論が世を救ひ人を化したるの例しありや。

◎凡そ古より積極的に人生の幸福を增進し、希望を豐富にし、吾人に理想と平和を與へ、吾人を感激し、皷舞し、以て生々發展の大道を助成したるものは宗敎也、文學也、美術也。然らざれば唯心論の哲學也。我が道德先生の所謂る道德と學究先生の所謂る眞理とは共に與らず。

◎學說理論は常に文明の崩壞に伴ふ。然れども理想は永遠に失はれたる也。是に於て彼等の所謂る文明は實は文明の崩壞の謂のみ。

◎凡百の學知、岐路百端、造詣愈々深くして人生の歸趣を去ることいよ〳〵遠し。是れ即ち失はれたる大宗敎、大文藝に對する向上の渴仰是に於てか猛然として起る。是れ即ち失はれたる文明に對する十字軍也。

◎丁酉倫理會にてニイチェを批評す。惡譃するもの曰く、是れ日蓮上人を鎌倉の殿中に糺問するの類のみ。差向き平左衛門の役目は中島德藏氏か、桑木嚴翼氏かと。蓋し齊東野人の語ならむのみ。

に非ざる也。

◎吾人は玆に田中智學氏の近著本化攝折論を江湖に紹介せむと欲す。是れ佛敎根本の一問題たる攝受折伏に關する著者の意見を披瀝せるもの。高遠なる議論を行るに平明なる文字を以てし、論斷極めて明快也。蓋し一部の日蓮主義として見るべき乎。是れ一宗一門の徒の私すべきものに非ず。吾人は今の學者青年が是の種の書によりて其の知見を開拓せむことを切望する者也。

◎當今若し倫理上の緊急問題ありとすれば、そは德育問題にも非ず、公德問題にも非ずして道學先生自らに對するの倫理問題ならざるべからず。

◎何をか道學先生に對する倫理問題と云ふ。彼等自らをして道德を口にするの資格なきことを自覺せしむる也。否倫理學說其物の本來無價値無能力なることを證悟せしむる也。

◎倫理學說は猶ほ蛆の如し。そが德敎の腐敗を救濟するの力無きこと、猶ほ蛆が糞土の汚穢を清淨にするの力無きが如し。而かも腐敗に伴へる必然の產物なることは彼此相同じ。

◎吾人の見る所を以てすれば、日蓮は日本が嘗て產出したる人物中の最大なる者也。彼れを以て日本のルーテルと呼ぶは誤れり。彼れの偉大は獨り基督のそれに較べ得べけむのみ、同國人として彼れを追懷し、景仰し得るは吾人にとりて大いなる力也。

◎彼れの人物を歎美することに於て佛教徒は宜しく其の宗門の爭を抛つべし。基督教徒も國學者も亦其の小偏見を排斥して齊しく彼れにアヤかる所無かるべからず。

◎吾人は是の一大偉人の紀念祭が區々たる日蓮宗徒の一部によりて經營せられつゝある間に、國民を擧げて牛馬相關せざるの觀あるを見て轉た惋惜の念に勝えざる也。

◎進莫、今の日蓮宗徒は何の面目ありて其の宗祖の紀念を新たにせむとするや。今日宗風の衰頽、僧侶の墮落、其の由て來るところ果して那邊に存すと爲す。日蓮の遺風は既に墜ちぬ。彼等は何を以て所謂る紀念會の實を擧げむとする。道路傳道や演說集會を以て彼等の能事了れりとするあらば、是れ獨り日蓮の罪人のみ

めより眼中に措かなかつた事が何かの機みに或はおのづから外に現はれたに過ぎないのだ。イゴイストたる自分を外にしては、別に自分といふものが、是の世の中には無かるべき筈と自分は固く信じて居るのである。

自分は社會や國家の中には存在して居らぬ、社會や國家が却て自分の中に存在して居る。――自分は此の單純な信條の下に精神上の生活を營みつゝあるものだ。あゝ是の如くにして生活することが果して罪惡であるのであらうか。

(三十五年三月)

無題錄

◎國民の注意すべき二個の紀念祭は今月に於て施行せらるべし。菅公の千年祭は其の一也。日蓮の立宗六百五十年紀念會は他の一也。

◎前者と吾人と何の關はる所無し。何となれば多恨なる詩人、小心なる政治家順良なる王臣と云ふの外、吾人は菅公に於て何物をも認むる能はざれば也。唯後者に關しては一言の讀者に告ぐべきものあり。

併しながら自分だからとて木の股から生れたものでもなく、叉沙漠の中で育つた者でもない、今茲まで三十二年の春秋は矢張り此の世の中で人並みに暮し來つたのだ。學校に入つて人並の敎育も受け、人並みに書物も讀み、色々の人にも接し、種々の事にも關はつて、つらい目にも嬉しい目にも先づ〳〵人並みには出遇つた積りだ。一口に言へば自分は世間の最も多くの人と同じく時代の蠢々たる產物の一つに過ぎないのだ。されば自分の精神が此時代の感化を離れて獨立して居るとは素より思はないし、叉獨立し得るとは猶更ら自分は考へない。自分は何處までも此の世の中の影響を受けて居るに違いない、違いないが自分は此の影響に對して恨みもせぬ代りに別に喜びもしないものだ。それは自分の存在に關する價値の標準は『我』の滿足の外には何物にも求むべきでないことを自分は確信して居るからである。されば自分の樣なイゴイストの云爲にも、時としては社會とか國家とかの爲に何等かの意味のあることも無いでも無からう。併しながら是を以て自分を批判する人があるならばそれは間違ひと云はねばならぬ。自分の思ふ所は別にある。是の如きはつまり自分にとつて偶然の結果であつて、自分の初

世間の人々は口を開けば輒ち世の爲め、又は國の爲めと言ふ。併しながら世の爲め、國の爲めと云ふことが此の自分を離れて果して何等かの意味を有ち得るか否かといふことに就いては、自分は尙ほ疑ひの中に在る者だ。自分自らの存在を撫無して何處に人生の意義を求むることが出來やうか。宗敎は無我を以て人道の大歸として居る。もし是の所謂無我が我の存在の最高狀態を示すものでないとすれば、自分は毫も宗敎の貴むべき理由を解し得ざる者だ。自分は素より社會や國家の存在を是認する、併しながら吾人は彼等の君主であることを忘れてはならぬ。臣下とは必ずしも貢を納むるものゝ謂ひではない。カイゼルの物はカイゼルに還すが宜しい。併しながら精神的に彼等の存在の根底を約して居るものは吾人自らであることを忘れてはならないのだ。

斯んな考へを有つて居る自分は恐らくは世間の道德から見れば惡人と謂はるべき者であらう。併しながら是の如きことは少しも悲むに及ばない、外から見てどんな惡人であらうとも自分は自分自らの大善人であるのだ。吾々は他が辛いと言ふたとて自ら砂糖の甘きを欺くべきではないではないか。

賣をする職人根性のプロフェッソルや、高が活字引の腐儒等は吾等の精靈の上に何の力を有するものぞ。若し吾々がエルスメアの如き懷疑の淵に陷りて生死の苦悶と戰ふ時、仰いで救ひを求め得るグレー其人の如き人は何處にあるであらうか。聞けば、グレーは小說中の假設的人物ではなく、かの有名なる『倫理學入門』の著者たるトーマス・グリーンの事であるとの事。あゝ我邦の大學の倫理學の先生がこのグリーンの樣な人であつたならば……と自分はつく〴〵思ひに沈んだのである。

小說は決して戲れ事のみでは無い。この書の如きは慥に吾々の一部の精神上の生活を代表して、その中に少からぬ訓えと慰めを含んで居る。眞にロバート・エルスメアの物語を身讀し得た人があるならば、是の日本の社會の尙ほ光明を存して居ると云ふものだ。殊に自分は今の枯淡、無味、凡俗至極なる道學先生や村學究先生にツマラなき倫理書なぞよりも是の樣な書物に就いて人生の活ける趣味を味はむことを勸むるものである。

（三十五年三月）

四　自分自らの大善人

（未刊、草稿には靜思錄二とあり）

暴風の後にまことの天氣が來る如く、煩悶の後にこそまことの平和が來る。大いなる誘惑と大いなる懷疑とに打勝つた信仰でなければ兎ても一代の人心を指導することが出來ない。彼等は彼等一人の身をすら保ち得なかつたではないか。

詩人キーツの言葉に『自分自らの脉搏の上に試みられたものに非ざれば公理も公理とは言へぬ』と云ふことがある。あゝ手に聖書を取り、口に讃美歌を歌ふものが信者であり得るならば、世の中はまことに幸ひであらう。併し眞理は口より口に傳へ得べきもので無い、金錢で購ひ得べきもので無い、吾々は皆自らの血を以てそを證さねばならぬのだ。吾邦の宗敎家などが果して吾々に何を爲し得る者ぞ。

ロバート・エルスメアの師たる牛津大學の敎授ヘンリー・グレーに就いても自分は少からず感慨に打たれた。エルスメアは是の人の精神的感化によりて信仰の門に入り、而して又是の人の眞摯なる審斷によりて懷疑の苦みを脫した。啻にエルスメアに對してのみならず、グレーは當時英國社會の一大勢力として常に精神界の北斗と目ざされて居つた。自分は想ふ、是の如き人が若し今の我邦の大學に求むることが出來るならば、今の青年がどんなに力強く思ふであらう。知識の受け

懐疑、及び基督教の新解釈に本ける新信仰の樹立、——是の徑行を說明するのが是の書の大目的で、主人公たるロバート・エルスメアは即ち是の時代精神の權化として現はされて居る。想ふにエルスメアの時代は歐羅巴、少くとも英吉利に於ては既に經過したであらう、併しながら其の餘波は尙ほ我邦の如き新開國の宗教社會には殘つては居るまいか。自分の見る所ではエルスメアの時代は尙ほ吾邦に於て經過して居らぬ。併しながらロバート其人は果して何處にあるのであるか。

基督教界に於て幾多先覺の名士が其の信仰の變遷に煩悶した事實は吾々の現に目擊した所である。併しながら彼等は如何にしてこの煩悶を解脫し、如何にして新信仰を求め得たのであるか。吾人は不幸にして其の形跡を審かにしない。唯最も明なのは信仰の變遷に惱みたる教界の所謂名士が何時しか或は聖書を捨てゝ算盤を取り、或は讃美歌を歌ひたる口にて米相場の符牒を呼び、或は天國の鑰を握りたるものが藩閥政府の官吏と化したる等の事實である。而して又同時に最も明なるは、是の煩悶を切り拔けて『基督の新同胞』を組織したるロバート・エルスメアの如き虔信、眞摯、剛邁、不屈なる人の殆ど一人も無かつた事實である!

の一部分を例によりて小説讀みに過ごした。勿論西洋の小説だ。中にはヨーカイや、ゾラや、又は近頃獨逸の友人から送り越したワグネルの樂劇などもあつて何れも多少の面白味はあつたが、其の中で最も自分を動かしたのはハムフレー・ワード女史の『ロバート・エルスメア』であつた。

この小説は十數年前の出版で、歐米の社會には隱れもなき著名なる作であることは誰れも知つて居る事であるから、自分は今更らしく吹聽するにも及ばぬ筈だ。併しながら一度は讀みたいと思ひながら、ツイ今日まで機會がなかつた。自分の新しき感觸の一端をお話することも必ずしも無益ではあるまいと思ふ。勿論今の本邦の小説とは違ひ、七百頁にも近き一大冊子の梗概を述べることは出來ない。又ワード女史の文學上の位置並に是の書の價値に關する批判も概ね歐米文壇に定論があるのである、今日、自分は是等に就いて兎角の意見は申すまい。唯自分は『ロバート・エルスメア』の中に描かれたる社會及び人物を觀て、つくづく今日の我邦に感ずる所があるから、それを簡單に述べたいのである。

十九世紀の後半紀に於ける宗教心の變動、それに伴へる虔信家の信仰上の苦悶、

來やうか。『健全なる身軀には健全なる精神』といふ諺がある、これは凡俗社會の常識を標準とする人間に就いて言つた極めて凡俗なる訓言である、自分は却つて不健全なる身體にこそ健全な精神は宿り得ると言ひたい位だ。

斯んな事を書いたら讀者の中には自分の考へを病的として笑ふ人もあるであらう。あゝ病的！なんで病的が惡いであらうか。自分が果して自分の思ふ様な意味に於て病的であり得るならば、此世に於ては是れ程仕合せなことは無いと平生思ひもし、又願ひもして居るのである。ナニモ御多分に外れまいとならば、馬や牛の眞似をするまでだが、それでは此の世の中があまりあつけ無いではあるまいか。――ああ自分の考は何處まで他様のと違つて居るのであらうか。會通の程も覺束ない、言ふだけ野暮であつたのかも知れないのである。

三　『ロバート・エルスメア』

望ましい事では無いが、先にも述べた通り、病氣も吾々にとりての數人時で、常には得難い慰みを得ることが出來る。自分はこの頃病褥の上に暮した一月ばかり

の一の『死』を除いたならば何處に宗教があるであらうか、何處に哲學があるであらうか、また何處に詩歌藝術があるであらうか。人生のあらゆる幽妙高遠なるものは實に此の『死』に對するの安心、希望、解釋、裝飾の爲に作られたるものではあるまいか。若し吾人に是世に於て思ふがまゝにあらしむるならば、願はくは生きながら死にたいものだ、そしてこの現身によりて文藝、哲學宗教の活ける解釋を得たいものだ。併しこんな望が無理であるとしても吾々は決して失望するには及ばぬ、吾々の病氣と云ふものになり得るでは無いか。病氣とは他方より見れば半ば死ぬるの謂いだ。生きながら至るで死ぬる事が出來ぬとすれば、セメテ生きながら半ば死ぬることがまだしもの樂みではあるまいか。病氣の福音は即ち死の福音であるのだ！

それで自分は斯う思ふのである、――未だ曾て死の福音を耳にしたことの無い人が、如何にして宗教家たり、哲學者たり、又詩人、美術家たることが出來やうか。健康の身軀を有つて牛馬の如く飲み、食ひ、走り、動き、犬の吠える樣に議論をし、羊の樣に書物を食つて居る人が、如何してこの人生のまことの味をかみしめることが出

見れば、健康な人の方が或は却て氣の毒の樣にも見えるであらう。

病氣は吾々の軀（からだ）を弱くするが、其の代りに吾々の精神の上にさま〴〵の貴むべき影響を與ふるものだ。濁れる心情を清め、淺墓な思想を深くし、動き騷げる胸を靜かにし、忙がはしき此の日常の凡俗生活の中にて吾々の想ひも寄らざる幾多の精神上の經驗を與へ、且つ吾々の心靈の上に最も嚴肅なる平和と光明ある希望とを與ふるものは實に此の病氣の力である。此の病中の趣味はとても健康な人の窺知を許さゝる所謂現身證悟の三昧であるのだ。

故に病氣の日は徒らに藥を飲み眠を貪るべき時では決して無い、即ち是れ吾々の肉身の苦しみの犧牲の前に精靈の福音が祭壇の上に現はるゝ時である、ことを覺悟すべきである。佛家では昔より病時を以て發菩提心の好因緣となし聞法省察の無上の機會として取扱つて居るが、決して佛家のみ然るべき筈では無い、あらゆる宗教家、思想家、詩人などには常に是の覺悟が無くては叶はぬ筈だ。

病氣は身軀の方から觀れば『死』の攻擊である。あゝ『死』！　此の世の中で此れ程忌み嫌はれて居るものは無いが、さりとは淺はかな人心ではあるまいか。あゝ是

自分は愕然として胸に手をあてた、そして自らの刄の痕より混々として流れ出づる血潮によりて自分の喉を潤した時、惡魔の聲は吾れ自らの聲の如く『吾は汝なり』と勝ち誇りげに自分の心の耳に囁いた。――あゝその後の自分は如何(どう)なつたか、又如何なりつゝあるのであらうか、自分は多く語るに忍びない。

斯樣なことは自分の口より多く言ふべきで無からう。兎も角も、與ふる者は富まねばならず、敎ふるものは知らねばならぬ、自ら火ならぬものが如何にして他を火にすることが出來やうぞ。自ら己れの體(からだ)を持餘して居る自分の樣なものが、まあ如何して世の人々の爲す如くに人の爲めとか、或は世の爲めとか、或は國の爲めとかに盡すことが出來やうぞ。若し人は己れの爲に活きて居るものとすれば、自分はイゴイストたらざらむと欲するも得ないのである。

二　病氣の福音

自分が多病だから斯う言ふのではさら〳〵無いが、病氣と云ふものは健康な人が想ふ樣に忌み嫌ふべきものでは決して無い。眞に病中の趣を味はつた人から

らないのだ。病ひは苦痛なき時には忘れる事も出來る、貧乏は心がらで如何にも慰め得られる。されど誰れが自分自らの心より逃るゝ事が出來やうか。自分はこの大敵に遇つて凡ての精力を傾け盡したのだ。

自分は自分の心の苦みの何物なるかに就いては別に語るを要しない、それは大かた自分の分別の淺かりしため、或は意志の弱かりし爲め、或は感情の變り易くして激しかりし爲め、——約りは自分の性格のあらゆる弱點に歸するであらう。自分は自分の境遇が寧ろ通常人の幸ひとすべきものであつたにも拘らず、自ら求めてかゝる不幸を釀した事に就いては、少からず自分自らの性格を憐みもし、且つ時には悔みもするが併し既に釀し得たる心の苦み其物の儼然たる事實なることに於ては遂に如何ともする事が出來ぬ。丁度ロバート・エルスメアがその懷疑の深淵に陷つて『あゝ神よ、妻よ、仕事よ』と叫んだ樣に、自分は自分の存在の根底が或る惡魔の手斧によりて打たれつゝある樣に感じた。自分は暗黑の中に立つてこの惡魔と格闘を試みたが、自分の力が勝てば勝つ程自分の胸の苦しみはますます激しくなる。自分は自分の劍を以て斬る所の敵は自分の胸にあることを忘れたのだ。

ぬ境遇にあるのだ。若し自分の事をのみ思ふのがイゴイストならば、自分は其のイゴイストと呼ばれて少しも異存は無い、——人は己れ自らの外には何物でもあり得ないのだから。

實を言へば、自分は自分一人の身をすら持てあまして居るのだのに、何で外を顧みる違があらうぞや。自分は久しい間難治の病氣に罹つて、この命一條を繋ぐにすら毎日〳〵一通りや二通りの苦勞では無い。それに家には妻もあり子もあり、戴白の老父母もある。自分は誠にいさゝかな財産と收入とで彼等を養ひ、慰め又育てねばならぬ。この仕事一つでも、自分の境遇を解する人ならば、如何なる健全なる人にでも決して容易しい事とは思はぬであらう。併しながら自分は斯樣な事に思ひ惱むで自分の爲すべき事を忘るゝまでに弱い者でも無い。苟も此の心だに確かに安立してあるならば、ナニ少しの病氣や貧乏に打勝つて、隨分爲たい事も爲し得ぬではない筈だと信ずるが、さて此の心が如何にも思ふ儘にならない。外には生活の爲に戰ひ、內には病苦のために悶きつゝある自分は、更に病よりも貧よりも恐らくは天下の如何なる物よりも强い『己れの心』と云ふ大敵と鬪はねばな

静思録(三)

○自分自らの大善人

◎世間の人々は口を開けば輙ち世の為め、又は国の為と云ふ。併しながら世の為め、国の為めと云ふことが此の自分を離れて何事かの意味を有し得るかと云ふことに就いては尚ほ疑ひの中に在る。自分自らの存在を撥無して何処に人生の意義を求むることが出来やうか。

我は無我を以て人道の大本として居る。是の所謂無我が我の存在の最高状態を示すものでないとすれば、自分は毫も宗教の貴むべき理由を解し得ざる者だ。自分は素より社会や国家の存在を是認する。併しながら吾人は彼等に服従することを忘れてはならぬ。臣下とは勇を納むるもの、誤ひては可なり。カイザルの物はカイザルに還すが宜し、併しながら精神的に彼等の存在の根底を紛して居るものは吾人自らであることを忘れては成らないのだ。

◎斯んな考へを有つて居る自分は恐らく世間

二十行廿二字

靜思錄

一　自分はイゴイストだ

靜かに思ふと云つたところで別に何を思ふでも無い、皆んな自分の事を思ふに過ぎないのだ。自分はこの世の中で自分の外に何物をも思はない、否思はうとしても思ひ得ぬのである。自分は大方世人の所謂るイゴイストと稱する者であらう。

イゴイスト！人によりては此の名前ばかりで既に多くの罪惡を預想するであらう。剛情、我慢、私利、私慾、不人情、沒道義、――斯んな種類のあらゆる惡德は此の名稱に關聯して直に想ひ起さるゝであらう。『彼はイゴイストだ』これだけの言葉は一個の人を道義の區域以外に放逐し得る力がある。あゝ何事があるにしても、自分は實際そのイゴイストに相違ないのだ。

自分だからとて何で〳〵すき好むで斯樣な者になりたくは無い、萬々なりたくはないが、所詮致しかたが無いのだ。實際自分は自分の事の外は何物をも思ひ得

兵衞、太郎兵衞、乃至道學先生と同じく單に一個の頭顱を有するの故を以て、共に同じく一個の投票權を有するが如きは、吾人の勝え得る所に非ざる也。

醜なる哉東京市

山靑く水淸らなる是のみ國に、吾等の首府の如何なれば斯くは汚れたる。

そこに立てる棟三十萬、何處に聖者の息ふべき家ありや。形歪みて色けがれ、飾り卑しくして式整はず、吾れはむしろ敗家の群の尙ほ美しきを思ふ。其の路を見よ、雨ふれば泥深く、風吹けば塵揚り、馬糞巷にうづたかし。墳の隱れたるを步むにも似たらずや。路行く人を見よ、其の面の物欲しげならざるありや。色あせて眉顰み、其の眼には偸盜の如き光あり。天の靑きを仰がむと欲すれば、空に電線のかゝれるあり、月の夜の淸きを眺めむと欲すれば、地にうつる影尙ほ人間の燈に汚さる。鳥は來鳴かず、花咲き匂はず、耳をそばだつれば唯罪惡の響を聞くのみ。

あゝ山靑く水淸らなるこのみ國に、如何なれば吾等の首府は斯くは汚れたる。

醜なる哉東京市。

（以上三十五年一月）

我國民は祭禮を好む、然れども、其の何の爲の祭禮なるかを知らざるもの多し。大祭日の如きも天長節、紀元節、孝明天皇祭等を外にして、其の祝すべきの意義を知るもの極めて稀なるべし。彼等はたゞ〳〵業を休み、爲す事も無くして一日を遊び暮らす特權あるを以て、祭日を祝すべしと思惟せるならむ。

怯夫に非ざれば即ち僞人

人性は爾かく圓滿なるものに非ず。吾人今にして神たらむは早からずや。強ゐて違はざるを求め、力めて戻らざらむを衒ふも、省みて安からず。即ち性を殺して匿に自ら欺く。是れ怯夫に非れば、是れ僞人。

今の世の學者概ね是の類のみ、何ぞ其の云爲の死灰枯木の如くなるを怪まむや。

單に一個の頭顱を有するの故に

道學先生怒て曰く、吾等は神の前に平等也。汝獨り天才を揚ぐ、是れ人の子を賊する者と。然れども『神は既に死にぬ』吾人は凡俗の前にも尙ほ平等ならざるべからざる乎。平等主義は頭數主義のみ。然れども吾人の釋迦、基督、日蓮、奈破翁が權

ゝものは疚しければ也。人は燒かれむことを慮りて其火を怖るべきに非ざるをや。年若き道學先生よ爾かく善惡を以て心を勞せざれ。かの流沙に沈むものを見よ自己の叫びの爲めに自ら溺るゝに非ずや。

事後の註釋、理前の是認

人よ何ぞ汝の爭を止めざる。古より趣味に爭ひ無しと稱せらる、されど吾人の人生は趣味の爭に外ならざるに非ずや。

理論は事後の註釋のみ、事實は旣に理前に於て是認せられあるを知らずや。

菅公一千年祭

久しく計畫せられたる菅公一千年祭はいよ〳〵本年に於て施行せらるべし。九州に於て西京に於て、東京に於て、其他全國の到る處に於て、祭禮好きの國民は狂氣の如く騷ぎ立つなるべし。當事者たるもの能く是の祭典の目的を明にして無意義の騷動に終らざらしめざるべからず。

り。嗚呼夫れ飢えたるものを如何せむや。

先づ人たらむことを要す

今の學者口ありて手無く、言說ありて實行なし。畢竟識の貴きを知りて人生の更に重ずべきを解せざるの弊に坐す。

學者たる可也、然れども先づ人たらむことを要す。然らざれば萬千の知解も半錢の價値無けむ。

年若き人よ

年若き宗敎家よ、爾かく世を果敢なむこと勿れ。善く食ひ善く飮む、是れ人生の事實に非ずや。

年若き哲學者よ、爾かく世を難むずる勿れ。理の爭ふべきもの初めより爭はざれ。吾人は美酒に對して先づ其泡を吹くに非ずや。

年若き敎育家よ、爾かく吾人の言に眉を顰むる勿れ。罪無きものは恐れず、恐る

信せざる者より見れば、一切の信仰悉く迷信のみ。信ずる者より見れば、一切の信仰是れ眞信のみ。半僧坊、穴守稲荷、成田不動、阿弖波羅婆等の崇拜を以て迷信とし佛教、耶蘇教の信仰を以て眞信なりとするが如きは、是れ對峙的名目の爭のみ。彼此、處を換ゆれば迷眞亦名を異にせむ

世人動もすれば合理的信仰を謂ふ、誤れり。既に信仰と云ふ、豈合理的なるものあらむや。若しあらば是れ最早や信仰に非ざる也。信仰は元始的事實也。眞僞なく、是非なく、上下なく、優劣なし。偶々是ありとするも方便的稱謂に過ぎざるのみ。

麵包を求めて石を得たり

吾人は靈性の安慰の爲に宗教を要す、而して今の學者與ふる所は宗教の學説のみ。吾人は理性の平和の爲に哲學を求む、而して今の學者供ふる所は哲學の歷史と認識論とのみ。吾人は吾人の人格の修養の爲めに道德を要む、而して今の學者の訓ふる所は倫理學の理論のみ。米を求めて砂を得たり、麵包を求めて石を得た

學說によりて信仰を求む、野に行いて魚を採るが如けむのみ。今の宗敎界に要するものは知解以上の人物也。學說文字は既に〳〵其の多きに勝えず。

若し夫れ敎學研究の爲に一大學を起すが如きは寧ろ閑事業と謂ふべし。歐洲大學に神學科あるは、中世四科法の遺物のみ。移して則とするの謂はれ無きや論無し。

(三十五年一月)

麵包の比較研究

今の時宗敎學者ありて宗敎家無し。所謂る佛敎の比較研究の如き、學術の爲には喜ぶべきも、宗敎其物と何の關る所ぞ。飢えたるものゝ求むるは麵包也、麵包の比較研究には非ざる也。

迷信と眞信

數々人の迷信を說くを聞く、然れども吾人は疑ふ、世果して迷信なるものありや。又果して迷信ならざるものありやと。

◎生の覺悟は即ち死の覺悟也。哲學宗敎は死の學問也是の人生の一大事因緣に關して爲すあるに非ずむば、一切の道敎學智、吾人に於て何爲るものぞ。吾人是點に於て兆民居士を大なりとす。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

道學先生の理想的人物

今の道學先生の理想的人物となる、易々たるのみ。人に遇ふて說く所、德敎振作の論に非ざれば則ち風俗改良の談。讀む所の書は敎育倫理、書く所の文は言文一致夢にも風流韻事を語らず、時に豚を煮て晩酌三杯、興大に到れば則ち公德唱歌を歌ふ。唯夫れ是の如くにせば可ならむのみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

敎科大學

敎科大學の設立を說くものあり、曰く以て宗敎の頹廢を救治せむと。誤れる哉

◎理を言はゞ、死は爾かく怖るべきものに非ざるべし。吾人は既に百歳の過去に生まれざるを悲まず、何ぞ獨り百歳の未來に活きざるを恨みむや。死怖るべしとは何の謂ぞ。

◎生死は常に處を異にし、長しへに接觸するの期無し。吾人死せむ乎、既に生きざる也。吾人生きむ乎、未だ死せざる也。生者にして死を恐るゝは死者にして生を欲すると一般、能はざるを望むものに非ずや。

◎想ふに怖るべきは死其者よりも死を期待する心に存すべし。然れども既に死を知らず、又何ぞ死の怖るべきを知らむ、知らずして徒に憂悶す、畢竟迷妄ならむのみ。

◎假りに古の勇者を墳墓の中より起して而して問へ。彼れ其の平和なる永眠を捨てゝ再び是の濁世に出でゝ戰はむことを望むべきか。

◎天下の最も怖るべきものは不能死の觀念に過ぐるは無し。百年、千年、万年、而して猶は死する能はずして長へに是世界に生息せざるべからざるの運命を得たりとせよ。誰か慄然として寒心せざらむや。吾人は人生の最も大いなる幸は其生命の不朽ならざる事に存すと謂はむ。

との教育とまことの道德との關はるべき最も大いなる問題に非ざる乎。人は長へに其の罪を遂ぐべきに非ざる也。（以上卅四年十二月）

* * * * * * * *

病と醫學

トルストイ伯病みし時、幾多の醫師其病を審にせず。伯乃ち歎じて曰く、今の醫師は醫學に於て知らざる所無し、唯醫學其物は何事をも知らざる也と。味ある哉言や。希くば以て今の道學先生を戒めむ。

中江兆民居士

◎去月中旬、中江兆民居士遂に逝きぬ。人の壽は歳月に非ずして事業にあり。五十年は居士にとりて決して短き生命に非ず。遮莫、吾人の最も居士に欽する所は、性命の外に超然として其の末日の平和の極めて美はしきにあり。居士夫れ那邊より是の赤心の地盤を得來りたる。

何の貴むべきものありや。名けて色情と呼ぶ、可、淫慾と稱する亦妨げじ、唯是をしも恥とせば、世に何の誇るべきものありや。異世他界の知識をだも人は尙ほ貴しとして求むるに非ずや、この自然の欲求を羞恥として忌避さるの謂はれ何處にありや。げに沒趣味、沒風韻の世とはなりにけり。されど人は其根を芟りて其の花の美はしきを望むべきに非ざるべし。久しいかな、風俗社會の自ら欺くことや。

價値也、名目に非ざる也

吾等は想ふ、若き女は容つくるべきもの也。何にぞ今の女學生の其の髮、蓬の如くなるや。かの裸體畫を眺むるもの、何故に其の膚の柔かにして其の息の香しきを想ふべからざる乎。劣情と云ひ、實感と叫ぶ、暫らく人の名くるに任せむ。吾等自然の兒の關はる所は價値也、名目に非る也。

眞の教育、眞の道德

嗚呼自然の最も大いなる賚は久しく磨かれずして埋れたり、是れまさしくまこ

に空洞の響あるを聞かずや。彼等はげに知博く、徳高く、行正しく、若しくは財裕かなる人なるべし。されど吾等は疑ふ、是の如くにして世に尙ほ望むべき榮えありや。人は己れに克つと謂ふ、されど性を矯むるは天を傷くる也。善か惡か、吾れ是を知らず、ただ人生の福祉是の如くにして空しかるべきを想ふのみ。玉の盃の底なきもの、げに用ふべからざるを如何。

性慾の醇化

げに慾也、飽き足らずむば已まざるべし。されど喩へば火は煖むれども觸るゝものを燒くが如く、樂は遠きにありて聞くべきが如く、色は水に和して染むべきが如く、性慾の美はた其の飽足せられたる所に在らずして、そを憧憬するところに存すべし。吾等假りにそを性慾の醇化と名けむ。

久しい哉自ら欺けることや

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。是の如きをしも賤むべしとせば、世に

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。夫の性慾の發動の醇なるものは眞にこれ天下の至美、人生の至樂也。性慾無きところに人生幾何の價値ありや、吾等まことにそを疑ふ也。彼等に詩ありや、愛ありや、將た美ありや。青春の妙樂彼等果してそを解するや。吾等まことにそを疑ふ也。たとへば、一脈の春風吹き亘りて野に生色あるが如く、たとへば微妙の音樂に神往きて限りなき歡喜の中に漂ふが如く、たとへば妙香薫じ天華雨に中る身は無上淨樂の三昧に入るが如く、性慾の動くところ、野には春色あり、空には妙光あり、人には愛情あり。天地と人生と玆に初めて美なるを得るに非ずや。

地獄の火印を烙けられたるもの

夫の春と年若きとを欽ぶ人は、何にぞ性慾の美はしきを稱へざる。吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。彼の性慾を禁遏し、若しくは力めて卑下するもの、其面に色無く、其の眼に光無きを見ずや。さながら地獄の火印を烙けられたるものゝ如く、其額には蛇の如き皺あるを見ずや。彼等笑はざるに非ず、されど其笑ふ聲

の賚。吾人に祈るべき神なくむば願くは先づ是の自然の大なる賚を讃美せむ。

性慾

怪しき哉是の大なる貴き賚の吾等の社會に賤めらるゝ事や、惡魔の如く咀はるゝに非ざれば、其の名決して彼等の口に上らざる也。彼等胸に是の賚を抱けども、そを隱すことさながら盜める物の如き也。斯くてあらゆる惡名は是の賚の上に被らせられぬ。眞理の外に何物をも知らずと稱する科學が名けて性慾と呼べるもの、あゝ是れ彼等が是の賚に與へたる最も美はしき稱謂なりき。良しさらば吾等亦暫らく是を性慾と名けむ。

何ぞ其の祝福を讃美せざる、

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。自然の兒には常に兩面の及あり。人は何故に其の害毒を呪咀して其の祝福を讃美せざる。

性慾の動くところ

吾等は是の如き言の或は世に誤られむことを恐る。されど吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。

何か故ぞ

世に若き女の容つくれるばかり美はしきは無し。彼れ何が故に其の容を裝ふや。野に咲ける百合の花を見よ、ソロモンが榮華の極みだにも其の榮え是の花の一つにも及ばざりき。花や何が故にしかく麗はしき。鳥の樹間に歌ふとき、彼れ何の情ありて其の歌のかくは妙なるや。黃金色なる木の實の枝も撓はゝなる態の如何にうるはしきよ。木の實はた何の心ありて寂しき秋に獨り打ち笑める。

貴き哉是の賚

人よ自然の大なる力の是の間に活らけるを見ずや。是の力無くば人には若き女の笑顏なく、野には花の色の美はしきなく、森には鳥の歌の妙なるなく、春はさながら秋の如くにして、世は限りなき沙漠の如くならむ。大なる哉是の力、貴き哉是

ウストたり得る者があらうか、如何にバイロンの歎美者だとて、マンフレッドや、サルダナバラスが眞似らるゝものであるか、如何であるか。ハイネや日蓮の通りにしては一日も是の國には居られまい。奈破翁を眞似たらば恐らくは直に巣鴨に送らるゝであらう。

◎吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豐富にし、是によりて自ら慰め、自ら勵み、かねて是の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。俗學者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前蹤によりて少からず確かめられ、且勵まさるゝのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を堅むるのだ。是の間の消息は歴史論や、アナクロニズムでニイチェを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬのは言ふまでも無いのである。

(卅四年十一月)

* * * * * * * * * * *

自然の兒

◎扨て其の言ひ方の輕薄さ加減と來ては目も當てられない。馬骨先生とは何れ早稻田あたりの末派でもあらうが、御師匠樣の諷諸の筆が如何に輕妙だからとて、斯かる問題にまで下手に眞似られては、如何にも人品が見え透いた樣で御爲になるまいと思はれるのに。

ニイチの歎美者

◎我輩はゲーテや、バイロンや、バイ子や、日蓮や、一世奈破翁を歎美すると同じ樣にニイチェを歎美する者である。ニイチェは前にも言へる如く、學者ではない、況して實踐道德家などでは猶更無い。彼れは生知の詩人だ。詩人として其の理想の崇高なること、其の想像の偉大なることは殆ど人心のはたらきの最高潮に達して居る。殊に十九世紀末の惡文明に育てられた吾々にとりて此の上もない靈性の慰藉と謂ふを憚らない。

◎世にはニイチェの歎美者と謂へば、直に其の所說の實行者として驚怖する者があるが、まあ何と謂ふ馬鹿氣た事であらう。如何にゲーテの歎美者だとて自らファ

見などに據りて彼れ此れ言ふのは何たる間違であらうぞ。斯かる俗學者流に一大頓悟を與へむが爲に、取も直さずニイチエは生まれ出でたのである。

◎讀賣の馬骨先生はやれ個人主義が如何だの、やれ歷史的發達が如何だの、やれアナクロニズムがあるの、やれ盲目反動だのと、是迄の俗學者の言ひ腐らした事を珍らしげに陳べて居るが、是れでニイチエが解つた積りで御自分は居らるゝのか。ニイチエ一代に三段の變化抔と人並の事は言つて居るが、なんで斯かる先生に其の樣なことが解らうぞ。ハヴロックエルなどのお里が見え透く樣で何共以て笑止の至りだ。

◎其の癖やれニイチエはゲーテを讀むだことはあるまいの、ルソーは恐らく解らなかつたらうのと、齒の浮く樣な通を並べらるゝが、英譯でフアウストを窺つたとて何で是れがゲーテ通と謂はれやう。況して他人がゲーテを讀むだの讀まぬのと詮義立ては、人の手前チト御控へなさるゝが宜しからう。斯むな無用の辯を弄する暇があるならば、ニイチエの妹さんの書いた傳記や、ザラツストラでも熟讀なさるゝが御爲だよ。

恰好の武器也と。好詼諧亦多少の眞理無しとせず。

ニイチェの批難者

◎世に天才を解し得ずして是を批評するほど笑ふべきことは無い。今のニイチェの批難者の如きは大抵是の類だ。

◎讀賣に馬骨人言と云ふのを書いて居る匿名先生があるが連りにニイチェの攻撃をやつて居る。何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが、超人や、轉生などの事になると、流石に俗學者の知解に入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチェを批評し得らるゝものならば世に、批評ほど容易なものはあるまいよ。

◎自體ニイチェは學者では無い、隨て其の言ふ所を學説などゝ見るが抑々の誤りだ。彼れの述ぶる所は學説以上の理想、學説以上の想像、謂はゞ人間靈性の呼吸を以て直に人の肺腑に通ずるにあるのだ。それを俗學者流が自家の歴史論や倫理

惡を憎むこと何ぞ甚しき

進歩の旗章は多く革命者流の頸血に染められたりき。而して革命者流は概ね當代の元兇たりき。世間何ぞ惡を憎むことの爾かく甚しき。

癲狂院

世界は惡者に負ふ所あるが如く、又深く狂者を德とせざるべからず。ナザレの故園に歸り、以賽亞六十一章の破題を吟じて、是の錄されたる事今日汝等の前に應へりと呼びし時、誰かイエスを狂者なりとせざるべき。龍の口に引かれむとするや、赤橋の前に立ちて八幡大菩薩の緩怠を罵りたる時、日蓮を狂者と思ひし者は獨り彼の法敵のみに非ざりき。彼等をして今の世にあらしめよ、癲狂院裏の一患者として待遇せらるゝの外何處にか救世主あらむ、何處にか釋尊の行者あらむ。

謔する者曰く、癲狂院は是れ無數の凡人が其の平等主義の保護の爲に設けたる

此は人生を複雜にする者也。

本能の命ずる所、其處に人生の最も大いなる事實あり。夫の煩瑣を以て精緻と稱し、迂遠を以て妥當と爲すもの、そも〳〵人生直下の事實を如何とか見る。哲人言あり、曰く、基督教徒は世に唯一人ありき、而して彼れは十字架の上に死したりきと。

價値と我

人生は價値也、而して價値は我れ自らの造る所也。世に我れ自らの造らざる價値ありとすれば、是れ我眼の外に色ある也、我耳の外に聲ある也。

天下誰か我が價値を解する者ぞ。文字は上下大小是非を論ずべし。價値は唯心を以て心に傳ふべきのみ。

他の言動によりて左右せらるゝもの、是れ既に價値無き也。價値無きもの是れ既に我無き也。我既に沒しぬ、人生の意義亦求むべからざる也。

吾人は恐る、餘りに多くの人は生まれたるに非ざる乎。凡俗至極なる平等主義は是の如くにして行はるゝに非ざる乎。天才は是の如くにして狂者として迫害せらるゝに非ざる乎。

天才の出現を沮害するもろ〳〵の教育主義、道德主義、吾人凡て是を憎む。

一個の眞理

『朝に道を聞て夕に死するも可也』。是れ孔子の敎なりき。

『早く其の杯を空しくせずや、其の泡の消ゆるに先ちて吾人の命の消えざることを誰か保せしや』是れアナクレオンの歌なりき。

吾人は思ふ、是れ人生に於ける二個の最も大なる事實にして、亦二個の最も大なる眞理也。

偉人と凡人との別

偉人と凡人との別は一言にして盡すべきのみ。彼れは人生を簡單にする者也

得らるべくむば、如何なる犧牲も決して貴からざる也。

天才無き世界

吾人の世界より天才を除き去れよ、殘る所果して何物ぞ。 歴史は空虛とならむ世界は暗黑とならむ、人生は寂寞たらむ。 吾人夫れ何に賴り誰を憑みてか此世に生存すべき。 天才は正しく社會の名譽也、國家の寶冠也、人類の光明也。

平等主義と天才

平等主義は訓えて曰く、人には凡て平等の人格あれ、平等の發達あれと。 是の如くにして無數の凡人は作られぬ。

天才は吾人に訓えて曰く、爾等力めて我の如くなれ。 我は是れ强者と優者との先驅也と。 是の如くにして天才は靈性の慰藉也、進步の理想也、未來の光明也。

吾人凡て是を憎む

むべきに非ざる也。

* * * * * *

(卅四年十一月)

天才の出現

我は天才の出現を望む。嗚呼日蓮の如き奈破翁一世の如き、詩人バイロンの如き、大聖佛陀の如き、哲學者ショペンハウエルの如き英雄豪傑は最早や此世に出づる能はざる乎。久しい哉、我の凡人に倦めることや。

天才の犧牲

世に凡人の數幾十百千萬億ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ。願はくは彼等の十萬を割いて一バイロンを得む。願はくは彼等の一百萬を割いて一奈破翁を得む。我に一日蓮を與ふるものあらば、願はくは代ふるに一千萬の凡人を以てせむ。我に一釋迦を與ふるものあらば、一億萬亦惜むに足らざらむ。

人よ怪む勿れ、彼の木偶に禱るものゝ猶且つ犧牲を供ふるに非ずや。天才にして

退譲する所あらざりき。北條氏遂に屈し、榮爵を授け美田を贈りて宗門の弘通を允許し、請ふに諸宗の折伏を中止せむことを以てするや、彼昂然として曰く、日蓮の教を弘むるは釋尊の遺命のみ、一北條氏の許否、我に於て何かあらむ。法華折伏は聖經自爾の大義、救世根本の方便、釋尊の行者一日も是の事無かるべからずと。嗚呼何ぞ其の主張の嚴明にして其の意志の猛烈なるや。吾人は日蓮宗に於て一門外漢のみ。今に於て尙ほ法華折伏を標榜するの可否は吾人の得て知らざる所なりと雖も、田中氏が二十年來、内外の障礙に抵抗して終始其の主義を枉げず、斷々乎として益々其の侵略的態度を擴張するの一事は、少くとも其の教祖の偉大なる精神に感孚せる所ありと謂ふべし。吾人深く其の志を壯とし、其の行を偉とす。其の文章亦彷彿として高祖遺文の流韻を傳へたるが如き、亦吾人の欽羨に堪えざる所也。

嗚呼世に閑文字多し。言はざるべからずして初めて言ふもの果して幾何ぞ。田中氏の是書の如きは眞に言はざるを得ずして言へるものか。其の説の當否如何は暫らく措き、世人は須らく憂世者の最も眞摯なる憤慨錄として一讀の勞を吝

讀者は以上の叙述によりて略々本書の目的及び文章を想像するを得べし。著者は別論に於て教會の組織を說き、附錄に於て妙宗の未來を預想せりと雖も、其の主腦とする處の『侵略的態度』以下の數章に存ずるや明けし。其の意氣の猛烈なる其の抱負の高大なる、其の理想の深遠なる、而して其の文章の雄偉なる、吾人は以て近時宗教界の一大文字なりと賞賛するの決して溢美に非ざるを信ずる也。

人の傳ふるを聞く、著者は平生熱心なる日蓮の崇拜者たるの故を以て日蓮狂の名ありと。狂か、癲か、吾人得て是を知らず、而れども萎微衰弱を極めたる今の宗教界に於て、敢て日蓮の後身を以て自任するもの、著者の如きあるは、吾人の甚だ喜ぶ所也。法華折伏、破權門理は、げに日蓮が布教三十年間の一大主義なりき。彼れは是の主義の爲に住所を追はれたること二十餘度、或は暴民の爲に夜襲せられ、或は法敵の爲に狙擊せられ、遠流に處せられたること二度、或は斷頭の圓座に坐し、或は弟子を殺され、法を路傍に說けば杖木瓦礫を投せられ、道を壇場に講ずれば罵詈惡言に耻められ、打擲及傷殆ど身に絕ゆる事無かりき。是の如きもの前後實に二十有二年、而して迫害いよ〳〵大にして折伏愈々烈しく、天下の威武に面して一歩も

の日本國教奠定は完く其出征準備也と。著者は是の大法鼓を鳴らして先づ宇内統一の大理想を建て、是の大理想を實現するに先ちて内亂鎮定の必要ありとなし、既に法華折伏の四字を以て宗を立てたるもの、四大格言の麾下に立ちて飽くまで一切の邪宗邪教を討伐せざるべからずと説き、終りに大々的氣焔を吐て曰く、

寺院の門石を見ずや、その「一天四海皆歸妙法」「閻浮提内廣令流布」の文字は、日夕出入の緇素に侵畧を號令するの也。 久遠寺、本門寺、本國寺、妙法華經寺、妙顯寺等、是れ皆相對的對破の名に非ずや、「侵畧的」の徽號ならずや。 侵畧的に信仰せよ、侵畧的に説けよ、侵畧的に書けよ、朝々夕々造次顛沛も侵畧的意氣を充たせよ。 本山を參謀府とせよ、檀林を練兵場とせよ、一切すべて侵畧的理想に行動せよ。「コーラン乎劍乎」は猶甚だ緩弱也須らく「法華經は劍也」と曰へ。 老媼も杖を揮て世界統一を説け、幼童も皷を鳴らして「法皇進軍の曲」を歌へよ。 利の爲に祈る勿れ、身の爲に祈る勿れ、父母の爲に祈る勿れ、師の爲に祈る勿れ、只侵畧の爲に祈れよ、侵畧の爲に死せむと祈れよ。 侵畧に非れば言ふ勿れ動く勿れ、視る勿れ、聽く勿れ、侵畧的意味なき勸化に布施する勿れ、侵畧的ならざる布教に奔走する勿れ、侵略的氣節ならざるものは速に宗門を去れ。死せる萬人を有するよりは生ける一人あるに如かず。 況や七千の僧侶三百萬の信徒一たび昏睡より起ち、警呼應同して異體同心の大節を復し、一擧して侵畧突貫の聲を齊うせば、山岳震ひ湖海動くの慨無くむばあらじ、侵畧なる哉、侵畧なる哉。 (廿三、四頁)

也と爲すもの也』と何ぞ其の宣言の高大にして其の意氣の猛烈なるや。吾人は先づ是の開卷第一章に感激して編を終るまで遂に手を釋く能はざりき。

著者の所謂る改革論の大綱は、宗法に於て復古的態度を採り、制度に於て進步的態度を取り、而して全體を統率するの一大精神として侵略的態度を採らむとするにあり。所謂る侵略的態度は日蓮の法華折伏の大義にして、著者の是に論及するや氣魄雄大、光焔萬丈、蓋し本篇の大主眼の存する處、亦著者最得意の壇場たるが如し。其の要に曰く、人類を一妙道に歸せしむるには、先づ一大勢力を事實の上に建立せざるべからず。國家を以て道敎の原動力とする敎旨即ち是れ也。曰く、日本をして宇內を統一して永く宇宙人類の靈的巨鎭たらしめざるべからず。是れ宇內淸廓の爲也、人類救濟の爲也、而して是れ聖祖立敎の大義、天祖建國の要道にして、兼ねて釋尊塔中付囑の元意也。曰く、是の大理想を唱道したる聖祖日蓮は正しく世界統一軍の大元帥也、大日本帝國は正しく其大本營也、日本國民は其天兵也、本化妙宗の學者敎家は其將校士官也、事觀高妙の學見主張は其宣戰狀也、折伏立敎の大節は其作戰計畫也、信仰は氣節也、法門は軍糧也、四大格言は軍規の振肅也、本化妙宗

田中智學氏の『宗門の維新』

吾人は久しく田中氏の名を聞けるも未だ其の人を知らず、日蓮宗の教理沿革等に就いては素より一門外漢たり。而かも茲に氏の近著『宗門の維新』に就いて一言せむと欲するは、是の書が末法五濁の當世にありて教祖日蓮の偉大なる精神を繼紹せる所に同情を禁ずる能はざるものあれば也。

著者は開卷の劈頭に於て、本化の妙宗は宗門の爲の宗門に非ずして天下國家の爲の宗門也と喝破し、是れ日本國家の應に護持すべき宗旨にして亦宇內人類の必然同歸すべき一大事因緣の至法也と唱道し、此大事緣を宣傳せむが爲に日蓮聖祖は我邦に垂化し給へりと說き、今の宗門は數百年來の歷史的腐敗の爲に全く其の本分を亡失し了りたりと慨き、聖祖の宏猷を恢復し、宗門の妙用を光顯せむが爲に、茲に宗門改革の根本義を明にせむと揚言し、而して後斷じて、曰く『予は此論篇の云ふ如き宗門に非れば日蓮聖祖の宗門に非ずと爲し、又此宗門の改造は單に宗徒の間にのみ唱ふべきものに非ずして日本國家の應さに大に注目すべき最高問題

兒童心理が教育上に應用せられざりし時代にありても、日吉丸は無事に育ちたりき。ゲーテ、ルーテルの幼時には道德的遊戲を强ゐらるゝことあらざりき。當世の事何ぞ一に煩瑣なる。

口耳の學

口耳の學は口耳の人を造る。人物獨り人物を造り得べし。道學先生よ、眞に世道人心の爲に計らむと欲せば、百卷の著書よりは一身の德を修めよ、人々自ら悟らざるべからず。

罪は貧民にあり

近時貧民の惡を爲すもの、人動もすれば、社會の罪を言ふ。罪は貧民にあり、何ぞ社會にあらむ。彼れ惡を爲すに先ちて、既に貧弱てふ大罪を犯したるにあらずや。强者と天才とは常に道德を超越す。彼等より見れば仁義は弱者の武器に過ぎざるのみ。

（卅四年十月）

其愚や及ばず

萬物、何物か知識の對境たり得ざらむや。若し我れをして腐儒の心だにあらしめば、一塊の土石に對する百卷の著述必ずしも難事に非ざらむ。然れども是の如き知識畢竟何の用ぞ。

知るべきことを知らざる、是れ愚也。然れども知るまじきことを知るの愚に及ばざるや遠矣。

道學先生の世界

吾人は道德の受賣を業とする夫の道學先生を卑む。品性の淘冶は偉人の事たり、今の道學先生の造り得る人物は道學先生自らに過ぎざるのみ。

假りに是の世界の人間をして悉く道學先生の如き人物たらしめば如何。吾人は魯仲連を學びて東海を踏で死せむのみ。

何ぞ一に煩瑣なる

書を寄するものあり、曰く言論畢竟人物のみ、足下の近狀憐むべきが如しと。嗚呼果して然る乎。吾豈自ら憐むべきを知らざらむ、若し夫れ憐で而して自ら樂むの境地は即ち足下等の知らざる所に屬するなからむや。

然り、言論畢竟人物のみ。吾心近來靜穩を缺く、猶ほ水平の風に亂るゝが如き乎。詩あり、曰く、

吾がこゝろ波にも似て碎けたるか。など圓かのまゝに寫さゞる、大空高く澄みわたる月。

吾が文素と文に非ず、其詩亦詩に非ざる也。

（三十四年十月）

米と砂

萬物は人類の爲に造られたるものに非ず。人類は其の生存の目的を達せむが爲に取捨する所無かるべからず。彼れの糧は米たるべし、砂たるべからず。怪む、人は何故に精神上の糧に於ては米と砂とを撰ばざるや。

笑はむ乎、狂せむ乎

天才は狂し、俗物は笑ふ。吾人の社會は世々是の如きのみ。生を是の世に享く、そも〳〵俗物となりて笑はむ乎、將た天才となりて狂せむ乎。

吾をして詩人たらしめば

吾をして詩人たらしめば、願くはキョルチルたらむ。人を愛し、國に盡し、自ら甘ず。靑春の死、何ぞ夫れ美はしき。才名一世に噴くして、令聞後に洽ねし、吾れに於て素より間然する所無し。

唯夫れキョルチルたる能はず、願くばバイロンたらむ。バイロン尙ほ能はずむば願くはハイチたらむ。彼れには惡魔の力あり、此には毒蛇の舌あり、尙ほ以て一世の俗風に甘心するを得む。

言論畢竟人物のみ

に同じきものを求む、何ぞ人の異を妨げむ。

千萬言唯意のまゝのみ

若し偏に理を爭はゞ吾れ不背なりと雖も豈俄に學究先生の後に落つるものならむ。千萬言唯意のまゝのみ。區々の辨折何ぞ卿等を待て知らむや。

吾は永く吾たらむ

人はニーチェを言ふ、唯願くは吾をして永く吾たらしめよ。ニーチェは天才、望むべくして即くべからず、千歳に獨歩せしめて可也。

十九世紀文明の王冠

遮莫、吾れはニーチェを好む。十九世紀文明の王冠として見るべきもの正しく彼れに非ずや。彼れの病的なるを咎むる勿れ。十九世紀文明其物の甚だ病的なるを如何。

夫れ邦の無道を以て仆るゝ者尚起すべし、道義に溺れて亡ぶる者に到ては遂に救ふ可らず。吾人潜に以て憂と爲す。

何ぞ思はざるの甚しき

嗚呼天下好く書く者の多くして好く讀む者の尠きや。情激する時、語遏らざるを得ず、理絶する時、理明なるを得ず。機微言外にあり、噏嚅として唇頭に上らず、人は即ち壯語を作して他を欺くものと爲す。何ぞ思はざるの甚しき。

心に會するもの唯是れ心

理の爭ふべきもの、其事初めより爭ふの要なき也。心に會するもの、唯是れ心。要は人々自ら悟るにあり。腐儒席上の談の如き、吾れに於て風馬牛のみ。

何ぞ人の異を妨げむ

理の精しからざるを怪む勿れ。精ならざるは粗ならむが爲のみ。吾れは唯吾

生自らに過ぎざるのみ。

人々自ら悟らざるべからず

喇嘛去り、モルモン來る。去來我に於て何の關する所ぞ。今や、信仰は外にあらずして内にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否ざれば職業のみ。世の宗教と謂ふもの即ち是れ。(全集二卷九二七頁參照)

空腹高心

己れ能く先人に若かむと欲せば、亦同じく先人の學びたる所を學ばざるべからず。何ぞ今の青年輩の空腹にして高心なるや。

道義亡國

唱歌には公德唱歌、菓子には教育菓子、遊戲には德育遊戲、聖代の文物又燦然たりと謂ふべし。

嘗て倫理専門の新學士に告げて曰く、卿等百歳にして道義を說く可也。昨日校舍を出でゝ今日人の子に敎ふ、危からずや。人生の幽微素と文字の外にあり、讀書萬卷、自ら悟る無くむば畢竟死學のみ。卿等自ら欺く無くむば幸也。

中心果して信ずる所ある乎

人生は事實也、空理に非ざる也。漫に主義を標榜し學說を糊塗す、畢竟何の關する所ぞ。道學先生、好で理を談ず、疑ふらくは中心果して信ずる所ありて然る乎。

學說と人格

知は易く信は難し、百知ありて一信無からむには、初めより學ばざるに如かじ。今の學者の爲す所を見るに、漫に先人を是非して折衷を事とする者多し、抑も何の呆癡ぞ。其人を知りて其說初めて解すべけむ。是の間何ぞ道學先生が皮相の是非を容れむや。

而して唯々同じき者のみ同じき者を解す。道學先生の解し得る人物は、道學先

得たるものは、何時運動によりて失はざるを保し難けむ。

○人心の移るは機微の間にあり、唯哲人のみ這般の消息を解す。」

（三十四年八月）

本末の顚倒

當今史料編纂先生ありて歴史家なく、哲學史家ありて哲學者なく、教育學者ありて教育者なく、道學先生ありて德行家なし。甚しい哉本末の顚倒せらるゝ事や。

今の哲學

ソクラテース曰く、哲學は死に對するの道なりと。洵に是の究竟の安心を與へずむば、宇宙の知解我に於て何爲るものぞ。知らず、今の哲學訓ふる所果して何の道ぞや。

自ら欺く無くむば幸也

第三期雜篇

無題錄

○讀賣紙上掲ぐるところの半古君の衣服改良案には吾人一向感心せず、裁式煩瑣に過ぎて形様甚だ散漫、毫も佳處ある無し。 衣服は人生習慣の最も固着せるもの、而して習慣は凡ての勝利者也。是の習慣を維持するは、是の習慣を有する者にとりて是の上も無き衛生也。 漫然空理を說いて積年の習慣を打破せむとす、事太だ難し。 改良論者は深く是の點に着眼せむことを要す。

○今の教育は人を造らずして徒に人の手足を造る。 其卒業生は人を使役せずして却て人に使役せらる。 畢竟門附せしめむが爲に人の子に三味線を教ふるもの也、藝も是に到て身を滅すもの多し。 各學校の卒業期に際して吾人切に是の感を深うせり。 所謂教育家、果して何の辯かある。

○基督教大學傳道の結果頗る佳良なりと傳ふ。 氣早やなる論者の中には是の事實を以て人心一轉の機會なりとなす者すらあり。 早やまる勿れ、運動によりて

ての富貴榮華よりも固く且つ貴し。

吾が言はむと欲する所亦是の外に出でじ。乃ち君が此の文を錄して是の書を結び申候。今夕此時、君も或は其故郷の病友を想ふこともあらむか。吾れは此の書によりて遙に君の健康を祈りて靜に病の床に就かむ。あゝ夢よ、吾等が此世に於ける最終の隱れ家よ。此の夜の眠に幸あらしめよ。

（卅四年八月十九日夜、鎌倉長谷にて）

せず。當地にありては時々田中智學氏と來往するの外、山に面して書を讀み、海に臨みて嘯くの外他事なく候。是の如くにして朝々又暮々、徒らに歳時の水の如く流るゝを送るのみ。近來久しく新書に接せず、心少しく飢えたるの感あり。あゝ吾等は何時まで讀書子たらざるべからざる乎。歎嗟の至りに御座候。

* * * * * * * *

書送りたき事は何時迄書きたりとて盡き間敷候まゝ、惜しき筆を茲に擱き申候。

今朝君が七月十八日夜の書翰一通と美術雜誌二冊並に大英新百科全書一冊とを受取りぬ。御苦心の段々毎もながら謝するに辭無し。書中『街頭の樂手』の一篇感與淺からず讀過候ひしが、末段の一節特に吾が情を動かし候。

嗚呼世に棄てられて世を怨まず、人に顧みられずして人に背かず、一箇の風琴に命を托せるかの老樂手。彼れが前身の何なりしかは我れ之を知らず、彼れに罪過ありしとするも我れはそをさばく判官とならじ。又彼れの現在が如何に窮困なるも我れは必ずしもそを悲しまじ。彼れの風琴より出づる哀は、れの音律は、凡ての懺悔よりも力あり。彼れが命を知り天を樂める自得は、總

當の要求に非ざるべしと存じ候。

丁酉倫理會に對しては近來多くの興味を有たざれば、其の近況も亦おのづから審かならず候。嘗つて中島、桑木二君の提論の下にニイチェの研究ありし由は聞きたれども、其の所謂る研究の如何なるものなりしかは聞知し及ばず。畢竟かゝる問題は部門的學究先生に鹽梅せられむには、餘りに多くの非學究的分子ありたるべきを蔭ながら懸念罷り在り候ひき。哲學雜誌廣告によれば、ザラトストラ如是說と道德發生論とに基づきたる桑木君の一著述あり、題してニイチェの倫理說と稱する由。あゝ吾等の關はるところは說に非ずして人也。桑木君何ぞ其の所謂る倫理說より一步乃至百步を進めてニイチェ其の人を解說することを爲さゞるや。そも〳〵ニイチェに學說なるものありしや否やは暫く措き、此の誤解せられたる偉人に對して懺悔の意を表せしむるの道、唯其の人物に對して深厚なる同情を寄せしむるの外無之と存じ候。げに君の言はれし如く、愛は理解せしむ。唯此れ是の道、人々相解するの道と存じ候。

去冬以來、芥舟、臨風、竹風、醒雪諸子と兩三回相會せし外、殆ど絕えて先輩知友に面

田銀藏君を送らざりし事等に候。上田君の詞藻は餘り感服せざれども、其の語學のタレントは當代稀有と稱すべきもの、恐らくは英文學科の出身者中君の右に出づるもの無かるべしと思ふは決して吾等が私見のみにはあらざるべし。同君の奉職せる高等師範學校にして若し英語研究の爲に一名の留學生を撰抜せむと欲せば、無論同君を推すべきに、餘り名聲なき某氏の是に代りたるが如きは、頗る遺憾と謂はざるを得ず。内田君は留學の撰には入りたれども、そは歸朝後廣島高等師範學校の敎授たるべき約束の下に於てなりと聞く。是れ亦吾等の、恐らくは君も亦遺憾とする所なるべし。其の學風に於て、其の學殖に於て、將た又學者たるの品性に於て、内田君の如き人當今幾人ありや。同君の如きは實に將來の大學敎授として殆ど模範的人物と謂ふも不可なし。文科大學は氏の如き才を收容せずして抑々何人を收容せむとするや。厪に中等敎員の養成所たるに過ぎざる高等師範學校の如きは到底氏の驥足を伸ばし得べき地に非ず。吾れは是の事に就いても、例の忌はしき情實談を耳にしたれども、筆にするだに厭はしきことなれば省きぬ。要するに、留學生の人才鑑識に就いて、イマ一層の用意を當事者に望むは決して不

依らざるべからざるかの理由に御座候。精しく言へば、其史料、語學等の點に關して本邦人の容易に得難き便宜をば彼等外國教師は有すとの理由に外ならずと存じ候。況や哲學史は思想の發達に關する思索なるを以て考察思辨の力に待つ所多し。是を西洋歴史が客觀的事實に關する所の多大なるに比すれば、本邦人の是を學得すること遙に容易なるものあるべし。されば若し文科大學の方針が漸次外國教師を除去するにあらば、次には必ず哲學科教師の解傭を見るべきことゝ存じ候。君は是邊の利害を如何に觀給ふや。

本年度留學生三十餘名は例によりて發表せられ候。是の事に就きて注意すべきは、從來學校を出たばかりの新學士の少からざりしに反して、今回は概ね既に各官立學校の職員となり居れる故參の顔觸なること、從來文科方面にては哲學關係の留學生尤も多かりしに今回は一名も無きこと。或は從來極めて例少かりし史學科の留學生を三名までも出だしたること等に可有之候。新聞紙は是の撰拔に關して情實多かりし由を報ずれども如何にや。唯吾等の心附ける二三の遺憾を言はゞ、高等師範學校より上田敏君を出ださゞりしこと、若しくは文科大學より內

諸君の學識を疑ふものには非ざれども、博聞强記なるリース博士の缺在を補充して遺憾なきを得べきや否やは、聊か懸念せざるを得ず。言ふまでもなく西洋歷史の事たる、其の史料に關し、國語に關し、又其の人情風俗習慣等に關しては、漫に本邦人の通達を容さゞるものあるや論無し。本邦學士が僅に三五年の留學によりて此等の困難を除却し得べしとは吾等の決して思惟し能はざる所に御座候。文科大學史學料は果してかゝる事情に打勝ちてまでも自今外國敎師を要せざる迄に進步し居るや。返へすがへすも疑惑に堪えず候。不幸にして吾等の疑惑にして正當の理由を有せむ乎、本邦史學の盛衰に關する由々しき大事と存じ候。賢明なる學長並に當事者はかゝる單純なる遺算無かるべきは、吾等の萬々信せむと欲する所なれども、疑惑は遂に疑惑たるを免れず。君は如何に思ひ給ふや。

吾等更に思ふに、史學科にして若し外國敎師を要せずとせば、哲學科の如き無論同一の措置に出づるを可とすべきに非ざるか。哲學科に外國敎師を要するは、主として哲學史の講義の爲なること勿論也。何故に哲學史の講義が外國敎師に待たざるべからざるかの理由は、取も直さず何故に西洋史の講義が外國敎師の力に

なるか。今や臨風野州に下りて吾れは湘南に客となりぬ、彼れは身世の匆劇に處して悠遊の暇を得難く、吾れは病軀を擁して遠く動き難し。たま〳〵來り訪ねらるゝも、座に酒盃なく席に佳人無し。あゝ吾れ何によりてか是の磊塊を放蕩せむ。來らむ年の秋には君歸り來まさむも、かゝる歡會の再びし難く、往時の忘れがたきを想へば、轉た人生遭逢のはかなきを傷まずむばあらざる也。あゝ君よ、笑ひ給ふ勿れ、弱きはげに人の心にて候ぞかし。

* * * * * * * * * *

斯かるよしなき繰言を書き列ねむは限りなき業なるべければ、終りに學界知人に就いて思ひ寄り候事共五六を錄して此の趣味無き長き手紙を了るべく候。

既に御聞き及びも候半か、吾等の文科大學にては此度史學科の外國教師リース博士を解雇致され候。聞く所によれば同科には自今外國教師を傭ひ入れざる方針の由にて、リース博士の補充としては先づ以て箕作元八君教授となられ候。史學科の講座眞に外國教師を要せざるに至りたらむには、本邦史學の一進歩として慶すべき事なれども、こは吾等の少しく危疑する所に御座候。吾等は素より坪井、箕作

して、中に君が潔君に與へたる私信を掲載しありき。吾れば君が其の私信を讀みて一種の感愴に打たるゝを禁じ能はざりき。君は其書の末に吾が事に言ひ及びかの清見潟に快飲して滿腔の血一斗云々の吾が言葉を引きて、『嗚呼是れ病に苦める憐むべき我友の聲ぞかし。予は是の友の顏を或は此世に於て再び見得ざるべきかと思へば斷腸の思に勝えず』と書き給へりき。あゝ我友よ、君も爾か思ひ給ふか、今日まで君に明らさまに言ひしことは無けれども、吾れも亦是の如く思うて日夕憂苦しつゝありし也。唯幸にして病尚ほ太だ重からず、力めて生を養ひ神を勵まさば、尚ほ殘生の君と共に樂むべきものあらむか。唯旦暮藥餌に親みて坐臥すべて意の如くならず。是の如くにしてよしや百歳の壽を保つとも、佳人一夕の歡會に慣せざるを念ふと雖も尚ほ且つ此の生の戀々として捨て難きものあるを覺ゆるぞ是非も無き。君よ、弱きはげに人の心なりき。

忘れもせず、三年以前の八月二十二日のことなりき。君と臨風と吾れと船を同じうして遊びくらしゝ扇が浦の一夜をば君は如何に憶ひ起し給ふぞや。あゝ是の三たりの友の相會して斯かる遊びを再びすることは、此の世にて望み得べき事

としてその改造を期せざるべからず。是れ將た個人自衛の本務にして、同時に又當代の權利たらざるべからず。吾が先に人は自ら悟らざるべからずと曰ひしは即ち是の事の謂に外ならざることは、君の既に諒知せられたる所と存じ候。

* * * * * *

鎌倉に移り越し候てより、はや一年にも間近くなりぬ。東京へは去年の暮このかた一度も行かず、人にも世にも日に疎く相成申候。此地も思ひの外の俗地にて吾等が如きものゝ永く住まるべき處にてもあらぬにや、此頃は駿河灣清見潟の風光寤寐の間に往來致し、曾遊の感興今更の如く想ひ出され申候。何れ是の秋頃にはかの地の客となるべきかと懸念致し居り候ひぬ。病にかゝりてより口に酒盃を接けず、眼に美色を絕ちて、此世さながら禪房の中に等し。あゝ人生酒を絕つて何によりてか行樂せむ。吾れ曾つて君に言ひ送りぬ、還り來まさば願はくは一夕清見潟の海樓に痛飲し、其夜滿腔の血一斗を吐いて死なむと。君よ此語矯に似て矯に非ず、吾れは時として眞に是の如く思ふことある也。過ぐる頃臨風宇都宮より三葉の新紙を送り越し候ひしが、開き見れば令弟潔君が主筆たる松陽新報に

的國家主義に較ぶれば如何。

嗚呼郷國の事傷心すべきもの何ぞ一に是の如く多きや。想ひやるだに心苦しき限りに候。神の物をも其の有となさずむば已まざるカイザルの國に於て個人はたゞ一個の頭顱を有するの外に何等の價値をも認められざる也。是を以て吾れは思ふ、當代文明の革新は社會の上下にゆき亘れる現世的國家主義の桎梏を打破するにあり。此の一難關にして通過せらるべくむば、自餘思想界の事、おのづから順風に帆かけて長江を下るの概あるべくと存じ候。言囁嚅として意甚だ明かならず、たゞ〳〵御推讀を仰ぐの外無之候。

君よ、吾れの國家に就いて爾かく言を爲すは主として個人の爲に候。個人の精靈は無盡藏也。釋迦出で、孔子出で、基督出で、ソクラテース、プラトー、ダンテ、沙翁、ゲーテ、奈破翁出で、バイロン、ニイチェ、日蓮出でたるも、個人は猶ほ依然たる無盡藏に御座候。此の無盡藏の開發する所に人生の精華あり、光榮あり。所謂る人道とは是の開發の結果を中心として無限の繼續を歲時と方處に繋けたるものゝ謂に外ならずと存じ候。されば是の無盡藏の開發を障害する如き生活方法はすべて人道の公敵

國主義に心醉せる英國上下の人心を警攪するあたり、抑々何等の痛快ぞや。而して帝國主義の政府が此の如き言論の自由を容認するの雅量もさることながら、是の國民的虚榮心に對する大打擊に對して大喝采を酬ひたる國民に到りては、覺えず拍案三歎を禁じ得べからず候。げに君の言はるゝ如く、英帝國の大いなるは其の殷富に非ず、其の軍備に非ず、實に是の國民あるに依る也。君よ、試に同一の事件を移して我邦に擬せば如何。

わけて興味あるは聖ポール寺院に於ける英皇平癒の祈禱に御座候。敎會の祈禱が英國の社會に於て一種の儀禮以上に如何ばかり國民の眞信に接觸せるものなりやは、吾が審にせざる所なりと雖も、君の報ぜられたるものゝ如きは眞に吾等の見て偉大とする所也。日の沒せざる帝國の君主を病に惱める汝の僕と稱し、彼れの重患は彼れの悔悟を强めむと言ひ、彼れをして其の殘生を汝の畏れと光榮とに捧げしめよと言ふが如き、是れ即ち一切現世の虚榮を排無して靈界の威嚴と光明とに事へしむるの一大告敕也。かゝる偉大なる信念に基づきて立てられたる國家は幸ひなる哉。あゝ君よ、是を以て君主神權の上に建てられたるルイ十四世

悟を有するに非ざるよりは、一切の行動すべて無意義に終らむのみ。畢竟デカールトの哲學の如く吾等は先づ自己の存在に關する自覺を喚び起して玆に其の立脚の地盤を確めざるべからず。君よ斯の如くにして世に多くの驚きと疑ひと苦みと惱みとあらむ。唯是の驚き疑ひ苦み惱みありてこそ初めて眞摯なる人生の解釋はあり得べし。君の所謂る愛の福音も亦是の如くにして初めて宣傳し得む。兎も角も吾れは吾が思想界の平氣を以て其の根本的病弊と思惟する也。君は如何に思ひ給ふや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

七月五日の君の御書は是の狀を認むる數日に落手仕候。英皇不豫の事に關して大英國の前途を豫想せられたる仔細は、又あるまじく剴切痛快の御論と奉存候。ミセス・ベサントの印度帝國に就いての演說を假りて我邦にあらしめば如何。吾等は是の想像によりて一の大なる敎訓に接したるの感無き能はず。全帝國の空前絕後の誇りとする戴冠の鴻典を目して無益なる觀世物と罵倒し、苟も國家の天職に對する明白なる自覺に基かざる一切の權勢と榮華とを無意義と貶して大帝

今の思想界の煩瑣と平和と單調と凡俗とは、何時まで吾等を欺き、吾等の精神に安慰を與へ得べしとする歟。吾は平和を持ち來せしに非ず、子をして親に離れしめ妻をして夫と分れしめむが爲也と呼ばゝり得るものゝ出でたるは、やがて斯かる時世には非ざりし乎。君よ、偉人の出づるまでは世は常に平和なるものぞかし、されどその平和は命なき無事也、毒酒に醉ひ倒れたるものゝ眠り也。吾れは目覺めたらむ時の苦惱を想ひて、一日も早く此の平和の破却せられむことを望むの情に勝えず。眞の晴天は暴風の後に來るが如く、戰鬪を經ざる平和は眞の平和には非ざる也。

所詮は人々自ら悟るの外無しと存じ候。自ら悟らむと欲せば先づ自ら疑ふに若くは無し。個人は個人の存在を疑へ。其の何の爲に既に生き、又何の爲に將に生きむとするやに就いて眞摯なる考察をめぐらせよ。是れ最も古き疑問にして又最も新しき必要也。社會も亦其の存立の根據を疑へ。殊に國家は其の憲法と法律と廣大なる版圖と強盛なる軍備とを擁して何の爲に存在するか、又存在せざるべからざるかを疑へ。個人も社會も國家も先づ其の天分に就いて明白なる覺

飾するの外、他事無げに見え候こそかへす〳〵も無念の至りに候へ。人は輙ち口を開いてトルストイを稱し、ゴルキイを讃すれども、彼等を產するに至りたる迄の魯國が、現代文明に對して如何ばかりの苦悶と健鬪とを經由せしやを考ふるものあらざるなり。君よ等しき者のみ等しき者を解し得べし。此の凡俗の社會に醞釀せられ絕えて人生の疑惑に陷りしこと無き時勢の循兒に、爭でか彼等を解し得べき精神的素養あるの謂はれあらむや。唯々標榜の新奇を喜び、漫然新思潮を口にするもの、そも〳〵何等の無意義にて候ぞや。されば褒むるもの貶するもの畢竟一時の流行にして、やがては吹く風の何處をそれと跡とも無く消え失せ候ひなむ。イブセンも然り、ニイチェも然り。吾れは彼等と共に是等の先哲を口にするに忍びざる也。ニイチェに就いては君の書にも見えし如く、到底部門的學究先生輩の窺知を許さゞるものありて存す。彼を目して哲學者とし、倫論學者となし、乃至詩人修辭家とするもの、旣に人々相解する道の第一義を逸す。吾等は此の偉人の爲に知己少きことを悲むの情に勝えず候。

嗚呼君よ、文明の苦痛は斯かる時世に於て最も深く感ぜらるゝものに非さるか。

天皇神權說は今日に於ても尚ほ青年法學者の頭腦を支配し居るは意外にも事實に御座候。祖先教に基ける國體論は、國家主義と並びて、倫理學者の金科玉條たるとも依然として故の如し。乾燥無味なるヘルバルト等の教育學は今日尚ほ教育者の頭を苦め、年々地方村夫子によりて開催せらるゝ夏期講習會には例によりて教育倫理の少年學士多く聘せられ、教育社會の大問題は依然として公德養成法とか、言文一致とか、何々教授二十五年勤續の祝賀會とか云ふ樣のものなること、是れ亦申すまでも無之候。宗教は勸財と撰擧の道具に使用せらるゝの外、何の活動も無く、近くは本願寺の騷動の如き、毫も地方豪家の相續爭ひの私事に異ならず候。新佛教と云ふが如き運動は一時青年僧侶の會同の外に何の意味もなく、新宗教の論議は昨年來喧しかりしが、アウンハラバ、濱口熊嶽、乃至半僧坊、長生稻荷等の繁昌の外、教界又何等の新現象を認めず候。一切斯界の事、眞に胸に惱みある者の眼より見れば馬牛相關せざる事のみ。要するに太平此の上も無き事に御座候。

何れの邦に於ても革新の思潮は文藝の上に現はるゝを常とするは君の知らるゝ所也。此の邦に於ては然らず。文藝は徒らに凡俗なる現代を註釋し、讃美し、裝

て云々するは吾等の勝ゆる所に非ず(此の老朽學者の中に尙ほ壯年なるもの少からざるは君の知る所の如し)。新進の青年學者に就いて見るも是れ唯老廢者の年若き者たるの外一も清新の理想を抱いて時世の改造に心を苦むるもののあるを見ず。青年の禍福たる懷疑の味は彼等の嘗試し及ばざる所、弱冠學に志してより證典死書に傾倒するの外、毫も活ける人生の疑惑に逢着するの機會を得ざりしを以て、三五年にして其の學を卒へたるもの早く既に村學究となり、道學先生と化し了し、平板凡俗の倫理說などを振廻はして世上又疑惑なるものゝ存するを知らざるが如き爲するもの比々皆然らざるは無し。あゝ君よ、昔者須梨盤特は三箇年に十四字を記せざりしが、尙ほ佛に成りぬ。提婆達多は六萬藏を誦じて而かも無間に墮ちたるに非ずや。安住の一念を離れて天下の知識を集むるも沙上に樓閣を城くに等し。彼等空茫にして自ら悟らず、偏に知を外に求むるもの、吾等より見れば何ぼう無意味の事に候はずや。況してや自ら僭して人に敎ふるの愚を料らず、年三十にも滿たざるに早くも老先生の態を成して諄々乎たるに至りては、捧腹絕倒の限りと存じ候。

は深く察すべきことゝ思ふ也。況や妙宗の教義に逆化下種など云ふ妙用ありて折伏によりて征服せられざるもの、尙ほ反抗の因緣によりて救濟の緒を得べしとなすが如き、其の說の如何は暫く措き、亦是の問題に關聯して一考すべき事と思ふは如何に。

日蓮上人に關しては言ふべきこと尙ほ甚だ多しと雖も、本書の主眼は君に鄕國の現狀を述ふるに存するを以て暫く詳細を他日に讓るべく候。

* * * * * * * * *

本邦思想界の現狀に就いて何事をか君に言ひ送るとせば、そは吾が不平を書き列ぬるに外ならざるべく候。されど吾等の如き時代の畸形兒よりその不平を取り去らむは、取りも直さず其の言論を取り去るに等し。吾等は此の不平を述ぶるに當りて最も尊大なるべきことゝ存じ候。

一言以て是を掩へば、本邦の思想界は餘りに平氣に御座候。疑ふべきこと、怪むべきこと、驚くべきこと、怖るべきこと、憂ふべきことの充ち滿てる此の時世に於て、彼等の餘に晏如たるには呆るゝの外無く候。舊時代の遺物たる老朽學者に就い

らず。彼れは釋尊に對する絶對的歸依の結果として法華爾前の諸宗門を邪教と斷じ、隨つて其の謗法を破摧するを以て濁世救護の第一事と爲しぬ。是に於てか其の事業の第一着手として嚴烈なる折伏の要を見る、所謂る自然の勢には非ざるべき乎。折伏は攝受を豫想してこそ始めて意味もあれ、攝受は即ち慈悲の用に外ならず。即ち日蓮の宗義よりして見れば、大なる折伏は大なる慈悲を待つて初めて現はれ得べきものには非ざる乎。彼れが涅槃經の文句に擬して、『一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦也』と謂ひ、又『二十八年の間他事なく南無妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れむと勵むは、此れ即ち慈母が赤子の口に乳を入れむと勵む慈悲也』と謂へるもの、斯くして初めて生命ある文字となり得べしと存じ候。君は是の間の消息を如何に解し給ふや。吾れは茲に佛教に所謂る慈悲と基督教などに謂ふ所の愛との間に概念の差別あることを忘れたるに非ずと雖も、日蓮に就いて愛を言はむものは先づ是の慈悲を認むるの要あるべし。吾れは日蓮の折伏の蔭に大なる慈悲ありしことを疑ふ能はず。彼れが其の生國の滅亡をまでも忍受して妙法の功德を民衆に頒たむとしたるの衷情

を有せしものには非ざりき。吾れは唯客觀的に見たる信仰、もしくは教理の實質を外にして、形式上より日蓮の人格に就て其の崇高偉大を讃歎せるに候ひき。玆に形式的と云ふは少しく語弊あるが如し。然しながら釋迦にまれ、基督にまれ、其の教理の悉く今日の學理的批判に勝ゆべしとは、恐らくは何人も思はざる所ならむ。取も直さず、其の人格の崇拜は形式上に憑據するもの多きを知るに足るべし。是の意味に於て吾が日蓮に對する崇拜を形式的なりと云ふに於て吾れは何の異存も無之候。這般の斷案少しく概括に失するが如し、或は他の誤解を招かむことを恐ると雖も細說の遑無きを如何にせむ。唯々君の判讀を希ふの外無之候。

是の如く述べ來りて尚ほ日蓮の爲に一事の君に言ふべきもののあるを思ふ。そも〳〵日蓮の立場より見れば、其の嚴烈なる折伏は廣大なる攝受の準備として一種の慈悲の發表として見るべきものには非ざる乎。吾等の見る所によれば個人としての日蓮は眞に慈悲深き人なりき。所謂る柔情俠骨並び具はるとは眞に彼に於て見る所の性格にて候ひき。去りながら既に天下の民衆に對し、妙法弘通の大導師として立ちたる彼れは、妙法的理想に基づきて是の民衆を改造せざるべか

合の謂ひ也、精しく言へば自己の心の中に他の心を攝容し、若しくは自他互に相渾同するの謂也。かく一切己れに異なるもの丶存在をも認容し、是に臨むに無限の同情を以てするを以て愛の極致とするの意味に於て、日蓮の折伏主義に幾何の愛ありしや。斯かる意味に於ての愛の福音は彼れの教理に存せしや、否や。是れは獨り君のみならず、吾に於ても耻かしながら尚ほ未了の問題に御座候。一切法界を一心の中に觀せむとする佛教的唯心說、或は台家の所謂る一念三千の無差別觀、若しくは妙宗獨造の知解と稱する現象即實在の事觀の妙法、——是等の教理は君の既に熟知し給ふ如く、平等差別の二諦を融合して吾等の實在に深遠なる意味を與ふる其の形式に於て頗る愛の極致に似たるものありと雖も、吾れの見る所によれば、そが關はるところは主として知解の範圍に存するに非ざる乎。愛の愛たる所以の意志の活動としての融合は、尚ほ此の境地に存せりや、否や。吾れ少しく惑ふ。是を以て吾れはワグネルの愛は日蓮の教理にも存せしやと問へる君の疑ひを是認し、君と共に世上の日蓮學者に向つて其の解決を希望する者に候。

さりながら實を云へば是の疑問は從來吾が日蓮崇拜の因緣に於て多くの重み

國土なりとなし、妙法は是の國土を中心とし一閻浮提に宣布せらるべしとの信念を有せしが、そは宗教を以て國家體制の一具となし、若しくは國權結托を以て立教の基礎とせむとせし世に所謂る國家的宗教と同一視すべきものに非ずと存じ候。是の事の仔細は先頃本誌に掲げし『日蓮上人と日本國』てふ拙論に略々盡したりげに覺え候へば、君にも既に御領解の事と存じ候が如何にや。　吾れは己れの信仰する所の眞理に無上の價値を置くことを以て宗教家の第一義と信じ、既に是の第一義を立てたる後、世上の一切の事物を此中に攝取するところに宗教其物の妙用は存すと思惟す。　日蓮は是の點に於て吾が理想的宗教家に近きが如し。　君の見る所如何にや。

君は又日蓮の折伏主義が主として排他的なりしを惜み、ニーチェの個人主義よりもワグネルの愛の福音を擇ぶと同一の理由によりて、多くの同情を日蓮の事業に寄する能はざる由を述べ給ひぬ。　こも亦極めて自然の疑ひと存じ候。　是の如く疑ふは獨り君のみならず、世上の識者、宗教家等の苟も日蓮に快からざる者のみならず、斯く言ふ吾れ自らにも亦此の疑ひ無きにしも非ざる也。　想ふに愛とは意志融

日蓮上人に關しては、君と吾れと不幸にしてその觀る所を異にすれども、是れ唯日蓮てふ一客躰に就いての見解の差異にして是の見解の由來する各自の精神に就いて毫も乖離する所無きことは、君と吾と先づ以て互に諒とすべき所と存じ候。君は自ら特に日蓮を研究したる事無しと言はるれども、今の世に日蓮を批難する如何なる識者の言も大躰に於て君の說を出づること能はざるべし。實を言へば是の疑は吾れ自らの胸中にも存する也。されど吾は是の疑ひを解除すべき他の有力なる事情によりて上人の人格を醇化し得たるを以て無上の喜びを感ずるものに候。好んで異を樹つるには非ざれども、君の疑問に就いて少しく述ぶる所あるは敢て君の意に反する事にもあらざるべくと存じ候。事體素より重大にして吾が信解の力に及ばざるもの多々あらむも知るべかず。他日もし其の謬りを悟り得ば、吾れにとりて此上の幸はあらざるべくと存じ候。

君が日蓮に對する批難の一つは、彼れが大乘有緣說によりて、謂はゞ國家主義の宗教を打立てむとしたりと云ふにあり。然しながら、こは一考を要すべしと存じ候。如何にも日蓮は東方有緣の小國を以て後々の五百歳に於て上行菩薩出現の

に解せらるゝの期無かるべし。去りながら眠れる人は何時かは醒めむ、迷へる人は何時かは悟らむ。天の靈光尙ほ此の國に空しからずむば、吾等の言葉に聽くことの晩かりしを悔ゆるの時機は早晩來らむ。吾等君と共に暫らく野に叫ぶ人たらざるべからずと存じ候。

八月の太陽紙上に掲げたる君の開書に就いては、紙上にも一言妄批を加へ置き候如く、まことに近來の快論、感興不淺候。ショーペンハウエル、ニイチェ、ワグネル三者の思想を同一系統の精神發達と觀せられたるは、恐らくは先人未言の卓見か。三子者若し靈あらば地下に微笑すべくと存じ候。誠に是れ現代文明の弊竇に對する靈界の光明とも見るべきもの、將た又人類精神の發展上必然の道程にも候歟。吾等幸にして人生の大疑に逢着して、やうやく先聖の眞義に參せむとするもの、君の此の解説によりて得る所少からざるを覺ゆるはこよなき仕合と存候。ワグネルの仔細は今方に研鑽の途上にあり、君と共に其の高調の遺韻を樂むの日亦遠きに非ざるべき歟。

*　*　*　*　*　*　*　*　*

べき。吾れは是の覺悟を以て君と共に人生の歸趣に安住せむことを希ふものに御座候。

* * * * * * * * *

近來鄕國の事、吾等の意に滿たざるもの甚だ多く、君にして若し此地にあらば必ず吾等と同一の感を懷かるべしと存じ候。一々この不平を錄して君に送らむは煩はしけれども、筆に任せて其二三を書き列らぬべく候。

『何故に日本人は斯く少しの苦悶と煩惱とを有して優々たり得るや』。君の疑はれし此の疑問は早晩日本人の自覺を喚び起すべき力を有し來るべしと存じ候。君が三月の開書はげに警世の大文字にて候ひしが、此邦の人は如何ばかりその眞意を解せしか。或は文に悲哀の調あるを言ひ、或は語に慷慨の意あるを見て、輙ち皮相の評を下せるの外、その中に包含せられたる人生の宿疑に就いて眞面目に顧慮せし人幾何ありや、覺束無し。今月の太陽に載せられたる五月の分も果して同一の運命に遇はざるべきや、懸念の至りに候。所詮は現代文明の苦痛を色讀し、その解脫の爲に中心の煩悶を經たるものに非ざるよりは、斯かる高調の文字は長へ

君と別れてよりはや二年なかばを過ぎぬ。あはたゞしくも經つ月日かな。吾れも亦病の中にもはや二年を暮らし候よ。是の間、身世匆忙として相移り、君も吾れも共に人生の宿疑に陷りぬ。世に離れ、人に離れ、さては二十年來の外緣に離れ、吾れは玆に久しうして己れ自らの友となりぬ。あゝ君よ、君も亦この思ひをばよも忘れ給ふまじ。是れまで他人の意味を餘りに多く知り過ぎたる吾れは却て吾れ自らの意味をば知らざりき。人生の第一歩たるべきこの自覺を離れて、良しや萬卷の書を讀み古今の知識を蒐めたりとて吾れに於て何の關はる所ぞや。吾れは自ら此の覺醒を貴しと叫びぬ。

此の間の消息を今更君に語るの要はあらじ。吾等はたゞ此の自覺に本づきて吾等の世界を建設するの務ありと存じ候。されど君よ、吾等の世界は尚ほ頗る遠かるべし。少くとも吾等の生國にて吾等の解せらるゝは頗る難事なるべく候。唯意志の存する所に實在あり。君と吾れと此世に存せむ限りは世は尚ほ吾等の物たるを妨げじ。君よ吾等は互に心强かるべく候。毗藍の風吹き荒めども、尚ほ消し難きは眞信の一燈ならずや。そも何者の王者か能く吾等の獨立を危うし得

感慨一束

（姉崎嘲風に與ふる書）

先頃よりの重ね〳〵の御状身にしみ〳〵と喜ばしく存じ候。春以來此方よりははか〴〵しき御返事も申さゞりしが、兎角は病軀事に勝えず、審に此の愁思を抒べて君と共に憂を分たむと念へども、情迫り胸悶へ、筆を落して文を成さず。何れの日か此の感懷を風露に托して君と共に自然の中に優遊するを得ん。君よ、悲しきは吾等が身の上にて候ひけるよ。病は年と共に加はれども、信は獲難く、迷は深し。徒らに惆悵して低回すれども、道遠くして日暮れなんとす。この旦夕の命を以て何れの時か色心相應の信徒となり、如說修行の行者となり得べき。再々の君の御状、あゝ吾れ淚を以てそを繰返せしこと幾度ぞ。同じ惑ひに身を苦めて、君は早くも解脫の途に就き給へれども、吾れは尙ほ依然たる吳下の舊阿蒙。力めて書を讀み道を尋ぬれども、見思の惑旦暮に積もるのみ。所詮は沙を絞るに油無く、石を磨きて玉に似ざるか、あゝ吾れ又誰をか恨みとせむ。

ぞれ意見あるべし。予は唯予の見聞を記して諸君の參考に資するのみ。

兎にも角にも諸君は日蓮研究會を起さゞるべからず。蟻の爲に十年を費やしたる學者あるにあらずや。日蓮を研究するは日本歴史の寶庫を握る也。諸君の生國の榮光を覺る也。祖先を通じて諸君自らの名譽を増す也。何より貴きは是の偉人によりて吾人の未だ知らざる人生の大意義の覺悟に到達すること也。即ち是れ他を研究するに非ずして自らを修養する也。若し夫れ歴史上、宗教上、文學上の餘益に至りては素より一にして足らざるべしと雖も、上に記する所に比すれば蓋し千の一なるのみ。

（卅五年八月）

の邊を以て一度び彼れに接近せざるべからず。

予は是の目的を以て全國處に隨つて諸君が日蓮研究會を起さむことを希望す。苟も若干の同志者だにあらば其の方法の如きはおのづから成立せむ。唯斷じて決心せよ。然らば事業の半ばは既に成れる也。

唯獨學の人の爲めに予の心附ける研究方法を示さむか。日蓮研究に際して先づ要するものは高祖遺文錄也。順序としては初めに上人の傳記を詳にするを可とせむ。傳記には古來註書讃、別頭統記、高祖年譜、日蓮大士眞實傳等あれども、平明にして周密なる、眞實傳を最も勝れりとすべし。遺文錄も漫に釋了し得べきものに非ず。釋義の參考としては錄內啓蒙、考文、祖書綱要の數種あれども、後者最も妥貼の目あり。而して是等傳記御書を通じて一代佛敎の概念を預想するを以て、研究者は隨時一代大意抄、若しくは天台四敎義の如き書によりて佛敎の大意を解し、且つ殊に法華經を精讀せむことを要すべし。法華經は古來註釋甚多く、釋文概ね本文よりも解し難し。予の經驗によれば、特殊の文學の解釋の外、すべて本文のみによりて自ら思量するを最も好しとす。然れども是の如きは學者によりてそれ

のみ能く等しき者を解す。予は諸君と共に彼れを解するの人たるを得は是の上もなき幸ひならずや。諸君は須らく予に信ずる所あらざるべからず。

既に予に信じて日蓮を偉人なりと假るさば、諸君は予と共に是の偉人を研究せざるべからず。楠正成、豊臣秀吉は餘りに善く知られたり。然れども誰れか吾が日蓮を言ふものぞ。言ふものは是れあり、然れども其の人物は甚だ誤解せられたり。吾人是を遺憾とす。

予を以て日蓮宗の信仰を諸君に强ゆるものとなさば是れ大いなる誤也。予は信仰の大事なるを知る。諸君自らの證悟を外にして、予は諸君に與ふべき何物をも有せざる也。予の勸むる所は研究のみ、批判のみ。諸君は先づ予の志を諒とせざるべからず。

今の世の腐敗は道學先生の俗惡なる學說の能く救治する所に非ざる、諸君の既に知る所なるべし。願はく予に信ぜよ、若し日蓮の精神によりて一世を率ふること能ふべくむば、當代の風氣必ず一變せむ。彼れの精神を是認すると否とは予に於て必ずしも强ゐずと雖も、苟も予に信ずるの諸君は其の道學先生の講義を聞く

鎮ありて、何れも著書少からず。日蓮上人の御書が是等の間にありて嶄然として他の即接を許さゞるは猶ほ泰山の群峯に雄枕するが如し。人物の眞價値のおのづから文字に現はるゝや、是の如きものあるを見るべし。

◎吾は歷史上の順序を追うて吾が好める文章を列擧する考なりしが、計らずも日蓮上人に引きかゝりて多くの紙數を費したれば、今回は先づ是れにて筆を擱くべし。

（卅五年二月）

日蓮研究會を起すの議

予は全國の敎育家並に學生諸君に向つて茲に日蓮研究會を起すの議を提出す。予を信ぜよ、日蓮は予の知れる日本人中の最大の偉人也。予は和氣淸麿、楠正成、乃至豐臣秀吉を生じたる日本を左迄大なりとは思はざれども、日蓮を生じたる國土は實に生れ甲斐のある國土なることを思ふ。吾人の祖先の中に日蓮の如き人物を有することは、吾人が世界萬邦に誇稱すべき所也。

日蓮を大ならずとする人を予は何の妨ぐる所無かるべし。然れども等しき者

地位を設けるもの、辭意暢達にして文理明晰なり。佐渡以後の御書中にては上人の最も意を籠められし者の一つなるべし。報恩鈔も亦開目、撰時の二鈔と並び稱せらるゝ大文字にして語簡にして意深し。彼の半段は舊師道善房に對する報謝の情を述べられたるものにして、恩愛の情盡せり。身延山御書は上人晩年の心境を叙せられたるもの『誠に身延山の栖は千早ふる神も惠みを垂れ、天下りましますらむ』の書き落しより、鷲の山風の御歌に終るまで、まことに神々しき大文字にして上人の偉大なる人格はおのづからその間に磅礴せり。もとより長明、兼好なんどの小人生觀に較ぶべくもあらず、正に是れ人生自然を併せて宗教の光に醇化したるもの。波木井殿御書は上人最後の消息文にして六十年の大なる生涯を追懐するに足るもの也。

◎上人の文を論ずる、おのづから別種の用意を要す。玆にはたゞ本誌の讀者の爲に數言の注意を記せるのみ。鎌倉の時代には僧侶の手に成れる文字尠からず。淨土には源空、眞宗には親鸞あり、彼の撰擇集、此の敎行信證、共に見るべき文字也。栂尾の明惠が法然に對する摧邪輪などもあり。其の他華嚴には凝然、天台には慈

◎法論の大文字としては開目鈔を推すべし。此書は喩へば大瀑布の天より落つるが如く、始より終まで段落なく、章節なく、上下兩卷を通じて一氣にして成れり。凡そ論難の文章としてかばかり雄渾を極めたるは吾が未だ曾て見ざる所也。殊に冷靜なる理論を叙說のみに非ずして、紙背に燃ゆるが如き熱情を藏す。談理に托せる一大抒情文とも見るべし。『詮ずる所は天も棄てよ』よりかの三大誓願を以て結べるあたりなど、音韻錯落の間に天來の師子吼を聞くべし。貴しとも貴し。

◎如說修行鈔は法華折伏の宣戰狀とも見るべき文にして、詞急にして意迫まれり。節を拍て是を誦すれば骨肉飛動の感あり。無上の權威を有てる者の言は自づから是の如くなるべし。敎行信鈔は其弟子日進に與へて法門論難の覺悟を示せるもの、如說修行鈔と並びて雄壯比ひなし。『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れ〳〵の經々と法華經と、勝劣、淺深、成佛、不成佛を判せむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず、何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をや、まして權宗の者どもをや』と云ふが如きは、日本文學中に他に比倫を見ざる文字ならずや。

◎撰時鈔は佛法東流の次第より、末法弘通の因緣を明にして歷史上より上人の

ならではあり得べしとも思はれず。

◎高祖遺文錄三十卷の中にて吾が最も愛讀するは種々御振舞御書、如說修行鈔開目鈔、撰時鈔、佐渡御書、光日房御書、敎行證鈔、報恩鈔、身延山御書、成佛用心鈔、生死一大事血脈鈔、賴基陳情書、波木井殿御書等也。觀心本尊鈔は敎相上本化妙宗の祕鑰として崇めらるゝ一大文字なれども、理義深邃にして今の吾には尙ほ未だ解し難ぬるふしあるを恨みとす。其の他の御書、就中消息文は上人の事蹟と對照して何れも何れも興會盡し難し。

◎學識宏遠なる上人の物し給へる文なれば、言々典據ありて、無學なる吾等には會通の程頗る易からず、大かたは盲人の巨象を探るにも似たらめども、流石に人の心の誠は高きも卑きも變りなければにや、言ひしらず首肯かるゝふしも少からぬぞ有り難き。中にも本誌の讀者諸君に薦むるは種々御振舞御書也。此書は龍の口の法難を中心として文應の初めより身延山の幽棲に到るまでの上人一代の事蹟を自叙せられたるものにして、文解し易く歷史上の趣味さへいと饒し。吾が前號に揭げたる況後錄は、拙惡言ふに足らざれども、この御書に擬して作れるなりき。

けり。吾は玆に上人の文を論ずるには非ざれども、序なれば思ひつける二三節を左に記して今の學生諸君に硏究の枝折を予ふべし。

◎『佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台、南岳、妙樂、傳敎等だにも未だ弘め給はざる法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の初に一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先がけしたり。若黨共二陣三陣つゞいて迦葉、阿難にも勝れ、天台、傳敎にも越えよかし。僅の小島の主等が威さむに恐れては、閻魔王の責をば如何にすべき。佛の御使と名乘りながら、臆せむことは無下の人々也。』

◎這は種々御振舞御書の首めに、鎌倉殿の迫害を慮りて、弟子檀那を誡めし文字也。凡そ本邦古今の文章中、雄大崇嚴に於て是の一段を較ぶべき者ありや。覺束無し。其の觀念の偉大なる、其の文詞の悲壯なる、朗讀一下すれば肉搖き骨鳴るの思ひあらずや。僅の小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき、佛の御使と名乘りながら臆せむとは無下の人々也と結びたる如き、一字一句金輪際より生ひ立てるが如し。日本文もて是れ以上の力ある文章を書かむは神業

れども、日蓮は傳敎の蟲食ひなどゝ罵倒せる外に文章に就いて一言だも言はず。近年日本文學史の著述は一二にして、足らざれども、三上、高津兩氏の著を初めとして上人の名をだに掲げざるが多し。坊主の書ける物なれば讀まずと云ひて國文學者の申譯は立つべきや。鎌倉時代隨一の大文學を念頭にかけざりしは、國學者因襲の僻見に本づけりとは謂ひながら、不覺も甚しと謂ふべし。

◎上人素より文章家ならず上人の文章などゝ云ひ立てむは其の人の志に背ける業ならめど、而も大文章たるの事實は默すべくもあらず。げに〳〵上人が文章家ならぬ事實こそはまさしく其の大文章家たるの因緣ともなりしならめ。

◎上人の文章は文字章句の排列と謂はむよりは、寧ろ肝膽を活ながら白紙の上に塗りつけたる者と謂はむかた妥當なるべし。所謂る文章家の眼より見れば字句整はず、文辭粗厲なるものも多かるべし。されど其が人の心を動かすの一段に及びては、天下の文章何物か是に及ぶべき。上人の文は文に非ずして精神也。人は文字を見ずして血淚の痕を見、章句を讀まずして師子吼の響を聞く。斯くても文章の極意は達せらるれ、人は何が故に巧ならむとは力むるぞ。げに文は人なり

◎總じて鎌倉時代の文學には吾等の趣味に適へる文字いと多し。王朝の如く古からずして而かも朴古なる所あり、江戸時代の如く新からずして而かも清新なる所あり。音近くして解し易く、意切にして情應ふべし。調に緩急の自在ありて氣勢の抑揚また意のまゝ也。讀むべく、語るべし。若し文範を古代に求めば吾れは夫れ鎌倉時代を取らむか。

◎此時代の物語に右に擧げたる外尙ほ義經記、曾我、鳴門中將、秋夜長物語等あれども、まづは平家と太平記とを推すべし。其の他鴨の長明に方丈記、四季物語などあり、西行法師に撰集抄あり。或は十六夜日記、東關紀行の如き、降ては兼好法師の徒然草等もあり。是等は世の人十中の七八は誰も知り且つ讀める所なるが、茲に前掲の諸書に露劣るまじき、或點に於ては空前絶後とも云ふべき特色を有する一大文學この時代に現はれたることを百中の九十九人までは絶えて心附かざるらし。日蓮上人の文章是れ也。

◎上人の文章は加茂眞淵が嘗て徒然草にも優れりと評せるを外にして、他の國學者等の注意せざる所なりき。平田は上人の遺文の一部を讀みたるに相違なけ

◎所詮は王朝の文字は吾等野人の卑しき機根には不相應なる上品高位のものなるらし。鎌倉の武士時代に降りては流石は吾等の趣味に近き文章も出でにき。

◎先づ吾が好めるは保元物語也。平家の樣には潤飾無けれども、文意誠實にして語調亦雄壯也。白河殿夜討の前後の條など際立つて面白し。平治物語も同作者の筆かとも思はるれども、前のに較ぶればやゝ見劣りせらるゝ樣也。

◎平家物語の妙文は言ふまでも無し、祇園精舍より六道の卷まで一篇こと〴〵く無韻の詩、時代が時代だけに筆も躍り墨も湧きたるらし。文情双至とは正に此物語を評し盡せり。俊寬の條、重盛諫言の條、都落の條なむど心ゆくばかり也。吾が常に愛づるは中にも維盛都落の條也。弓にて簾をさつと掻い上げてのあたりは幾度讀みても飽かず面白し。源平盛衰記は事は繁けれども文は劣れり。平家には文に過ぎたる所もあれども、またさらでは到り難くぞ覺ゆる妙もあり。但し人の熟く知れる事なればこと〴〵しく言ふまで無からむか。

◎太平記も吾が愛讀書の一つ也。名文章の限り無く多き中にも、わけて笠置夜攻の條に振鈴の響きのあたり、或は阪本の戰の條など絕妙の文辭と謂ふべし。

が眼に涙ありしことなし。書き錄るせることの中には誠に人生の悲慘を極めたるものもあれど、隆能が繪物を見たらむ樣に、たゞ恍として夢中の觀にふけりたらむに似たり。げに解し難ねたる爲なるべし、されど吾は疑ふ、世にそを解し得たる人幾何かあるべき。吾れまことにそを疑ふ也。

◎言奇語麗を以て取らば知らず、吾が見て名文とする所は、吾が精靈に響きあるもの丶謂也。吾が人格に活ける衝動を與へ得る者の謂也。其の血と涙と生命とが、やがて吾が血と涙と生命となり得る者の謂也。區々たる聲調排列の巧拙の如きは所謂る文人者流の遊戲三昧のみ、吾が好む所は則ち與からず。

◎今の文士、殊に青年文士の一輩が好で擬古の文體を弄び、冗漫纖弱なる王朝の詞藻を列ね以て優雅を誇るもの丶如きは、尙ほいまだ戲文三昧の境にあるもの、文章の眞趣味とすること頗る遠しと謂ふべし。

◎榮華物語、三鏡の如きも吾が好む所に非ず。國文として見ればその惡文たることに於て源氏と伯仲の間にあり。昔物語、古今著聞集等の文章は是等に較ぶれば力もあり、情もあり、吾等には解りやすくして面白し。

たどり行くも、苦しみのみありて面白味とては更に無し。ところ〳〵には流石に捨てがたき妙文字無きにしも非ざれども、砂の中より黄金を拾ふの勢にも似て氣惱し。吾れはかくて源氏にはとても機根の無きものと吾身を諦らめ、爾來はたゞ吾が專攻の事柄に關する折にのみ已むなく史料として手に執ることゝせり。吾は、國文家は定めて難じ給はむ如く、げに源氏を解し得ずしてそを大惡文と罵る者なりけり。

◎されど源氏を解し得ざるが故にそを大惡文と罵るは吾にとりては正當の判斷なりと思はるゝは如何に。吾は世界の凡ての人が一同に源氏を名文〳〵と讃頌するとも、吾が中心に於て爾か感せざる限りは獨り惡文〳〵と罵言すべし。解せざるは汝の罪なりと曰はゞ曰へ、解せられざるは源氏の罪也と吾は答へむ。讀者は吾が言を理不盡なりとばし一概に思ひ給はで、つらつら自ら省みて其の是非を己が心に尋ねらるべし。

◎源氏の文はまことに優しき、麗はしきみやびたる文なるべし。されど其の響はわが胸に應へざる也。五十四帖みな戯れの文には非ざるべきに、そを讀みて吾

吾が好む文章

◎是と曰ふに非ず、非と曰ふにも非ず、たゞ吾が好むところと曰ふに於て聊か仔細あるまじき也。吾れは奥州の陲に人となりて都人のみやびたる心など露もたざる男なれば、意誠語朴の外に文章の美を解せむと思ひもよらず。大かたは世の物笑ひとなるに過ぎざらめども、數多き讀者の中には、げにもと首肯かるゝ人無きにしも非ざるべきを頼みにかくなむ。

◎我邦にて名文と云へば、先づ指を源氏物語に屈するが常也。されど吾は源氏を好まず、却てそを古今の大惡文の一つに數へたく思ふ也。かく曰はゞ國文家は冷笑うて言はむ、源氏の惡しきには非ず、汝の解し得ざるが惡しき也と。げにさもありなむ。有體に曰へば、吾れは是れまで源氏を讀まざれば國文を語り難しなんどゝ訓へられて、其を手にせしと幾回なるを知らず。されど何時も半ばにも及ばざるに根疲れ氣倦みて卷を捨てざること無かりき。所詮は世を隔てたる其の文體のいかにも解し難ぬるのみならず、たま〳〵訓釋義疏の助けによりて覺束なく

合に於ても正々堂々の論陣を張り天下に檄して法論の對決を求めたり。彼れは常に公言して曰へらく、我れは眞理の在る所に就く。我が說誤らば我は直に是を捨てむのみと。されば開目鈔の三大誓願に序して『我が義智者に破られずば用ひじと也』と公言せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◎此種の同異は尙ほ甚だ多し。畢竟是れ其の立教の精神のおのづから然らしむる所にして、妄に輕重是非の批判を許すべきに非ず。若し夫れ東西の偉人を取つて漫に其の異同を列擧するの無用の事たる、素より是を知る。唯吾人は依て以て這般外面の比較の下に伏在せる偉人其の物の本分を看取し得れば則ち足る。

（卅五年六月）

（編者附記。「日蓮と基督」の第一は全體としては無題にて公にせし者なり。故著者が三十五年四月十四日以後每週「太平洋」にて公にしたる「宗敎談」は大體にてこの二次に同じく、四月廿一日發行の分は、茲に掲げたる第一に、同廿八日、及五月五日の分は第二と大差なし。即ち編者は「宗敎談」中よりこの二篇を補ひ、その他大同の分はこの二篇の儘に存して、「宗敎談」を棄てたり。後より補ひたる分は角括弧〔〕を附したり。）

を鳴らしたりき。〔彼れは先づ當代最高の知識を屈服して自家の敎義に歸依せしめ、以て天下の民心を風靡せむとしたりし也。其の方法、基督が無知の民衆を感化して社會を根底より改造せむとしたると正に相反す。日蓮のやり方は謂はゞ演繹的也、基督のやり方は謂はゞ歸納的也。〕

◎基督は遑あれば則ちカペルナウムの谷、ガリラヤの湖畔、もしくばハイチンの山に登りて、其の自然の美の間に高潔なる感情を養ふを樂みしが、日蓮が動もすれば經藏を巡歷し、岩窟に隱れて論述著作を事とせり。〔遺文錄三十卷を讀めば彼れが平生の研究に太だ力めたるを認むべし。〕

◎基督の其反對者に向ふや多くは機智を以て其の正面の攻擊を避け、却て省察によりて悔悟を促すの態度を取れり。例へば姦淫の女に關しては、汝等の中罪無きもの是を打てと言ひ、貢の錢に關しては、カイザルの物はカイザルに歸せと答へ、又何の權威ありて汝是等の敎を爲すやとの長老學士等の難詰に對しては、我も亦一言汝等に問はむ、ヨハネが洗禮は何處よりぞ、天よりか人よりかと反問する等、何れも是の類ならざるは無し。然れども日蓮は全く是に反す。然れば如何なる塲

◎基督はヨルダンを離れてより四十晝夜の間沙丘の中に彷徨ひしが、日蓮は叡山を下りて八年の間天下の知識を求めたり。彼れの教を弘めたるや三年、此の法を說けるや三十年。

◎日蓮は道理の辨折を以て對者を屈せむとす。是を以て奇蹟の如きは彼れの教に於て多く用ふる所無し。彼の伊東の朝高の病を治し、其の母を復治せしめ（或は龍の口に奇厄を免れ）しが如きは（彼れが傳記中の奇蹟に類すれども、其の有無は）彼の教に於て殆ど輕重する所無し。是の奇蹟を外にしたる基督傳が如何に落寞たるべきかに比較せよ。又ラザロ復活の如き事實が如何に其教の傳播に力ありしかを思へ。

◎布教の方法（場所）に於て兩者は全く其の趣を異にせり。基督の教を說けるは聖京の殿堂に非ずしてガリラヤの湖畔なりき。彼れに聽きたるものは、當時の學者に非ずして多くは漁夫の類なりき。（彼れは其の感情の言葉に聽き得る者が當代の俗智に汚されざる小兒の如き民衆なるべきを賢くも覺りしなり。）日蓮の法を弘めたるは鎌倉覇府の中央にして天下の碩學名僧の環視の間に於て其の法皷

たり。」

◎基督は三年の間一度びも學理を說きたる事無し。彼れ自らも當代の知識に離れたる一個の自然兒に過ぎざりき、今日の學者は彼れが姦婬の女に對するの場合に於て地に書けりと云ふの一事を以て僅に其の文字を書し得たるを證する程也。日蓮は全く是に反せり。彼れは智見高邁、學殖豐富、實に當代の大智なりしのみならず、其の敎相判釋の點に於て古今に俯仰して多く遜る所無き也。是の點にて兩者の性格正に相反す。

「◎布敎の方便に於ても二者全く其の軌を異にせり。基督は情に訴ふるを先とし、惱める人の心に慰めと望みを與ふるを旨とせしが、日蓮は理を攻むるを旨とし對者の邪義を破折して自家の眞理を認識せしめずむば已まざりき。されば基督に從ふものは情の門よりし、日蓮に從ふものは智の門よりせり。」

◎山上の垂訓の如何に感情的に、如何に直覺的に、又如何に詩的なるかを見よ。是を日蓮が所謂四個格言の理論的思辨的なるに較ぶれば、其の立敎の大本に於て明に兩者の相違を見る。

れむと。是れ日蓮が蒙古の來襲に關する預言と太だ相近し。曰く、おゝ謗法の國家日本は滅びなむ、唯唯幸なるものは日蓮が徒なる哉と。嗚呼諸君よ、諸君は是の兩個の宣言に潛める偉大なる眞理を如何にとか觀るや。

* * * * * * *

◎讀者若し四福音書と高祖遺文錄とを比較せば。這般の類似太だ多きに驚かむ。吾人亦煩を避けて是を盡さゝるべし。唯兩者の相反對せる諸點に就いては更に一言の要あるを見る。

◎基督敎は感情の敎也、故に直覺的也、頓悟的也、秩序無く系統無し。佛敎は道理の敎也、故に思辨的也、理論的也、秩序あり、系統あり。

〔◎基督はパリサイ、サドカイ等の徒にあらず、又當時流布せる何等の知識にも觸れざる一無學者に過ぎざりしが、圖らずも洗者ヨハネが熱誠に感ぜられて愛の道に悟り入りぬ。日蓮の學知は是に反して啻り當代のみならず、永く今古に俯仰して何人にも遜色無きものなりき。彼は清澄に學び、叡山に學び、前後十五年の間一代聖敎の疑惑を決せむが爲に天下の書を讀み盡して終に法華一乘の眞理に達し

よ布教の方法素より相同じからずと雖も、其の地上一切の權力を否定して眞理に殉ずるの精神氣魄に到ては、兩々相照して其の文字亦光明を競ふの觀あり。

〔◎基督が山上の說敎は當時の文明に對する大折伏なりき。續いて其の弟子等に訓えて傳敎の覺悟を示せる言の如きは光焔萬丈、眞に今古の大文字也。日蓮が種々御振舞鈔に述べたる佛滅後二千二百二十餘年以下の告示と日進に與へたる敎行證鈔とは正に是に匹敵すべきもの也。其の折伏の意氣に於ても、其の文字の壯大に於ても。〕

◎吾人が前號に一言せし如く、貢の錢に關する基督の答は實に四福音書中の最大の宣言也。曰く、カイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へせと。是れ正に日蓮が鎌倉の殿中に於て、身は隨ひ奉るとも心は隨ひ奉るべからずと斷言せると、恰も符契を合するが如し。是の一言を沒し去らば、天下又基督敎無く、佛敎無し。

◎基督の預め受難の運命を知るや、歎じて曰く。あゝエルサレムよ〳〵、汝等の家は墟址となりて遺されむ。唯我れ汝等に告ぐ、主の名によりて來るものは祝され

めむが爲に是の士に降れりと言ひしと、精神口吻共に相似たり。無上道に安ずる者の言はおのづから然らざるを得ざる也。

◎何れの世に於ても等しく、村學究と道學先生とは眞人の喜ぶ所に非りき。基督は當時の祭司學士の徒を罵倒して曰へらく、長き袍にて歩き、衢にて禮せらるゝを喜び、會堂宴席の高座を好み、長き祈禱に託けて寡婦の家を呑むかの學士等を愼めと。是れ日蓮が勸持品二十行の偈によりて空閑白衣の當時の高僧學者等を痛罵したるの言と何ぞ相似たる。僞人と眞人とは常に相容れざる也。

◎基督は己れに隨はむとする者に訓えて曰く、行いてあらゆる汝の所有を賣り、歸りて十字架を取て我に隨へと。日蓮亦其弟子檀那等を誡めて曰く、謹で所領を思ふ勿れ、父母親子を顧みる勿れ。常に是の臭骸を以て法華經に捧ぐるの覺悟あれ。是れ砂を以て金に換へ、糞を以て米に換ゆる也と。〔其の高調激越の聖語、共に永く靈界の指針となれるを見ずや。〕

◎基督が其の使徒等に示して宣教の覺悟を訓ゆるの一段は四福音書中の最も光焔ある文字也。讀者若し去て日蓮が日進に與へたる所謂教行證御書を一讀せ

るされたる事今汝等の前に應へりと叫びし時、人皆彼を狂せりとし斷崖の上より落さむと企てたりき。日蓮も亦十五年の沈思と勉學との後其の新しき眞理を唱へむが爲に其の故山淸澄に歸りぬ。彼れが七字の題目を唱へて四個格言を喝破せし時は、彼れの鄕黨故舊は皆彼を狂せりと想ひたりき。人神に近けば目して狂とせらる。古今東西其の軌を一にせるを見よ。

〔◯〕サマリヤの女子にメシヤの任命を證したる基督の自覺は、寺泊の羇宿に上行菩薩の附屬を證悟せる日蓮の心事と何の異なるところぞ。基督は學者と呼ばれず、智者と稱せられず、唯自らは人の子と稱し、人よりは神の子と稱せらるるを喜びき。日蓮は自ら日本一の曲者と稱し、知解に於ては天台傳教が千の一にだも及ばずと卑め、或は自ら旃陀羅の子と稱して、唯獨り上行菩薩の自信の中に自家の天職と滿足とを求めたり。超世の大理想を抱けるもの、おのづから然らざるを得ざる也。〕

◎基督はポンテオ、ピラトに答へて、我は王也、眞理を證さむが爲に臨めりと言ひしと、日蓮が平の左衛門尉に答へて、我は日本國の主也、師也、親也、法華經の妙理を弘

普ねく行はれし所にして、希伯來の預言者も、タチッス、スエトニウス等の歴史家等も共に證する所也。基督此の信念の間に生れて是の聖者の預言に應えぬ。是れ佛滅後二千年と二千五百年との間に於て、末法付屬の行者たる上行菩薩、東北有緣の小國に出現せむと謂へる佛讖と頗る相似たらずや。

◎基督自ら是の預言を身現せむが爲に、ベツレヘムに生れたるを以て米迦の預言を實にせるものとなし、又以賽亞の預言に應せむが爲に其後ナザレに移りぬ。彼れがサマリヤの婦人に答へて我はメシヤ也と言ひしは、日蓮が寺泊の羈宿に於て上行菩薩の自覺を喚び起したると、心事何の異なる所ぞ。

◎基督の前には洗者ヨハネあり。日蓮の前には傳教あり。彼れは我より後に來るものは我れ其の靴の紐を結ぶにも當らずと預言し、此れは末法の初め近きにあり、法華一乘の行者將に現はるべしと預言しぬ。兩者出世の因緣は驚くべく相似たり。

◎基督の敎を創むるや、預言者の其の鄉に容れられざるを知りながら、先づ其故鄉ナザレに歸りて神殿の前に立ちぬ。伊賽亞第六十一章の破題を吟じて、是の錄

づ佛耶兩教の特性を眼中に置かむことを要す。

◎然れども大いなる宗教家として人類の救濟を目的としたる事に於ては兩者素より其の軌を一にす。大いなる宗教家に於て常に見る如く、其の心事の清朗にして純潔なる、其の意志の勇猛にして大膽なる、其の事業の高明にして悲壯なる、而して現世以上に於て理想世界の實在を認め、人間靈性の醇化によりて是の世界の實現に力めたる、彼れと此れと殆ど符契を合するが如し。兩者の比較に當りて遭遇する幾多の異同は是の點より說明し得べし。即ち多くの場合に於て、其の異は佛耶兩敎の根本的差別に本き、其の同は大宗教家としての特性、即ち宗教其物の普遍性に本く。

◎吾人は玆に這般の點に就いて精透なる論述を試むる能はざるを憾みとす。唯左に兩者の史蹟に本づきて其性行の一斑を比較するを以て暫らく足れりとせむ。

◎吾人は先づ其の出世の因緣に關して基督と日蓮との類似の太だ大なるに驚かざるを得ず。聖者東方に出でゝ天下を動かさむとの信念は當時羅馬の天下に

の根據をきづき得たる所以のもの亦其の敎の簡單明瞭にして直下に人情の本然に訴へたるが爲に外ならず。是を釋迦が五十餘年の永き說法によりて僅に法華一乘の眞理を開顯し得たるに比すれば彼此兩敎の性質亦おのづから劃然として明なるを見る。

◎佛敎は主として道理の上に立つ。領解の一途、素より直に無上道に達し難く、其の根本に於て信依の一念を預想するは言ふまでも無しと雖も、而かも是の信依の一念をして大悟の域に徹底せしむるには、其の方便として極めて煩瑣にして且難解なる道理の判釋を要す。是を以て八萬四千の敎義、一代五時の說法、機に臨み根に應じて成佛の道を示さゞるなしと雖も、畢竟法華一乘の眞理を開顯せむが爲めの方便に外ならず。是の如き深遠なる敎義は、基督の如く三年の間に說明し得べからず。されば釋迦の智慧廣大を以てして其の成道の初めより法華經壽量品に於て顯本遠壽の妙理を現示するまで實に五十餘年の長日月を要したりき。

◎日蓮は、彼れ自ら釋尊の正統と稱せし如く、其の敎風に於て佛敎の精神を最もよく體達したる一人なりき。されば彼れと基督とを比較するに當ては、讀者は先

片言隻語素より其の言はむと欲する所を盡す能はず。是を以て直に吾人の日蓮基督比較論と見做す無くむば幸也。

◎日蓮と基督との比較は其の根底に於て佛耶兩教の比較を預想す。佛耶兩教の比較は直に民族風土の上に基ける東西文明の比較たらざるを得ず。是の考察を離れて漫に兩者の異同を別ち優劣を辯せむは、殆ど無意義の事たるを免れず。

◎一言以て是を蔽へば、基督教は主として感情の教也、佛教は主として道理の教也。吾人は四福音書によりて現はされたる原始基督教に於て、何等後世神學家の所謂る教理なるものを認むる能はず。基督自らは唯其の高潔なる熱情に動かされて直に人間の本然に訴へたるのみ。彼れ自らが所謂る識者に非ざるが如く彼れは其の對者に於ても何等の學識を要めざりき。彼れの教に聽きたるものは、例へばガリラヤ湖畔の漁父の如き單純無垢なる自然の小兒なりき。畢竟彼れの言を解するには哲學を要せず、傳說を要せず、唯是の小兒の如き心あれば則ち足れりし也。是を以て基督自らも小兒の如き心あるものに非ざれば天國に入ること難しと訓えたりき。彼れが僅に三年の短日月の間に於て、能くこの世界の一大宗教

み言ひ得べきものならば、吾等何の爲めにか宗教を要せん。永世の命と無限の祝福を望むもの、何爲れぞ現世の榮辱に心を勞すること爾く甚しき。」

嗚呼今の時、國家の面前に立ちて神の物は神に歸へせと宣告し得る人あらば、吾人は走つて其の靴の紐を結びても彼れの門下とならむ哉。

（三十五年五月五日公）

日蓮と基督　（其二）

◎吾人曾て日蓮を評して謂へらく、『彼れを目して日本のルーテルとなさむは謬れり。彼れの偉大は獨り基督のそれに較べ得べきのみ』と。人の是の言を以て誇大に過ぎたりとするものあり。想ふに彼れは其の基督を知りて未だ其の日蓮を知らざる者乎。

◎日蓮と基督、是の二者の比較は吾人にとりて一好題目たり。其の精細は他日を竢ちて必ず世に問ふの期あるべし。今試に其の概要を錄して讀者に示さむか。

神に歸せよの意也。

あゝ貢を納むる者のみが臣下には非ざるぞかし。吾人は是の世に於て別に靈の國土を有す。吾人は是の靈性の支配の下に如何なる人をも如何なる國をも征服し、君臨し、且つ審判し得る者なることを悟れ。是に於てか吾人に自由あり、希望あり、榮光あり。所謂祝福せられたる生活即是れ也。

世に最も醜なるもの

世に見苦しきもの何ぞ限らむ、中にも「神の國を建立すべき宗教家が地上の權力を調和して其の安逸を貪らんが爲めに自家の眞信を枉げて世に阿る程見苦しきはなし。予は是の如き見苦しき事例を現に我邦の多くの宗教家に於て實見せり。」國家的宗教と云ふが如き名目の下に其の存在と昌榮とを誇らむとする宗教は見苦しき哉。人よ何ぞ言ひ得ざる、我が教は地上の一切の權力を超越すと。是の如くにして迫害せられむか、是れ迫害せられたる者の恥辱に非ずして光榮也、敗亡に非ずして勝利也。「迎ふべきものは國家にして、迎へらるべきものは宗教也。」彼等は是の超絶の見地に據りて安立する能はざる乎。「若し生命とは是の世に於ての

何の患ふる所ぞや

人は患ふ、是の世に於て靈性の自由を神の國に捧ぐるものは、其の現實の生活に於て支吾する所あるを奈何と。あゝ是れ何の患ふる所ぞや。迫害の歴史を飾れる幾多の義人が平和と滿足とを以て是の疑問に答へたるを見よ。是れ人生に於て最も大いなる祝福に非ずや。

人の國と神の國

人の國は遂に神の國に非ず。人性の無限なる要求に應じ得べき生活は是の世のものに非ざるや、寧ろ明なるに過ぐ。人は方便を説く、然れども是れ強辯のみ、假托のみ。事實は長へに事實たるを如何せむ。誠虔なる信者よ、汝は果して其の眞信の聲に隨ひ、其の靈性の囁きに聽きて、尙ほ且つ是の兩者の兩全を望み得る乎。〔調和を口にし得べきか。〕

靈性の支配

昔者日蓮鎌倉の殿中に宣言して曰く『日蓮王土に生れたれば、身は從ひ奉るとも心は從ひ奉るべからず』と。是れ亦〔まさしくカイゼルの者はカイゼルに、〕神の物は

日蓮と基督（其一）

偉大なる宣告

四福音書は實に日星河嶽の大文字にして、吾人が宗教的感情に對じてあらゆる高大なる理想を標示す。まことに仰いで貴むべく、即いて親しむべし。而して人若し其中に最も偉大なる宣言は何なりやと問はゞ、吾人は答へて言はむ、貢の貨幣に就いての基督の答也と。

靈性の是認

『カイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へせ。』あはれ是の一語こそは啻に羅馬帝國の至上權に對する大折伏なるのみならず、凡ての地上の權力を永遠に否定し、人間靈性の獨立、自由、光榮、威嚴に對して、萬古動かすべからざる是認を與へたるものに非ずや。如何なる宗教が如何なる福音を傳ふるとも、理想は恐らくは是の一言を超越し得べからざらむ。「予は基督教の信者が是の一言の力によりて人生最大の祝福を自覺せむことを希望するもの也。」

を爲す。嗚呼日蓮の世に知られざる蓋し又久しい哉。

* * * * * * *

是の文は素と個條書に書きざりしを、後に讀者の見易からむが爲に節を分ちて小題を附せり。故に文義間々貫通せず、説明亦簡單に過ぎ、一篇の論文としては体裁を成さゞる所あるを免れす。讀者其の意を取りて其の文を取る無くむば幸也。

（卅五年六月二十二日樗牛生）

（同七月公）

至弘安四年六月、作小蒙古書。其旨乍反前來。所以然者。是時時宗、賴綱既發悔心。委高祖于蒙古降伏之事故也。云々。（巻二、蒙古退治本化威力章）

是の如きは曲解もしくは誤解のみ、毫も典據となるに足らず。所謂る小蒙古御書（遺文錄巻三十）は、蒙古襲來の事實が日蓮年來の預言に適中せるを以て、其の門弟檀越等の中に連りに其の師の達見を吹聽するものあるを見、特に門下に牒して是を戒めたるに過ぎず、文意平明、毫も疑義を留めず。所謂る『乍ち前來に反す』と云ふが如きは吾人何の意たるを解せざる也。況や時宗、賴綱等が悔悟の實跡は日蓮一代中に一度びも現はれず。況や蒙古調伏の事を日蓮に委ねたりと謂ふが如きは、毫も證跡無き事也。かゝる妄誕を構成して恣に千古の偉人を評隲す、畢竟小人己れを以て他を料るの罪のみ。夫の最敎寺（東京本所押上）傳ふる所の蔗曼陀羅と稱する物の如き、後人俗を欺くの僞物たるや、素より論無き也。

近年元寇紀念像と稱し、日蓮の銅像を博多に建てむとする者あり、是れ亦蒙古調伏の妄誕に依據せる妄擧のみ、無意義も亦甚しと謂ふべし。無知の俗人にして是の事ある、尙ほ暫く恕すべしとせむ、堂々たる妙宗の碩學相率ゐて是の沒分曉の事

正安國論とによりて日蓮を一個の道學先生的愛國者に墮落せしめたるに慊らず更に蒙古の襲來に對して調伏の祈禱を行じたりとの事實を捏造して、國民の耳目を迎合せむと務む。荒誕無稽も亦甚しと謂ふべし。

日蓮果して蒙古を調伏したりや、否や、是の如き疑問は果して日蓮の人物性行を知る者の念頭に起り得べきものなりや、是の如き疑問の起りたる事、此の一事既に日蓮に關する知識の皆無を證する者に非ずや。是の如き問題に容喙するは吾人にとりて是の上も無き馬鹿氣たる事也。

二十餘年の間法華經の行者を迫害し、三度びの曉諫にも耳を傾けざるは北條氏也。其の配下に生活して謗法の邪宗に傾倒し、末法の導師を苦めたるものは日本人也。蒙古は梵、帝、日月、四天の力を假りて是の謗法の國土を膺懲せむが爲めに來らむとす。其の來るは佛意也、攝理也、將た法華經の行者たる日蓮其人が生國の安寧を犧牲として佛天に禱りたる大悲願也。然るに彼を調伏すとは何の意ぞ。日蓮にとりて日本は大い也、然れども眞理は更に大い也。調伏論者は祖書綱要刪略を以て典據となす。其の文に曰く、

け給ふべき。急ぎ〳〵治罰を加へて自禍を免れむことこそ勵み給ふらめ』（下山御消息）と思斷せり。

文永十一年五月身延退隱以後の日蓮の文書には是の思想を現はせるもの一にして足らず。一々引用の煩を避けて單に其の重なる書目を列擧せむ。讀者の就いて參照せられむことを望む。

一、顯立正意鈔（遺文錄十六卷十九卷）	二、撰時鈔下（同十八卷）	三、高橋殿御返事（同十九卷）
四、蒙古使御書（同十九卷）	五、下山御消息（同廿二卷）	六、賴基陳狀（同廿三卷）
七、兵衛志殿御書（同廿三卷）	八、本尊問答鈔（同廿五卷）	九、聖人御難事（同廿七卷）
十、筒御器鈔（同廿八卷）	十一、上野鈔（同廿八卷）	十二、妙一女御返事（同廿八卷）
十三、智妙房御返事（同廿九卷）	十四、諫曉八幡鈔（同廿九卷）	十五、富城入道殿御返事（同三十卷）

七　日蓮が蒙古を調伏せりとは妄誕也

蒙古の襲來に對する日蓮の態度は畧々右に說けるが如し。然るに所謂る國家主義によりて自家宗門の昌榮を望みたる日蓮宗の俗僧等は、其の守護國家論と立

日蓮は愚なれども釋迦佛の御使、法華經の行者也と名乘り候を用ひざらむだにも不思議なるべし。其の咎に依て國破れなむ。云々。(一谷入道御書遺文錄八卷)

又曰く

後生は扨置きぬ。今生に法華經の敵となりし人をば、梵天、帝釋、日月、四天罰し給ひて、皆人に見懲りさせ給へと申し付けて候。日蓮法華經の行者に有る無しは是にて御覽あるべし。斯う申せば國主等は、此法師の威すと思へる歟。敢て惡みては申さず、大慈大悲の力、無間地獄の大苦を今生に消さしめむと也。云々。(王舍城事遺文錄十七卷)

此文中に所謂る今生に法華經の敵となりし人とは即ち日本人也。日蓮自ら明言して梵帝、日月、四天に對して是の日本人の懲罰を要請したりと曰ふ。取も直さず、蒙古の襲來は日蓮自らの希望を實現せる者に外ならず。彼れは是に反對し、若くは是を咒咀すべき何等の理由をも有せざる也。隨つて彼れは其の生國の滅亡を忍受するを以て、所謂る無間地獄の大苦を今生に消さしむる『大慈大悲の力』となし、獨り彼れのみならず『日本國守護の天照太神正八幡等も、爭でか斯かる國をば助

こと、思ひやり候へば涙も留らず。云々。

是の文亦日蓮が退隱の事情を暗示して太だ分明なる者也。讀者須らく『力及ばず山林に交はり候』の一句に注意せらるべし。

六　蒙古襲來に對する日蓮の態度

蒙古の襲來に對する彼れの態度、亦多言を要せざる也。彼れはクロムエルの如く一切人世の事凡て佛意によりて攝理せらるゝことを確信せり。蒙古は彼れにとりては政治上の國敵にあらずして、佛意によりて遣はされたる膺懲の義軍也。日本の國民として其の生國の滅亡を目睹するは、彼れの忍びざる所なりと雖も、彼れは其の精靈の本貫に於て元と是れ佛子法臣たり。世尊の告敕に基づける一切の運命は彼れに於て何等反抗するの理由あること無し。即ち彼れは蒙古の襲來に對して所謂る愛國者流と其の歩調を異にせざるを得ざる也。彼れ乃ち明言して曰く、

是れ梵王、帝釋、日月、四天の彼の蒙古國の大王の身に入らせ給うて責め給ふ也。

をして病を癒すが如く、鍼治にて人をなほすが如し。當時は歎くとも後に悦び也。云々。（異体同心事）

亡國は誠に悲むべし、而かも此事無くむば日本は永く謗法の國土に墮し了るべし。即ち是れ一時の悲嘆にして永遠の歡喜也。日蓮是の危機に際し、暫く其の生國を蒙古の膺懲に任せ、身は身延に退隱して忍で機緣の熟するを待つ、心事太だ推察し難からず。所謂る異體同心事は彼れが身延に入りてより三個月の後、即ち文永十一年八月の初め、其の檀越の太田殿に復するの書にして、彼れが當時の心情を最も明瞭に言明せる者也。

身延退隱後の彼れの文書には蒙古の事を言へるもの甚だ多し。文永十一年の十月は蒙古の軍太宰府に寇し、大に壹岐、對馬を劫掠したる時也。同じく十一月、日蓮が南條七郎二郎に復する書に曰く、

抑々日蓮は日本國を助けむと深く思へども、日本國の上下萬人一同に國の亡ぶべき故にや、用ひられざる上、度々仇を爲す、されば、力及ばず山林に交はり候へ又大蒙古國より寄せて候と申せば、皆人當時の壹岐、對馬の樣にならせ給はむ

の眼より視れば、蒙古は外敵の假面を被れる佛陀の遠征軍のみ。彼が二十餘年の間呼號し來りたる眞理の聲に目覺めざる謗法の國民は、是の遠征軍の劍に流るべき自己の血潮を以て自ら淨めざるを得ざる也。是の如くにして國は或は亡びなむ、民は或は殺されなむ、唯眞理の光是によりて輝き、妙經の功德新國土を光被するを得ば、又恨む所無かるべき也。日蓮は日本國の上に懸かれる是の一大慘劇の運命を忍受せむが爲に鎌倉を去りて身延の幽谷に退隱したるのみ。

吾人の說を以て臆測に過ぎたりとするものあらむ。然れとも是の如く思料するに非ざれば日蓮てふ人物は遂に解釋すべからざる也。良しや文献の明に徵すべきもの無しとするも、彼れが前後の經歷より其の遺文に徵證すれば、吾人の斷案は牢乎として動かすべからざるものあるを覺ゆ。讀者若し煩を厭はずむば、左に援く所の文字を一讀せよ。

蒙古國の事旣に近いて候歟。我國の亡びむとは淺ましけれども、是だに虛事になるならば、日本國の人々愈々法華經を謗じて萬人無間地獄に墮つべし。彼(蒙古)だにも强よるならば、國は亡ぶとも謗法は少なくなりなむ。譬は灸治

あり、末法化導の大悲願を貫くに於て日も亦足らずとすべし。北條時宗何者ぞ、所謂る『わづかの小島の主』に非ずや。其の諫の聽かれたると聽かれざると、彼れに於て何の輕重する所ぞ。三度び諫めて聽かれざるが故に去ると謂ふが如きは、腐儒循臣にして是を言ふ、可也、上行菩薩の使命を自負する末法の大導師の口にすべき言に非ず。是を以て吾人は斷ず、是の如きは流俗に對する一片の辭柄のみ。日蓮の眞意決して茲に存すべからざる也。

然らば日蓮の眞意何處にか存すと爲す。吾人斷じて曰く、是れ蒙古の襲來を預想せるが爲のみと。其の理由概ね左の如し。

日蓮既に世尊の告敕を擔へる末法の導師也。既に又久遠なる佛識の攝理に基きて東方有緣の小國に降り、妙經の眞理を流布せむが爲に二十餘年の迫害を忍受しぬ。而して國君其の說に隨はず、國民依然として邪法に沈湎せり。そも〳〵佛敕照々として動かすべからず、而して百魔競うて其の途に橫はること是の如し。事體遂に變ぜざるを得ざる也。即ち佛は是の謗法の國土を膺懲せむが爲に茲に降魔の軍を起して此國に臨まむとす。蒙古の襲來は即ち是れ也。是を以て日蓮

借問す、日蓮は是の國家多事の前途を望みて事に救濟に從はず、却て道を世外に避けたるは、果して何の思ふ所ありて然りしや。是れ疑問也。

從來の日蓮傳の告ぐる所によれば、是の理由は極めて簡明也。即ち日蓮鎌倉に還り、時の執權時宗に説きて妙經の歸依を勸めしも容れられず。是れ彼れが前年より幕府に上りたる所謂る第三次の諫曉也。彼れ是に於て歎じて曰く、嗟呼甚い哉、我が化の及ばざることや。三度び諫めて聽かれざれば逃る、是れ古の禮也。嘉遯の時方に至れり、我れ此地を去るべき也。——註畫讃、別頭統記、日蓮大士眞實傳等の諸書錄するところ、皆是の意に外ならず。而して日宗歷代の碩學、亦是の意を體認して敢て違はざるものゝ如し。

然れども吾人は是の文意を信ずる能はず。是を日蓮出世の因緣に見、上行菩薩の自覺に見、立宗以來二十餘年の行動に見て『三度諫めて聽かれざれば逃る』と云ふが如き理由によりて其の從來の事業を放擲するが如きは、吾が日蓮に於て決して有り得べからざる進退なるを認む。彼れの順ふべきものは釋尊の告敕あるのみ。其の一生の事業は靈山寄托の大使命を果すにあるのみ。國土茲にあり、衆生茲に

も亦世尊の告敕に應じて末法行者の影護を誓ひたる八萬恒河沙衆の中にあり。今夫れ一代佛教の大歸趣を體現せる上行菩薩は己れ自らに外ならずとの自覺に任せる日蓮よりして是を觀れば、天照太神正八幡の如きは素より言ふに足らざるのみ。『頭を傾ぶけ、手を合せて地に伏し給ふべき也』と宣言する、亦毫も怪むを要せざる也。

五、身延隱退の理由

日蓮の國家に對する觀念は佐渡以後、元寇の時期漸く迫り來りたる頃より、愈々明かに發表せられたり。史を案ずるに、文永五年以降元使數々來りて連りに侵逼の禍心を漏らしぬ。日蓮赦されて佐渡より還れる年、即ち文永十一年の頃に及びては、禍機漸く熟して、國家の大事旦夕に逼りたるの觀あり。暴慢無禮の平の左衛門が辭禮を厚うして、來襲の期を日蓮に問ひたるが如き、亦以て幕府上下の狼狽を想ふに足る。是の時に際し、門葉歡呼の中に鎌倉に歸りたる日蓮が、俄に法皷を鎭め、幔幃を收めて、甲州身延の深山に退隱したるの事實は頗る注意すべしとなす。

又此度も用ひずば大蒙古國より打手向うて日本國亡ぼさるべし。云々。

是の如きは今の道學先生にとりて眞に驚心駭目の文字なるべし。天照太神、正八幡を目して小神となし、自らは教主釋尊の御使なれば、天照太神、正八幡も叩頭合掌して拜跪し給ふべきことゝ言ひ、吾が言を用ひずば國必ず亡ぶべしと斷言す。日蓮そも〳〵何の權威ありて是の不敬の言を爲すや。是れ道學先生等の怪みて而して解し能はざる所也。

然れども怪むを休めよ。日蓮にとりては是の如きは毫も奇矯の言に非じ。彼れにして苟も國家神祇に及ばむ乎、言の此に到る、寧ろ理義の自然のみ。畢竟三界は悉く皆佛土たり、日本亦其國土と神明と萬民とを併せて教主釋尊の一領域たるに過ぎず。苟も佛陀の悲願に適はず、眞理の榮光に應へざるものは、其の國土と民衆と、共に膺懲し、改造せられざるべからず。日蓮釋尊の敕使として『國必ず亡ぶべし』と宣言せる毫も怪むに足らざる也。三界既に佛土たり。天照太神、正八幡の諸神も亦佛の眷屬のみ。昔者、釋尊靈山の會上に於て地涌の菩薩を召集し、三千世界の佛神を集めて末法化導の大任を上行菩薩に寄託したりし時、天照太神、正八幡等

吾人は茲に佐渡以後の日蓮の進退と其の遺文とに據りて彼れが日本國に對して如何の觀念を有せしかを明にし、併せて蒙古襲來に對する彼れの態度に就いて述ぶる所あるべし。

日蓮流されて佐渡に在るや、地頭本間の六郎左衛門に向つて曰へらく、(種々御振舞御書)

吾言を用ひずば國必ず亡ぶべし。日蓮は幼若なれども、法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし。僅の天照太神、正八幡なむど申すは、此國には重けれども、梵、釋、日月、四天に對すれば小神ぞかし。されども此神人なむどを失ぬれば、只の人を殺せるには七人半なむど申すぞかし。太政入道、隱岐法皇等の亡び給ひしは是也。此は彼に似るべくも無し。教主釋尊の御使なれば、天照太神、正八幡宮も頭を傾ぶけ、手を合せて地に伏し給ふべき事也。法華經の行者をば、梵釋左右に侍り、日月前後を照し給ふ。かゝる日蓮を用ひぬるとも、あしく敬はば國亡ぶべし。いかに況や數百人に憎まれ、二度まで流しぬ。此國の亡びむこと疑無かるべけれども、且らく禁を爲して國を助け給へと日蓮がひかうればこそ、今までは安穩にありつれども、法に過ぐれば罰あたりぬる也。

蓮に歸依するものは、畢竟是が爲のみ。

是の如き愛國心の要求する所は唯是の國土の究竟の榮光のみ。時の政權に奴隷たらざるの故を以て直に擬するに叛逆の名を以てするは彼れの爲さゝる所也。彼れは時として當路の君主に從順ならざることあり。天の名によりて査斯一世を斷頭臺に上せたるが如きは其の例也。彼れは時として所謂る滅亡をば甘受することあり。彼れは眞理の命ずる所には決して滅亡なるもの無きことを確信すればなり。世俗の道德は時として種々の惡德の名によりて彼れを呼ぶことあらむ、然れども最終の勝利は常に眞理の味方なることは彼れの信じて疑はざる所也。

是の如くにして彼れは一世の耳目に逆らひ其の信念に殉ずる也。

再び言はむ、日蓮は二千五百年の日本歷史中に於て是の如き愛國心を有したる殆ど唯一の偉人也。丙丁童子の國家主義は、乞ふ去つて道學先生と共に是を談ぜよ。吾人の日蓮は則ち與らず。

四　日蓮と日本國

三　日蓮は眞正の愛國者也

日蓮の理想は法華經の眞理を宇内に光被せしむるにあり。是の大理想の下に活動せる彼れにして、若し特に日本國を愛したりとせば、そは生國の因緣以外に於て、眞理其物と是の國土との間の或る必然的關係に基かざるべからず。而して彼れ自ら『日本乃至一閻浮提』(報恩抄)と言へるを以て見れば、彼れが此の國土に於て是の必然的關係を認めたるは疑ふべからざるが如し。然らば則ち是の必然的關係とは何ぞや。他無し、法華經本門に於て末法化導の寄托を受けたる上行菩薩出現の國土は即ち日本國なる事、及び上行菩薩は日蓮其人に外ならずとの自覺、即ち是れ也。

吾人はクロムエルを以て眞正なる愛國者なりとすると同一の意味に於て日蓮を眞正の愛國者なりと認む。是の如き意味に於ての愛國心は和氣清麿、楠正成、乃至北條時宗等の夢にだも會得し能はざりしところ、恐らくは二千五百年の歷史に於て、日蓮獨り是を會得したりしならむ。吾人が清麿、正成、時宗等を措いて特に日

的大理想に本づく。

立正安國論は、日蓮立宗の大論策なりと雖も、其の國家觀は尙ほ遙に佐渡以後の諸文章の緊當剴切なるに及ばず。畢竟其心未だ其境に到らざるの致す所か。何ぞ其の明瞭を捨てゝ彼の摸稜を執るの理あらむや。況や國家主義者流說く所の『國は法に依りて昌へ、法は人に依りて貴し』と云へる文意は、宗敎を離れたる國家の存在を否定せるものに外ならざるをや。偏に文字の外觀によりて故らに偉人を誤る、罪甚だ大なりと謂ふべし。

且夫れ生を此土に受けたるが故に是の國を思ふと謂ふが如きは、極めて淺薄なる愛國者と謂はざる可らず。若し彼れをして英國若しくは露國に生まれしめば、則ち直に英露の愛國者たるに過ぎざるべし。何ぞかの丙丁童子の國家觀と相似たる。英國史上の愛國者の最も大いなる者、吾人先づ指をクロムエルに屈す。而して彼れが英吉利及び其國民を愛したるは其の生國たるが爲に非ずして、上帝の攝理を負へる神聖なる撰民なりてふ偉大なる信念に基きたりき。是の信念ありて初めて是の眞正の愛國心あり。

日蓮の國家主義を說くもの、必ず先づ「立正安國論」を引く。曰く『國を失ひ家を滅ぼさば、何れの處にか世を遁れむ。汝須らく一身の安堵を思はゞ、先づ四表の靜謐を祈るべし』。又曰く『夫れ國は法に依りて昌へ、法は人に依りて重し。國亡び人滅せば佛誰れか崇むべき、法誰れか信ずべけむや。先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし』。是の如きは吾人を以て見れば、例へば一昨日御書に於ける『日蓮は生を此土に得たり、豈我國を思はざらんや』と謂へると等しく、尋常一般の辭令のみ。是によりて直に其の國家主義を論ぜむとする、寧ろ大早計と謂はざるべからず。

法は其の對境として國と人とを要す。然れども如何なる國も如何なる人も悉く皆法の對境たり得べきに非ず。惡國は膺懲せざるべからず。惡人は戒化せざるべからず。是の如くにして適法の國と人とを造る、毫も怪むべきに非ず。日蓮は眞理の爲に國家を認む、國家の爲に眞理を認めたるに非ず。彼れにとりては眞理は常に國家よりも大也。是を以て彼れは眞理の爲には國家の滅亡を是認せり。否、是の如くにして滅亡せる國家が滅亡によりて再生すべしとは彼れの動かすべからざる信念なりし也。蒙古襲來に對する彼れの態度の如き、亦實に是の超國家

二　日蓮は大不忠漢也

天外の疑惑に對する吾人の答辨は極めて簡單也。曰く、日蓮は生の疑へる如く、日本國の滅亡を意とせざりし生の所謂る大不忠漢なりき。然れども驚くなかれ、吾人の是の語を誤らざらむと欲せば、讀者は先づ『國』てふ文字の眞意義を解せざるべからず。

此世に於て最も大なるものは、必ずしも國家には非ざるぞかし。最も大いなるものは法也、信仰也。而して法に事ふるの人も亦時としては國家よりも大いなることある也。是の如き人にありては、法によりて淨められたる國土に非ざれば眞正の國家に非ざる也。日蓮は即はち是の如き人なりき。

世の日蓮の國家主義を説くもの、吾人數々是を聞けり。然れども畢竟是れ最負の引き倒しのみ。嗚呼國家的宗教と云ふが如き名目の下に自家宗門の昌榮を誇らむとする僧侶は禍なる哉。斯かる俗惡なる僧侶の口より其の國家主義を讚美せられつゝある日蓮上人は氣の毒なる哉。

る不忠漢に非ざるなり。是れ獨り余の而か言ふのみならず、其の忠君愛國の精神に於て本邦諸高僧の間に一異彩を放てるは、日宗歷代の諸高僧の齊しく認むる所なり。日蓮宗徒の或者が自宗を標榜して特に國家的宗敎と稱るもの、亦必ずしも不當の見に非ざるを想ふ。足下燃犀の識、必ずや這般の觀察に一頭地を拔けるものあらん。余は足下の所謂る『斷片』ならざる論文に於て其の委曲を知り、以て是の一大疑惑を解かんことを希ふ云々。

想ふに天外生の疑惑は即ち多數の讀者の疑惑ならむ。吾人は玆に最も簡明に是の問題に答へ、延いて左の條々に就いて吾人の見る所を陳せむと欲す。

一、日蓮は今日の所謂る忠君愛國主義に反對せり。

一、日蓮の說を以て國家主義と呼ぶは可也、然れどもそは全く理想上の意味に解すべし。今日の所謂る國家主義とは相容れず。

一、佐渡以後の日蓮の進退――身延退隱の原因。

一、蒙古襲來に對する日蓮の態度。

一、日蓮には蒙古調伏の形迹無し、元寇紀念像の建立は無意義也。

天外生の寄書は頗る長しと雖も、其の要は左に記するが如し。

樗牛兄足下、余は足下の指導に隨ひて日蓮の研究を初めたる一人なり。余は足下と共に日蓮の偉大を悟り得たることを欣ぶ者なり。然れども足下近時の文章は余が研究の前途に一疑團を齎せり。果して足下の言の如くむば、余は恐る、日蓮に對する余の態度は又前日の如くなるを得ざらむことを。近刊の太陽載する所の『日蓮と基督』と題する足下の論中に、謗法の國家日本は滅ぶべし、唯日蓮の徒のみは幸ひなるかな云々の文字あり。是を以て見れば日蓮は日本の滅亡を意とせざりしのみならず、却て謗法の國土としてその滅亡を希ひし者に非ざるか、果して然らば日蓮こそは日本國の大不忠漢に非ざるか。余は足下と共に日蓮の人物を景慕す、然れども其の本國の滅亡を憂へざる不忠漢は余の道義的感情と相容れざるなり。日蓮果して足下の言ふ如き人物なるか。足下是れを認めて尚ほ且つ其の偉大を讃美せんとするか。足下と余と其の執る所に或は相容れざるものあらんを恐る。

然れども余の見る所によれば、日蓮は決して足下の言ふ如き亡國を意とせざ

日蓮上人と日本國

（日蓮上人の眞面目を見よ）

一　讀者の疑惑

前號に掲げたる『日蓮と基督』と題する論文中には、恐らくは讀者の多數を驚かしたる數行の文字ありたるべし。吾人は初めより是を預期したりしが、果して天外生と稱する人の寄書によりて是の預期の空しからざることを知り得たり。是の如き疑惑を懷けるものは決して天外生一人に限らざるべきを想へば、吾人は茲に是の疑惑に對して明瞭なる解決を與へ置かざるべからず。而して讀者よ是の問題の關はる所は吾人にとりては意外に重大也。即ち歷史上の一宿疑たる日蓮對蒙古の問題も是によりて解釋せらるべく、而して是の解釋の結果として日蓮上人其人の通俗的概念は一大刷新を被るべく、更に吾人の所謂る日本の一大偉人としての上人は、茲に初めて其の本來の面目を發揮し來るべし。

（日蓮と基督は次にあり）

し、告知し、且つ命令せり、彼れは自ら是の如き權威を有せることを疑はざりし也。彼れは國家政府が是の確信の前には如何に小弱なる者なるかを見ぬ。　是を以て當代の君主執權を指して『區かの小嶋の主』と輕むじ、天照大神、正八幡等の國神を『小神』と卑しめぬ。　三世十方の世界を貫通して久遠實成の無上道、妙法蓮華經の現證たる是の確信の前には、日月も其の光を失ひ、天地も其の大を失ひ、一切人天の衆生は帝王も乞食も悉く皆一小兒となりぬ。　事茲に到りては言の記すべきなく、文の述ぶべき無し。　吾人は唯歸命讃歎して唵々の一語を反覆するの外無き也。

遮莫是の如き大いなる確信の下に活動せる彼れが半生の事業の如何に雄大崇嚴を極めたるかは、啻に鎌倉時代の偉蹟としてのみならず、啻に日本歴史の壯觀としてのみならず、又實に人類永遠の史上に於ける一大事實として傳へらるべきもの也。　吾人乞ふ篇を改めて少しく述ぶるところあらむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本論を草するに當り、田中智學氏及び氏の門下山川智應氏が有益なる注意を與へられたるは著者の深く感謝する所也。

（卅五年四月）

遣使還告は地涌也』と說き(觀心本尊鈔)『已に地涌の大菩薩上行出でさせ給ひぬ、結要の大法亦弘まらせ給ふべし、日本漢土萬國の一切衆生は金輪聖王の出現の先兆、優曇華に値へるなるべし』と示現して一閻浮提廣宣流布の一大理想を發表しぬ(教行證御書)。

日蓮は果して上行菩薩の化身なりや。彼れは佛家の所謂る前生に於て靈山會上に釋尊の付屬を受たりしや。是の如きは吾人の知る所に非ず、又知るを要する所にもあらず。吾人は唯日蓮が釋尊に對する無限の歸依によりて吾は上行菩薩也てふ金剛不壞の確信に到達したるを見るを以て足れりとせむ。是の如き確信が今の學究輩によりて如何の說明を得べきかは吾人の關する所に非ず。唯是の確信が日蓮の精神に於て無上絕對の事實なることを知れば則ち足る。見よ〳〵、是の確信を得てより彼れの性格の偉大は殆ど人界の規矩を超越しぬ。彼れは是によりて天地人生の上に無限の威力を得ぬ。其意志と情熱と共に天來の靈氣によりて皷吹せられぬ。彼れは是によりて預言の力己れの手にあることを信じ、祈禱の聽かれざることなく、咒咀の行はれざること無きを信じぬ。彼れは是の確信の力によりて天下萬國の一切衆生に向つて無上の權威を有てるものゝ如く、教訓

也。佛滅後二千二百餘年に、天台、傳敎は粗々釋し給へども、弘め殘せる一大事の祕法を此國に於て之を弘む、日蓮豈其人に非ずや』と。又曰く『前相既に顯はれぬ、是れ時の然らしむる故也。經に曰く有四導師、一名上行云々』。是れまさしく上行菩薩の使命を言明したるものに非ずや。翌年（文永九年）二月最蓮房に與へたる所謂る生死一大事血脈鈔亦明に是の意を表はして曰く『上行菩薩末法今の時、此法門を弘めむが爲に御出現之れあるべき由經文に見え候へども如何に候やらむ。上行菩薩出現すとやせむ、出現せずとやせむ。日蓮先づ粗々弘め候也』と。斯くて敎相の釋義として日蓮一代の大文章たる開目鈔は、主として是の一大事實の宣言の爲に草せられ、法體の主判として日宗全門の祕鑰なる觀心本尊鈔亦是の說明の爲に著はされ、如說修行鈔はた是の信仰の偉大なる勢力を代表し、壯厲激越なる法華折伏の宣戰狀となりて全國門下の志氣を鼓舞しぬ。是に於て彼れは一代聖敎皆是れ吾が一身の註脚のみと喝破し、勸持品二十行の偈は日蓮だに是國に生まれずば世尊の大妄語となり、本化地涌の菩薩は提婆が虛誑罪に墮すべしと揚言し、日蓮法華經の故にたび〳〵流されずば『數々見擯出』の數々の二字を如何せむと高語し（開目鈔）今の

現境に非ずして何ぞや。 日蓮は法華經の行者也、時は末法の初めに當り、國は東方の悪土に合し、而して現身を以て勸持品二十行の預言を實現す。 是の如きは南岳、天台、妙樂、傳敎等の尙ほ遙に及び到らざる所、本化の上行菩薩に非ざるよりは誰れか能く佛讖を顯證して此の如く的確なるを得むや。 佛にして妄語の神ならむか、則ち已む。 苟も久遠實成の三界の敎主ならば、日蓮亦必ず上行菩薩ならざるべからず。 日蓮は疑ひもなく是の如く思惟し、是の如く確信したりし也。

六　上行菩薩としての日蓮

今彼れの遺文に就いて檢するに、是の信念の曙光は、彼れが越後の寺泊より其隨一の檀越富木氏に與へたる所謂る寺泊御書に顯はれ初めぬ。『當世三類の敵人は之れあるも地涌の菩薩は一人も見えざるか、日蓮は八十萬億那由陀の諸菩薩の代官として之を申す』と言へるもの彼れの爾前の書曾て見ざる所の文意に屬するを見るべし。 越えて一月、佐渡より同じく富木氏に送りたる消息に至りては文義更に明晰なるものあり。『寺泊より法門を書き遣はし候ひき。 推量候らむ、已に眼前

我は身命を愛まず、但無上道を惜む。我等來世に於て佛の所囑を護持せむ。世尊自ら當に知り給ふべし。濁世の惡比丘、佛の方便宜しきに隨つて說く所の法を知らず、惡口して嚬蹙し、數々擯出せられて塔寺を遠離せむ。是の如き衆惡をも、佛の告敕を念ふの故に皆當に是の事を忍ぶべし。(文意不通の處には假りに釋字を添加す)。

是の偈に所謂る罵詈は言ふまでも無し。刀杖を加ふる者とは即ち東條景信等の一輩に非ずや。惡世の比丘邪智にして、增上慢なるものは當時の十宗の僧侶に非ずや。阿諫若(寺院)に在りて白衣空閑、無知の人に恭敬せらるゝこと阿羅漢の如く、名利に貪著して法華經の行者を誹謗するものは、即ち良觀、行敏、道隆、隆觀等の當時の所謂る諸高僧に非ずや。國王大臣に向つて我を譏毀するものとは即ち持齋念佛眞言師等が北條氏に嗾訴せるの謂に非ずや。身命を愛まずして但無上道を惜み、是等一切の諸惡を忍受して佛の付屬を護持せるものは即ち日蓮に非ずして誰ぞ。所謂る數々擯出せられて塔寺を遠離せむと謂へるものは、即ち居處を追はるゝこと二十餘度、一度びは伊豆に放たれ、二度びは佐渡に流されたる日蓮其人の

諸々の無智の人、惡口罵詈等及び刀杖を加ふる者あらむ。我等皆當に忍ぶべし。惡世中の比丘、邪智にして心諂曲なり。未だ得ざるを既に得たりと謂ひ、我慢の心充滿せむ。或は阿練若に納衣にして空閑に在り、自ら眞道を行へりと謂ひて法華經を弘むる者を輕賤する者あらむ。彼れ利養に貪著するが故に法を說き、世間無智の人に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならむ。是の人惡心を懷き常に世俗の事を念ふ。唯名を阿練若に假るのみ。好むで我等法華經を弘むる者の過を出し、而して言はむ、此の諸々の比丘等は利養を貪る爲の故に外道の論議を說き、自ら此經典を作て世間の人を誑惑し、名聞を求むる爲の故に是經を分別すと。彼等常に大衆の中に在りて我等法華經を弘むるものを毀らむと欲するの故に、國王、大臣、婆羅門、居士及び餘の比丘衆に向ひ誹謗して我が惡を說いて謂はむ、是れ邪見の人にして外道の議論を說くのみと。我等佛を敬するの故に悉く是の諸惡を忍ぶべし。濁劫惡世の中には多く諸々の恐怖あり。惡鬼其身に入りて我を罵詈し毀辱せむ。我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を著け、是經を說く爲の故に此の諸々の難事を忍ぶべし。

に目覺めたり、永遠に目覺めたり。二十年來の疑惑は霧の如く散じたり。法華經の預言は是の覺醒によりて更に新しき生命を得ぬ。東海の佛子日蓮の生涯は俄に寂光寶土の光明に照されて直に佛識の現證となりぬ。彼れが過去は久遠の過去となりぬ。彼れの未來も久遠の未來となりぬ。彼れが接觸したる一切の衆生と國土と凡て彼れの一身に關聯して妙經預言の註脚となりぬ。彌勒、天台、妙樂、傳敎等は彼れによりて初めて妄語の罪を免れたるのみならず、一代佛敎の歸着は彼れによりて初めて現前の事證となりぬ。是の大自覺の喚起せられたる時、鎌倉の流人、安房東條の旃陀羅の子日蓮は、一躍して本化地涌の上首上行菩薩となりぬ。

彼れは如何にして是の自覺に到達したりしや。吾人は法華經勸持品の所謂二十行の偈が是の自覺を彼れの心中に喚起したる重なる媒介者なることを疑はず。何となれば末法の大導師の一身上の經歷に關する預言は殆ど是の一偈の中に包括せらるれば也。されば日蓮にして自家二十年の境遇が歷々として是の預言の現證なることを認識したる時猛然として自ら省悟する所あるは蓋し自然の事なるべし。偈の文に曰く

しところ。彼れは唯一個の誠虔なる法華經の行者たるに過ぎざりき。法華經の行者として一身を法王の宣示に委ね『如說修行』の大願に一住して其他を知らざりき。彼れは末法の導師の爲に預言せられたる勸持品二十行の偈を讀みて、あらゆる迫害を忍受すべき一大決心を固め、危害の身に及ぶ每に佛識の空しからざるを喜べり。是の如くにして折伏逆化の事業に當ること二十餘年。今や厪に龍の口の斬首を免れて遠く北海の流人となりぬ。あゝ惡世惡國並び存して法華經の行者身を容るゝに處なし、而かも上行菩薩は遂に出現せざるべき乎。彼れは疑ひもなく、是の幽深なる疑惑を抱いて北海の配處に向ひし也。

五　疑問の解決、一大醒覺

然れども是の疑惑の解決せらるべき日は漸く近きぬ。一大醒覺將に近きにあらむとす。

塞外十月、北地風荒く波高し。彼れは暫らく越の寺泊に泊して天候の回復を待ちぬ。匆劇の境を離れて忽ち幽靜の地に客たり、感懷果して如何。嗚呼彼れは遂

め五百年、即ち佛滅後二千年より二千五百年迄の間なること、並に其出現の處の東方の小國日本國なることを信ぜり。是の如き信仰を固持せる彼れは果して彼れ自身に就いて如何の感想を有したるべき乎。彼れの時は佛滅後二千二百餘年に當る、所謂る末法の初めに非ずや。彼の國れ土は即ち日本國に非ずや、取りも直さず、彼れは少くとも上行菩薩の出現すべき時機と國土とを共有せることを覺らざる可らず。是の自覺も彼れの宗教的生活の初めより存在せることは、遺文明に是を證するのみならず、法華經の行者としての彼れが不撓なる精神と遠大なる抱負とは主として是の自覺に本づきしことは極めて明瞭なる事實なりとす。既に時代と國土との契合を確信したる法華經の行者たる彼れは、上行菩薩自らの出現に關して如何の觀察を有せし乎。法華經の預言にして眞ならば、若しくは大覺世尊にして妄語の佛に非ずむば、是の時、是の國、既に上行菩薩の出現を見ざるべからず。是の如きは必ずや妙經色讀の間に於て日蓮の胸中に日夕往來したる疑惑にして、又同時に苦悶ならざるべからず。

然れども本化の大菩薩を以て自ら讃するが如きは、彼れの恐くは想ひ及ばざり

日蓮にとりて佐渡は即ち末法の壽量品なりき。鎌倉の反對者が彼れを北海の孤島に放逐したる間に、法華折伏の使命を付屬せられたる末法の大導師は、更に此の謗法の國土に大法雨を雨らすべく出現しぬ。末法の大導師とは言ふまでもなく本化地涌の上首上行菩薩にして、而して此の一大使命を自覺したる者は即ち日蓮其人に外ならざりき。

如何にして日蓮は上行菩薩の自信に到達し得たりしか。是れ彼れにとりて健乎感應の一大事に屬し、固より傍人の交啄を容れざるべしと雖も、而かも尚ほ其の事蹟の彷彿を想ふに足るものあり。吾人は玆に彼れの信仰上の徑行に就いて其の心事を觀測せざるべからず。

第一、最も明なるは、彼れの『不惜身命』の一切の云々は法華經の敎理及び預言に對する絶對の信仰に本づく事也。彼れは末法敎化の爲に展開せられたる顯本遠壽の一大眞理を信ぜり。本化地涌の菩薩等が是の使命の爲に靈山の會下に招集せられたるを信ぜり。而して是の使命の付屬を受けたるものは彼等の上首たる上行菩薩なりしことを信ぜり。彼れは又是の上行菩薩の出現すべき時の末法の初

井が滔に梟して早く、一佛乘に歸依せずむば、國家の滅亡遂に避くべからざる也と。辭意激厲を極め、氣魄一世を呑吐す。十宗の緇素怨嗟措くところを知らず、百方詭を搆へて刑戮を幕府に逼る。幕府遂に彼を捕へて斬に處す。是の時彼れ昂然として曰く、死は素より我れの期待するところ、是の臭骸を法華經に捧ぐるは糞土を以て黄金に換ゆる也。『僅かの小島の主の威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき』と。

然れども天乎、命乎、彼れの頭は龍の口に落ちざりき。越えて一月、彼れは警護の武士に伴はれ、信山越水を踰えて遠く北海のほとりに漂泊らひぬ。關外秋深くして野に悲風あり、眸を放てば北洋の煙波蒼茫として遙に青螺の天邊に横はるを見る。

是れ即ち流人日蓮の配處佐渡が島なりき。

嗚呼佐渡が島！其處には如何なる運命の是の希有の流人を待ちつゝありや。

四　疑問

佛讖に基きて内訌外患の近きにあることを警戒せる一大國家的預言は青天の霹靂の如く上下の耳目を聳動しぬ。衆怨遂に爆發せり。數百の暴民は幕府の默許の下に彼れが松葉が谷の庵室を燒撃しぬ。北條氏は罪名を糺さずして彼れを伊豆に流しぬ。年を越えて赦され歸るや、門下皆折伏を緩うせむことを請ふ。彼れ儼然として曰く、折伏逆化は聖經自爾の本義、釋尊弘法の遺範也、佛讖昭々として火を睹るが如し、法華經の行者一日も此事無かる可らずと。侃諤益々力む。日蓮宗聖日の一たる所謂る小松原の法難は是の間に起り、彼れの額上は是より永く深大の刀痕を印しぬ。

斯かる間に彼れの精神に一大覺悟を促がすべき時機は漸く迫り來りぬ。文永五年の初め、蒙古大陸連勝の餘威に乘じて書を我に送り、暗に侵逼の禍心を示す。上下驚怖し人心洶々たり。正に是れ日蓮が八年前に發表したる安國論の預言を實にするもの、適中恰も符契を合するが如し。彼れは是に於て十一通の書を裁して北條氏を初め、幕府の權家、府中の大寺に送り、大に往年の誹謗を詰り、預言の現證に據りて改悔の實を促がし、揚言して曰く、極樂寺の良觀、建長寺の道隆等の頭を由

と嗟嘆しぬ(蓮長とは彼れが當時の名なりき)。恰も基督が其の故郷ナザレに歸り、以賽亞の預言を誦して『是の錄るされたること今汝等の前に應へり』と言ひし時の如く、何人も日蓮の言を以て常識あるものゝ口より出で得べしと思惟する者あらざりき。

然り、法華經の行者たる彼れの宣言は常識を超越する天來の師子吼なりき。彼は狂と呼ばれ痴と嘲けられながら、遂に其の故郷を追はれぬ。かくて恐らくは何人も此の一狂僧の前途を思念する者無かりし間に、日蓮の名は幾もなく天下の霸府なる鎌倉の中央より響き渡りぬ。彼れは淨土、禪門の全盛を極めつゝある是の大霸府の廣衢に於て、彼等の熱心なる歸依者にして且外護者たる北條氏の權威を嘲りつゝ、公々然として四個の宣言を標榜し、諸宗無得道を絶叫して一日も緩怠することあらざりき。言ふまでもなく、あらゆる嘲笑罵詈は彼れの身邊に集れり、瓦石糞土は到る處に雨の如く彼れの頭上に降り懸れり。然れども是れ唯ます〳〵彼れが折伏の決心を堅うし、逆化の氣焔を昂むるのみなりき。かゝる間に立正安國論の大論策は彼れが立宗の大本、一期の遠鑒として世に現はれぬ。三災七難の

を修養し、信念を陶冶すること前後十有五年、內外古今の典籍一も渉獵せざること無し。彼れ今方に長き遊學の旅路より其の故鄕の寺門に歸り來り、其の故舊及び檀下の大衆を集めて教を說かむとするなりき。遠近傳へ聞き、新來の學僧說く所の教法の如何に清新なるべきかを想ひて、來り集るもの甚だ多かりき。是れ天台大師が『後の五百歲、遠く妙道に沾はむ』と預言せしより七百年、傳教大師が『正像やゝ過ぎて末法太だ近きにあり、法華一乘の機是れ正しく其の時』と預言せしより四百年の後、時は方に建長五年四月二十八日。而して彼れとは言ふまでもなく日蓮なりき。

日蓮が是日の說法は會下大衆の期待せる如く實に清新なるものなりき。恐らくは佛法二千年の歷史に於ける論師の說よりも清新なるものなりしならむ。彼れは口を開いて先づ一切現行の宗門を否定し、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と宣言し、法華經の行者たる彼れの唱道する一佛乘の妙理に非ざるよりは一切の諸宗を排して凡て無得道と喝破しぬ。聽衆は皆是の意外の傲語に驚きて或は怒り或は笑ふ。同門の僧侶袂を連ねて席を去り、互に顧みて『嗚呼吾が蓮長遂に狂せり』

教々典に對する高等批評の見地よりすれば、這般の問題亦全然別種の意義を有し來るやも知るべからず。然れども是の如きは本論の毫も關知する所にあらず。吾人の主旨は上行菩薩の自信に到達するまでの日蓮上人の教判及び信仰上の經歷を明にするにあり。是の目的に向つては日蓮其人が如何の知解、如何の信念の下に其の宗教的性格を修養したりしかを看取し得れば則ち足る。吾人は是點に於て特に讀者の注意を請はむと欲す。

進莫、日蓮は如何にして上行菩薩の自信に到達したりしや。是の自信は彼れの性格、信仰、事業の上に如何の影響を與へしや。吾人は是に於て少しく日蓮の傳記に就いて語るところ無かるべからず。

三　法華經の行者としての日蓮

多寶の塔閉ぢ、靈山の會散じてより、春去秋來二千二百有餘年。日本東海の邊土安房國清澄寺に一個の小僧ありき。彼れ素漁夫の子、年十二にして家を出で、十八にして僧となり、爾來專ら聖典の研究に身を委ね、天下の名山巨刹を歷訪して智見

侶等、名を正義に假り、力を權家に求めて彼れを誹謗せむ。彼れは是等一切の迫害を忍受し、身命を愛せずして唯無上道を惜むものならざるべからず。彼れは是れが爲に『數々擯出せられ』又幾度か寺塔住居を遠離せむ。而かも彼れは唯大覺世尊の告敕を念ふの外其の他を知らざるものならざるべからず。

嗚呼時は方に到りぬ、地も亦定まりぬ、是の如き人獨り未だ出でざる乎。

是時に當り、現身の證悟を以て是の疑問に最後の解決を與へむが爲め、佛讖の攝理によりて日本鎌倉を追はれたる一個の僧ありき。彼れ名は日蓮、是の一大使命の將に彼れの頭上に落ちむとするの時、彼れは方に佐渡流竄の途上にありき。

* * * * * *

是に於て一言の讀者に告ぐべき事あり。吾人が上文述べ來りたる上行菩薩の付屬と其の出現の時處位とに關する敎相判釋は、毫も吾人は私意に出でたるにあらず。天台、妙樂、傳敎等の繼紹授受したる定解にして隨つて亦佛敎々理の上に於ての是等諸大師の傳統を承けたる日蓮の敎判たりし也。台家以外の諸宗派にありては或は是の如き敎判を認容せざるものもあるべく、今日の學者等が所謂る佛

「結恨を懷かむ」と云へるを初めとして、法師品には『此經は如來の現在すら猶怨嫉多し、况や滅度の後をや』と說き、寶塔品には所謂る六難九易の敎を述べて、須彌山を擲つも、足指を以て大千世界を動かすも、若くは手に虛空を把て遊行するも、或は大地を爪上に置て梵天に昇るも、尙ほ末世に於て法華經を受持するの難きに如かざるを告ぐる等、策勵戒飾到らざる所無し。殊に勸持品と不輕品との二者の如きは全篇の文字殆ど皆法華經の行者に對する迫害の覺悟を垂示せるものに非ざるは無し。其の世運の衰頽を述べ、敎法の墮落を描き、此末法の行者たるものは所謂る三類の强敵に反抗して不惜身命の苦節を忍ばざるべからざるを說くところ、文意尤も激越を極む。是れ即ち上行菩薩出現の國土の狀態に關する釋尊の預言として見るべきものとす。大集經に所謂る『鬪諍言訟、白法隱沒』とは即ち是れ也。

是を以て之を見る、時は即ち末法の初め、地は即ち日本國。時と地と旣に定まりぬ、然らば即ち其人は如何の人ぞ。勸持品說く所の如くむば、彼れは惡世の中に法華經の眞理を弘むる爲に身命を惜まざる者ならざるべからず。諸々の無智の人惡口罵詈して或は刀杖瓦石を加ふるものあらむ。邪智諂曲の比丘、俗惡鄙吝の僧

關して何等信憑すべき徵證を與へずと雖も、後世の論釋中には多少の預言的文字無きに非ず。彌勒菩薩の瑜珈論に『東方に小國あり、其中唯大乘の種姓あり』と謂へるは、妙經流布の國土の印度以東にあるを示せるもの、而かも特に記して小國と謂へるは注意すべき文意なりとす。肇公が翻經の記に大師左手に法華經を持し、右手に鳩摩羅什の頂を摩して授與して曰く、『佛日西に入りて遺燿將に東に及ばむとす、此の經典東北に緣あり、汝愼みて傳弘せよ』と。印度より東北の國土は支那に非れば韓半島、然らざれば日本あるのみ。傳敎是を擬釋して曰く、『代を語れば則ち像の終り、末の初め、地を尋ぬれば即ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時也』と。知るべし、彼れが明に彌勒の所謂る東方の小國を以て日本國なりと信せしを。日蓮亦傳敎の擬釋を承け、更に其の時代の情態と一身の現證とによりて此の信念に動かすべからざる根據を與へぬ。

所謂る時代の情態とは何ぞや。他なし、末法行者の境遇に關する法華經の預言也。抑々世尊法華經を說くや、此經を受持し、弘通するの極めて困難なるを誡むること一再に止まらず。方便品に『此經を讀誦し書持するものを見て輕賤憎嫉して

は後世學者の定解にして、上行出現の時期は是の定解によりて永く確定せられしなり。而して斯かる解釋の由て來る所を尋ぬるに、一は本文の末法、末世等の文字に參照せる結果ならむも、主として大集經の有名なる五個の五百歲の預言に起因せる者の如し。即ち此經第五十一に世尊月藏菩薩に告げて曰く、『我が滅後に於て五百年の中は解脫堅固、次の五百年は禪定堅固（以上正法一千年）、次の五百年は讀誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固、（以上像法一千年）次の五百年は我が法中に於て鬪諍言訟あり、白法隱沒せむ』と。是れ明に末法の初めに於て教法の堙滅を預言せるものにして、かの『後五百歲中』に對するの擬釋として前後恰も符契を合するものに似たり。是れを以て妙樂、天台、傳教等皆是の解釋を取り、日蓮亦數々是を以て其の門下に教へたり（撰時妙、法華取要抄、曾谷入道殿御書等）。是の如くにして、法華經弘通の付屬を受けたる上行菩薩が末法の初め、即ち佛滅後二千年より二千五百年までの間に於て出現すべしとは、佛說の預言を信ずるものにとりて疑ふべからざる信念なりし也。

時代は既に末法の初めに定まりぬ、然らば則ち其の國土は如何。佛說は是點に

上行菩薩てふ日蓮の自信は、畢竟釋尊の預言に對する絶對の信仰と、妙經色讀の行者としての一身の證悟とに本づく。されば吾人は先づ彼れが信仰上の經歷に就いて少しく考査するところ無かるべからず。蓋し是の如きは日宗學徒が常套の談義ならむも、而かも本論の序次として日蓮の立脚地を會得する上に於ては極めて重要なる事項に屬す。

佛滅後に於ける法華經弘通の使命は、既に十地地涌の上首たる上行菩薩に寄託せられたり。然らば即ち彼れ上行の出現すべき歳時は何れの年代にして、方處は何れの國土なりや。將た又彼れが依て以て其の使命を果すべき當體は抑も如何の人、もしくは如何の神ぞ。是等の事情に關する釋尊の預言は如何。

吾人は先きに上行出現の佛讖を記して末法の初めと謂へり。是れ暫らく文底の本意に依れるのみ。法華經には單に或は末法と云ひ（法師品、分別功德品）、或は末世と云ひ（法師品、安樂行品）、或は惡世、濁世、濁惡世（勸持品等）等と云へるの外、特に末法の『初』の明文無し。唯藥王品に『我滅度後、後五百歳中、廣宣流布、於閻浮提、無令斷絶……』の文字あり。此文中の『後五百歳中』の五字を以て正像二千歳後の五百歳、即ち末法の初めとする

ぬ。是の故に汝等如來の滅後に於て一心に受持し、讀誦し、解説し、書寫し、説の如く修行すべし』と。法華一經の主眼たる末法付屬の一大事は玆に初めて成就しぬ、世尊成道の本願は玆に初めて全きを告げぬ。多寶の大塔は玆に初めて其の出現の因緣を了しぬ。十方諸刹の諸佛は是の一大慶事の歡喜の爲に廣長舌を出だして無量の光を放ち、謦咳彈指の響は普く三千の世界に到り、地は六種に動き、虚空に讃美の聲あり、天華繽紛として雨の如く降り、瓔珞旛蓋の類雲の如く十方より集り、變じて五彩の寶帳となりて諸天諸佛の上に搖曳きぬ。

*　*　*　*　*　*

是の如きは法華經に於ける所謂る結要付屬の次第也。本化地涌の上首たる上行菩薩の上に寄托せられたる末法の大導師たる使命は、本論の大序として吾人特に讀者の注意を要めむと欲す。何となれば日蓮の品性、抱負、信仰を包括せる彼れが一代の本領は、實に『我は上行菩薩也』てふ一大自信に存すれば也。

二　上行菩薩出現の預言

邊を歴す。是の如きは靈山會下未だ曾て見ざるところ、彌勒菩薩が補處兼知の明を以てして尚ほ且つ一人も知らず。大衆皆疑つて念へらく、吾が佛成道このかた年處幾も無し。如何にして是の如き無量無邊の大菩薩を敎化し得たりしや。世尊是に於て初めて如來久遠の法門を開顯し、本因本果の妙理を說き、久成の妙經を付屬すべきもの亦久成の菩薩なるべきを示し給ふ。這の顯本遠壽の敎理こそは實に四十餘年の佛說を撥無して法華爾前の經典に全然新面目を與へたるもの、而して是の本門の開顯の由て本づくところは、地涌菩薩の本貫を明にして末法付屬の大事業を完成せむが爲に外ならず。

世尊既に衆疑を排したる後、分別、隨喜、法師の三功德品を說いて妙法受持の利益を讃歎し、更に不輕品に入りて折伏逆化の現證を示し、以て末法弘通の標範を垂れ給ふ。是に於て地涌本化の無量の菩薩、其の上首たる上行等の四大菩薩によりて佛前に誓つて曰く、吾等佛の滅後に於て廣く是の經を弘めて敢て退轉すること無けむと。世尊是を嘉納し、告知して曰く、善い哉上行菩薩、『如來一切所有の法、如來一切自在の神力、如來一切祕要の藏、如來一切甚深の事、皆是の經に於て宣示し顯說し

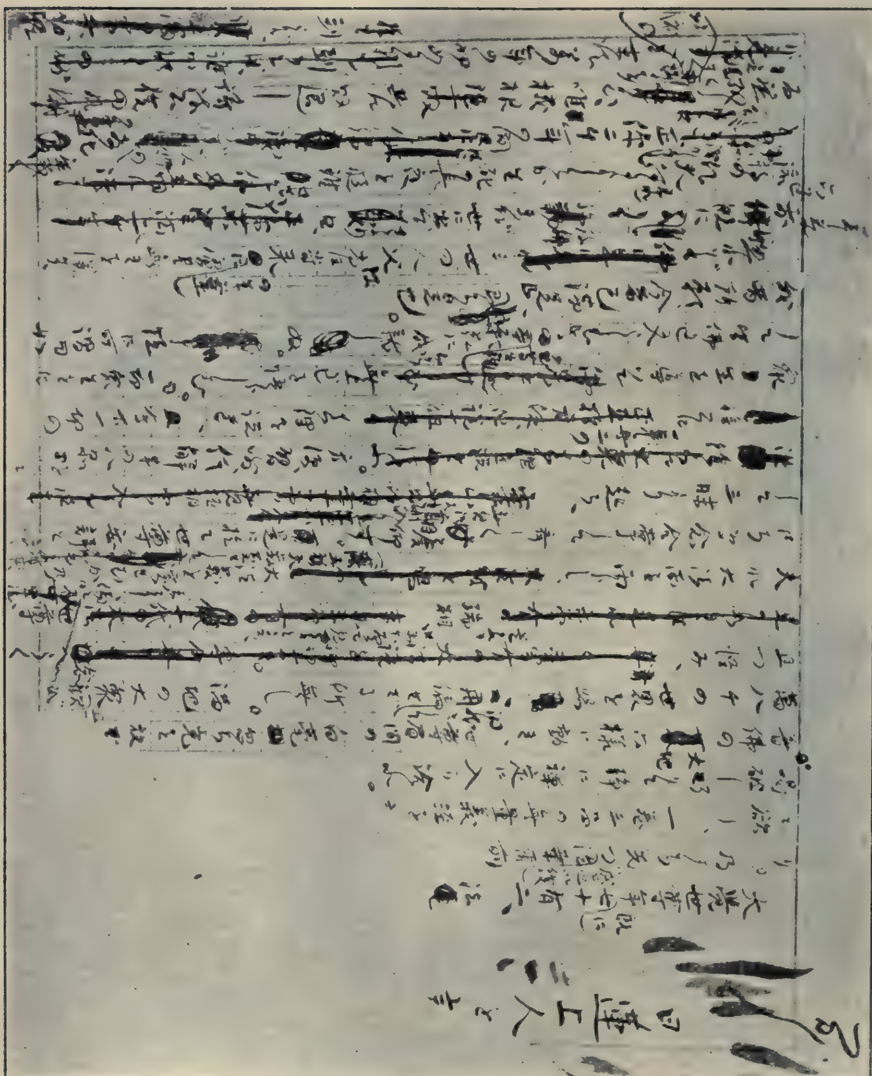
を得ざる也。

世尊乃ち更に法師品を說き、授戒の沙門、稟道の弟子に就いて妙經の一偈一句を力に隨つて唱說する大功德を推奬し、進みて寶塔品に入りては三度び末法弘通の付屬を提唱して佛前の祈誓を促がし、提婆品に入りては世尊の成道と龍女の作佛とにより、前例の證悟を以て後來の信解を要め給ひぬ。是に於て藥王、勢至、彌勒等の二萬の菩薩既に作佛の授記を得たる五百の阿羅漢、並に會下無數の比丘、比丘尼等齊しく佛前に進み、固く不惜身命の志を持して末法の化導に當らむことを希ふ。他方佛國の八恒河沙に過ぎたる無數の菩薩亦同時に詣りて、同じく濁世弘通の付屬を得むことを望む。世尊儼然として是等の菩薩大衆に告げて曰く、已みね、善男子、汝等の此經を護持することを須ゐず、我が娑婆世界に六萬恒河沙の菩薩あり、彼等我が滅後に於て能く此經を護持し、讀誦し、弘通せむと。梵音十方に徹し、三千悉く震ひ響く。是時大千世界の國土皆震裂して無量千萬億の菩薩同時に地中より涌出しぬ。法華經本門の序品たる從地涌出の大觀是の如くにして展開せられぬ。

地涌の菩薩、身は皆金色にして三十二相無量の光明あり、儀格堂々として威容四

つ怪み、念へらく是の如き瑞相は未だ曾て有らざる所、世尊夫れ大法雨を雨らし大法義を演ぜむか。乃ち專念合掌して齊しく瞻仰す。無見頂相遠く雲に入り、五天寂寞として聲なし、偏へに一大事因緣の顯現に待つところあるものゝ如し。是に於て世尊安庠として三昧より起ち、方便、譬喩、信解等の八品を以て徐ろに一乘無待の眞理を證し、會下一切の衆生を導いて無上道を悟らしむ。『一切衆生を化して皆佛道に入らしむ』る世尊出離の本願玆に即ち成就しぬ。經に所謂る『如我昔所願、今者已滿足』即ち是れ也。

然れども三世の人父は尙ほ當來の生靈に慮りなきを得ず。若し夫れ前師旣に去りて後佛未だ世に出でざるの日、六道流轉の凡夫それ何によりてか長夜の生死を脫離せむ。佛緣未だ淺からざる正像二千年の間こそ權敎人師の敎化も尙ほ庶幾くは力あるを得べけむ。唯信解の機根共に敗退し、謗法不信に充滿すべき末法萬年の初めに到らば、國土と衆生と共に偏へに妙法華經の開顯を待つて初めて救濟せらるゝを得む。然らば則ち玆に末法の大導師を撰定して妙經の弘通を付屬し了るに非ざれば、世尊身後の慈悲未だ全きを得ず、出離の本願亦具足せりと謂ふ



日蓮上人とは如何なる人ぞ

（日蓮上人と上行菩薩）

今の世の凡俗に飽きたるものは、願はくは是の篇を讀め。日本は如何に墮落するとも、吾人は其の同胞に日蓮上人を有することを忘るゝ勿れ。彼れの追懐は力也、信念也。諸君、若し學究先生の所説を聞くの餘暇あらば、吾人と共に是の一大偉人を研究せざるべからず。

一　法華經に於ける上行菩薩

大覺世尊年既に七十有二、法機漸く熟し、一代の嘉會將に近きにあらむとす。乃ち先づ成道以後、法華爾前に於ける權實兩敎の起盡を明にせむと欲し、一巻三品の無量義經を説き、『四十餘年未顯眞實』と喝破し了りて靜に禪定に入り給ふ。是の時四種の天華雨の如く降り、普刹の大地六樣に動き、世尊眉間の白毫忽ち光を放ちて東方萬八千の世界を照し、洞然として周徧せざる所無し。滿地の大衆且つ歡び且

して統一的解釋を與ふるの實行家也、觀心自覺の上に立脚せる意力あり、情熱ある實行家也。口耳三寸の學の如きは今の學者先生をして鬬はらしめよ。人生は知識にあらずして事實也。吾人が靈性の安慰と希望とは是の事實の解釋の上に繫れり。吾人は是の事實を色讀し、身現し、其の大いなる人格の云爲によりて吾人が本心の證據を促がす程の一大實行家の出でむことを望む者也。

嗚呼吾人は求めたり、然れども與へられざる也。尋ねたり、然れども遇はざる也。叩きたり、然れども啓かれざる也。吾人民衆の歎求は遂に荒野に叫べるものゝ如くなるべき乎。昔者基督の敎を說くやエルサレムの民皆駭きて曰く、この人は學士の如くならず、權威を有てるものゝ如く敎へ給ふと。嗚呼今の時、誰か吾人に權威を有てるものゝ如く敎ふるものぞや。

(卅五年一月)

の理論を與ふ。而かも求むるものは遂に與へられざる也。二十世紀の文明とは是の如く人性本然の要求を無視するものなる乎。

吾人は敢て現代の思想界に向て、其の進路を誤れることを警告せむ。吾人の見る所を以てすれば、今の學者の多くは器にして人に非ざる也、能力にして人物に非ざる也。吾人は學者の名譽を是認す、然れども吾人は學者となるの前に先づ人たることを要するに非ずや。人として缺くる所あるの學者は、學術を知りて人生を解せず、一切の道敎學智を擧げて自家書齋裡のものとなさむとす。あらゆる僞學は、是の如くにして世に起り、理義日に多端にして收拾する所を知らず、顧みて人生の歸趣に關しては茫然として與る所無し。本邦現代の思想界は即ち其の好事例にあらずや。

是を要するに、あらゆる人生の問題を藐視せる今の學者の學究的態度は吾人の毫も德とする所に非ず。吾人は今の思想界が吾人民衆の歎求に應じて改造せらるゝの時一日も早からむことを希望する者也。畢竟今の時要するものは學者に非ずして實行家也。宗敎の方面に於ても、哲學、敎育、道德の方面に於ても、人生に對

に石を與ふるものに非ずや。人物の修養を望み、觀心自得を希ふものを動かすに區々たる理義辨口の末義を以てするは、吾人其の何の故なるを解せず。德敎の爲めの倫理學は植物學の如く講義し若しくは領得せらるべきものに非ず。夫の多少西洋倫理學の著書を讀みたりと謂ふの外、何等常人に異なる無き白面近眼の書齋的道學先生をして靈性化導の人生一大事緣に關はらしむるが如きは、偶々現代思想界の一缺點を暴露せるものと謂ふべし。夫れ唯倫理學說の講義あるのみにして而して道德の感化なく、倫理學者のみありて德行家無し。世を擧げて倫理修身を叫ぶも、名敎地を掃ひ、社會公私の腐敗日に益々甚しからむとするもの、毫も怪むに足らざるを見る也。

七

讀者よ、吾人をして徒に現代を誹謗するものと爲す勿れ。吾人は靈性の安慰の爲に宗敎を要し、理性の平和の爲に哲學を要し、人格の修養の爲に敎育、道德を要す。是れ豈最も簡明なる人性本然の要求に非ずや。而して今の思想界は宗敎の代りに宗敎の學說を與へ、哲學の代りに哲學の歷史を與へ、敎育道德の代りに敎育、倫理

げて道德上無用なりとするものに非ずと雖も、其の元始的動力が知識以上の或者なることを以て爭ふべからざる事實なりと信じ、而して同時に是の或者が多くの場合に於て所謂る人物の感化に由來することを認むる者也。吾人は是の點に關して多言するの遑無し、唯是を古賢先哲の遺業に鑑み、吾人自らの證悟に省みて敢て是の如く信ずと云ふを以て足れりとせむ。たゞ見よ、釋迦、基督、日蓮の敎は古今を通じて渝らず、其の道の獨り汚隆あるは如何。孔子の敎は論語十卷の外に出でざるべし、而れども誰れか孔子自らの口より其の敎を聞くことの、猶ほ獨り其の書を讀むが如けむと言ふものぞ。大奈翁の下には幾個の小奈翁あり、大藤樹の下には幾個の小藤樹ありき。其の事にして能く其の道を述べ、其の文にして能く其の神を傳ふべくむば、今の道學先生の門下にも幾多の賢哲あるべし。否道學先生自らの如きは實に大賢先哲を凌駕せる大人物となり居らざるべからず。

吾人をして忌憚なく言はしめば、今の社會、殊に敎育社會が必ず倫理學の書齋先生に託して道德修身の大事に當らしむるは、實に謂はれ無きの甚しき者と謂はざるべからず。道德其物を要する者に向て倫理學説を講ずるは、是れ氷を求むる者」

是を校舍に說き學會に講ずるや、唯是れ理のみ、論のみ。或は倫理學說の異同を述べ、或は道德意識の發達を說き、或は德名の品彙稱謂を論じ、以て彼等の所謂る倫理修身の趣旨を得たりとするもの丶如し。而して斯かる倫理修身の學者は如何の人ぞと見れば、多くは是れ白面書齋裡の學士のみ。德行操持の人に勝れたるものあるに非ず、令名佳聞の世に仰がるゝものあるに非ず、たゞ〳〵西洋倫理學の知識に於て多少常人に超ゆるあるのみ。嗚呼是の如き人をして是の如き事業に當らしめ、以て德教振作の大事を成さむとす、天下何物の突梯か能く是に如かむや。

夫れ道德の事たる言ひ難く說き難し、唯一事の爭ふべからざるは、そが觀心修證を以て第一義と爲すこと也。觀心修證の事固と自得、理以て推すべからず、辨以て强ゆべからず、要は健孚感應の不可思議と謂ふの外無し。如何にして是の不可思議を現じ得べきやは、やがて教育者、倫理學者等の研究すべき一大問題なりとす。然れば是の問題は古より滿足に解決せられずして今日に及べり、今日以後も恐らくは解決せらるゝの時期無かるべし。而かも一事の爭ふべからざるは、道德の感化が其の人に在りて其の法に存せざる事也。吾人は決して一切の道教學習を擧

吾人の要求の顧みられざるは啻り宗教、哲學、教育のみに非ざる也。吾人は今の所謂る道學先生に向て吾人の苦衷を披瀝せざるべからず。

今の思想界に倫理道德の學者程多きは無く、倫理道德の著書程夥しきは無く、倫理道德の學會程繁きは無し。學校とし云ふあらゆる學校は、男女長幼の別無く、其の高等學校たると、中、小學校たるとを論せず、商工業、醫術の專門學校たると、將た音樂、美術の學校たるとを問はず、悉く皆倫理修身科の備へあらざるは無し。地方の教育者が每年開催する所の夏期講習會に於て最も多く歡迎せらるゝものも亦倫理修身の學者也。倫理修身の事は日常の生活と最も密接の關係を有す、そが一般社會の感興を惹起するの爾かく大いなる、素より深く怪むに足らざるべし。然れども吾人をして問はしめよ、今の世の所謂る倫理修身とは果して如何なる事ぞ、倫理修身の學者とは果して如何なる人ぞ、と。

吾人は身久しく學界に生息せるもの、教育社會の現狀に就いては、其の觀察恐らくは大過無きを信ずる也。而して吾人の見る所によれば、今の所謂る倫理修身とは倫理に關する理論、學說の謂にして、道德其物の事本の謂にあらず。今の學者が

ぎて而して教育家其人の甚だ少きに過ぐるを憂ふ。夫の白面の書生、ラインを唱へ、キルマンを稱し、ベルゲマンを説くもの、世の所謂る教育學者に非ずや、而して彼れ等如何ばかり人生を解せりとするぞ。文字を以て記されたる知識の多くは是れ形式のみ、符號のみ、是を註解義譯するものは人生也。彼等果して是の人生の上に鏤刻せられたる大文字を色讀し得たりしか。夫の旦に學校を出でゝ夕に人に教へ、漫に先哲の名義を列ね、恣に外人の所説を抽き、觀心自得の工夫なくして徒に新陳是非を喋々するもの、吾人を以て見れば殆ど無意義の閑事業のみ。かゝる輕浮の輩をして事に教育に當らしむ、人の子を賊ふ無くむば幸也。畢竟吾人民衆の要するものは教育其物にして教育學に非ず、教育家其人にして教育學者に非ず。若し空論臆説の流行を以て教育の盛大をトすべくむば、今の世の如きは蓋し教育の全盛時代ならむ。唯教育其物の實効索然として擧らず、世道人心日に頽廢に趣きつゝある恐るべき現前の事實は、何處にか其の解釋を求むべき。吾人は今の思想界に向て三思を促さゞるを得ざる也。

六

らざる可らずとせば、夫の飢えたるものを如何せむや。良し暫く彼等の訓ゆる所に隨はむ、而かも哲學史に通曉せりと稱する幾多の學者の中、一人の自家の哲學を吾人に敎ふるもの無きは何ぞや。假令ひ過去幾千年の思想を了するも、そが吾人が現在の要求に應ずる者に非ざらむか、吾人民衆に於て何の德とする所ぞ。吾人の邦は希臘に非ず、獨逸に非ず、吾人の世は中世に非ず、十八世紀に非ず。夫の野に耕すものは尙ほ吾人の食を作り、夫の家に紡ぐ者尙ほ吾人の衣を織る。何ぞかの學者輩の空閑にして獨り世と爲す無きの甚きや。吾人遂に恨無きを得ざる也。

吾人は全く人を造らむが爲に敎育家を要す。而して今の思想界は唯敎育學者を供ふるのみ。彼等訓えて曰く、敎育學を知らずむば敎育家たる能はずと。願はくは謹で敎を受けむ。然れども希臘、羅馬の敎育史を知らずむば現代の敎育に與かる能はざる乎、兒童心理學の知識を離れては兒童の敎育は爲され能はざる乎。所謂る敎育學訓ふる所の敎授の形式と謂ひ、段階と謂ひ、訓練と謂ふ、素より須要の知識に屬せむ。而かも敎育其物は知解に非ずして實行也、才智學識とおのづから別種の事緣に屬するなからむや。吾人は今の世に於て敎育學者の寧ろ多きに過

ざる也。畢竟氏は學說によりて信仰を求めむとするもの、嗚呼是れ木に緣て魚を求むるものに非ずや。

讀者よ、吾人が村上氏を以て爾かく言を爲す所以を怪む勿れ。吾人は現代思想界の惡風潮が、誠虔摯實なる好個の宗敎家村上氏其人の如きをすら、尙ほ數十年來の名譽ある僧籍を抛ちてまでも冷靜枯淡なる一學究に化せしめむとするの事實を見て痛恨悲惋の思に堪へざるものあれば也。吾人は毫も村上氏を批難せむとするものに非ず。氏によりて博學達識なる宗敎學者を得たるは、我學界の爲に喜ぶ所也、然れども學界の喜びは吾人民衆の福祉と何の關はる所ぞ。飢えたるものにとりて望ましきものは麵包也、麵包の比較研究に非ざる也。

五

吾人民衆の歎救の顧みられざるは、啻り宗敎界に於てのみに非ざる也。

吾人は理性の平和の爲に哲學を要す、而して今の學者の與ふるものは哲學其物に非ずして哲學の歷史也。彼等訓えて曰く、汝等過去を知らざれば則ち現在を知る事能はずと。其れ或は然らむ、されど麵包を食ふに先ちて其の麵包の製法を知

是の理を唱へたりき。然れども是の理ありて初めて淨土門あり、法華宗ありきとは吾人の決して信ずる能はざる所也。凡そ信仰の祕密は健孚感應の一大事緣に屬す悟るべくして言ふべからず、理義文字はたゞ〳〵其の外面の形相を解釋するに過ぎざるのみ。是を以て眞正の信仰は常に理解に先つ、理論の結果初めて信仰あるに非ず。古より宗敎の創立が多く預言、天啓、默示に起原し、一切人智の究明を超絕するは實に是が爲にあらずや。　吾人は固く信ず、淨土念佛宗と本化妙宗とは畢竟一個の元始的事實也、法然、日蓮の偉大なる人物の上に感孚應受せられたる一個の宗敎的祕密也、而して撰擇集と開目鈔とは是の事後の註釋たるに過ぎざるのみ。村上氏が氏の所謂る批評的研究の態度によりて是の二人の事蹟に倣ひ得たりとするものゝ如きは、吾人の解する能はざる所也。

されば村上氏の所謂る批評的研究の如きは宗敎の立場より見れば畢竟閑事業のみ。其の興廢汚隆と何等著大の關係を有せざるのみと謂ふべし。村上氏が是を以て佛敎從來の研究に一生面を拓かむと言ふや可し、是によりて佛敎其物の頽廢を振興し、世道人心の腐敗を救治せむと言ふが如きは、吾人の得て信ずる所に非

なるべしと説き以て氏の態度が舊佛教徒の反抗に遭遇すべきを預想せり。

一宗教學者として是を見れば、村上氏の態度は實に歎賞に餘りありと謂ふべし。然れども吾人敢て斷言せむ、是の如きは決して宗教家の態度に非ざる也。佛教の批評的はた比較的研究や太だ好し、唯是によりて新信仰を求めむとすとは何の謂ぞ。信仰は生命也、解析によりて求むべきに非ず。證悟也、談義によりて達すべきに非ず。感情也、論理によりて解すべきに非ず。觀心自得の修證ありて茲に初めて理義會通の人に語るべきものあらむのみ。理によりて情を強ゆる、是れ僞情也、論を借りて信を迫る、是れ僞信也。吾人の要求する宗教と毫も爲す所無し。古より學理研究の結果として一宗教の建設せられたる事例は吾人の未だ曾て知らざる所也。村上氏は法然、日蓮を援引せり、然れども法然の淨土門が撰擇集によりて開かれ、日蓮の法華宗が開目鈔によりて建てられたりとは吾人の思惟する能はざる所也。げに捨閉閣抛と云ひ一向專修と云ふ、素より淨土一門の關鑰たり、特に九條關白の付屬を待て知れたるに非ず。法華折伏と云ひ、一念三千と云ふ、正に是れ妙宗立脚の元意、豈佐島流竄の日に始まらむや。法然、日蓮既に立教の當初に於て

非ずして宗教學者なりき、氏は井上、元良、加藤諸博士と共に、言論談理によりて信仰を求めむとする人なりき。我邦の學界は氏によりて或は有力なる一學者を獲たらむ、是れ賀すべき也。然れどもあゝ是吾人民衆の要求と抑々何の關はる所ぞや。

四

去年十月、村上氏は、眞宗大谷派の僧籍を脱するの告白書を天下に公にせり。其の理由とする所は、一宗派の僧侶たることは氏が從事しつゝある佛教研究の態度を維持することと相容れざるが爲なりと謂ふにあり。氏が所謂る佛教研究の態度とは、古代印度に於ける婆藪槃豆氏及び訶梨跋摩氏が倶舍論並に成實論を著はしゝが如く、一宗一派の私心を去りて公平無私に佛教を研究し、各宗教理の根底を貫通せる共同の理想を統一し、以て佛教の眞精神を發揮するにあり。而して氏は是の研究を以て今の廢頽滅亡に近つきある佛教を興隆する唯一の方法となし、是の研究の一結果たる佛教大綱論が舊思想者に容れられざるべきこと猶ほ法然の撰擇集が明惠、公胤等の誹謗を受けしが如くなるべしとなし、而かも宗教全體の爲めを思ふ者の古より保守者流の反對を預期すべきこと、猶ほ傳教、弘法、法然、日蓮の如く

學術上の研究として、諸氏の事業が本邦の學界に寄與する所の小少ならざるべきは素より疑を容れずと雖も、而かも諸氏が是によりて或は本邦將來の宗敎を建設し得べしとの抱負を懷けるあらむ乎、吾人は遺憾ながら諸氏の志望に信賴する能はざる也、 井上、元良、加藤諸博士の如きは學者にして宗敎家に非ず。 學者の態度に據りて宗敎を論議する、素より其所なるべし。 而かも本來僧籍にありて德望一世に高かりし村上專精氏が、其の宗敎家の本分に遠かりて、等しく學究的態度を取るに至りたるの一事は吾人の深く遺憾とする所也。 一昨三十三年の春、釋尊降誕會に於ける氏の演說は今尙ほ吾人の耳にあり。 其の東本願寺の腐敗を慨嘆し、一代民心の敎化は最早や是の如き腐敗を極めたる形式的宗門に依賴すべからざるを道破し、仰で一大偉人の是の濁世に出でゝ新信仰の福音を鼓吹するものあらむ事を歎求せしは、正に現代民衆の希望を言ひ盡せるものなりき。 吾人は當時に於て深く望を氏の虔誠熱烈なる宗敎心に屬し、自ら釋尊付屬の行者を以て任ずべき者、或は是の人に非ざるかを思ひたりき。 嗚呼吾人の希望は一片の空想に過ぎざりし事、今や漸く明ならむとする也。 村上氏は吾人の妄に思惟せし如く宗敎家に

に種々の形式に於て是の深大なる憂悶を愬へたり。新道德、新宗教に對する多年の歎求は即ち是の憂悶の發聲に外ならざる也。而して我が思想界は何を以て此の歎求に應へたるか。天下の學者は國民の爲め、社會の爲めと稱して爭て其の意見を公にせり。然れども是れ唯學說のみ、意見のみ、理以て爭ふべく、辯以て析くべし、人生一大事緣の覺悟に關して何等の光明を投ずるものに非ざりき。吾人の求むる所のものは信仰也。而して彼等は信仰の歷史と性質とを說けるのみ。餓えたるものは麵包を得ずして、却て麵包の說明を得たり、而して彼等は以て吾人の飢渴を救ふべしと爲す也。

吾人は現今第一流の思想家中、當來の宗教に對して熱心なる考察に從事しつゝある多くの學者あるを認む。兩井上博士、元良、加藤、村上諸博士の如き是れ也。諸氏が其の宏博深遠なる學識によりて一世を指導せられむとするは、國民の宜しく感謝の意を表すべき所なるべし。然れども吾人をして忌憚なく言はしめば、諸氏の關する所は學說のみ、而して學說と信仰とは本來別種の事項に屬す。理義の考覈、辨析の精徵によりて活ける宗教を造り得べしとは吾人の思惟し能はざる所也。

吾人は敢て現代の思想界に向て問はむと欲す、この四つの者今の時に於て果して其の職能を全うしつゝありや。今の所謂る宗教家、哲學者、教育倫理學者等は果して是の職能の爲に盡力しつゝありや。吾人は二千年の歴史を犧牲となせる今の文明に向て人生の解釋を要求するは、吾人にとりて正當の權利なりと思惟す。現代の思想界は果して是の要求を滿たしつゝある乎。吾人の見る所を以てすれば、文明とは鐵と石炭との利用の謂のみに非ざる也、辯論解析の煩瑣の謂のみに非ざる也。苟も吾人の靈性に確實なる安慰と豐富なる希望とを與ふるものに非ずむば、一切の道教、學智、吾人に於て何爲るものぞ。今の思想界は果して是の點に於て吾等に何等の滿足を與へつゝありや。是の如きは恐らくは陳套の疑問ならむ、而かも現代の思想界に向つて其の事實的解釋を促がすべき疑問としては、緊急切當是の如きはあらざる也。

三

今日の宗教が宗教としての何等の威嚴、何等の勢力をも有せざるは最も明なる事實也。人間靈性の司配者を有せざる是の不幸なる時代に生まれたる吾人は、既

滿ちて學徒是に附くこと菌の如しと雖も、年々市に遍きの著書、何れか活ける人生の知識を與ふる者ぞ。抑々吾人にとりて最も大いなる疑問は人生にあらずや。吾人是が爲に惱み、是が爲に苦み、是が爲に展轉して慟哭す。あらゆる德業と罪惡と功利と敎學と實に是の疑問の解釋の爲に世に現はれたるに非ずや。今の時は文明の世と稱せらる。釋迦、孔子、基督、日蓮等だも恐らく夢想し能はざりし工業と學術とは燦として是の文明を裝飾せり。然れども吾人の心靈は是が爲に何等の希望と安慰とを得たりしとするぞ。思うて玆に至れば吾人は惆悵として嘆嗟せざるを得ざる也。

宗敎、哲學、敎育、道德、是の四つのものは吾人の精神的生活に關して最も重大なる職能を有するものたり。世に處して誤らず、道に安じて迷はざらしむるものは道德也。觀心自證の上に人物修養の道を啓くものは敎育也。物心二界の交渉を明かにして吾人の理性に平和を與ふる物は哲學也。若し夫れ人間靈性の無限なる歎求に應へ、理義會通の境域を離れて無上超絕の眞理を示現し、吾人の精神的生活に最高の希望と安慰とを與ふるもの、是を宗敎と爲す。

現代思想界に對する吾人の要求

（宗教家、哲學者、教育倫理學者の一讀を煩はす）

一

古の人訓へて曰く、汝等求めよ、然らば與へられむ、尋ねよ、然らば遇はむ、叩けよ、然らば啓かれむ、是れ信仰なりと。　吾人は不幸にして現代に對して多くの信仰を有する者に非ず。　或は其言の荒野に叫ぶものゝ如く空しく消え去らむを恐ると雖も、而かも一片耿々の微志、默して而して已むべきに非ざるを覺ゆ。　希はくは今の宗教家、哲學者、教育倫理學者をして暫く吾人の歎求に聽くところあらしめよ。

二

吾人熟ら現代思想の趨勢を考ふるに言說徒に煩はしくて實行の見るべきもの少く、理義日に多端に流れて、事證は則ち藐焉たり。　博學多識の學士は雲の如しと雖も、其の會して談ずる所を聞けば恍として隔世の事に似たり。　萬卷の書は庫に

のみ。吾人は戀愛を解せずして、死する人の生命に多くの價値あるを信ずる能はざる也。傷むべきは生命を思はずして糧を思ひ、身體を憂へずして衣を憂ふる人のみ。彼れは生まれて其の爲すべきことを知らざる也。今や世事日に匆劇を加へて人は沈思に遑無し。然れども貧しき者よ、憂ふる勿れ。望を失へるものよ、悲む勿れ。王國は常に爾の胸に在り。而して爾をして是の福音を解せしむるものは、美的生活是れ也。

（卅四年八月）

きを幸とせむ。野の鳥を見よ、勞かず、紡がざれども尙ほ好く舞ひ好く歌ふに非ずや。

道德と知識とは人類の特有に係ると雖も、畢竟吾人が本能の滿足に對して必須の方便たるに過ぎざること既に說けるが如し。然れども是の如き煩瑣なる方便を待つて初めて得らるべき幸福は吾人にとりて甚だ高價なるものに非ずや。人の虛榮を好むや、禽獸の卑むべきを知りて其の羨むべきを悟らず、漫に道義を衒ひ知識を誇るも、人生の歸趣に到りては茫然として思ふところなし。五十年の短き生涯は是の如くにして匆忙の間に勞し去らるゝを見ては、吾人豈惆悵たらざるを得むや。蓋し今の世にありて人生本來の幸福を求めむには、吾人の道德と知識とは餘りに煩瑣にして又餘りに迂遠なるに過ぐ。夫の道學先生の如き、若し眞に世道人心の爲に計らむと欲せば、須らく率先して今日の態度を一變せざるべからず。

嗚呼、憫むべきは餓えたる人に非ずして、麵包の外に糧なき人のみ。人性本然の要求の滿足せられたるところ、其處には乞食の生活にも帝王の羨やむべき樂地ありて存する也。悲しむべきは貧しき人に非ずして、富貴の外に價値を解せざる人

七　時弊及び結論

吾人の言甚だ過ぎたるものあるが如し。然れども讀者よ、時弊に憤る者の言はおのづから是の如くならざるを得ざる也。

何をか時弊と云ふ、吾人は是を數ふるの煩はしきに堪えざる也。夫の道學先生の説く所を聞かずや、何ぞ其の物々として缺々たる。彼等は人の作りたるものを以て天の造りたるものを律せむとするものに非ずや。處に隨うて變易すべき道德に附與するに萬能の威權を以てせむとするものに非ずや。彼等旦暮に叫で曰く、爾の義務を盡し、爾の權利を全うせよと。彼等の所謂る義務とは借りたるものを返すの謂に非ずや。彼等の所謂る權利とは貸したるものを收むるの謂に非ずや。然れども人生の歸趣は貸借の外に超脱するを如何せむ。又夫の學究先生の訓ふる所を聞かずや、何ぞ其の迂遠にして吾等の生活と相關せざることの甚しき。知識は吾人の欲するところ、然れども知識其物に幾何の價値かある。宇宙は畢竟疑問の積聚也、人は是の疑問の解決を待つて初めて安じ得べくむば、吾人寧ろ生な

か知らむ、彼等の生活には實に王者を艶美せしめ得べきものある也。彼等は是の平和と安心と怡樂とを果して何處より得來りたる。富貴名利の外に人生の樂地を求め得たる彼等は幸ひなる哉。

詩人、美術家が甘じて其の好む所に殉したるの事例は讀者の既に熟知する所ならむ。畢竟藝術は彼等の生命也、理想也、是が爲に生死するは詩人たり、美術家たる彼等の天職也。是の天職を全ふせんが爲に、彼等の或者は食を路傍に乞へり、或者は其の故郷を追放せられたり、或者は帝王の怒に觸れて市に腰斬せられたり。ああ死を以ても脅かすべからざる彼等の安心は貴き哉。富貴前にあり、名利後にあり、其の意に反して一足を投せむ乎、是れ盡く彼等の物のみ。而かも彼等は斯くして得たる生に較ぶれば死の遙に幸ひなることを認めし也。請ひ問はむ、世の富貴に誇り權威に傲る者の幾人か能く這般の消息を悟了せる。

是の如きは美的生活の二三の事例也。金錢のみ人を富ますものに非ず、權勢のみ人を貴くするものに非ず、爾の胸に王國を認むるものにして初めて與に美的生活を語るべけむ。

愛し相慕へる少男女が、薔薇花かをる籬の蔭、月の光あかき磯のほとりに、手を携へて互に戀情を語り合ふ時、其の樂みや如何ならむ。彼等の爲す所を以て痴態と笑ふ勿れ。かゝる痴態は眞に人を羨殺するに足るものならずや。一旦世事意の如くならず、思ひしことは泡の如く消えて運命鐵の如く彼等の間を斷たむとする時、百年の命を以て一日の情に殉し、相擁して莞爾として死に就くが如きは、人生何物の至樂か能く是に類ふべき。道學先生の見地よりすれば、戀愛の如きは青春の迷ひに過ぎざらむ、然れども是の如き迷ひは醒めたるものにとりて永遠の悔恨に非ざるべき乎。

昔者印度に瑜伽（ヨーガ）と稱する苦行の學徒ありき。彼等の爲すところは實に今の人を戰慄せしむるに足るものなりき。而かも是の如き苦行は彼等にとりて即ち解脫の道也、無上の淨樂也。彼等は是の無上の道に就かむが爲に、其の一指を擧げて輙ち捉へ得べかりしもろ／＼人生の逸樂を斥けて悔ゆる所無かりし也。近くはトラピストの例に見よ。彼等は無言の行者也。一切の聲色を斷絕して一神の向仰に專念す。世榮に競奔するものより見れば抑々何等の呆癡ぞや。然れども誰

が如かりしのみ。其の心事や渾然たり、豈其の間に目的と手段とあらむや。

眞理其物の考察を以て無上の樂みとなし、何が故に眞理を考察するかてふ本來の目的を遺却するものも、亦知識的生活を超脫して美的生活の範圍に入れるもの也。眞正なる學者の眼より見れば、是の如き人は其の爲すべきことを忘れたる一學究に過ぎざらむのみ。然れども彼れは眞正なる學者の享受し難き滿足を其の學術より獲得し得る也。

世に守錢奴と稱するものあり、彼れは金錢を貯ふるを以て人生の至樂となす。是れ明かに金錢本來の性質を遺却し、手段を以て目的と誤認したるものなるを以て、道德上の痴人たるを免れざるべし。而かも金錢其物を以て人生の目的と信じたる彼れは、學術其物を以て人生の目的と認めたる學者の如く、既に美的生活中の人たる也。守錢奴は決して吾人の好む所に非ずと雖も、守錢奴自らにとりては、金錢は彼れの安心也、至福也。吾人は彼れの心事を憐むと同時に、深く名教の外に得たる彼れの樂地を嫉まずむばあらず。

戀愛は美的生活の最も美はしきものゝ一乎。是の憂患に充てる人生に於て、相

是の如く說き來らば、讀者は其の世上道學先生の所說と太だ同じからざるを怪まむ。然れども讀者よ、吾人は何の宿罪ありて道學先生の云爲に倣はざるべからざる乎。

六　美的生活の事例

上文說けるが如く、價値の絕對なるもの、是を美的と爲し、美的價値の最も醇粹なるもの、是を本能の滿足と爲す。然れども本能以外の事物と雖も、其の價値の絕對と認めらるゝものは亦美的たるを妨げず。是に於てか美的生活の範圍も亦隨うて本能の滿足以外に擴充せらるゝことを得。

例へば道德は相對の價値を有するを以て本來の性質と爲す。然れども若し人ありて道德其物に絕對の價値ありと爲し、其の奉行を以て人生究竟の目的なりとなさば、是れ既に道德的に非ずして、美的也。是の如き人の態度は實際的に非ずして翫賞的也。古の忠臣義士、孝子烈婦の遺したる幾多の美談は、道德の名によりて傳はれりと雖も、實は一種の美的行爲のみ。彼等の其の道に就くや鳥の將に歸る

すとせむや。眞理とは何ぞやとは、ピラートが怪み問ひたる言葉なりき。然れども二千年の歴史に於て誰か　人に眞理を明しゝものぞ。學者は天上の星の如く、著書は海邊の砂の如し、彼等自らの信じて不朽の眞理と公言せしもの今はた何の狀ぞ。學者よ吾人に究竟の眞理を訓へむよりは、古の哲學者の如く、大地を負へる龜を負ふものゝ何物なるかを究むるを寧ろ賢なりとせむ。畢竟知識は疑問の積聚のみ。一疑壓に解すれば一疑新に次ぐ。依て以て安住の地盤を求めむは、百年坐して河淸を待つに等しからむ。

美的生活は全く是と異なれり。　其價値や既に絕對也、イントリンジック也。依る所無く、拘はる所無く、渾然として理義の境を超脫す。是れ安心の宿る所、平和の居る所、生々存續の勢力を有して宇宙發達の元氣の藏せらるゝ所、人生至樂の境地是れを外にして何處にか求むべき。道德や、知識や、是の幸福を調攝して、其の發達を助成する所に用あり、其の用や消極的たり、相對的たり、方便たり、手段たり。夫の僞學と云ひ、腐儒と云ひ、方便主義と云ふが如きものは、畢竟是の人生の歸趣に關する本末を顚倒したる處に生ずる病的現象に外ならざるのみ。

ずる幸福を空しくせざらむことを務めざるべからず。而して是を務むる所以のものは、吾人の所謂る美的生活、是れ也。

五　美的生活の絶對的價値

美的生活は人性本然の要求を滿足する所に存するを以て、生活其れ自らに於て一旣に絶對の價値を有す。理も枉ぐべからず、智も搖かすべからず、天下の威武を擧げて是に臨むも如何ともすべからざる也。然れども道德的並に知識的の生活は其の本來の性質に於て旣に相對の價値を有するに過ぎず、是を以て己れより優れるには輙ち移り、己れより强きものには輙ち屈す。昨是今非、轉々として底止する所を知らず。道德哲學の歷史は是の流轉の歷程を示して餘りあるを見ずや。

其の價値に於て旣に相對たり、エキストリンジックたり、道德、知識の上に安住の地を求めむとするは蓋し難い哉。道德の上より見れば人生は義務の永遠なる連鎖也、一環去れば一環來る。所謂る至善の境は一片の理想に過ぎずして、力行の道程は日月と共に終始せむ。人は旦暮の生を受けて是の間に營々たり、命や慘憺たら

に意識を絶し、考察を絶し、又勠力を絶す、是れ一種の習慣、本能のみ、道德的價値あるを得ざるや言ふ迄も無し。思ふて是に至れば吾人は大道廢れて仁義ありてふ老子の言の千古の眞理なるを認むると同時に、所謂る道德なるものゝ價値の甚だ貧少なるに驚かざるを得ざる也。

更に一歩を進めて是を觀む乎。道德の極度は無道德に存すてふ命題は、取も直さず本能の絶對的價値を證明する者ならずや。吾人が日常の習慣と雖も一旦夕にして成立し得るものに非ず、其の初めに當りては實に幾多の苦痛と煩悶と勠力とを要するなり。吾人の本能なるものは謂はゞ種族的習慣也。幸ひにして後代に生れたる吾人は無念無爲にして其の滿足を享受すと雖も、試みに吾人の祖先が是の如き遺產を吾人に傳へ得るまでに、幾何の星霜と苦痛とを經過しりしかを考へよ。吾人は祖先の鴻大無邊なる恩惠に對して現當の幸福を感謝せずむばあらざるなり。是の如き本能の成立し得むが爲に費されたる血と涙と生命と年處とは、道學先生が卓上の思索に本ける道德などに較ぶべきものにあらず。吾人は祖先の鴻恩を感謝すると同時に、是の貴重なる遺產を鄭重に持續し、是の遺產より生

幸福の比較的に恒久なるを得る所以也。畢竟知識と道德とは盲目なる本能の指導者のみ、助言者のみ。本能は君主にして知德は臣下のみ、本能は目的にして知德は手段のみ。知德其物は決して人生の幸福を成すものに非ざる也。

道德が一方便に過ぎざることは、其の極度の無道德に存することにても知らるべけむ。道德は善を奬勵す、而して善は努力を須要とす。あゝ努力を待つて成立し得べき道德は卑むべき哉。努力は障害を排斥するの謂なり。善事を行はむとする際の內心の障害は即ち惡念也。善既に努力を待て成立すべしとせば、善事は其の行爲者に於て既に惡念を預想するものに非ずや。換言すれば彼れは多少の意味に於て惡人たる也、不道德の人たる也。天下の善人盡く惡人たりとせば、吾人豈道德の鼎の輕重を問はざるを得むや。是を以て道德の理想は努力無くして成立し得るものならざるべからず。孔子の所謂る其の心に順ひて其の則を越えざる底のものならざるべからず。是を喩ふれば、水の流るゝが如く、鳥の鳴くが如く、野の花の咲くが如く、赤兒の其の母を慕ふが如く、古の忠義士の其の君國に殉したるが如きものならざるべからず。而して道德も玆に到れば即ち無道德のみ。既

物の靈長と稱せられてより人は漸く其の動物の本性を暴露するを憚かり自ら求めてもしくは知らず〳〵其の本然の要求に反して虛僞の生活を營むに至る。而して吾人の見る所を以てすれば人類をして玆に到らしめたるものは實に人類をして萬物の靈長たらしめたる道德と知識とに外ならず。知らず道德と知識と畢竟何の用ぞ。

四　道德と知識との相對的價値

吾人の見る所によれば、道德と知識とは其の物自らに於て多く獨立の價値を有するものに非ず。其の用は吾人が本能の發動を調攝し、其の滿足の持續を助成する所に存す。下等動物は盲目なる本能の外に自己を指導する何物をも有せざるを以て、往々不慮の災禍に罹るを免れず、隨つて其の滿足も亦不完全ならざるを得ざる也。然るに人類は是非を判ずるの理性を有し、善惡を別つの道念を具ふ。是に於てか其の本能は、一方に於て其の自由の發動を制限せらるゝ代りに、他方に於ては其の滿足の持續に於て遙に他動物に優る者あり。是れ他動物に對して人類の

らざるべからず。蓋し人類は其の本然の性質に於て下等動物と多く異なるものに非ず。世の道學先生の説くところ、理義如何に高く、言辭如何に妙なるも、若し彼等をして其の衷心の所信を赤裸々に告白するの勇氣だにあらしめむか、必ずや人生の至樂は畢竟性慾の滿足に存することを認むるならむ。吾人に知識の慾ありて眞理を悟らむことを欲し、道義の念ありて善德を修めむことを望む。是等の欲望の到達せられたる處に一種の快樂あるや素より論無し。然れども是の種の快樂や極めて淡く、極めて輕く、其力到底人性の要求を飽足するに足らざるを如何せむ。まことに高尚深遠なるらしき幾多の文字は、是の種の快樂の讃美に使用せらると雖も、吾人をして忌憚なく言はしむれば、是れ一種の僞善に過ぎざるのみ。哲學書一卷を讀破して未了の知識に逢着する時、快は則ち快ならむも、終日勞し來りて新浴方に了り、徐ろに一盞の美酒を捧げて清風江月に對する時と孰れぞ。貧を鄙み孤を助くる時、快は則ち快ならむも、佳人と携へて芬蘭の室に憑り、陶然として名手の樂に聽く時と孰れぞ。勉學に死し、慈善に狂せるの例は吾人の多く知らざる所なりと雖も、戀愛に對しては人生の價値寧ろ輕きを覺ゆるに非ずや。誤て萬

の、畢竟人間知見上の名目に過ぎずして、人生本來の價値としては殆ど言ふに足らざるものに非ざる乎、否乎。

一度び是の見地に據りて觀ずれば、人生の事相おのづから別種の面目を呈露し來るを見る。是れ吾人の人生觀が道學先生のそれと異なる所以にして、亦茲に美的生活を論じて敢て是を推奬する所以也。讀者暫く忍で吾人の言ふ所に聽かむ乎。

三　人生の至樂

何の目的ありて是の世に產出せられたるかは吾人の知る所に非ず、然れども生まれたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば本能の滿足即ち是れのみ。本能とは何ぞや、人性本然の要求是れ也。人性本然の要求を滿足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ。

道德と理性とは、人類を下等動物より區別する所の重もなる特質也。然れども吾人に最大の幸福を與へ得るものは是の兩者に非ずして實は本能なることを知

華の極みだにも、其の装ひ是の花の一に及ばざりきと。あゝ玉簪花以て彼等の行爲の美しきにも喩へむ乎。然れども道徳の眼を以て見る、則ち如何。彼等若し既に至善を解せず、隨つて至善を實現せむとするの動機に於て缺くる所ありとせば、其行爲や果して道徳的價値を有せりと謂ふべき乎。道徳的行爲は意識を要し考察を要し、努力を要す。而して彼等の行爲や雲無心にして岫を出づるが如き也、麋鹿のおのづから溪水に就くが如き也。彼等が其の君國に殉じ其の親夫に盡せるは、猶ほ赤兒の其の母を慕ふが如くにして然り。其の心事や渾然として理義の解析を容れざる也。赤兒の其の母を慕ふは人性自然の本能に本づく、彼等の行爲亦是の如しとせば、畢竟其の道徳的價値に於て缺くる所ありと斷ぜざるべからず。

是の如く觀來れば、吾人は道徳其物の價値の甚だ貧少なることを思はざるを得ず。良しや道徳上善事に非ずと判斷せられたりとするも、楠公の行爲に何の影響するところぞ。倫理學說が其の價値を認めずとするも、忠臣義士は長へに忠臣義士たり、孝子烈婦は長へに孝子烈婦たり、人間の最も美はしく貴むべき現象たることに於ては毫も渝るところ無き也。是に依て是を見れば、善と云ひ不善と云ふも

於て言ふに足らざるものならむのみ。

而して吾人は是の如く解釋するを欲せざるもの也。楠公の湊川に討死せる時、何ぞ至善の觀念あらむ、何ぞ其の心事に目的と手段との別あらむ、唯君王一旦の知遇に感激して微臣百年の身命を抛ちしのみ。是の如くにして死せるは公にとりて至高の滿足なりし也。而して是の滿足を語り得むものは倫理學說にあらずして公自らの心事ならむのみ。菅公の配居に御衣を拜せし時、何ぞ至善の觀念あらむ、何ぞ君恩を感謝するを以て臣下の義務なりと思はむや。畢竟公の本心は唯是の如くにして滿足せられ得べかりしのみ、拘々たる理義如何ぞ公が是の本心を說明し得べき。戰國の武士は吾人に幾多の美譚を遺したり。然れども或は勇士意氣に感じては輙ち身を以て相許し、或は受くる所は僅に一日の粟、而かも甘じて己れを知る者の爲に死す。是の間の消息何ぞ至善あらむ、何ぞ目的あらむ、又何ぞ手段あらむ。彼等の忠や義や、到底道學先生の窺知を許さゞるものある也。喩へば鳥の鳴くが如く、水の流るゝが如けむ、心なくしておのづから其の美を濟せる也。古の人曰へらく、野に咲ける玉簪花を見よ、勞かず、紡がざれども、げにソロモンが榮

と雖も、道德の判斷が是の地盤の上に立てるの一事は、古今を通じて渝らず。されば凡百の道德は其の成立の上に於て少くとも兩樣の要件を具足するを必とすと見るを得む。兩樣の要件とは何ぞ。一に曰く、至善の意識也。二に曰く、是の意識に遵うて外に現はされたる行爲の能く其の目的に協へる事也。至善に盡すの意ありて而かも其の行ひ是に伴はざらむ乎、若しくは其の行ひ能く善に協ひて而かも善を爲すの心無からむ乎、道德上の價値は共に全きを稱すべからざらむ。

是の如く詮義し來れば、吾人は茲に一疑惑に逢着せざるを得ざる也。例へば古の忠臣義士の君國に殉せるもの、孝子節婦の親夫に盡せるもの、彼等は其の君國に殉し、親夫に盡すに當りて果して所謂る至善の觀念を有せし乎、有して而して是に準據したりし乎。換言すれば君國の爲にするは彼等の理想にして、而して死は是に對するの手段なりと考へし乎。親夫の爲にするは彼等の至善にして而して是に盡すは彼等の本務なりと思ひし乎。若しくは君國親夫と謂ふが如き具体的觀念の外に、忠義孝貞と謂ふが如き抽象的道義を認めて是を奉體せりと見るべき乎。若し是の如く解釋する能はずとせば忠義と云ひ、孝貞と云ふもの、道德上の價値に

美的生活を論ず

一　序言

古の人曰へらく、人は神と財とに兼ね事ふること能はず。されば生命の爲に何を食ひ、何を飮み、また身體の爲に何を衣むと思ひ勞らふ勿れ。生命は糧よりも優り、身體は衣よりも優りたるものならずや、と。人若し吾人の言をなすに先ちて、美的生活とは何ぞやと問はゞ、吾人答へて曰はむ、糧と衣よりも優りたる生命と身體とに事ふもの是れ也、と。

二　道德的判斷の價値

夫れ道德は至善を豫想す。至善とは人間行爲の最高目的として吾人の理想せる觀念なり。是の至善の實現に裨益する所の行爲、是を善と謂ひ、妨害する所の行爲、是を惡と謂ふ。至善其物の內容如何は學者によりて必ずしも說を同じうせず

第三期

（三十四年八月より三十五年終焉まで）

信仰覺醒の時代

Wer über alte Ursprünge weise wurde, siehe, der wird zuletzt nach Quellen der Zukunft suchen und nach neuen Ursprüngen.—

Oh meine Brüder, es ist nicht über lange, da neue Völker entspringen und neue Quellen hinab neue Tiefe rauschen.

* * * *

Das Erdbeben macht neue Quellen offenbar. Im Erdbeben alter Völker brechen neue Quellen aus.

Und wer da ruft: „Siehe hier, Ein Brunnen für viele Durstige, Ein Herz für viele Sehnsüchtige, Ein Wille für viele Werkzeuge":—um den sammelt sich ein Volk, das ist: viel Versuchende.

Nietzsche, Zarathustra

古き源を尋れ盡したる者は、終に未来の泉、新しき源を求めん。—同胞よ、新しき民起り、新しき深みの下に新しき泉の迸らんは、遠きにあらじ。

* * * *

地震ひて新しき泉現はれん。古の民の地震ひなば、新しき民湧き出でん。かくて「見よ、此處に多くの渇ける者の代りに井一つ、多くの憧るゝ者の代りに心一つ、多くの使はるゝ者の代りに意力一つ」と叫ぶ者出で、その周圍に民集らん。是れ即ち多く試みん民なり

ニーチェのザラトストラ

（嘲風譯）

人の着る袴羽織を着ることを許された時、其時の喜びは如何なであつたか、今以て」忘れぬと云ふ意味のことを書いてあつたのである。

◎僧侶が世人に僧侶と目せらるゝことを恥辱に思ふ様になつては、佛教も最早や末ではあるまいか。この事は今日に於ては更に甚しい。例へば宗教學校の生徒などが、町に出る際には多く僧衣僧帽を脱いで、通常の衣服に着換へるのである。其理由は外でもない、例の俗人と見られたい、僧侶と見られたくないばつかりである。僧侶たることを耻かしく思ふ樣な僧侶が、如何して俗人を救濟することが出來やうぞ。是んな有樣で佛骨奉迎なぞを爲たとても、それが何の役に立たうぞ。

◎佛教の盛な時には僧侶は非常な名譽なものであつた。例へば推古、天平時代では還俗と云ふことが僧尼令の罰則中の最も重いものであつた。平安朝でも高材逸足の士は爭て桑門に入いつたもので、嵯峨天皇の如きは『朝家無英俊、法侶隱賢才』とまで歎ぜられた。是を今日の有樣に較べたら、まあ如何なる相違であらうぞ。

（三十三年六月）

むば幸也。（上七九二頁參照）

（三十二年六月）

漫言

◎英杜戰爭に於ける英吉利の態度は實に立派なものではないか、コレンソーやチユグラ河あたりの敗北にビクともせず、靜に最終の勝利に向て着々地歩を占めて行く有様は、實に大國民の度量を示して遺憾は無い。

◎是頃では英吉利人は是の戰爭をば一の研究問題にして居る『戰爭の與ふる敎訓』と云ふ題目は、目前の勝敗よりも識者の注意を引いて居る、而して是の如き餘裕は、最終の勝利は自國の上に在ると云ふ先天的の信念の上に基いて居るのである。

◎是が我邦でゝもあつたらば如何であつたらうか。例令へば日清戰爭の初めに、平壤の戰爭に大敗北をしたならば如何であつたらうか。是邊のところは國民が平生に於てよく〳〵覺悟をして置かなければなるまい。

◎是頃六合雜誌で佐治實然氏の實歷談と云ふのを讀むだが、其中に佛敎の衰頽を最も具體的に説明した一節があつた。――それは氏が小兒の折、僧服を脱いで俗

が馬子の弑逆を看過せる崇佛的精神は、明に是憲法中にも顯はれたり。　由來三道一致は後人の附會のみ、豈先王の遺法ならむや。

◎今の世に當りて三道一致と云ふが如き旗幟の下に、國民の道德を率ゐむと欲するは、即ち十九世紀の文明を蔑視するもの也。　是れ國民の理性を誣ひて、僞善を奬むる者也。

◎彼は德川時代の儒者が、佛敎を排撃せむが爲に神道と一致せしを誣る。　然れども本地垂跡説は行基によりて創められしに非ずや、兩部習合説は空海によりて附會せられしに非ずや。　誰か彼が外護説を以て這般猾手段の拙劣なる亞流に非ずと謂ひ得べき。

◎彼は儒を貶し、佛を揚ぐること、甚だ力めたり、若し彼が如き佛徒にして是牽強附會の説を爲し得ずむは、寧ろ奇怪ならむのみ。　然れども、空海一輩の騙詐は、既に林、篠崎、富永、平田の諸氏によりて、長へに暴露せられたるに非ずや。

◎畢竟彼は一個の戒律師として歸仰せらるべき人、其最良の武器は愚人と等しく一沈默の二字にあり。　會々口を開いて是頑陋の説を爲す、彼にとりて累を爲る無く一

所に出頭す、曰く、『辛やく期滿免除だ』と是期滿免除の一語、今の社會を嘲笑して冷刻骨に徹す。吾人近來絕て是の如き痛切なる警語に接せず。

◎最も俗化せる東京を見むと欲せば、『花の上野』に行け。芝の新網、下谷の萬年、尙ほ多少の詩趣を存せるを覺るべし。

◎『人の人たる所以はその遊ぶ時にあり』とはシルレルの警語也。請ふ見よ、東京人が一年の佳節に際して如何なる遊びを爲しつゝあるかを。

（三十二年四月）

◎目白僧園の雲照律師、東京朝日新聞に寄せて『國民教育の方針』を論ず、佛教の功德を讃美して至れり、盡せり。當今朝野知名の人士にして彼れに歸依するもの、尠からざるを以て見れば、彼れ亦疑もなく斯道の宗師として向仰せらるべき人物ならむ。唯彼れ、這般の理を談ずるに及びて遂に其識見の頑陋取るに足らざるを見る。

◎彼は廐戶皇子の十七憲法を引き、所謂三道一貫を以て先王の遺法なりとせり、是れ外護習合を喜べる佛家常套の說のみ。而かも十七憲法の精神は、全く佛法に淫したるもの、國體國性を蔑視せるは掩ふべからざる也。

◎十七憲法は特に篤敬三寶を大書して、一も神祇を言はざるに非ずや。廐戶皇子

◎帝國主義は排他主義なり、獨占主義なり、侵略主義なり、非人道主義なり。英國人の植民政畧や、北米合衆國の菲律賓占有や、孰れか是の如き意味に於ての帝國主義に非ずとする。

◎歴史上に於て人道主義を最も明白なる事實として行へるものは、羅甸人の植民也。而して是の如き植民地の分離と獨立とは其結果也。南亞米利加然り、玖馬然り、菲律賓亦然り。

◎最近の歴史に徵せよ、人道主義は亡國主義なり、非帝國主義也。

◎埃及の成功を以て名高き英公使クローマー、其成功の祕訣として語る所は、英國の帝國主義に背反せるもの也。曰く出來得る丈多數の土人を用ゐよ、而して土人に與ふるに英人同等の權利と位置とを與へよと。是れ即ち羅甸民族の人道主義を襲用せるものにあらずや。

◎人道主義は、一時の成功の爲に永遠の禍根を植うる也。或は恐る、ロード、クローマーの所謂成功の秘祕なるもの、英國他日の累を爲さむことを。（上七二五頁參照）

◎嘗て姦通事件を以て名高かりし角田某、頃日再び辯護士となりて東京地方裁判

度きもの也。

斯く言はむは誠に易き事ながら、扨て是を實行せむはなか／＼に難し。卒業生諸子の大多數は、卒業後には其家計を維持するの責に當らねばならぬ人々なるべし。家計を維持するまでにあらざるも、少くも親の脛カヂリを離れて獨立の生活を營まねばならぬ人々ならむ。一言すれば、諸子は其卒業と共に自活の資金を求むるの必要ある人々ならむ。兎角は是の必要に迫られて、心にもなき未練の事を仕出かすなれば、是處の困難を切り拔けて、兩全の策を講ずるが肝要也。是の爲には、卒業後の生活は學生時代のよりも一層苦しき生活なることを前以て覺悟し、是に勝ゆべき意志の修練を力むべき也。

吾人は、以上の言を以て卒業生諸子の前途を祝せむと欲す。諸子夫れ吾人の言の無禮を責めずして、其の意の在る所を採れ。（卅三年七月）

簷々錄

馬に乘らざるべからざると一般、世を改善せむとする人も、先づ世に住まざるべからず。是の一段の覺悟を定めむは、諸子にとりて處世の第一義なるべし。

されば、學問が研究によりて始めて會得せらるゝ如く、社會も亦研究無しには理解し難きものなり。卒業生諸子は、社會に出でゝ身を處するに當り、暫くは丁稚奉公の覺悟無かるべからず。

將來學術の研究に身を委ねむとする人々が、學校卒業後早々著書を公にし意見を發表するには、よく〳〵愼重の態度を取るべき也。一度び世に公にせる著書論文は、容易に取消し難し。良しむば人の一生は不斷の進歩にして昨非今是が常住の眞理なりとも、世人の大方はかゝる寛裕なる判斷を以て吾人を待つものにあらず、動もすれば古疵を搜し出して新しき攻擊の材料にする也。されば豫言者と雖も其の鼻垂しの生立までも知りぬける故鄕の人には尊ばれざるが世の習ひとかや。こは斯く言ふ記者なども隨分經驗のあることにして、今日より考ふれば冷汗背を潤ふすこと一にして足らざるぞかし。所詮は未熟なる思想をば取急ぎて世に公にせる報ひ也。新たに學校を出でられたる卒業生諸子は深く玆に慮る所あり

百の卒業生の世に出づる時也。吾人は是の機會に臨みて、卒業生諸氏の前途を祝し、併せて諸子に警告するところあるべし。廑に一日の長を賴みて訓誡がましきことを述べむは如何はしけれど、諸子に於て採るべき所を採る、毫も妨け無かるべき筈也。

我國にては學校の生活と社會の生活とは殆ど全く沒交涉の有樣なれば、卒業生諸子が學校を離れて社會に出でたる曉には、一寸方向に迷ふことゝなるべし。例へば學校の敎師とか、官吏技術師とかになる人にありては、其前途坦々として他奇無からむも、一個人として社會に打て出で、何等かの事業を爲さむには、中々熟慮を要する事と知らるべし。社會は思ひの外複雜なるもの也、又思ひの外公平に、思ひの外德義、優劣の制裁あるもの也、恐らくは諸子が寄宿舍又は下宿屋の窓より窺ひたる社會と是の點に於て大に異なる者あらむか。學校の敎師は動もすれば社會を惡魔の集會所の如く言ひなせども、かゝる單純なる思想もて實世界に臨まむは、恐らくは諸子の爲に計る所以に非じ。諸子にして社會に出でたる以上は、社會を敬せざるべからず、其の制裁には服從せざるべからず。能く馬を御するものは、先づ

通り學びたらむ人は、加藤博士の功利論位は說き得ずとも限るまじ。唯吾人は其說の伊藤侯の口に出で、加藤博士の筆に上れるを見る時は、何やら重みある樣に覺ゆ。こは理外の理也。所謂オーソリチーの信仰也。天下の事、概ね是の如し。

されば其言を以て相爭ふは表面上の事也、爭ひの根本は人の爭也、性格の爭也。天下は道理もて動かし得べしとする人あらば、そは未だ共に談ずるに足らざる人也。（卅三年七月）

慈善と死

人死する時は、遺族の人輒ち廣告して曰く、本人の意志に本きて金何百圓を何々慈善會に寄附すと。吾人は是の如き廣告を見る毎に、常に疑に堪へざることあり、人は其慈善の意志を達するに、何故に其死を待たざるべからざるやと。（卅三年七月）

卒業諸子に告ぐるの辭

今七月は、帝國大學を初として、各官私立學校の學年の終りなれば、例によりて幾

人格の力

世間にはオーソリチーに對する信仰とし云へば、直ちに迷信と同一視する人多し。されど吾人を以て見れば、オーソリチーに對する信仰ばかりたしかなるは少し。

オーソリチーを信ずとは、其言を信ずるに非ずして其人を信ずる也、其の高大なる人格の現はれたる一形式として其言を信ずる也。人の知には到らざる所あり、人の情には達せざる所あり、宗教茲に立ち、信仰茲に本く。こは人の弱點ならむも、人として免れ難き、殆ど必然とも云ふべき弱點也。オーソリチーに對する感情は一種の宗教也、吾人は是の偉大なる人格の中に於て、知り難きことをも知り得べく、感じ難きことをも感じ得べしと信ずる也。かゝる人格の發表としては、一言一行も吾人にとりては言ふ可らざる高大なる意義あるが如く觀らるべし。古の所謂る言は人なるもの即ち是れ也。

法學校の一年生にも伊藤侯位の政治論は随分出來るものあるべし。哲學の一

學生は處世の道に長じ、如何なる境遇にも其身を全うする利益はあれども、一世の機先を制し、社會の風潮に先て破天荒の偉業を濟すが如きは、概して望み難かるべし。是れ都會の短所也。然るに地方の學生は、平生世間の風潮流行に遠ざかれる丈けに、是等の風潮流行に搖かされ難し。隨つて專念一向、自由に天稟の性情を發揮し、其の獨立自尊の心を涵養することを得。故に彼等は處世の道に拙きも、其の心事の高大なるもの少からず。言ひ換ゆれば、彼等は往々世に合はざるも、翻て世を己れに合せむとする勇猛心を有す。されば一世の風潮に先ちて前人の未だ企てざる偉業を成就する、所謂る革命の兒、理想の兒は、都會よりも地方に多し。是れ地方の長所也。

是を一言すれば、都會にも地方にてそれ〴〵長短あり。社會に適應するは、都會の長所なれども、流行、風潮の奴隷となる恐れあるは、其短所也。社會の實情に暗きは地方の短所なれども、獨立自尊の心を維持し得るは其長所也。學生及び其父兄は其人の性情に鑑みて適當の監督を是間に施さむことを要す。

（三十三年六月）

に予が常に答ふる所の言を載錄すべし。

答て曰く、都會にも、地方にも、長所あり、短所あり、一概に其優劣を辨ずべからず。唯其の長所と短所との如何なる點に存するかを明に了解し置くは、學生諸子にとりて極めて肝要なることとなるべし。

都會の學生は社會の活動に接觸すること多きを以て割合に早く時勢を了解し、隨て是の時勢に適應する如き針路及び事業を撰ぶことを得べし。是れ地方の學生の概して有し難き利益也。例へば工業の盛なる時節には學生は平生の見聞によりて是事を知るが故に、工業家となりて社會の需用に應ずるを得べし、是れ都會の長所也。然るに地方の學生は概して時勢に暗きが故に、例へば社會に需用の乏しき學問を修めて、卒業後方向に迷ふが如き事無しとせず、是れ地方の短所也。

然れども長所にも其弊あり、短所にも其利あり。都會は概して社會の刺激餘りに強きが故に、少年學生の未だ固定せざる思想は、やゝもすれば是に搖かされ易し、隨て世間の風潮につれて左右し、浮沈し、終には流行を追うて極まる所を知らざるに至る恐れ無しとせず。言ひ換ゆれば自己の獨立心を失ひ易し。されば都會の

二　學生の幅の利く社會は幼稚也

學生の幅の利く時代は、總して幼稚なる時代也。試に坪内雄藏氏が書生氣質を著しゝころの社會と、今日の社會とを較べ見よ、精神上に於ても、物質上に於ても、其懸隔殆ど同日の論に非るべし。而して今日坪内氏よりも優れる小說家が(假りにかゝる小說家ありとして)今日の大學生の內幕などを書きたりとて、社會は往年の書生氣質に比して、十分の一も注意せざるべし。畢竟書生自らに差したる優劣は無けれども、是に對する社會に大なる懸隔あれば也。大學の書生が世の中に持て囃さるゝ間は、社會は中々に幼稚なりと知るべし。されば予は將來に於て大學生が全く世人の注意外に置かるゝ時代の我邦に來らむことを希望するもの也。

三　都會と地方と孰れか學問に益ありや

學問の爲には都會と地方と孰れか優れりや、と云ふ問は予が數々遭遇する所也。本誌の讀者中にも是と同一の疑問を有するもの多かるべしと思惟するを以て、左

が讀書にのみ耽るを見て、今の學生は無氣力なりと一概に批難し去らむは由々しき誤りなるべし。總じて學生は未來の國民なり、いまだ是一個の兵卒にならざる丁年未滿の壯丁也。幼稚なる社會は是の未熟の壯丁をも徵集して實務に當らしむることあり、是の如き時代には學生は政治社會の一要素とも爲ることある也。例へば千八百四十八年に維納大學の學生が卒先して革命運動を起しゝが如き、或は魯國大學生が常に自由運動の主動者たるが如き、又近くは二十年前の我大學生が政談演説を試みしが如き、何れも是の類也。されば學生が學問を抛ちて社會の事に關はるは、學生の功績に非ずして、社會の恥辱也。精しくは、社會が學生の幇助を要するまでに不完全なるを證する也。

然るに世には一種の論者あり、今の學生が政治上社會上の事に關はらざるを見て、學風萎徵、氣力消耗の徵なりとす。こは時勢の變遷を無視せる愚論にして取るに足らず。吾人は今日世に未熟なる學生の干渉を要すべき事業無きを見て、むしろ社會の進歩を喜びこそすれ、是を以て學生の恥辱とせむなどは思ひも寄らぬ事也。

の光明を是世に與ふる也。學者が其知識を世に與へざるは、猶ほ火を惜むもの丶如し。

○凡そ能力ある所には必ず義務あり。こは法律上に於ても、道德上に於ても毫も異なること無し。苟も世の爲に盡し得る力あるものは、奮て是を盡さゞるべからず。其の位に居りて其の事を爲さず其の時に居りて其の道を行はざるものは、道德上怠慢罪を犯せる者と謂はざるべからず。物質的富豪が是の怠慢罪を犯したる時は則ち鄙吝と誣られ、守錢奴と嘲らる。獨り精神的富豪に到ては世に何等の制裁あることなし。片手落ちの批判と謂はざるべからず。　（卅三年六月）

學風に就いて

一　學生と社會

學生の氣風が社會と共に變遷するは已むを得ざることなれば、往年の學風をのみ尙ぶは謂はれ無き事也。明治十年代の大學生が政治運動に容喙し、今日の學生

へば學者、識者と呼ばるゝ人の如し。

學者は知識を蓄へ識見を藏す、謂はゞ精神上の富豪也。而して彼等の多くは獨り學び、獨り知り、其の智見の高大なるを以て獨り自ら樂む。彼等は容易に社會に接觸せず、其の交遊同人の間にのみ知識を交換し、俗人を見れば則ち斥けて語るに足らずと爲す。されば彼等の賢きことによりて社會は別に知識を得ることなし。然るに社會は彼等をば普通人よりも高尙なる人類の如くに尊敬し、毫も知識の分配に與らざるの故を以て彼等を恨むこと無し。物質的富豪が其の金錢を散せざる時は鄙吝と誣り守錢奴と嘲りながら、精神的富豪が獨り知識を藏して社會と沒交涉なるをば、却て高尙なりと尊ぶ。而かも其の本分を盡さゞるに到ては兩者相異なること無し。いかにも怪しき批判ならずや。

金錢は是を散ずれば減少す、自己の勞力にて得たるものを吝む、また人情ならずとせず。唯學者に在ては、其知識を擴めたりとて、己れが馬鹿になる譯にもあらず、彼れにしてもし衆と共に樂むの心だにあらば、天下の眞理をば自己の專有と爲すべき謂はれあるまじき也。火は他物を燃やすが故に減るものにあらず、却て二倍

り褒めた者に非ざれども、そが福澤氏其人の人物によりて代表せらるゝ上に於て游說などの場合に少からざる便宜あるべく、又實際感化力の大なるものあるべし、世には道理上より修身要領を否認する人はあれども、其れと反對の倫理說を性格の中に實現せる人物無し、斯る人物無き間は、反對說の實際の效果は果して如何あるべき。頗る殘念なる事共と謂ふべし。

されば、修身要領を否認せる人は、啻に其の言論に於てのみならず、其の人物に於ても是を否認せざるべからず。

（卅三年六月）

不公平なる批判

今の富豪が公共心に乏しきことは、兎角世上に批難あることとなるが、世には他に一種の富豪あり、蓄積いよ〳〵大にして慳吝の心いよ〳〵深ければ世上の尊敬を受くることいよ〳〵大なるを見る。世人は岩崎、三井の如き金錢上の富豪をのみ責むるを知りて、彼等よりも尙ほ責むべき是の種の富豪あることを忘れたり。例

を知らざるものならむ乎。　遮莫、今の世は世渡り術に長じたるもの多きに勝えず。若し眞に哲人世を憂ふるものあらむか、世の敎ふる所の道德主義は高大なる理想の上に、性格の修養、中心の陶冶を效すべき者ならざるべからず。　福澤氏の所謂修身要領は寧ろ饜けるものに食を強ゆる也。　吾人は其の結果の却て世の腐敗を助成するあらむを恐るゝ也。

（卅三年五月）

『修身要領』の巡回演説

福澤翁の『修身要領』には感服し難き點あれども是の要領二十九個條が、福澤諭吉氏の性行を代表せる點は、實に感服の外無し。

今の世に理屈家はあれども實行家は乏し。　論語が孔子其人の性行なればこそ活ける力もあれ、ただの理屈としては誰にても言ひ得る事也。　道德の感化は其人にありて、其言にあらずとは、こゝ等の道理を言へる也。

吾人は是の點より見て、所謂三田學風なるものが、人物養成の上に於て偉大なる效果を有せしことの如何にも尤もなるを認むる也。『修身要領』は道理上よりは餘

十年來畫一單調なるを如何。

三田翁の所謂道徳

福澤氏の所謂修身要領出でゝより、是に對する批難の聲漸く高し。其の個人主義の極めて極端にして極めて幼稚なる、十八世紀の自然主義を反覆して而して自主獨立と稱するの突梯なる等は暫く言はず、道徳を解して處世の法と爲すに至ては、吾人は福澤氏の道念の甚だ低きに驚かざるを得ず。

處世の法とは世渡りの術に非ずや。道徳を以て世渡りの術と爲さむか、世に阿り時に循ひ、眼前尺寸を彌縫するを事とする便佞利巧の徒は、是れ即ち大道徳家と云ふべきに非ずや。道徳の大と深と高と、何處にある。福澤氏斯の主義を取りて子弟を教育すること三十年、所謂三田學風なるものゝ世に出でしことの偶然ならざるを認むる也。

然れども『修身要領』は恐らくば一般世俗に向て道徳の初歩を説きたるものに過ぎざるのみ。是を以て道徳の根本主義と目するものは、恐らくは福澤氏の素志

民の堅實なる意志を確めざるべからず。

國字問題は、是に關聯して國文及び學制上の問題を含み、倫理問題は是に關係して社會及び德育上の問題を含む。吾人は是の兩者の解釋を以て本邦文教界の二大事業となす。文學學藝に關する自餘の問題の未了なるもの、素より一にして足らずと雖も、吾人は當事者並に國民が是の二大問題に就いて特に耐久堅持の意志を鼓舞せむことを切望する者也。

（三十三年一月）

板垣伯と福澤氏

人の傳ふるを聞く、板垣伯は自己の養成したる政黨が今日の如く墮落せるを以て、深く悔恨せりと。吾人は問はむと欲す、福澤氏三十年來養成し來りたる所謂三田學風に對して伯と同一の悔恨無きを得べき乎。

政治上の自由主義も、倫理上の功利論も、明治の初年に於ては慥に我文明にとりて新しき福音なりき。唯之を三十三年の今日に施さむとす、柱に膠するの痴に類せずや。三田學者の道德の進化を說くや甚だ力めたり、而かも自家道德主義の三

是の如きは或は一の時代、一の國民に特有なる問題に非ざるべし。然れども吾人は今日の我邦に於て、一個特定の問題として殊に是を標榜するの必要あるを認むる也。宗教の無力なる今日の如きはあらず、教育の無力なる今日の如きはあらず、社會的制裁の無力なる亦今日の如きはあらず、吾人が安全に依賴すべき道德は獨り法律あるのみ。誰か是の如き時代を以て國家の深仇と爲さざらむや。國民道德の統一を目的とせる幾多の主義幾多の團體は起りたり、然れども未だ曾て救世の使命を自覺して、一代の木鐸となれるものあらざる也。國民道德は依然として渾沌たる過渡期の中にあり。忠孝の名喧しく唱へられて其實却て擧らず、法治の制既に立て人却て法を輕ず。生活の上に於ては、過酷なる嚴肅主義に非れば即ち放逸なる私慾主義となり、思想の上に於ては、消極的の悲觀に非ざれば、則ち教權の盲目的歸依あるのみ。人は夫れ何處にか其安立の地を求めむ。而て是の如き苦悶は教育ある社會によりて痛切に感ぜられつゝあるは最も注意すべき事實なりとす。經世家よ、教育者よ、倫理學者よ、宗教家よ、諸君の最大責任は是に存せざる乎。

倫理問題の解釋は人生に於て最も永遠なる事業也、吾人は是の點に關して將に國

年代に於ける假名論、羅馬字論を初めとして、二十五六年頃の新國字論、三十一年の國字研究會より、今日の帝國敎育會の國字改良事業に至るまで、是の問題は幾度か提出せられ、幾度か抛却せられたり。健忘なる國民は今後に於ても更に又是を抛却せむと欲する乎。

國字問題の氣運は、今日に於て方に熟したるが如し。學年短縮を唱ふる所謂學制改革論の如きも、畢竟是の同一の氣運に乘じたる敎育上の一問題に外ならざるのみ。少くとも此事業に於て全社會の同情と後援とを有する帝國敎育會は、宜しく現下の好氣運を逸し、曖昧模稜の中に是の問題を埋沒するが如きこと無かるべし。國字の問題は國家百年の人文に關聯す、素より一旦一夕にして終結を期すべきに非ず。唯一度び是の事業の深大なる意義と影響とを自覺したる國民は、圓滿なる歸結に到達するまでは是より永く其盡力を休止すること無かるべし。吾人は本年の劈頭に於て特に是の事業に關係せる學者敎育者の鞏固なる決心を問はざるべからず。

第二の未了問題は、社會に於ては道德問題也、敎育に於ては德育問題也。想ふに

尙幾多未了の問題を有する事也。

凡そ耐久堅持の意志に乏しき、我邦人の如きは多からじ。文藝社會にありても幾多の問題は提出せられたり、其の解釋は幾度か着手せられたり、而して其の歸結を見るに及ばずして幾度か抛却せられたり。比年常に是の如くにして未了の問題年毎に加はる。國民は遂に未了の儘にして是を埋葬せむと欲する歟、何ぞ始めは脫兎の如くにして、終りは處女の如くなる。

凡そ一個の問題の提出せらるゝは、言ふまでも無く時勢の必要是を促せば也。其の呈出を促したる事情の依然として繼續する間は、其研究亦依然として繼續せられざるべからず。僅に一兩年にして、當初の意氣頓に沮喪するが如きは、到底事を成すに勝えざる也、寧ろ始より恬澹にして自然に一任するに如かざらむ。

所謂未了の問題とは、第一國字改良問題也。國字改良の必要は、今日にありては最早や炳焉たる事實となれり。知者先覺者是を口に說くのみにあらず、教育者も被教育者も、學者も、非學者も、一般國民を擧げて少しく文字あり、思慮あるものゝ均しく其積弊を自覺し、期せずして改良の急務を呼號する所の者也。想ふに明治十

自然の結果として許容せざるを得ざべし。苟も帝國大學に對して公平なる觀察を下し得るものは、少くとも是の三點に於て異存あるべからず。

然れども事物に隆替盛衰あり、大學今日の學風が、過去の功業に對し、又帝國大學其物の天職に對して耻ぢざるものなりや否や、是れ別問題也。大學の當事者幷に學生は、日夕此の問題を念持して自ら疼しからざるを期すべく、社會も亦精到なる監視によりて外より過ちを匡救せざるべからず。畢竟大學は國家の大學、其の人才は國家の人才也、大學の事業の圓滿なる功果を奏せむとは國民たるものゝ均しく懸念すべく、希望すべき所也。然るに內と外と相反撥し、相嫉視し、黨同伐異を以て相爭ふが如きは、陋も甚しと謂ふべし。吾人は是の點に關して大學幷に、大學批難者の猛省を乞はざるべからず。(以下略)

(卅二年十二月)

本年の二大問題

(國字問題と倫理問題)

明治三十三年の劈頭に立ちて吾人の先づ以て記憶せざるべからざるは、吾人が

帝國大學と世評

大學の學風及び出身者に就いては、毎度いろ〳〵の評判を耳にすることとなるが、吾人は評判者たる大學以外の人に向ひては、其の觀察の精到にして批判の中正ならむことを希ひ、被評判者たる大學關係者に向ひては、虛心平氣にして是を聽き、省みて自ら箴規する所あらむことを望まざるべからず。評するもの豫め惡念を挾まば、言に理あるも偏强として聽かれざるべく、聽くもの豫め敵意を有せば、己れ過ちあるも自ら矜恃して覺るに由無けむ。言ふもの好意を有せず、聽くもの既に敵愾の念を挾まば、讒謗罵詈にして已まむみの。惜むべき也。

吾人は我邦新文明の進運を助成したる點に於て、大に帝國大學を德とせざるを得ざるべし。而して帝國大學が帝國最高の敎育府として、最も古き歷史と最も完全に近き設備とを有するの事實も、亦承認せざるを得ざるべし。而して是の如き帝國大學が過去に於ても、現在に於ても、又將來に於ても、歷史長からず設備全からざる他の學校よりも割合に能力ある多數の卒業生を出し、且つ出だすべき事も亦

は首を揚げたり、彼等はたくみなる謀略を以て、汝の民に向ひ、相共に計りて汝の隱れたるものに向ふ、彼等言ひたりき、來れ、彼等を斷滅して再び國を建つることを得ざらしめ、イスラエルの名を再び人に知られざらしめむと。

クロムエル以來、敬虔なる祈禱に伴へる戰爭は、Twice armed と稱せせらる。吾人は是の如き悲壯高調の詩篇によりて激揚せられたるブア軍隊の前途を祝すべし、彼等は名譽ある成功を獲ずむは則ち名譽ある失敗を遂げむのみ。（卅二年十二月）

一種の魔力

フレデリック・ハリソン氏平和黨を代表し、開書を英首相サリスベリー侯に送りて論難甚だ力む。中に言へるあり、曰く「閣下は我女皇の光榮ある長き御世が其の末葉に於て不義の戰爭によりて汚さるゝを意にせざる乎」と。正道人道の名によりて爲されたる幾多の議論よりも、吾人は痛く是の一語に感激したるを覺ゆ。吁、Long glorious reign of the Queen 是の一句こそは英國人の耳に一種の魔力を有するの響ならずや、是の感情の存する間、英人は永く世界の一大國民たるを失はざるべし。（卅二年十二月）

無趣味なる社會の極まるところ、率ね是の如きのみ。我邦人は深く自ら顧みる所無かるべからず。嵐山に於けるサンライスの廣告は、銀行劵の外套の前提のみ。

(卅二年十一月)

名譽ある成敗

今や南亞弗利加に於ける英杜の戰爭は、世界中の最も大なる事件として注目せらるゝに至れり。彈丸黑子のトランスバール國民が、領域世界に普ねき大英國と對抗して、敢て佽に讓らざる勇氣と團結心との那邊より來りしかは、杜國建國の歷史を知るものゝ寧ろ驚き怪むべき所也。

大統領クルーゲル氏自ら是の事實を解釋して曰く、吾人が今日の位置は、聖書の一節によりて最も好く說明せらるべし、吾人ブア人は凡て是の聖書の精神により て團結せられ、指導せられ、感奮せられつゝあるなりと。所謂聖書の一節とは、詩篇第八十三『アサフの歌』を云ふ、其首めに曰く、

神よ默し給ふこと勿れ、神よ物言はで靜まり給ふ勿れ。視よ汝の仇は喧しき聲を擧げ、汝を惡む者

是を如何かすべき

是の如くにして一世の風潮は、徹上徹下、翕然として奢侈に流れたり。是れを救ふの法如何、曰く、趣味を解せしむるにあるのみ。趣味無き所には放蕩あり、淫逸あり、惡德あり。人をして高尙なる趣味あらしむるは、即ち彼に肉慾を滿すの外に樂みあるを訓ふる也。布子も時としては錦袍よりも美はしきを覺えしむる也。名利烟火の巷の外に於て安慰の樂地あるを悟らしむる也。思うて是に到れば、吾人は今の社會及び學校敎育の乾燥無趣味、美的感化の見るべきもの無きを浩嘆せずむばあらざる也。

(卅二年十一月)

銀行券の外套

昔者英國に虛飾を好める一貴婦人ありき。衣裳の裝ひに計りこと盡きて、其身の富裕を示すべき方法無きを憂へ、やがて案じ出せるは銀行券を綴ぢ合せたる外套にぞありける！

笠の時として王冠よりも美はしきを知らず、金とダイアモンドと銀行手形の外に何等の趣味を解せざる者、爭でか是の大いなる宣言の眞意義を解せむや。吾人は是の如き世を惡む。

(卅二年十一月)

紳士と貴女と

試に今の紳士と稱するものゝ邸宅を見よ。徒に門戸を張り、溝渠を廣うし、高樓大廈を搆へて俗目を驚かすの外、他事無きに非ずや。其のやゝ雅致あるらしき者すらも料理屋、待合の亭榭を眞似たるに過ぎざるに非ずや。又試に貴女と稱するものゝ装ひを見よ。脚には十圓の下駄を穿ち手には千圓の指環を着く。されど其の衣髮は藝娼妓の紛飾を見習ひて未だ得ざるものに非ずや。彼等の寶石を光らし、輕紗を纏へすは、其の美を樂むに非ず、唯價の貴き物を身に着けて相誇るのみ。憐むべき彼等は美貌と、品位と、すべて金錢にて購ひ得べきものと思惟せる也。

(卅二年十一月)

こそ訝かしけれ。牛馬虐待の廢止は美事なるに相違無し、而かも一國の風教と爲すあらむと欲するもの須らく先づ大處の着眼を誤らざらむことを要す。

（卅二年十一月）

虛榮の世

今や虛榮を誇るの風は凡ての社會に浸潤せり。富めるものは其富の人に知られざらむことを是れ憂へ富まざる者は其の富まざることの人に知られんことを是れ恐る。金錢は凡ての物に單位となれり。美品位、威嚴、凡そ是れ等のものは、金錢の多寡によりて秤量し得ざるは無しと思惟せらる。あはれ無趣味の世なる哉。

（卅二年十一月）

ソロモンの榮華

昔者基督野に咲ける百合の花を指して曰く、ソロモンの榮華の極みも其の榮え、この花の一つにも及ばざりきと。如何にかしこくも大いなる宣言ならずや。毀

也。

而して代議士や、新聞記者や、學者や、國民と眞理との名によりて所謂公明正大の言議を爲しつゝある者也、而して國民と眞理と遂に其の寃を雪ぐに由無し。吁吾人は遂に聲なき國民として終らざるべからざる乎。（卅二年十一月）

咄々怪事

政治家の道念の如何に卑陋なるかを見よ、而して同時に一般社會の良心の如何に痲痺せるかを見よ。中村彌六氏は米國の爲にアギナルド討伐を受負ふべしと論ぜるにあらずや。而して平生粟粒程の道念説に切々たる教育界、宗教界は是の驚くべき怖るべき言議に對し、寂然として言ふ所無きに非ずや。（卅二年十一月）

大處の着眼

天皇陛下の軍人を賣物にし、獨立の爲に鬪ひつゝある義軍の屠殺を受負ふべしと云へる說の奇拔として稱賛せらるゝ世の中に、牛馬虐待廢止論の歡迎せらるゝ

一大刷新の覺悟

名の正しからむを欲せば即ち學者に行け。」一語能く風教の頽廢を表示するものの是の如く剴切なるは無し。國民たるもの須らく其の國民的道念の根本に省みて一大刷新を加ふるの覺悟なかるべからず。

（卅二年十一月）

聲無き國民

吾人は當來の一問題あり、曰く國民の聲は何處にある乎。國民の聲は何處にかある、吾人の撰出せる代議士に乎。然れども彼等の多くは良心の賣買を新聞紙上に廣告して毫も其疚しきを覺えざるともがらならずや。社會の木鐸と自稱する新聞記者に乎。然れども彼等の多くは居沽穿窬の嚢のみ、黄金の響きの前には彼等は寂然として聲無し、然らざれば彼等亦自ら黄金の響きを爲すあるのみ。眞理の研究者を以て自任する學者に乎。然れども彼等の眞理は金錢を以て購ひ得べき眞理也、彼等は左に向て『然り』の眞理を唱へながら、右に向ては『否』の眞理を唱ふる

して馬に乘ることを避くるものゝ如き也。畢竟彼等は彼等の爲すべき事を覺らざるものと謂ふべし。

（卅二年十一月）

眞理の罪惡

眞理の名に據りて行ふところの罪惡は、罪惡中の最も危險なるもの也。吾人特に今日の社會に於て是事を痛覺す。

今や學者は一種の辯護人たらむとするに非ずや。政治家、實業家が一の事業を起さむと欲して、而して名正しからず、義明かならざるを憂ふるや、乃ち是を學者に計る。彼等は、如何なる事物に就ても尤もらしき理屈をコヂつけ得る一種の辯護人としての外に別に學者の本領を認めざる也。而て彼等をして是の如き恐るべき觀念を懷かしめたる責は、學者自らに在り。

吾人は近時の所謂市街鐵道問題に關し、政治家、實業家の頤使に隨ひ、金錢の爲に眞理を賣り、良心を濁ぎたる學士博士の少からざるを聞て、國家の爲に痛哭に堪へざる也。

（卅二年十一月）

任を有せざるは、即ち天の假貸せる修養の時代なれば也。彼れは實務の人にあらず、社會の人にあらず、所謂部屋住の人也。他日實務の人、社會の人としての完全なる資格の得んが爲めの準備時代也。靑春幾時ぞ、彼れは是の準備の爲に當に日も尙足らざるべし。何の遑ありてか慷慨者流の空言に私淑して其本領を顧みざらむとする。社會は少年の慷慨によりて毫も益を受くるものにあらず、少年自らは却て是が爲に大損害を被らむ。かへすがへすも心得違ひと謂はざるべからず。

快濶、進取、樂天は少年の生命也。完全なる人生の開發は是の生命ありて初めて望み得べけむ。不健全なる慷慨は動もすれば人を憂鬱にし、退嬰にし、厭世にす。是の如きは少年にありては則ち精神的に死せる也、吾人最も是を恐る、

（卅二年十一月）

（同十二月中學世界第二卷第二十七號「少年社會の悪流行病」の一文は此篇と大意を同じうす、此を採錄して暫く彼を棄つ。編者）

世と馬

世に爲すあらむと欲して世に接することを憂ふるものは、猶ほ馬を御せむと欲

何程の裨益かあらむ。眞に世を憂ふるものは、徒に慷慨して已むべきに非ず、世豈戰を宣告して而して逃避するものあらむや。吾人は救濟の方法を解せずして徒に慷慨を事とするものゝ果して眞に憂世の士なりや否やを疑ふ者也。

近事新聞雜誌に現はれたる所によりて、今の少年社會の風氣を察するに、其の最も著しき現象の一は慷慨を喜ぶ事也。吾人深く是を憂とす。

彼れ等口を開けば輙ち言ふ、人は墮落せり、世は腐敗せり、名敎地に落ち、彝倫蕩然たり、一大革新なかるべからずと。言や壯ならざるに非ず吾人希くは少年諸子と共に現世の腐敗を承認せむ、唯少年諸氏にして是を言ふ、果して可ならむ乎。吾人は慷慨其物を惡しと謂はず、心の淸きものは僞善を惡まざるを得ず、人の正しきを好むものは不義を憤らざるを得ず、慷慨義憤は人情の最も麗しき發動として、吾人是を少年諸氏に見たるを喜ぶ、唯其の位に居らざれば其事を言はず、吾人は少年の本領、他にありて此に在らざるを告げんと欲す。

少年の時代は修養の時代なり、學識を蓄へ、閱歷を積み、品性を養ふ時代なり。彼れは道德上に於ても、法律上に於ても、一個人たるの責任を有せざる也、一個人の責

べきを信ず。唯是の自負の面目に對しても顧みて相忸怩たるものあらざるか。

（三十三年十月）

進步の呪咀

凡そ葛藤無ければ開展無し。辯難攻擊は學を進むる所以也。學に忠なる者にはおのづから執着あり、執着ある者にはおのづから論戰あり。是に於てか學界初めて活動し、是に於てか眞理初めて現はる。沈靜を喜ぶものは即ち進步を咀ふ也。

（三十二年十月）

少年に寄語す

凡そ天下の事、無責任の慷慨より容易なるは無し。人己れに背き、事意の如くならざれば輙ち嘲罵を以て自ら遣る。名は慷慨と稱し、義憤と云ふも、實は即ち不平のみ、多くの場合に於ては陋劣なる主我的感情より來る所の不平のみ。是の如き『慷慨』又は『義憤』の幾百千を積聚するも徒に世を亂り人を誤るの外、世道人心に

あるべき也。

學界危言

吾人をして忌憚無く吾人の觀る所を言はしめば、今の文藝界には大研究無き也。隨て大著述無く、大論策無き也。又隨て大論戰無く大發見無き也。潜に想ふに、學界の沈靜、無氣力、凡そ今日の如く甚しきは無し。

帝國大學は學者の淵叢也。然れども文學、哲學、史學等に關して、明治學術史を飾るに足るべき何等の大著述、何等の大研究ありや。吾人の寡聞なる未だ是れあるを知らざる也。ブルレの飜案、ラッドの抄譯は、吾人是を見たり、然れどもそが我學術界に幾何の光榮を加ふべきかを知らざる也。專門學に關する幾多の敎科書的著述は見はれたり、然れども吾人をして忌憚無く言はしめば、多くは尋常一樣の書なるのみ、特に專門博士を煩はすべき者に非ざる也。嘗て人の傳ふるを聞く、日本の大學は世界有數の大學なりと。吾人は眞に其の然らむことを希ひ、又當に然る

若し新聞紙にして眞に社會の輿論を代辯するものならむには、而して社會の輿論にして眞に社會の意志を發表せるものならむには、新聞紙は眞に一大勢力ならざるべからず。

問題は極めて簡單也、曰く、今の新聞紙は果して社會の輿論を代辯せるものなる乎。若し然らば、そが代辯せる輿論は同時に社會の意志を發表せるものなる乎。問題は極めて簡單のみ。

今の新聞紙果して無勢力なる乎、そは輿論を代辯せざる也。もしくは代辯せられたる輿論が眞に社會の強健なる意志を發表せざる也。

其の論議が如何に正義人道の美名によりて爲さるゝにもせよ、社會的良心に接觸するに非ざれば、是れ野に叫ぶ聲なるのみ。新聞記者は時代精神を了解するの識見を具へざるべからず、若しくは、時代の精神を興起してそを統率するの力量を有せざるべからず。是の識見無く、是の力量無く、漫に子々の小智を弄して時向を迎倘するもの、以て人を喜ばすべし、以て人を動かすべからず、況むや時勢の風潮に率先して、一世の木鐸となるをや。新聞記者たるもの、深く顧みて自ら警醒する所

れたる大學は、一言の辯解をも爲さず、又一分の進路をも變せざる也。淺薄と嘲けられたる教授は、依然として其の『淺薄』なる講義を爲しつゝある也。學生は依然として罵られたる如くに『無氣力』なる也。東京帝國大學は、此の大打擊を知らざる爲して、其の爲すがまゝに任せたりき。

是の如きは數多ある中の最も較著なる事例に過ぎざる也。萬朝報が訐發を以て成功の前例を示したるより以來、多くの新聞、特に繪入通俗的新聞の多くは、社會の裏面に着眼し、訐發、彈劾を以て讀者を惹かむと力めざるはなし。是の如くにして訐發せられ、彈劾せられたるもの、敎會あり、會社あり、銀行あり、紳士あり、海軍々人あり、賣藥商あり、役者あり、娘義太夫あり、高利貸あり。曰く何々の秘密、曰く何々の內幕、紛として擧げ數ふべがらず。而して是の如くにして幾何の社會的制裁の加へられたるかは、吾人の得て知らざる所、想ふに多くは流風飛影の如くにして看過せられたらむのみ。

今の新聞紙果して社會の大勢力なる乎。大いなる勢力とは果して是の如き者なる乎。是れ新聞紙の當事者が、潜念熟慮を要する事ならずや。

是の大新聞は、他の大新聞たる讀賣新聞と共に、大に辯難攻擊の記事論文を連載し、帝國經濟界の一大失體として彈劾痛激を極めたりき。然れども其の結果は如何。日本銀行は毫も爲に其事業を阻格せられざる也。責任當事者たる同行總裁の椅子は爲に一分の動搖を感ぜざる也。株主總會は、太平無事の間に經過せられたる也。總裁は啻に批難を受けざるのみならず、最も有力なる株主總代より其措置の適當なりしの故を以て、特に感謝の意を告表せられたる也。斯くして日本、讀賣等の大々的攻擊は、毫釐の影響を止めずして空々寂々に歸したりき。

讀賣新聞は、教育界に於て最多の讀者を有し、隨て最大の勢力を有する新聞也。時事新報と東京朝日新聞とは其記事の公平にして其論議の妥當なる事に於て、最も信用篤き新聞也。此の三個の新聞が學閥の攻擊者として、常に其侃諤を恣にせるの事實は、何人も能く知る所、殊に今夏、讀賣新聞が、東京大學を以て教育界の羅馬法皇に擬し、滔々二十餘回に涉りて其の橫暴、壞亂、腐敗を痛論し、事例を徵證し、理義を敷演し、嘲罵、叱咤、甚だ力めたるの事實は、上下の認めて近時快心の大論議と爲す所也。然れども是の快心の大論議は煙の如く消えたりき。橫暴、壞亂、腐敗と罵ら

而して是の彈劾を快なりとして是の新聞を歡迎したる社會は、是に因りて幾何の影響を被りしや。是れ頗る疑問也。堂島事件に關する賄賂の摘發は當事者たる農商務大臣の地位に幾何の動搖を與へ得たりしや。蓄妾實例の中に數へられたる紳士は、寧ろそを名譽として誇り、或は却て私生兒の父たらざるを恨とせるものあるに非ずや。大政黨の一領袖は、強姦罪を犯したる破廉耻漢として、十數日の間日々一段餘の攻擊に遭遇せり、然れども紳士として政論家としての彼の面目に幾何の汚點を加へ得しや。

太平新聞は、其の賣高に於て萬朝報を去ること頗る遠からむ。然れども近時博覽會の事務官長に加へたる訐發、打擊、嘲罵は、殆ど惡德に關する一切の文字を羅列せるの觀ありしが、是が對者たる事務官長其人は、冷然知らざる爲して社會を濶步しつゝあるに非ずや。

日本新聞は、今の日本の社會に於て最も信用あり、最も勢力ある大新聞なりと謂はる。其記者として陸羯南を有し、三宅雪嶺を有するの一事、既に其の大新聞たるの事實を證明するに足るべし。先に日本銀行に未發行の紙幣紛失の事ありしや、

ざるべからず』是れ最も正當にして最も男子らしく且つ最も危險なる思想なり。奈破翁の所謂『予を殺すべき彈丸は未だ投せられず』と云へるもの即ち是れ也。

(卅二年九月)

新聞紙の無勢力

今や新聞紙は、社會の一大勢力なりと謂はる、吾人強ちに是を否むことを爲さゝるべし。然れども同時に新聞紙の無勢力を證する幾多の事實をも否むこと能はず。

萬朝報は府下に於て最も賣高多き新聞なりと稱せらる、而して是の新聞の賣高をして多からしめたる所のものは、所詮は惡事の訐發に外ならざることは凡ての人の認むる所也。渠は賄賂を公表せり、蓄妾實例を掲示せり、私生兒の父を摘發せり、強姦罪を犯したる當世の紳士を痛罵せり。是等の事實は何れも正義人道の名により、恰も古の志士が時の奸臣に對せる如き口調によりて彈劾せられたるもの也。

惡を憤るもの

惡を爲さざるものは有り、惡を憤るものは尠し。然れども、惡を爲さざるの精神を擴充せば、遂に惡を憤るに到らざるべからず。道德上所謂怠慢罪を犯さゞるもの、今の淸廉の君子と稱せらるゝものゝ中、果して幾何かある。（卅二年九月）

僞善亦可也

名聞の爲に善を爲すは、善を爲さゞるに優れり。世に名聞の爲に惡を爲すを許すべき社會無ければなり。是の如きものを目して僞善と謂ひ得べくむば、僞善も亦可なり。惡を知りて惡を爲すもの、世往々目して直となす、天下の危險是より甚しきは無し。

最も危險なる思想

『投げられたる石は行く所までは行かざるべからず、人は生れて死ぬるまで生き

國民の歌

閑適意のまゝにして神興湧くが如き時、塵に劇務を脱れて襟懷俄に胖きを覺えたる時、或は淺酌微薰を帶びて清風を迎ふる時、或は好風景に對して幽情を訴ふる時、請ひ問はむ、吾人に歌ふべき歌ありや。

人の聞かむことを憚るものは、吾人の歌にあらざる也、藝妓に對して初めて歌ふべきものは、吾人の歌に非ざる也。再び請ひ問はむ、吾人に是の如き歌ありや。

吾人は音樂敎育家の盡力を謝せざるべからず。普通敎育授くる所の唱歌に對しては、少くとも卑猥なる俚謠を、少年間より驅除しつゝある功績を認めざるべからず。諸種の音樂會の演奏も亦吾人の深く歡ぶ所也。唯々吾人は普通の國民として、其感興を遣るに足るべき歌謠を要求す。漢詩好し、謠曲可なり、唱歌亦不可ならず、唯吾人は彼のローレライの如く、リ・ベスフリューリングの如く、高尚優美にして且つ國民的なるものを望むのみ。抑々吾人は永く歌ふべき歌なくして已まざるべからざる乎。

（卅二年八月）

歐米諸國の例に比するに、吾人は轉た我邦の所謂紳士なるものゝ沒趣味を想はずむばあらず。

吾人は常に想ふ、今の紳士と稱するものは、其邸宅宏壯、衣食豐美なりと雖も、其精神的生活は極めて貧賤なるものに非ざる乎。彼等は温飽の裏に肉慾を恣にすれども、其友に古人無き也。彼等の左右に粉黛の美あり、然れども自然の美なき也。彼等は名利に親む、而して眞理を求むることを知らざる也。彼等の多くは精靈の慰藉の何物なるかを解する能ざる也。

讀書

今の紳士をして是の如く沒趣味ならしむる一大原因は、疑もなく彼等が書を讀まざるにあり、而して彼等をして書を讀む能はざらしむる主なる一原因は、疑もなく彼等の不規則なる生活にあり。

彼等の事業には秩序なるもの無し、而して無秩序は時間の盗賊也。是の如くにして、彼等は讀書の人たるには餘りに多忙の身たる也。

售るものに對する謀として、直切りあり、是に於て乎世間もろ〳〵の不正、虚僞、詐騙の事起る。

願くは我邦人をしてイマ少しく常識あらしめよ、法令の繁、必ずしも煩はしからざらむ、爭ふものは笑うて手を握るを得む。夫の學者なるものゝ小面倒なる理窟に迷はさるゝ事も亦少かるべき也。世に迷惑なること多し、而れども常識なき學者の杓子定規論程、社會に迷惑なるはあらざる也。

麵包の外に糧無し

當今紳士と稱せらるゝ者流ほど、沒趣味なるは無し。彼等の多くは、知る所、行ふところ、一に當眼の俗務のみ。彼等の慰藉を仰ぐ所は、酒色と博奕とのみ、彼等には麵包の外に糧なき也。見よ會々政治家にして書を讀むものあれば、世は傳へて美談となすに非ずや。故川上氏の崇拜者は、彼が軍人にして尚且藝術を解せりとの事を以て彼を讃美する一材料となすに非ずや。伊藤侯爵、時に幇間詩人を伴侶として、詩酒の間に徵逐すれば、人は相傳へて彼の雅量を珍とするにあらずや。是を

常識の缺乏

若し常識を缺けるものを不具とすれば我邦人の大多數は慥に不具なる人民也。學者は其學を知るのみ政治家は其政治を見るのみ軍人實業家宗教家教育家は唯共に其軍事實業宗教教育を語るべきのみ。國民の全體を通じて會通融合の媒介たるべき常識を有するもの甚だ乏しき也。

夫れ唯常識を有せず是を以て理を辨じ事を盡す關する所は一方面一局部のみ。人生世務の大體より打算し來りて大中至正の公議を標示するもの甚だ乏しきを致す。

夫れ只だ常識を有せず是を以て法を運らすもの其形式に泥みて其精神を遺却し事に當るもの膠柱の規則を重じて臨機の妙用を解せず是を以て國家の事多くは偏輕に非ずむば則ち偏重のみ。

夫れ唯だ常識を有せず是を以て自他を秤量して公平なる能はず人々遂に相信せざるを致す故に售るものゝ估ふものに對する策として懸直あり估ふものゝ

ほ是の如し、自餘の碌々たるもの、又知るべきのみ。信徒幾百萬、僧侶幾十萬、教界は墮落に瀕し時勢は革命を招く、一人の大勇猛心を奮起して本邦宗教界の風色を一變するもの無き乎。

（三十二年七月）

大磯停車場の蟹

頃日、大磯停車場より上車せむとする小兒、手に一蟹兒を携ふるあり、驛長是を叱して曰く、蟹は動物也、客車に携へ入るを許さず、宜しく動物運搬規則に遵ふべしと。傍ら江戸ッ兒あり、扼腕一番して曰く、べランメー！蟹携ふべからずむば、我背上の半風子を如何と。驛長赧然として默す。

新紙傳ふる所の是の小話は、事驛長の沒分曉に關せりと雖も、常識を有せざる我邦人の好適例として見るべからざる乎。國民よ、希くは熟慮せよ、一千頁の書籍の供ふるよりも大なる教訓は、時に這般の一小事に含蓄せらるゝ也。

て我が憐むべきルーテル等は、僅に僧職寺格の褫奪に遭て、鈍くも其聲を潜めたり、而して陰に特免を請願して柔媚猫の如くになりぬ、宗教家の革命的熱誠とは果して是の如き者なる乎。翻て眞のルーテルを見よ。彼れはヘンリー四世をしてアルプス山の氷雪を踏で其罪を謝せしめたる羅馬法王の權力の如何なる者なるかを熟知せり。而して九十五個條の宣言をギッテンベルヒの寺門に掲げ、公々然として贖罪劵販賣の非道を道破せり。是の痛快なる反抗によりて、彼は異端として彈劾せられぬ、彼れの生命は幾度か死に瀕して、而かも彼の志や毅然として動すべからざりき。法王は彼れに嚴命して一切の論策を燒かしめ、命を獨逸の侯伯に傳へて其捕縛及び處刑を命じたり。然れども是の如き威嚇はルーテルにとりて兒戲に等しかりき。彼れは少しも怯まず、却て法王を彈劾して基督の罪人と爲し、遍く基督教國の君主に檄して其暴横を膺懲せむことを求め、群集歡呼の間に宗法の書典と破門令とを火中に投じき。――是の如きものは眞のルーテル也、生氣凜々として百世の下尚ほ懦夫をして起たしむるに足る。白川黨の小ルーテル等は彼れに對して果して何の面目かある。而かも想ふに、彼等は今日宗教界の錚々たるもの、而して尚

を楽みて、却て外護を他人に仰ぐ者に於てをや。マホメットの號令の如何に猛烈なるかを見よ。曰く『我同胞にして戰に臨まずして其竈を掘るものは禍なる哉。爾等は果して死を避け得べしと信ずるや、何ぞ生死の宿命動かすべからざるを思はざる。爾等は戰鬪の熱火を恐るゝ乎、見ずや天國は爾の前に在り、地獄の火焔は後にあることを。』――亞刺比亞人は是の如き精神に鼓舞せられ、其の『マーラン乎、貢乎、將た劍乎』を叫びし也。又日蓮の敎示の如何に壯烈なるかを見よ。曰く、『日蓮が弟子等は、臆病にては協ふべからず。彼々の經々と法華經と勝劣、深淺、成佛、不成佛を判ぜむ時、爾前迹門の釋尊なりとも、物の數ならず、何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をや、況して權宗の者どもをや』――法華一宗は是の如き烈々たる光焔の中に產まれたり、區々たる迫害又何かあらむ。一匹の虫を殺さゞる慈愛の法性も、一朝激すれば河嶽の流峙も是を妨ぐる能はざる也、是の活氣ありて宗教初めて立つ。

往年本願寺に所謂白川黨なるものありき、時の人或は擬するにルーテルの革命を以てせりき。而して所謂ルーテル等の爲せる所を見よ、法主は彼等を獄に投せしに非ず、斷頭臺に上せしにあらず、輿論は却て熱心なる應援の聲を與へたりき。而し

比周して互に相排擠するは、是れ政治社會の弊風のみ、今の宗教家が其本に力めずして其末に走り、事に三道擁護と謂ふが如き頑迷なる運動に出でたるは、まさしく宗教墮落の眞相を暴露せる者と謂ふべし。日蓮や親鸞や、是の如くにして其宗門を開きたるものに非ざりき、今の僧侶は內に修めずして、徒に外に求め、六慾煩惱の餓鬼となりて自ら覺らず、腐敗も極まれる哉。

何ぞ大勇猛心を奮起せざる

宗教家の立場より觀れば、今の世はまさしく革命の來るべき時代也。良しルーテルの旗は尚ほ揚がらずとするも、少くともサボナロラの血の濺がるべき時也。親鸞氏、日蓮氏が其教を創めけむ時勢は正に是の如かりき。而して曾て安立救濟を與へむが爲に起りたる彼等の宗門は、今や更に他に向て其安立救濟を仰ぐべき勢を示し來れり。第二の親鸞何處に在る、第二の日蓮何處にある。

宗教家にして果して眞に救世の本願を有する乎、彼等は當に是の大勇猛心を示さゞるべからず。人をして血を見るを畏れしむるものは眞の宗教心に非ざる也。迫害と禍難を避けしむるものは眞の慈悲心に非ざる也。況や妻妾を擁護し、暖飽

過ぐ。『三眼』の公言するを聞く、曰く、佛教は中堅也、神儒兩教は左右の翼也、耶蘇教は之を外寇に譬ふべしと。又曰く、中堅已に敗れむ乎、左右の翼を以て回復するは難し、故に中堅は最も鞏固峻嚴ならざるべからずと。咄々是れ何の謂ぞや。彼等は既に忠孝愛國を標榜して三道一貫の大主義となすに非ずや、然らば則ち何ぞ國體國性の淵源たる神道を奉戴することを爲さゞるや。然るに自ら借して中堅と稱し、峻嚴犯すべからざるの權勢を有たしむべしと爲す。あはれ口を尊王護國に假りて自ら爲にする所あらむとするの計畫、寧ろ淺薄ならずとせむや、吾人は是の如き彼等の云爲を以て、神道の上に加へられたる一大侮辱なりと斷言するに憚らず。

(卅二年七月)

腐敗せる宗教家

腐敗も茲に到りて極矣

宗教家の運動は、須らく宗教者らしがるべし。救濟の大願に據りて精靈の感化に力むれば、宗教家の爲すべき所即ち盡せり矣。帝室權家の外護を是れ賴み、朋黨

九世紀末の新日本に擬せむとす、何物の突梯か能く是に加へむ。

今や國民的生活は打して一團となれり、一切の事物は淺薄なる歴史的關係を離れ、別に其本來の面目に隨て新に去就を決すべき機會に到着せり。同舟の吳越は互に其假面を轉落して相別れざるべからず。是時に當り漫に過去の舊套を襲ひて三道擁護を唱ふるが如きは、沒批評、沒分曉の極みなりと謂はざるべからず。是れ即ち人の耳目を塞ぎ、奬むるに虛僞を以てするものに非ずして何ぞや。

神道の上に加へられたる一大侮辱

外護習合や既に醜也、然れども自家生存の爲にする所の勠力は、聊か憐恕すべき所無きに非ず。而かも吾人は今の三道擁護論者に於て一事の假借すべからざるものあるを見る。尊王護國を以て私利の方便とする動機の甚だ明瞭なる事是れ也。

所謂三道擁護を唱ふる者は、神道家に非ず、儒敎者に非ず、悉く皆佛敎徒也。釋雲照氏の國民敎育論を見よ、鳥尾得庵氏を社長とする大道叢誌を見よ、鈴木信任氏の雜誌『三眼』を見よ。是等佛敎徒が神道、儒敎を以て爲にするの證跡寧ろ炳焉たるこ

儒教は退嬰主義也

儒教は忠孝を以て立つ、現世教としては神道と共に佛教の出世間教に反對する者也。然れども儒教は生々主義に非ずして退嬰主義也、進取主義に非ずして保守主義也。其道德の標範は先王の功業にして其の理想とする所は唐虞三代に外ならず。進步とは儒教の解せざる所也。是を以て政治に、文藝に、回想擬古を是れ力めて敢て違はず、支那四千年の文明は是の精神を殆ど遺憾なく體現したりと謂ふべし。是れ豈に神道の所謂生々主義ならむや。吾人は漢學大家の口より孔子保守論者に非ざるの辯解を聞かざるに非ず、然れども老大家をして是の如き辯解に力めしめたる所以に想到せば、思ひ必ず半に過ぎむ也。

沒批評の極

三道擁護と謂ひ、三道一貫と謂ふ、畢習合外護によりて自家の俗權を維持せむとする佛教者流が慣用の手段のみ。彼等は聖德太子の十七憲法を引いて先王の遺法を口にす。十七憲法は篤敬三寶を大書して毫も神祇と言はず、三道一貫の實何處にかありや。假りに此を太子の遺法なりとするも、千三百年前の遺法を以て十

るが故に、何れを擇ぶも妨げなしと說くものは、實大乘にあらずや。世間の忠孝も出世間の南無阿彌陀佛を稱ふる功德に等しと說くものは淨土宗也。若し夫れ淨土往生の道途は知恩報德にありと說くものは、獨り一眞宗あるのみ。浩瀚なる佛典中より忠孝說を掲摭して是を綜むるもの、猶ほ是の如きに過ぎず、佛敎全部が如何に君父國家を無視するの精神に充滿せるかは、大乘戒律を收めたる一梵網經を繙かば昭々乎として明なるべし。生々主義の神道は既に其根本に於て佛敎と衝突するにあらずや。

兩部神道乎

所謂三道擁護論者はまさかに、本地垂迹說もしくは兩部習合論を以て神佛二道の調和となすものに非ざるべし。若し然らば是れ國體を蔑視し、國性を侮辱するもの也、尊王護國の大義夫れ何處にかあるや。若し夫れ眞宗の世間的敎義を目して神佛二道の同軌と爲すか、然らば即ち念佛無間を唱へたる日蓮宗の如きものを如何せむとする。況むや眞宗が世法の上に宗規を立てたるは、外護迎合の劣手段にして却て一代佛敎の大主義に背致せるものなるをや。

は同舟の中に尙ほ時に吳越あることを想はざる也。

神道は生々主義也

神道は現世敎なり、日本建國の精神と國民の理想を譔示せる現世敎也。其の訓ふる所は生々也、進取也、是を轉迷開悟を以て宗義となし無明煩惱を解脫して涅槃妙心を發得すべしと訓ふるに比して、果して如何。淨穢差別を斥くれば是れ道德無き也、塵勞纏綿を誡むれば是れ世事無き也、何處にか國家あり、那邊にか忠孝あらむ。是れ豈に神道の生々主義に絕對的に背馳するものに非ずや。

吾人は佛敎僧侶が忠孝を言ふを熟知す。吾人は必ずしも村上專精師の佛敎忠孝論を以て牽强附會と爲さゝるべし。然れども彼等があらゆる辯護を認容して而かも遂に爭ふべからざるは、佛敎が世間に比して出世間を尊重するの一事也。現世にありて佛敎によりて開悟する能はざるもの、已むを得ず忠孝によりて來世の果報を享受すべしとは、法相宗の敎ふる所に非ずや。出世間の大道を修する能はざるものをして、先づ楷梯として世間の忠孝を行はしめよとは、小乘敎及び權大乘敎の說く所にあらず[redacted]や。世間の小善も出世間の大善も共に眞如法性の妙用な

らずかし。謂はれ無き畏怖も見苦しき狼狽も、げに是よりぞ來る。神儒佛三道の擁護を唱ふるものは、暫らく其聲を停めて十九世紀末の文明に鑑みる所あれ。

同舟の中尙ほ吳越あり

吾人は所謂三道擁護を唱ふるものゝ志を諒とすべし。尊王護國の大義を明にし、國體國性の精華を揚ぐべしと謂ふ、誰かは是目的に同せざるべき。されど是の目的を達せむが爲に何故に三道の擁護を須要とする乎、何故に特に基督教を邪教とし、國敵として排斥せざるべからざる乎。三道擁護論者の言ふ所は、單に是の三教が從來の日本に共存せりと云ふの事實に過ぎず、一言も其の然らざるべからざるの理由に及ばざるは如何にぞや。

神儒佛三道は如何にも過去の日本に於て共存せりき。然れども共存てふ單一の事實は必ずしも其內部の調和を擔保するものに非ず。其作用に於て無關係なるものも共存し得べし國民生活の統一を缺ける時代に於ては氷炭相容れざるの思想も各々一隅に割據し得べし。神儒佛三道は如何なる意味に於て過去の日本に共存したりとする乎、所謂三道擁護論者は全く是一段の硏究を蔑視せり、彼等

られ得べきもの也。專門學者ならざる一般國民をして學術の興味を覺らしめむには、必ず是の通俗化を要す。吾人は是點より見て、井上圓了、坪井正五郎諸氏が常に其專門の知識を弘布せむとするの志を多とするもの也。今日哲學、人類學の知識が多少社會に播傳せられたるは、二氏の力與て多しと謂はざるべからず。吾人は切に本邦の學者に向て專門學の通俗化を希望して已まざる也。是れ獨り、專門學者の獨立を擔保する所以のみならず、專門學其物をして一國文明の土壤の上に健全なる發達を遂げしむる所以也。

(三十二年七月)

奇怪なる保守思想

凡そ過渡の時代に於ては、種々の奇怪なる現象を見ること強ちに珍らしからず、さるにても近頃神儒佛三道の擁護を唱ふる保守思想こそいとも〳〵奇怪の極みなれ。如何なれば是昭代にありて斯かる沒分曉なる妄想の產み出だされたる乎は、歷史家にとりて極めて興味ある問題なるべし。世に無學程恐ろしきものはあ

吾人の見る所を以てすれば、是の影響は二個の方面に於て最も有害なる結果を齎らせり。其の一は、一般に社會に向て專門學の知識を杜絕するの傾向也、他の一は、學者をして專門學の攻究に專心なる能はざらしめ、隨て學術の發達を沮害するの傾向也。是の二個の傾向が、一國文明の發達上に如何の障害を與へ得べきかは、吾人が喋々を待たざるべし。

如何にして專門學と社會とを接近せしむべき乎、如何にして專門學をして學者又は大學の私事に止らしめず、進で一國文明の土壤の上に健全なる生育を遂げしむべき乎、是れ本邦の敎育者にとりて最も重大なる一問題也。是の問題は社會上より、敎育上より種々に解釋せらるべし、然れども是を學者の側より見て、一事の彼等に希望すべきことあり。他なし、本邦の專門學者が一面に於て其專攻學科の蘊奧を究むると同時に、他面に於て是を通俗化するの用意を懈らざらむこと、是れ也。今日の專門學者と稱する人々の中には、高く自ら標置して故らに世俗に遠かり、平明の事を言ふにも晦澁の學語を列ね、故らに俗人に解せられざらむことを務むる者あり。謂はれ無きヴニテーと云ふべし。專門學と雖も、或程度までは通俗化せ

の讀者を有すること決して容易の事にあらず、隨て書肆も初めより是を出版することを肯せざる也。書籍尚ほ且然り、況してや講筵を開き、聽講料を徴收して、聽者を求むるも恐らくは百人を得ること容易ならじ。されば是種の專門學に關する公開講演は我邦に於て絕えて見ざる所也。

今の專門學者が世に處するの情狀槪ね是の如し、一言すれば職に大學の敎授講師、若くは是に相當する官職に就くに非ざるよりは、專門學者としての生活は殆ど不可能の事に屬す。彼等が其著書又は講演によりて、適當の報酬を得むことは、今の時に於て思ひも寄らざる也。世人は少數なる大學敎授の境遇を見て專門學者の待遇の厚きを言ふ勿れ。大學敎授たり得ざる大多數の專門學者、もしくは專門學者たらむとせしものが、如何に社會に冷遇虐待せられ居るかを想はざるべからず。今の時に於て、專門の學術は畢竟國民的文明の間に根柢を有するものに非ず、僅に少數なる學者社會、及び敎育系統の範圍內に於て其存在の意義を保つのみ。吾人は社會と專門學との間に存する是の如き關係が、一國文明の上に如何の影響を及ぼすべきかを考察せざるべからず。

も其實際の事情は決して然るを得ず、將來も亦恐らくは然るを得ざるべし。彼等の多數は自己の學力によりて卒業後の生活を維持すべき境遇に在るもの也。幸に大學もしくは高等學校等に於て相當の位置を得れば其專攻の學術を守り得べけむも、是の如き便宜を得ざる大多數の卒業生は其生活の必要上已むを得ず自己の專門を捨て別に麵麭を得るの道を講せざるを得ざる也。是に於てか例へば哲學科の卒業生の中、銀行に入るものあり、會社に入るものもあり、地方中學校に入りて歷史、地理、英語の教師となるが如きは最も普通に見る所也。是の如くにして、當初專攻の意氣と、精神と全く無意氣と爲り了るもの比々として是れ也。

大學の講座は限りあり、然らは專門學者は何故に獨立して社會に其位置を保ち而して其攻究を繼續する能はざる乎。他なし畢竟社會が是の如き專門學に對して興味を有せざれば也。獨逸にありては純粹なる學術研究者が官府に據らず、學校に賴らず、其著述又は講演によりて立派に生活し得るの例は、甚だ珍らしからず、然れども我邦にありては、是の如き便宜は皆無也。設令へ攻究多年の後、最も價值ある著述を完成せりとするも、其の記載する所少しく專門學に屬する時は、五百人

に乏しきを嘆ずるを聞く。然れども是の如き嗜好に乏しきや否やは彼等をして學術の趣味を知らしめたる後に於て初めて決定せらるべきに非ずや。

吾人の見る所を以てすれば、一般社會と學術社會とは我邦に於て甚しく懸隔せり、一般國民は學術に對して全く門外漢なり。彼等の學者を見るや、實際社會以外の人類の如く思惟し、學者の彼等を見るや、亦無學にして共に語るに足らざる俗人と爲す。實用的學術にありては、是弊やゝ少しと雖も、文學、理學等に關する諸學科にありては、兩者の間に殆ど超渡すべからざる鴻溝の存するを見る、是の如くにして社會が學者に酬ふるの厚からざる、素より自然の結果のみ。吾人は是の牴牾の罪、寧ろ學者の側に存するを認むる也。

帝國大學の文科及び理科より年々出だす所の卒業生は、現に百人以上也、而して年々増加少からず、且京都大學の完成せらるゝに到らば、更に多きを加ふべし。若又近き將來に於て設置せらるべしと噂せらるゝ九州、東北二大學に於て、是の二分科の設備を見るあらば、更に多少の増加を見るに至るべし。是等の卒業生は帝國大學の精神に隨へば、當に益々其專攻の學科を修め、其蘊奧を極むべき者也、然れど

果して如何の狀ぞや。認識論てふ術語を不完全ながらに解するものすら、蓋し一千人を出でざるべし。更に是に關する著述を購讀するまでにインテレストを有する者は、恐らくは二百人三百人に過ぎざるべし。二三百部の賣高より生ずる收益は書生一ヶ月の學資のみ、專門學者が數年の勞力に比すれば九牛の一毛に過ぎず。

認識論は一例のみ、然れども我邦の專門學者は實に是の如き境遇に處して、生活しつゝある也。學者は素より利益の爲めに其學を修むるものに非ずと雖も、其勞力によりて少くとも生活するの權利を有するもの也。而して社會の彼等に酬ふるや是の如く薄し、今の世にありて學者たる亦難しと謂ふべし。

社會は何故に學者に酬ふるに爾かく厚からざる乎、言ふまでも無く一般人民が學術上に興味を有せざれば也。學術上の興味を有せざるは何故ぞ、是れ或は我邦人が先天的に知識慾に乏きの致す所ならむも知るべからず、而かも其直接の原因は、彼等が學術上の知識に接觸するの機會乏きが爲ならずむばあらず。吾人は本邦の學者が動もすれば本邦と西洋諸國とを比較して、我一般國民の學術上の嗜好

專門學の知識を普及せよ

一國の文明なるは、少數者が卓拔なる學識を有するが爲に非ずして、寧ろ多數國民の平均知識の程度高きが爲也。茲に是の明瞭なる眞理を言はむと欲するは、聊か本邦今日の時弊に感ずる所あれば也。

今茲に哲學專門の一學者ありとせよ、而して是學者が例へば認識論に關する一書を著はして、多年研究の結果を公にせりと假定せよ、而して是新刊書の題名と抱負とは、全國のあらゆる新聞紙、雜誌によりて廣告せられたりと假定せよ、日本全國を通じ、多少の注意を以て是の廣告を讀み得るもの果して幾人かあるべき。更に是の廣告に對して多少の興味を有し、進で是書を購讀するの決心を爲し得るもの、果して幾人かあるべき。哲學專門の學者と雖も、露を飲み霞を吸ひて生活し得るものに非ず、其勞力によりて一家一族を給養するの必要ある者也。彼の勞力は哲學上の著述なり、而して是の著述によりて收獲する所の利益は今の日本にありて

事○素人相撲にて命を失ふ○舊旗本の投身○貸座敷へ死に行く○其他數件

報知新聞　同上

○實子を絞め殺す(繪入標題二號文字長さ凡そ一欄半)○母の情夫殺し(標題四號文字繪入り長さ凡そ二欄)○臭骸事件詳報(標題二號文字長さ凡そ一欄)○家齊將軍の御小姓(身投げ)○其他數件

見るべし、三面雜報の大半、若しくは三分の二は、何れも殺傷罪惡の事件によりて塡充せらるゝを。是れ讀者の好奇心を迎合する所以なるべしと雖も、品位ある新聞紙の事業としては、吾人の甚だ取らざる所也。事知名の人に關するか、又は私人間の出來事なるも、公衆の注意を要すべき特殊の事情あるかに非ざるよりは、名も知れぬ人の罪惡殺傷を精述するは、吾人にとりては殆ど無意義の記事也。吾人は必ずしも是の如き記事に罪惡を奬勵するの力あるべしとは思はざれども、少くとも社會の風氣をして粗厲ならしめ、知らず知らず殘忍酷薄に對する感覺を遲鈍ならしむるの惡影響あるべきを疑はず。而て新聞紙自身にとりても、決して其品位を高むる所以に非ざる也。吾人は是點に關して、今の新聞記者の熟慮を費さむことを切望す。

(三十二年七月)

や。

今の新聞紙、殊に繪入新聞紙が好で罪惡の出來事を報告するに精密なりとの評は、吾人の久しく耳にする所也。乃ち試に先月廿日發行の分を取りて其二三を閲するに、世評の眞に吾人を欺かざるを見る。是日或は特に是の如き出來事の記載すべきもの多かりしやも知るべからずと雖も、亦以て近時新紙の傾向を察するに足らむ。即ち其の三面雜錄の項目を擧ぐれば左の如し、

中央新聞（六月二十日發行）

○戸塚村謀殺事件（標題二號文字長さ凡そ二欄）○今川町の實子殺（本文二號文字入れ長さ凡そ二欄）○川越在の實子絞殺（標題四號圏點附き）○出刄庖丁を以て實子を殺害す（同上）○岩谷商會手代の妻の投身は他殺（？）○發狂者妓樓に自殺を圖る○狂人鋸を携て公園に彷徨ふ○旗本の身の果（隅田川の入水者）○墮落學生の大連淺草座に操込む○世田ヶ谷村長の縊首に就て○横濱だより（强盗――横死）○以下數件。

萬朝報（同上）

○藝妓の弗匣（標題二號文字長さ一欄）○新御茶の水事件犯人の自白（長さ凡そ二欄）○馬鹿女房實子を殺す（長さ凡そ一欄半）○親が死だと僞りて詐欺す○豐後炭坑の大慘

て危險ならざる乎。吾人は現今知名の新聞紙には、決して斯る失態無きを確信すと雖も、然れども隨分有り得べき失態也。是の如き失態を未然に防遏するの策として、資格制定の方法を講ずるは、決して閑事業に非ざるべし。吾人は曩日『世界の日本』紙上に新聞記者募集の廣告を見、今の人の新聞記者に必要なる資格として思惟する所の如何なる程度の者なるかを知り得たり。第一は身體の健全なる事也、第二は二十歲以上三十歲以下なる事也、第三は論文及雜錄體の叙事文を書き得たる事也。廣告者たる開拓社は、是三箇條の資格を備へたるものをして、半ヶ年間東京に於て一定の事業に從事せしめ、而して後地方新聞記者たらしむべしと謂へり。三十歲以下二十歲の男子にして身體健全なるもの何ぞ限らむ、新聞記者の唯一の資格は、論文及雜錄體の文章を書し得るの一事に存する也。普通敎育を受けざるも差支無し、專門技藝の敎育を受けざるも差支無し、刑法上の制裁を受けて公權停奪の處分に逢へるものも差支無し、唯少しく文筆の才能あれば則ち足れりとする也。嗚呼是の如き資格を須要とする新聞記者をして、輙ち筆を取りて社會の褒貶戒勸の事に當らしむ、是れ小兒をして利刄を揮はしむるよりも危險なる事ならず

人は今の我邦に於て社會教育に着眼する新聞紙の甚だ少きを悲まずむばあらざる也。

吾人は記者其人を得ざるを以て、新聞紙の一大缺點なりとするに躊躇せざる也。夫の文墨に馳騁して一世の豪傑を兒撫するの概あるものも、實際其人に面すれば叩頭媚悦、醜態言ふべからざるものあり。或は口に天下の大義を唱ふるものも、往々自ら一人の責を全ふする能はず、朋友知己已に是を捨て、己れ獨り新聞記者を以て自ら高うするものあり。是の如きは劣等新聞の記者間に往々見る所の事實也。新聞紙が是の如き者流によりて發行せらるゝ間は、其道念の高潔を望む、猶ほ木に緣りて魚を求むるが如けむ。故に吾人は新聞紙改善策の一端として、記者其人の資格を高むるの方法を講ずべしとの意見を有する者也。今日にありては、社會の公地位は、何れも相當の資格に待つあらざるは無し、而して社會に對して無名の敎師判官たる新聞記者の資格に就いては、何等の規定だも存せざる也、如何なる敗德不義漢も、良しや前科者、兇狀者にても、天下又新聞記者たり得ざるものあらざる也。社會が其風敎品位を維持し增進する上に於て、是の如き新聞記者を有するは、果し

とは、今日何人も言ふ所也。黨人者流互に虛言を交換して爲にする所あらむとし、而して世の少しく眼識あるもの概ね信を措かず、局外者より見れば、這般の事態殆ど兒戲に類するものあり。

吾人の觀る所にして大に謬らずむば、今の新聞紙の病根は商賣的なるに存する無からむや。新聞事業は或意味に於ては一種の營業に相違無きを以て、商賣的なる、素より妨げずと雖も、今の新聞紙の多くは餘りに商賣的なるに過ぐる也。彼等の第一義とする所は、如何にせば人氣に投合すべきかにあり。是を以て彼等の世俗に對するや、導くに非ずして隨ふ也、誡むるに非ずして諂ふ也、訓ふるに非ずして歡ばす也。世俗にして歡ばむ乎、虛僞も避けず、讒誣も憚らず、藝娼妓の投票も可也、私生兒の報告も可也、絞殺せられたる一商店の小僧の爲に寫眞版を挿入する亦可也。游蕩姦淫を當世紳士の常事の如くに面白可笑しく書き列ぬるが如きは、彼等の毫も意に介せざる所也。若し新聞紙を以て商賣となさば、そは社會的の商賣也、社會の風敎品位と最も密接の關係を有する商賣也。人氣投合策を以て第一義とするが如きは、是れ全く新聞紙の職責を忘却したる所爲と謂はざるべからず。吾

惜む。

（三十二年六月）

新聞時弊

茲に新聞紙時弊を擧ぐるに當り、或は新聞記者諸君の感情を害せむことを恐る。然れども相提撕し、相戒勸して、互に其過を救はむとするの外、吾人に於て毫も他意ある無し。幸に記者諸君の諒とせられむことを望む。

倫敦タイムスの論說記者ヘンリー・リーヴ氏は嘗て新聞記者の服膺すべき三個の金言を擧げき、曰く忠實なれ、曰く同情あれ、曰く人道を理想とせよ。想ふに是の如きは、今の新聞記者の多數によりて極めて陳腐の訓誡に過ぎざるべし、然れども此訓誡を實行し得たるもの果して幾何ありや。殊に甚だ言ひ易くして甚だ行ひ難きは、忠實の二字也。事實の報道に於て確實を缺くとは、今の新聞紙の常事として認容せらるゝが如き、吾人の甚だ遺憾とする所也。中には故意を以て虛妄を傳へ匿名の無責任を奇貨として、記者が私己の恩怨に酬ふるものあり、言語同斷と謂ふの外無し。黨派に關する事は黨派に關する新聞によりて、決して知り得べからず

東北の遺利

面積九州に倍して戸口却て是に半ばし、人才寥々として空しく漠々たり。嗚呼不幸なる東北よ。

東北の百弊、歸する所は交通機關の缺乏にあり。人は北海を説きて東北を言はず、何爲れぞ其絶大なる遺利を顧みざる。

天下の利は人物に若くは無し。今の日本の要する所は、アゼンス人に非ずしてスパルタ人也、佛蘭西人にあらずして魯西亞人也。是の俘華淫靡なる社會を刷新するものは、寧ろ迂愚に近きも便佞ならざる、寧ろ粗野に近きも輕薄ならざる、剛毅敦厚なるの新人物注入にあるのみ。而て吾人は信ず、今の日本に於て是任に當り得るもの、先づ指を東北に屈せざるべからず。

然れども今の東北は、其脉管たる交通機關の難澁によりて、天下の大勢と隔絶せられ居るの觀あり。幾多無名の俊髦人才は、未だ國家に盡すべき自己の天職を自覺するに及ばずして空しく山林の人たらむとする也。吾人實に國家の爲に是を

られなむ。好意に充てる社會は趣味あり、平和あり、道德あり、光榮ある社會也。

奢侈

奢侈は啻に國家經濟上より見て、有害なるのみならず、個人の品性を墮落するに於て亦最も有力なる惡魔也。

吾人は奢侈の弊風が、今日到る處に汎濫するの事實を認む。是れ恐るべき事實也。國民は國家經營の爲に須要なる幾多の事業を拒むに、資力窮乏の理由を以てせり。凡この國民は所謂戰後經營の主なるものとして敎育事業の大擴張を須要とせり、而れども今や彼等は口を民力給養の急務に藉りて、是を斷行する能はざる也。而して彼等の自ら奉ずる果して如何の狀ぞ。十圓の下駄を履くもの、百圓の衣服を纏ふもの、千圓の指輪を穿つもの、社會の上流に充滿せるに非ずや。

日清戰爭終りを告げて遼東還附の事ありしや國民は異口同音に臥薪嘗膽と叫びたるに非ずや。而して臥薪嘗膽の實、今日果して何處にかある。國家の事業は畢竟國民の覺悟如何に存す。

（以上四項三十二年六月）

何の理由なくして紳士に侮辱的綽名を付するを以て日常の事とするに非ずや。島田三郎氏はシャベ郎と呼ばれ、田口卯吉氏はデモ墓と呼ばれ、外山正一氏は天狗、井上哲次郎氏は井ノ哲と呼ばるゝに非ずや、是れ何の意ぞや。楠本正隆氏はマヌ男、犬養毅氏はチンカイ、竹越與三郎氏はヒヨコ參と呼ばるゝに非ずや。田口氏が己れの良心を屈せずして增租案を賛成するや、反對者はタヌキと嘲れり。武富時敏氏は紅木屋侯爵と呼ばれ、三浦梧樓氏はマヌ子と呼ばれ、松方正義氏は後入齋と呼ばれ、今井磯一郎氏はデレビス、德富猪一郎氏は猪コ參と呼ばるゝに非ずや。是れ同人間の諧謔ならば知らず、日々の新聞紙上公然唱呼せらるゝに到ては、好意の缺乏、無禮の横行、言語道斷に非ずや。

新聞紙の中には、如何なる人にも『氏』字を附せざるを以て自ら高ぶるものすらある也。英國にてはミストルを冠せずして紳士を呼ぶものあれば、是れ大いなる無禮なり。社會の秩序は是の如き禮儀によりて立つ、禮儀畢竟好意の發表なれば也。

利害以外に道德を作るものは好意に外ならざる也。社會にイマ少しく好意あらしめよ、日常見る所の反目、猜疑、嫉妬、爭鬩の大部分は、藹然たる和氣の中に融解せ

げ得ざる人民也。

恐ろしき沈默の後には、必ず恐ろしき戰爭あるべきを覺悟せよ。

好意の缺乏

曰く、己れの人に爲さるゝを喜ぶ所、己れ亦是れを人に爲せ。曰く、己の欲せざる所、是を人に施す勿れ。凡そ萬般の道德は、是の東西二聖の金言に含まれざるは無し。而して二聖の言、畢竟『好意』の二字に歸す。然れども最も悲しむべきは、今の日本の社會に是好意の缺乏せること也。古今東西に於けるあらゆる、彝倫の根本たる好意の缺乏せること也。源泉既に濁れり、下流の清まむことを望む亦難い哉。今の日本の社會に於て、己の知らざる凡ての人は即ち己の敵也。道行く人は互に睥睨して過ぐるに非ずや。老者に讓らず、兒女を扶けず、些の恩怨無き他人も時に盜賊として扱はる。人を見れば泥棒と思へとは、今も尚ほ依然として大多數の信條なる也。

一國の名流も、人に呼び捨てにせられざるもの希也。新聞雜誌の多くのものは、

せむや。

人心の倦めるは國家の衰兆也、今の經世家の事業は先づ人心を新にするにあり。

恐ろしき沈默

大いなる戰爭の前には恐ろしき沈默あり、而して戰爭の勝敗は凡べて是の沈默の間に成さるゝ也。

今や、見渡すところ、日本の社會は平和の社會也。政治、宗教、教育、學藝、何れの方面に向ても、大いなる爭鬪なく、大いなる運動なく、大いなる旗幟無く、大いなる輿論、公議無し。然れども吾人は、是の無事なる社會の裏面に於て、幾多の時流の交錯せるを認む。而して將に來るべき社會の性質は、是暗流が如何なる方向を取り、如何に綜攝せらるゝやによりて決定せらるべき也。

願くは大いなる決斷あれ、大いなる飛躍あれ。是の大決斷、大飛躍に達せむが爲には已むを得ずむば、大なる爭鬪を爲すも可也。最も恐るべきは、一時の苟安也、眼前の彌縫也。斯かる塲合に於て平和を好む人民は、古より大いなる功業を成し遂

聲を絕たず。

最も痛嘆に堪へざるは、湊川に於ける楠公祠の甚しく冒瀆せられたる事也。今や楠公祠は神戸市に於ける淺草の觀音也。仲見世よりも下等なる、奥山よりも猥褻なる商店、見せ物、楊弓店、銘酒店等は其のあらゆる淫靡なる風俗と共に、紛然雜然として境内を塡充せり。嗚呼忠臣楠子の墓は、此等風俗壞亂的營業の一招牌とせられつゝある也。何等の不倫ぞ、何等の無禮ぞ。

（三十二年五月）

人心の倦怠

社會に制裁無く、人に義憤無し、姦惡人憎まず、譎詐世怪まず。是の社會的良心の麻痺を如何せむや。

想ふに、社會的良心の麻痺は、畢竟人心の倦怠に本づく。今や人の心は凡ての事に於て倦み勞れたり。凡て大いなる事業に邁往するの勇氣無く、魄力無し。大いなる執着なく、大いなる煩惱なく、大いなる熱誠無く、大いなる慈愛無し。人は眼前の事業を彌縫して、苟且偷安、一時の小康を是れ求む。嗚呼是の人心の倦怠を如何

數ふべし。世間何ぞ行樂の民多きや。安息日は勤勞者の特權也、眞に息はざるべからざるの人果して幾何ぞ。

（三十二年三月）

勝地の俗化

旅行者の多くは必ずや吾人と憂を共にするならむ、所謂名勝の地は年を趁うて俗化せられつゝある也。月瀬の地、幽寂を以て名あり、而して白堊洋風の橋梁は今や其溪間に横はる也。西京嵐山には貸ボートあり、株式會社の割烹店あり、其土地の一人は吾人に向て、深く渡月橋の鐵橋ならざるを慚づと言へり。

中國一古刹の五重塔は、ペンキを以て塗抹せられたり。是を寺僧に問へば曰く、所謂古社寺保存の最良法即ち是れなりと。

須磨、舞子は沒趣味なる別莊によりて其一帶の海邊を壟斷せられ畢むぬ。白砂青松の地に製煉會社あり、一の谷の禁裡跡には白堊丹欄の西洋館あり。

奈良の大佛殿は觀せ物となり、其堂內は勸工場の如し。猿澤池畔は日夜絃歌の

英艦ヸクトリアの地中海に沈沒するや、艦長最後巡回を爲す。滿艦の將士、各々其所を守りて業務に就けること、平日の如く、數分時の後盡く水中の鬼となるべきの運命を自覺せざるものゝ如し。英國海軍は是規律ある水兵ありて初めて强き也。我廣丙號の將に怒濤に沈まむとするや、將士甲板に整列して『君ヶ代』を三唱せり。北米ミシシピーの大洪水に當りて、一電信技師は『唯今溺死す』と打電する迄其所を去らず、是れ規律なり。是の如き規律ある民人を以て組織せる國家は何物の力が能く是に敵せむ。

規律は最良の節儉也、規律なきは即ち浪費する也。規律は美なり、規律なきものにして醜ならざるは未だ曾て是れあらざる也。規律は善行也、米國の一罪人、死刑に臨みて懺悔して曰く、吾犯罪は晨起の規律を斷行する能はざるに起因すと。畢竟規律を恪守するは即ち私心の誘惑に打勝つことなればなり。（三十二年三月）

安息日は勤勞者の特權也

麗日和風の夕、新橋停車場に行き見よ、土産人形を肩にして出で來る者、斗を以て

民が政治的出品の餘に非文明的ならむ事を恐る。フォール氏の平和の死や、吾人の切に喜ぶ所也。

（三十二年三月）

規律無き國民

若し將來に於て新文明に調攝すべき新しき社會的道德を要すとせば、規律は必ず其一なるべし。從來の日本人は餘りに無規律なるに過ぐ。

商賈は約束を重せず。會合の時間には懸直あり。吾人は郵便切手を規定の場所に貼付せざる一事を以て其家風の紊亂をトするの社會ならしめむことを希ふ。是塲合に於て規律は信用也。

單に外形のみと謂ふ勿れ。規律は大なる道德の標號なり、即ち是れ私を以て公に殉するなり、少を以て多に攝する也。社會の秩序の中に自己の幸福を認めむとする他愛的精神の發表也。是を以て紀律ある社會に訓練せられたる人民は、平和を好む民也、事に好では最も勇氣ある軍隊也。

試に其年數を案ずるに、一千七百八十九年に人民議會を創立してブルボン王家を倒してより、大奈破翁の專制政府を歡迎したるまで其間十六年。爾來華德堡の戰爭を經てブルボン王家の復位を迎へたるまで、大奈破翁に謳歌せること凡そ十二年、ブルボン王家再び仆れ、小奈破翁の下に第二の帝國を建造したるは一千八百五十一年、即ち其間三十七年。而して一千八百七十年の普佛戰爭によりて更に今日の共和政府を組織するまで前後二十一年。爾來二十九年の間、何等の國體の變更なく今日に到れり。然れども國家の事もしリズムを以て進行せば、佛蘭西國民の革命的惰性は方に一國家的激變を醞釀するの時期に接近せりと謂ふべし。去年有名なるドレフュー事件の如きは、共和黨と帝政黨との軋轢の外面に現はれたるものに外ならず。軍人は一般に帝政黨に同情を有し、兩者の反抗近時に到りて益々其激烈を加ふる者の如し。是時に當りて俄然として大統領卒去の報に接す。誰か前大統領カルノー氏の横死と、最近百年間に於る佛國の歴史とに聯想して、一種の感慨に打たれざらむや。嗚呼禍なる哉佛蘭西國や、國家の事茲に至らば、皮相の文物又何かあらむ。吾人は十九世紀の文明を標示する世界博覽會に於る同國

を唱へたる國民は、擧て佛蘭西國民の大深仇として帝を罵れり。維納會議によりてブルボン王家の回復を見るや、國民はルイ十四世の盛時を夢み、嘗て其頸血を見て甘心せる虐王の子孫に喜び事へたり。然れども小心なるルイ・フィリップ王は未だ國民の虛榮心を滿たす能はざるに及びて、輕躁なる國民は又更に是を廢黜し、ラマルチン氏の下に共和政府を再興せり。然れども奈破翁帝の治下に味ひたる幻影の如き國民的榮譽は、佛國民の永く忘るゝ能はざる所なり。是を以て先に大逆賊と罵りたる唇を翻へして盛に大戰勝帝の遺業を讚頌し、聖ヘレナ島の墳墓を發掘し、鹵簿の盛大を盡して其遺骨を巴里に迎へたり。

巧黠なる小奈破翁の時機を伺ひて民心を收攬し、一夜クーデターを行て共和政府を蹂躙するや、健忘なる國民は擧て是に謳歌せり。小奈破翁普魯西に敗るゝや、多情なる佛人は恬然として再び共和政を組織せり。今回卒去せる大統領フォール氏は實に是共和政府の系統を受けたる者也。僅々一百年の間に如上の激變に遭遇せる佛蘭西國民の性格が國民として如何に輕躁に、如何に浮薄に、如何に無定見に、且如何に無節操なるかは。殆ど吾人の想像し能はざる所也。

き偏見は言ふまでもなく大に警戒せむことを要す。

(三十二年一月)

佛蘭西共和國の近世史

佛蘭西共和國の大統領フェリス・フォール氏、去月十六日俄然として卒去せりとのロイテル電報は、疑もなく天下の人をして佛蘭西國の過去及將來に就て幾多の感慨を起さしめしならむ。然れどもフォール氏の死は平和の死也、些の政治上の意義ありしに非ず。是幾多の感慨は果して何に因りて起りたる乎。是を語るものは即ち佛國の歴史也。

天下邦國多しと雖も、其國體及び政體の上に急激の變化を經由せるの甚しき、佛蘭西の如きはあらざる也。誠に千七百八十九年以降の歴史を細想せよ、大革命は新大陸獨立の餘韻を傳へてルイ十六世を斷頭臺に上したり。而して平等、自由、同胞を唱へたる革命的國民は却て奈破翁帝てふ一大壓制の主君を歡迎せり。幾百萬の國民は劍戟を取て帝の馬前に盡瘁せること、シーザル治下の羅馬人よりも忠實なりき。然るに華德堡の一戰に敗れて太平洋心の流人となるや、昨日迄皇帝萬歲

オン三世城下の誓を爲すに到り、佛蘭西國民は又も大革命の遺業を繼きて民政共和團體を建立せり。是の如く僅々一百年の間に其國體政體の變更すること一再にして止らず。其の事業に一定の精神なく節操なきは最も明白なる事實なりとす。斯く節操なき主義なき歷史を有するは實に佛蘭西國民の大恥辱と謂はざるべからず。

讀者よ、予を以て徒らに外國の事を談ずるものと爲す勿れ。斯かる實例は我國民に對ひて大なる敎訓を與ふることを注意すべきなり。開國以來我邦には國民的精神の儼然たるあり、一切內外の事物は是國民的精神の中に同化せられ、玆に二千五百有餘年の最も定見あり節操ある歷史を作りしなり。我國民の生活は是點に於ては實に品位あり名譽ありと謂ふべし。然るに近時外邦文物の輸入と同時に是國民的精神を忘却し、徒に摸倣崇拜を事とするものあり。是れ取りも直さず二千五百年來の定見あり節操ありし國民をして、無定見無節操に陷らしめむとする者なり。されば苟も國民全體の名譽品位を重ずる者は奮て是に反對すべきなり。但し猥りに自ら尊び、外邦の文物とあれば是非善惡の差別なく排除するが如

無節操なる國民なること尚一層明なるべし。遠きは暫く措きつ、十八世紀の末葉に當りルイ王朝に大反抗を試みたる結果、かの有名なる佛蘭西大革命となり、自由平等の大主義を發表して天下の耳目を聳動せり。然るに是革命の大事業未だ全く終らざるに早くも奈破翁帝を奉戴し、其自由政權を唱へたる口を以て皇帝萬歲を歌ひつゝ甘じて是の大野心家の頤使する所となれり。然るに奈破翁一敗してエルバ島に流さるゝや、全國民は忽ち帝に反對して呼ぶに國賊を以てせり、されば帝は間道より僅に配所に赴くを得たりし程なりと謂ふ。然るに風雨一夜エルバ島を脱して本國に歸るや、先に國賊呼はりをせし國民は又もや帝を奉戴して其舊位に就かしめ、再び喜んで馬前に忠義を盡さむことを誓へり。奈翁ヲートルローの戰に敗れて遠洋の孤島に竄せらるゝや、國民は其帝王の末路を悲まず、却て危害を加へむと欲するもの所在道に充てり。かくて國民は大革命によりて顚覆したる、謂はゞ不俱戴天の仇なるルイ王朝を回復せしが、間もなく再び之を覆してルイ・ナポレオンを大統領とし、ルイ・ナポレオンの既に人心を收攬するや、其不法至極なるクー・デターを是認して皇帝の位を借するをさへ許せり。普佛戰爭に敗れてナポレ

民を以て無定見なりとす。そを如何とならば、是國民の思想には定見なく、行爲には矛盾多きこと、さながら人格の統一無き個人の如きを見ればなり。玆に哲學思想を言はんはやゝ不適當ながら、佛蘭西思想の一致なく貫通なく、紛亂統一を缺けるは歐羅巴の何れの邦の哲學歷史にも其比を見ざる所なり。例せば十六世紀にはモンテス、シャロン等の懷疑說盛に行はれしかと思へば、十八世紀の初めにはコンヂヤック、ボンテー、ヘルエチウス等の極端なる經驗論あり。一方にヂデロ、ラメトリーの唯物論モンテスキュー、ルソーの自然主義あるかと思へば、他方にはテガルト、マルブランシ等の荒唐なる形而上學あり。コムトの經驗哲學是後に興りて盛に行はるゝかと思へば、又更にヰクトル・クザンの折衷主義あり。紛々として其の歸向を知るに由なし。一個人の說としては見るべきものはあるべけれども、佛蘭西國民の思想としては前後條理を缺き首尾一貫せず、所詮は無定見の誚を免れざるべし。然れば思想界の國民として見れば、佛蘭西國民は最も浮薄にして信用し難き國民なりと謂はざるべからず。

以上は思想上より言へり。又政治上より佛蘭西人の行動を見れば、其の無定見

命に較べ見よ。凡て品位あり名譽ある國民には其人格の統一あること猶ほ個人の場合に於けると異ならざるを見るならむ。若し一の國民にして其思想に貫徹せる根柢なく、其行爲に一致せる節操なく、單に時々の氣まぐれ、氣運又は流行に驅られて活動したらむには、是れ即ち無定見の國民なり、無節操の國民なり。其の擯斥すべきこと猶ほ無定見、無節操の個人の卑むべきが如けむ。若し百代の後、烱眼なる歷史家ありて各國民の國民的活動を批判して其功過を辯ずるの時あらば、斯かる無定見の國民は實に救ふべからざるの汚名を殘すべし。

然るに無定見なる個人は人皆是を賤むと雖ども、無定見なる國民に到ては是を言ふもの尠し、是れ甚だ怪むべき次第なり。吾れ人は個人として存在すると同時に國民として生活す。然らば則ち吾人が各自の精力を瀝して協力經緯する所の國民的生活も亦品位あり、名譽ある歷史を有せむことを希はざるべからず。何となれば國民各個の品位名譽と國民全體の品位名譽とは兩々相離るべからざるものなればなり。

今無定見なる國民の一例として佛蘭西に就いて一見すべし。吾人は佛蘭西國

無定見の國民

凡そ人の人たる所以は何處に存すべきか、こは觀方によりて樣々に言はるべけれど、道德上より看れば人格の單一ならんは人の人たるに於て缺くべからざる條件なるべし。人格とは何ぞと謂ふに、平易に言へば『我』なり、即ち人の感情思想及び行爲を統一する主體なり。是『我』てふものにして單一ならざらむか、良し人の形體を具へ人の言語を使ひたりとて如何でか人と謂ふことを得べき。例へば『昨日の我は今日の我に非ざれば昨日約束せしことは今日履行するの義務無し』と言ふもののあらば如何。是れ即ち人の人たる主性を失へるものにして道德上には既に人たるの面目を缺けるものなり。苟も一個の人として世に立たむには、自己の人格即『我』は始終渝らず、飽くまで其統一を保たざるべからず。所謂定見あり節操ある人は、即ち最も善く自己の人格を保持したる人なり。所謂無定見、無節操、言に虛僞あり、行に矛盾ある人は、即ち人格の統一全からざる人なり。

こは個人に就いて謂へるなり、されど一の國民を個人に比し、其歷史を個人の生

敢て杞憂と謂ふ勿れ、吾人は我國民に向て吳々も警告せむと欲するは、是極東問題の解釋は新日本國民の最大危機なること是れ也。見よ文明東漸の歷史は即ち西力東漸の歷史也。匈牙利折け、土耳其起たず、印度亡び、埃及仆れ、緬甸、安南、皆併せられ、白人種の勢力今や十九世紀の末葉に到り、澎湃として極東の海涯に寄せ來る。是れ一千年來避くべからざる歷史上の運命也。今後の日本海は、此兩人種最後の格闘を目擊するの日あるべし。吾人は人種競爭の歷史によりて敢て是事を預言して憚らざる也。所謂四國同盟の如きは一時の幻影ならむのみ。

嗚呼新しき日本は內外實に是の如き形勢の下に立ちつゝある也。敢て請ひ問はむ、是の新しき日本の支柱たるべき新らしき國民は、如何の抱負、如何の覺悟を以て是國家を行らむとするぞ。新らしき日本は老衰の元老に訣別すべき也、依賴すべきものは唯是新日本の新敎育に人となれる新人物のみ。敢て再び請ひ問はむ、卿等の覺悟、卿等の抱負如何。吾人は特に是一言を以て全國の中學生諸子に警告する者也。

(三十二年三月)

保せり、然れども是れ形式的の保認のみ、若し其實質に入りて國家が公認すべき宗敎の性質如何を究盡せば、慥に一問題を釀すべし。換言すれば、基督敎公認の可否は事實に於て宗敎界の一問題たるべき也。而して是問題は、直に敎育と宗敎との關係問題に波及す。今茲に『我校は基督敎主義を以て倫理の標準となす』と標榜し來て其認可を要求するものあらば如何、問題は決してそが見ゆる如く簡單に非ざる也。事に與るものは當局の有司なるべし、而して是れ事實に於て國民の審判を待つもの也。

是の如きは內國の私事のみ。將來に於て二十世紀史の中心となるべき極東問題の要衝に當るべき者は即ち是の『新しき日本』なることを忘るべからず。極東問題は表面上支那の分割、若しくは其維持の問題なり、然れども其根柢に橫はれる最大動機が人種競爭に存せることは歷史に通ずるもゝ認めざらむと欲するも能はざる所也。人種の競爭とは、即ちアリアン人と非アリアン人の爭也、白人種と黃人種、歐羅巴人と亞細亞人、基督敎國と非基督敎國との爭也。歐洲諸國が今日支那に加へつゝある所のもの、やがては明日吾人に加ふべき所のものたる也。

歌舞伎俳優の最後の代表者として劇界の革新を預告すべく逝きぬ。小中村、川田、島田、栗田諸老博士の凋落は和漢學の革新を警告するものに非ずして何ぞ。人の代るは即ち世の變る也。是の如くにして新日本の來るは時の轉移に伴へる必然の結果たる也。

最も注意すべきは、道德思想の動搖なり。新民法は既に布かれて、人權上の觀念全く昔日と其觀を異にせむとす。財產、相續、結婚等に就て新民法の規定する所は、從來の家族制度と枘鑿相容れざるなり。父子夫婦の情誼は是より永く權利義務の思想によりて維持せられむとする也。權利の思想とは即ち一厘錢の權利を主張するを以て、士君子の正當なる行爲とする思想也。惻隱慈悲の感情をも、權利の二字に據りて肯否せむとする思想也。法治主義の社會一日も是思想無かるべからずと雖も、而かて敎育勅語によりて諭示せられたる情誼的道德の精神を奈何すべき。是れ豈敎育家の前途に橫はれる一大問題に非ずや。

殊に新條約の實施、眉睫の間に逼れる今日に於て、懸念すべきは宗敎と國家、との關係問題なり。憲法第二十八條は國安を妨害せざる限りに於て信敎の自由を擔

意味に於ての『新しき日本』の歴史は、是より當に其本章に入るべき也。

所謂新らしき日本とは何ぞ。是を内にしては、序幕の大立物たりし元老の漸く凋落し去らむとする日本也。政治界に、法律界に、文藝、宗教、其他もろ〱の方面に於て、新日本の新空氣中に生育せる新人物の漸く其覇權を握らむとする日本也。新民法の家族制度を掃蕩せむとする日本也。權利てふ思想が舊來の情誼的道德に代らむとする日本也。勞働社會に職工組合の起らむとする日本也。基督教と神道佛教と共に行政區域内に入らんとするの日本也。是を外にしては、西比利亞鐵道の全通とニカラガ運河の開鑿とに自國の利益を認めむとする日本也。極東問題を解釋せむが爲めに、四國同盟に入らむことを望む日本也。國家の利益の爲めには、北米合衆國が爲せる非律賓群島の非道なる略奪をも是認せむとする日本也。是の如きを『新しき日本』と謂ふ。

見よ、如今人物更迭の潮流如何に激しきかを。伊藤、大隈、山縣、井上、板垣の諸元老が久しく政界に把持せりし勢力は、今や漸く星、伊東、尾崎、大石等の後進に轉移しつゝあるに非ずや。勝安房氏は曠世の奇才を齎らして遠逝せり。中村芝翫氏は舊

ず、强ゐて外より附會するもの、往々是の如し。

議會は開けて幾年、而して一民は其利を知らず。民法は布かれたり、而して民は其弊に堪えず。英國政府が三十年間の努力を以てして一倫敦の市制を改革する能はざる間に、日本は期年ならずして特別市制を廢止せり、而して市民の得る所何處にある。一方には準備なきストライキは到る處に失敗し、他方には自治の何物なるを知らざる民をして郡長公選を呼ばしむる政治家あり。社會問題を唱ふるものは、勞働の結果を思はずして、獨り賃銀時間を英米に倣はむとす。

國民よ、剪裁の花は香芬を放たず、安ぞ美果を結ばむや。

（三十二年七月）

新しき日本

明治の歷史は改革の歷史なり、所謂維新の王政復古は、其後に開かるべき更に深大なる改革の齣場を預告せる一序幕に過ぎざりき。而して是の深大なる改革の齣場は、爾來三十有二年の今の日に於て方に其最高點に到達し、更に再び向上の一路に新局面を開發するの機運に向へるを見る。吾人を以て見れば、最も適當なる

認むと雖も、而も自然の趨勢に一任して百弊の薫蒸を顧みざるの得策なるを認むる能はず。新民法の如きは徒に權利思想を必要以外に助長したるの誚を免れず。吾人は是を以て本邦道德との調和を破りたる一大失計たりと認むると同時に是間に處して過大の齟齬なからしむるの方法を講ずるは、今日識者の責任に屬するを見る也。蓋し社會人文の狀態に比して權利思想のみ過度の發達をなす時は、一國の倫理是が爲に壞れ、輕薄殘忍、靡然として風を成さむ。今や我邦にありては權利てふ觀念は未だ全く道德的意識の中に融合せられず、隱然として相反目するの觀あり。即ち是れ社會が尚ほ權利思想の發達に適せざるの徵に非る乎。新民法が權利義務によりて父子の關係を規定する間に倫理教育は今に於ても尚ほ情誼的道德を原理となす。是間識者の一考を要するものあらざる乎。（三十二年二月）

剪栽の花

木は其實を以て知るを得べし。摸倣的文明の結果今果して如何。外皮を彩りて其味の熟したるを望む、得べからざる也。夫の自然の發達に依ら

に深重なる意義あるを認む。

實に自己の權利を重せざるものは亦自己の義務をも重せざる也、亦隨て他人の權利を損害することを憚らざる也。吾人は一ペニーを權利思想の中より排斥するの道德には、甚だ危險なる種子を包含せることを認む。而れども是の一ペニーの權利思想を以て今の我邦に擬す、可ならむ乎、是れ問題也。

我邦從來の道德は情誼の上に立てり、是れ疑もなく美なる道德なりし也。然れども世移り、人渝り、殊に十九世紀の世界交通の渦中に入りしよりこのかた情誼の制裁は以て社會の秩序を保つに足らず、是に於てか法治主義の倫理漸く是に代り、權利義務の語亦漸く行はる。社會は爲に疑もなく無趣味となれり。是れはた道德の變遷上已むを得ざる也。近時民法が本邦從來の習慣道德に背戾せりとの批難あるは、畢竟權利思想と情誼的道德との衝突に外ならず、而して是衝突が二者の完全なる調和を回復する迄に、今後益々其激烈の度を加ふべきは、今より期待し得らるべき事なりとす。

吾人は是の權利思想の發達を以て、本邦文明の性質上萬已むを得ざる事なるを

たるを一言せり、希くは讀者の輕々に是一言を看過する無からむことを。是れ實に本邦社會的道德の前途に橫はれる一大問題なり。

曩日博士イェーリング氏、將に維納大學を去らむとするに臨み、澳地利の將來に關して最も痛切なる忠告を與へたり。中に言へるあり、曰く『權利思想に乏しきは澳國人の一大弱點なり。彼等は動もすれば曰く、是れ一ペニーのみと。斯の如くして自己の權利を放棄し、自ら其胸襟の寬裕を誇るもの比々として是れ也。是の如き個人によりて結成せられたる澳地利國も其個人に等しく正當の權利を主張することを知らず。翻て是を英吉利人に見るに、彼等は自己の權利を主張するに於て正に澳地利人と反對なり。彼等は一ペニーの權利を損害せられざらむが爲に、時に一回の發車に後るゝを顧みず。是の如き個人を國民とする英吉利の國家は亦常に自己の正當なる權利を維持するに於て一歩も退讓することあらざる也。願くは一ペニーと謂ふなかれ、歐洲列强の競爭塲裏にありて、澳地利が年を追て退嬰に安せむとする間に、英吉利の國運の駸々乎として進歩するは、實に一ペニーの權利を主張すると否とにあり』と（イェーリング 權利競爭論）。吾人はイェーリング氏の是言の中

を感謝する所なり。遮莫我國は米西戰爭以降の西班牙の近時を顧眄するを要す。

（卅二年一月）

勝海舟

勝海舟逝く、日本は愈人物に乏しき國となれり。海舟をして榎本鎌次郎の心を持せしめよ、日本は今日あるを保すべからず。薩長以下の諸藩、人に乏しからざりしも、國家内外の大局に着眼して時勢の轉移を制せるもの、一海舟あるのみ。國民は深く彼れの功業を感銘せざるべからず。願くは祭祀金石によりて空しく是偉人を嘆美するを已めよ。國民は彼の功業と人物とに鑑みて、其の偉大なる國家的精神を繼紹せよ。是の如くむば海舟死して猶ほ死せざる也。

（卅二年二月）

權利思想の發達と本邦の道德

吾人は先に權利思想の發達が從來の道德と衝突せむとするの兆候漸く表はれ

軍隊の援助、もしくは外邦の干渉をさへ誘起することあるべしとは一般に期待せらるゝ所なりと云ふ。吁西班牙人は果して國辱を知れる國民なるべき乎。

さはれ是の如きは五個の異人種と三種の異宗敎とによりて結成せられたる國家にありて免れ難き勢なる乎。吾人は顧みて我帝國の天祐に富めるを感謝せずむばあらざるなり。

二分五厘の地租は三分三厘となりぬ、而かも農民は國家の爲に其負擔を辭せざるなり。是增租によりて最も大いなる打擊を受けたるは東北地方なり、而して軍備擴張の爲に最も多く其利を受くべきは關西地方なり。されど東北の農民は國民の爲に是不利なる經濟上の分擔を辭せざるなり。もし東北をして英國にあらしめば恐らくはアイルランドたらむか幾多のオーコンチル、バーチルは一地方の利害を代表して自治を唱へなむ。もし東北をして西班牙にあらしめば或はカタロニア・ビスケーたらむか、其農民は自治を求めて其地租の輕減を計らむ。されど我國民は一體たり、地方の利害に執着して國家の大計を顧みざるものにあらざるなり。是れ我邦人の西班牙などに同じからざる所以にして、又吾人が天祐のゆたかなる

近着西字新聞の報ずる所を通觀すれば西班牙の各部が王國の統一より離れむとするの意向漸く明かになれるが如し。カスチルは王國の主部なるを以て合同を希望すること依然たり。南部諸州又其貧弱の故を以て多くは分離を好まずと雖も、王國中の工業地にして且つ最富裕なる北部諸州は、擧て自治を主張せり。カタロニア、ビスケー二州の如きは公言して曰く『吾等は全王國の養育者たり、南部諸州は只坐して其利を收むるのみ』と。カタロニアの商工業者の大團體は、既に是宣言に本きて分立請願書を攝政女王に呈出せり。其要求する所によれば、中央政府は戰爭及び外交の外は一切州郡の經營を各部の自治に委ぬべく、かくて西班牙は亞米利加風の聯立州に分たるべしと謂ふにあり。農民は概して是提案に賛同の意を表せり、そは是改革によりて地租の輕減を見得べければなり。

讀者はかゝる西班牙の近狀を如何と見る。闔國一致の敵愾心と戰敗の屈辱とは昨日の事なるに、早くも内部の不平の爲めに國力の分裂を企つるものあるは、外國の事ながら如何に歎かはしき次第ならずや。加ふるに宰相サガスタの辭職と同時に王黨とカロス黨と、自由黨と社會黨とは各々鎬を削りて爭ふべく、時に或は

近時本邦の家屋は益々劣等の趣味を現じ來れり。紳士の邸宅は待合の如し、彼等には趣味なし、唯贅澤あるのみ。品位は金錢の多寡に比例すとは彼等の主義なり。一切の裝飾、衣服馬車、皆是主義より打算し來る、社會の沒趣なること恰も砂漠の如し。

西班牙の近時

凡そ民心の分離は國家の形勢が最も統一を須要とする際に起るを常とす、吾人は西班牙の近狀を見て轉た感慨に堪えざるものあり。

今や西班牙は米西戰爭の屈辱を忍びて方に媾和條約を巴里に締結せり。其條文の末には『西班牙は暴力の壓制によりて之に調印す』との意味を附け加へたりと謂ふにあらずや。吾人は先に米國の宣戰に對する攝政皇后の羽檄を讀みて、いたく闔國敵愾の熱誠に同情を表せしが、今又是憤激の痛語を見てますく西班牙人が臥薪嘗膽の覺悟の壯なるに感じぬ。潜に以爲らくフィリップ二世の古王國は是より漸く盛なるべしと。思ひきや息壤彼にあるに早くも分裂の聲を聞かむとは。

ふことを容されず、宛然として何れも堂上の君子也、彼は其家門を出で、初めて其衣を寛うするを得。實に『我家の窮屈に苦む』とは多くの人の歎聲なり。是に於て拘束無き社會の他面に趨りて、其人性自然の要求を滿さむとし、知らず、識らず、罪惡の窟に入る。是れ勢也。

家庭は父母、兄弟、妻子の共に棲住する所なり。天下の親善なるもの、父母、兄弟、妻子を措て何處にか求むべき。今の人家庭を見ること羈舍の如し。其罪の存するところ、言はずして明也。

今の世に於て社會風紀の壞亂を救はむと欲するものは先づ是の如き家庭をして感興あり、趣味あり、快樂あり、品位あり、名譽あるものと爲さゞるべからず。今の家庭や、其のやゝ品位あるものは、形式に偏して人性自然の發動を妨け、其のやゝ趣味あるものは、放埒に失して道義の範を超ゆ、共に不可なり。獨り怪む、所謂社會改良論者の是を言ふもの少きや。料理屋、待合、寄席、演劇の取締の如きは抑も末而已。

（三十一年九月）

沙漠の如し

に報ひざればなり。

嗚呼トリトンの笛の音やみてより既に三千年。この趣味無き社會を如何にせむや。あゝこの趣味無き社會を如何にせむや。

(三十一年九月)

○無趣味の家庭

何故に今の世に料理屋、待合、藝妓、遊女、『めかけ』の供給多きかを問はむものは、先づ何故に今の家庭が是の如きものを需要する人を出だし得るかを問はざるべからず。

現時日本の家庭は既に舊組織を失ひて未だ新秩序を喚び來らず、感與無く、趣味無く、快樂なく、品位なく、名譽無し、蓋しあらゆる不德の最も生まれ易き家庭なり。而して其最大缺點は昔時の制裁を失ひながらも、尙ほ其形式主義を保てる事也。

今の中等以上のやゝ品位ありと稱せらるゝ家庭を見よ、多くは是れ最も陰鬱に、最も乾燥無味なる家庭に非ずや。屋外に妾を蓄へ、花牌を弄する主人の其子弟に對するや、猶ほ儒學先生の其門下に對するが如きなり。人は其家にありて戯れ笑

かの弊縕袍を着けたるもの、何故に高くして、紈綺袴を穿てるもの何故に卑しき乎。尙ぶべきは唯その嗜好の高からむことには非ざる乎。

吾れ事を爲すに當りて、人は先づ其の利する所如何と問ふ。あゝ利する所乎、利する所乎、天下の事、利を離れて爲すべからざる乎。いかなれば人は爭はずして交はる能はざる乎、鬪はずして生きる能はざる乎、抑々道義倫常以外に、人生の餘地を留めざる乎。

一面の人は唯一面の人を見る。劍を把て琴を彈き、三軍を麾して野花に泣く。彼れ其行に於て矛盾する所ある乎。

金錢は、今の世に於て凡ての物の標準となれり。大臣も、牧師も、藝妓も、其報酬は金錢也。金錢は官吏を奴隷にし、貴族と富豪とを木偶にし慧しきものを狼とし、愚なるものを驢馬となせり。快樂は金錢によりて計られ、名譽も、德義も、金錢によりて賣買せられむとす。賭博は彼等が唯一の遊戲なり。

美術は宴樂のうつわとなれり。富豪の爲に白銀の像を造るものあれども詩人の爲に一基の墓を修むるもの無し。人は祭りをだに營ますなりぬ。神は其貴え

つの顔、唯一つの聲を有せざるべからず、否らざれば僞人として誣られむの憂あればなり。

今や、世に大人あるのみ、小兒あるのみ、されど人なき也。男子と女子とあるのみ、されど人無き也。紳士と平民と富者と貧者とあるのみ、されど人なるもの無き也。

今や、人々自ら其獨りを喜びぬ、友は彼に於て要無きなり。彼は利害に非ざれば動かず、世は是を直しと呼べり。彼は自らの幸福をだも他人の口より聞かずむば厭かざるなり。

斯くて、趣味無き人は趣味無き家庭を作り、趣味無き社會を造り、趣味無き國家を造り、この大いなる人生をして、徹上徹下、趣味無きものとなし了せむとする也。

今や、若き女と男とは、白晝に物言ふことをだに許されざるなり。されど人は一枝の花にも尚ほ好惡の情あるに非ずや。

かの其情を抑へ、其色を動かさゝる人は、大いなりとして尚ばる。されど性を矯むるものは、均しく是れ僞りには非ざるか。あはれ離愁に泣かず、公義に憤らず、冷灰枯木の如きもの、何が故に獨り大いなるか。

らざるものあり。康たるもの亦自愛すべきなり。

（卅一年十二月）

無趣味の社會

『吾れに樂むべき自然の美なからむには、寧ろ海を踏みてトリトンの歌を聞かむ』と歎ちたるなにがしの詩人の今更に忍ばるゝかな。あはれ如何なれば世の樣のかくは無趣味に成り果てにけむ。

今や、凡ての美はしきものは世に貴き寶となりぬ、そは獨り罪惡を以て購ひ得べければなり。道德はこの趣味無き社會の障壁となりて、凡ての美はしきものは其外に斥けられぬ。所謂義しきもの、清きものは、彼れと共に步まず、彼れと共に交らず、彼れの孤影を踵ひて其手を握らむとするものは、詐り也、盜み也、汚れ、侮り、禍也。

今や、一切の趣味は、世の義しき者の累ひとなりぬ。人は其嗜好をだに道德の規矩によりて律し去らむとす。假面は盛裝に缺くべからざる者となれり、否不義の名を甘ずるに非ざれば、彼れは其假面をだに脫ぎ難き也。

今や、社會は一路となり、人生は一面となりぬ。人は如何なる場合に於ても、唯一

人と爲りは問はざれ、事の成敗は論せざれ、彼れの志氣事業は孰れか吾人の同感を起すに足るものならざるべき。彼は赤手を以て老大帝國の風氣を開發し、空拳を揮て半歳の間に四百年來の弊竇を一新せむとしたるにあらずや。一國革命の先驅としては優に我小楠、松蔭に當るに足る。若し夫れ時運未だ到らず、千秋の事業忽然として九地の下に失落し、身は逐客となりて域外に流離し、顧みて故國の事日に非なるを望む、痛恨何ぞ堪ゆべけむや。吾人は實に彼の志を壯とし、彼の情を憐む。

往日コッスート匈牙利の獨立戰爭に敗れて米國に客たるや、米人到る處に彼を歡迎し、彼の爲に集めたる義金實に數萬に上りき。康今や身を我邦に托し、萬一却て其冷遇詬罵を得ることあらば、是れ國民の名譽にあらざる也。三十年前の日本は今の清國なり、今日の日本は實に幾多の革命先驅者康の如きものに負ふ所あり、何ぞ獨り隣邦革命の先驅者たる康有爲を容れざるの理あらむや。吾人は我邦人の窄量に恨無き能はず。

遮莫、先輩斬られ、同志殺され、而して張本たる康獨り全きを得、天命俄に知るべか

國民よ徒に其名と其像とによりて大人物を崇拜するを休めよ、願くは其功業を復活し、繼續し其生血を後昆に傳ふることによりて、彼を讃美せよ、然らば則ち彼の名は時と共に益其大いなるを加ふべし。祭祀金石は徒に彼を短命ならしむる所以のみ。」

グラハム・ベル氏

グラハム・ベル氏や力めたりと謂つべし、彼は其不幸なる同胞の教育の爲に自ら其のベター・ハーフを犧牲とせり、天下豈是より貴むべき獻身的事業あらむや。恥ぢよ、名利の爲に慈善を飾るものよ。

(以上卅一年十一月)

逐客康有爲

回天の雄圖空しく沮落して、四百餘州身を容るゝに處なく、僅に隣邦に投じて天涯亡命の一羈客となる。康有爲の如きもの眞に憫むべきものあらずや。何事ぞ、我邦人の偏に躁急短慮の一匹夫を以て彼を詬罵するもの多きや。」

士、別しては伊勢の神靈を侮辱する者に非ずや。若し是歷史上の一大事實の爲に紀念像を造るの必要あらば、何ぞ北條時宗、若しくは宗、河野諸忠臣の像を以てせざる。日蓮宗の信者が、一安國論によりて是神聖なる故趾を壟斷するは、我國民の默視すべからざる所也。（全集三卷五八五ー五八八頁參照）

（三十一年十月稿）

大人物の墓

遮莫、墓標紀念牌の廣大なるによりて大人物の記憶を永遠にせむとするは、人情の自然に出づる事なるか。觀じ來れば扨ても痴けたる業ならずや。時は形ある總ての物の破壞者なればなり。

數年前、英國議會は政府の提出に係るクロムエルの塑像建設案を否決せし事あり。當時詩人スヰムボルンは憤慨の餘り、直に筆を呵して一篇の詩を作り、雜誌『十九世紀』に寄せたりき。其詩破題直にクロムエルの偉業を頌して曰く、

吾等のクロムエル何ぞ金石を要せむや、
大英國の進路を照らせる光明こそ彼の紀念碑なれ。

はざるの弊に坐す。

西郷南洲の銅像を上野公園に建つるの妥當ならざるは、已に述べたるが如し。假りに世人の言ふ如く、南洲を以て大忠臣、大義士、大人物とせむか、斯る不世出の大偉人の紀念像としては、其像の如何に矮小なるよ。九段坂上の大村益次郎の像は其技術に於ては夙に世人の嗤笑する所なりと雖も其大さに於ては慥に是南洲の像に三倍す。明治國民の理想的大人物を體現するものとしては何等の不倫ぞや。國は東洋第一等の日本に非ずや、土地は二百萬の人口を有する日本帝國の首府に非ずや、場所は是大都府の第一等の公園に非ずや、而して建てられたる人物は日本歷史上に比類無き尊稱を有する所謂大西郷に非ずや、而して其大さは宛然として盆石的庭園中の物也。天下何物の不倫か能く是の如くなるを得むや。

若し夫れ日蓮の像の建てらるべき地が、池上に非ず、鎌倉に非ず、房州に非ず、身延山に非ずして、博多なりと云ふに至ては、其の不當なること言ふまでも無きなり。日蓮の安國論が元寇の豫言なりとは、歷史上に確證無き説なり。是の曖昧なる一事を附會して、其像を博多に建て、以て元寇紀念と稱するは、即ち當時日本の忠臣義

偉人の像を建築するは、啻に美術として市街裝飾の爲のみならず、其高風英姿を想望せしむる事によりて、國民の志氣を感發せしめむが爲なり。事に當るものは其一面に於て、社會敎育の着眼を缺くべからず。

更に想ふ、美術は國民氣風の反映なり、國民の氣風雄大なれば、其美術亦雄大に、國民の氣風卑屈なれば、其美術亦卑屈なり。夫の事に銅像建築に從ふ者は、即ち其事業が國民の氣風を體現して内外に表示する所以なるを忘るべからず。

近時銅像建築の事、頻に興る。就中著大なるもの三あり。宮城門前に建てらるべき楠正成の像、上野公園に建てられたる西郷南洲の像、及び筑前博多に立てらべき日蓮の像、是れなり。

楠公は日本忠臣の龜鑑なり、是を宮城門前に建つるは甚だ體を得たりと謂ふべし。唯其製作模型の嘗て美術學校内にあるものを見るに、其大いさの大ならざるを恨とすべし。且其態度は、悍馬を制する馬術師に似て、毫も沈勇忠烈の威風を止めず。未だ美術上の大製作を以て容すべからざるに似たり。畢竟是れ美術家が其手工の末技を表はすに専にして、楠公の精神を發揮するの更に大技工なるを思

せられたる大罪は、彼にありては偶々其末路を美はしくしたるのみ、是れ寧ろ怪しむべからざる乎。

今や彼を崇拜せる國民は、傳記墓誌を以て尙ほ足れりとせず、其叛逆によりて其大人物たるを證したるを以て足れりとせず、彼の銅像は更に帝京第一の大公園に建造せられ、二百萬の府民をして是叛逆的大人物の面貌を、形體の上に景仰せしめむとす。南洲死後二十年にして是事ある、何ぞ奈翁の遺骸十年にして巴里に改葬せらるゝと相似たるの甚しきや。

若し私己の情實によりて人の行爲を品せむ乎、天下又罪惡なるもの無からむ。唯公道の凜として動かすべからざる者あり、名分是によりて立ち、大義是によりて明なるを得。西鄕南洲の私德や吾人の欽せる所也、而かも彼を以て國民の崇拜に當り得る大人物となす、其の可なる所以を知らざる也、況や帝京第一の勝地に其の銅像を建築するをや。

（三十一年十月稿）

近時の銅像

佛人は、再び奈翁の盛時を懐慕し初めぬ。是に於て、南溟の故墳は發掘せられ、其遺骸は盛大なる儀禮を以て巴里に改葬せられき。今や奈翁が佛國に與へたる耻辱は全く遺却せられ、唯是不世出の英雄の下に、是國が樂みたる槿花一朝の虚榮を悄悦せり。

我西郷南洲は猶ほ佛の奈翁の如き乎。維新中興に於ける南洲が偉勳は永く史上に傳ふべし、其人物亦一世に曠しきものありしならむ。而かも彼は其末路に於て國賊なり。其の事情の如何に拘らず、帝命に背き、國憲を紊り、叛逆の大罪を干犯したるは事實なり。大義名分に於て己に缺くる所あらば、區々たる私德の如きは言ふに足らざる也。

然るに今や則ち如何の狀ぞ。彼れの大罪は何時しか忘れられ、傳へらるゝ者は其の舊勳のみ、其私德のみ、日本の歷史に比倫なき一種の尊稱は、特に彼の名に冠せられ、人は大西郷、大南洲を以て彼を呼ぶに非ずや。彼の叛逆の爲に作されたる辯護は、普く國民の認むる所となり、彼の名によりて傳へられたる言行は依信と歎美とを以て聞かれざる無し。足利尊氏、平清盛に於て、天人共に容るべからずと思惟

田園將に蕪せむとす

坊間勝海舟翁に關する一佳話を傳ふ。曰く、某代議士一日海舟伯を訪うて揮毫を求む。伯直に筆を執り『田園將蕪』の四大字をナグリ附けて是に與ふと。吁田園將に蕪せむとす、何ぞ歸らざる。政治々々と騷ぎ廻る政治屋の國家に無用なるは、宗教々々と觸れ廻る宗教屋の社會に益なきに均し。良民として一人の責を負ふ能はざるもの安ぞ國家の大義を言ふの權利あらんや。（以上三十一年十二月）

西郷南洲の銅像

上野公園に立てられたる明治十年の叛臣西郷南洲の銅像、方に其工を終り、覆面將に撤下せられむとす。吾人一言の以て世に問ふべきあり。

昔者奈翁の戰に破れて聖ヘレナ島に流竄せらるゝや、狂憤せる佛國人民は國運の否塞を以て奈翁の罪なりとし、到る處其肉を喰はむと欲しき。越て二十五年ブルボン王家其位に復し、ルイ・フヰリップの治下に多年の平和を樂むに及び、健忘なる

民を利として動もすれば口を是に藉る。

經世家たるものよ、沸々たる小泡沫の下に、千萬尋の深淵の杳然として聲なきものあるを知れ。

國民の名の濫用

國民の名の濫用せられたるや久しい哉。民選議院の建白は國民の名により爲されたり、愛國公黨の組織も國民の名によりて爲されたり、自治制も、代議制も、民政主義の唱道さへも、何れか國民の名によりて爲されたるに非ざるべき。然れども直に國民の名によりて事を爲さむと欲する者は、眞に國民の欲求を領會せざるべからず。眞に國民の欲求を領會せむと欲する者は、先づ國民の性情を解釋せざるべからず。夫の漫然外邦文物の皮相を欽美して外より是を強ゆるもの、焉ぞ國民の聲ならむや。

遮莫、無聲の國民は國家の柱なり、彼等は地の鹽なり。爲政家、經世家は百人千人の囂々たるものゝ外に四千萬人の無聲の國民あるを忘るゝ勿れ。

ても尚ほ依然として其精神たる也。吾人は國民の悔悟の餘り遲からむことを恐る。

(三十一年九月稿、十月公)

國民の聲

人は謂ふ國民の聲を聞けと。吾は則ち問ふ、國民の聲何處に在るかと。

學者の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等の言は國民の關り知る所に非ず、彼等の多くは國民の名を借して其一家の言を飾るものゝみ。

詩人の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等の歌は彼等の私情を聞かせらるるのみ。

新聞紙の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等の論は一黨一派の利害に立つ國民の幸福と風馬牛のみ。

政治家の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等は國民の名によりて私己の權勢を爭ふのみ、國民と何の關する所ぞ。

國民の最大多數は實に默然として聲なき也、唯夫の侔々焉たるもの、是無聲の國

彼の耳學の輩。外邦特殊の制度を談じて我邦に強ゆるが如き、抑々何等の陋態ぞ。我邦にありては、文明の進歩は民權の發達にあらずして、寧ろ臣民の義務を明確に理會するにあり。是れ皇祖立國の鴻圖を體認して、偉大なる國民的理想を實現する所以也。

今の政黨員中には、陛下の信任に立てる内閣を以て憲政黨の出店なりと公言したるものあり、今の政治を以て多數政治なりと公言したる政論家あり、黨の決議、即ち内閣の意志たるべしと要請する憲政黨委員あり。『眇たる一個の俗士』を容して教育勅語の撤回演説を爲さしめたる教育會あり、而して社會は多く怪み問はざる也。是等の暴論を公にして顧みざる輩は、無學無識、元より言ふに足らざるべし、而かも彼等を容して是を公言せしむる社會は、甚だ憂ふべき社會に非ずや。吾人は民主的思潮の漸く社會の根底に汎濫し、是忠誠なる國民を蠱惑せむとするを見て國民道德の危機漸く近きつゝあるを思ふ。

あゝ今の政黨なるものは、畢竟二十五年前の愛國公黨の假裝せるものゝみ。『是政府は、人民の爲に設けたる政府として見るの外無かるべし』との公言は、今日に於

べきなり。

獨り氣の毒なるは朴率なる地方人士の類なる哉。新聞紙上其堂々傲岸の筆を見て潜に其人物を想望し、一朝刺を通じて而して其一介白面の小兒輩なるの意外に驚く。是の如きは新聞紙の世に重ぜられざる所以の一なり。

口に正義公道を叫ぶもの、其行や往々にして屠沽穿窬、狂態世故に拘はらざるを以て清しとなし、牢騷人を憤ふるを以て高しとなす。否らざれば所謂巾幗にして人に事ふるものゝみ。

彼等は口天下の義を唱ふるも、自一人の責を負ふ能はず。今の新聞記者に是輩多し。是れ亦新聞紙の世に重ぜられざる所以の二なり。

悔悟の時機來るや遲し

近來、民主的思想が政治及び教育社會に表はれ來りたるは、著しき現象なり。日本國民が其道德的意識の上に、一大猛省を要すべきの時機、漸く近からむとす。民主的思想は、そが如何なる假面を被り來るを問はず須臾も我國體と相容れざる也。

のみ。

（卅一年九月）

寧ろ民を愚にせむ乎

大なる國民は利巧に非ずして剛毅なり生意氣に非ずして愨直なり。大なる國民は英雄崇拜の稚氣を要す。今や我國人は小哲學者、小法學者、小理論家の群集たらむとす。田舍の中學生も一國の大宰相を呼捨てにするをエラシと心得る世の中には、小我を持して他を睥睨するもの、幾千萬人あるも、未だ以て一同の大を成すに足らざる也。

古の武士道は己を沒するに立つ。今や天下を擧げて人の爲にする者無し、是れ教育の過なり。已むを得ずむば夫れ民を愚にせむ乎。

（卅一年九月）

新紙の墮落

夫の文墨馳騁して一世の豪傑を兒撫するの概あるもの、一度び其人に面すれば、膝語蛇行、媚悅百般、醜態言ふべからず。今の新聞記者に是輩多し。痴態寧ろ憫む

是を以て日本國民を以て佛教徒となすものは、鯨を以て魚となし、蝙蝠を以て鳥となすものなり。佛教の存在は歴史上の惰力のみ。國家文明の之を見るや風馬牛のみ。若し夫れ永久にコムマ以下たるべき運命を有する基督教徒の如きは素より言ふに足らざるなり。

（卅一年九月）

彼は彼たり我は我たり

若し世界に人道なる者あらば、そは同じき所に於て相合したる者なるべし。『畢竟彼は彼たり我は我たり。』哲學科學を以て宗教に代へむことは歐洲に於ては明白なる失敗なり。我に於て必ずしも然らむや。

國家の權勢によりて教會を撲滅せむとす。歐洲に於て或は失敗ならむ。我に於て必ずしも然らむや。我れや宗教の外に道義あり迷信の外に制裁あり、日清戰爭の勝利は佛教の力でもなく人道のお蔭でも無し。今に於て漫に人道を說き彼に宜しき物を以て直に我に強ゆ、其愚や及ぶべからざるなり。國民的特性は三千年の歴史によりて明に檢證せられたるに非ずや。我は只我主義を箇中に求むべき

幽霊的宗教

吾人は宗教の現在を言はず、何となれば今の我邦には宗教なるもの存在せざればなり。既に存在せざる宗教に滅亡もなく、未來も無し、其前途を論ずるの要無き也。然らば今の所謂宗教を何と名くべき乎。已む無くんば幽霊的宗教乎。名ありて實無く形ありて體無ければなり。

國家的要素としての宗教が其生命を失ひしや已に久し、今日僅かに其名によりて存するものは、形骸のみ。一部迷信者流の信仰は、國家の文明と何の關する所なし。獨逸には無頓着主義 Indifferentismus ありき、されど既に無頓着を以て主義となす、尚多少の宗教的臭味を帶ぶ、我國民は既に事實に於て無頓着なり、亡ぼすべき宗教なきに、又何の主義なるものを要せむや。

夫の圓頂緇衣の徒は、世襲的職業として生活の爲に讀經するのみ、他の故あるに非ざる也。人は埋葬と墳墓を托するが爲に所謂信徒たるのみ、他の故あるに非ざる也。儀式的に讀經し、說敎し、儀式的に禮拜し、喜捨す、他の故あるに非ざる也。

て反對の事實を見る也。　蓋し我邦人は最も他人の意見に耳を傾けざる人民なり。己れ瑣小の知見を有するや則ち挾て我が說となし我が主張となし一歩も狂ぐるなからむを期す。　是を以て他人の意見に接するに當りては心を虛うして其是非を見ること能はず、預め成心を持し、批評的若しく穴探的態度を取りて是に臨む。偶々其說の眞に傾聽すべきものありて、己れ亦其傾聽すべき所以を認むるも、故らに小我の異を樹て、相讓らず、却て冷笑嘲罵を以て酬ひむとす。　是の如き人民に對して、デモステネース、シセロ出づるも亦是を如何かすべき。

加之、彼等は能辯に對して一種輕侮の情を有する也。　少しく其辭令を修め、其態度を飾るや、輙ち目するに演說屋を以てし、其能辯を以て說の短所を塗飾するの具なりとす。　是の如きは今の辯者の技能未だ至らざる事、亦其一原因なるべしと雖も、抑も亦我邦人が能辯其物に對する先天的偏見の主として然らしむる所ならずむばあらず。　是の孤立、自負、猜疑の念慮は、即ち他面に於て、我國民の間に大共同、大團結の成立を妨害する主要なる原因にして、社會經營の上に於て大に排斥せしむことを要す、能辯は其後に於て初めて其十分の効果を有し得べき也。　（廿一年九月）

共同精神を妨害するもの、是れ第二の原因なり。我邦は最近三百年間の封建政治に於て、最も嚴峻なる階級制度を經由し、上下の意思疏通殆ど其道を絶せり、是れ第三の原因なり。加ふるに我邦士人の間に、治く强大なる感化を有したる儒教は、啻に能辨を奬勵せざりしのみならず、却て寧ろ士君子の道にあらずとして是を擯斥したるの傾向あり、是れ第四の原因なり。是四個の原因あり、近時政體頓に革まり、輿論衆議の勢力大に加はれりと雖も尙ほ未だ積年因襲の習性を擺脫する能はざる、素より怪むに足らざる也。

如何にして能辯を盛ならしめむ乎。政黨內閣方に成りて國論の一致協同の事業益々其須要を增し來りたるの今日、是が必須の手段たる能辯は獨り其落寞に委すべからず。是を盛ならしむる當に如何すべき乎。是れ慥に吾人の一顧を値すべき問題なり。

然れども能辯は、辯者と共に聽者に待つもの也。猶ほ大詩人、大美術家が多く一世の風潮に駕して出で來る如く、能辯家は眞に是を要するの社會にのみ生まるべきなり。今の日本人は果して能辯の勢力を認識して眞に是を欲する乎、吾人は却

には蛇の如く獰惡に、財囊の前には蜘蛛の如く平伏す。吁フヰレンツエは罪惡の首府なる哉』と。

吾人は我東京の等しく罪惡の首府なるを想ふ。東京は日本國中の罪惡の問屋也。猶ほ歐洲の新流行が巴里に初まるが如く、東京は日本の罪惡の源泉なり。見よ東京人の入り込める處は、如何なる地方にも罪惡を扶植せざるなきに非ずや。希くは悲歌慷慨のダンテをして今日に生まれしめ、其の燃ゆるが如き筆をして是の罪惡の首府を描かしめ、以て東京人の心膽を寒からしめむ哉。（卅一年九月）

日本人と能辯

何故に能辯は我邦に缺乏せりや、との疑問に答へむは極めて容易のことなるべし。我政體は古來專制政治にして輿論衆議の容喙を許さず隨て多數人民を會して意見の賛同を求むるが如きは、政治上殆ど其例を見ず。是れ第一の原因なり。而して是事は、國民的性情の上に二個の結果を有す。即ち一面に於ては依賴心を生じ、他面に於ては孤立心を起せり。是の兩つの者は、共に能辯の生母たる國民の

是を殺すに忍びんや、と。是と同一の例は米軍にもあり。テキサス號の艦長フヰリップ、西班牙巡洋艦オケンドの轟沈せられたるを望み、其部下の歡呼を制して曰く、爾等歡ぶを休めよ、可憐なる同胞は死につゝある也。

米國新聞の一通信記者マーシャル、軍に從て脊骨を撃たれ、出血混々として胴軀痙攣す。其死數分を出でざらむこと明なり。而かも尙ほ其筆を取りて靜かに其通信を草しき。

嗚呼是の如き美譚を製造せむが爲に、世界は其輿地圖の彩色を變せざるべからざりし也。

罪悪の首府

昔者ダンテ、フヰレンツェ府を呪うて曰く『フヰレンツェは會々正義の地として知られたりき、然れども今や不義の露はれむ事を恐れて、婦人の懺悔を禁むる僧侶あり。曾て市民の血液は、皂隷輿臺に至るまで淸かりき。而かも今や異民族の混合と共に、身心共に、墮落の深淵に陷れり。乞食の子孫は今や富豪となれり、彼等は弱き者

亞弗利加に在るものは素より言ふを俟たず、亞細亞、南洋、西印度にあるものも、實に非常の金額を本國より補助するに非ざれば、維持し難き也。伊太利の紅海沿岸の屬地も、徒に母國の納税者を苦むるのみ。西班牙に到ては最も不幸なる殖民史を實驗せること、言ふまでも無し。日本も亦臺灣に困弊しつゝあるに非ずや。北米合衆國にして商業國たり、平和國たる以上は、其歷史の教訓に背きて比律賓を占有するの利益果して確實なる乎。

（卅一年九月）

高價なる美譚

人心の美は多く戰爭の中に於て顯はる。人生眞に恨事あらば、是れ慥に其の一なり。

米西戰爭は方に終を告げぬ。幾多の美譚は幾百萬人の涙と血と生命とによりて購はれぬ。試に其二三を錄せむ乎。

西班牙の提督セルヱラ將軍米の水雷艇の襲擊を果さずして遁逃せむとするを見るや、部下に令して擊沈する勿らしむ。曰く勇士死を決して敗艦に近く、我れ豈

べからざる損失を被りしならむ、或は其死に踵ぐものは革命的破裂なりしやも知るべからず。然れども今や二氏の死は其國民の幸福に一波紋をだも及ぼさゞる也。嗚呼一度び其天職の成し遂げられたる後には、かゝる大人物も世界の歴史の前には如何に小なるよ。大なるものは歴史なる哉。

（卅一年九月）

植民地と歴史の教訓

米國は遂に全比律賓の占有を斷行すべしと傳へらる。『イムピリアリズム』は遂に西班牙に勝ちたる米國を征服せり。

然れども植民地の利害に就いて、歴史の教訓を見よ。二十世紀には植民史上の一改革を見むとは烱眼なる歴史家の明言せる所也。

獨逸が歐洲以外に其範圖を擴めしは、僅々十四年以來の事也。彼の領地は亞弗利加に於ける九十二萬方哩の外、太平洋及び支那膠洲灣にもあり。されど內失費の莫大にして、外所期の効力を有せざるは、獨逸外交家の早くツブヤケる所也。佛蘭西は其保護國を合すれば無慮三百六十萬方哩の大領地を有す。然れども其の

も剛壯有爲なる一人也、而して彼れ年方に八十七。英の書家トーマス・クーパーは今年九十五の高齢にして、ロヤル・アカデミーの繪畫會は年々彼によりて少からざる光彩を添ゆ。倫理學者及び宗教學者なるジェームス・マルチノーは一千八百〇五年に生まれ、七十年以來其研究と著述とを懈らず。現時以太利の樂界に錚々たるヱルヂは今や方に八十四歳。英國女王は身神やゝ衰頽せりと雖ども、尙ほ七十八歳也。五六十年は是等の人より見れば壯者のみ。大なる傳記は長き年月の下に編纂せられざるべからず。日本は遂に少年國に終らざるべからざる乎。

（卅一年九月）

大人物の生死

然れども如何に大なる人物も歴史上より見れば、常に一個の天職の爲めに生まれたる觀あり。彼れ是天職を果せば、其同胞が彼れの爲にせる感恩の祈禱を後にして靜に永世の人となる。近き例しはグラッドストーンとビスマルクと也。若し是二氏の死をして今より十年又は二十年の前にあらしめば、其國民は償ふ

す。老衰期の五六十なるものと、八九十なるものと、其事業に於て徑庭ある、素より其所のみ。况や成熟期の一年は、修養期の十年に匹敵するものあるに於てをや。試に我國の學者に見よ、年五六十に到れば進取の氣象頓に熄み、厘に既得の小名譽を墨守して失はざらむことを是れ務む。偶々後進者流の儀式的奉戴に遇て、時に時代後れの舊套を反覆するに過ぎず。世の既に已れと違へるを覺らず、其説の陳腐を以て傲然として高く標持す、寧ろ憫むべしとなす。

夫の五六十にして自傳を編み、閲歴譚を述ぶるものは一生の事業已に終れりとなす乎、徒に過去を追憶するを已めて、何ぞ更に猛進一番するを務めざる。未來は青年の特有物に非ざる也。吾人は是點に於て、歐洲の大人物を景仰するの情に堪えず。

グラッドストーンは八十七歳にして尚ほ政界の大立物なりき。彼は其の死する數週前までは、ホーマー研究に就いて古典學者を驚倒するの意氣を有せりき。八十二歳のビスマルクは老衰事に勝えざりしと雖も、五年以前には猶歐洲風雲の一角を握りたりき。現在の老人傑に就いて見るも、法王レオ十三世は以太利僧正中の尤

大人物と私德

人は其事業に於てのみならず、亦其品性に於ても大なり得べし。是二者を兼ね備ふるものを大なる人物と云ふ。

グラッドストーン氏は、ハワーデン寺院の門丁の病を訪ひ、爲に聖書を讀みたりき。彼は、是心を以て天下の事に當りたり。其七十年間の政治的生活に於て一人の私敵を有せざる、眞に故ある也。

世には所謂功利の外にも道ある也所謂階級の外にも人ある也。官邸の玄關に私生兒を置去りにせられたる國務大臣を怪まざる國民は未だ大なる人物を解せせる也。

（卅一年九月）

少年國

我邦は夫れ天下の少年國乎。人五六十歳に到れば、概ね半死の白頭翁也、是れ豈に大人物の缺乏せる一の理由也。人の名を好むや、其功を一生の中に收めむと欲

覆面將に落ちむとす

覆面將に落ちむとす、來らむとするものは何ぞ。人道主義、世界平和主義の名によりて、既に幾多の罪惡の如何に公然として行はれつゝあるかを見よ。世界の平和は漸く動搖し初めたり、四千年の人類歷史が未だ曾て見ることを得ざりし一大活劇は、黃白人種の格鬪として將に極東の分野に演ぜられむとす。嗚呼同胞國民は看客なるべき乎、將た又役者たるべきか。

（卅一年五月）

詹々錄

◎今の社會は凡ての事に於て不定の社會なり。文學美術の好尚、道德敎育の主義より、風俗、習慣、宗敎一として固定の理想を有するものなし。一言すれば風雲時代なり。

◎風雲の時代は即ち英雄の時代なり。夫の勢に先づるもの常に革新の功あり。所謂偉人時世を造るとは是の謂ひ也。

（卅一年七月）

宗教心に基くとする程の所謂宗教の眞精神とは何ぞ。吾等遂に解し得ず。

（卅一年五月）

Verlassungssünde（怠慢罪）

學者にして其の信ずる所を公白するものは、其説の是非正邪に論無く、世の爲に盡さむとする其志や眞に嘉みすべきなり。是れを沈默爲すなく、徒らに背後の冷笑を事とするともがらに較ぶれば、遙に學者の本分を效したるに庶幾し。學者の說にして誤らば、そを難ずるは素より其所なり。されど吾等は更に夫の社會の大事に臨みて沈默爲す無きの學者に向て、世人が大に其怠慢曠職の罪を鳴らさむことを望むもの也。

爾は能ふ、故に爾は爲さゞるべからず。世は能力ある學者の爲す無きを咎めずして、而して單に爲して而して誤れるもののみを誣る。吾等其の可なるを見ず。

（卅一年五月）

善なるを得べきか。

宗教の眞精神と新宗教

宗教の眞精神とは何ぞ。耶蘇教にも、佛教にも、回々教にも通有せる、やがて宗教の宗教たる所以の根本元素と云ふの義か。さらば是れ宗教の定義なり。世の宗教の眞精神を言ふもの亦多くは新宗教を言ふ。新宗教とは何ぞ。佛耶、回、諸教の特性を離れ、是の所謂抽象的『眞精神』に基きて新に造らるべき宗教の義か。斯く解して大に誤らずむば、こはまさしく座上の空論に過ぎざるべし。宗教の眞精神や善し、唯是の『眞精神』が何故に佛、耶、回諸教となりて現はれたるかの理を明にせず、漫に新宗教を言ふものは、偏に人類の通性を見、是通性が依て以て現實界に其形象を有し得る所の差別原理たる民族の特性を顧みざるものに非ずや。

人生の事凡て國民的特色を帶びて存在し、且發達す。もし我邦に於て新宗教を言はむと欲するものあらば、先づ國民性の特色に就て深く究むる所あるべし。宗教の眞意義を言ふが如きは其迂遠に及ぶべからず。さるにても、日本主義をだに

愛國を罵る者に告げむ

嗚呼眞なる哉、大道廢れて仁義あるや。吾人誠に世の愛國を罵る者に告げむ。吾人が君國を言ふの已むを得ざるは、今の世に爾等の如きものあればなり。爾等は謂ふ、忠君愛國は日本國民として何人も有せざるべからざる所と。然るに爾等は却て他の是を說くものを嘲るに非ずや。爾等の中には偶然に生れたる日本の如きは我母國となすに足らずと公言せしものすらあるに非ずや、而して爾等は尙ほ且つ吾人の言を些の必要なしと言ひ得るか。爾等の眼には今の世に於ける國民道德の亂離を認めざるか、認めて而して其統一を須要ならずとするか。爾等は忠君愛國の眞理を否定せずと謂ふ、然らば則ち何故に之を嘲罵するか。爾等の心にありと云ふ忠愛の情は、其忠愛を否定する他人に對して甘じて默する得をるか、然らば則ち是れ君國の公德に非ざるなり。他を濟ひたるを以て大なる耶蘇と佛陀とを崇拜する爾等は、何故に他を救はむが爲に忠君愛國とを說くものを獨り僞善なりとするか。あゝ何人か國を賣りて而して正義を叫ぶものよりも多く僞

きは果して喜ぶべき事なるか。

眞に私己の爲にする所ありて君國を言ふものあらば、其人の心事甚だ悪むべし而かも其忠愛の道に於て嘲罵すべき所以を見ざるなり。嗚呼萬一忠君愛國を嘲罵するが如き風習の社會に認容せらるゝあらば、是れ即ち國民道徳が其根柢に於て動搖せることを表示するものなり。嗚呼國民道徳の一大危機なるかな。吾人は是を以て國民的良心の制裁を喚起すべき最も嚴肅なる問題なりと思惟す。

今の忠君を嘲り、愛國を罵るものは、素より君國に就いて言ふに非ずして、夫の口を是に籍りて私己の利益を計るものを嘲罵せるならむ。然らば則ち彼等は彼等が主として是嘲罵を加ふる所の國家主義もしくは日本主義主張者が、是の如き僞善者なることを如何にして知り得しか。人に隨て説を異にするは則ち免れず其唱ふる所の主義に就いて公明の爭を爲すこと能はず、却て漫然是を唱ふるものゝ人物に就て僞善を叫ぶ。是れ啻に自己の品性を損し、識者の爲に窘迫の醜態を笑はるゝのみならず、彼等が君國の忠愛を見ること朋黨の攘奪にだも若かざることを表白するものに非ずや。

(三十一年四月)

今の故を以て古を忘れざるは人生の美事、甲州の傖夫帽脱して信玄公を語り、仙臺の走卒手を額にして貞山公を説く。江戸人士の何ぞ爾かく權現樣に冷なる。吾人は是の如き古を忘るゝの民の、均しく日本建國の祖宗を忘却する民ならむを恐るゝ也。

（三十一年五月）

國民道德の危機

昔者猶太の遷民はパレスチナの名を聞きて涙を流せり。吾人は我皇室及び國家の名に對すれば、常に言ふべからざる一種肅敬の情を禁ずる能はず。是を以て吾人は他の忠君を説き、愛國を唱ふるを聞けば、良し皂隷輿臺にして是を口にするも、覺えず帽を脱せんと欲す。情一び往いて思ひ君國に集まる、何の遑ありてか唱説する人の心事を揣摩せむや。

然るに近時我社會に忠君を嘲り、愛國を罵り、他の是を説くものを目して矯飾となし僞善となすものあり。是を教育主義として唱ふるものあれば、呼ぶに死教育を以てし、是を社會道德として奬むるものあれば笑て僞愛國となす。嗚呼是の如

江戸ッ兒は忘恩兒か

人は謂ふ、東京の人は恩誼を知らずと。誰か是に答ふる所以を知る。

今や滿城の人、奠都三十年祭に熱中す。而かも彼等の中一人の前征夷大將軍德川慶喜公の入京を歡迎したるものあるか。草より出でゝ草に入る武藏野の原は、誰が爲に今日あるを致したる。曾て御膝下の民たるを誇りしものは、果して何の眼を以て雨粛々の日天下の公方の其舊城趾に入るを目睹せしか。

人或は奠都三十年祭を以て征服者に媚びたりとなす、是れ大義を知らざるの言のみ。唯吾は名譽ある江戸ッ兒をして、徒に現勢に媚悅して舊恩を忘れたりとの誣あらしむるを欲せざるなり。

古を忘るゝの民

太田持資、德川家康、勝安房、西鄕南洲、の四人の爲に紀念日を設けよと國民子東京人の爲に說く。城市建設者の爲に紀念を設くるの一事吾人大に是を讃す。但其人は德川家康を以て足れりとせむ。

洵に大スラヴ主義の偉大なる運動に注目せよ。北はアドリア海より東は太平洋の黒龍江口に到り西はポーランドより南は波斯の國境に到る迄幾多の土地風土民族を包括して玆に至强至盛なる人種的感情の磅礴せる所所謂大スラヴ主義の領域に非ずや。殆ど一億萬の生靈は是の不思議なる本能に驅られて尨大なる一團體となり今や方に世界歴史の舞臺に投じて萬邦環視の中に其大々的國民運動を開始せり。是れ果して何の現象ぞや。是れ偉大なる國民勢力は同人種の結合に存することを訓ふる者に非ずして何ぞや。英佛西諸國の膨脹史を見よ彼等は好て異人族と同盟す而れども同盟の必要去れば則ち飜て是を亡ぼせり。全く外交關係より離れたる異人種は其の意味する處單に二個の仇敵に過ぎず。人類に先天的罪惡なるものあらば是一事慥に人類の罪惡なり。

來以て往を推すことを得べくむば日英もしくは日佛同盟の意義亦おのづから火を睹るが如きものあらむなり。

(卅一年三月)

同盟の永續し難きことは歴史上の事實なることを認めよ。

愛蘭土は何故に自治を求むるか。ルーマニア、ブルガリアは何故に土耳其に叛きたるか。波蘭の分割は滅亡にあらず歸順なりと說ける史家の言には慥に深奥なる道理を含む。ウンガルンは何故に獨立せむとしたるか。コッスートは敗死せりと雖も十一ヶ國の國語を談ずる民人を以て組織せられたる軍隊は正に墺地利の死相を現せりとせらる。當に亡ぶべき希臘は亡びずして當に盛なるべき土耳其の力は到る處に牽制せらるゝは何故ぞ。無害なる猶太人と支那人と日本人とは到る處に迫害せらるゝは何にぞ。更に所謂パン・スラヰニスムスの世界的大運動を見よ。

是十九世紀の一大潮流は所謂人種國民的の名によりて稱せらる。アルサス、ローレインの現狀如何を知る者は、根本的異人種同盟に向つて幾何の望を繫ぎ得べきか。

（卅一年三月）

大スラヴ主義

人文發達の理想に於て各國其特質あるを認めよ、而して是差別的理想に對する實現の方法如何に着目せよ。文化交換の目的、詮する所是に過ぎず。吾人の海外留學生に希望する所即ち是れのみ。是れはた國家の要求也。(卅一年二月)

大西祝氏を送る

大西祝氏、哲學研究の爲に三年間獨國留學を命ぜらる。氏の斯學に於ける名聲夙に定評あり、留學の目的を到達して遺憾無からむこと、吾人の決して疑はざる所なり。想ふ、氏の歸朝して京都文科大學の開始せらるゝの日、本邦學術界に如何に新彩を添へ來るべきかを。唯氏や蒲柳の質、務めて自愛せずむば、北歐の風物或は累を爲さむ。氏よ、國家が氏に待つ所甚だ尠からざるを思へ。吾人又何をか言はむや。(卅一年二月)

異人種同盟

日英同盟を説くものあり、日佛同盟を言ふものあり。然れども國民よ、異人種の

答へて曰く、丘壯にして魯に居り、長じて宋に游ぶ、故に二國の俗に隨ふのみ。世豈所謂儒服なるものあるべけむやと。

以て今の學者を警むべし。世豈所謂學者なるものあるべけむや。

(卅一年三月)

國家の要求

國家國費を抛ちて留學生を送る、國民が義として彼に要求すべきもの一にして足らず。

彼れの文を學び、彼れの學を修む。留學生の務むべき所是に盡きざるなり。東西人文の特質を闡明し、世界の開化に貢献すべきもの、彼と我と互に異なるものあることを確認するに於て初めて其目的を達したりと云ふべし。彼の便々たる腹笥、畢竟活書筐たるに過ぎざるもの、豈學者の能事ならむや。若し夫れ彼れが皮相の文明に眩惑し、嘆美摸倣、是れ事とする所謂一派の『亞米利加歸り』に至りては寧ろ國家の蠱毒のみ。

古にありては學は氣を養ふにあり、今の人一び儒衣を服すれば、反て奄々として將に絕せむとす。是れ何の象ぞや。人の爲に學あり、學の爲に人あるに非ざるなり。專念學に力む、名は則ち嘉すべしと雖も、而かも竊て人生の目的を遺却するあらば、是の如きの學はた是れ何爲るものぞ。

吝嗇にして錢を是れ蓄ふるもの、人是を守錢奴と呼ぶ。錢なるもの素と人の爲に存す、人錢の爲に存するに非ざればなり、苟も人世に益なくむば陶朱の富は半錢の功無し。然らば則ち何ぞ守錢奴を嘲りたる所以を以て夫の死學者を罵らざるや。

所謂死學者は守錢奴と相去る幾何ぞ。形あるが爲に錢の殊に賤むべきか、形無きが、爲に學の獨り貴むべきか。其人生の目的と方便とを混同するの誤謬に就ては兩者些の徑庭無し。

（卅一年三月）

○世豈所謂儒服なるものあらむや

昔者孔丘常に章甫の冠を戴き、縫掖の衣を着く、魯公見て其の儒服なるやを問ふ。

說は過去に於て變化し來れり、吾れは今日現に固く信ずる所あれども、過去の例によりて類推する時は、是亦明日に到りて渝るやも測られず。されば吾れ今是の所信を公言せば、そが萬一明日に到りて渝りたらむとき、變說として嘲けられむ。是嘲りを免れむには、吾れは所信を枉げて非を遂ぐるの外無からむ、是れ共に吾が忍びざる所なり、如かず暫く緘默を守らむには――と。

かゝる緘默の謂はれなきことは、先に述べたる所にて明なるべし。畢竟眞理には生命あり、人知の發達は即ちそが現はるゝ所なり。夫の博物學者がピンもて蝶や蜂を刺して動物の標本を作るが如き考にて、一定固着の眞理を捉へむとするは、いみじき誤解ならずや。世の學者が其の固く信ずる所をだに公言し得ざる迄に怯懦なるは、所詮是のいみじき誤解に本づく。彼等にして其の學者たるもの天命を全うして人生の爲に盡すあらむと欲せば、先づこの大々的誤解を擺脫せざるべからず。

（卅一年三月）

死學者と守錢奴

外無かるべし。又哲學者が歴史上に萬古不易の説を立てむとせば、そは歴史の終る時に於てするの外無かるべし。死は一人の思想を固定す、されど歴史の始めなく又終りなきを如何にすべきや。

所詮眞理は變遷の外に無し。學者が客觀的に萬古易らざる意見を定めむことは思ひもよらざるなり。されば人々其時々に固く然りと信ずる所を然りと公言するの外無かるべし。

斯く言はば、其説旦暮に改まり、散漫として歸する所無かるべしと憂ふるものあらむか。さりながら愚昧輕佻の輩にこそかゝることもあらめ、苟も識見ある學者にありて、さる憂は萬々無かるべし。まことと學者と呼ばれむ程の人は、よし其説如何に渝はるとも、一定必然の道によりて發達するものなれば、前なる説と後なる説とを繫ぎ考ふる時は、一部の小思想史を現ずべきなり。さればかゝる學者の説は、其の時に固まらざる代りに、其發達の道に於て定まれりと謂ふべし。古より大なる學者にありと謂はるゝは是意味に於ての一定の意見なり。

今の學者が其の信ずる所を公言するに憚るは、蓋し斯く思へばなるべし。――吾

學者の誤解

凡て人は其の信ずる所を忌憚無く公表するの勇氣無かるべからず。己れはかく信ずれども他人は如何に思ふらむ、若し笑はるゝことあらばなど思ひわびつらふは、なべて志弱く膽氣に乏しき人の常ならむかし。古よりかゝる、己れの固く信ぜる事を爲し得ざる人の大事を成就したる例し無し。學者に於ても同じ事なり。某の時己れ固く然りと信じたることは、其時そを然りと公言するに於て何の憚る所やある。人は己れの意識を超えて何事をか信じ得べきぞ。又某の時固く然りと信じたる事も他の時然らずと固く信ずることあらば、其説を改むるに於て又何の憚る所やある。そを豹變なりと云ふは思想の變遷てふことを解せざる人の言のみ。人知は生れてより死ぬるまで斷へず進歩すること、猶哲學の思想が歴史と共に斷えず變遷するが如し。人間知に一定固着の眞理なるもの無し、是の斷えざる進歩其物が則ち眞理なりと知らずや。

もし學者にして一定渝らざる意見を樹てむとせば、そは臨終の際に於てするの

無定見を誇る學者

今の學者と謂はるゝ人の中には、己れに一定の意見無きことを誇るの風あり。こはいみじき心得違ひにあらずや。學理上又實際上に一定の說を立て、是れによりて世の衆愚を導きてこそ一世の師表として仰がるゝ價値もあるなれ。さるを說無く意見定まらぬを學者の常と思へるが如き人は、學者の天職を如何に心得たるにや。

素より定まらぬを強ちに定めよとは謂はじ、思想は夙斷に害ありて熟慮に益あること言ふまでも無し。さあれ、今の學者某の事、某の理に就きて意見を問はれたらむ時、吾れはさる事に就きて定まれる說を樹つる程輕率なる學者に非ずと樣に、己れの意見の定まらぬを誇り顏なるは何事ぞ。吾等假りに一個の學者としてかゝる問に確答する能はずとせば、赧然として其學の淺く其識の到らざるを耻ぢむとこそ想はるれ。あゝ無定見を誇る學者は是社會、是國家に何の用ありや。

紳士錄收むる所高利貸あり、博徒の親方あり、是輩豈所謂紳士と稱すべき者ならむや。紳士は士なり、君子なり、品性德行に於て群泯の師表となるべき者なり。苟も所得税を納むるもの是を目するに紳士を以てす、偶々拜金根性を暴露し來る。事小なりと雖も是の如きは國民道德の危機、憂國の士の決して等閑視すべからざる所なり。

(卅一年二月)

死學者

身死して其學活くるもの、素より欽すべし、學其人と共に傳はらざるもの亦恕すべきものあり。獨り當世の米を食みて甘じて死學者たるものに到ては、深く悲むべき也。折衷を以て高しとし、曖昧を以て廣しとするの風ありてより、天下の學生ながら死するもの多し。希くは彼等に與ふるに五十年の糧を以てせよ、而して萬卷の死書と共に深山不毛の地に坑にせよ。一世の思想を刷新する所以也。

(卅一年一月)

依る。宗教は又方便としては知識の緣無き愚民を化するを得べし。然れども斯くして爲されたる感化は、嚴密なる國家的道德と一致せず。

宗教と稱する人心の病的現象に關する吾人の意見即是れのみ。世の宗教家諸君以て如何となすや。

（卅一年二月）

笑はざる國民と文學美術

日本人は世界に於て最も笑はざる國民なり。蓋し必ずしも笑ふを好まざるに非ず、笑ふの餘裕に乏しければなり。

大なる國民には必ず笑の餘裕ある也。大人にして小兒の心を失はざる也。大なる文學はかゝる國民に於て初めて望み得べし。

明日の食を慮るの國民、衰亡を憂ふるの國民、自衛自活に餘念無き國民は文學美術と緣無き國民なり。

（卅一年二月）

紳士と高利貸

陳べ來りたる所素より當眼の一二のみ。吾等を以て是を見れば、野に在りて叫ぶべきこと一にして足らざる也。戰後の經營として國民教育の振攝は、朝野の心を齊しうして翹望する所、閣下の聰明必ず能く裁する所あらんを信ず。然るに猶此言ある者は、區々の微忱、蓋し默して已む能はざる者存すればなり。願はくば吾言を河漢にすることある勿れ。頓首々々。

(卅一年二月)

吾人の宗教觀

吾人の宗教觀は極めて簡單也。

宗教の主性は迷信なり。所謂宗教の改善は進歩に非ずして滅亡なり。

世に宗教哲學なるもの無し。もし有りと思惟するものあらば、是れ一の迷ひのみ。唯宗教に關する科學としては宗教史と宗教心理學とあるべし。前者は人類迷信の變遷を說述し、後者は迷信の人心に於ける心理學根據、換言すれば人は如何に迷ひ得るかの次第を明にす。

宗教が人生の幸福問題と關係するの多少は國民精神に於ける宗教心の多少に

に非ざる也。今日逢迎主義の教育を以て內地雜居の準備と思惟するもの往々所謂有識者の間に是を見る、是れ吾が深く遺憾とする所なり。吾れ閣下の是際に處するの道おのづから吾が容喙を要せざるものあるを疑はざる也。

宗教の事亦然り。帝國憲法は既に信教の自由を保障す。政府の待遇に於て彼此の間に偏頗あるを許さゞるなり。もし宗教上內地雜居の準備なるものを要すとせば、是れ即ち佛耶兩教同一の待遇に存せむ。國體と適應せざることに於ては、厭世教たる佛教は平等教たる耶蘇教に同じ。其の久しく我國に存在せるの故を以て、國家の保護を受くるは、謂はれ無きの甚しきものなり。政府は內地雜居と共に斷然情弊を絶ちて謂はれ無き是保護を廢止せざるべからず。是の如くにして佛教の衰亡を速うするを得ば是れ寧ろ國家の幸のみ。若し夫れ國家教育に宗教を加ふるが如き閣下の賢、既に其迷妄を了せられたるならむ。憲法の正條を紊り、國體の精神を亂る、是より甚しきは無し。而かも是の如き迷妄なる建議が前內閣の廟議に上りたることを思へば、將來國民教育の大事にして閣下の賢明に待つ所のもの、決して尠少ならざるべし。吾れ潜に國家の爲に是事なからむを望む也。

ふに足らざるなり。一國教育の方針は、內地雜居を待て初めて確定すべきに非ず、我は我が立つ所に據りて來者を迎ふるの一事あるのみ。吾人は國民教育の大主腦として既に勅語を有す。勅語は建國の大本を明にし、民性の特質を示し、昭乎として百世の鑑なり。是に將順し、是を發展し、皇祖皇宗の丕圖を體認して、國家萬世の隆盛を期待する外所謂國民教育の方針なるものあるを許さゞる也。如何ぞ內地雜居を望で俄に狼狽するを須ゐむや。是大主腦を把持して中外時勢の變遷に攝應す、去就に於て一毫の惑あるべき理無し、如何ぞ閣下に於て獨り累を爲さむや。夫の外國語學を盛にすることを以て內地雜居の準備となすが如き、決して其道を得たるものに非ざるなり。我邦に來り我民とならむと欲するものは須らく彼れより我に攝すべし。我に於て彼を逢迎すべき謂はれ無きなり。語學の事一些事に似たりと雖ども、逢迎主義の弊は決して是に留まらじ。若し是によりて崇外迎合の風を馴致し、我國性民情を累はす事あらば、是れ實に國家の一大事なり。一國の衰亡は多く是國性民情の破壞に本くこと、般鑑普く古今の史乘にあり。豫め彼れの語を學びて彼の來るを待つは是れ屬國の準備なり、自立自主の大國民の所爲

年の計を謬るを好まず、然れども邦家の大事一日を緩うすれば、是れ邦家一日の禍なり。今や内外時勢の急潮澎湃として注ぎ來る、國家教育上の一大振攝を加へ、其不抜の大方針に向ひ着々歩武を進むべき時ならずや。先に當局者尋常小學の授業料を規定せしは、素より是義務教育普及の精神に出でたるなるべし。然れども今日は是の如き姑息の彌縫策を以て甘ずべき時に非ざるなり。一方には公立學校の不備に向て何等改良の方案を立てず、而して他方には私立學校撲滅の方針を取る無謀の擧と謂はざるべけむや。文部省は全國の摸範となるべき東京市の教育に對してすら何等督勵の勢を取らず、其不完不備今日の如きに放任し、却て國民教育を以て全國を拘へむとす。少しく妥當を缺く無からむや。文部省は蜂須賀侯の配下に秕政の多きに咽びたり。濱尾氏職にあること二ヶ月未だ天下の耳目を一新するに到らず。閣下是際に處す、是れ功名を尙ぶものゝ好地位に非ずや義務教育の事は一例のみ。

内地雜居に對する教育界の準備は世人の喋々する所なり。吾れ閣下の如何の意見を抱持せらるゝやを審にせずと雖とも、吾れ等を以て是を見れば、未だ多く言

尙ほ是の如き意見を有せざるべし。大臣有司の更迭頻繁なる間にありて獨り敎育方針の確立を見得べきが爲には、文部省以外に於て國家敎育の大主義の中に時の當局者が私見を調攝し、以て方針人と共に變遷するの弊害を預防し得る所の一勢力有らむを要す。今の時に於て是の如き勢力は是を高等敎育會議に望み得べきのみ。唯一般會議の性質として、朋黨比周の弊は深く是を警むべしと雖も、其議員選任の方法宜しきを得れば、是れはた多く意とするに足らざるなり。目下の道唯々是が擴張を計るにあり。去月以來議員の增加やゝ見るべきものありと雖どもやゝ在官者に偏するの嫌あり。是れ恐らくは全國敎育界の輿論を收容する所以に非ざるなり。然ども閣下にして同會議の必要を認めずむば則ち已む、苟も其必要を認むれば、須らく十分の改良を斷行し以て其目的を貫徹せざるべからず。曾て同會議の設備に反對せしの故を以て、今日尙ほ是を冷眼視するが如きことあらば、是れ恐らく閣下の雅量を示す所以に非ざらむ。

　義務敎育の普及方案及年限に關して、文部省は已に畫一の方針を有せざるべからず、而かも其施設の功果見るべきもの甚だ少なし。吾れ等素より速成を尙び百

特色を保ちて終始渝らず是れ國を成すの第一義將た又世界文明の進捗に寄與する所以なり。

想ふに閣下が所謂世界の一國として本邦を見よと言ふもの其意必ずや是にあらむ。閣下外遊の久しき夙に歐洲文明の眞相を知り英獨佛露の强盛は所謂世界主義によりて然らざるを了せしならむ。十九世紀政治史上の大觀は所謂人種國民的結合を經とし國家至上主義を緯とせる各國民の主我的運動に存することを認めしならむ。徒に彼が皮相の文明に眩惑し我が建國歷史の精神を遺却するが如きは吾等聰明なる閣下に於て萬々此事無きを疑はざるなり。不幸にして吾等閣下前年の設備に於て閣下が是國家主義の著しき振攝を見る能はず却て世人をして閣下を世の淺薄なる拜外者流と同一視せしめしを悲む。今や閣下再び文部の局に當る是れ閣下が事實を以て世人の誤解を釋了するの好機會に非ずや。吾等是に文部刻下の事業に就て聊か閣下の爲に言を爲さむか。

閣下の先に職にあるや高等教育會議の殆ど教育界の輿論たりしに係らず閣下是を排斥し各直轄學校以外に是の如き機關を要せずとなしき。閣下よもや今日

じて藥を投じたるの言、吾れ其井上子の國家主義を否定するの意を包含せる者に非ざるを信ずる也。然るに世人却て閣下の説を以て世界主義となす。吾れ閣下の爲に潛に是を悲む。

想ふに今の世に於て苟も頑迷不靈の徒に非ざるよりは、誰か所謂世界主義を唱ふるものあらむや。世界を以て國となさば是れ既に國無きなり。博愛衆に及ぼすは、素より人の道なりと雖ども、義務に輕重あり、情に親疏あり、其國を愛せずして而して人の國を愛するもの、是れ反臣賊子のみ。唯國家は獨り存するに非ず、世界の國家なり。其存在及び進歩は素より世界各邦の大勢により影響せられざるを得ず、是を以て國家を以て事となすものは自己を知ると共に世界を知らざるべからず。是れ最も覩易き道理なりとす。但國の成るや成る所以の道ありて存す其國性民情の異なるに隨ひて、人文發達の特色を有す。徒に自ら世界の大勢に沒了して、他の遺蹤を依傍すべきに非ざる也。且世界の大勢なるもの列國の傾向を外にして存するものに非ず、然らば則ち我れ自ら我れの力を以て是大勢を振作すべきに非ずや。何にぞ自ら屈辱し、外邦の顰笑を追て喜憂すべけむや。我は我が

て閣下座右の參考に資せむと欲す。

世往々閣下に擬するに世界主義の主張者を以てせむとする者あり。是れ吾等が信ずる能はざる所、想ふに必ず齊東野人の語に過ぎざらむ。先に閣下の文部に相たるや、方に井上氏が嚴峻なる國家主義敎育の後を受く、閣下或は其の弊あらむを慮ぱかり、故らに世界を口にしたるに非ざるか。當時閣下の言として傳ふる所、唯世界的眼光を以て日本を見よと云ふにあり、偶々偏僻者流の揣摩を招きたりと雖も、閣下の意、吾れ等決して所謂世界主義なるものと毫も相關せざることを疑はざる也。

故井上子國家敎育主義の大體は、洵に邦家百年の長計に副ひたるもの、將來如何なる人が文部の局に當り、如何に新奇の設備を計畫せむも、是大主義大精神は永く遵奉せざるべからず。是れ一井上の私見に從ふにあらず、實に日本國家の建國及び歷史の精神を繼承する所以なり。然れども無智の輩大體に通せず、其本を去りて其弊を長じ、猥に自尊外卑の風と成さむとす。是れ國家主義が誤りて偏僻固陋の謗を受くる所以なり。閣下が國家に對して世界を言ひしは想ふに畢竟病に應

情に到ては須らく各國の國民的生活によりて規定せらるべし。夫の國語の性質を顧みず猥に西洋音樂家の遺蹤を踏襲して過たずとするもの其生活狀態の如何を顧みずして偏に彼邦の樂を喜ぶもの爭でか國民的音樂を確立することを得べき。彼等は動もすれば趣味の教育を呼ぶ是れ大に可。然れども彼等が他に向て趣味の教育を強ゆるに先ちて自ら國民生活によりて教育せられなば更に大に可ならむ乎。

遮莫音樂は家庭の幸福を增進し、社會の秩序を維持する上に於て缺くべからざる也。今の教育家音樂家は大に是點に注意せざるべからず。國費を以て非國民的音樂學校を建設せる文部省は殊に一番の猛省を要す。（三十一年一月）

公開書

西園寺文相に呈する書

西園寺侯閣下。蜂須賀侯去りて濱尾氏文相の椅子に據ること僅に六十六日、今や閣下再び入りて教育界の風光多少の新彩を添へむとす。茲に聊か所思を陳た

圓融抱和するに及ばず、即ち國民的音樂としては毫も爲す無き也。古來の傳襲に係るものは或は鄙俚に傾き、或は上品に偏し、共に一般社會に向て其推奬を敢てし難き事情あるを免れず。況や今日多少高尙なる音樂的趣味を解する者の滿足を要むるに足らざるをや。是れはた國樂として用無き也。一の雅樂協會ありて國樂制定の目的の爲に盡力するは大に多とすべし。然れども所謂雅樂を以て是の如き國樂となさむとするに到ては、遂に固陋の譏を免れざるべし。雅樂は須らく保存すべし、今日及び將來の國民的嗜好に適すべきものに非ざる也。

今日音樂學校に敎ふる所の音樂は、餘りに專門的なり、餘りに直譯的なり、餘りに西洋的なり、即ち餘りに非國民的なり。吾人が國立の音樂學校に於て非國民的音樂を事とするを當然とすべき理由を見る能はず。

抑々音樂の國民的たるに於て缺くべからざる二個の條件あり。國語と調和すること其一なり、其國民的生活狀態と抱合すること其二なり。所謂趣好なるもの萬邦を通じて一なるものに非ず、其社會生活の如何によりて影響せらるべきもの也。美學上の原理に到ては東西古今に二途あるを許さず。然れども其適應の事

り最も嚴密に監督せざるべからざるなり。今の文部省は果して這般の大觀察に本きて私立學校を監視するか。若し政府誤て官立學校を以て官府の事業となし、其の私人の經營に係るもの我れ關せずと思惟するが如きことあらむには、是れ國家の爲に由々敷一大事なり。更に又民間の敎育によりて却て其經費の節減を僥倖し、其資格有無の問題を等閑視するが如きことあらば、是れ殆ど國家的罪惡なり。吾人は今の賢明なる文部省に萬々是事無からむを祈望して已まざるなり。

（三十一年一月）

國樂制定の必要

社會風敎の維持に關して音樂の勢力の大なることは爭ふべからざる也。而して我邦を顧みれば一の國民的音樂と稱すべきもの無し。是れ豈我社會の一大缺點にあらずや。

從來及び現在の音樂一にして足らず、其の西洋より輸入せられたるものは、一個の美術として見むには、誰か其優秀なる價値を拒むべき。而かも未だ國民生活と

るべからず。圖書匱乏し、器械充實せず、師弟相親まず、學校と學生と損得によりて離合す、亦已むを得ざる也。あはれ是の如くにして如何なる種類の教育か果して能く成功し得らるべきぞ。人物ありて而して資金裕ならむ乎、是れ私立學校の上乘なるもの也。而かも圖書、器械、校舍の不備にも係らず、私立學校が尚ほ儼として其品位と効果とを保ち得る所以のものは、實に人物あるが爲に非ずや。人物と共に資金無きもの、是の如きは寧ろ害ありて益なし。國家教育の上より見る時は當局者は須らく相當の制裁を加へざるべからず。

以上論じ來れば、吾人は對私立學校策に就いて一言當局者の注意を請はざるべからざる者あり。潜に憂ふ、今日の滔々たる私立學校は資格調査上果して適當なるものなるか、果して然らば、其所謂資格調査の標準其物は國家教育主義より打算し來りて、果して適當を稱すべきものなるか。吾人必ずしも教育を以て國家專有の事業となすを主張せじ。民間有志の士が盛に是に從事することは、自由競爭の利益を收むる上に於て最も必要なるを見る。然れども教育は一國の大事、其の影響する所一旦一夕に止らず。國家の幸福を目的とせる政府は特に國家的眼孔よ

校亦滅びたるに非ずや。曾て同志社は新島襄氏を中心として起りたりき、而かも其主義は人と共に亡び、兎に角にも一種の精神的教育によりて本邦の新文明に多少の寄與を爲したる校舍は、今や將に京都帝國大學の一豫備校たらむとすと云ふに非ずや。福澤諭吉氏を中心とせる慶應義塾は今や學風の紊亂殆ど拾收すべからず。押川方義氏を中心とせる東北學院亦將に昔日の面目を失却せむとす。看來れば大私立學校の將來一に何ぞ落寞たる。是の如きは畢竟是種の教育の性質として、其創立者の人物に待つ所多きが爲に非ずや。

設令ひ人物其當を得ずとするも、十分の資金を投じて育英を樂むの篤志者あらむか、良し吾人の所謂る主義教育の目的は十分に到達し得られざるまでも、尚ほ一個の學校として官立と雁行して其效果を收め得べし。然れども觀ずるに今の私立學校中是準備あるもの果して幾何あるべきか。彼等は唯官立學校に入るの資格無き青年の爲に門戸を開くもの、是が學生たるもの亦好で是に入るに非ず、唯官立學校に入る能はざるが故に、已むを得ざるに出づるのみ。是に於てか學生の月謝は啻に學校の維持費を辨ずるのみならず、創立者に對して相當の利益を供せざ

徒の月謝を以て維持する學校に行はるべからざるなり。精神理想の敎育は生徒の顰笑に憂懼するものゝ爲し能はざる所なり。其創立者は育英を樂むものに非ず。主義に盡すものに非ず。唯彼等が小間物屋、煙草屋と爲らざる代りに學校屋と爲りたるものゝみ。彼等は一種の商業を以て敎育を見る、一切外面上の飾表は皆是れ射利私益の爲のみ。彼等は已に商人として敎員を雇聘す、來るものも亦商人のみ、學を賣りて財に換ふれば則ち足れりとす。茲に學ぶものも亦顧客の商店に對するが如し、得たる所の知識は月謝によりて購求したるものと思惟す。あゝ師弟の情誼金錢によりて厚薄あるべき學校に向て主義理想の人物を養成せむことを要む、猶ほ木に縁りて魚を求むるが如き也。私立學校は本來是の如くあるべき者に非す、而かも今の私立學校は其一二を省けば概ね皆是れのみ。

是弊の由て來る所以を尋ぬれば、吾人は二個の原因を見る。主義敎育の爲に私學を創始すべき適當の人物無きこと、及び基本金の缺乏是れなり。

現今の私立學校にして、一個の人物を中心として存在せるもの果して幾何ありや。曾て同人社は中村敬宇氏を中心として起りたりき、而して今や其人亡くして

私立學校は私人の財によりて立つもの、其敎官、校舍、器械等百般の設備は素より官立學校の如く完全なるを望むべからざる也。然れども是の不完全なる設備は一定の主義によりて活動し、其校主若しくは敎師は是主義の爲に事に敎育に從ふ。而して是に入るものは相互の默契によりて是主義の爲に盡さむことを誓ふ。是を以て造られたる人物は主義の人物なり、一定の主義によりて皷吹せられ、堅强なる意志と精神とを抱持するの人物也。社會は形式的器械的の人物と共に斯かる主義、意志、精神の人物に待つ所多し。是の如き人物を養成するは私立學校の特長なり。

吾人は官立私立の間に褒貶の意を寓するものに非ず。其の双々相對峙して其特色を保つことの社會國家の爲に有益なるを信ずればなり。然れども人若し我邦今日の私立學校に就きて其可否を問ふものあらば、吾人俄に其存在を是認すること能はず。何を以てか是を言ふ。

今の私立學校を見よ、厪に其一二を除きては何處に主義に據りて立てるものありや。滔々として是れ射利私益の爲にせられたるものに非ずや。人物敎育は生

弊や形式に流れ、文飾に陷る。夫の教職に居るもの、動もすれば一般行政官吏の態度を以て學生に臨み、約するに法を以てし、官吏の權能に據りて威福を弄す。眞に教育の熱誠を灑して育英の志を樂むもの、おのづから少し。是を以て校舍器械の充實は洵に嘉すべしと雖ども、往々其學生をして無氣力無精神の死學者たらしむ。是れ官立學校の通弊なり。蓋し既に教育を以て國家事業となす、おのづから一私一己の方針主義によりて動くを得ず、おのづから人を造り英を育つる上に於ても亦其理想一面に偏倚するを容さず。是に於てか規模の廣大は個人的特性の發達を妨げ、所謂凡人教育の弊に陷る。亦已むを得ざるの事情ありと謂ふべし。

私立學校は則ち然らざる也。教育者は一定の理想、一定の主義に據り、自己の理想的人物を造るに於て毫も拘束せらるゝ事なし。實に是の如き主義理想を標示して同好の士を天下に求め、以て其懷抱を實現せむとするは、私立學校成立の本來の主腦たらざるべからず。是を以て所謂主義教育と人物感化とは、私立學校に於て初めて行はるゝことを得べし。官立學校に於ける形式教育の缺陷は是に依りて多少補充せらるべく、私立學校の眞價亦實に是に存す。

の教を擴めむが爲めの行爲なる乎。

今や宗教は政略の奴隷なり、方便なり、昔し所謂切支丹が自ら施したる所のもの今政府に於て是を爲す。

是の如き國家の保護の下に傳教せざるべからざる基督教徒は憫むべきかな。心あるものは恥ぢよ、清國皇帝の勅額を得て會堂に掲げむが爲には其の携へたる聖書は血に塗れざるべからず。 基督教徒は事是に到りて猶人道の所在を吾人に告げ得べき乎。

(卅年十二月)

私立學校を論じて當局者の注意を促す

私立學校撲滅を主張するものあり。 吾人俄に是に左袒すること能はず。 然れども我邦現時の私立學校の存廢可否に就ては、一言せざるべからざるものあり。人動もすれば偏に官立學校の充全を説きて私立學校の特長を思はず、然れども兩者の利弊一律にして斷ずべからざる者あり。 國費を以て設備する官立學校は、其教師、校舍、器械の完備に於て遙に私立を凌ぐ。 是れ爭ふべからず。 然れども其

勇者ルーテルの口に出でしを聞かば或は其意外なるに驚かむ。其意外に驚けるものは更に退て三思せよ、吾人は寧ろ今の小量切々たる村學究をして是意氣の一分を得せしめむことを欲す。〔二〕吾人豈彼等に向て酒と女と歌とを奬むるものならむや。

智ありて意なきもの其弊や屈。情ありて意なきもの其弊や靡。現下の青年學生の多くは屈に非ずむば則ち靡のみ。今の精神界の沈滯に一振攝を加へむものは夫れたゞ意育なるかな。

（卅年十二月）

人道何處にある

人道何處にある。膠州灣は二人の宣教師殺されたるが爲に暴力を以て占領せられたるに非ずや。

東洋の平和は二人の宣教師よりも輕しとするか。敎に仆れたるものは天國の恢復に向て其血を濺ぎたることを感謝せざるべからず。獨逸政府は是に對して干戈を動かさむとす、是れ果して「爾右の頬を打たれなば宜しく左の頬を向けよ」と

彼等は自ら觀察秤量の公平を誇る。而かも己を揚げて他を抑へ、昂然自負、人を見ること土芥の如きは、常に彼等に見る所、是れ古今の通弊なり。ポープとスキフトとの通信には一切世人を怪物と罵倒し、ゲーテ、シルレルの書翰亦社會を愚物の巣窟と嘲笑せり。今夫れ大自然の眼より是等の數々たる小量を下瞰せば、其蟪蛄旦夕の智見を狹み、謂はれなくして他を凌蔑するの輩は如何に見ゆべきや。所謂學いよ／＼深くして智いよ／＼淺きもの、眞に憫殺すべきなり。

其地と位とによりて人各々其分を殊にす、是れ天の命なり、人の分なり。而かも萬千不同の中おのづから融會和合する所なくむば、人生社會國家の意義殆ど解すべからざる也。今の紛々たる小學者は、書の外にも知識あり、圖書館の外にも世界あり、同臭交友の外にも人間あることを覺らざるべからず。

（卅年十二月）

無題（二）

『酒と女と歌とを好まざるものは終生呆癡たらむのみ』(Wer nicht liebt Wein, Weib, und Gesang, der bleibt ein Narr sein Leben lang.) 若し今の學究にして是言が宗教革命の大

ず是を排斥すること、猶ほ過て腐敗物を收容したる時健全なる消化器の之を吐瀉するが如し。偷合苟容は社會道德の荒廢を意味す。夫の一度社會の外に放逐し、後ち故なくして是を收容するものは、何ぞ再び吐瀉物を食ふに異ならむ。是一事社會組織の不健全を表出して極めて明瞭なるものに非ずや。是を以て吾人は謂ふ、士風の頽廢風俗の輕薄、人情の澆季は、其の由て來る所一日に非ず。社會的制裁の薄弱實に是が最大原因の一なりと。

(卅年十一月)

無題 (一)

人心は偏し易し、其境遇天性おのづから彼をして等々不如の大觀に勝えざらしむ、學藝の士に於て殊に然りとなす。

夫の書の外に知識なく、圖書館の外に世界なく、同臭交友の外に人間なきは、所謂學者の自ら高しとする所以にあらずや。抑々自己の人たるは何に因りて然る。學者にして始めて人たるか、將た人にして初めて學者たるか。彼等は未だ曾て這般の問題に想到せざる也。

利の筆なり、主義によりて動かざる也。既に欺かれたる吾人は更に其詐欺を再びせむと欲する者を惡むべからざるか。そもそも社會の制裁なるものは斯かる場合に用ふべきものに非ざるか。

社會的制裁の薄弱

吾人は今日社會的制裁の薄弱なるを觀じて、本邦士風の衰頽其の來るところ一日に非ざるを懷ふ。今の人よ、徒に風俗の輕薄人情の澆季を歎ずるを已めよ。吾人はむしろ是の一般道德の棄廢を以て、むしろ吾人の享受すべき當然の應報なりと思惟す。

社會的道德の維持は獨り個人に委ぬべからず、社會亦自ら監視督勵の責に任せざるべからざる也。我社會は從來果して是責務を完ふしたるか、積極的督勵は暫く言はずとするも、果して能く消極的監視をだに成し遂げたりし乎。あはれ是監視の怠慢、即ち社會的制裁の薄弱は道德衰頽の最大原因には非ざりし乎（實例略）

健全なる社會は猶ほ健全なる人體の如し、自己の生存組織に妨害あるものは必

吁吾人今にして本邦士風の衰頽を歎ずるも、抑々亦遲かるべき乎。今の人成敗を重じて節義を輕ず、其の立つや則ち名利、其の行ふや則ち逢迎、所謂人物の高下は其の志す所の名利の大小にあり。夫の德を二三にし、主義を賣り、良心を賣り、朋友故舊を賣りて、而して一身の虛榮を買ふもの、今の所謂士人の常に非ずや。白日堂々の儀容を持して天下に巷議するもの、安ぞ知らむ暮夜朱門を叩いて媚悦哀を乞ひ、十年淸士を以て世に嚮慕せられたるもの、誰か一朝にして權勢の奴隸となるを思はむや。憫むべきものは朴直なる輿衆なるかな。彼等の瞻依戴拜する所の人は、只彼等の肩に憑りて榮達の地に達するを目的とす、其手一度び是地に觸るれば、土足直に彼等の肩を蹴倒し、踴躍して是に就き、顧みて手を額にして輿衆の呆然たるを笑はむ。今の士人は才を負ひて德を稱せず、却て成敗を以て是非を辨せむと欲す、是を以て千計萬策、要は利慾を出でず。昔者歐公、功名成就せりと雖も居らずして去る。國家を以て志となすもの這般の氣宇、私情の外に轄然たるもの無かるべからざる也。

吁吾人は尙ほ己れを欺きたる者の言に聽かざるべからざるか。彼等の筆は名

士の德操

吾人宋史を讀む毎に、深く歐陽修の人と爲りを慕ふ。常に以爲らく、士の進退當に是の如くなるべしと。吁吾人今にして本邦士風の衰頽を嘆ずるもの抑々亦又遲かるべき乎。

知識の高遠彼が如く、學術の精微彼が如きもの、世間何んぞ限らむ。獨り其忠厚の器質を挾みて終始其德に反かざるに到りては、歐陽文忠公は眞に一代の國士なる哉。上下四十年、事多く志と違ひ、道遂に世に行はれず、具さに世路の崎嶇を歴遭困躓、幾度びか流竄の禍に罹るも、剛正の節、果敢の氣、死に到るまで衰へず、堅く公議の是非を執り、凛乎として動かず、勢利前に誘ひ、斧鉞後に迫るも、從容として大義に就けり。箕山の側、潁水の湄、英魄靈氣永く千秋の龜鑑となる、亦宜なる哉。王介甫は公の政敵、曾て『一國に在りては則ち一國を亂し、天下にありては則ち天下を亂す』と罵りたるもの、而かも公の死を弔して嘆じて曰く、『公や復び見るべからず我れ誰と與にか歸せむ』と。吁、一世の國士人を化する亦是の如きものある乎。

りき。誰か基督教を以て沒道理的、はた感情的となすや。今日より之を見れば所詮一個の迷信に過ぎずと雖も、歴史上其勢力の根據は實に其眞理たるの點に存せるなり。スコラ學派以來、科學哲學の進歩に對して不斷の調攝を懈らざるは、實に是理性的根柢の確立を其存在の要義なりと認識したるが爲ならずや。今日苟も宗教界に一新旗幟を翻さむと欲するものは、先づ之を科學的、はた哲學的眞理なりとして說かざるべからず。夫れ之を爲さず、漫然其利益便功を口にするものは十九世紀の文明を侮辱せるものなり。誰か是の如き昧者の言に聽かむや。公父教や、其規模の壯大は則ち快とすべしと雖も、逢迎世義としては、最も拙劣なるを免れず。

今日基督教の國體及び國民性に對する逢迎主義は公父教に到りて一と先づ其終局を告げたるものゝ如し。吾人は基督教徒が今後如何の逢迎主義を構造すべきかを知らずと雖も、愈々出でゝ愈々拙なるべきは、吾人之を預測するに難からざる也。

（三十年十月稿）

德の主義なりと宣言せるに非ずや。大日本の大精神、大理想は明に國祖崇敬、國家至上の主義の中に含蓄せらると宣言せるもの、豈獨り吾人の日本主義のみならむや。宗教者を除て忠誠なる國民の亦た等しく認識する所なり。是の時に當て論者の所謂公父教なるもの將た何の爲す所ぞ。論者は二三學者の説を附會して神道を宗教視せり。其形式のみを見ば、或は宗教の形を備へたりと云ふを得む。其作用に到ては現世實際の道義を外にして、別に所謂宗教的と稱すべきものを見ず。之れ『日本主義』が神道を以て主義となし、宗教となさゞる所以なり。公父教の論者は國民的意識の如何を顧みず、單に外邦宗教の發達史を採りて直に本邦宗教の進程に比擬せんとす。寧ろ小兒の見に非ずや。

且夫れ論者は徹頭徹尾、功利方便の點より公父教を説く。之れ最も笑ふべきなり。一世を風化するの宗教は先づ絶對眞理として承認せられざるべからず。其眞僞是非の理性的問題を全然拋却し去りて、偏に功利方便を説く、商豎匹夫を欺くべきも聰明なる國民を奈何せんや。耶蘇は方便として其基督教を説かざりき、實に其救濟安立の教義を訓ふるに先ちて、宇宙人世の絶對的眞理として之を宣傳せ

本の鬱勃たる大精神に指導せられて、雄大なる一神教を生出すの已むを得ざるに至りしなり。然れども山崎、本居、平田、黒住去りて是大精神亦逝きぬ。今や日本は一大新天地を開き、新日本の大理想を造らむとす、之れ須らく世界的大理想によりて養成せられざるべからず。世界的大理想とは何ぞ、即ち公父教なり』と。論者は公父教一編を雜誌『宗教』(七十七、十一)に掲げて是意義を詳密に説明せり。論者の説頗る壯快なり。蓋し猶太國教の基督教に移りたる事蹟を以て我邦に比し、エホバを以て天照太神、若しくは天御中主神に、基督教を以て所謂公父教に擬するものゝ如し。宗教の方便主義逢迎主義も亦玆に至て極まれる哉。

論者は如何に國民の宗教的意識を檢覈したりしか。論者は必ずや平田、黒住の神道は如何なる事情の下に生起したりしかを研究せしなるべし。是時時勢の平和的迫害に對する國學者の反抗を外にして、幾何の一神教的大精神が國民の間に磅礴せりしとするか。人死して教又傳らず、是一事已に其消息を傳ふるに足る。吾人は今日平田、黒住の後を承けたる一神教的大精神の暗流を國民の間に認むる能はず。日本主義は神道の復興と稱せらる、然れども現に自ら宗教に非ず實踐道

日本國民の敬天の思想は、祖先教に出でゝ國家の中心、臣民の宗家たる皇室の上に萃まる。吾人の依つて以て『國を爲し、民を爲し、一團の神民として極東に勃興する』の運命を有するを得たるは、皇祖皇宗の丕圖に本く。三千年の歴史は是意識を結成して牢として拔くべからず、吾人の體認すべき理想は是に外ならざる也。夫の所謂上帝なるもの吾人と何の關する所ぞ。『開闢以來の敬天の精神を覺醒す』と論せる六合雜誌の論者は、國民性の自然の發展より宗教を演繹せむと欲す、是點に於ては他の凡々たる迷信者流に一歩を進めたり、然れども其信仰の內容を遺却するに及びて、折角の逢迎も水泡に歸せざるを得ざりき。

近頃公父教の唱道者は、是逢迎主義を繼續し、更に百歩を進めて直に大膽にも基督教と神道との抱合一致を絶叫せり。論者は素基督教の先醒にして、神道の熱心なる研究者を以て知らる。以爲らく『神道は其本來の有神論を研磨して、國家の基礎を鞏固にし、帝室の尊嚴を擁護し、臣民の品性を高尚ならしむべき天職を有するものなり。是天職の自覺は山崎をして天御中主神を推尊せしめ、本居、平田をして産靈神を崇敬せしめ、黑住をして天照太神の御開運を祈願せしめたり。之れ新日

るものは、更に其逢迎主義に一歩を進め、日本建國の精神及び理想に鑑みて皇室及び神道の爲に基督敎の敎義を附會せり。一基督敎牧師が六合雜誌(百十九)に於て、

> 今や我帝國は、建國以來の大理想たる開國進取の大理想を發揚して、更に獨立自治の大本を完うせむと欲す。是時に當て區々陳腐なる富國强兵論を以て國民を感奮せしめむと欲す、亦た陋ならずや。吾人は唯大に日本人が開闢以來大に抱懷せる敬天の精神を覺醒して、人類の天父たる活ける上帝の存在を深く意識して、その恩祐の下に國を爲し民を爲し、我皇帝を中心として一團の神民、茲に極東に勃興する者なるを自ら覺らむことを欲す。

と論じたるは、即ち是傾向を表はせるものなり。然れども拙なるかな、是逢迎や。論者は果して日本人が開闢以來常に抱懷する所の敬天の精神の果して何物なるかを知れりや。是の如き精神の覺醒が果して吾人を、(論者の注文通りに、)人類の天父たる基督敎的上帝の存在の意識に導くべきものなりや。あはれ、論者の逢迎に急なるや、是一段の歷史的考察を遺却したり。然れども是要點の遺却こそ論者の爲には幸なりしなれ、彼は之が爲に一時の妄信によりて、獨り自から媚悅し得たればなり。

之れ何たる横着なる意見ぞや。　現今教育社會に於ける排基督教の精神は教育勅語に本ける國家教育主義の必然の結果なり。　教育と宗教との衝突は井上博士と高橋某との爭論と共に終を告げたる者に非ず、基督教が其中心教義を改良し非世界的、非個人的はた非人類平等的となるに非ざれば、其衝突の存在は依然として今尙ほ昔の如し。　基督教徒の中に『偶然に生れたる土地の如きは其故鄕となすに足らず』とする者ある間は、『支那の爲に日本と戰ふも、日本の爲に支那と戰ふも、吾に取りては一のみ』と揚言するもののある間は、日本人が實際に信仰實踐し得る所の天皇の神聖と國家の至上を措て、宇宙間の主上至貴なるものとして、神、耶蘇、羅馬法王、希臘教主を崇拜する間は、基督教豈教育社會に隻脚をだも投じ得べけむや。　夫れ是の如き明白なる矛盾を顧みずして、國家教育に其根柢を植えむと擬す、何物の横着か之に如かむや。　記者は逢迎の志ありて未だ其道を知らざるものなり。

逢迎は阿附媚悅叩頭を以て成し得べきものに非ず。　必や先づ我國體と宗教的信仰との根本的調和を謀らざるべからず。　徒らに外部の事情によりて一時を塗抹するは、永遠の策に非ざるなり。　是に於てか基督教徒の中最も先見あり學識あ

瀕せり。從來同教事業中の有力者たりし傳道學校は、勢日に非にして學生の數實に寥々。其先達先覺の士と稱せらるゝもの、亦往々教班を脫して顧みず、內にありては非基督教信徒にして其最大傳道校に長たるものあり、嘗て聖書の譯者として高名なりし人は今や貨殖の外其他を知らざるあり、彼等は山口師範學校に於ける彼等の所謂迫害に對して抗議するの勇氣だも存せざるなり。彼等が金科玉條と賴みたる世界主義は今や弊履の如く委棄せられ、中には『世界主義路傍に迷ふ』と嘆ずるものあり。基督教雜誌『眞理』の記者は是衰勢挽回策を以て教育事業に存すとなし、茲に其逢迎主義を說きて曰く、

政府が設置せる學校は下幼稚園より上大學校に至るまで組織全く整頓したり。之れ國家の慶事也。而して是國民未成の頭腦を左右し得る學校の空氣が排基督教の精神に富みたりとせば、是れ基督教の傳道に任ずる當局者が大に考ふべき事に非ずや。是時に當りて吾人傳道者は教育社會を他の蠶食に放任せずして自ら爲す所あらざるべからず、即ち許多の幼稚園小學校中學校を設立すべし。斯くせば少年子弟の腦裏に排基督教の精神を養成せざらしむるを得む。次で基督教徒も亦教育社會に入りて事を企つべし。若し主義を同うするもの多數を制するに至らば排基督教の火焰は多く上ぼるを得ずして止むを得む。

策の使僕となす、之れ宗教の俗化衰亡墮落に非ずや。逢迎主義の弊茲に到る、又免るべからざるの數なるか。六合雜誌の論者は更に其言を續け、基督教と日本歷史との連結の方法を述べて曰く、

（一）基督教は進で政治的要素となるを要す。
（二）社會的運動の最要素と爲るべし。
（三）外交上の勢力と爲るを要す。

あゝ基督教徒は三十年の宣傳に國民性の途に動かすべからざるを見て、其立脚地を政治外交の上に求めむと欲するか。其志や善し、而かも一宗教が政治社會の要素となり、外交上の勢力とならむが爲には、國民性情の中に如何に深遠なる根柢を有せざるべからざるかを悟らず、徒に自家勢力の極衰を回復せむが爲に、苦楚煩悶するの狀寧ろ憫殺すべし。

實にや最近十年間に於ける基督教の衰頽は、よその觀る目も哀れなり。一度び國粹保存論に頓挫し、再び教育宗教衝突論に挫折し、三度び日清戰爭後に於ける國民的意識の覺醒を代表せる吾人の日本主義に打擊せられ、今や方に其極衰の期に

るべし。

日本歴史と基督教とは連絡せられざるべからずとは、一基督教徒の言としては素より當に然るべし。然れども、吾人は其の何故に連絡せられざるべからざるかを問はむと欲す。國民性は外物攝取の力に於て一定の限界を有す。其發達の制約、及び目的に於ても亦異なる所無きを得ず。同一の文物を以て萬邦の民族に強ひむとするも、徒に其自然の進歩を沮遏するに過ぎざらむのみ。三大洲を蹂躙せしサラセン民族の遺縱に幾何の回教徒を留めしや、黑人は手にコラーンを取りて而して拜物教を捨てず、佛陀は我邦に於て神祇として崇拜せられたり。吾人は何故に吾人の國民性に反きても異邦の宗教を信せざるべからざるか。基督教徒はアールヤ人種の佛教がツラン人種の支那、日本に行はれたるを以て、宗教の感化は人種の差別を超越すとなす。殊に知らず、支那、日本の佛教は又印度の佛教に非ざるを。若し夫れ世界の大勢に處し、列國の交際に資するの故を以て基督教の傳播を必とするは、是れ已に宗教問題を超て政治問題に入りたるなり。宗教の根柢は人心の感化に存す、内より啓發すべくして外より強迫すべからず、是精靈的事業を以て政

配するものは國家のみ、宗教の關する所にあらずと言はしめたる時代なり(ビスマルク演説集ノ五二)逢迎主義豈之れ宗教現下の急務に非ずや。吾人は本邦の基督教徒が今にして初めて之を覺りたるを以て、寧ろ其の時勢に後れたるを想ふ。

逢迎は宗教の俗化なり、衰亡なり、墮落なり。宗教の變遷は素生物の進化に比擬し得べき者に非ず、吾人は夫の逢迎主義によりて僅に其の奄々たる氣息を保つ今の宗教の狀態を見て轉々惻怛の情に勝えざるなり。遮莫今の基督教徒は如何に時勢を逢迎せむとしたりしか。吾人をして其一二の事例を瞥見せしめよ。如何にして日本の歷史と基督教との連絡を成就せむか、之れ逢迎主義の第一問題なり。

一基督教徒は六合雜誌(百九十七)に之を論じて曰く

歐米に於て基督教が社會の大勢力たる所以のものは其國の歷史と連絡して相離すべからざればなり。歐米諸國が由りて以て立つ所の根柢は基督教に關係無きはなし。然るに我日本の基督教は宣傳日尚ほ淺きに因るとは云へ、未だ吾歷史と連絡を全うする事能はず、其盛衰は日本國家の盛衰と毫も關係する所無し。苟も世界の大勢と列國の交際とに鑑むるものは、我日本が基督教を等閑視することの國家の發達に甚だ不利益の擧たるを覺知するに難からざ

徒の逢迎主義と云ふ。

逢迎主義必ずしも不可なるに非ず、否宗教存在の第一の制約なり。ネロに劣らざる暴帝コンスタンチヌスを聖人と崇めゴートの蠻族アラリックを救濟者と拜したる基督教が、今日尚ほ其殘命を列國樹立の間に保ち得る所以のものは、實に是逢迎主義あるが爲めならずや。佛教の逢迎主義は聖德太子の四天王寺となり、藤原氏の興福寺となり、本地垂迹說となり、神佛一體說となり、在家外護の願となり、皇佛大同團となれり。逢迎主義豈之れ宗教繁昌の第一要件に非ずや。

蓋し宗教の物たる素靜力的、自ら社會進化の活力と爲ること能はず。隨て社會全般の事物に亘りて其實勢力を把持する國家の進步に對しては、常に受動的態度を取らざるを得ず。偶々進で實際的勢力を占斷せむと欲するも現世の中に根柢無きを以て幾もならずして失敗するを免れず。中世に於ける法王權の如きは、羅馬帝國崩解の後を承けて、西歐諸州の精神的中心となりしを以て其持續の歲時比較的に久しきを得たりきと雖も、是れはた近世國家的意識の明瞭となりゆくに隨れて、今や徒に空名を擁するのみ。今の世は敬虔なるビスマルクをして、現世を支

基督教徒の逢迎主義

今を去る三月前、『日本主義』は左の如き短評を掲げき

「宗教は國家的なるべからず、國民的なるべからず、眞正の宗教は萬人普通世界的ならざるべからず」とは實に是一ヶ月前までの宗教家の語調なりしなり。然るに今日は忽ち一變して折衷的となり、曾て其眼中に置かざりし所の「國家」、「國民」を言ふに至らむとせり。これ何の原因する所ぞ、他無し、唯吾人の「日本主義」の新運動の强固遠慮なる大組織と、其嚴肅なる國家的教理の敵すべからざる事實と論理とを傳へ聞き、未だ是主義の發達せられざるに先ち、衷心恐懼の念を起し、他日國家國民主義に改説し適合せむの準備として、今日より折衷的語調を取り來れるものに外ならず。實に吾人の主義の風説世間に擴まるや、今まで國家を言はざりし所の宗教家等、忽ちにして國家を言ふに至り今まで國民を輕視したりし宗教家等、忽ちにして國民性を考ふるに至れり。

「日本主義」第二號「宗教家の語勢忽然一變」

吾人は玆に記者が言ふが如く、其動機の『日本主義』の唱道を恐れてなりしや否やを審にする遑無しと雖も、最近の半年に於て基督教徒の語調に著しき變化ありしことは事實なり。即ち非國家、非國民をすら唱ふるを憚らざりし基督教徒が、國性民情を考ふるに至りしは爭ふべからざるの事實なり。吾人は之を名けて基督教

りき。眞言、天台二宗の如きは殊に朝家外護の下に貴族的性質を帶び來り、其大乘佛教の本旨の如きは夙に堙滅し了りたりき。夫の淨土眞宗は是貴族的宗教の箝束を打破し、平民の爲に平等無差別の救濟門を開きたるもの、而かも其歷史は漸く當初の目的と離叛し、國體を逢迎し、外護を喜び、貴顯に阿附するに至り、是傾向は今日に至りて一層較著となれり。是の如きは淨土眞宗の腐敗なるに相違なしと雖も、抑も亦自家の存在及び昌榮を支撐せむが爲に已むを得ざるの條件なりしなり。佛教の爲に其外護を受くるを難ずるものは、やがて佛教の爲に其衰弱を企圖するものなり。國家と宗教との歷史的關係を知るものは、宗教外護の必要を認めざるべからず。

然れども外護によりて佛陀教が其の本來の面目を失ふべきは、猶基督教に異ならず。若し夫れ神道は日本國家の歷史と密接の關係を有するもの、國家保護の下に、國家の發達と共に其昌榮を增進し來るべきは自然の勢なりとす。（三十年九月）

すべきのみ。然らば則ち如何にして貧民を教育せむか。彼等をして社會の體制を解せしめ、自己の位置を改良する永遠の方策は社會制度に對する正當の服從の下に自動的事業に依らざるべからざることを認識せしむるにあり。天賦人權の妄想を打破し、服從の必ずしも羞恥にあらず强力の途に權利の所依たる所以に對して、正當なる觀念を有せしむるにあり。同時に獨立自依の精神を奬勵し、他の好意慈善に依賴するの念慮を斷たしむるにあり。是の如くにして漸くにして改善の途に就かば貧民社會の救濟期して待つべきのみ。

（卅年二月）

國家的宗教

今日の宗教は國家的となりて國家保護の下に其生存を保たむか、もしくは、自家本來の平等旨義を維持して甘じて滅亡すべきか、二者其一を擇ばざるべからず。是傾向は歐羅巴諸國の基督教に於て見るのみならず、近くは我邦の佛教歷史に於て最も適切なる事例を認め得べし。

日本の國家及び國教たる神道と調和抱合することは佛陀教傳播の須要の制約な

正義の爲に斃るゝは正義と共に生くるなり。世には形骸のみを以て立たざるものあり。個人も國民も已むを得ずむは死して而して後生きるの大覺悟大精神無かるべからず。

(卅年八月)

社會問題に就きて

社會問題の最後の解釋は遂に教育問題に歸着すべし。貧富の懸隔を以て社會の體制上免るべからざる結果なりとすれば、是の如き自然且正當なる發達を沮渇することは、取も直さず社會的體制の破壞を以て目せざるべからず。所謂社會主義の如きは天理人道に背戾せるものなり。

今の時に於て一部論者の妥當なりと誤認せる財產制限の行はれ得べからざることは猶其共產主義の如きなり。若し所謂任俠的社會主義は極めて望ましき事なりと雖も富者の意志を制限するに足るべき强大なる制裁は國家及び道德の現狀に於て素より望み得べきにあらず。貧民社會の根本的救濟策は遂に貧民敎育の上に落ち來らざるべからず。吾人を以て之を見れば這般の事理素兩言にして決

成敗と正義

一物存在の眞意義は其の依て以て物たるを得る所の精神本領の存在にあり。正義を以て立つ所のもの一朝屈辱を忍ばゞ是れ已に滅亡なり。形骸は性格を作ること能はず。世間名存し實亡へるものあり、進化の美名の下に滅亡の事實を掩へるものあり。斯の如くにして一種の幽靈的形式主義は殆ど無限の威力を以て社會に臨むに至る。是に於てかあらゆる不義は雲湧泉涌して其の底止するところを知らざらむとす。

あゝ名目主義の弊なる哉、形式主義の禍なる哉。正義の爲に滅亡する國家は滅亡によりて榮ふ。所謂大義親を滅すとは實に是大主義の福音に非ずや。今や其性を失ひて而も其命を全ふするものあり、彼等はひいて國家をして精神的死亡を遂げしめむとす。國其性を失はば之れ變化に非ずして滅亡に非ずや。世には死せる宗教あり、然れども國民は國家をして死せしむべからず。あゝ形式主義の弊なる哉。

してボスフォラスの舊都を取らむと擬するもの、亦人種の爭に非ずして何ぞや、佛獨の反目は羅甸民族とチュートン民族との疾視に非ずや。信仰の自由と、人類の平等とを旨義とせし新大陸移住民の子孫が、土人を虐待し、支那人を排斥し、更に日本人を拒絶せんとするの傾向ある、是れ亦人種の爭に非ずや。フィリピンの叛徒が西班牙の強力に抗し、スラブ民族が常に圖南の志を紹ぐ、是亦人種の爭に非ずや。國家の競爭は一面より見れば、殆ど之れ人種の競爭なるの觀あり。人種の研究豈史學當眼の急務に非ずや。若し夫れ人種は何が故に相爭ふか。愛なる神を戴きて爾の敵を愛せよと訓へられたる基督敎國民が、那の如き豺狼の行爲は何によりて然るを得たるなるか。人類的情誼の發達につれて、人種的差別の益々其界限を明にしたるの事實は、國民の將來に如何の警告を與へたるか、如何なるか是れ歷史の光明に照されたる國家究竟の目的なるか。是れ等は人種と關聯して歷史哲學上極めて趣味ある疑問なりとす。

吾等は這般の研究の第一歩として、人種の歷史的意義を明にせんことを、我邦の史家に勸告す。

（卅年六月）

第二期雜篇

歴史と人種

歴史的活動は之を一面より見る時は、人種的活動なり。是れ過去三千年の歴史が明に我等に教ふる所に非ずや。是に於てか史學と人種學との關係一層の緊接を加へたるものと謂ふべし。然れども吾等に於て之を見れば、我邦の歴史家は多、未だ這般の觀察に向て充分に重要を措かざるものゝ如し。過去に於ける内外歴史に關する紛々たる著述は、明に之を證せり。豈之れ我邦史家の一大缺點に非ずや。

人種の競爭は獨り古代に於てのみならず、人道博愛の進歩せりと稱する所の近世に於て、いよ〳〵其峻鋭を加ふるの事實を見るは、歴史家の大に注意すべきところなり。昔西羅馬の滅亡は希臘羅甸民族とチュートン民族との爭なるが如く、又十字軍の遠征は回教徒たるセミチック民族と基督教徒たるアリアン民族との爭ひなりしが如く、今日希土の戰爭は人種の爭にあらずして何ぞ。露西亞が百方力を盡

仰を主張したるポーロとの衝突も、近くは羅馬敎會とルーテルとの反對も、何れも是に外ならず。是れ獨り基督敎に於て見る所なるのみならず、亦佛敎に於ても見る所の事實なり。東西文明の潮流極東に接觸してより、基督敎と佛敎との衝突は免るべからず、日本は方に是の衝突の一舞臺也。其の將來素より知り難しと雖も、而かも國の內外に執着して漫に相對抗したる兩敎徒は今後或は其信仰の根本問題に立入りて、其態度を一變するの時機あるべきが如し。佛敎と基督敎とは其由來を異にせる世界の二大宗敎也、其の反對には素より深遠なる根據あるべきも、而かも其の根本的信仰の上より相接近すること能はざるべき乎。即ち基督敎內の自由信仰は佛敎內の同主義と、佛敎內の敎權主義者は、基督敎內の同主義と各〻相結合すること能はざるべき乎。國の內外は是の主義の根本的反對に較ぶれば、寧ろ淺薄なる差別に過ぎざる無き乎。這般の問題を決するは二十世紀の歷史なり。

附言、是總論中の歐羅巴政治史の綱領は、シカゴ大學敎授ジャドソン氏の著「十九世紀の歐羅巴」に依れり。是書は一昨年の出版にして、三百數十頁の一小書なれども、簡にして盡せり。是の篇負ふ所あるを以て、玆に同敎授に對して謝意を表し、併せて是の書を讀者に紹介す。

(三十三年六月)

を現はせり。日本にありては、國民教育の要素としての宗教は、國家の全然認めざる所なり。國家對宗教の問題は伊太利に於て最も著しく現はれたり。法皇權は伊太利に於ては所謂國家內の國家也、國王と法王との乖離は常に社會の平和を破らむとす。法王問題にして片附けらるゝに非ざれば、伊太利の國本は確定せられたりと謂ふべからず。歐洲諸國は多く國教と稱するものを規定すと雖も、其の特權は多くは言ふに足らず、國民亦必ずしも是を信奉するに非ず、謂はゞ歷史上の殘骸に過ぎざるのみ。

今の基督教に二大派あり、是を保守派と進歩派と稱するも可也、カソリシズムとプロテスタントと別つも可也、教權主義と自由信仰主義と稱する恐らくは更に可ならむ乎。羅馬教會、希臘教會、監督教會等は前者を代表し、諸の虔信派、清教徒、ユニテリアン、ユニバサリスト諸派、何れも後者を代表す。前者は舊信仰の傳統を繼ぎて教會もしくは教會の規定せる信條の絕對權を主張するもの、後者は個人の自由なる信仰を中心として、必ずしも傳承儀禮を重せざるもの、是二主義の對立はあらゆる時代の宗教歷史に其の痕跡を止めたり。遠く法律を主張したるペテロと信

は情の對境也。科學と哲學とは理窟を敎ふれども、價値を與ふる能はず、人生世界の價値に關しては知識は多く爲す所無し。是に於て人はおのづから理外の信仰に縁らざるを得ず宗敎の他の一脚玆に於てか立つ。畢竟無究を趁ふの心あるところ、其處に宗敎無きを得ず。如何なる時代の文明も科學と國家との外に於て宗敎の存在を認めざるを得ざるべし。唯是の宗敎が如何なる形式に於て現はるゝかは自ら別問題に屬す。

五　宗敎問題（下、實際問題）

宗敎に關する實際問題は大凡四あり。敎育對宗敎は其一なり、國家對宗敎は其二なり、敎權主義對自由信仰主義は其三なり、基督敎對佛敎は其四なり。

敎育宗敎兩者の分離は、今世紀の後半期に至りて一層分明なる事實となれり。北米合衆國にありては、國民敎育は殆ど全く僧侶の手より離れたり。歐洲諸國にありては、最下等の敎育は多く依然として僧侶の干渉を被れども、稍ゝ高等の敎育は漸く宗敎の範圍外に獨立するに至れり。英佛二國の國民敎育も亦同一の傾向

組織の漸く完備せる十九世紀に於ては、法律制度の力によりて維持せらるゝことゝなれり、是れ宗教衰頽の第一原因也。是と同時に、敎會に屬したる幾多の特權は國家の手に移り、隨て國家宗教の衝突は避くべからず、而して是の衝突に於て宗教は失敗せり、是れ宗教衰頽の第二原因也。自然科學の進歩は宗教の敎へ來りたる幾多の眞理の荒誕なることを證明せり、是れ宗教衰頽の第三原因也。是と同時に敎會の信條、經典の解釋は玆に其の統一を失ひ、自由信仰と高等批評とは、信徒の團結を弱からしめぬ、是れ宗教衰頽の第四原因也。是四個の原因は疑ひもなく宗教の好望なる將來を預告するものに非ざりしと雖も、而かも是れ宗教盛衰の問題にして、存亡の問題には非ざるなり。

自然科學は開けたり、是の自然科學に本ける哲學的世界觀も亦說かれたり。然れども尙ほ吾人の知識の無限なる要求を滿足すること能はざる也。科學哲學の進歩とは畢竟一の無學より他の無學に移るの謂のみ。吾人を滿足せしむる能はざるに至ては即ち一也、宗教の一脚玆に於てか立つ。且つ夫れ吾人は知の動物たると同時に情の動物也、實在の世界は吾人に取りては價値の世界也、而して價値と

今日猶太人が歐洲の到る處に擯斥せらるゝ如く、支那人は北米、南洋の到る處に擯斥せられつゝあり。曾て人類平等の大義の上に其國を立てたる合衆國人は、今や米大陸の土人に少からざる迫害を加へつゝあり。是れ亦人種問題に關する一現象なり。

一言以て是を覆へば、同人種相結合し、異人種相反撥する感情は、人類先天の至性也。東方問題も、極東問題も、南阿、玖馬、比律賓の離叛も、支那人排斥も、南阿戰爭も、畢竟是の先天的感情の發動に外ならず。是の如きは、過去に於て然るが如く、將來に於ても亦然るべし。人種問題は二十世紀の繼續問題なり。

四　宗教問題(上、理論問題)

宗教革命以降、宗教の將來は尙ほ未了の問題に屬す。十九紀世文明の發達は宗教の原理を明にしたると同時に、其の存在を擔保せり。

宗教が新文明の發達の爲に、從來有し來りたる幾多の特權と根底とを失ひたるは事實也。宗教的制裁によりて廑に保全せられたる社會の秩序と道德とは、國家

三　人種問題

人種の二字は國際、植民に關する多くの問題を解釋し得べき鍵鑰也。同人種の先天的結合力と、異人種の先天的反撥力の如何に強大なるものなるかは、十九世紀の歴史に於て十分に證明せられたり。而して人種問題は啻に過去の問題たりしのみならず、又將來の重大なる一問題なり。

獨立自治は十九世紀史上の著明なる現象の一なり而して獨立自治とは同人種結合の要求の別語に過ぎず。獨逸と伊太利の統一、及び希臘の獨立は是の要求によりて成されたり。匈牙利、セルビア、ブルガリア、ルマニアの自治も亦是の要求によりて成されたり。愛蘭土自治案が英國政治界の宿題となれるも亦是が爲なり。今日にありては、匈牙利と那威とは其の司配者に對して分離を希望し、ボヘミアも亦其の故國の獨立を回復せむことを謀る。即ち知る、獨逸と伊太利とを統一したる同一の原因は、即ち墺地利、瑞典、英吉利の統一を破壞するの原因なることを。而して皆是れ同異人種離合の先天的要求に外ならず。

領カルノー、澳の皇后を暗殺し、エルス公を狙撃せり。彼等は秩序と平和との恐るべき敵なりと雖も、其の勢力は深く恐るゝに足らざるものゝ如し。

社會主義は勞働問題と最も密接の關係を有す。是の主義の有力なる扶持者は、多く勞働者の間にあれば也。蒸汽機關の發明は工業の事情を一變せり。是より以降傭者と被傭者との親密なる關係は全く其跡を絶ち、勞働者は其人格を失ひ、單に勞働を供給する活器械として取扱はるゝことゝなれり、是に於て工場主又は資本主に對するの彼等の所爲を決するものは、主從の情誼に非ずして單純なる權利義務の關係となれり。其知見漸く開くるに隨ひ、彼等と富豪者との間の生活狀態の懸隔を自覺し初め、茲に漸く其の不平の念を生ずるは、蓋し免れ難き所なるべし。勞働社會の生活狀態は、是を百年前に比較して、決して退歩せるものに非ざるべし、唯今世紀は彼等に自己の地置を自覺すべき知識を與へたり、是れ其の不平ある所以なり。今日にありては勞働者は宛然として社會主義の無盡藏なる豫備兵なり。社會主義と戰はむと欲するものは、先づ勞働者に安住の地置を與ふるを上策なりとせむ。

貴の人に分配せられ居るを認めたり。人權の平等、個人の自由を信奉せる彼等は、是に於て社會組織の根本問題を討ねざるを得ず。或學派は、個人が財産を私有するの權利を全然否認せり。其中には或はヘンリー・ジョーヂの如く單に土地私有に反對するものあり、或は生産に關する一切の事物は社會全體の共有物たるべしと說く者あり。或は又國家をして單に土地のみならず、製造所、鐵道、交通機關等の一切の所有者たらしめ、其政府をして是が管理に任せしむべしと說くものあり。是れ即ち近年獨逸學者の間に行はるゝ國家社會主義なり。

是等は社會主義中の溫和なる者也。其の極端なる者に至ては、現今の經濟組織を根本的に破壞せむことを主張する者あり、『財産を私有するは盜賊を働く也』Property is robbery とは是輩の套語にして、社會改造の唯一方法は革命にありと說く。彼等にとりては如何なる種類の政體も、如何なる種類の社會も、唯顚覆の一事あるのみ。無政府黨若くは虛無黨の名稱是より起る。ダイナマイトは彼等の言論也。彼等は是の如くにしてバルセロナの劇場を破壞し佛蘭西の代議院を破壞し、マデレンの寺院を破壞せり。彼等は是の如くにして魯帝歷山二世を暗殺し、佛の大統

今日の平和は權力平均の危險なるカネ合也。而して動もすれば是の平和の破壞せられむとする三地點あり。即ち一はアルサス・ロトリンゲン、二は君士坦丁、三は日本海也。前者は佛蘭西の復讐に對する獨逸の防禦也。中者は魯國南下の野心に對する歐洲列國の牽制也。後者は東洋平和の維持を國是とせる日本に對する魯國の侵略也。平和の現狀を擔保するものは、前者にありては三國同盟たり、中者にありては伯林條約たり、而して後者にありては魯國兵備の未完なり。日魯協商は是間の閑談柄に過ぎざるのみ。

二　社會問題及勞働問題

社會問題は十九世紀文明の暗面なり。科學の發達、富の增殖、敎育の普及、宗敎の進化――、是等の文明に對する陰影は、社會問題に集注せり。社會問題は十九世紀文明の『必然なる害毒』なり。

民は由らしむべし、知らしむべからず。是れ十八世紀以前に於ける爲政者の主義なりき。十九世紀は民をして知らしめたり。貧民は社會の特權が少數なる富

第十章　當今の問題

一　軍事問題

平和の在る所に軍備あり。十九世紀の平和は權力平均の別名に外ならず。

義務兵役の制度は普魯西より初まりて、重なる國は皆是を用ひたり。是の制度に據れば國民は一定の年齢に達すれば二年若くは三年の間現役に從事し、其後若干年の間は豫備兵となり豫備兵の期盡くれば國民軍に編入せらる、即ち國民皆兵主義也。海軍の設備も年を追うて完成せられつゝあり。新興國日本の如きすら既に十八萬噸の艦隊を有せり。英獨佛の造船所は各國の注文に忙殺せられむとす。凡そ是等の莫大なる軍備を維持せむが爲に、國民は重税を拂ひ其の生産的事業を抛ちて是に從事せり。平和の價は時に戰爭の價よりも貴し。或統計家の説によれば十九世紀後半に於て戰爭に死したるもの二百五十萬人を下らず、是に費したる金額は一百二十億萬弗に過ぐるならむと。吾人の生息する平和の今日は是の如くにして購ひ得たる也。

ぬ。今日に於ては南阿戰爭の狀況は翌日の日本新聞紙上に報告せらるゝに至れり。鐵道と電信とは兩々相離るべからざる者也。長線路の鐵道は、各停車場に於ける電信の消息無くむば、一刻も其車輛の運轉を許さゞる也。

三　商業上の影響

鐵道電信が商業上に及ぼせる影響は言ふまでも無き事也。商人は最早や仲立人の蓄積品を購買するの要無く、一片の電信によりて其の生產地より直に是を輸入するを得べし。價格の動搖は確實なる情報によりて漸く少く、商賣は投機事業より漸く離れたり。殊に蘇西地峽の開鑿已降、東西の商業は愈ゝ敏活親密となり、最早や印度の貨物を英國に蓄積するの要無きに至れり。何となれば佛、獨、澳、伊の輸入商は亞細亞市場と直接の取引を爲し得べければ也。若しニカラグア運河の開鑿にして首尾好く成功せられたらむには、世界の商業交通は玆に第二回の革命に遭遇したりしならむ。

は蒸汽力に就いて注意する所ありしが、蒸汽機關として實際に應用せられしは、今世紀の事に屬す、而て最も著大の功力を現はしたるは、交通機關に於ける應用也。

一千八百七年、北米ハヅソン河上に於て初めて蒸汽船の運轉は試みられたり。三十八年には首尾好く太西洋横航に使用せられ、爾來幾多の改良を經て今日に至れり。蒸汽車の試用は幾度びも失敗せしが、ジョーヂ・ステフェンソンの盡力によりて、鐵道はリバプール、マンチェスター間に敷設せられ、蒸汽車は成功せり、是れ一千八百二十九年のことにして、實に世界に於ける最初の鐵道たり。四十年には世界鐵道の延長既に早く五千哩に達し、交通機關の面目は漸く一變せり。十九世紀の物質的文明は蒸汽船と蒸汽車とに初まれりと謂はむも不可無し。一千八百六十九年、蘇西地峽の開鑿ありてより東西兩洋の交通は更に容易となりぬ。快速なる汽船を以てすれば七十日に於て、馬耳塞横濱間を往復し得ることゝなれり。

蒸汽機關に次で十九世紀の交通を一變したるものは電信也。其の最初の應用は一千八百三十七年、北米合衆國に於て爲されたり。五十一年に於て常設電信線は初めて英佛二國の間に架設せられ、五十八年には太西洋海底電線の竣功を告げ

綿は世界の到る處に產す。唯其の完全なる紡績方法の發明せられたるは近年の事に屬す。其の結果として綿花製造物は、一百年前に一シリングの價値を有せしもの、今日は於ては一ペニーを以て購ひ得ることゝなれり。鐵は今日殆どあらゆる器械の唯一要素なるのみならず、近時に於ては船艦家屋の構造に使用せられつゝあり。今日を以て鐵時代なりと謂へるは決して過言に非ず。而して是の鐵をして使用に勝えしむるものは石炭也。十八世紀の中葉まで、鐵礦は不十分ながら薪材によりて鎔鑄せられたり。然れども一度び石炭坑の發掘せらるゝや、製鐵事業は頓に勃興し、諸種の工業亦是に伴うて長足の進步を爲しぬ。一千八百十五年に於ける安全燈の發明、一千八百四十二年に於ける蒸汽鎚の發明、亦何れも製鐵事業に關聯して爲されたり。奈破翁一世と共に十九世紀文明の大立物たる蒸汽機關も亦主として鐵と石炭とによりて運轉し得らるゝ也。

二　蒸汽と電氣

十八世紀に於ては水車風車の外に人力を省くべき器械は知られざりき。ワット

と結合し、全體の調和の爲に讓步協力するの傾向を生じ來れり。

美術が文學の如く國民的特性を發現したることも十九世紀美術の著明なる一現象也。而して是の美術に於ける國民主義の發達を促がしたる有力なる動機が奈破翁の征服及び其後に來れる國民的自覺にあることも、亦注意すべき事實なり。今日に於ては佛、獨、英、蘭、日、國民的趣味の上に各〻其の特殊の樣風を具ふ。政治上に於けるが如く、文藝の上にも亦極東問題あり。是の問題の解釋に當りつゝあるものは日本人なり。

第九章　物質的進步

一　物質的文明の三尊(綿、鐵、石炭)

今世紀に於ける物質的進步は、過去二千年の文明を嘲笑せり。幾多の自然力は人類の配下に入り來れり。人は其の馬を使ふが如く、其の蒸汽と電氣とを使用し得ることゝなれり。富は驚くべく增加せり、交通の利便は地球の距離を縮めたり。凡そ這般の進步は三種の物質によりて成されたるを見る綿、鐵、石炭、是れ也。

相の通性を沒するとは、共に近代主義の弊なり。

近代主義が國民的もしくは人種的傾向を表示するに及びて、文學には亦國民主義あるを見る。ホヰツトマンは『ヤンキー』の理想を裡面より描けるもの、キップリングは英吉利の國民精神を表面より現はせるもの、共に傾向文學を代表す。佛のゾラ、魯のトルストイ、北歐のイブセン、亦然り、獨のズーデルマン、ハウプトマン亦然り。

美術も亦文學と同一の軌道を走りたり。今世紀の初めに於ける歷史書の著しき發達は、即ち文學上の中世主義に較ぶべきものなりき。自然科學の發達を促がしたる同一の精神は、寫實主義となりて美術の上に現はれ、個相の描寫を以て藝術の極致となすの風起る。佛の印象派は是の傾向の最近の發達を示せり。形似の眞に逼らむことを力めて、其の內想の貧しきを致し、若しくは其力の一部に偏局して全躰の調和を顧みざるに及ぶや、茲に寫實主義の弊生ず。

私人の贅澤品漸く廢れ、一般人民の感興を共にし得べき公共的美術の漸く發達し來れるは、今世紀の一特徵也。所謂紀念美術と名けらるゝものゝ如き、是れなり。是と同時に建築興れり。十六世紀以降個々分立したる彫刻繪畫は、茲に再び建築

代は兎も角も過ぎたるが如し、學術界の專制君主たりし哲學は如何なる點に於て是と折合ふべきや。倫理、藝術、宗教に關する學術は、今や漸く國民的特色を帶び來らむとす、是れ即ち學術界に於ける國民主義の發達也。此の國民主義と彼の民主主義と、學術上に於て如何に調和し、如何に結合せらるべきや、是れ今後の問題也。

二　文藝

文學は抽象の理論をたどりて進み得べきものに非ず、其の進步の前程には具體の理想を要す。其の故に佛蘭西革命をして民主を理想とせしめたる同一の傾向は、十九世紀の文藝をして先づ中世を理想とせしめたりき。中世主義は十八世紀の形式、方便、唯理の主義に對して、自然と自由とを主張したる文學界の革命なり。然れども、中世主義は、一步を進むれば近世主義とならざるを得ず。近世主義は形式に於ては寫實を尙び、內容に於ては個相を重ず。自然科學の發達は疑もなく藝術上の理想を變更せり。幾多の詩人は是の過渡期に際して煩悶せり。テニゾンが前後の『ロックスレー・ホール』の如きは、其の一好適例ならむ。醇化を解すると、個

も想半に過ぎむ也。

自然科學の發達は、精神科學の上にも少からざる影響を及ぼしたり、是れ特に記せざるべからず。哲學者の中には、自然科學の侵略に對して、自家の領域を保ち得べきや、否やを危みたる者すらありき。心理學の如きは先づ以て革命に遭遇せり、從來の唯理的方法は佛蘭西の貴族の如く放逐せられ、數學、生理學、物理學等の平民的方法によりて建設せられむとせり。倫理學に於ても、政治上の民主々義に相當する功利主義は、ベンサム、ミル、スペンセル等の煽揚によりて一擧して斯學の一大勢力となりぬ。革命の反動は學術上にも是れ有り、然れども其の大勢に到ては儼として動かすべからざるものあり。古風なる純理哲學の如きは、たゞ〳〵國民的僻性として、嗜好の一に加へらるゝことゝなりぬ。

自然科學の齎らせる革命は啻に哲學のみならず、又宗教、藝術の上にまで及びぬ。宗教家は分光鏡の試驗の結果に其の神學を適はせむが爲に少からず苦心せり。彼は是が爲に原始宗教の最も貴き教義を犧牲に供しぬ。是の學術上の民主々義は那邊まで其の革命を續けむとするや。ギヨチンの時

ズの開きたる新時期は是の一百年間に於て見擬ふばかりに開發せられたり。海王星を初めとして多くの未知の世界は紹介せられたり。分光器の發明ありてより、天體の性質は手に取る如く說明せらるゝをとなれり。星霧說は哲學者の宇宙論よりも信ずべきものとなりぬ。物理學は啻にエネルギー不滅の大原則によりて、確乎不拔の根底を作りたるのみならず、瓦斯の動力的理論によりて物質內部の搆造に關する前人未發の知識を開拓せり。若し夫れ、レントゲン氏のX放散線の如きに至ては、『アラビアン・ナイト』の奇異譚を背後に瞠若たらしむるに足る。而して是の種の新事實の發見に伴へる社會の物質的進步は更に驚くべきものあり。化學の進步も決して物理學に讓らず。分光解拆と週期律とによりて幾多新元素の發見せられたるの一事を以てするも、十九世紀は優に學術上の貢獻に誇るに足らむ。解剖學は、十九世紀の新科學なりと云ふも差支無し。啻に細胞に關する研究の發達せるのみならず、キルヒョウ氏が是を醫學に應用して、所謂細胞病理學を組織せるが如きは、斯學の面目を一變したる事實也。科學の進步は常に相待なり。生物、博物、地學等に關して玆に言ふまでも無かるべし。一個ダルヰンの名を指す

アリアン人の勢力範圍の擴張は、十九世紀の一大事實なること、幷に是の擴張には常に文明の征服伴へることは、茲に述べたるが如し。然れども今は歐洲文明流布の初期に屬す。そが果して如何なる點まで他人種、他國民の文明を改造し得べきかは、今日以後の問題に屬す。鐵道電信は世界を征服するを得べし、然れども國民的精神は容易に外來の勢力に屈せざる也。容易に外來の勢力に屈するものは、是れ其の人種、其の國民の既に精神的に滅亡し居ることを證する也。摸倣時代は畢竟自覺時代に到着する準備期に外ならず。歐洲文明は、今日に於て尙ほ未だ其の世界的征服を誇稱するを得ず。健全なる國民のアリアン人種以外にも存するものあるを覺悟せざるべからず。

第八章　學術及び文藝

一　學術

十九世紀の理想たる民主々義の學術の上に現はれたるものを自然科學と爲す。自然科學の進步は即ち十九世紀の學術史也。天文學に於ては、ラグランヂ、ラプラー

一億五千磅に達せるの一事を擧ぐれば即ち足る。西伯利亞も亦魯領に入りてより頓に其面目を改めぬ。一百萬方哩の面積は今や黑龍江の水路境域となり、南部西伯利亞の深林は開闢以來初めて斧斤の響を聞き、バイカル湖畔の大鑛坑は方に採掘せられ、一萬哩に近き世界第一の鐵道は將に露國々境より浦鹽斯德、旅順まで北方亞細亞の大廣原を横斷せむとす。中央亞細亞の諸地も亦英露の司配の下に長足の進歩を爲せり。

保守主義の化身と稱せらるゝ支那帝國も、遂に歐洲文明の影響以外に立つ能はざりき。二十年前に於てすら、外國貿易は既に五千萬磅に達し、二十二の開港場に歐洲人の傭使せられ居るもの四百四十人ありき。日清戰爭以後、歐化主義の勢力亦大に加はり、數百人の留學生は歐洲及び日本に派遣せられ、北京大學は英語を用ひつゝあり。今後の趨勢略ゞ察すべきものあらむ。若し夫れ日本が歐洲文明の輸入によりて如何の影響を受けしかは、玆に說く迄も無き事也。

四　文明競爭の將來

牧師なりき、一千八百四十年、喜望峯を出發し、死に至るまで三十三年の間南部阿弗利加の蠻地を跋渉せり。其の久しく歸らざるや、紐育ヘラルドはスタンレーに囑托して、搜索の途に上らしむ。スタンレーはウジヾと稱する處に於て、病耗けたる一歐人に遇ひ、其のリビングストンなるを確めぬ。然れども彼はスタンレーの勸告を斥けて歸國することを肯ぜざりき。スタンレーの後に遣はされたるカメロンは、リビングストンの從者が其の主人の屍體を擔ひ來るに遇ひて是を倫敦に輸送せり。阿弗利加の內地は是の如き幾多の義人の力によりて首尾好く探撿せられぬ。今や『暗黑大陸』は過去の名稱に過ぎざることゝなれり。外部阿弗利加の多くの部分は歐洲文明の平均の程度を現せり。近時南阿共和國が二十萬の英兵に對抗して多く遜色無きが如きは、其の好適例として見るを得む。

三　亞細亞

亞細亞に至ては、歐洲文明の勢力の更に著大なるものあり。印度が英吉利の司配の下に驚くべき進歩を爲したるは、茲に言ふまでも無し。其の貿易が每歲殆ど

てより一層迅速なる發達を爲せり。北米合衆國は建國以來、僅に百二十餘年に過ぎずと雖も、其物質上の繁榮は夙に世界の耳目を驚かせり。南米に於ける西班牙の植民地も今世紀の初めに於て獨立せり。其諸國は天然狀態の爲に比較的に發達せずと雖も、而かも伯刺西帝國のみにても今日既に六千哩以上の鐵道あり。一千八百六十二年には一尺の鐵道も無かりし墨西其は、今日に於ては既に五千哩以上の延長線を有せり。物質的文明の後に精神的文明來る、是等諸邦の今後の發達想ひ見るべきものあり。若し夫れ阿弗利加內部の探撿に至ては、十九世紀史の永く後世に誇り得べき所也。

二　阿弗利加

亞弗利加探撿は十八世紀の末年より絕えず歐洲冒險家の注意する所なりき。マンゴー、パルクが蘇丹探檢より、スピーク、及びグラントがヸクトリア・ニャンザ湖の命名に至るまで、幾多の勇士は是の事業の爲に盡瘁せり。其の最も著名なるものをリビングストン及びスタンレーの探撿と爲す。リビングストンは蘇格蘭の一

れを默認せり。彼れが是の默認も亦東洋平和の天職に本きて爲されたる者なる乎。爭はざる所に平和あり是れ彼が其天職として維持せむと誓ひたる『平和』なる乎。東海の雲行日に急にして、列國の利害亦日に新也。日本は進で朝鮮に據らむ乎、退て對島海峽の領域を守らむ乎、抑も朝鮮を扶翼して歐洲の白耳義たらしめむ乎。這般の事項は恐らくは二十世紀史上半部の一節として記述せらるゝ時あらむ。

第七章　歐洲文明の普及

一　亞米利加

アリアン人種は、啻に兵力に於てのみならず、又其の文明の競爭に於て漸く世界を征服せり。地珠上の人種國民、一にして足らずと雖も、今世紀に於て歐州文明の影響を受けざるは無し。

世界の大部分は阿弗利加の内部を除くの外、十九世紀以前に於て既に開拓せられ、英、葡、西、蘭、佛諸邦の人民は各〻地球上の各部に植民地を有せしが、今世紀に入り

平和の維持者たるにあり、極東の平和を維持すとは、即ち極東の現狀を維持する事なり。是を以て極東現狀の破壞を須要とする魯國の南下に對して、おのづから反對の地位を取らざるべからず。『日魯開戰』てふ套語は、是の反對の將來を豫想せるものに外ならず。」

然ども將來は暫く言はず、日本は今日まで如何に其の天職を盡し得たりやは過去の事實に屬す。千八百九十四五年に於ける日清戰爭は明に是の天職の自覺に本きて戰はれたり。何となれば清國の暴慢に對して朝鮮の獨立を扶翼するは、東洋平和に必要なる事と思惟せられたれば也。日本は支那に勝てり、遼東半島は將に割讓せられむとせり。而して是と同時に三國干渉は興りたり。是の干渉の魯國の方寸に出でたるは言ふまでも無し。スラヴ南下の要衝たる遼東が、日本に占領せらるゝは魯にとりては是上も無き不利益なれば也。日本は東洋平和の爲に已むべからずとして遼東を還附せり。彼は是の屈辱をも尙ほ其の天職の名によりて甘受せり。然れども、東洋平和の爲めに還附せられたる遼東は、魯國代つて是を取りぬ。是れと前後して英は威海衛を占め、獨は膠州灣を領しぬ、而して日本は是

領に歸しぬ。魯の中央亞細亞に志を得ざるや、全力を西伯利亞經營に盡し、東半球の上北部を横斷して黑龍江畔及び樺太連島より、直に支那、朝鮮、日本の背後を衝きぬ。是に於てか、チュラニアン人種の最後の國家たる支那、朝鮮、日本はアリアン人種の爲に一大包圍攻撃を行はれたるの觀あり。是を人種競爭として見たる極東問題の概略と爲す。

二　極東問題の現在（日本と魯西亞）

極東問題の原動者は魯西亞也。魯西亞の野心は那邊にまで擴がれるかは、何人も明言する能はざる所なれども、其の野心あるは明也。是の野心が少くとも日本海北沿岸の主權者たるに於て、初めて滿足せらるべき事も亦明也。是の計畫は現狀の破壞を須要とす。是に於て歐亞の衝突遂に免るべからず、而してチュラニアンの勢力を代表して是の衝突の局に當り居るものを日本と爲す。

日本が世界歷史中の一國として目覺めたる時は、即ちチュラニアン人種が歐亞衝突に於ける其の代表者として彼を要したる時なり。是を以て彼れの天職は極東

ン人種の攻勢時代なりき。東羅馬帝國と回教國との衰頽に乘じて、エルサレムを占領し、七回の十字軍を撃退して遂に君士坦丁を陷落し、其の聖ソフヰアの塔上に半月旗を樹てたるものは、已にチュラニアンの代表者たる土耳其人なりき。十六世紀以後、是の人種の態度は漸く一轉せり。ソリマン帝より伯林條約に到るまでは土耳其衰頽の歴史也。匈利牙は土耳其以外に於てチュラニアン人種が歐洲に樹立したる唯一の國家也。然れどもコッスートの義戰も墺地利の束縛を脱する能はず、中世紀に於けるマジャルの遺業、永くアリアン人種の足下に仆れ畢んぬ。

アリアン人は歐羅巴に於てチュラニアンを屏息せしめたるのみにては甘心せざる也。彼等は權力平均の必要上、暫く土耳其を歐洲の一角に殘し置き、漸く歩武を進めてチュラニアンの本土たる東方亞細亞に干渉し初めたり。埃及先づ其の衝に當りて、アラビー・パシャ國命を懷いて斃れ、英露各々中央亞細亞を分割し、南洋諸島亦多く血らずしてアリアン人の正朔を奉ぜり。印度既に久しく起たず、緬甸亦國を爲さず、西力東漸して將に馬來半島の海角を越えむとす、是に於て清國は佛に對して安南を爭へども勝たず、暹羅亦是と競はず、湄公河東岸の地、安南を併せて遂に佛

に望むべかざるむ。土耳其領域の基督教國民が或方法によりて幾多の獨立國民となることは強ちに期待し得べからざるに非ず。而して是等のスラブ國民がバルカン同盟を形成して魯澳の南下に備ふることも亦想像し難きに非ず。然れども魯澳果して是を默過すべきや否やは疑問也。兎に角其の方法の如何は暫く措き、土耳其が歐洲以外に驅逐せらるゝの日は早晩來るべきが如し。東方問題は其時に到て始めて完全に解釋せらるべき也。

第六章　極東問題（歐亞の衝突）

一　人種競爭として見たる極東問題

土耳其は歐羅巴の亞細亞也、故に東方問題は歐羅巴に於ける歐亞の衝突也。伯林條約が是の問題の解釋を延期するや、歐亞の衝突點は歐洲の東端より亞細亞の東端に移りぬ。極東問題是れ也。

極東問題は、東方問題の如く其根本は人種競爭、六百年以降繼續せられたるチュラニアンとアリアンとの人種競爭の一節に過ぎざる也。十五世紀以前はチュラニア

是の如くにして、彼はヘルツェゴビナの虐殺を好機會とし、土耳其に對して開戰を布告せり。魯土戰爭是に於てか起る。

是の戰爭に於て魯國は十分の勝利を得たり。土耳其が聖ステファノの媾和條約に於て魯國に讓歩したる所のものは實に莫大なりき。若し英相ビコンスフヰールドの抗議微りせば、魯國はバルカン半島の主人となりしならん。

英國の首相ビコンスフヰールドは是の土耳其の讓歩を以て歐洲の平和を害するものと爲し、聖ステファノ條約の全部を破毀して列國の協商に委ぬべきを主張せり。一千八百七十八年に於ける伯林會議は是の主張に本づきて開かれぬ。英國の希望は首尾貫徹せられ、魯西亞は是の戰勝の結果として殆ど別に得る所無く、其の南下の道は茲に杜絶せられぬ。

東方問題は、伯林條約の締結と共に一段落を告げたりと雖も、未だ最後の解釋に到着したるに非ず。其今後の成行は色々に想像せらるゝを得べし。魯西亞にして千八百七十七八年の魯土戰爭を反覆せむか、ボスフォラス灣頭の半月旗を撤却するは易々たらむ、唯列國の利害にして伯林條約の當時に異ならざる以上は、是事遂

らむ。クリミア戰爭は魯西亞の南進に對して手痛き打擊なりき、然れども彼得大帝以來の魯西亞の國是は、容易に挫くべくもあらず。東方問題の起る已むを得ざる也。

二　東方問題の解釋

『君士坦丁を魯國の首府にせよ』との所謂彼得大帝の遺詔が事實なりしや、否やは審ならず、唯最も明なるは是の事が現に魯國の國是たる一事なり。クリミヤ戰爭の爲に遮斷せられたる魯西亞は、虎視耿々として新に機の乘ずべきを窺へり、乘ずべき機は遂に來りぬ。一千八百七十五年、ヘルツェゴビナに於ける基督敎徒が土耳其人に虐殺せられたる事是れ也。

往時神聖羅馬帝國が羅馬帝國の正嫡と稱したるが如く、魯西亞は東羅馬帝國の繼續者を以て自ら居れる者也。是の故に回敎國に於ける希臘敎徒に對してはおのづから深痛なる同情を有し、其の迫害に復讐するは彼にとりては神聖十字軍に外ならざりき。況や又是が爲に其の政治的野心の同時に滿足せらるべきをや。

の顚覆を理想として蜂の如く起りぬ、爆裂彈は帝自らの頭上に下りたり。歷山三世其後を受けて嚴に民黨を迫害し、現帝ニコラス二世又其後を受けて今日に到りぬ。帝は寧ろ自由主義の人ならむも、其の國是は多く前代と異なる所無し。要するに、十九世紀は尙ほ未だ魯西亞に曙けざる也。

土耳其に至ては更に甚しきものあり。彼は十九世紀の歐羅巴における中世紀の國家也。而して其の人種に於ても、其の國體に於ても、言語に於ても、宗敎に於ても、其他一切の社會組織に於ても彼は全く東洋的也。東方歐羅巴の二百年來の歷史的宿題は、如何にして是の東洋的國家を歐洲外に驅逐し得べきかにあり。其の長所が侵略にのみ存する土耳其人は、守成の地に立つに及びて失敗のみ引續けり。カルロキッツの條約(一千六百九十八年)によりて彼は匂牙利の獨立を是認せり。一千八百三十一年より三十三年までの戰爭の結果として、希臘は彼れの羈絆を離れて獨立せり。ルマニア、セルキア、ブルガリア等、バルカン半島の諸邦も引續きて分離せり。魯西亞は愈々南進せり。若しクリミア戰爭に於ける英佛同盟軍の反抗微りせば、一千八百五十六年に於て、君士坦丁の半月旗は旣に撤却せられたりし、

一　魯西亞と土耳其

『世界の帝都』たる君士坦丁の所有者を土耳其と爲す。土耳其の是を有するは實國力の強きが爲に非ず、唯列強互に牽制して、一國の所有に歸するを肯せざるが爲のみ。蘇西の地峽は地中海の咽喉也、而して埃及是が所有者たり。非アリアン人種たる土耳其人は、早晩歐洲より驅逐せられざるべからず、唯歐洲列國が如何に是を處分すべきかは疑問也。東方問題是に於てか起る。

東方問題の直接關係者は、魯西亞と土耳其と也。東方問題を知らむと欲せば、先づ是の二國を知らざるべからず。

專制武斷、希臘教、彼得大帝、帝王の暗殺、虛無黨、是等は魯西亞てふ名稱と離るべからざる聯想也。魯西亞の文明は中部歐洲に較べて一百年は後れたり。民主々義の理想は尙ほ是國に生育せず、『貴族、聖教、國家』とは一千八百五十五年に死せるニコラス一世の套語なりき。歷山二世の代に至りて、民主々義は漸く其の萌芽を發したり。ラブロフを代表者とせる自由黨、バクニンを領袖とせる虛無黨は、旣成社會

被りたりき。彼は三期の革命の間に一度び王國となり、二度び帝國となり、三度び共和國となりぬ。獨逸と以太利とは是間に統一と獨立とを得、澳地利は殆ど全く改造せられ、中部歐羅巴は一百年前に比して其の面目を一新せり。是の變遷を貫徹せる二大理想が民主々義と國民主義との發達にあること、既に說けるが如し。然れども歐羅巴の中に佛蘭西革命の直接の影響を受けずして、別種の發達を爲したる二大邦國あるを遺るべからず。何ぞや、英吉利と魯西亞と是れ也。

今世紀に於ける英吉利の歷史は、一言すれば平和の革命也。社會の改造に力ありしものは大陸諸國に於けるが如く銃劍にあらずして、言論なりき。唯海上に越在せるを以て國際上の關係に於て大陸諸國の如き歷史上の意義を有せざる也。若し夫れ魯西亞は、一千八百七十八年の伯林條約までは絕えず列國と交涉し、常に其主要なる一勢力となれり、而して所謂東方問題の主格者としては、其の地理的關係の更に廣大なるものあり。是れ一言無かるべからず。

第五章　東方問題(東部歐羅巴の改造)

佛蘭西たるもの、亦是の三國同盟に對抗して何等かの準備を作さゞるべからず。恰も好し、魯西亞は伯林條約に不滿を抱きて中部歐羅巴の關係を離れたり、而して其の原因は墺地利が魯土戰爭に關して漁夫の利を占めたるにあり。是れ佛蘭西にとりて乘ずべきの機也。二國同盟は當時に於て默契せられしならむか。近時兩國の艦隊互に往來して熱心なる歡迎を交換したるが如き、魯帝の親ら巴里を訪へるが如き、佛蘭西大統領の魯西亞に赴きて是に答禮したるが如き、愈々兩國の近親を加へたるものゝ如し。其の間の條約の如何なる點まで進行し居るやは、局外者の窺知し難き所なりと雖も、三國同盟に對する二國同盟の存在は、今日までは炳焉たる事實なりと謂はざるべからず。是れ一面より見れば、現狀破壞の準備にして、他面より見れば現狀維持の方便也。

四　結論

バスチユの破壞を以て初まれる革命は、中部歐羅巴の改造と三國同盟とに於て、最終の段落を告げたるが如し。佛蘭西は常に其先驅にして、随て又最大の影響を

王、キクトル・エマニュエル是れ也。

三　三國同盟(改造後の平和維持策)

ナポレオン三世の沒落後に建設せられたる共和政府は、一千八百七十年に於ける城下の盟を以て無上の國辱と爲し、何時かは報復の機運に達せむことを期待せり。獨逸、澳地利、以太利の間に締結せられたる所謂三國同盟は、是の佛蘭西の復仇を防遏せむが爲に生起せる者也。三國同盟の由來は極めて簡單也。老猾なるビスマルクは普佛戰爭の終ると同時に其の宿仇たる澳地利の歡心を求めたり。凋弊せる澳地利は到底是の强盛なる新興國に對抗する能はざるを以て、亦歡で是を迎へたり。ビスマルクは次に以太利を味方にせむが爲に、キクトル・エマニュエルに左袒して法王の權力に反對する旨を公告せり、是れ以太利の最も憂ふる所の法王の處分に存するを熟知すれば也。以太利は首尾好く味方となりぬ。一千八百七十八年の伯林會議に於て魯西亞は獨澳と分離したりと雖も、ビスマルクは尙ほ獨澳以の間に三國同盟を締結するを得たりき。

待せられたる聯邦統一は茲に見事に實現せられたり。而して是統一を固めたるものは普佛戰爭の砲火と流血となりき。

伊太利の統一も亦十九世紀史の最も趣味ある局面也。是の統一の中心となりたるものは言ふまでもなく、サルヂニア也。サルヂニアの以太利に於けるは猶ほ普魯西の獨逸に於けるが如し。獨逸の普魯西なるが如く、カブールは以太利のビスマルクなりき。彼はクリミヤ戰爭に際して同盟軍に加はり、一は以て英佛の歡心を買ひ、一は以て自國の軍隊を練り、徐ろに機の到るを窺へり。一千八百五十九年、彼は佛蘭西と同盟し、澳地利を驅逐して先づ獨立の地歩を作り、次に普魯西と同盟して澳地利の殘領たるヱ子チアを取り、ナポレオンの敗後に至りて遂に羅馬を取り、茲にダンテ以來、伊太利人の理想なる半島統一の事業を完成せり。千八百七十一年以後の以太利は、最早や單に地理的名稱に非ざる也、其人種と國語と制度とを同じうせる同胞は、四百年來の離別の後、再び一堂に握手せり。以太利人は自由と獨立との爲に戰ひたる彼等の勇士に向て謝する所無かるべからず。勇士とは誰ぞ、曰く、政治家カブール、曰く、預言者マヂニー、曰く、戰士ガリバルヂー、曰く

二　獨逸及伊太利の統一

第三革命の一大事實として記すべきは獨逸聯邦の統一也。キルヘルム一世の普魯西王の位に即くや、普魯西の運命は軍隊の上に懸れることを看破せり。彼れの拔擢せる宰相ビスマルクは能く王の志を體認し、議院を眼中に置かずして擅に軍備を擴張せり。彼れが議會の批難に對する一語は、永く彼れの政畧の套語となれり、曰く『方今天下の事唯血と鐵とによりて爲さるべきのみ』と。ビスマルクは是の鐵血政略を用ひて、先づ和蘭を威赫し、シレスキヒ・ホルスタイン事件を機會として澳地利の容喙を杜絕し、所謂る『七週戰爭』に於て國內の不平を平げ、其實力に於て漸く佛蘭西を超駕せり。彼は是の如くにして首尾好く小ナポレオンの嫉妬と野心とを挑發し、交戰二個月にして其帝國を破壞せり。是の大勝利は獨逸聯邦の統一を確定するの力ありき。セダンに小ナポレオンを擒にしたる翌年一月、佛京エルサイユの宮殿に於て普王キルヘルムは公然獨逸皇帝の金冠を戴けり。ビスマルクの鐵血政畧是に至て其功を奏し、澳地利は全く獨逸より驅逐せられ、久しく期

其の異なるは大奈破翁の代りに小ナポレオンあるのみ」と。然れども國民の是の事實を看破せるは遙かに後年の事なりき。彼等は小ナポレオンが初期の成功に心醉して、大奈破翁の帝國眞に復活せりと信せし也。氣早なる佛蘭西人が是の如く信せしは洵に無理ならぬことなりき。クリミア戰爭に魯を挫き、伊太利戰爭に澳を倒したる頃の彼れが權力は實に目覺ましきものなりき。一千八百五十九年頃に於ける佛蘭西は、恰も一千八百七十年後の普魯西にも較ぶべかりき。然れども小ナポレオンは遂に小ナポレオンたるを免れざりき。一度び北米戰爭の干渉に失敗し、二度び墨西其に失敗し三度び波蘭土政略に失敗し、而して隣邦普魯西の勢力隆々として增進するを見、更に國內に於ける自己の不人望の漸く高まるを見るに及びては、彼れの煩悶は其限を知らざりき。彼れ一方に於ては憲法を改正して議會の歡心を求め、他方に向ては普魯西と開戰し、其の勝利によりて自家の權勢を固めむとせり。然れども普魯西には大奈破翁をも恐れしむべきビスマルクありき。是の如くにして二個月の後、彼はセダンの一囚人となり、新共和國は預言者の瓢の如く一夜の中に巴里に建設せられぬ。

低廉なる代價なりと謂はざるべからず。

第四章　第三革命（中部歐羅巴の改造）

一　小ナポレオンの沒落、共和國の建設

一千八百四十八年の第二革命は專制主義に對する一般人民の反抗なりき。然れども是の反抗には一定の指導と適當の訓練とを缺きしを以て、比較的に鞏固なる舊組織を破壞するの力無かりき、是れ其の失敗せる所以也。第三の革命は全然別種の方法に出でたり。多くの國にありては、組織ある政府は烏合の一揆に代りて革命の前驅となれり。其の確乎たる目的と充實せる權力とは首尾好く是の事業を果したり。獨逸と伊太利とは是が爲に統一的國民となれり、澳地利は是が爲に改造せられたり、佛蘭西は是が爲に再び共和國と爲れり。而して是の中部歐羅巴の改造の動因となれるものは佛蘭西なりき。

佛蘭西は、前章に說けるが如く、ナポレオン三世の下に再び帝國と爲れり。ユゴーの一言最も好く是の帝國の特質を現はせり。曰く『佛蘭西は帝政に戾りたり、唯

望せり而して是の希望は憲法の認めざる所なるを以て、彼は玆に一大決心を爲し、憲法改正の動議に於て三分の二の味方を得むが爲に一夜反對黨に『クー・デター』を施しぬ。全國民が是の不意打に呆然たる間に、彼は强盛なる軍隊を以て大虐殺を巴里街上に行ひぬ。從來彼を嘲笑したる氣輕なる巴里人も、一千八百五十一年十二月以降は決して彼を笑ふことを爲さゞりき。事玆に至れば寧ろ易々たるのみ、議院は滿場一致を以て彼の行動を是認せり、而して間も無く佛蘭西皇帝の金冠は彼れの頭上に冠らせられぬ。第二共和國是に於て滅ぶ。

六　第二革命の結果

第二革命は是の如くにして終りたり。其政治上の結果を擧ぐれば、普魯西其他一國の憲法に過ぎざれども、其の社會上に於て平民の權利を伸張し、民主自由の觀念を普及したるは、其の顯著なる功績と爲す。第二革命は、民主々義と國民主義とが如何にして到達せらるべきかの方法に就いて、最も苦き經驗なりき。然れども十九世紀文明の最終の發達が是の經驗によりて準備せられしことを想へば、寧ろ

巴里に於ける二月革命の傳はれる頃には『統一以太利』の理想は眼前にありしが如く思はれたり。然れども澳地利は名將テデッキーの力によりて間も無く東方伊太利を回復し、將に羅馬を衝かむとす。是時思ひ懸なくも、佛の大統領ルイ・ナポレオンは恩人の假面を被りて以太利に亂入し、澳地利に先ちて羅馬を占領せり。マチニー、ガリバルヂー等は統一の日、尙ほ遠きを望みて落膽せしが、尙は是によりて三個の眞理を悟りぬ。一に曰くサルヂニア王は伊太利中興の君主として信頼すべきもの也、二に曰く、外國の勢力は凡て信頼すべからず、三に曰く、澳地利の勢力、半島内に存する間は、伊太利の獨立望むべからず。是の如くにして、彼等の失敗は尙ほ成功の半ばなりき。

五　第二革命の反動、ナポレオン三世

第二革命の結果として佛蘭西共和國の大統領に擧げられたるルイ・ナポレオンは、同時に是の革命の反動の代表者なりき。彼は國民が彼を與みし易しと侮れるを奇貨として、潜に其の野心を涵養せり。彼は任期滿つるに臨みて其の再任を希

獨逸聯邦の統一は茲に後年の希望に屬しぬ。而して澳地利の專制主義には魯國の後援あることを遺るべからず。澳地利の領域には由來幾多の異人種を包含せり、匈牙利に於けるマジャールの如きは、アリアン人種の先天的反對者たるチュラニアン人種に屬する者也。巴里に於ける二月革命の聲は、匈牙利人の獨立布告となりて反響せられぬ、コッスート實に是が領袖たり。是に於て澳地利は援を魯國に求めぬ、魯國は是を甘諾せり、是を甘諾せるは匈牙利の分離は即ち直に波蘭土の分離を意味すべきを恐れたれば也。是の如くにして獨立軍は滅び、コッスートは出奔し、中部歐洲は再びメッテルニヒが鐵蹄が下に威服せられぬ。

若し夫れ以太利は、メッテルニヒの言へる如く、一の地理的名稱に過ぎざりき。然れども『統一以太利』てふ觀念はカブール、マチニーの理想たる如く、ダンテ、ペトラルカ、マキャベリーの理想なりき。而かも十九世紀に於て其の國民的觀念の特に勃興したるは奈破翁の征服の結果に歸せざるべからず。然れども維納會議を主宰せしメッテルニヒの眼には『地理的名稱』に過ぎざりしを以て、其の大部分は依然として澳地利に隷屬せり。『カルボナリー』是に反して先づ興り『青年以太利』是に次ぎて起り

四　佛蘭西以外に於ける第二革命

第一革命は佛蘭西の特有物なりしが、第二革命は全歐洲の共有物なりき。巴里に於ける二月革命は、枯野に落ちたる一把の松火の如く、其火焔は見る〳〵大陸の四方に擴がれり。第一革命は寧ろ列國の嫌惡を買ひたりしが、一千八百四十八年の數ヶ月は俄然として全歐洲の政治的狀態を一變せり。

維納會議の議決は獨逸聯邦にとりて甚だ滿足なるものに非ざりき。彼等は統一を希望せり然れども普澳兩國の嫉視は是の希望を妨げたり。彼等は憲法を希望せり、然れども王侯麾下の銃劔は是の希望を貫かむが爲には餘りに強かりき。是の如くにして空望の中に歲月を過すこと三十年、而して巴里に於ける二月革命の飛報は忽ち暴風の如く傳はれり、革命は原燎の如く瞬く間に擴がれり。到る處の大都會に民權の爲に起てる徒黨あり、政府は其勢に避易して到る處に自由と民權とを認容せり。普魯西王は憲法を公布して聯邦統一の爲に盡すべきを誓ひたり。唯澳地利にありて、維納大學生を先鋒とせる民黨の一揆は脆くも制服せられ、

貴族とのみ。是の參政權を得むが爲にバスチユを破壞し、ルイ十六世を斷頭臺に上したる國民、如何ぞ是の專橫を默視して已むべけんや。是に於て民主黨はチェール、ギゾーを統領とせる一團體を組織し、一千八百四十八年二月華盛頓の誕生日をトして一大會を催し、一擧してルイ・フヰリップの政府を顚覆し、新に憲法を制定して共和國と爲し、ルイ・ナポレオンを選擧して大統領と爲す。ルイは大奈破翁の甥にして、當時は平凡他奇無き一鈍物と見做されたりき。是の一鈍物が俄に大統領の位地に上りたるは、一は大奈破翁に對する懷慕の情の其の甥に及べるが爲、一は鈍なるが故に、議會のまに〳〵左右すべしと想像せられたるが爲なりき。然れども佛蘭西人が失望すべき時は遠からずして來りぬ。チェール後に人に語りて曰く『佛蘭西人はルイ・ナポレオンに對して二個の誤解を抱けり。初めに彼を鈍物とせしは其一なり。終りに彼を英雄とせしは其二なり』と。

兎も角も、佛蘭西に於ける第一革命の反動は第二革命によりて掃蕩せられたり。一千八百四十八年は一千七百八十九年の正嫡なりき。

はず、國民は漸く奈破翁時代の强大と光榮とを懷慕し初めたり。チェールは其の歴史に於て、ベランヂエーは其の抒情詩に於て、奈破翁の下に働ける佛蘭西人の功業と名譽とを盛に讃美せり。マレンゴー、フリードランド、華德堡の老兵士は國民が追慕の情を新にせむが爲に、到る所に往年の閲歴を物語れり。奈破翁の肖像は東はフランダーより西はピレニーに至るまで、到る處農民の爐邊に懸けられたり。全國民は缺焉として齊しく懊惱する所あり『大奈破翁』てふ名は咒語の如く是の間に響き亘れり。ルイ・フヰリップは其地位を固めむが爲に、ボナパルト黨の歡心を買はむと欲し、英吉利と協議して奈破翁の遺骸を巴里に迎へ、盛大なる儀禮を盡して是を改葬せり。然れども此の改葬は益々奈破翁崇拜熱の熱度を高からしめたるの外、王及び其の朝廷に何の利する所無かりき。

兎角する内にフヰリップ王の最後は近きたり。王は時事の日に非なるを認め、選擧法を改めて頽勢を防遏せむとせり。是の新選擧法によれば、國民の選擧資格は、全國民を擧げて僅に三十萬の有資格者あるに過ぎざるまでに高かりき、是に於て國民の大多數は事實に於て參政の權を褫奪せられたり。議塲に連るものは富豪と

れ、革命の標章たる三色旗の代はりにブルボン王家の白旗は翻りぬ。ルイの死後シャール十世として王位に上りたるものは、即ち是の白旗軍の一統領なりき。然れども摸型的ブルボンとも稱すべきシャールの短き治世は、是の舊王族が到底十九世紀の支配者たるに適せざることを最も明に證明したるものなりき。彼は國民の委任を濫用し、議會の權限を無視せり。憲法違反者としての王の批難は國內に擴がれり。『バリカード』は直に巴里の街上に築かれたり、國民は『オテル、ド、キユ』の屋上より翻へる三色旗の懷かしきに喝采しぬ。王兵は城外に驅逐せられ、シャールは位を退けられ、オルレアンの傳統なるルイフヰリップ代て王位に上り、ブルボン王朝は再び玆に覆沒し畢矣。時は惟れ一千八百三十年。

一千八百三十年より四十八年に至る十八年の間、フヰリップはオルレアン王統の根據を固めむが爲に一方ならず苦心せり。而して是の苦心の中には多少の成功を齎せしものありしが、革命の機運は彼れの支配の下に何時しか熟せられたり、而して是が動因となれるものを大奈破翁に對する崇拜熱となす。薄弱なる立憲政治と、ブルボン、オルレアンの平凡なる王政とは浮氣なる佛蘭西人を永く滿足する能

公言して曰く、國家は知識ある人民を要せず、唯盲從に訓練せられたる臣下と官吏とを要するのみと。是の目的の爲には僧侶を用ふるに若くは無し、是を以て頑迷なる信仰は榮達に缺くべからざる資格となれり、同時に新教徒は迫害せられぬ。中部及び南部歐羅巴は是のメッテルニヒの强迫の下に一時の靜肅を保ちたり。然れども、第十九世紀の理想なる民主々義は、流石に澳地利の一宰相の力よりも强かりき。メッテルニヒにとりての得意時代は、即ち第二革命にとりての準備時代なりき。是間の消息を解せむとせば、先づ第二革命の火元たる佛蘭西に就いて說く所無かるべからず。

三 佛蘭西に於ける第一革命の反動

外國軍の銃劔によりて王位に上りたるルイ十八世も同盟軍の退去したる後は是非共國民の肩に倚らざるを得ず。是に於て憲法は發布せられ、佛蘭西は立憲王國となりぬ、然れども王と共に歸國したる王族貴族等は是に滿足せず、ルイを使嗾して專制君主國たるの準備として衛兵を組織せしむ。衛兵は首尾よく組織せら

の理想を打破するにあり。換言すれば歐洲列國を千七百八十九年以前の狀態に回復するにあり。是の目的は或程度に於て到達せられたり。日耳曼同盟の時機は尙ほ未だ熟せざりしが、是の會議の結果として普魯西と澳地利は革命以前の狀態に復したり。魯西亞は波蘭土を併せ、英吉利はマルタ島を得、瑞典は那威を收め、瑞西は改造せられ且つ擴張せられ、法王は其の舊土を復したり。而して是の復古運動の中心となれるものは澳地利の宰相メッテルニヒなりき。維納會議が專制主義の化身なるが如く、メッテルニヒは維納會議の化身なりき。第一革命に對する歐洲列國の反動を知らむと欲せば、メッテルニヒの政略を知るに如くは無し。

二　反動の化身、メッテルニヒ

『新にも就かず、舊にも復らず、唯ありし儘の事態を維持す』るは、メッテルニヒの大方針なりき。彼は是の方針を貫かむが爲には如何なる代價をも辭せざりき。獨逸列邦の首位に居り、以太利の支配者たる澳地利は、其の全力を假して彼れの政略を帮助せり。言論出版の自由は嚴に束縛せられ、普通敎育は杜絕せられたり。彼れ

伯の滅亡素より與て力ありしと雖も、其の根本の動機は人種的感情より生起せる國民主義の勃興に存せずむばあらず。而して是の人種的國民主義の興起せるは、奈破翁の征服に本かずむばあらず。是に依りて見れば佛蘭西革命は十九世紀文明の二大理想たる民主々義と國民主義との生母なりと謂ふべし。

即ち知る、佛蘭西革命は華德堡に於て擊破せられざりき。奈破翁の帝國は覆沒せり然れども十九世紀の生母たる佛蘭西革命は、其の嫡統たる民主々義と國民主義との發達の中に永遠の生命を保ちたり。奈破翁を仆したる歐洲列國も、終に佛蘭西革命の征服を免るゝ能はざりき。

第三章　第二革命(一千八百四十八年)

一　第一革命の反動、維納會議

然れども奈破翁の沒落と共に第一革命の反動は起りたり。是を代表する者を維納會議と爲す。

維納會議は專制主義の化身なりき。其の目的は全然第一革命(即ち佛蘭西革命)

西也。古き貴族は枯葉の如く捲き去られたり、教會も商團も各〻其特權を失ひ、凡ての佛蘭西人は同一法律の下に平等となれり。海陸軍人となる特權は貴族の手より奪ひ取られたり。是の弊風を根本的に打破したるは一伍長を總督に拔擢し、宿屋の給仕人をナポリ王に推薦したる奈破翁なりき。貴族僧侶に屬したる土地は國家の有となりて、弘く國民に貸與せられ、納稅の義務も亦全國を通じて一樣に爲されたり。社會の秩序整頓するに隨ひ、勞働社會の狀態亦漸く好良に赴けり。

佛蘭西以外の歐洲列國が被れる影響も亦小少ならざりき。白耳義、和蘭、以太利及び萊因河一帶の地方は若干年月の間佛蘭西の治下にありしを以て『奈破翁法』の下に封建制度の破壞せられ、平等的組織の制度せらるゝを親睹せり。是を以て奈破翁覆沒後、佛蘭西の支配を離れたる後にありても、永く是を德として其の封建時代の舊制度を回復することを爲さゝりき。特に獨逸にありては幾多の小侯伯は全く其の世襲の獨立を失ひ、茲に他日來るべき聯邦統一の地盤を造るを得たり。若し奈翁の戰爭徹せば、獨逸帝國の統一は永く見るべからざりしやも知る可らず。以太利も亦然り。獨逸の統一と以太利の獨立とは歐洲今世紀の二大事實也、小侯

にせり。天下何物か能く『恐怖時代』の慘劇に比すべきものあらむや。然れども是等は一時の弊のみ。舊文明の殘骸を粉韲して自由、平等の大義を天下に明にしたるの勳功に至ては、千秋萬歳凛として拔くべからず。

奈破翁は帝王なりき、然れども中世的の專制帝王には非ざりき。彼は飽迄民主的帝王なりき、彼は國民の輿望の上に帝冠を戴きし也。是點より見れば華德堡に於けるウェリントンの勝利は即はち近世の民主々義に對する中世的專制主義の勝利なりき。是を以て同盟軍が奈破翁の代りにブルボン王統を擁立したるは、即ち佛蘭西革命の流血を無視したる所爲なりき。一千七百七十九年以來、佛蘭西が歐洲列國の公敵たるは毫も怪むべきに非ず。當時英國に於ても、大陸諸國に於ても、主權者の思想を司配したるものは、多くは依然たる中世的專制主義に外ならざりければ也。然れども犧牲の血は無益に流れざりき。奈破翁は列國にとりて是迄も無き恩人なりき。十九世紀の文明は是の革命の源泉より湧き出でたる淸流なればなり。

試に是の革命の影響を略說せむか。其の最も顯著なるは言ふまでもなく佛蘭

及び北以太利の主人なるのみならず、其兄弟は南以太利並に和蘭に王たりき。西獨逸は全然彼の屬國にして、普魯西、澳地利、亦彼の足下に慴伏し、彼の所謂大陸制度に聯合して、英吉利に反對せしめられたり。ライプチヒの戰に萊因同盟の崩壞してより、彼れの勢力漸く振はず、一度びエルバに流され、幾もなく華德堡の一戰に敗れて再び聖ヘレナに流され、佛蘭西の核撤は玆に全く政治的舞臺を退きぬ。ルイ十八世は巴里に歸りて奈破翁の後を受け、佛蘭西革命は玆に全く其餘波を收めたり。

三　佛蘭西革命の結果

奈破翁の覆沒と共にブルボン王統は再び佛蘭西に君臨せり。然れどもルイ十八世を王位に迎へたるは同盟軍の銃劍にして國民の聲には非ざりき。佛蘭西革命の結果は、疑もなく其當初の理想たる自由、平等、博愛の觀念を歐洲の人心に樹立するを誤らざりき。若し一時の影響を以てすれば、是の革命は甚だ好望なるものに非ざりき。彼は敎育を破壞せり、宗敎を破壞せり、博愛の麾下に立ちて虐殺を恣

ず、其の爲すべき事をも忘れたり。斯くてナポレオン・ボナパルトの起つべき時は遂に來りぬ。

奈破翁は大なる際物師なりき。彼は初めは民黨を蹈臺にして兵權を握り、更に兵權を蹈臺にして民黨を壓制せり。一千七百九十九年の『クー、デター』以來、彼は遂に佛蘭西國の主權者となりぬ。是の如くにして、佛蘭西は僅々二十年の間に數百年間の羅馬史を復習せり。――王國は顚覆せられたり、共和政治は建設せられたり、而かも其の基礎の薄弱なるが爲に遂に野心ある一將軍の手裡に落ちぬ。奈破翁は正に是れ佛蘭西の核撒なりき。佛蘭西の核撒は永く共和國の統領を以て甘ずる者に非ざりき。彼れ、伊太利及び萊因河邊に於ける赫灼たる戰功を負て歸國するや、佛蘭西は事實に於て最早や共和國に非ざりき。核撒はルビコンを渡りたり、是に於て嘗て自由の爲に其世襲の王を犧牲にしたる國民は、今や湧くが如き歡呼を以てコルシカ島の一軍人の頭に帝冠を上せたり。『帝國萬歳』と『マルセーユズ』との奇異なる諧調は、久しくギロチンの響きに惱みたる國民の耳を樂ましめたり。一千八百七年に於て奈破翁の權力は其の絕頂に達したり。彼れは啻に全佛蘭西

路によりて當選せる大地主の集會に外ならず、言論出版の自由は束縛せられ、唯其弊の佛、澳、諸國の如く甚しからざるのみなりき。要するに特權ある敎會と、專制の政府と、驕傲奢侈を極めたる貴族と、菜色ある農民とは歐洲大陸の到る處にありき。

斯かる間に新思想は先づ氣早やなる佛蘭西人の間に動き初めたり。ヲルテールモンテスキュー、ルソー等の唱へたる自由、平等、博愛の主義は、更に斷頭器械の響きによりて說明せらるべき事となりぬ。佛蘭西革命、即是れ也。

二　其事情及び奈破翁

佛蘭西革命の狀況は玆に述ぶる遑無し。兎に角是の革命は人類の歷史に比類なき殘酷悲慘なるあらゆる事情に伴はれて其の步を進めたり。自由、平等、博愛に狂したる佛蘭西人は、今や其の行くべき道を忘れたり。彼等は、人類の惡德を化現せる一賣女をば、自由の女神として崇拜せり。新憲法は幾度びか發布せられたり、王は位を退けられて斷頭臺に上せられたり。自由の美はしき夢を望みたる佛蘭西人は却てギロチンの響に魘はれたり。彼等は行くべき道を忘れたるのみなら

『朕の後に洪水あらむ』とは、ルイ十五世の遺言として寧ろ聰明に過ぎたる程なりき。洪水は遺言の通りに來りたり、『恐怖時代』は其嫡王を斷頭臺に上せたり、殆ど二十年の間、佛蘭西國民は毎朝ギヤロチンの響に目覺めたり。是の如き結果に於て正當の報酬を求めたるルイ十四世時代の秕政は、想像するに餘りあるべし。佛蘭西宮庭の驕奢は言ふに及ばず、蛙の聲を鎭めむが爲に終夜貴族の城濠を掻き廻はさゞるべからざる農民ありき。國民は、國税を免れ居る僧侶をして其の黄金の珠數を爪繰らしめむが爲に、年々一億萬弗の賦金を納めざるべからざりき。

而して是の如きは獨りルイ十四世治下の佛蘭西のみならず、全歐洲を通じて腐敗せる舊文明の殘骸として見らるべきものなりき。神聖羅馬帝國と稱するものありと雖も、實は小獨立政府の覺束無き集合體に過ぎず。其の主腦とも見るべき普魯西も澳地利も是を統一する力無く、議會ありと雖も立法機關の幽靈に過ぎざりき。其議員等は、公使の椅子の色は赤と綠と何れか威嚴ありやと云ふが如き問題を一日の議案と爲し居れる有様なりき。當時の以太利は單に一個の地理上の名稱に過ぎず。英吉利も亦實際は少數貴族の寡人政治のみ、其の下院の如きも賄

なり。

中部歐洲の改造と同時に東部歐洲の改造も亦實行せられたり、所謂東方問題、即ち是れ也。歐洲の内事漸く鎮靜に赴くに及び、東西兩洋の接觸は玆に漸く世界の注意を惹起しぬ。其の重なる役者を日本と露西亞となす、所謂極東問題即ち是れ也。今世紀の終に於ける極東は獨り國際權力上の爭點なるのみならず、經濟、宗教、學藝等諸般の文明に對して漸く交涉及び競爭の舞臺たらむとせり、而して其の根本的動機となれるものは、即ちアリアンとチュラニアンとの間に於ける人種競爭に外ならず。

若し夫れ當今の大問題は、社會問題と國際問題とに歸着すべし。國際問題に關して最も危險なるアルサス、ロトリンゲン、君士坦丁、日本海の三地點は恐らくは最も重大なる固有名詞として、來るべき世紀の史上に反覆せらるべき也。

第二章　第一革命（佛蘭西革命）

一　其由來

あらざる者稀なるに至れり。歐洲文明に次いで勢力あるものは絕東の文明なりと雖も、是を世界歷史の上より大觀すれば、遺憾ながら尙ほ未だ歐洲文明の競爭者と稱するを得ず、其の發達の如きも、多くは西洋の影響に起因するを見る。所謂文明競爭の東西兩洋間に起るの日ありとせば、そを目睹すべきものは即ち二十世紀以後の歷史ならむ。

凡て是等の事變の動機となりたるものは即ち革命也。十九世紀は前後三回の革命を經由せり。第一の革命は一千七百八十九年のバスチユの破壞に初まり一千八百十五年の華德堡の戰に終る、所謂佛蘭西革命是れ也。第二の革命は一千八百四十八年に中部歐洲を通じて起りたる民主的運動にして、第一革命の反動として起りたる君主政治を顚覆するを目的とせり。二三國際間の戰爭と一二國民の獨立運動と亦是に加はりしが、其の結果は概して失敗に終りたり。第三の革命は頗る成功多き革命なりき。歐洲中部の地圖は殆ど改造せられたり、國民の獨立せるものあると、立憲政治の實施とは其の主要なる結果也。是より以往國民の權利を伸張せむが爲に又銃丸を要せざるに到れり、彼等は投票の權利を確定したれば

同人種も異邦の民たるあり、異人種も同邦の民たるあり、胡漢呉越雜然として其の居を同じうせる有樣なりき。十九世紀に到り、各人種は是の渾沌裏より目醒めて漸く血族同體を感じ初めたり。國民主義乃ち是の感情の發表として歷史上の一要素となりぬ。是に於て同人種間の求心力は獨逸、以太利を聯合し、異人種間の遠心力は將に匈牙利を分裂せしめむとす。

物質的文明の進歩も亦今世紀の特色として大書せらるべき也。而して是の物質的文明の進歩に伴へる富の增進と其分配の不平均とは一方に於ては大富豪を生ずると同時に、他方に於ては小貧民を多からしめぬ。富豪と貧民とは十九世紀文明が產みたる社會的双生兒也。是に於て大多數の人民は曾て政治上に於て得たる所のものを、今は社會上に失ひたるの觀あり。這般の善後策は今日以後の問題に屬す、社會問題、即ち是れ也。

十九世紀史の主動者は言ふまでも無く歐洲文明なり。歐洲文明が世界を征服したる大功業は今世紀の最も著しき事實なりとす。所謂『暗黑大陸』は今や歷史的の名稱となれり、食人俗を以て有名なる南洋の諸島も、アリアン人のテニス遊戲場

學者と爲す、彼等は學識を私し、天下の民の愚なるに乘じて其の權力を揮ひたり。第二の門閥を僧侶と爲す、彼等は天國の鍵を私して威福を恣にせり。第三の門閥は帝王也、彼等は世襲の神權を擁して、民を土芥視せり。中世紀の人民は是の三頭門閥の下に立ちて無學、迷信、屈服の外其他を知らざりしが、是の門閥の特權に反抗して個人の權利を伸張するは即ち近世史の職能なりき。

第一、知識の專有は打破せられて學者は平民となりぬ、所謂文藝復興即ち是れなり。知識を得たる平民は次に僧侶の特權を打破して其の天國の鍵を人類の共有物となせり、宗教革命即ち是れ也。帝王の神權最後に打破せられて、政權は國民の間に分配せられぬ、佛蘭西革命、即ち是れ也。佛蘭西革命は歐洲の情勢を根本的に搖撼せり其反動は起りたり、而して第二第三の革命は極端なる第一革命の善後策として引續いて現はれたり。十九世紀、殊に歐羅巴は是等の送迎に多忙なりき。

十九世紀文明の第二の理想は國民主義也。中世紀にありては今日の意味に於て國民と呼ばるべきもの殆ど是れ無かりき。歐洲大陸には幾多の異人種ありて雜居せり、封建制度が是の間に劃したる境界は極めて勝手氣儘なるものなりき。

十九世紀總論

第一章 序論

一言以て是を掩へば、十九世紀は革命の時代也。政治の上に於ては言ふまでも無く、社會の上に於ても、學術の上に於ても、文藝宗教の上に於ても、其他何れの方面に於ても、革命の時代也。而して是の革命の理想として二個の主義あり、十九世紀の文明は是の理想に向て集注せるを見る。二個の主義とは何ぞや、民主々義は其の一也、國民主義は其の二也。前者は個人の權利の平等を主張するに本き、後者は同人種互に相團結し、異人種互に相排斥するの傾向に基く。是二主義の結合を十九世紀文明の特色と爲す。

然れども民主々義は十九世紀に於て創まりたる者にあらず、實に近世史に於ける歷史上の大勢力也。抑中世史に三種の門閥ありて當時の勢力を專有せり、近世史の最大事業は是の門閥制度を打破するに存しき。中世に於ける第一の門閥を

たる村上氏は、須らく釋尊の行者を以て自ら任ずべきに非ずや。

吾人が村上氏に希望するところ、實に是の如し。遮莫、本願寺は如何にして氏を待たむとする乎。眞宗大谷派及び其以外の佛敎徒は如何にして氏の反抗を觀むとする乎。抑ゝ村上氏自らは氏が今回の告白に對して將來如何なる行動に出でむとする乎、將た又吾人の言へる所は、吾人が理想の村上氏に過ぎざる乎。請ふ刮目して是を觀む。

（三十三年五月）

六　釋尊の行者（村上氏今後の覺悟如何）

大谷派本願寺の一僧侶として、氏は其の本山に反抗して其の根本的改革を唱へたり。然れども本願寺にして動かざる時は即ち如何。今の本願寺が依て以て存在し、依て以て繁昌する如き方法は、氏が絶對的に非認せる所なり、是の如き方法によりて存在し、繁昌するものは、本願寺なると佛教全體なるとを問はず、寧ろ其の滅亡を以て國家國民の利福となすべき也。是の如き意見を有する氏が、大谷派本願寺の一僧侶として終始することは、甚だ謂はれ無きことならずや。吾人は是點に關して、村上氏が、自己の大なる天職の自覺に到達するの日あらむことを切望して已まざる也。

昔者日蓮の教を唱ふるや曰く、吾は是れ釋尊の行者也と。如何に偉大なる宣言なるよ。今の宗教界の腐敗せるは、畢竟禪宗の行者あり、眞宗の行者あり、一法主、一舜台の行者あり、而して釋尊の行者無きが爲ならずや。宗教は人生の爲に存す、人生、宗教の爲めに存するに非ず、腐敗せる本願寺と腐敗せる佛教との滅亡を希望し

として一切の教義の自由解釋を許さず、布教の方針、勸學の施行、素より日新の時勢に適合すべくもあらず。村上氏が是を以て文明の今日に適せずと斷ぜるもの、是れ亦眞宗大谷派に對する根本的改革意見に非ずして何ぞや。是に依て見れば村上氏の改革派に贊同したる理由は、彼の所謂白河黨の諸氏が單に一執事の更迭を希望したるものに比して遙に根本的なりし也。即ち氏が根本の精神は今の本願寺を全然破却せずむば已まざるべかりし也。然らば即ち石川氏の司配の下に立てる本願寺が、渥美時代より更に墮落の深淵に陷りたる今日、氏の改革的精神が今回の大反抗となりて現はれたるは最も自然の徑行と謂ふべし、將た苟も斷乎たる確信と、是の確信を實行するの勇氣あるもの、事必ず玆に出でざる可からざる也。吾人は是の點に於て深く村上氏の終始一貫せる行動を歎美するを禁ずる能はず。

是によりて之を見れば、村上氏が今回の大反抗は今日に初まりしに非ずして、既に二十九年の改革運動に其の端緒を發せし也。吾人は是に於て氏と本願寺と將來の宗教との關係に就いて、氏に對する一言の希望を述べざるべからず。是れ啻に氏の爲に言ふのみに非ず、又啻に本願寺の爲に言ふのみに非ざる也。

痛論したるものなりき、其の初めに曰へらく。

抑ゝ本山が、近來兩堂再建の方策の如き、負債償却の仕方の如き、宗教家の本分として爲すべき方法なる乎。勸學の施行、布教の方針、凡て文明の今日に適當するものと謂ひ得べきか。彼を思ひ此を思へば、余輩は眞宗大谷派の生命は實に旦夕に迫る心地こそすれ、吾曹之をしも憂へずんば亦何をか憂へん。

是れ豈根本的改革意見に非ずして何ぞや。由來本願寺は金錢と極樂とを交換する一大商店也。憐むべき正直者が拮据經營して獲得したる半生の貯蓄を剝奪して、法主役僧等が妻妾衣住の資となすは決して今日に初まりたることに非ざる也。民衆に向て極樂往生の道を與ふるは好し、是が爲に必ず金錢を得ざるべからずとするは何の理由ぞや。負債償却、兩堂の再建、何れも是の方法によりて成されたり、是れ無くむば本願寺は一日も存在すべからざるなり。執事の甲乙たると丙丁たるとを問はず、是の一事は本願寺の生命の根源として、一日も缺くべからざる也。而して村上氏は是を以て宗教家の本分に違へりとせり、是れ即ち眞宗大谷派に對する根本的改革意見に非ずして何ぞや。本願寺は傳燈相續の貴族的法主を中心

村上氏も亦南條、井上諸氏と共に白河黨の改革運動を贊助したる一人なりき。氏は改革運動の起ると同時に長文の辭職勸告書を渥美氏に送り、其の顧みられざるに及びて是を『敎界時言』紙上に公にし、更に井上(圓了)氏と連署して改革贊成の檄文八百餘通を全國に頒布し、鷲尾、境野諸氏と共に眞宗東京中學校長を辭して改革運動の爲めに地方遊說に出懸けたり。當時尾參二州並に美濃一帶の地に於ける革新派の興起は實に氏の力與て多きに居る。當時改革派中の有力なる一地方團體なる參河の愛山同盟會の如きは全く氏の力によりて成立せしものなりき。

今村上氏が當時如何なる精神を以て改革派を助けたりしかを了解するは氏が今回の反抗を批評するに於て須要なる事項也。吾人を以て見れば、氏が改革運動に希望したりし所のものは、決して一執事の更迭と云ふが如き小事には非ざりしが如し。當時『無盡燈』第七號に掲載せる『余が佛敎史』と題する一文は眞宗大谷派の狀況を古代の佛敎歷史に比擬し其の命旦夕に迫れることを警告したる一種の宗敎進化論なりき。『敎界時言』第二號に寄せたる『大谷派の生命は猶存するか』と題せる論文は、更に是の旨趣を具體的に說明し、根本的改革の免るべからざる所以を

の火の手漸く蔓延して或は法主の內行を訐き、或は自由信仰を論じ、或は從來の敎權主義に反對せむとする者漸く加はるに及ては、所謂白河黨の諸子は寧ろ其の結果の意外の邊に影響せるを本意ならずとせしならむ。若し然らずとせむか、渥美氏の下に虎の如くなりし彼等は、何故に石川舜台氏の配下には猫の如くなりし乎。大谷派本願寺の失行と腐敗とは其の執事に渥美氏を戴けると石川氏を戴けるとによりて毫も異なる事無し。彼等は何故に先に勇にして後に怯なるか。監獄敎誨師問題と云ひ、宗敎法案問題と云ひ、石川氏の亂行は寧ろ渥美氏が一宗內の財政を紊亂せるよりも遙に甚しきものあり。白河黨の諸子にして果して佛敎改革の大志願ありたりとせむ乎、少くとも今日に於て更に十倍の勇氣を以て奮起せざるべからざるに非ずや。吾人は是の點に於て多くの價値を二十九年の改革運動に置く能はざると同時に、村上專精氏が今回の反抗に就いて、深く氏に希望する所無かるべからず。

五　過去に於ける東本願寺と村上氏との關係

然れども、渥美氏を斥けたることは眞宗大谷派の改革として將た又佛教の革新として、何程の効力を有したりしや。是の點を考察するは村上氏の今日の地置及び其反抗の意義を批評するに於て最も必要なる事項なりとす。

有体に言へば、社會は慥に所謂白河黨なるものゝ改革運動を買被りたりき。彼等は口を極めて渥美の不信任を攻撃せり、然れども布教勸財の事業に就いて本願寺其者の取れる大方針を一言も批難せざりし也、傳燈相續の法主を神聖視せる固陋なる敎權主義に關しても、一言も批難せざりし也。彼等は渥美氏の失行を指摘することと甚だ力めたり、而かも本願寺其者が今日の文明社會に於て果して其の宗敎的職能を盡しつゝありや否やてふ根本問題に就いては何等の批評する所無かりしなり。彼等を目して日本のルーテルと賞賛したるは慥に賞賛したるものゝ過なりき、何となればルーテルは羅馬敎會の根本敎權を否定して起ちたるもの、一法王、一僧正の更迭を目的とせるものに非ざりければなり。是の點より觀察すれば白河黨の諸子が所謂改革は、改革と言はむよりは寧ろ一渥美氏に對する排斥運動と呼ぶべかりき。夫れ唯一渥美氏に對する排斥運動に過ぎず、是を以て改革的輿論

寮は改革派に協同したるの故を以て解散を命ぜられたり。東京に於ける井上圓了、南條文雄の二氏は村上氏と共に大に改革派の旨趣を賛成し、各々檄を飛ばして全國の信徒に勸告せり。村上氏の如きは「教界時言」に於て渥美氏に送りたる辭職勸告書を公にし、先に大谷派の教育顧問を斥けられたる澤柳政太郎氏の如きも、亦遙に書を寄せ口を極めて當事者の非行を排撃せり。全國の諸新聞紙は、「京都日の出」等二三を除くの外は殆ど皆改革派を扶けて其不撓の意氣を奬勵せり。――一言すれば、改革派が當時の勢力は殆ど天下に瀰蔓し、或は日本のルーテルを以て彼等に謳歌する者さへあるに到りたりき。頑强なる渥美氏も遂に是の大勢力に抵抗する能はず、行掛けの駄賃に稻葉、淸澤、村上等改革派に屬する僧侶の職班寺格を褫奪したると共に自らも亦退隱の已むべからざるに到れり。是を二十九年に於ける所謂白河黨の改革運動の概畧となす。

四　廿九年に於ける改革派の眞相

表面より見れば改革運動は渥美氏を斥けたることに於て首尾好く成功せり。

進派の一領袖なりき。是の二十年間の在職に於ける渥美氏の專横は實に言語に絶したるものなりき。十三年の日子と一千餘萬圓の金額とを以て東洋第一の大伽藍を建てたるは氏の事業として永く記憶せらるべきものならむ、而かも其の財政の紊亂は實に甚しきものなりき。末寺門徒は何れも本山の勸財に困却せり、六十萬圓の負債尚ほ償却の道を得ざるに當りて、一千萬圓を喜捨したる信徒は、更に又三百六十萬圓の敎學費献納を命せられたり。名は即ち敎學の爲と稱すと雖も、當時大谷派の內情を知れるものは寺格堂班の賣買を事とする渥美氏一輩の當事者が、決して是の大任に當り得べからざることを熟知せり。是に於てか渥美氏に對する多年の不信任は是の敎學資金の募集を導火線として一時に爆發したり、而して是が先鋒となりたるものは則ち所謂白河黨なりき。

所謂白河黨が二十九年七月最初の會合に議決したるは、『吾黨は腐敗の根源たる渥美執事を退職せしめずんば已まず』と云ふに存しき。『敎界時言』に於ける宣言も全國の門末に飛ばしたる七千餘通の檄文も、要は渥美氏の退職運動に外ならざりき。是の運動は忽ち同志を全國に求め得たり。東六條の大學寮、東西兩京の中學

かを審にせずと雖ども、は石川舜台氏の指導の下にある大谷派本願寺の行爲を非認せるは事實也、現社會の救濟を以て宗教の本旨となせるも事實也、而して是の目的によりて現在の佛教を改造するの必要を認めたるも亦最も明なる事實也。想ふに是の如き思想を懷けるもの今の佛教徒中に少なからざるべし、而かも法主を神聖視する大谷本願寺部內の一僧侶たる村上氏が、斷々乎として其の所信を天下に告白したる勇氣に至ては、眞に懦夫をして起たしむるに足る。唯問題は村上氏が如何にして是の所信を貫徹し得べき乎にあり。吾人は是に於て聊か氏並に是に同情を有せる佛教改革者に謀るべきものあり、何ぞや、往年の所謂白河黨の前例に鑑みむこと是れ也。

吾人は茲に宗教界の事情に通せざる讀者の爲に、大谷派本願寺の腐敗史の一節を語らざるべからず。大谷派本願寺の腐敗史に關聯して第一に記載せらるべき人名は執事渥美契緣氏也。渥美氏は明治の初より二十九年の末に至るまで二代の法主を擁して權柄を握ること凡そ二十年、其間一二不平黨の反抗ありしも何れも志を果すこと能はず、今の石川舜台氏の如きも明治の初年に於て失敗したる改

て爲せる演説は其調子に於て更に激越なる者ありき。曰く『近角氏は宗教法案否決運動の功績によりて洋行の恩典を受けたりと云ふ、然れども是れ果して何の功績ぞや。大谷派本願寺をして國家の大罪人たらしめたる劣惡なる行爲は大谷派の僧侶にとりて果して何の功績ぞや。大谷派本願寺は是の如き劣惡なる行爲なくして存在する能はざらむ乎、吾人は寧ろ大谷派本願寺の滅亡を希望せむ。將又佛教にして是の如き罪惡を離れて存在する能はずとせむ乎、吾人は毫も佛教の存在を希望せざる也』と。嗚呼何ぞ其言の高大にして猛烈なるや、村上氏是に至りてロヨラ、ルーテル、日蓮の高調に達せりと謂ふべし。佛教徒よ、何ぞ齊しく響を反さゞる、齊しく其の響を反して何ぞ茲に宗教革新の大氣運を作らざる。佛陀の教訓にして尙ほ多少の生命あらむ乎、今の佛教徒たるもの決して默々として已むべきに非ざる也。

三　東本願寺腐敗史の一節（廿九年の改革運

以上は村上氏が演説の大旨也。吾人は氏が改革の精神の那邊にまで擴張せる

ぞや渥美と名くる一俗物に代ふるに石川と名くる他の俗物を以てしたるの外毫も逕庭無きに非ずや。 大谷派本願寺は是の俗物の爲に腐敗の深淵に墮落せり、宗敎家の神聖なる事業は是の俗物の爲めに却て社會の腐敗を助長するものと爲されたり、一大改革遂に已む可らざる也。——氏は是の如き熱誠に充滿せる雄辯を揮て大に石川舜台氏及び東本願寺の當事者を打擊せり、三千の聽衆は潮の如く動きて均しく喝采せり。 東京に於ける眞宗大谷派の監督として淺草本願寺の輪番たる大草惠實氏亦場に在りしが、演說未だ了らざるに座に堪えずして逃避せり。

村上氏は更に論步を轉じ是の改革の局に當るべき偉人を出だすべきものは青年佛敎徒たらざるべからずと說き、而して青年佛敎徒の現狀果して如何と提起して曰く、多少新時代の精神に接觸せる青年僧侶の中には石川氏の爲に犬馬の勞を取りて自ら其陋を覺らざる者あるに非ずや、老朽公卿を擔ぎ廻り、無智の翁媼を欺瞞して得々たる者あるに非ずや。 此の如き青年は古き腐敗の火炎に向つて新しき薪を加ふるのみと。

青年佛敎徒に對する打擊は尙ほ盡きざる也。 氏が近角氏の送別會の席上に於

き地位に在る氏が是の如き行動に出でたる事は、現時の宗教界に於て最も屬目すべき出來事ならずむばあらず。吾人は玆に村上氏の態度を明にせむが爲に先づ錦輝館に於ける氏が演說の要旨を觀察せむ。

錦輝館に於ける氏が演說は歷史的に宗教の進化を說きたるものなりしが、其の歸結は明に本願寺今日の腐敗を打擊するに在りき。氏は先づ宗教改革に須要なる五個の預件を指摘して第一政治の變革、第二社會の進步、第三社會の腐敗、第四宗教の腐敗及び第五偉人の出現なりとし、而て後、今日の日本が是の中の四箇條の預件を具足せるを說き、宗教改革の途に避く可らざる所以を立證せり。氏は宗教の腐敗を說くに當りて殊に東本願寺の近狀に參照し、宗教法案の通過の爲に賄賂を行使したる僧侶あることを憤慨せり。氏は玆に執事石川舜台の姓名を告白して其の當事者なりとし、大に其の非行を打擊して曰へらく、今の政治社會は腐敗せり、而かも是の腐敗せる政治社會に賄賂を行使する宗教家あるに至つては言語道斷に非ずや。往年渥美契緣なるものありて暴横至らざる所然かりき幸に全國の改革派の反抗に依りて最を黜くるを得しが其の所謂改革は今日に於て果して如何

二　村上專精氏の大反抗

石川舜台氏の議員買收によりて宗敎法案の否決を貴族院に見たるより四十日の後、四月八日、佛敎有志者相會して釋尊降誕會を神田錦輝館に開く。當日眞宗中學校長にして文科大學講師たる村上專精氏が爲したる『佛敎の過去及び將來』と題せる演說は大谷派本願寺の當事者に對する一大反抗として見るべきものなりき。越て五日、佛敎青年會の一員として石川氏の買收運動に最も力ありきと稱せらるる文學士近角常觀氏の歐洲行に對する送別會、小石川植物園に開かる。當日村上氏が爲したる席上演說は、錦輝館の演說と同旨趣にして、要は佛敎現時の腐敗を指摘し、殊に大谷派本願寺の行動を慨嘆して極めて切なるものなりき。去月十三日、氏は又讀賣新聞記者の訪問に接したる時、是等の演說に對する氏の責任を明にし、如何なる迫害に遇ふも決して其の所信を枉屈すること無かるべきを明言せり。村上氏は其學識の深遠、德行の高潔、夙に衆望の歸する所也、而して現に石川氏の司配の下に存在する大谷派本願寺の一擬講にして、眞宗中學校の校長たり。是の如

以て任すべき青年教徒は、却て是の腐敗長老の頤使に奔走して不義の利益の分配に與ることの少からんを是れ憂ふる也。二十世紀は方に來りたり、舊佛教の勢力は到底今日の儘にて持續せらるべき者に非ざることの最も分明なるにも拘らず、人間のあらゆる弱點を現はせる一凡庸僧侶は、傳燈法主の名によりて依然たる專制君主的威嚴を保たむとする也。教祖が救世の使命は全く遺却せられ、腐敗せる社會の尙ほ其の腐敗を擯斥すべきあらゆる劣惡手段を用ひて國家權門の外護に依賴し、以て其の舊信仰の殘骸を粉飾せむとする也。是れ豈明治三十三年の今日に於て最も奇怪なる現象に非ずや。

然れども是の奇怪なる現象は幸にも村上專精氏に於て一除外例を見るを得たり。若し村上氏の意志にして果して吾人の希望する如くならば是れ獨り一本願寺、一佛教の幸のみならず、實に社會國家の幸也。一宗派、一寺院、將た一村上氏吾人に於て何かあらむ、唯本邦宗教界の覇權を握れる一大國家的勢力に關するものとしては事體甚だ小ならざるを覺ゆ、茲に一言無きを得ざるなり。

東本願寺と村上專精氏

一　奇怪なる現象

佛教と云へば則ち本願寺を聯想し、本願寺と云へば、則ち腐敗を聯想す。今の世に於て本願寺の存在及び繁昌の爲に最も大切なる特權は實に是の腐敗の公認なり。彼れは是の奇怪なる特權を擁して聖代の天地に橫行濶步し、そが接觸するあらゆる事物を腐敗しつゝあるにも拘らず、社會は多く怪み咎めざる也。全國數萬の僧侶、幾百萬の信徒亦恬として關知せざるものゝ如く、却て其の學識と巧智と財囊とを傾けて是の腐敗を助長せざらんことを是れ恐るゝものゝ如し、奇怪なる現象と謂はざるべけむや。實に奇怪なる現象に非ずや、社會の腐敗を救濟すべき宗教其物は今や却て社會を腐敗しつゝあるなり。學寮を設け、經典を授け、少壯子弟に向てはあらゆる宗教者の德義を訓へつゝある者、他方に向ては暗夜潛に賄賂を行使して俗論の多數を買はむとする也。稍高等の教育を受け、將來佛教の廓清を

粛なる意義を有せり。世人よりは入道とよび天狗と嘲られながらも、博士は毅然として其の確信を抂げず、其の抱負を捨つる能はざりし也。博士は時に駄洒落を以て人を笑はすることあり、されど人生の事、一として戯れに成さるべきものあるを知らざりき。博士にとりては人生は飽迄厳粛なり、飽迄實在なり、博士は茲に其の確信と抱負と天分とを自覺して、須臾も休止すること無かりし也。博士の全生涯に貫通せる眞摯なる精神は實に是の自覺に本けりき。

※　※　※　※

嗚呼、山は尚ほ築くべし、河は尚ほ穿つべし、高尚なる人物に至りては眞に天與の賚なり。日本は外山博士の死に於て回復し難き損失を被りぬ。貴族爵位は唯帝王の一呼吸によりて製造せらるゝを得べけむ、唯夫れ大なる人物に到りては、吾人是を如何ともする無きなり。

（三十年四月）

天の靈にして若し是の事を聞かば、夫れ是を何とか謂はむ。俗物者流、往々自家の心事によりて猥りに高士を揣摩し、却て累を後世に遺すを覺らず、憐むべく、嘆ずべく、愚むべし。然りと雖も授爵運動の如きは恐らくは新聞紙の訛傳にして、苟も博士の友人と稱する某々氏等の關知せざる所なるべきは、吾人の喜び信ぜむと欲する所なり。

七　博士の眞摯

博士に關して言ふべき事は一論文の能く盡す所に非ず、されど一事の見遁し難きは其の心事の眞摯なること也。眞摯は大なる性格の特徴なりとの套語は、吾人博士に於て其の一好例を見る。博士の言行には、如何に些細なるものにも、其背後に大なる確信有らざるは無し。されば事を斷ずるや、寧ろ遲かりしと雖も、一たび斷じたる決心の鞏固にして、是れに伴へる意志の猛烈なるは、實に目覺ましき程なりき。外より見れば博士の所行には往々滑稽と見ゆるものあり、されど博士の心事に到りては極めて眞面目なり、大なる確信と抱負との上に爲されたる極めて嚴

に驚かざらむ。是點に關する博士の訓誡は吾人數〻是に接せしが、實に高尚なるものなりき。夫の良心を欺きて官位を求むるもの、主義を典して富貴を購ふもの或は學者として俗界の名利に競奔するもの、是等は博士の常に指彈したる所なりき。夫の博士の友人として爲に授爵の運動を爲したる人々は、博士を以て如何なる人物と爲したりし乎。男爵華族の稱號を以て博士の靈を慰め得べしと思惟したりし乎。有力なる一新聞紙は是事を批評して曰く『今の學者は平生廉潔にして名利心なきが如く裝ふも一旦死に瀕すれば輙ち人爵の戀々たるに堪へず友人に依囑して周旋せしむ』と。是れ博士の爲に授爵運動を爲せる者を以て、即ち博士自らの意志に本けりと爲せる也。吾人は是言の甚だ理あるを認む、何となれば、凡そ人の爲にすることは其の人の素志に反すべき者にあらざれば也、故人に對する場合に於て最も然りとなす。今博士の死に際し、其親友と稱して博士の爲に奔走するものあらば、以て博士の素志を體認せるものと見做す、必ずしも理無きに非ざる也。彼の某々氏等の運動にして果して事實なる乎、即ち是れ博士の素志を詐りて、其の高潔なる性格に一大汚辱を與へたるものと謂はざるべからず。吁、博士が在

六　博士に對する無上の讒誣

嗚呼官邊の生活二十餘年、一朝江湖の人となりて其の天分を披瀝せむとするに際し、事業厘に其の緒に就いて俄然として簀を易ゆ、眞に人生の恨事と謂ふべし。世には寧ろ其の生を悼むべき幾多の人あるに、殃殊に斯人に下る、天道の是非夫れ何處にか愬へむや。

吾人は博士の死に際して一の悲むべき報知に接したり、其の或は後世に累あらむを恐る、一言の辯無かるべからざるを覺ゆ。何ぞや博士の死に際し、其の喪を秘して爲に授爵運動を爲したる者ありと云ふこと是れ也。吁、果して是事ありし乎、果して是の事なかりし乎。博士の最も親近なる友人が是事を爲したりと云ふに至ては、吾人は其の訛傳に出でたりとの外思惟すること能はず。苟も博士の性情を知れる近親の人ならむには、萬々是の醜陋事を演出すべき謂はれなければ也。

博士が勳爵を口にせし事は、吾人の一度びも耳にせざりし所也。博士の主義あり、博士の性格あり、而て人爵に望むところありしと謂はゞ、誰か其の不倫の大なる

炎より咽喉を害し引いて中耳炎を起したり、博士は病中にありても尚ほ時事を憂ふる情に堪へず『藩閥の將來』と『教育制度論』とは實に其の病床中の著述なりし也。『藩閥の將來』は教育擴張を以て藩閥打破の最良法なるを説き、特に高等學校增設の問題に關して全國民の注意を喚起せるもの『教育制度論』は久保田讓氏等の所謂學制改革を駁撃して、大學教育の本領に關する俗論を糺せるもの、共に教育社會の緊急問題に屬す。社會は這般の問題に就いて聰明なる指導者を得たる間に、博士の病氣は漸く其の重きを加へたり。醫師は切に轉地療養を勸めしが、博士は是の多事の時に際して獨り閑地に退くことを肯ぜざりき。本年一月三十一日、學制調査會設置に關する建議案、貴族院の議事に上るや博士は病を力め、繃帶の儘にて登院せり。當日高等學校增設案に關する質問は、今より思へば、實に現世にて博士の口より聞かるべき最後の演説なりしなり。

死は往々其の人の傳記を語る。讀者よ、博士の如何に生きたるかを知らむと欲せば、請ふ先づ博士が如何に死したるかを見よ。

を窺ふが如き蠢々たる徒輩が、時に新聞記者の訪問談に縁りて屢に自家の存在を廣告しつゝあるに比すれば、啻に霄壤の差のみに非ざるなり。

五 博士の死

晩近の教育界が博士の熱誠によりて鼓舞せられたることの小少ならざるは、天下の齊しく認むる所也。而して博士の夭折が是の事業の爲めに速められたるの事實を認るに及びては、誰か博士の人物に對して更に崇敬の情を加へざらむや。吾人は敢て夭折と云ふ、博士の祖父九十餘歲、先考は八十餘歲、代々長壽の家たり、況や博士の事業より見るも、其の本領の現はるゝは今日以後なるべかりしをや。五十四歲の今日は方に博士の壯年期たり、然らば即ち博士の死は即ち夭折に非ずして何ぞや。

吾人をして博士の悲むべき死を語らしめむか。去年の十一月、博士病で褥に在りしが、博士の住居する牛込區民の懇情に應じ、疾を力めて其教育會に演說し、大に東京市民の教育事業に冷淡なるを打擊したりき。博士の病是より漸く加はり、翌

に博士に於て他人の企て及び難きは、其の批評の忌憚無きにあり。　博士は東京市民の教育に冷淡なるを痛罵して禽獸に等しと言へり。　大隈伯の學校に熱心なること温室の如くならざるを見て、何ぞ盆栽を賣飛ばさゞると罵れり。　山口、鹿兒島にのみ高等學校を建設するは藩閥内閣の持續計略なりと喝破せり。　久保田讓氏の如きは博士によりて公然一小俗吏と罵倒せられたり。　地方の一教育會の博士を聘して其の演説を聞きし時、會衆の奢侈を打撃し、滿堂をして顏色無からしめたり。　博士は到る處に忌憚無く其の所信を告白して毫も一身の榮辱を顧みざりき。殊に一度び全國民の教育的精神を鼓舞するを以て刻下の急務なりと信ずるや、或は仙臺に、或は神戸大阪に、或は岡山、姫路に、或は濱松に、或は長野、新潟に、到る處に其の熱誠に充滿せる稀代の雄辯を揮て地方の民心を鼓動せり。　久しく遺却せられたる教育問題が、近時漸く社會の注意を喚起せるもの、博士の盡瘁與つて多きに居ると言ふも、吾人決して其の過言に非ざるを見る。　而して偉大なる人格の勢力と威重とは、漸く是間に認識せられたり。　嗚呼夫の樞密顧問官、或は貴族院議員の明巣を狙ひ、若しくは今生の思ひ出に授爵の恩典に與らむとして絶えず上長の鼻息

凡そ二十餘年の間、博士の警拔なる批評を耳にせり。然れども眞に社會的批評家としての博士の面目を發揮し初めたるは、不羈自由の一個人と爲りたる文部大臣辭職の後にありき。是の短かき二年間に於ける博士の活動は、其の光榮ある將來を預告するに餘りある、極めて目覺しきものなりき、而して今や忽焉として亡し。吁博士、其の來る何ぞ夫れ遲かりし、其の去るや、何ぞ夫れ速かりし。

人としての眞價は性格の力として現はる。沐猴も冠する間は、衣冠を敬する人に敬せられむ。夫れ凡庸の徒は偶ゝ其の地位職權を擁する間こそ堂々たる人物の觀もあれ、一度び一布衣となりて民間に下れば忽ち獼猴の木より落ちたるが如きもの、比々として是れ也。我外山博士は是の如き類に非ざりき。

臺閣を退きたる後に於て、博士が赤條々たる個人的性格の力は漸く現はれ初めたり。勳爵の虛榮に依るに非ず、政黨の援引に賴むあるに非ず、其の武器として筆と舌とあるのみ。而かも是の筆と是の舌と一度び博士の高潔なる人格を發表するに及びては、金剛杵に比すべく夜叉戈にも較ぶべかりき。是の如くにして社會の爲に、宗教の爲めに、學術の爲めに、教育の爲めに、打擊し、警醒し、奬勵し、訓諭せり。殊

然れども是の如きは大學教授たり、文科大學長たる博士の片手間に過ぎず、博士が精力の大部分は言ふ迄もなく大學教育の事業に效されたりき。帝國大學が博士の力によりて完成の域に近づきつゝありしは素より疑ふべくもあらず。されど博士の能力は一學校、一教室の中に發揮せらるべきものとしては、餘りに大なりき。其の烈々たる活力は靜穩和平なる規矩準繩裡に於て現はされむには寧ろ強大なるに過ぎたりき。博士の性格は其の活動の場面として更に大なる舞臺を要したり。大學總長や、文部大臣や、吾人素より博士の爲に是を榮とすと雖も而かも博士の天分に待つありしものは學校に非ず、官衙に非ず、而して社會なりき。吾人は是の點より見て、寧ろ博士の短命なる大學總長と、文部大臣とを祝せむと欲するなり。

四　社會的批評家としての博士

文部大臣を退ける後の博士の經歷の意外にも短かく、今や故人として博士を呼ばざるべからざるに至りたるは、吾人の返す〴〵も悼惜に堪えざる所也。社會は

謂ふべけむ。演劇改良論は今に於てこそ常套の問題なれ、博士の是を唱へたる頃にありて幾人か能く其の眞意義を解し得たるべき乎。博士が『漢字破り』を著し、羅馬字會を起し『漢字に反對するものならば何でも贊成する』と喝破したる時に當りて、幾人か能く國字改良の問題に對して痛切なる感興を有せしや。今や新體詩は欝として藝苑の一方に昌へ、其の光榮ある將來亦豫期し難しとせず、而して明治十年代に於て唱へられたる詩歌の一體が卅年代の今日に於て漸く世人に認めらるゝに至りたるを思へば、吾人は博士及び博士と共に初めて新體詩を唱へたる人々の先覺を多とせざるべからず。吾人は帝國大學の教室裏に於ける社會學の講義よりは寧ろ是等の警抜なる批評に於て博士の本領を認めむと欲する也。

着手は成功の半也。今の日本の學術界に於ける進化論の勢力如何を想ひ、新體詩が如何に漸く其の地歩を占めつゝあるかを考へ、國字改良が上下一世の輿論として、如何に盛に研究せられつゝあるかを觀れば、吾人は殆ど廿年前の往時に於て早く既に是事を國民に警告したる先覺者博士の如き人に對して須らく其成功の半ばを歸すべきに非ずや。

三　博士の天分

博士の生涯の重なる部分を語るものは學者の閲歴なりき。然れども博士の天分は學者たるに在るよりは寧ろ批評家たるに在りき。博士は學者として本邦人には珍らしきブロード・カルチュアを有したり。スペンセル氏を祖述せる其の進化論も、哲學雜誌に掲げたる社會、道德、宗教に關する論文も慥に價値ある研究なりしならむも、然かも批評家は博士にありて更に大いなる天分なりし也。而して博士が多方面の趣味と、其のブロード・カルチュアと、自己の說を立つるよりは他の缺點を看破するに長じたる其の燗々たる觀察眼と、不羈獨立、何人の前にも忌憚なく其の所信を告白し得る其の勇氣と、凡て是の天分を果すべき要具として博士に賦與せられたるの觀ありき。

今日に於てこそ、スペンセル氏の進化論は福澤氏の民權論と同じく、餘り稱美すべき者にも非ざれども、日本が初めて博士の口より是を聞たる當時にありては、慥に警拔なる新眞理なりし也。博士が時流に先じて是を皷吹したるは慥に卓見と

續人たるべきものは、先づ指を博士に屈せざるべからざりしが、今や博士の後に於て何人か是に當るべき。日本が伊藤博文氏の如き、星亨氏の如き人物を再び見むことは必ずしも期し難きにあらず、吾人は現に幾多の小伊藤、小亨の多きに勝えざる也。されど博士の如きは、人物の摸型として甚だ得易からざる也。請ひ問はむ、博士の薫陶を受けたる赤門數千の子弟、果して幾人の其の流風を傳へ得たるものある乎。

然れども三河武士の子孫は今の世の寵兒に非ざる也。聞說らく海舟翁嘗て島田三郎氏を許して曰く、沼南は好男子、恨らくは不遇の間に一生を終らむ乎と。正義と失意とは多くの場合に於て同意義に解せらるゝ今の時に於て、吾人は三河武士の子孫の薄命を悲むの情に堪えざる也。博士の襟度は必ずしも狹からず、自ら守ること嚴なる割合には、己れと異なる者に對して左迄狹直ならざりき、然れども博士にして如何に風雲に際會するも、到底大隈伯たるを得ざる也、伊藤侯たるを得ざる也。博士の大なる理想としては唯海舟翁ありしのみ、是れはた三河武士の子孫が天稟の宿命にして、而して博士の人格の高潔なる所以也。

は、其の所信餘りに鞏固に、其の德操餘りに高潔なりき。良しや博士にして政治界の人となるも、其の趨くところ、恐らくは夫の田口、島田諸氏と同一の軌道なりしならむのみ。博士が超然として始終批評家の位地に立ちたるは眞に其の天分を效し得べきの地に立てるもの、啻に其の自ら知るの明を稱すべきのみに非ざるべし。

二　三河武士の好摸型

主義を重じ、廉直自ら潔うするの點に於て、博士は所謂三河武士の好摸本なりき。博士の家は幕府の旗本にして其の先は三河に出づ、博士の祖先は現に三方ヶ原に討死したる三河武士の一人なりき。吾人潛に博士の爲人を察するに、三河武士の遺血の其身中に流れつゝありしを疑はざる也。今日三河武士の子孫として其の遺韻を傳へたるもの、田口卯吉氏の如き、島田三郎氏の如き、或は江原素六氏の如き、故佐久間貞一氏の如き、若しくは勝海舟翁の如き、其の廉潔なる點に於て、其の正直なる點に於て、何れも博士と同摸型の人なり。而して是の如き摸型の人として、博士の如きは其の最も純なるものに近かりしならむ。幕末の英士たる海舟翁の相

の人なりき。自信無き今の世に於て、博士は飽く迄自信の人なりき。世は擧りて名利に競奔せり、而して博士は正義を以て自ら立ち得ざらむを恐れたり。奢侈は一代を風靡し、人は虛榮を追うて僵るるを知らず、而して博士の勤儉は實に歎美すべきものなりき。日は照すものに其の德を思はしめず、吾人は今に於て博士が眞に世の鹽なることを認むる也。

博士の其の主義を重ずるや、恐らくは死も亦是を脅し得ざりしならむ。若し博士にして主義よりも名利を重じたりしならば、博士の事業は更に其の大を加へしやも知るべからず、而かも博士は外千萬人の鑽仰よりも內一心の疚しきに勝えざりし也。文部大臣を退きて閑散の地に就くや、知人の中には博士に向て切に政黨に入るの利を說けるものありしが、博士の答は實に高潔なるものなりき、曰く、吾に主義の動かし難きものあるを如何と。將來の政治界に於て爲すあらむとするものゝ、大政黨を利用するの止むべからざること、博士の聰明にして安ぞ他人の言を待て知らむや。唯自家の所信を枉げて夫の所謂黨議に左右せらるゝが如きは、博士の到底忍ぶ能はざる所なりし也。畢竟博士は今の政治界に於て成功し得むに

外山博士を悼む（憶ふ）

一 世の鹽

今は故人なる外山博士に關して第一に追懷せらるべきは、其の人物の高潔なること也。若し利を見ては爲さゞる所無き星亨氏の如き人を大人物と稱する眼より見れば、博士は寧ろ小人物と謂ふべかりき。博士は星氏一輩の當世的人物と全く其の撰を異にす。博士は徹頭徹尾、正義の人也、勢利に依りて去就を決し、功名に誘はれて良心を枉ぐるが如きは、博士に於て夢にだも見る能はざる所なりき。博士は今の俗流に投じ、夫の汝々者流と共に方便主義の人たらむには、其の知見餘りに聰明に、其の道念餘りに嚴肅なりし也。政黨者流は疑も無く博士を以て融通の利かざる人物と爲せしならむ、されど融通の利く人物の寧ろ多きに勝えざる今の世に於て、吾人は特に博士の高潔なる性格を懷慕するの情を忍び能はざる也。

博士は今の世に缺けたる幾多の美質を有したりき、是の意義に於て博士は實に今の世に缺くべからざる人物なりし也。主義なき今の世に於て、博士は飽迄主義

楠公其人の生命あり、蒸汽機關の動く所にはワットの血液あり、電氣の線のかゝる所は即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として遂に世界を動かさずむば已まざるべし。十九世紀の文明は是の如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

我少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。其年の弱きを以て早しとする勿れ。死を思はずして生きたるは、空しく生くる也。其の死をして恨無からしめんと欲せずして、獨り其生の完からむを望むは、これ的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり、而して最も好く是の問題を解釋したるものは哲人傑士なり。

（三十二年八月）

だ死を知らず、如何ぞ其優劣を知らむや、人生の價値は絶對なり、他に比すべき者なし。厭世と謂ひ、樂天と謂ふ、吾等其の何の意なるを知らず。吾等は唯人生の實在せるを知るのみ。

されば吾等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり、されど吾等は死を超絶して其永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得む乎、人生究竟の問題茲に集まる。

世に神に禱りて永生を求むるものあり、佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄無きを如何にすべき。其の墳墓を壯大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳はらむことを求むるものあり、されど時は凡ての物の破壞者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得べきや、否や。是の如きは永生の道に非ざるなり。

まことの永生は名によりて生くるに非ずして、事によりて生くる也。儒教の存する所、今尚ほ孔子あらざるは無く、佛寺の建つところ到る處に釋迦あり、耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今尚ほ基督教徒の命也。楠公の史蹟に感激する者胸には

如何にして生くべき乎、是れ人生の大いなる疑問也、然れど如何にして死すべき乎は、更に大なる疑問には非ざるべき乎。吾等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり、されど宗教とは、生きむが爲めの教に非ずして、死せむが爲めの悟り也。釋迦は人生の四苦に感じて解脫の途を說きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永世の道を開きぬ、解脫や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の說ける哲學の旨趣も亦是に外ならざる也。天地人生の理法を明にするは、人をして安心立命の地を得せしむるにあり。安心立命とは所詮は死を安からしむるの謂に非ずや。道德は現世の爲めにのみ存するものにあらず、名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言はゞ、是即ち死後の世界を言ふなり。あはれ其生を見て其死を見ざる者は、人生の根本を遺れたり。死は凡ての物の終りにして、又凡ての物の初めなれば也。

されば人々死を考へよ、死を考ふるは即ち人生の目的を考ふる也、如何にして生くべき乎の問題は即ち如何にして死すべき乎の問題也。死を考ふるは死滅を考ふるに非ずして永生を考ふる也、死は人生の究竟なるが故に永生は人生の目的也。夫の生死の優劣を爭ひ、人生の價値を疑ふものは愚なる哉。吾等は生を知る、未

提携して其の永遠の成功を期するの外は無いと思ふ。諸君世の中に神樣ばかりがあつたならば進歩と云ふことも無いのである。吾々は不完全な缺點の極めて多い人間であるのである。不完全な丈に缺點の多い丈けに今日是の如き會合の下にお互に性格の修養に力めることの必要があるのである。吾々の丁酉倫理會の事業も是の點に關して何等かの効力があるならば是れ吾々及び諸君の幸福のみでは無からうと思ひます。

（卅三年三月演說）

死と永生

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。夫れ唯免るべからざる運命なり故に又避くべからざる問題也。されど世に生を惜む人はあれども死を惜む人は少く生に就いて慮る人はあれども死に就いて考ふる人は稀なり訝しからずや。

話しが永くなりましたが、畢竟するに吾々は吾々の位地、吾々の性格、吾々の境遇に従て、それ〴〵爲すべき事柄があるのであらう。是は決して抽象的に言ふのではない、各自が自分の境遇に對して能く考へて見たならば、必ずあらねばならぬと思ふ。そこに安ずることの必要が一方にあるし、さうしてそこに往く迄は決して安ず可からざる必要が他方にあるのである。今日人間以外の者、一枚の葉にも、一介の石にもそれ〴〵の天分があつて、彼等は知らずして己れの天分を盡して、さうして大なる世界に是の如き大なる調和を與へて居るのである、誠に尊い仕事を爲しつゝあるのである。然るに人間が然い自由の意志を持て發達して居るが爲めに、自分の天分を等閑にし、往く可からざる處に往かんとし、居る可からざる處に居らんことを冀ふと云ふことは天の授けたる大なる恩惠、即ち自由と云ふ事を濫用したものであると思ふ。是の如き濫用のある爲に世の中に色々の不調和があるのである、大豪傑も出ないのである、大なる事業も世の中に爲されぬのである。——諸君、くれ〴〵も斯く言ふは易いが、さて行ふことはなか〳〵難い。詰りは宗教の教會に於けるが如く、是の如き理想を有し、是を實現せむとの希望を有する人々が互に團結

見る所である。日々の新聞紙は是等の事實を傳へて倦まないのである。

諸君、文學は高尚な者であると謂はれて居る、恰もダンテの考へた如く、ミケランゼロが美術に就いて考へた如く、所謂る文學者は其の初めには非常に高尚な考へを持て居ても、何時しか浮世の名利の爲に誘はれて或は商賣人になる人もある、或は學校の教師になつて餘念の無い人もある、さう云ふ人は多々あるのであります。是等の人々は皆自個の天分と云ふことを自覺したのか、或は自覺し得なかつたのか、或は自覺しても之を行ふ力がなかつたのか。初めの覺悟は迷ひで、今の迷ひが悟りであつたのか。

諸君、教育者は今日年功加俸とか恩給とか言つて、色々の奬勵方法によりて鞭撻せられつゝある。けれどもお可笑いことではありませんか、諸君若し金持に成りたければ相場をやるが宜しいのである、商賣をするが宜しいのである。金を儲けんが爲めに教育者となると云ふのは抑々の心得違ひであるのである。さう云ふ精神であるならば、直樣辭職しなければならぬのである。諸君年功加俸とか、又は恩給とかに依て初めて奬勵せらるゝ教育者が世の中に何程の益を爲すであらうか。

何れも其の天分の自覺の確乎たる人であつた。釋迦は天上天下唯我獨尊と言つたのである、孔子は天德を吾に下せり桓魋それ吾を如何せんと云ふことを言つたのである。

斯う云ふことは誰しも御存じのことで、私が今日御話しする迄もないのである。斯の如く言ふことは何より易いことでありますけれども之を行ふといふ事、是を行い得る樣に吾々の精神を修練すると云ふことに至ては、大に困難なことであらうと思ふ。今日の社會などに於て、自分の往くべき道を往き、爲すべきことを爲し、居るべき處に居ると云ふことを能く辨へて、そして辨へるのみならず、それを實行する爲めに努めつゝある人は如何程あるかと考へますと、吾々は實に慨嘆せざるを得ぬのであります。今日では政治家とか實業家とかは腐敗して居ると謂はれて居る。又學者、普通人よりも自己の天分を承知して居るべきはづの學者はどうでありませうか。今日の學者の多數は、謂はゞ體の良い辯護士である。左に向てエースと言つた、其の同じ事柄に向て同じ口で右に對してはノーと言ふのである。エースと言ひノーと言はせるものは何であるかと云ふと、金である。さう云ふ事實は吾々の現に

喝采を受けつゝあつた。けれどもキヨルチルは自分の天分は、此際詩人となつて終るべきものではない、祖國の滅亡を眼前に見ながら默視して已むは國民として有るまじきことであると云ふことを自覺したのである。其のアスペルンの戰の凱歌を聞く際にも、國民の呼聲に對して一種の謂ふ可からざる苦痛を有つて居つたのである。彼れは遂に予のファテルランドが吾を喚ぶと言つて、他の人が美む所の最も幸福なる境遇を捨て、其の最愛の妻をも去て、單騎軍に投じて遂に死んだのである。實に此のキヨルチルの如きは天分を自覺して、そして之を實現することに努めたる人である。而して是の天分の自覺と實現との爲に彼は實に一個の愛國者として、又一個の詩人として不朽の名譽を得たのである。

斯う云ふ例は美術家や詩人の中には澤山あることでありまして、美術家の内には其の爲に餓死した人もある、乞食になつた人もある、首を斬られた人もある。併ながら斯様な迫害を受ける迄も、尚自分の藝術上の執心を捨てることは出來ぬ、飽く迄藝術上の良心に忠實ならざるを得なかつたと云ふことは、實に歎美すべきことである。否美術家の如きは其の一例であるが、古來より大聖人大賢人と云はるゝ人は

らうと思ひます。

それで私の望むことは、人々各々天分を自覺して、さうしてそれを實現することに力むる事であります。此天分を自覺して是を實現した人は、昔から最も得難い所の人物である。其實例は一一諸君の前に申上ることはくだ〳〵しいことに思ひますから申しませぬが、殊に大なる學者、大なる文學家、或は大なる美術家とか云ふやうな人は、皆この自分の天分を自覺して、此を實現する爲めに、如何なる迫害、如何なる不幸に陷るも顧みないと云ふ熱心のある人々であつたのである。例へばダンテの如きである。諸君、ダンテは自分の故郷を放逐されて、吾は終生フローレンスを見ることが出來ないと嘆じた。併しながら是の如き迫害の下にありても尚ほ其筆を止めることが出來なかつたのである。

諸君、獨逸の詩人テオドル・キョルチルと云ふ人は、ナポレオンの爲に將に滅ぼされんとした獨逸帝國の獨立の義戰に赴いて打死をした人である。其年を問へば僅に二十三歳で死だのである。彼の二十三歳迄の生活は實に幸福なるものであつた。死ぬる少し前までは、墺地利亞の維納に居つて、劇場の一詩人として非常なる

とは出來ないでのある。恰度それと同じ例は、往年亞米利加のミシシピー河大に洪水のあつた時、一人の電信技師の行爲に現はれたのである。其電信技師が實に歎美すべき行ひをしたのである。どう云ふ行ひであつたかと云ふに、此電信技師が中央電信局から洪水の模樣を報知すべき命令を受けて、其報道に從事して居つた。所が、其電信技師の居つた電信局も水に浸されて、さうして二階まで水が浸しつゝあつた。けれども電信技師は少しも自分の身の安危は考へず、水將に自分の膝を沒し、腰を沒して來る迄も報知の手を止めなかつたのである。洪水は遂に首を沒し口を沒し、今や將に死せんとするに臨で、今吾れ死すと云ふ最後の電信を發して死だと云ふことであります。諸君、是の如き電信技師は非常に勇氣のあるものではあるまいか。斯樣な勇氣は何れより得來つたかと云ふと、外でも無い、彼は己れの天分を能く辨へて、さうしてそれを實行するだけの精神の修練があつたと云ふことに歸着しなければならぬ。斯う云ふことは非常な例でありますが、若し總ての人が斯う云ふ修練を實際有つて居つて、さうして平常社會に於て之を行つたならば、例へば今日日本の社會にあるが如き幾多の嘆かはしき缺點はなかつた

たでございましようが、往年地中海に於て英吉利のヸクトリヤと謂ふ軍艦が暗礁に觸れて沈むだことがあつた。さうして當時ヸクトリヤの沈むだ狀態は、到底多數の人が助かることの出來ない有樣であつた。船體は次第に傾きつゝあつた、而して船員の運命は數分時間に決せらるゝの狀態であつた。其時ヸクトリヤの艦長は、己れの支配して居る艦の最後の見廻をした時に、甚だ歎美すべき事實を見出した。それは何であるかと云ふと、五百人の乘組人員は各爲すべき事を爲して居る。數分時の後に己れ等の運命は如何になり行くやを知らざるものゝ如く、鐵砲を磨くべき職に在るものは鐵砲を磨き、掃除を爲すべき役にあるものは掃除を爲して居る、皆それ〳〵の任務を盡して居つて、今艦の傾きつゝ將に沈沒せんとする恐るべき事實を知らぬかの如くであつた。それでビクトリヤの艦長は、英吉利の今日あるは、ビクトリヤの如き脆き軍艦のあるが爲めではなくして、此の如き天分を知て是に安じて居る兵士が多かつた爲めであると云ふことを歎美したのであります。誠に己れの安ずべき所、己れの爲すべきことを自覺して、其自覺を以て神とも仰ぎ佛とも仰ぎ、そして活動しますれば、其人の勇氣は死と雖ども迫害するこ

しながら當時宇多天皇の御心が菅公に知れたならば、言換へれば其天分を知つたならば、そうして是の天分の自覺の上に斷乎たる行動をすることが出來たならば斷然右大臣をも、又後に至りて太政大臣の內命をも受けなければならぬのである、受けてそうして藤原氏を抑へなければならぬのである。然るに菅公は知足と云ふことを悟り得たものであると云ふ理由で、歷史上に重せられて居る。是れはむしろ菅公の爲めに大に惜むべき事であり、又悲しむべき結果を生じた原因でもあると思ふのである。（全集三卷一九九—三〇〇頁參照）

兎に角知足と天分と云ふことは、道德の根底が違ふ。一方は極端なる個人主義、一方は己れの幸福のみならず、己れの屬して居る團體の幸福をも認めて、其團體の幸福を進める希望の上に自己の安心を有つて活動するものでありますから、道德上の根底は全く違ふのであります。それであるから天分を知て行ふ人のする仕事には、到底個人主義、即ち足ることを知ると云ふ道德の上に活動する人の夢にも眞似ることの出來ない尊い性情を顯はすことが出來るのであります。

諸君、更に一二の極く卑近の例を諸君にお話致しませう。或は御承知でもあつ

東洋の知足主義である、私は菅公の知足主義に對しては同意することは出來ないのである。菅公の當時の歷史は茲に言ふ迄もありませぬけれども、菅公が宇多天皇に拔擢せられたることは、私の考へでは、宇多天皇が藤原氏を抑制すると云ふ大御心があつた爲めに違ひない。當時藤原氏の勢力は非常に盛なものである、宇多天皇御自身さへ基經の御蔭で天皇の位に登ることが出來られたのである。それであるから藤原氏の權勢は非常なもので、時としては天皇の大權を無視して、暴戾至極の行をした、かの阿衡問題の如きは其の最も著しき例である。是の藤原氏の暴戾を抑制する爲めに、菅公を拔擢せられたのが、即ち宇多天皇の御心であつたと云ふことは、今日疑ふことの出來ない事實であると思ひます。さう云ふ風に菅公が宇多天皇の御心を受けて、藤原氏を抑制すべき位置に居る、即ち天分を有つて居る。然るに右大臣になつた時には三度まで辭退した、是れは當時の慣習たる形式上の辭退とのみ見ることの出來ない遣り方であつた。つまりは其身の危きを恐れて其位を退かうとしたのに過ぎないである。――願くは早速臣の職を止めて貰いたい、是のまゝ高官に居ては是身が危いからと云ふ主義であつたのである。併

るかの如くに考へて居る。けれども諸君、高踏勇退と云ふことの中には如何なる道徳主義がありまするか。一身を保つの外に君主もない、國家もない、何もないのである。是れは吾々の所謂天分を知るとは雲泥の差違があるのである。

諸君、吾々は天分を知らなければならぬ。さうして啻に知つたのみならず、是の天分を行ふと云ふ大執着心を起さなければならぬ、大煩惱心を起さなければならぬ。さうして是を成し遂ぐる迄は死ぬる迄も進まなければならぬ、如何なる敵とも鬪はなければならぬ。吾々の天分を知るとは積極主義である。今玆に假りに天分主義と名付けることが出來ませうと思ひます。

諸君、それで東洋流の知足主義の一例を歴史上より擧げますれば、歴史上に於ける菅原道眞の行動でありまする。今日菅公と云へば、人間として殆ど缺點の無い理想的の人物の如く人々が考へて居る。菅公が右大臣になつた時に三度辭表を奉て辭したと云ふとは、菅公が謙讓の美德を有つて居つたのだ、若し何か野心を有つて居つたならば、太政大臣の内命をも請けたであらうが、菅公のみは足るを知つた、誠に立派な人物であると、かやうに菅公を嘆美することになつて居る。が、是は

げればならぬと云ふのである。老子なども『足るを知れば是れ富めるなり』などゝ消極的に人に安心を訓へて居る。けれども足るを知ると云ふことは、個人主義の最も悪い思想で、自分一個人さへ安心であり、幸福であればそれで宜しいと云ふことに歸着するのである。知足主義は少しも社會を言はぬのである、家族を言はぬのである、國家を言はぬのである、況むや人道と云ふ如き思想は毫頭無いのである。唯己れ一身に於て足るを知らなければならぬ、さうでないと己れが危いと云ふに過ぎない。即ち極端なる利己主義、個人主義である。併しながら此天分を知り知て之を行ふと云ふことは、己れの他に家族あることを認める道德主義である、社會あり國家あり人間あるを認める道德主義である。自分のみ良いのみではならぬ。天分と云ふことは、社會と國家に對する職分を自覺して是の職分の爲めに死するまでも退かぬ、若し其職分を得たならば、そこに安せよと云ふ積極主義であるのである。即ち個人主義、極端なる利己主義の道德たる知足主義とは非常に違ふのであります。然るに東洋では知足と云ふことを大へん良いことに思て居る結果として例へば功成り名遂げれば退く、高踏勇退と云ふことは、一の英雄の資格でゝもあ

多の不可思議なる物語を以てそこに附加へられて居る程であります。詰りはジャン・ダルクと辻占賣とは其境遇に於てこそ大へんな違ひもありますが、併しながら己れの天分を知て是を行ひ、若くはそれに安じたと云ふ點は一樣なる事で、吾々には等しく尊むべき教訓として見られなければならぬと考へまする。

諸君、斯う云ふ風なことを言ひまするると、何か天分を知ると云ふことは、足るを知ると云ふことゝ同じやうに聞へまするが、知足――足るを知ると云ふことゝ天分を知るとは實際大へん違うのであつて、この天分を知ると、足るを知ると知ふことの間には、道德上の主義に於て相容れざる差別があるのである。足るを知ると云ふこと――爰に知足主義と假りに名けませうが、此知足主義は東洋流の最も惡い道德の主義である。今日に於ては決して吾々が尊むべき筈のものではなからうと思ふ。尊むどころではない、却て排斥しなければならぬものであらうと思ひまする。昔から東洋では斯う云ふ考へが大へんあつた、高明の家は鬼神之を窺ふとか、或は喬木は風に倒されるとか云ふことを云つて居る。詰り是はあまり自分の位置が高くなる時には、其身が危くなる、それ故足ることを知て程良い所で止めて置かな

々にとりて一つの尊むべき教訓があるのである。——是話は誠に詰らぬことでありませうが、併しながらこれと同じ事柄を私は毎々歴史上の大なる事柄の中に發見しまするのである。

諸君例へば佛蘭西の百年戰爭の救主とも云ふべきジャン・ダルクの事は如何であるか。ジャン・ダルクと辻占賣とは甚だしい相違ではありますが、自己の天分を知り、そしてそれを行ひ、それに安じたと云ふ點に於ては少しも差別はありませぬ。若し私の想像した通りの辻占賣でありましたならば、佛蘭西のジャン・ダルクと彼れとは大した差ひはなからうと思ふ。ジャン・ダルクは十六歲の少女でありました。百年戰爭を御承知の方には言ふ迄もないが、當時の佛蘭西は英吉利にさんざんに破られて、唯オルレアンの城のみが國家の命運を一髮の間に繫いで居る。其時にジャン・ダルクは、吾は佛蘭西の救主として生まれたものであると信じて、さうして是の信仰を實行したのである。人が氣違と笑ふにも拘はらず、危險と戒むるにも拘らず、此十六才の一少女の身を以て、今や將に倒れんとする佛蘭西國を助けやうと志し、そして是の志を實際行ふたのである。其決心の鞏固なることは今日に於て幾

ふる晩も、相變らず戀の辻占を面白可笑しく呼びあるくのである。少し變つたと認められるのは、昔の美はしい音聲がいつしかさびれて、哀れつぽい老年の悲しみを帶び來つたと云ふとのみである。諸君、辻占賣の呼聲を聞きまするど、(私一個人の感情を申し升ると)私は一種の何とも言へぬ教訓の聲を耳にする心持がするのである。御互に青年と云ふものはなか〳〵空想の多いもの、野心の多いもの、希望の多いものである。自分が獲ざる所を獲やふと思ひて、爲してはならぬことも爲さうと云ふ。隨分空想の爲めに苦しめられて居るものである。然るにさう云ふ空想の盛に起りつゝある時にこの辻占賣の聲を聞きまずると、恰も熱して居る頭に冷水をあびせられたる如く、人間の天分と云ふことに就いて何となく考へ到るのである。辻占賣はどう云ふ考へで其辻占を賣て居りますか、それは知りませぬ。併しながらもし萬一私の想像する如くであるならば、彼れは盜賊にもならず、相塲師にもならず、今日まで辻占を賣て居るのを見れば、其精神に安ずる所があるのではあるまいか。六ヶしく言へば自分の天分を知て居るのではあるまいか。さう云ふことが果して有るか無いか知りませぬが、若しさうであつたとすれば、爰に吾

話しゝたいと思ふのでありまする、

諸君、諸君の内に本郷の駒込附近に御住みの方があるならば、私の御話しすることは諸君は既に御承知のことでもあらふと思ひまする。駒込附近には夜になりますと往々辻占賣が參りまする、其邊には辻占賣は幾人もないのである、恐らくは一人しかありますまい。あの辻占賣は私が本郷に住むで六七年以來知て居りまする。呼聲は何と云ふかよくは覺えませぬが、仕舞の方が『花の便り戀の辻占』と言ひまする。其花の便り戀の辻占と云ふ哀れつぽい呼聲は今日でも聞くことが出來るのであるが、私は六七年以前の本郷に住み始めの時にも聞いて居つたのである。恐らくは六七年よりか遙か以前から此辻占賣はあの邊に辻占を賣つて居たのであらふと思はれるのである。私の友人の一人は此辻占賣が太へん氣に入りで、少し興に乘ずると其の眞似をして樂で居た人すらあつたのである。所が吾々の今日の境遇と云ふものは吾々の辻占賣を嘆美した六七年以前の時とは甚だ變つて居る。獨り吾々の境遇のみならず、吾々の住で居る此社會も非常に變つて居る。併しながら諸君、此辻占賣のみは少しも變らぬのである。雨の降る夜も、雪の

諸君があるとすれば、即ち五百の世界があると云はなければならぬ。其中には大きな世界もあらふ、小さい世界もあらふ、低い世界も高い世界もあらふ。詰りは一人を以て世界として居るものもあるであらうし、一村を以て世界として居るものもあるであらうし、又一つの地方を以て、世界として居るもの、或は一つの國を以て、或は全體の世界を以て世界として居る人もあるであらう。主觀的に見れば己れが住むで居る世界と云ふものは、強ち理解し惡いものではなからうと思ふ。是の主觀的の世界、即ち是れ各人に對する實際的世界に外ならぬのである、其世界に於ての己れの位地を自覺し、さうして是自覺に基いて自分が行動をする、働をすると云ふことは、強ちにむづかしいことではなからうと思ふ。唯むづかしいことは、此自覺を行ふと云ふことでありまする、是の行ふと云ふことが吾々の大なる困難を感ずる事である。是の自覺を實際行ひ得た人が世の中にあれば、其人は大人物である、大豪傑である。諸君、吾々が諸君と共に務めなければならぬ事は自覺的の生活を辨へて、さうしてそれを實際に行ふと云ふ精神の道德的修練であらうと思ひまする。それに就いて私は詰らぬ例ではありますが、二三を例を擧げて諸君に御

はむつかしいでありませう。如何にも理論の上から云へば一個人は一個人として生活するのでは無くして、世界の一人として生活するのである。然るに世界は過去に於ては數千年の歴史を有つて居るし、そして何億何萬年と限りなき將來を有つて居るのである。さう云ふ長い歴史を有つて居り、さう云ふ永い未來を有つて居る是の世界であるからして、理論の上から申すと、己れの境遇、己れの位地と云ふことを自覺すると云ふことは到底出來ぬことである。それを自覺するには是の大なる世界の昔からの歴史を知らなければならぬ、將來往くべき處も明らめなければならぬ、さうして現在の總ての事柄をも考へなければならぬ。一個人は一個人で生活する者でなくして、桑木君の言へる如く、社會的に生活して居るのである、社會は社會の上に國家の一要素として存在して居るのである。國家と雖も世界の一國としての外は存在し得ないのである。されば客觀的に一個人の位置を考へますれば、それは〱極めて複雜なもので、人間業の到底解し得ることでない。併し實際上から考へますれば、強ちさう云ふむつかしい事ではないのであります。世界と云ひまするが、實際各個人の考へ居る世界はそれ〱違ふのである、此處に五百人の

たるが、其の言葉の中に一の警句があつたのを記憶して居ります。それは今日其財產を以ては百世の子孫を養ふことの出來る人多々ありますけれども精神上に於ては一日暮をして居らぬ人が如何程あるであらうかと云ふ事を言はれたのである。實に今日の時弊を穿つた語であると思ふ。諸君、今日巨萬の財產を積で居る人は幾らもあるけれども、精神上の富を有する者は甚だ少いのである。彼等の多くは毫も知らぬのである、又知らむとも思はぬのである。抑ゝ彼等は何故に世の中に住で居るか、何故に此の如く金を儲けて貯へなければならぬのであるかと云ふことの理由をば少しも考へないし、又考へ樣ともせぬのである。縱しむば考へた所が、其考へ、其の自覺が間違て居ると云ふことは、隨分多いことであらうと思ふ。詰り斯の如き人は、即ち自分の天分を自覺せず、只何となしに茫々然として此の世の中に生活して居る人、所謂醉生夢死の人と云はなければならぬのである。此醉生夢死の人が今日甚だ少なくないことは吾々の甚だ慨嘆に堪へざる次第であります。

諸君、天分を知ると云ふことは、強ちにむつかしいことではなからふと思ひまする。如何にも大なる此世界の上から自分の位地を打算すると云ふことであれはそれ

使用したものであると思ひまする。詰り人間が禽獸に異なれる重なる點は、自覺的動物であると云ふことに歸着する。犬は牛肉と云ふ旨い物は知て居らうが、己れ自らは知らぬ、己れ自らが何の爲に牛肉を食ふかと云ふ樣な事は少しも知らぬ。猫は鰹魚節と云ふ旨いものは知て居らうが、是の旨い物を食ふものゝ己れ自らなることは知らぬのである、何の爲に食ふかと云ふ事も知らぬのである。然しながら人間は己れと云ふものに就いての知識を有つて居る、知識を以て居るのみならず、己れが爲すべき事、居る可き處、往く可き道を知て、此自覺に基いて活動するのが人間の人間たる所以である。是が人間が下等動物或は自然物と違ふ所の重なる點であらうと思ひまする。されば我々人間として務むべきことは、自覺的生活である。人間は自分を知り、又社會を知る所の自覺心を有するものであるから、此自覺心に基いて、さうして自分の行爲を規定して行くことが、即ち人間の道德的行爲であるし、さうして又人間の下等動物と違ふ所の要點であると思ひまする。自覺的生活、是れを吾々は求めなければならぬのである。

前會に於て姉崎君は色々今日の道德上の狀態の甚だ低いと云ふことを慨嘆され

此の意識、自由の意識を有つて居る人が、斯く自由の意識を有つて居る爲に却て往々にして天分を果さゝる事があるのである、さうして其爲に己れ一個人の不幸のみならず、己れの住で居る社會の不幸、從て己れの社會の屬して居る國家、世界の調和を破ると云ふ不幸が往々あるのである。　詰り私の今日御話をする大趣意は、吾々人間は銘々天分を知て、さうして夫れを行ふ所の修練を努めなければならぬと云ふことに歸着するのでありまする。

諸君、天分を知ると云ふことを、もう一層具体的に申せば、己れと己れの住で居る世の中との關係上から、己れの爲す可き事、往く可き道、居る可き處を辨へると云ふ事に歸着するのでありまする。　吾々はお互に生れた所も違て居る、さふして生れた後に於ても、其性質境遇はそれぞれに違ひがあるのである、それぞれの違つて居る性質境遇に從て、さうして其人の住で居る社會との關係上から爲す可き事があらう、往く可き道、居る可き場所があらねばならぬと思ひまする。　それで自覺——自分の爲さゝる可からざる事、又爲す可き事を自分が心の中より自覺して、さうして是の自覺に基きて活動すると云ふことは、人間が天より賦與された自由を最も立派に

して居る必然の結果であらうと思ひまする。即ち一枚の葉も、一塊の石もそれ〳〵其の爲すべき事を爲し、往く可き道を行き、又居る可き處に居る如く、天地間の總ての物が其天分を果した結果、是等の物を包含せる天地其物が調和して進んで行くことが出來るのであると思ひまする。唯是等の自然物は、吾々人間の如く意識がない、無意識にして知らず〳〵其職分を果して居るのであらうと思ふ。我々の見る所では、調和のある所、其處には天分が果されて居る。先に桑木君の言はれたる通り、吾々の身體に健全なる機關あればこそ、身體の總てが健全に調和的に働いて行く事が出來るのである。耳は耳、眼は眼、胃の腑は胃の腑の働を健全に爲した結果、身體全體のこゝに調和的活動が出來て、人間其物が健全に存在し、發達する事が出來るのであらうと思ひまする。人間以外の意識のないもの、若くは意識の發達しないものは知らず識らずの間に、天然が彼等に與へたる天分を果し、行く可き道を行き、爲す可き事を爲して居るのであるけれども、吾々人間は彼等よりも高尚な自由な意識を以て居る、而て是の意識に本いて始終行動をして居る。此樣に意識的に行ひをすると云ふことは即ち人間の人間たる所以でございませう。然るに

まする。

唯今桑木君がなされたる『健全なる思想とは何ぞ』と云ふ御論は、甚だ有益に且高尙なる學術上の御話でございまして、諸君も定めて御滿足であつたらうと思ひまする。然るに私のは左樣な學術上の高尙なる御話ではないので、極めて卑近な、云はゞ常識上から割出したるまことに詰らぬ御話であります、――甚だ恥入りまする次第で是點は前以て御斷りして置きまする。

諸君、天分と申しまするとえらい事の樣でムりまするが、私の考へまするには、此世界中の總ての物は、其もの丶性質、そのものに存在する境遇に從て各爲すべき事、進む可き道、又居る可き處があるであらうと思ひまする、是の分に應じたる事と道と處とを天分と假りに名付けたのでありまする。そして天分と云ふことは、人間社會に於てのみ云ふべきことではなからうと思ふ、即ち一枚の木の葉でも、一塊の石でもそれ〴〵の天分があり、且それ〴〵の天分を盡して居る。此の極めて複雜なる世界が大いなる矛盾もなく、衝突もなく、滑かに調和して進み行くことが出來ると云ふのは、詰りは其葉なり、石なり、自然界の凡ての物が各〻其天分を盡

の信仰のみにて滿足はせずに、何故に故らに斯かる教會と云ふ樣な外形的組織を作るのであるか、是には必然の道理があつて存するのであります。何となれば信者が銘々の心の中に信仰を持て居るばかりでは甚弱い、甚心細い、動ともすれば外界の強い力の爲に動かされ易い、それ故大勢の人と團結してお互に其信仰を維持し進歩せしむる爲めに竝に教會と云ふ樣な外形的組織を要することになるのである。それと同じ理由で此の丁酉會も社會に存在する必要があると考へまする。

諸君、言は誠に易いものである、恐らくは吾々が言ふこと位は諸君既に御承知でありませう。又吾々とても、昔の聖人賢人と同一の言葉も隨分言ひ得ないのでは無いのである。けれどもそれを行ふと云ふ一段に至ては、甚だ慚愧の至に堪へませぬが、なか／＼出來難いのである。若し御互に是の行ふと云ふことが出來るならば、又出來たならば、吾々は諸君に向て是の如き丁酉會を組織し、又此の如き詰らぬ御話をする必要もございますまいし、又諸君に於ても吾々の此會にお出になる必要もなからうと思はれる。兎に角吾々は吾々の道　信じ、義と尊べる所のものを諸君に御話し、其理想を御互に固めて、各その職分を盡したいと思ふのでござい

人の天分

諸君、昔し西洋の或る學者が、青年の爲めに一場の演説を望まれた時に、其學者の答へて言ふたには、吾は青年の爲めに語ることを憚る、何となれば未來の英傑は必ず彼等の中にある可ければなりと。私が今日この演壇を瀆しまするのは是の古の學者の言葉に對して、深く耻ぢ入りまする次第でムりまする。

併がら前會に於て姉崎正治君が我丁酉倫理會の趣旨を申された時に言はれたる通り、吾々丁酉會員は牧師が説教壇の上から信者に御話しするやうな態度を取て御話するのでは毛頭ないのである。又吾々が御話しすることは、吾々自身が實際行ひ得た事でもないのである。唯吾々が道と尊び、義と信ずる所の理想を諸君に御話して、さうして諸君と吾々とお互に相提携して、是理想を實現することに力めやうとするのに外ならぬ次第である。喩へて言はゞ、宗教に所謂教會と云ものゝあるやふな譯と同じでありまする。御承知の如く總ての宗教に教會と云ふものがある、あれは一寸考へまするると不思議の現象のやうに見へまする、何故に内心

　　リテンの子供等よ、何ぞ自ら保たざる。』

是の如きはテニゾン氏の帝國主義也、而して同時に英國の帝國主義也。今やキップリング氏は、帝國主義の詩人たるの故を以て、名聲天下に轟けり。然れども、ハスフォールド伯が加奈陀の放棄を説き、グラッドストーン氏が愛蘭土自治に熱中する時に當て、是の如き思想を宣傳したるテニゾン氏に頒つに同一の名譽を以てせざるは訝しからずや。帝國主義は文學上キップリング氏によりて創唱せられたる主義に非ず、氏に先つこと少くとも二十年の往時、既にテニゾン氏によりて最も明かに宣傳せられたる主義なり、而して獨りキップリング氏を以て帝國主義の詩人と爲すは何ぞや。大凡そ時勢と詩人の遇不遇は、實に是の如き也。機尚ほ熟せず、勢未だ成らずむば豫言者の聲も世に解せらるゝに由無し、一旦風雲に際會すれば、凡夫庸者尚ほ勞せずして飛躍し得む。一人にして時勢を作るは得て望むべからず、大なる成功は唯時勢を見て是に乘ずるにあり。而して時勢は如何なる世に於ても必ずしも功を成すに可ならず功を成すに可なるの時勢に遭遇すると否とは、所謂天運のみ、人力の如何ともする能はざる所なり。

（三十二年十月）

如きは果して英吉利帝國の言ふべき言なる乎吾等を司配者たらしめし信念は、果して是の如きものなりし乎。

當時の人心は彼れの豫言に耳を傾けざりき、然れども今や彼の詩は英國政治家の政略と爲れるに非ずや。彼れ同じ詩に於て更に是の意を述べて曰く、

吾等の王室に忠なるは、即ち吾等の子孫に忠なる所以也。吾等の大英國の爲に是の島帝國と、其の無數の屬領と、其の東洋の大半島とを愛護せよ。哀い哉、我島帝國は、尙ほ未だ自國の大なることを自覺せざる也、若し自覺するに及びて自ら其の大いなるに畏怖せむか、吾等は即ち滅びたる也。(意譯)

今日英國政治家の唱道する『帝國同盟』もしくは『植民同盟』の思想も、亦明にテニソン氏の主張せる所なり。

吾等の名譽ある過去に於て相提携したる吾等兄弟は遂に別れざるべからざる乎。凡ての禍福、凡ての變遷を通じ、吾等は一國民として團結する能はざる乎。耳を傾てブリテン國民の聲を聽け、『子供等よ互に力めて一帝國たれ、心よりして一ブリテンたれ。唯一個の生命唯一個の旗幟、唯一個の王位――呼ブ

に過ぎざれり』と。是の如き非帝國主義の風潮に反對したるものは、政治上に於ては、フォルスター氏にして、文學上に於ては實にテニゾン氏なりき。

吾人の見る所を以てすれば、テニゾン氏の帝國主義は、千八百五十二年に於て既に其の萌芽を現はせり。氏は小奈破翁の暴横に反對して歌て曰く、

吾等の存する間、良し全歐洲の暴風吾等の上に落ち來るとも、吾等は自由に主張せざるべからず。吾等は日耳曼の一聯邦に非ず、歐洲の一大國也、吾等は飽迄自由に主張せざるべからず。良し吾等にして爲に斃るゝとも、吾等の事業は永遠に傳はるべし（意譯）

是の愛國の感情、後に到り最も熱心なる帝國主義の鼓吹となりて表はれたり。[illegible] of the King の跋として女皇に呈したる一小詩は、純然たる帝國主義の主張也。曰く

吾等は近頃北方の植民地に就いて吾等を侮辱する宣言を耳にせり。曰く『北方の友よ、汝自ら汝の事を爲せ、今の如き狀態にありて初めて忠義たり得べくむば、忠義は汝にとりて餘りに不廉也。友等よ、汝の王家に對する愛情は、汝にとりて寧ろ重荷たらむのみ、若かず束縛を解きて分離し去らむには』と。是の

也。即ち是れ現代英國の勢也、時代精神也。キップリング氏は偶〻是の勢に乘じて、一代民衆の渇仰に明晰なる發聲を與へたる者に外ならず。然れども焉ぞ知らむ、歴史上帝國主義を唱へたる最初の詩人は、キップリング氏に非ずしてテニゾン氏なるを。英國の政治家が、夢にだも想ひ到らざりし時に當りて、早くも帝國主義の新福音を宣傳せし詩人は、實にテニゾン氏也。然るに世に帝國主義の詩人としてテニゾン氏を言ふもの無く、今日却てキップリング氏の全盛を見る。吾人は轉た人事の成功の偶然なるを歎ぜざるを得ず。英國人の帝國主義とは、植民地統一主義の謂に外ならず。政治歴史の上に於ては、近年フォルスター氏が是の主義を唱道せし迄は、一國の輿論は非帝國主義に存したりき。即ちサー・ロバート・ピールが、上下加奈陀の獨立を主張せしは、千八百四十一年にして、ビコンスフヰールド伯が是に和して『斯かるつまらなき植民地』は放棄するに如かずと論せしは、千八百五十一年なり。

千八百七十年、史家フルードはグラッドストーンの説を引き、各植民地をして自治獨立せしむべしとの意見を公表せり。越て三年、『タイムス』新聞は當時の輿論を代表し、自治制度を加奈陀人に許すべきことを論じて曰く、『彼等が見習奉行の時期は既

識者は、其後に來るべき平凡兒の成功の爲に勢を造るの犧牲となりたりき。是の如きは啻に政治宗教の史上に於て見るのみならず、文學史上に於ても亦是を見る、而して最も近き例しはテニゾン氏なり。

今やキップリング氏の名聲は全世界に轟けり。彼れが三十七歳の一青年詩人にして、獨のズーデルマン氏、ハウプトマン氏、魯のトルストイ氏、那のイプセン氏にも優り、殆ど佛のゾラ氏と角逐して英語國民の間に崇拜せられつゝある情況は、十九世紀の文學史上に殆ど其類を見ざる奇觀也。往年彼れの北米に病むや、英國人は恰もグラッドストーンの病を憂ふるが如くに憂へたり。Kipling Shrine なる名辭は殆ど普通の用語とならむとせり。彼れの崇拜者は揚言して曰く、若し英國の國是にして變更することあらば、其の第一の聲はキップリング氏の口より聽かるべしと。盛なる哉、一青年詩人にして闔世の人心を籠絡する、彼れが如きは、少くとも英國文學の史上に於て殆ど見ざる所なり。而して是の如き名望の由て來る所は、畢竟彼れが帝國主義の詩人たるが爲に外ならず。

帝國主義が近年俄然として英國の人心を司配し來りしことは、隱れも無き事實

時勢と詩人

一尺の木、山巓にありて亭々として蒼空を摩す、木の高きに非ずして、居る處の高き也。世に勢なるものあり、是に乘ずるものは勞せずして功を收む。識必ずしも高きに非ず、力必ずしも強きに非ず、居る所の地おのづから然らしむる也。凡そ政治界にまれ、宗教界にまれ、實業界にまれ、古より時代の革新者として歷史上の功名を收めたるもの、多くは是の勢に乘じたる者に非ざるは無し。

所謂勢は時代の精神也、凡そ何れの時代と雖も其の精神を有せざるは無し、而かも其の精神は、凡ての時代に於て必ずしも統一せられざる也。成功の祕訣は統一せられたる時代精神に乘ずるにあり。其の未だ統一せられざるに當りて、將に來らむとする時代精神の統一を先見せるものを預言者と謂ふ。其識見高邁、遠く時流を拔けりと雖も、而かも勢を距ること尙ほ遠し、是れ其の事業の多く失敗に終る所以也。是を以て基督の前に預言者は迫害せられたりき、ルーテルの旗未だ揚らざるに先ちて、サボナローラの頸血は空しく濺がれき、維新の革新に先ちて、幾多の志士

り、人は流行を追ふて走る。 文明史家は十九世紀の全體を以て革命の時代と云へり、吾人は我邦の最近三十年に於て特に甚しきを見る也。 實に本邦現時の社會は猶ほ走馬燈を見るが如し、藝術家をして超然として靜かに觀察するの餘裕を得しめむが爲には、餘りに紛然たる社會也、餘りに囂々たる社會也。 是の如き社會の中、必ずしも有力なる精神と理想となきに非ず、但だ是の如きは今の凡庸なる文學者の單簡なる頭腦によりて解釋せられむには餘りに複雜なる也。 一言すれば、今の世に大なる文學の産せられざるは、文學者と時代と互に其責を分たざるべからざるなり。

論じて茲に到れば、大なる文學の出づるを望むもの、先づ時代精神の統一を望まざるべからず。 而して時代精神の統一は、必ずや教育道徳の主義の統一より初まらざるべからず。 是に於てか大公至正なる日本主義の必要起る。（全集二卷六〇五―六一一參照）

（卅二年四月）

て世に出でき。

菩提樹下に無上道を成すまでには釋迦は幾年の靜思を凝したり。基督は四十日間沙漠の中に冥想せり。マホメットはヒラの山上に沈思して幻影を見たり。ダンテはラヱンナの森林中に、セルワンテスとバンヤンは獄窓の裡に、何れも多年の默思を友とせり。スコットは軍馬の響の中にマーミオンを草し、ゲーテは祖國の傾危を知らざる爲して其詩篇に耽りたり。ヘーゲルはイェナ大戰の日正に其哲學の論稿を脫し、反て佛蘭西軍隊の街上に絡繹たるを見て問て曰く『是れ何國の兵ぞや』と。凡そ大なる創作の世に出づるや是の如きもの多し。是れ豈人生の眞義を觀ずるもの須らく寂靜中に於てすべきを證するものにあらずや。

吾人は是點より見て、今の我邦に大なる文學の產出せられ難き一の理由を見るも也。今の我邦にありては、時代の精神尙ほ未だ統一せられず、隨て一般社會はまだ一定の理想を有するに到らず、內外事物の變遷は日に其急激を加ふるのみにして、人各々安じて適從する所を知らず、一に當眼刻下の必要に制せられて其『今日』を經過するもの多し。されば世を擧て永遠の渴仰なく、沈靜の趣好なく、時尙旦暮に渝

あらざる也。

人或は謂ふ、興奮と激昂とは大なる藝術を生むと、吾人を以て見れば是れ其一を知て未だ其二を知らざるの言のみ。大なる藝術は大なる動機によりて生まるゝこと、誰か之を疑はむ。實に一念の動くや、日星の光耀、河嶽の流峙、何物の力も得て是を壅塞すること能はず、萬境一心に靡きて六合我の外に一物無し、是不撓の精力ありて萬古の名初めて成る。是意味に於て藝術家は向上不退轉の大勇猛心を有せざるべからざるや、言を待たざる也。而かも是の如きは物を以て我に攝するにあり、我を以て物に調するに非ず。萬境流轉の外に超然として、一心靜に是を觀取するの別天地を有するに非ざるよりは、如何ぞ過眼の形體以外、別に幽玄なる人生の意義を捉ふるを得べき。若し念々外界に執着して其の搖かす所とならば、見る所定まらず、感ずる所深からず、僅に日常の皮相を描きて了らむのみ。されば藝術家は世を知ると共に世の動かす所となるべからず、人生世相の流轉を一念の靜に寓して、而かも其の累はす所とならず、永く其純一の自我を保ち、翻て萬境を止水に觀ずるの覺悟あらむを要す。古より大なる藝術、大なる哲學、宗教、皆是の如くにし

だ曾て是れあらざる也。夫れ唯時代の鏡也、是を以て時代の精神常に動き、隨て其理想亦定まらざらむ乎、時代の鏡たる藝術は獨り如何ぞ雄大なるを得べき。止水にして初めて鑑すべし、風波搖蕩須臾も已まざらむ乎、是に醮映するもの、獨り沈靜なるを得べからざる也。若し藝術家にして時代の生兒ならば、彼れの心亦時代と動靜を共にすべし。若し對して寫すべき定在の精神なく、緣りて寫すべき靜止の心なくば、是の如くにして產出せられたる藝術、亦一旦夕の物ならむのみ。

吾人は我邦文學の振はざる所以を以て、文學者が時代を解せず、隨て顯現すべき其精神と理想とを洞察するの明無きが爲なりとせり。是れ今の凡ての文學者が決して否定する能はざる所なりとす。所謂時代の精神其物に就いては、吾人多く說き及ばず、是れ時代精神の內容如何に論なく、今の文學者なるものは是を靜觀し、批評するの能力無きを想へば也。實に吾人は今の時代に定在の精神と理想となきを認むると同時に、大天才に非ずむば是際に處して能く千古の名を成すことを得ざるべきを想ふ也。而して顧みて是時代精神の實在せざるをだに看取し得ず、其狹少なる管窺の中に喝吁して得たりとする今の文學者の大多數を憐まずむば

は、盛衰何が故に爾く相反せる乎。

是を我邦に見る、延暦遷都以後の平安朝の文學は、竹取物語以下源氏、狹衣、多武峰の諸物語に到るまで、典麗の文字獨り今古に俯仰せるに反し、源平以下の數百年は何が故に爾かく國民文學の蕭索を致しゝ乎。何が故に特に元祿、享保と文化、文政とは德川文學の精英にして、其間の一百年は何故に然らざる乎。化政より明治の二十年代に到るまでの六十餘年間に於て、何が故に我文學は爾かく甚しく衰頽したりし乎。

是の如き疑問は幾度びか問はれ而して幾度びか答へられき。想ふに是れ人文史上の根本問題に接觸せるもの、俄に斷了すべきに非ずと雖も、尙ほ一事の炳焉として疑を容れざるものあり。何ぞや、大文學の勃興は時代精神の統一に伴ふこと、換言すれば、時代の精神定まらざれば其文學亦雄大なるを得ざる事是れ也。夫の平和の世にあらざれば藝術起らずと謂ひ、或は物質的傾向盛なれば文學振はずと謂ふもの、吾[illegible]を以て見れば何れも是の眞理の一面を看取せるの言に外ならず。

夫れ藝術は畢竟時代の鏡也、時代の制約を離れて存在する藝術及び藝術家は未

て世界文藝の歷史に貢獻せる所のもの、百五十萬人の東京市は果して幾千年の後に於て匹敵し能ふべしとするや。ダンテや、ジオットーや、レオナルドや、ペトラルカ、ボカチオや、ギベルチ、マキャベリ、ミケランジェロや、是中の一人を有するも以て百世の天下に誇るに足る、而して是れ皆六千人のフレンシツが百數十年の間に於て產出せる所なりし也。フヰレンツェたるもの何の祝福ありて果して能く是の如きを得し乎。ミラノや、ナポリスや、將たヱ子チャや、當時の以太利に於て慥に彼れよりも大なる都府なりき、天の光寵は何故に是等の諸市には降らざりし乎。抑も又十六世紀以後のフヰレンツェ及び全歐洲は、何故に文藝史上に於て是の如き盛觀を再びする能はざりし乎。

是に於て同一の問題は、他邦の文藝に關して起らざるを得ず。曰く、チョーサーより大沙翁に到るまでの二百年間に於て、英國は何故に一の大詩人を出だすこと無かりしや。ミルトンの死よりヲーヅヲースの生まるゝまで百餘年間の英國文學史は、何が故に爾かく落寞を極めたりし乎。抑も又ニーベルンゲン時代よりレッシングに到る數百年と、其後に踵跡相接續せるゲーテ、シルレルの盛時を併せたる一百年と

を以て是れを見れば、一片上院の議案によりて合衆國々性の人道主義を言ふは、蓋し早計ならむ乎。想ふに是れ向來幾年の趨勢によりて事實の上に決定せらるべき歴史的一大問題也。

（卅二年三月）

日本主義と大文學

吾人文藝復興期前後の史乘を讀む毎に、常に一個の疑問を提出するを忍ぶ能はず。曰く、フロレンツェの一市は何が故に爾かく多數の詩人、美術家を產出する事を得たりし乎、而して是等文藝史上千古の盛名は、何が故に特に十五六世紀の間に於て爾かく多きを列ねたりし乎。

フロレンツェは眇たる以太利の一市也、史學者の告る所によれば、其最盛時に於てすら人口僅に六千に過ぎず。六千の人口は、我東京市の二百五十分の一、是を十五倍するも尚本郷區に及ばざる也、而して此の如き眇たる一市が僅々百數十年間に於

遮莫、西班牙に打勝ちたる合衆國は却て『帝國主義』の征服する所となれり。其建國の精神及理想たる人道主義、詩人クロップストックをして『人道の精靈爾を動かせり』と唱はしめたる其人權自由主義は、其一百年の名譽ある歴史を擧げて、一菲律賓群島にだも若かずとする乎。昔者ヂォルヂ三世治下の新英國人民は其の如くにして起たざりき。

* * * * *

是一論を草し了りたる時、恰も二月十六日、倫敦發の電報は吾人に告げて曰く『米西媾和條約の批准は決して菲律賓群島の永久保有を許せるものに非ず、米國は同島人をして自治政府設立の準備を爲さしめむと欲すとの意志を宣言する決議を廿二票に對する廿六票の數を以て米國上院を通過せり』と。嗚呼果して是ある乎。若し是決議案の動機にして眞に菲律賓民人の自由と人權とを保護するにあらば、北米合衆國の人道主義は尙ほ其命脉を保てりと謂ふべし。然れどもブライアン氏一派の反對黨が、現政府の政策に反對する口實は『菲律賓群島の併有は合衆國に經濟上の不利を來すべし』と謂ふにありて、多く其建國の精神と理想とを言はざる

唯吾人の望む所は究竟の自由と獨立とにあり、是點に於ては篤く合衆國人の人道主義を信憑する者也』と。菲律賓人の事業と彼等が米人に與たる幇助と、及び北米合衆國の人道主義と、倒懸民人の救濟者を以て任じたる其宣言とを認むるものは、良し大將デュキーの食言問題を言はずとするも、誰か同時にアゴンシリロの希望を是認せざらむや。吾人論じて玆に到ればアギナルドが『予は以上の事實を告げ、以て米國と吾々と、孰れか國民の虐壓者なる乎、孰れか人道の遂行者なるかに就て永遠なる宇宙天道の審判を乞はむと欲す』との慨憤に一片の同情を表せざるを得ざる也。

　吾人は以上の理由により、北米合衆國近時の行動を以て其國性の變動を標示するの事實となす。吾人は敢て土民を庇護する者に非ず、又米人を誹謗する者に非ず、唯自由と人權との上に建てられたる北米合衆國の國性としては歷史上矛看の行爲なるを論ずるのみ。而して米國にして若し菲律賓群島の併有を遂げむか、二十世紀の世界史は、其活動の中心となるべき東洋の局面に於て一新要素を加へたりと謂ふべし。

を援助せば必ず其獨立を幇助せむ』と。人あり米將軍メリトッに問ふに、アゴンシリロの言の實否を以てす。メリトッ答て曰く『大將デューキーは非律賓島民に對して正式の談判を遂げたるに非ざるべし、然れども予は大將の談話によりて、必ず是事ありたるべきを信ず』と。是事はアギナルドが香港よりマニラに上陸せる際、大將デューキーより受けたる熱心なる歡迎、且軍隊組織の幇助を受けし事、米軍が非律賓人民の自由保護者たるを宣言せし事、アギナルドが食言の罪を以てデューキーを痛罵せる等の事實に徵して、殆ど將に十分の依信を措くに足らむとす。果して然らば、米人は即ち非律賓島民を欺罔して、是を陷れたるものに非ずして何ぞや。良し暫く是事實を不問に附するも、非律賓島民が米軍の成功に與へたる援助は、十分に承認せられざるべからず。彼等が西班牙兵に反抗したる所以を以て米人を助け、彼等の自由の保護者を以て米人に依信したるは、寧ろ明白なる事實也。米人は何故に其德に報ゆるに其怨を以てせむとする乎。アゴンシリロは人の問に答て曰く『吾人は海軍を有せず、未だ以て一國として峙立するに足らざるべし。是を以て吾人は合衆國民が若干年の間準備政府を組織することに就いては、喜で是に應ずべし。

菲律賓併有が合衆國の國是に背戻せるは前述の如し。而して是戰爭に際して米軍に不正の行爲ありと稱せらるゝは合衆國の歴史上の一汚點として後來の考證を待つべきものなり、試に是を一言せむ。

頃日菲律賓叛民の將として自ら大統領と稱するアギナルドは、米國司令官の宣言に對して宣戰の布告を發表し、盛に合衆國民の不義非道を指摘し、以て文明國民の同情を求めたり。其言必ずしも信を措くに足らず、恐らくは自己の利益の爲に事理を曲搆したるもの素より多々あるべし。アギナルドは素と一匹夫、其叛旗を擧げたるは寧ろ偶然のみ。前年菲律賓總督より賄賂を得て其部下を賣り、大將デューキーのマニラ灣頭に現はるゝや、更に再び叛旗を翻したるが如き、彼れは寧ろ叛逆を賣物とする一奸雄のみ。是の如き輩の言素より多く信憑するに足らざる也。然れども是を米國の側より見れば菲律賓島民に對する食言罪の今や掩ふべからざる事實なるが如し。米西戰爭已に終り、巴里に於る媾和談判方に其開始を告ぐるや、アギナルド、其部將アゴンシリロをして巴里に赴き談判の趨向を觀察せしむ。アゴンシリロ揚言して曰く、海軍大將デューキーは吾人に約して言へり『諸君若し吾人

義の肯定し能はざる所也、菲律賓島の住民は合衆國と等しく人類に非る乎。其大統領と自稱するアギナルド、及び其の統率せる部下は、群島將來の司配者として決して無能力なる者に非ざる也。是等島民の希望に反對し、是を鏖滅しても尚は且つ其主權を强行せむとするは、果して自由と人權との上に建てられたる國家の所爲なる乎。抑ゝ又自由と人權とはアリアン人種以外の民族に對して言ふべき語に非る乎。若し合衆國民にして歷史上定見ある國民ならむか、彼等は惡政に苦みて主權に反抗する革命者に對して當に同情を表すべき也。然り彼等が西班牙に向て宣戰したる一の主なる理由は、實に玖馬及菲律賓人民の倒懸を救濟するに在りし也。而して倒懸民人を救濟せむが爲に戰ひたる有義の國民は、今や如何に却て是倒懸民人を苦めつゝあるよ。イロイロ府に於る一戰に於て、二千餘人の島民は彼の彈射の下に斃れたり。是れ果して何の狀ぞや。吾人は合衆國民の行爲を以て僞善と謂はず、何となれば吾人は國家の行爲を審判するの道德を有せざればなり。然れども建國の精神に背き歷史上の國是に戾れる無定見の擧動なることは斷じて爭ふべからざる也。

めつゝある也。征服主義に反對して起れる合衆國たるもの、何の辭ありて菲律賓島民の上に其主權を強行せむとするや。合衆國にして自ら其建國の精神と理想とを拋棄し、自ら其モンロー主義を蹂躙するに非ざるよりは、是の如き擧動は、歷史上國家として大矛盾の行爲と謂はざるべからず。

國際法上の理論によりて吾人の說を否定せむとするものあらば、是れ全く吾人の說の歷史論なることを知らざる者也。菲律賓の島民は其主權者たる西班牙に對して叛抗しつゝありし間に、果して國際法上の交戰者たる地位に達したりしや否や、是れ吾人の問ふ所にあらず。良し列國の眼中には只米國が西班牙に勝ちたる事實あるのみなりとするも、又正當なる媾和條約によりて、主權の合衆國に移りたる後、島民尙ほ其主權を認めたるは、即ち正統政府に對する叛亂の行爲なりとするも、何れも吾人の問ふ所にあらず。吾人は唯北米合衆國が其建國の精神理想を拋却し、世界に向て誓ひたるモンロー主義の國是を蹂躙するに非ざるよりは、菲律賓併有の權利無き事を言はむと欲するのみ。

非律賓の占有は、合衆國々民の將來の利益の爲に必要なりとの理由も、亦人道主

を見るに到ては、咄々怪事と謂はざるべからず。吾人の言說は毫も政治外交上の意義を有するものに非ず、合衆國の國性に關する純粹なる歷史問題のみ。

試に問はむ、利害關係を以て國家組織の根蒂とするの邦は何の必要ありて菲律賓群島を占領せむとする乎。マニラ灣頭の桑港を去る幾千海里ぞ。亞米利加の爲に亞米利加ありてふ主義は、何の辭ありて一半球以外に其勢力を擴張せむとする乎。アングロ、サクソン民族と菲律賓人とは其人種を異にし、其宗敎を異にし、其歷史、性情、風土を異にす、何處に共同の利害ある乎。布哇の合併は吾人或意味に於て是を是認すべし。何となれば布哇住民の最も勢力ある部分は、其人種文物の上より北米合衆國との聯合を希望したればなり。布哇の合併は權力關係にあらずして利害關係なり、是點に於ては合衆國の國是、將又モンロー主義と雖も、當然其合併を是認すべき也。然れども今や菲律賓併有の事體や全く是と異れり。菲律賓の島人は毫末も合衆國人と共同の利害を有せず、隨て嘗に毫末も合衆國の一聯邦若しくは一屬領となるの希望なきのみならず、年來西班牙政府に反抗して自由克復の戰鬪を續けたる島民は今や其生死を賭しても合衆國の主權を否定せむと力

するにあることを天下に公白したる者也。所謂「亞米利加」の中に南北亞米利加を包括せるモンロー氏の意を以て是を見む乎、吾人の解釋恐らくは狹隘なりと謂はれむ。然れども北米合衆國々民が建國の精神及理想は必ずや、茲に存せざるべからず。世人の所謂「人道主義」なるもの即ち是れ也。

是の如くにして是を見る、南北戰爭や、亞米利加印度人に對する迫害や、非アリアン民族に對する排斥や、尙暫くモンロー主義の國家が十九世紀の文明に調攝せむが爲に必要なる措置なりとせむ。將た又布哇の合併や、玖馬の占有や、暫く南北亞米利加を以て干涉の範圍とせるモンロー主義に抵觸せずとせむ。獨り菲律賓群島の略奪に於て吾人は北米合衆國の國性如何を問はざるを得ず。吾人を以て見れば、是れ實に十九世紀の末葉に於ける世界歷史の一大問題也。

北米合衆國が菲律賓群島を占有するに到りたる事體は、極めて簡單也。即ち西班牙政府が其戰敗の結果として、合衆國の強請を拒む能はず、遂に二千萬弗の償金と交換したるのみ。吾人は若し合衆國以外の國家、例へば獨逸、魯西亞の如き國にして是擧動ありきとすれば、毫も怪まざるべし。而も北米合衆國に於て是事ある

北米合衆國の國家は實に是の如き精神によりて建てられし也。彼れが二個の大綱領は自由と人權なり。是を以て當初の十三州の團結は脅迫又征服によりて成されたるものに非ずして、自由と人權との安全の爲に有せる共同の利害に本けり。一言すれば、北米合衆國の國家を組織せるものは、權力關係に非ずして、利害關係也。而して是國是を政治上の綱領として發表せるものを所謂モンロー主義となす。

何人も知る如く、所謂モンロー主義なるものは、歐洲大陸に於ける『神聖同盟』の假想的脅迫に對し、自國の利益を保全せむが爲に發表せられたるものなりき。其原因や寧ろ偶然なり、政治史上より見れば、是れジェームス・モンロー氏が一輕擧に過ぎざるのみ。然れども是主義が其精神として發表したる『亞米利加の爲に亞米利加あり』てふ一語は、北米合衆國の建國の國是を最も簡明に標榜したる者也。亞米利加の爲に亞米利加ありとは北米合衆國が征服主義の國家にあらずして、利害關係を以て建國の基礎とするの國家なるの謂に非ずや。是れ即ち東半球諸國の容喙を杜絶したると同時に、自國の國是は自由及人權の上に基ける建國の精神を貫徹

題を語る也。

北米合衆國の建國の歴史は今更說く迄も無し。是れ信仰の自由と人權の神聖とによりて建てられたる國家也。佛蘭西が其帝王の頸血によりて僅に其形骸を摸倣せる民約論的國家は、ベンジャミン・フランクリン氏が齎らしたる一片の宣言によりて、永く世界史上に鏤刻せられぬ。『來れ、王家の壓制に苦めるものよ、教會の束縛を悲むものよ、及びもろ〳〵の腐爛せる祖先舊史の桎梏に惱めるものよ、來れ、而して共に是の新らしき自由の鄕に將來の榮光を樂めよ』。是れ北米合衆國の國家が天下の耳目を一新せる福音なりき。獨逸の詩人クロップストック氏は、十三州の獨立を歌うて曰く、『爾は將に來らむとする更に大なる日の曙光なる哉、人道の精靈爾を動かせり』と。ゲーテ亦歌うて曰く、

亞米利加よ、爾は吾等の古き世界よりも勝れたり、
破れたる城壘無く、廢れたる寺院無く、
是の活ける時世に當りて、無益なる追懷、
無効なる紛爭の人心を累はす無し。

來さむが如き事あらば、其所謂人道の大義なるものは、寧ろ國家の大罪惡に非ざる乎。論じて玆に到れば、我日本民族が其新領土たる臺灣に對する政策如何の如きは言はずして明なり（上二九六頁以下我國体と新版圖參照）。而して吾人は將來益〻其隆盛を見るべき海外植民地に對しても、吾邦人が其アングロサクソン的帝國主義を遵奉して敢て違はざらむことを希望せざるべからず。北米合衆國が布哇を併有するに到りたる主要の原因は、畢竟アングロサクソン的帝國主義の實行に非ずして何ぞや。

（卅二年三月）

北米合衆國の國情如何

米西戰爭の結果として、西班牙が玖馬及び菲律賓群島の割讓に調印したるの事實は、即ち北米合衆國の國性に一變化を來さむとするの事實也。而して殊に菲律賓の占有に關して、北米合衆國が、將に其建國以來の人道主義に一大汚點を印せむとするの事實を見る。吾人は外交政治を論ずるものに非ず、純然たる歷史上の問

地方自治制と等しく、其總督長官の任免等重要の事體は中央政府の管轄に屬し、以て本國の利害と相調攝せしむ。畢竟アングロサクソン民族は吾人の所謂帝國主義を以て植民政略の大方針となせるものなり。世人或は以爲らく「人道」は英國人の理想なり人類相愛の大義は英國人の植民政略也と。是の如きは全く事實を無視せる空言のみ。世界の人類中、英國人程、自尊心に富み、他人種を嫌忌し「帝國主義」を以て其勢力擴張の主義となすものあらざるなり。

吾人は茲に所謂帝國主義の倫理的價値を言はざるべし。然れども歴史の吾人に明示する一個の原理は帝國主義に伴はれざる征服若くは植民は常に失敗すと謂ふ事是れなり。世界の人類を平等視し、其間に主從內外の差別を樹てざるもの、例へば羅甸民族の植民政略の如きは今日一派の世界主義者流の見て以て人道の大義を行ふとするものに近からむ。而かも是の如くにして分離若くは獨立の爲に母國の衰亡を來たすとせば、是れ甚だ不利益なる人道の大義に非ざる乎。凡そ國家が其版圖を擴め植民地を造るは、畢竟自國の強大富榮を希ふが爲めにあらずや。自國の強富の爲めになされたる征服、若しくは植民にして、却て自國の衰亡を

等は容易に土人と交らず、馬來人や、印度人や、彼等の眼より見れば常に劣等人種なり、彼等と同一の資格權利を享有し得べからざる人類也。是れ必ずしも智力德性の問題に非ずして、寧ろ一種の狹隘なる人種的觀念に本ける嫌忌若しくは輕侮の念なり。彼等は時に土人の女を納る、而かも是れ正當の結婚に非ずして一時の妾に過ぎざるのみ。其間に生まれたる雜種兒の如きも到底其父と同一の平面に生活する能はざる也。彼等は文武一切の要路を壟斷して土人の手を觸れしめず。例へば土人にして印度文官たらむと欲するものは、十九歳を期して文官試驗を倫敦に受けざるべからざるが如き、是れ即ち能はざるを許して却て壓制の實を擧ぐる也。彼等が自己の特權を重ずる、概ね是の如し、是を以てアングロサクソンの植民は民族混淆の爲に國民的觀念を減殺せらるゝの憂なし、是等植民地に於ける中心の勢力は、常に同民族の掌握する所なれば也。但越在日久しければ利害亦相同じからず、玆に同民族の植民地中、おのづから本國政府の直轄にあるを利とせざるものの生ずるに到る。是に於て所謂『獨立植民地』なるもの出で來る、濠洲、喜望峰の如き是れなり。然れども所謂獨立植民地と雖も、素より絶對的獨立を有せるに非ず、

の版圖に入る。今やイベール半島の植民王國は殆ど自國以外に尺寸の土地を有せざらむとす。然るに翻て是を英國の植民地に見るに、特別の事情ありて北米合衆國の獨立を許したるの外、其印度も、其新嘉坡も、其喜望峰、濠洲も、直轄、自治の差別こそあれ、永く、女王陛下の臣下として存在するは何故ぞや。他無し吾人の所謂帝國主義を勵行すると否とにあるのみ。

羅甸民族が其屬邦若しくは植民地を見るや、殆ど其本國を見るが如し。彼等は輙ち異邦民族たる土人に與ふるに自己と同等の權利を以てし、正式の結婚によりて其女を娶り、其の所謂雜種兒(ハーフカスト)を見ること殆ど本國子弟に異ならず。一言すれば羅甸民族は概して異邦人に對して自他の差別を見ず、司配者たる彼等自らの爲に何等の特權を設くること無き也。是を以て、年代を經過するに隨ひ植民地に於る本國人は何時しか其土人と混淆し、隨て其母國に對する國民的觀念も亦漸く退滅し、遂に本國人を見ること異邦人の如くなるに到る。事茲に到れば、餘す所は分離と獨立とあるのみ 南米に於ける羅甸民族の植民地は、是の如くにして其母國の羈絆を脫したる也。若し夫れアングロサクソン民族の植民地は則ち然らず。彼

然らざれば『劍乎』を叫びたるサラセン軍隊の中堅となり、其司令部を成しゝものは盡く亞剌比亞人なりき。然れども領土增殖の結果として、純粹なる亞剌比亞民族の分散を來すに及びて、玆に已むを得ず漸く傭兵組織を採用し、奴隷軍をだに編制し、其上司將校にも亦他民族を用ふるの已むを得ざるに到れり。是に於て乎、サラセン軍隊は漸く其の強健なる國民的觀念を失ひ、地方的利害の爲めに其分裂を見るに到れり。這般の事情略ゝ羅馬帝國の末路と等しく、所詮は吾人の所謂帝國主義と伴はざる征服若くは植民の結果なり。

歷史は是の如く幾多の事例を反復せり。而して最近の史上に於て最も明に是原理を說明せるものは、アングロサクソン及び羅甸民族の植民地也。讀者よ、試に一考せよ、アングロサクソン民族の植民地は、永く本國政府の司配の下に其帝王の臣民として殘留せる間に、羅甸民族の殖民地は何が故に期せずして盡く獨立、若しくは分離するに到りたる乎。是の植民史上に於て最も著しき現象は、是兩民族の間に如何の差別ありて起りたる乎。南米に於ける西班牙及葡萄牙の植民地の本國の羈絆を離れて獨立せるや既に久し、而して玖馬、ポルト・リコ、菲律賓、亦新に他邦

ども戰連りに勝ち、領土亦擴張するに隨ひ、是を統率し司配する羅甸民族の勢力漸く缺乏を告ぐるに及びてや、從來羅甸人の專有せる要職權力等をも、亦漸く異邦人に讓與し、依て以て幹部の勢力を補充するの已むべからざるに到りぬ。是に於いてか從來蠻族として蔑視せられたるもの、今や羅甸民族と共に同一の公民權を享有し隨て從來異邦人の有する能はざりし將師、官吏も、亦漸く羅甸人の手を離れぬ。事玆に到りては羅馬建國の國性は半ば崩解し了りたりと謂はざるべからず。實に羅馬帝國は愛國心の缺乏によりて仆れたり、而して是愛國心の缺乏を致したるものは世界主義を唱へたる基督教徒にあらず、敵國たるガリア人チユートン人にあらず、實に羅馬人若くは羅馬の帝國なりし也。カラカラ帝が一切屬邦人に與ふるに羅甸人と等しき公民權を以てせし時は、是れ即ち羅馬の國家が精神的滅亡を遂げたるの時也。誰かガリア人、埃及人、亞弗利加人、ブン人、イスパニア人、スリア人が羅馬の公民權を與へられたるの故を以て、彼等が宿仇たる以太利の一都府の爲に、盡忠報國の誠意を效すべしと思はむや。

サラセン民族の衰亡も亦同一の原因に本けり。凡そ一百年の間「コラン乎、貢乎

主從の關係を規定するを須要とす。是の如き帝國主義を强行せざる國家は、他邦を征服することによりて却て自ら滅びたり。將た又當初是帝國主義によりて其版圖の廣大を致したる國家も、最早是主義を施行する能はざる事情の生ずるに及びて、玆に漸く分裂衰亡の途に就けり。是れ古今の歷史が、幾多の事例を擧げて吾人に告ぐる所也。

試に羅馬帝國に見よ。古來史家が羅馬衰亡の原因として數ふる所のもの、一にして足らず、然れども吾人を以て見れば、其の最も主要なる原因は、羅甸民族至上主義の破壞ならずむばあらず。蓋し羅馬は史學者の所謂『都府國家（シテー、ステート）』也、國家權力の中心は羅馬の一府にあり、是等權力を握れるものは是が市民たる羅馬民族なりき。是一事は羅馬が共和國たりし時も、帝國たりし時も、毫も變改せざりし也。而して羅馬國の全盛時代は即ち是の幹部たる羅甸民族の團結强固にして其權力尙熾盛なりし時なり。羅馬帝國の基礎、是の羅甸民族に存し、是羅甸民族と幾多の屬邦民人との間に權力關係上、截然たる本末主從の差別を維持し得たる間は、羅馬一府の中央權力と、一族の羅甸民族とは、以て地中海の四岸に號令するに足りし也。然れ

の方法に就て其の本つく所の大主義を問はざるべからず。是れ啻に植民當事者の關知すべき所なるのみならず、一國權力の消長に影響すること甚だ小少ならざる也。

歷史の研究は吾人をして左の如く斷言せしむ。曰く、凡そ其領土及植民地の膨脹と帝國主義の勵行と相伴はざるの國家は、必ず衰亡せむと。是れ吾人の私見臆度に非ず、三千年來の歷史が事實に據りて明白に證明する所なり。請ふ試に是を說かむ。

吾人は先づ近頃頻りに稱謂せられ、而かも最も曖昧なる『帝國主義』の意義を明にせざるべからず。吾人の所謂帝國主義とは、屬邦若くは植民地に於ける異人種若くは異民族に本國人と同一の權利を與へず、飽迄權力關係によりて是等異邦人と本國人との間に本支主從の差別を規定する主義の謂也。換言すれば、征服によりて得たる屬國の民に與ふるに征服者と同一の權利を以てするは吾人の所謂帝國主義に非ざる也。帝國主義は必ずしも屬邦又は植民地に於ける異民族を以て劣等人種なりと思惟するを須ゐず、唯彼等が本國人に非ざるの故を以て其間に上下

は常に是精神の實現を反復せりと雖も、中世に於ける藤原王朝と、近世に於ける德川幕府とが、強迫的に絕對的鎖國主義を執行したるの結果は、大に本邦民族の退嬰思想を助長し、是先天的氣象を遺却せしめむとせり。是の如くにして日本の歷史は明治の改革に入りぬ。是に於てか三百年來久屈の反動として、海外的精神の勃然として國民の間に興起し、植民事業の呼稱せらるゝもの日に多きを加へたるは、國民性情の正當なる發達として、吾人の大に喜ぶ所也。是の如く、植民的事業は、日本國民の先天的特性なることを自覺するは、事業の成功を期待する上に於て、國民の最も須要とする所ならずむばあらず。何者『自信は成功の母』なれば也。

(卅二年三月)

帝國主義と植民

植民事業の擴張は、吾人が見て以て國民性情の正當なる發達とする所也。而かも植民の方法、是を奈何すべき乎。吾人は植民其物を奬勵するに先ちて、先づ這般

するあり、天文年間には僧了西の印度に入りて加特理教を學べるあり、同時代に我國民の始めて葡萄牙に航せるあり、永祿年間には我國民の多く呂宋に住するあり、天正年間には大友、大村、蒲生、有馬の四氏使を羅馬に遣すあり。文祿、慶長年間には我國民の南洋及印度に到るもの甚だ多し。伊達政宗が其臣支倉六右衛門を羅馬に遣し、山田長政等の志を暹羅に得、天竺德兵衛の前印度に航せるは、何れも是時代なり。元和、寛永年間には、伊達政宗の大船を新造して呂宋國に遣すあり、西洋南洋到る處に『日本町』の組織せられたるも、濱田彌兵衛臺灣に到りて和蘭人を懲らしたるも皆是時代なり（以上の事實は小笠原氏の海軍史論に據る）、見るべし、南北朝以來、足利氏治下の亂世を通じて海外侵略的、はた植民的精神の漸く我國民の間に蠢動し、豐臣氏德川氏の交に到りて、殊に其生氣の塗湧し來れるを。吾人は是に到りて德川幕府の嚴峻なる鎖國主義が其三百年の退嬰的治政の下に再び我國民の先天的冒險性を萎縮せしめたるを慨嘆せずむばあらざる也。

是を要するに、日本民族は由來植民的征服的はた航海的民族なり、而して是民族の主腦たる天孫人種降臨の事蹟は、是精神を最も好く發表したる者也。爾來歷史

るに到れり。然りと雖も、海洋國民の冒險的先天的は、最早や國家の力を假らず、船舶取締の禁令を冒してだも、尚ほ且つ其の欝勃たる雄心を披拂せずむば已まざりき。即ち北條氏仆れて南北正閏の爭海內に波及するや、猛將勇士の志を國內に得ざるもの、其滿腔の不平自ら禁ずる能はず、是に於てか所謂『邊民』の高麗、漢土の海岸を侵すもの、虛年無し。殊に菊池氏以來、九州の諸豪族海內の戰亂に倦厭せるもの、多く船隊を組織し、浙東、福建より遠く安南、暹羅を襲へるもの、所謂『八幡寇』として海上の威名を擅にせるは、史家の熟知する所也。近時小笠原長生氏の數ふる所によれば、寛治より文祿までの五百年間に於て我邊民の亞細亞大陸を侵略せる度數は實に五十餘回、而して是の五十餘回の侵略は、毫も國家の保護を仰がず、私人獨立の事業に出でたるを想へば、誰か中世に於る京都朝廷の鎖國的國是を恨みとせざらむや。

然れども我邦人は單に海賊的侵略のみを事とせるものに非ず、同時に植民及交通の平和手段に緣りて遠洋航海を企てたるは歷史上最も顯著なる事實なり。元慶年間、即ち今を去る千十餘年前に當りて、平城天皇の第二子高丘親王の印度に航

見國」に到れり。仲哀天皇の熊襲を征するや、天皇は內海を經、皇后は越前敦賀より日本海を經て長門に會し、更に筑紫に航せり。次で神功皇后の三韓征伐は、全く水軍の優勢なるによりて其功を奏したること、言ふまでも無し。爾來應神の朝に海人部を置きて水師商船を監督せしめ、推古の朝修信使留學生を唐土に派遣し、齊明の朝に至りて阿部氏の西奧及肅愼討伐の擧ありたるを以て是を見れば、航海の事業は年を累ねて漸く盛大に赴けりしが如し。殊に阿部氏が舟師百八十艘を越前敦賀に艤し、蝦夷、秋田、渟代より更に日本海を橫斷して滿州地方を征討せしが如きは、天孫人種の冒險的氣象を歷史的に紹述したるものと謂ふべし。其年代を謂へば、實に是れ今を距る一千五百年の往時にして、英國海軍の鼻祖たるアルフレッド大王よりも早きこと殆んど六百年の昔なりとす。吾人は後年に於ける是の旺盛なる膨脹的精神の衰退を以て、日本歷史上の最大恨事となすもの也。然れども人種の根本的性質なるものは、何物の力も得て塞塞する能はざる也。天智以來、朝鮮一帶に於ける我海上の權力は殆ど全く失墜したるより、爾來京都の朝廷は、海外進取の開濶なる政畧を斷念し、寬平、天慶以降、遂に絕對的鎖國主義を取

じうして大陸に留まれるウラル、アルタイ民族は、或は北狄、匈奴となり、或は韃靼、蒙古人となり、東は日本海より西は大西洋に到るまで、戰勝民族の雄名を歴史上に留めたり。吾人の祖先たる天孫民族も、亦一度び足を蜻蜓洲に着くるや、其植民的政略は一變して戰勝的政略となれり。高千穗宮に偏安するは、豈雄心鬱勃たる冒險的民族の永く耐忍し得る所ならむや。是に於て乎神武東征となり、崇神の四道將軍となり、日本武尊の北征となり、更に轉じて仲哀、神功の熊襲三韓の討伐となり、爾來歴世の帝王事に臨みて遠征を辭せず、中世以降、漸く退嬰保守に傾けりと雖も、建國の當初を去る尚ほ甚だ遠からざりし上古にありては、是の征服的國民の意氣尚ほ鬱然として盛なりしを見る。而して吾人の祖先が殊に植民的性質の面影を留めたるものは航海業の盛大にあり。

神武天皇の東征し給ふや、日向より舟師を以て豐後に至り、豐後より筑紫、安藝、備前に到り、攝津河内より更に紀伊半嶋の西南岸を旋りて、熊野に上陸せり。日本武尊の北征も亦多く海路に依りしが如し。即ち伊勢より海に浮びて尾張熱田に赴き、陸路海道を歴て更に相模より上總に航し、鹿嶋灘の險洋を冒して常陸なる日高

らず。神話及傳說の比較研究上、吾人は是故鄉の南方多嶋洋中に存するを信ずと雖も、玆に論述するの必要なきを以て言はず。兎に角、出雲民族の祖先たる須佐之男命と日向高千穗に降臨し給へる天孫人種とは、共に遠洋の海波を凌ぎて此土に上陸せる者也。而して古事記載する所によれば、天孫降臨に先ち、高天原に於る天照大御神と高御產巢日神とは、是後の使者建御雷神が出雲戡定の功を擧ぐるまで、幾度びか使を出雲に遣はして大國主命を招撫したるを以て見れば、遠洋航海の術は當時已に著しく發達したりしならむ。

兎にも角にも、日本民族の幹部たる天孫人種と出雲民族とは、遠洋より來りて是土に植民したるなり、而して九州に於ける大山津見神、伊勢に於ける猨田毘古神、若くは出雲に於ける足名椎の如き、所謂『國神』なるものも、天孫人種及び須佐之男命と交通上何等の不便なかりしを以て是を見れば、素より舊來土着の民族に非ずして恐らくは天孫民族と同一の事情によりて是土に來住せるものなること、亦想像するに餘りあるべし。

海上に於ける植民的人種は、即ち陸上に於る征服的人種なり。吾人と人種を同

植民的國民としての日本人

今や日本人は、植民的國民として自己の天職を認むべきの機運に到着せり。內國に於ける人口の增殖、商工業の發達、及び海運事業の進步は、宇內交通の利便に隨れて、何れも是機運を催進せざるは無し。是時に當りて吾人の祖先が植民的民族として歷史上最も顯著なる成功を留めたるの事蹟を緬想ずる、必ずしも閑事業に非ざるべき乎。

日本の舊史は古事記を以て始まれり、而して古事記の中、天地開闢說と諾冊二尊の神話とを外にして、日本本土に關する傳說は、須佐之男命の出雲植民を以て端緒となす。須佐之男命は何處より來りしか、大古の事杳として俄に斷言し難しと雖も、恐らくは南瀛の煙波を破り、北太平洋の潮流に駕して日本海に入り給ひたるならむ乎。古事記一篇の中、殆ど全く大陸神話の特徵を認めず、其神名、事蹟の却て大洋海波に緣故あるもの多きの一事を以てするも、（全集第三卷四三三頁參照）須佐之男命及び其後に來れる天孫人種は、何れも其故鄕を海洋中に有したること殆ど疑を容るべか

り、白日公々然として虎狼の搏噬を逞うするは、實に十九世紀文明の眞相にあらずや。

歷史家の十九世紀の文明を標榜するを聞くに、曰く博愛の精神、曰く個人の自由、曰く何、曰く何、凡そ這般の名辭の幾百を列ぬるも、是の蕩々たる國家的罪惡を奈何すべき。維納會議は實に佛蘭西革命によりて攪破せられたる十九世紀文明の精神に戻れるなるべし。

一千八百十五年以降の八十年は、實に是會議の斷定を打消さむが爲の歷史なるべし。而かも其末葉に到りて「帝國主義（インピリアリズム）」が如何に翕然として天下の大勢を風靡し、人種の爭鬪は如何に支那帝國の分割に終らむとするかを見よ。吾人を以て見れば、人類歷史の最も慘澹たる齣場は、方に是より開かれむとしつゝある也。

罪惡の一千八百九十八年は是の如くして初まり、是の如くにして終らむとす。知らず、來らむとする一千八百九十九年は如何なる年なるべき乎。

（卅一年十一月）

モンロー主義に閉鎖せられたる北米合衆國は、今茲一千八百九十八年の米西戰爭を以て歐洲との交渉を開始せり。彼は戰爭の結果として事實に於て玖馬を占有し、又將に比律賓を横領せんとす、是れ世界歷史の上に於て東西兩半球を結合したる一大事實なり。所謂アングロサクソン同盟なるものの實は主として北米合衆國が東洋に於ける是新勢力の扶植上より打算せられたるものに外ならず。是一大事實より當に來るべき諸般の結果は、來らむとする二十世紀史の重要なる部分を占むべきや又疑を容れざる也。

而して是の如き一大事實は果して何によりて起りたる乎、メーン號の轟沈によりて一決せられたる北米合衆國の宣戰は、玖馬民人の獨立安寧の爲になされたりと稱せらる、何ぞ其の名の堂々たるや。而かも人の國を奪て人の民を掠む、目して人道と稱す、可ならむ乎。果して然らば夫の人の產を盜みて慈善を營むもの、果して仁者を以て稱すべき乎。二人の宣教師の故を以て膠州灣を强奪したる獨と、利益不平均の故を以て旅順と威海衛を占領したる魯と英と、一船舶の故を以て人の屬領を攫取したる北米合衆國と、其情狀に於て何の擇ぶ所ぞ、宗教人道の假面を被

所謂二大事實は、是道義的大罪惡の政治上に顯現したるものに外ならず。見よ、今日歐洲人の所謂極東問題の解釋とは、支那分割論の實行を外にしては殆ど無意義なるに非ずや。支那分割論とは、其口實名義の如何に拘らず、人の國を盜み、人の民を掠むるの謂に非ずや。學者や、宗教家や、道德家や、其哲學と聖書と經典とを執て、而して一言も其君主の人の國を盜み、人の民を掠むるを言はず、而して尙ほ神を言ひ、正義を言ひ、人道を言ふ、是れ十九世紀文明の眞相也。

魯帝が解兵の提議は、白晝の假面のみ。猶ほ往年ゴルチャコッフが正當防衛の爲めになされたる中央亞細亞侵畧、方に其極限に達したりとの宣言によりて、歐洲列國を欺きたる如けむのみ。所謂ファショダ事件に關する英佛の葛藤は、純然たる野獸の爭利に非ずや。而も兩國々民は歐洲文明の精英が是獸慾の爲に浪費せられむとするを見て、憂ふる所あらざる也。所謂アングロサクソン同盟とは何の謂ぞ。支那及び北米に於ける私利の交換に非ずして何ぞや。而かも彼等は自ら目して人道の普及と言ふ也。若し夫れ米西戰爭の如きは、支那分割論の實行と共に、十九世紀末の一大政治的事實たると同時に、又其一大道德的罪惡也。

伯林條約を興したり、而かも是れ人類の一小部分が世界の一小部分に於ける權力の消長に過ぎざるのみ。一千八百八十一年の魯帝の暗殺は、ケルン禮拜堂の落成と共に、人類歷史上には無意義のみ。是の如き事を以て一千八百九十八年の二大事實に比す、多く稱するに足らざる也。

一千八百九十八年は如何なる年ぞ。人類の歷史は是時に至りて初めて其世界的意義を有したり。東西兩半球は是時に至りて初めて其世界的勢力を合成したり。人類は是時に至りて初めて一團となり、世界は是時に至りて初めて一體となれり。

一千八百九十八年は如何なる年ぞ。人類の多數は是時に當りて最も明に其道德的假面を脫落したり。國家の名によりて權力即正義の福音を宣傳せり。人類の多數は是時に當りて初めて自己の文明の虛僞なるを自白せり。所謂道義、所謂宗教の畢竟獸慾の假面なることを暴露せり。

一千八百九十八年は、實に是の如き政治的大影響と道義的大罪惡と、其二大事實を併せて十九世紀史上の最も記憶すべき年たる也。

罪惡の一千八百九十八年

世界は漸く其罪惡の歷史を開展し初めたり。一千八百九十八年は罪惡を以て初まりて罪惡を以て終らむとす。

一千八百九十八年は十九世紀史上に於て恐らくは最も記憶すべき年なるべし。世界歷史の局面を回轉すべき運命を有する二個の事實は實に是一年に於て其端緒を開きたればなり。二個の事實とは何ぞや、極東問題の解釋は其一也、北米合衆國の『帝國主義』は其二也。嗚呼十九世紀史上の何處にか、其影響の局面に於て是の如く廣大なる事實ありや。

一千八百十五年は華德堡の戰爭を產したり、然れども奈翁の滅亡は、歐洲の私事なるのみ。一千八百二十三年はモンロー主義の宣言を產したり、然れども是れ北米合衆國の私事なるのみ。一千八百六十一年は以太利の獨立を產したり、一千八百六十九年は蘇西運河を產したり、然れども是れ何かあらむ。一千八百七十年の普佛戰爭は、所謂プロイセン時代を作りたり、一千八百七十七年の魯土戰爭は、所謂

の一たるなり。

吾人は茲に西班牙衰弱の原因を説明するの遑無し。想ふに國家經濟の紊亂も其一原因なるべく、倨傲尊大、與國の惡感を買ひたるも其一原因なるべく、專制暴虐を是れ事として、統御の術を知らざる事も其一原因なるべし。其他幾多の原因あるにせよ、國民が國家的觀念に乏しく、忠君の情緒を缺けることは、其の最大なる原因たるべきなり。

然るに今日無學なる基督教徒は、是の如き零落の妖兆を具備せる西班牙と我日本とを比較して、國民が其君國を思ふの情相似たりとなし、暗に忠孝を以て國家の亡徴となす。是れ言を他邦の事に藉りて其の非國家的根性を暴露せるもの、甚だ惡むべしとなす。抑々又明治聖代の下、是不臣の民ある、吾人實に是を慚づ

（三十一年七月稿）

せしに比すれば、尙ほ相去ること啻に百步のみならず。吾人は遂に西班牙人を以て忠君愛國の人民と思惟すべき所以を知らざるなり。

今茲に西班牙史を反覆せむことは、讀者の忍ぶ能はざる所なるべし。單に今世紀の事蹟に就いて見るも、西班牙人が其君主及び國土に忠愛ならざるの例證、比々として相連なる。試にチャーレス四世治下の西班牙を見よ。國民の一派は奈破翁を歡迎し、マドリッドの朝廷は將に大西洋を超えてメキシコの殖民地に遷移せむとせしにあらずや（一八〇八）。超えてフェルヂナンド四世の時代を見よ。國步艱難の際、民心の統一を須要するにも拘らず、急進黨（エキサルタドス）と、專制黨（アブソルチスト）とは、私爭の爲に國事を忘れ佛蘭西のルイ十八世が內亂に乘じて兵をマドリッドに送るや議會は却て是を歡迎し、國王の無能力を議決せり（一八二三）。更にマリア・クリスチナ皇后の攝政時代に入るや、國事は愈々朋黨爭攘の器械となり、皇后黨（クリスチノス）と太子黨（カーリスト）と鎬を削りて相鬪ひ、國內の叛亂となり（一八三五）、憲法の改正となり（一八三七）、遂に外邦の容喙を誘致せり。是の如き事蹟の何處にか、所謂忠君愛國の感情の特に現はれたるものありとするや。吾人を以て見れば、西班牙人は世界に於て最も忠君愛國の情緒に乏しき國民

ざれたる六百年間の爭闘は、是れ西班牙人の愛國心を表明せるものにあらずやと。然り。永き歳月の是爭闘は、遂に西班牙の國家を統一したるのみならず、又其國民的性質を陶化するに於て少からざる力ありたること、吾人是を認む。然れども是爭闘を以て西班牙人の愛國心に出でたる者とするものあらば、是れ歴史を讀むの法を知らざる者のみ。其動機實は主として異宗教の排撃に存せしなり。『教の爲め』とは、當時全歐洲の呼應したる所、西班牙人亦潮流に隨て小十字軍を其國内に起したるのみ。是の宗教戰爭の結果として、國家の統一を見るを得たるは、寧ろ西班牙人にとりて偶然に屬す。是を以てアラゴン、カスチル兩王國合併の後に到りても回々教徒の迫害愈々甚しく、フヰリップ二世治下の宗教裁判の如きは、西班牙歴史中の最も血痕淋漓たる部分たるなり。

然れども十四世紀以後に於ける西班牙國民が、異宗教徒と多年の爭闘結果として、多少國家的觀念の修業を遂げたるは、疑ふべからざる事實なるべし。然れども吾人は他邦に比して特に優れたるものあるを見ざるのみならず、是を魯、英、獨、佛、等の諸國民が、近代人文の大勢に乘じて、最も鞏固なる國家的中心政治の方面に進歩

戰ひたりと稱すと雖も、時としては却て回々教徒の旗下に勇名を競ひたり。例せばサラゴッサの回教酋長グコフッドの爲にグレサの戰場に臨みたるが如し。眞に國を愛し、教を護るもの、安ぞ其不倶戴天の深仇に與して、甘じて犬馬の勞を取るべけむや。而してシッドの剽掠を事とするや、時としては其の基督教に屬すると回々教に屬するとを問はず、一切の寺院市邑を蹂躪して、眼中一も宗教上の差別を認むる無し。其部下には幾多の基督教の武士と共に常に多くのムール族傭兵を有して怪まず。シッドの志、一に中世の武士的勇俠を示すにありて、何等國家、又は宗教上の意義を有せざりしことは寧ろ明白に過ぐる事なりとす。是の如き非國家的勇士シッドの如きものを理想とする國民は果して眞正なる愛國心に富めりと謂ふを得べきか。見來れば、西班牙人のシッドに於て歎稱する所は、其個人的勇俠の一事のみ。而して是個人的勇俠の一事たる、是國民が其歷史の到る處に發揚せむことを力め、且現に發揚したるものなり。今の人の所謂西班牙人の愛國心とは畢竟是勇俠を誤認したるのみ。

是の如く述べ來らば、或は疑を挾むもの問はむ。ムール人の羈絆を脫せむが爲に

しにもせよ、亞細亞及亞弗利加大陸に於ける彼等が牙軍の一分限に過ぎず。此方は即ち全半島の國民を擧げて、而かもピレニー山以東の歐洲騎士の後援を有す。誰か其勢力一朝にして崩壞すべきを想はむや。思ひきや、タリックの一戰に破るゝや、擧國風を望みて降伏し、コルドヴ政廳の半月旗は忽ち絶對の威力を擅にせり。加之當時の貴族は概ね爭て款を其國仇に通じ、回々教に改宗し、以て其榮達を計りたり。中世西班牙の騎士にして其勇名を史上に止めたるもの多く基督教的名稱を有せりと雖ども、概ね半月旗の下に戰ひたるものなりき。

夫のシッド(Cid)は世に所謂西班牙の國民的勇士なるものなり。獨逸人が其ジーグフリードとヒルデブランドを稱し、英吉利人がアーサーを敬し、印度がラーマを尊ぶが如く、西班牙人は今日尙ほ自國の歷史中にシッドの名を有するを誇るなり。シッドは果して歷史上に實際存在したりしや、否やは、暫く問はずとするも、其の國民的理想を體現せる人物なるは疑ふべからざるなり。然れどもシッドは西班牙國の爲に戰ひたる者にあらざりき。彼の事蹟は畢竟一個人の勇悍義俠の物語に過ぎざること、猶ほ我邦の岩見重太郎、宮本武藏の如きなり。是を以て名は即ち基督教擁護の爲に

是を其歴史に徴するに、西班牙人の愛國者ならざる證跡は到る處に發見し得べき也。讀者試に亞剌比亞民族侵入當時の西班牙史を一瞥せよ。半月旗を掲げ來れる者は人種の敵なり、宗教の敵なり、國家の敵なり。而して、西班牙人は何事を爲したりや。キチザ、ロデリックの諸王は、國家の危機を知らざる爲して其暴政を逞うせり、猶太人は叛旗を飜して敵を迎へたり、貴族は相乖離して權勢爭奪を事とせり、國民の或者は却て猶太人と共に半月旗の擁護を歡迎せり。げに當時の王家たる西ゴート族は、其國語こそ羅甸語を用ひたれ、未だ羅馬の政治を解せず。ケルト、イベール民族によりて繼承せられたる羅馬の文明は、容赦なく是半蠻族の足下に蹂躙せられ、國家の觀念は何人に適歸すべきやを知らざりき。當時西班牙の人民が亞剌比亞人の來襲を以てゴート王族との私闘の如く思惟せしは寧ろ自然の勢なりき。若し當時の西班牙人にして、眞に愛國の感情に富みたらむには、亞剌比亞人の戰勝如何ぞ斯く容易迅速なるを得べけむや。

西班牙人は啻に國家的觀念に乏しきのみならず、最他邦人に制御せられ易き人民なる事、亦當時の事蹟に徴して明なりとす。抑も亞剌比亞人は、如何に勇敢なり

し。西班牙は五個の異なりたる民族に加ふるに、三個の異なりたる宗教を有す、而して是に君臨するにフヰリップ二世以降、多く暗弱無力の王を以てす、民心の統一得て望むべけむや。暫く諸他の事情を言はざるも、是一事既に亡國の兆ありと謂はざるべからず。

是の如く見來れば、西班牙と日本とは、是國家成立の根柢に於て啻に相類似せざるのみならず、却て對角線的に相背反するに非ずや。今や無學無識なる基督教徒は、事實を曲解して私に爲にする所あらんとす、何ぞ其心事の陋劣にして、其手段の淺薄なるや。

西班牙の國民は是の如く統一を缺ける多數異人種より成る、如何ぞ眞に君國を愛するの情に富むことを得むや。多くの人、西班牙人を愛國者なりと謂ふ、しかれども其の所謂愛國は、吾人の所謂愛國の觀念と果して相同じかるべきや、單に君國の名によりて下民を虐待し、外邦を輕侮する一種の國民的自負心、若しくは宗教的迷信を指して爾か名けたるには非ざる乎。果して然らば、是れ豈吾人の所謂忠君愛國ならむや。

族と大に其性を異にし、異教者に對して如何なる暴虐をも忍び得る人民なることは、歷史上最も明なる事實なればなり。又其門閥と宗教と主權とに執着する事に於ては、西班牙人は正に羅馬的なり。人種學者ブレース氏の說によれば、其の頑固なる個人主義と婦人に對する尊敬とに於ては、日耳曼的にして、戰功を尙び觀兵示威を好むはケルト的なり。而して羅甸民族を中心としたる所謂西班牙人は是等幾多人種の特性を鎔鑄して一團丸となす能はず、一朝事あれば、民心乖離、內訌常に絕えざることは、十四世紀一統以後の歷史、殊に前世紀の終り、及び今世紀の初めに於ける所謂半島戰爭、繼嗣戰爭、若しくはマリア・クリスチナ、及びエスパルテロの攝政時代の紛擾に徵して最も明瞭なる事實なりとす。

凡そ國家の盛衰は、其の由て來る所一にして足らず、然れども何れの時代、何れの邦國にありても、民心の統一は其隆盛の第一の制約なり。歷山大王の版圖が、墓眕未だ乾かずして分裂せしも、羅馬の滅亡も、サラセン民族の衰頹も、所詮は中央政府の權力四裔を括約して民心の統一を維持する能はざりしが爲なり。近くは波蘭の滅亡、澳地利の紛擾、土耳其、朝鮮、支那の衰弱、一として其主因を是に有せざるは無

等の杜選ぞや。

第一、西班牙の國土に棲息せる人種は、少くとも五種あることを記憶せざるべからず。一に曰くイベール人なり。是れ所謂バスク民族にして、ツラン人種に屬し、是半島の原的住民と思惟せらる。二に曰く、羅甸人なり。是れ羅馬の權勢と共に是地に移りたる者、イベール人を征服して其土地を占有し、今日西班牙の國語たる羅甸語を輸入したる民族なり。三に曰く、チュートン人なり。是れ歷史上西ゴート族の名によりて知らるゝものにして、羅馬帝國の末葉に當り、所謂チュートン民族の大遷徙に際して是半島に侵入せるものなり。四に曰く、猶太人なり。五に曰く、ムール人なり。是れサラセン民族の勃興の結果として、八世紀の初有名なる回敎酋長ムーザーの下に、タリック所謂『三日戰爭』によりて一擧してピレニー以南を征服したる者なり。是外、羅馬時代に於けるフォイニケ、カルタゴの植民の夙に此地に移れるあり。是等の諸人種は、イベール人を除て、未だ全く融化して一國民の特質を結成するに至らず。國民的傲慢心の熾盛なるは疑も無くイベール人の遺傳にして、其酷薄殘忍なる禀賫は、慥に西ゴート族の氣象を傳へたり。何となれば是西ゴート族は、諸他のチュートン民

心を壓制せむとす、抑々國家の將來を如何せむ』と。

是の如きは近時連りに見る所の論なり。吾人是を目して奇怪なりと謂ふ。其說に歷史上の根據を缺ければなり、私己の空想に比擬して事實の考察を顧みざればなり。而して是の如き奇怪且つ淺薄なる說を公言して憚らざるもの、悉く皆基督敎の僧侶、信徒なることを一顧せば、彼等が正論讜議を以て世に立つこと能はず、其敎勢日に窘逼せること、猶ほ西班牙の如く、其存在今や將に社會に遺却せられむとするに臨み、外邦の事に附會して僅に其憂憤を遺らむと欲す、煩悶苦楚の狀、寧ろ想像するに餘りありと謂ふべし。

然れども眞に歷史を知れるものゝ眼より見れば、蓋し西班牙と日本とを一視するは、猶菽麥河嶽を混同するが如きのみ。夫れ西班牙人は歐羅巴に於て最も複雜なる人種より成るものゝ一なり(一)。其の愛國心なるものは歷史上寧ろ宗敎心と稱すべし、吾人の所謂忠君愛國と稱する者と大に其趣を異にす(二)。是を、比較的に世界に於て最も純粹に、且最も强固なる國家的觀念を有する民族より結成せられ、單一帝系の下に二千五百餘年の歷史的生活を經由せる、我日本帝國に比す、抑々何

誰か我邦を西班牙に比するものぞ

米西戰を交へてより、西班牙の運命日に窘逼せるの觀あり。是れ果して西班牙の末路なる乎、抑々又一時の衰弱なる乎、兎に角も其萎微振はざるは現下の事實なり。吾人玆に西班牙人に就て言ふ所あらむとするは、是事實を解釋せむが爲に非ず、聊か世の空論者流の蒙を啓かむが爲なり。

吾人は西班牙の零落に關して近時我邦に最も奇怪なる一派の論者あるを見る。其の旨趣は、我日本と西班牙との國情を比較して相酷似せるものありと爲し、西班牙の敗衂を以て前車の覆轍と爲すにあり。彼等說を爲して曰く、『西班牙の國民は傲慢自負の念深く、異敎人を排し、異人種を斥け、和親を以て外に對せず、列國の感情を害すること甚し。内に臨みては徒に富國强兵を唱へ、忠君愛國の外其他を知らず、是れ恰も我日本の現狀に非ずや。西班牙が歐洲の一角に邦して、今日迄兎に角國家の獨立と體面とを維持し、近時米西戰爭をさへ開き得たるが如きは、一に基督敎の力なり。今や我邦人は宗敎を無視し、人道を蔑如し、偏に忠孝を以て一國の人

存在するものなる事に就ては、殆ど意識する所無かりしなり。嗚呼世界に於ける自己の國家自己の國民の位置を知ざるものにして、三千年前の事實に精通し、歷山大王の乘馬の黑白を辨ずるの力あるも、國民として何の益する所ぞや。吾等は今の尋常中學に於ける歷史敎育が其大目的を拋擲し、恬然として覺る所無きを見て大に歎惜に堪えざるなり。

是を要するに、英語や、數學や、歷史や、畢竟二三の例證のみ。吾等の見る所を以てすれば、今の國家敎育は殆ど空名のみ、其實殆ど主義なく、目的なく、自覺なく、茫然として一般の知識を授受するに過ぎざるなり。げに國家主義の名によりて敎語は捧讀せられ、倫理は講述せらる、然れども眞正の國家主義は倫理上の名義にのみ限らるべきものに非ざるなり。諸種の敎科敎程凡て是大精神によりて統率せらるるに及びて始めて其完成を稱すべし。世人或は今の敎育の不振を以て國家主義の弊に歸す、吾等を以て是を見れば今の敎育の大部分は無主義の敎育のみ、無標準の敎育のみ、其弊豈獨り國家主義の弊ならむや。吾等は反覆して言はむ、國家主義の敎育とは徒に忠孝を唱ふる敎育の謂に非ざる也。

（卅一年四月五月）

しての歷史は、主として現在の自國を中心として觀察したるものならざるべからず。夫の現在の世界に關係少き遙遠なる過去世の事、又は我國家と何等の接觸交涉の存在せざる諸他の事實の如きは成るべく是を淘汰し、現在の世界、殊に自國に關係する事實に對して特に精確なる知識を與へむことを期すべき也。然るに今の中等教育が是國民教育としての歷史の大方針を遺却し、恰も專門學者が知識慾の滿足の爲にすると同一の覺悟を以て、其子弟に教ゆるは甚だ誤れりと謂はざるべからず。

是の如き非國家的教育の弊は尋常中學の卒業生に於て明かに看取するを得べし。誠に彼等に向て希臘、羅馬の事蹟を問へ、彼等恐くは聲に應じて答ふるを得む、然れども飜て伯林會議、中央亞細亞問題、もしくはモンロー主義の何物なるかを問はゞ、能く答ふるものは彼等の十の二三ならむのみ。更に現今の世界に於ける我日本帝國の位置如何を問はゞ、恐らくは彼等の中是に答ふるもの無からむ。蓋し彼等の教師は一個の客觀体として歷史を彼等に教へたり。教ふるもの、教へらるゝもの、及び彼等の共に生息し、附屬する所の國土國民が、凡べて是歷史の活劇中に

するを以て歴史科の目的なりと思惟す。是を以て希臘羅馬時代と十九世紀と彼等に於て輕重の別あるなくバビロニア、アッスリアの興亡と日清戰爭と、彼等に於て同一の價値を有す。實に彼等にとりては現下の極東問題の由來は、歴山大王の乘馬が黑色なりしか、又は白色なりしかの問題に比して特に注意すべき理由あらざるなり。吾等は一個の史學者を養成するの道として是の如き方法の甚だ公平なるを認むと雖も、一個國民の資格に缺くべからざる歴史的知識を授くる方法としては甚だ適當ならざるを認めずむばあらず。

中等社會の國民をして其の國民たるの義務を完全に盡さしめむと欲せば、其の屬する國家の現狀如何に就て出來得べき丈け明白なる知識を有せしめざるべからず。殊に今日の世界は如何なる歴史を經由して之に到りたるか、是列國對峙の間に邦する所の我國家、我國民の位置は過去及び現在に於て果して如何、將た又將來に於て如何にすべきか、——這般の知識は、國民の國家的觀念を修養する上に於て最も須要とする所なり。而して是の如き知識を與ふるものは歴史に外ならず、中等國民敎育に於ける歴史科の職能は主として玆に存す。是を以て國民敎育と

方面を主とすべきは明かなる事なるべし。何となれば、純粹なる科學的知識としての歷史は、吾人の知識慾を滿足するの外、何等實際上の興味を有するものにあらず、然るに國民として自己の屬する所の社會國家の現在及び將來に關する明白なる知識は苟も中等社會の國民として其諸般の事業を經營する上に於て、最も須要とする所なればなり。今の尋常中學の歷史は果して是方針に據りて教授せられつゝあるか、吾等は却て反對の事實を認むるなり。

試に今の中等教育の歷史教科書なるものを取りて是を檢閱せよ、殆ど只一個の純粹なる科學として說述したる者のみ。帝國大學の史學科に於て專門學生の爲に講ずる所のもの、もしくは史學專門の學者が純粹なる科學の目的の爲に編纂する所のもの、其大體の方法組織事實に於て是教科書と異なるものに非ざるなり。教科書にして尙ほ且然り、是の如き教科書に依傍して授業する所の教員輩が、毫も國民教育として歷史の實際的方面の須要なることに看到せず、漠然茫然、只動植、理化等諸他の科學を教ゆると同一の覺悟を以て、偏に史的知識の注入を以て能事了れりと思惟するは、自然の勢なりと謂ふべし。彼等は既に史的事實の知識を注入

享受せしむることを得べし。若し夫れ精細なる方法に到りては、時宜に應じて其恰好を期すべきものなるを以て、素より茲に言ふべき限にあらず。吾等は唯是の如き方針によりて中等教育の組織を改造するの刻下の急務なることを唱道する者なり。

吾等が次に國家教育の振肅の爲に普く教育家の注意を煩さむとするは尋常中學に於ける歷史科なり。吾等は先づ問はむと欲す、今の尋常中學の歷史、殊に西洋歷史の教員は、抑も如何の覺悟を以て授業しつゝある乎。歷史は吾人が過去の生活の記錄なりと雖も、是過去の生活を繼續したるものは即ち吾人の依て以て生存しつゝある所の社會國家の現在の事實なり。是を以て人生百般の經營一として歷史に由來し、且準據せざるものなし。されば一個の科學として見る時は、歷史は過去の事實の正確なる記述と說明とに過ぎずと雖も、其の現在の人生に關して有する所の態度は能動的、實際的の他面を有す。是一事は、歷史が純粹なる知識を專らとする諸他の科學と大に其範圍及び性質を異にする所なり。今夫れ尋常中學に於ける國民教育の課程として、重きを是兩面の何れに置べきかと問はゞ、實際的

きを以てす。然れども吾等を以て見れは、是れ國民教育の獨立を認めざる大謬見なり。高等學校は其性質上専門教育に屬すべきもの、然るに尋常中學は純然たる國民教育の機關なり。彼を標準として此を規定せむと擬す、是れ即ち國民教育を以て専門教育の犧牲となすものにあらずして何ぞや。

然れども吾等は普通教育と専門教育との聯絡の必要を無視するものにあらず、是目的の爲に適當の設備を爲すは、學系の統一上、極めて須要の事業なりと思惟するものなり。吾等の見る所を以てすれば、今の尋常中學に於て高等學校豫科と尋常中學本科とを分離し、生徒をして其志望に應じて其科を擇ばしむること、猶ほ高等學校中に大學豫科と高等學校本科とを分つが如くするを以て、最も妥當の方案なりとすべし。然る時は、英語、高等數學等、凡べて専門學科の準備として必要なるものは、主として是を高等學校豫科に課し、尋常中學本科には英語、高等數學の代りに他の卑近にして須要なる學科、例せば社會國家の組織性質に對する一般知識の如きものを以てせば、一方には普通教育と専門教育との聯絡を圓滑ならしめ、他方に於ては一般國民をして不急無用の學科の代りに、適切にして且實用的の知識を

り中等社會の一國民として、須要なるものなるべし。然れども立体幾何、高等代數もしくは解析幾何學の難解特殊の知識は、將來專門學を修めむとするものを外にして、一般國民に果して何等の實益かある。中學卒業生にとりては是等は全く前に述べたる英語と其運命を同じうすべきものにあらずや。

是の如く、今の中等教育に於て、英語もしくは數學の如き實際國民教育としては不急、無用の學科に重きを置きて是を奬勵せむと力むるは、畢竟中等教育を以て嚴密なる意味に於ける國民教育と爲さず、却て專門教育の階梯なりと思惟せるの結果と觀るの外無かるべし。果して然らば、是れ即ち國民教育と專門教育との間に於て主從の關係を顚倒したるものと謂はざるべからず、今日の中學教育は所詮最少數の專門學志望者の爲に、最大多數の國民利益を蹂躙したるものなり、一般國民に對して學者の教育を施しつゝあるものなり。吾等は、是の如き教育方針を以て敢て國家教育の精神に背戻せるものと斷言するを憚らず。

今の教育の中學問題として論ずる所は、如何にして中學と高等學校との聯絡を圓滑ならしむべきかにあり、是を以て尋常中學校に責むるに英語、數學の程度の卑

のにして、大体の上より見る時は、普通の讀書會話だも辨ずる能はざるの有様なり。されば尋常中學卒業後、長く學校敎育を離れて實際の業務に從事せざるべからざる運命を有する大多數の國民が、業を卒へて後、期年ならずして殆ど全く英語の知識を遺却し了するは、最も自然の勢なりとす。もし彼等にして、卒業後も亦英語の實用を須要とするが如き境遇に際會したらむには、實際の需要に驅られて、學校敎育に於てはよし不完全なりし學力も、實地の練習によりて益々上達し益々其利便を享受するを得む。然れども是の如き境遇の下に生活すべきものは、今日に於ては勿論、内地雜居以後にありても極めて少數なりと觀ざるべからず。されば國民全体の上より見れば、中等敎育に於て最も多くの時間と最も多くの勢力とを消費して、辛ふじて、而かも不完全に學び得たる英語は殆ど全く不用なる學科なりと謂はざるべからず。かゝる不用なる學科を最も主もなる學科とせる今日の中等敎育は果して國家敎育の精神を體認し奉行せるものと謂ふことを得るか。吾等甚だ是を疑ふ。

數學に就いても、吾等は亦同一の疑惑を有す。算術、幾何の普通なる理論は素よ

別の設備を爲すに先ちて、普通國民教育を授けざるべからず。もし是國民教育にして彼等が將來に繼續すべき專門教育との聯絡上不適當なる點あらむには、中等教育は、其國民教育たるの性質を毀損せざる限りに於て、特に其準備の爲に特別の教程を設くることを得べし。是の如くにして、一方に於ては國民教育の精神を貫徹すると同時に、他方に於ては專門教育の前途に適應することを得む。畢竟一般教育としては、是兩面を有すると共に、嚴密に謂ふ所の國民教育と、是國民教育以上の專門教育との間に截然たる主從の差別を立てざるべからず。是主從の差別を維持することは國家教育の主眼なり。

然るに飜て今日の中等教育を觀るに、是の主從の關係の全く顚倒せるものあるを見る。英語科、數學科、歷史科の如きは其例なり。

英語科は今日の中等教育に於ては、其授業時間の上より見るも、授業上の實際に就て見るも、最も主要なる學科として考へられ居ることは明なる事實なりとす。然れども、國民教育として爾かく重きを英語科に置かざるべからざるの理由果して何處にありや。尋常中學卒業生の有する英語の知識は、實際上甚だ卑近なるも

然たる區劃あるを得ずと雖も、是を經營し設備する當局者の眼中には、常に明瞭なる差別の觀念ありて存し、而して是觀念に準據して、各々其方法の統一を計畫せざるべからず。然らざれば所謂國民教育の精神は何によりてか其適切と歸一とを維持し得べき。若し教育の全般を擧げて專門教育の楷梯たるに終らしむる如きことあらむには專門の學者、事業家たらむとする少數者を除きたる大多數の國民は、不用の知識を收容せむが爲に、一度び逝て再び歸らざる其の貴重なる教育期を消費するの不幸に陷らむ。吾等は現に今の中等教育に於て大に是憾無くむばあらず。

夫れ尋常中學は固と國民教育の範圍に屬すべきものなり。即ち國家の中堅となるべき中等社會の國民が、其國民たる資格に於て有せざるべからざる最小限の教育を受くべき所なり。されば尋常中學の教科課程は主として嚴密なる意味に於ける國民教育の教科課程ならざるべからず。中等教育の大主腦大把柄は實に是に存す。素より國民の中には普通國民教育に滿足せず、更に進みて高等專門の知識を得むとするものあるべし。然れども國家は是專門教育の志望者の爲に特

無主義の教育

（現今の問題下）

（今の教育は國家主義の教育にあらずして無主義の教育のみ」

今の教育者、口を開けば則ち國家教育と云ふ。されど國家主義の教育は果して今日に於て實行せられつゝあるか、吾等甚だ疑ふ。言ふまでも無く、國家教育とは國家の經營、獨立、進歩の爲に必要なる國民を造るの教育なり。今の教育に於ける諸般の設備は果して是目的に對する明白なる自覺と自信とによりて爲されたるものなるか。國民教育の名によりて行はれたる幾多の事業は、是精神を實現する上に於て果して幾何の效果を奏したるか、若しくは幾何の效果を奏するの望ありとするか。吾等は茲に是國家教育の根本問題に關して在朝在野の教育者に一大猛省を促すことの甚だ急務なるを認むる也。

吾等の第一に疑ふ所は、國民教育と專門教育とは果して明瞭なる差別の觀念によりて設備せられたりや、否やにあり。是の二種の教育の間には、實際上素より截

の改良を以て言を爲す、短視に非ざれば淺慮のみ。枝葉の剪栽を力めて而して根蔕の培養を顧みざるもののみ。苟も倫理教育に就いて立言するものは、先づ社會道德の振肅を論ぜざるべからず。

吾人を以て是を見れば、今日社會道德の頽廢は國家道德主義の一定せざるにあり。吾人不肖の身を顧みず、同志先輩と共に敢て日本主義の運動を興起し、聊か爲に一臂の力を惜まざる所以のものは、實に民心を統一し以て社會道德の乖離を救濟せむと欲するの微衷に出づ。實に吾人は吾人の事業が倫理教育の根本問題に接觸して其解釋の肯綮に中れることを確信するものなり。果して然らば世の倫理教育に關して吾人と憂を同じうするの士は、是際吾人の日本主義に就て愼重なる考察を吝むべからざる也。

りて生徒の品性淘汰を遂行し得べしとは何人も想像し能はざる所なり。吾人は、此の如き大目的は教育課程全體と、家庭教育及び社會教育との綜合力によりて初めて成就せらるべきものなるを確信す。唯道德の概念を明にし、家族社會國家等のもろ〳〵の集合生活と個人との大體の關係を訓ふるを得ば今の倫理教育の目的略ぼ達せられたるに庶幾からむ。而して吾人は今日以後の眞正なる國民的道德にありて是の如き知識の須臾も缺如すべからざるを認むるなり。

吾人の倫理教育に對する所見略ぼ是の如し。如上の所見に據りて、吾人は世上の論者の如く所謂倫理教科を以て國民道德の汚隆の上に爾かく重大の關係あるものと思惟せざるなり。唯倫理教育は教育全般の精神と家庭社會の道德的感能によりておのづから遂行せられ得べきことを認むればなり。是に於てか今日倫理教育の最大事業は、國家道德の大主義を以て社會の全體を貫徹し、統一し、小は個人より大は國家に至るまで同一均齊の道德的感能を以て外來の勢力を調攝するにあり。輓近に於ける學風校紀の頽廢は其原因は決して學校職員の中にのみあらずして實は社會的道德の頽廢の一反影のみ。是時に當りて區々たる倫理教科

當事者が深く是點に注目し、德性の淘冶にはおのづから其道あることを會得せしむことを希望して已まざるなり。夫の徒に文字理義を訓誨して而して其衷心の感化を顧みざるや、玆に矯飾僞善の病を生ず。吾人素より今の倫理教育の理想的と相去ること甚だ遠からざるを認むと雖も、實行の方法其の宜しきを得む乎、必ずしも是病弊に陷るべきものに非ざるを確信する者なり。病弊の一面を見て而して今の倫理教育の全體を否定し、而かも其後を善くする所以の道に到ては茫々として言ふ所無きが如きは、偏頗且無責任の言論なりと謂はざるべからず。

是を要するに、今の世に於て倫理教育の爲に一課程を設くる無くんば則ち已む、苟も是の如き課程を設け、而して國民的品性の淘冶の爲に現下の事情に於て出來得る限の最上策を施さむと欲する者は、必ずや今の教科書的方法を除きて他に道無きを認むるならむ。若夫れ毎週一時間乃至二時間の課程によりて國民的品性の完全なる淘冶を望まむは素より能はざるを責むる也。夫の今の倫理教育を難ずるものは、其の望む所の過大なるに基因する無からむや。如何に完美なる方法と、如何に善良なる教師とを以てするも、今の教育組織の下に、其倫理科の教程によ

若し小中學教員として德行の君子が果して望み得べからざるものならむには、教育者は是最上策の行はれざるの故を以て、倫理教育を全然不可能として抛擲すべきなるか。曰く否。吾人は何れの時、何れの處に於ても、其力の及ぶ限りに於て、其の Best を實行せざるべからず。是れ事に當るものゝ責任なり、義務なり、將又天職なり。吾人を以て是を見れば、今の所謂教科書的倫理教育も亦現下の策としては萬已むを得ざらむのみ。何となれば、今の時に於て教育當事者が其力の及ぶ限りに於て最上策を行はむと欲せば、勢ひ是方法に據るの外無かるべければなり。

然れども是方法を施行して其最大の實效を收むる所以の順序、徑行に到ては、現下の教育決して其十全を稱すべきものに非るべし。其訓諭の高尚に過ぎて生徒の幼稚なる理解力に適せざること、其の說く所の談理に傾きて實際に疎きこと、抽象に過ぎて明確の感銘を生徒に與へ難きこと、其例話に異常非倫の事多くして平素の常道として應用するに適切ならざること、若しくは其の講ずる所或は廣漠にして捕捉し難く、或は深遠にして測度し難く、或は煩瑣にして推理し難きこと、是等は蓋し今の倫理教育の缺點なるべし。吾人は教科書編輯の任に當るもの、及び當該學校の

るに非ざれば空瓶を倒にして是に充たさゞるに同じからざるか。

近時教育の時弊を論ずるもの多きが中に、吾人は坪内雄藏氏が近刊の六合雑誌に掲げたる『倫理教育私見』と題する一篇の如く、周匝精緻なるものを見ず。獨り其弊を擧ぐるに密にして、其後を善くするの法を説くこと甚だ疎なるに到ては、吾人潜に恨無き能はず。氏の積極的方案として提出したる所のものは所詮小中學に、良師を擇び、同時に平素に實行し得べき徳より初めて師先づ是を實踐し、子弟にも是を實踐せしむべしと謂ふに過ぎず。良師を擇ぶことは人物感化の上に立てる所の倫理教育が素より須要とする所なり。唯憂ふる所は小中學校教員として徳行の君子の果して得らるべき事なるかにあり。随て教師が其實行によりて子弟を率ふることの實際望み得べきことなるかを恐るゝのみ。是れ教育者の夙に切望憂慮して措かざる所、若し實際上望み得べき事ならば、是教育法は今日業既に實行せられたらずむばあらず。其の實行せられざるを以て見れば、其望み得べからざる事實亦自ら明なりと謂はざるべからず。望み得べからざるの事を望む、理として甚だ美ならむも、實行の方案としては聊か肯綮に當らざる無からむや。

ことを熱望するものなり。　吾人は或論者の說けるが如く、今の小中學の倫理敎育が概して形式的、皮相的、塗飾的なることに就いては、最も其感を同うす。　是れ恐らくは今日全國の敎育者が均しく認識する所の缺陷ならむ。　徒らに勅語の字義に拘泥し、句々の例話を引き、さながら直譯的に、逐條解釋的に講述し去り、以て足れりとするの迹あるは、決して聖旨の所在を體認して薰陶の實効を擧ぐる所以に非ざるなり。　若し夫れ論語、大學、小學等の訓詁釋義を傳へて殆ど漢學科程と擇ぶ所無きが如きは、形式的德育も玆に到て極まれりと謂ふべし。　惟ふに小中學の敎育當事者如何に淺薄なりと雖も、這般の事理に通曉せざるの理あらむや。　德育は理を以て外より强ゆべからず、人物の陶冶は中心の感化を必とする位の事は、今日何人か是を知らざらむ。　然るに實際の敎育上是の如きものは、畢竟當事者求めて形式的、皮相的、塗飾的なるに非ずして、倫理敎育本來の目的を到達すべき適當の方法無きが爲に、暫らく是姑息の策に據れるならずむばあらず。　故に今の時に於て、敎育當事者に向て其倫理敎育の形式的、皮相的、塗飾的を難ずるものは、恐らくは旣に醒めたるものを搖撼するに等しからむ。　若し同時に示すに善後の救濟策を以てす

の時に於て最も是覺悟の須要を認むる也。

吾人を以て是を観れば、今の日本は最も浮薄なる、根抵なき一時的の風潮に動かされつゝあるなり。而して是の如き薄弱なる風潮を以て天下の動かすべからざる大勢なりと誤認し、是に隨從し阿附するを以て今の世に處して自家の生存發達を完ふする唯一の方法なりと迷信するもの所謂世界主義者流の少からざるを見て轉た浩歎に堪えざるなり。多年其内を知りて其外を知らざるもの、一朝世界の大觀に面接して自家の弱少を自覺するに及び、惶惑狼狽爲す所を知らず、漫に世界の文明を叫び、世界の大勢を唱へ、厘に外邦崇拜の假面を掩ぶもの、殊に『亞米利加歸り』の一派の如きに到ては、殆ど憫笑に勝えざらむとす。今日我邦に於ける『世界的』風潮の大部分は、是輩が拜外夢裡の譫語に出づるもの、素より一時の疣贅に過ぎず。是一時の疣贅的風潮に雷同し、輕率短視の笑を後年に貽さむが爲に、一國教育の大主義を枉屈せむと欲す、識者の同意する能はざる所なり。

然れども吾人は今日の倫理教育に就きて決して滿足するものに非ず、其の『誤解せられたる國家主義』に對しては、眞正なる國家主義の爲に十分其寃枉を伸張せむ

況や逆行すと云ふに於てをや。良し假に百歩を譲りて、時勢と教育と眞に並行せずとするも、吾人は是の並行せざるの故を以て、強て教育をして時勢に阿從せしめざるべからざるの理由を見ざるなり。單に時世の風潮に從ひて東西すべくむば、世豈所謂教育主義に就て劬勞するものあらむや。教育は國民の性情に基きて其理想を追求する一個の能動的主義也、徒に外他に依りて感受するのみならず、內自ら生發する所なかるべからず。夫の時勢と云ひ、世界の大勢と云ふものは、天降地生、動かすべからざるものに非ず、其の本く所は各國々民の自由の活動にあり。吾人豈に是に對して絕對的に服從すべき謂はれあらむや。若し所謂時勢にして吾人の性情、吾人の理想に背戾するものならむには、吾人は吾人の自由の活動によりて是を吾人の性情理想に稱ふものと爲さゞるべからず。是に於てか吾人時としては自家の生存幸福の爲に一世の風潮に反抗するの已むを得ざることある也。而して國家の事業として是に當るものは、主として教育に非ずや。故に一國の教育は必ずしも時勢を迎合して進退すべきに非ず、苟も自家の性情理想に照して合はざるあらば、我より進みて是を改造するの覺悟あらむを要す。吾人は今

るを得べくんば、今の國家主義もしくは日本主義は、即ち是れ最も進歩せる世界的の主義に非ずや。漫に世界の二字に眩惑し、他の國家を言ふものを目して狹隘なりとするが如きは、其思慮の淺薄殆ど他に比すべきものを見ず。

且夫れ今の倫理教育の不振として擧けらるゝの事實は、學風の輕薄なり、風儀の紊亂なり、校紀の弛廢なり、中學校生徒等が狹斜の巷に遊びて恥とせざることなり、師範學校生徒職員の演劇に熱中せることなり、生徒が教師に對する反抗なり、是に對する處分としての停學退學なり。是の如き諸多の事實の何れの邊にか果して國家主義の負ふべき責任ありとするか。誤解せられたる國家主義や、或は其の弊の形式に流れ、塗飾に陷れるものあらむ。然れども噎死するものあるの故を以て其食を捨つべからず、焚死するものあるの故を以て其火を惡むべからざるなり。世の國家主義の教育を難ずるもの、他によりて誤解せられたるものを見るに非ざれば、自ら誤解したるものを想ふのみ。彼れ宜しく其私情を披拂し來て吾人に就て學ぶ所あるべきなり。

吾人は國家主義の教育を以て決して今日の時勢に後れたりと思惟する能はず、

りとするものあり。　是種の論者によれば、今の社會は進歩的なり、然るに其敎育は保守的なり、今の社會は世界的なり、然るに其敎育は國家的なり、敎育が是の如く社會の風潮に逆行するは、即ち其綱紀の紊亂する所以なりと。　蓋し是れ今の國家主義の敎育に反激したるの言ならんか。　然れども吾人を以て是を見れば、是の如きは先づ好惡の爲に去就を決したるもの、未だ今日の實勢を明にせざるの論のみ。

今日の日本國民が、世界に於ける自家の位地を覺識し、先には一區の畛域に限られたる眼を以て、今は則ち世界の大勢を觀じ、以て其云爲を決せむとするに到りたるは、蓋し時勢に處して其の宜しきを得たるものなり。　是を稱して進歩的と云ふ素より可、世界的と云ふ亦妨げず。　然れども今の倫理敎育は果して是傾向に反對せるか。　吾人未だ其十分なる事實を認むる能はざる也。　却て今日の國家主義は、世界的知識によりて覺醒せられたる國民的意識の要求に基けるものに非ざるか。想ふに論者の目して今の敎育主義となす所のものは、往年の國粹保存主義の類に非ざるか。　果して然らば彼は未だ國家主義の眞意義を解せざるものなり。　もし世界の大勢に適應して自家の生存發達の策を規定することを以て、世界的と稱す

倫理教育問題

現時の問題（中）（上は畧）

今日倫理教育が實際に於て振はざるは、掩ふべからざるの事實なり。啻に實際に於て振はざるのみならず、是を統率する所以の主義に於ても世の歸向する所一ならず。大體より觀察すれば、今の中等以下の國民的倫理教育は、殆ど無規律無主義の渾沌裡に在りと謂はざるべからず。若し夫れ其關係影響の上より是を見れば、眞個に是れ教育社會の最大問題、苟も國家に志あるもの〻霎時も等閑視すべからざる所なり。

吾人は平生是問題に關する世上幾多の立言に注意せり、然れども其の言ふ所、偏に弊害の一面を剔抉して其救濟の方法に及ばず。唯夫れ弊害の剔抉に力む、是を以ておのづから其利益の他面を遺却し、往々微瑕の故を以て尺璧を抛つの弊に陷るを免れず。未だ全分の理を盡し、安じて實行の規準とすべきものを見ざる也。今の學風校紀の頽廢を以て、現時の倫理教育が國民生活の進步に背馳するが爲な

べからざるなく、系統の貫ける無し。固陋なる國體論者は世界の大勢に疎くして其説や保守に過ぎたり。是際高上の理想に本き、正大の見地に據り、中正不偏なる國家主義の福音を遍く海内に宣傳し、以て國民精神の統一を大成せむは、獨り國内民人の利福の爲のみならず、外世界に面して一國の光榮を揚耀するに於て最大急務ならずとせむや。吾人は我國の前途に於て國家主義論者の働くべき事業の遙に前日に倍蓰せるものあるを認む。

（卅二年一月）

緩急あるの時、かゝる議員も亦國家の爲に甚だ心細きものなるを思ふなり。選擧人となり、被選擧人となる、一地方の利害素より關心するを要すと雖も、是を統率する所の國家的精神を缺如せば、議院は最早や國家的の議院に非ざらむ。局に當るものゝ迷ふは強ちに恕すべからざるに非ざるも、國民を擧げて恬として怪訝するある無し。吾人はかゝる國民の亦等しく賴もしからざらむを憂ふるなり。

是の如き事例は社會に充ち滿ちたり、社會人民の大々多數の國家的觀念は尙ほ未だ覺醒せられざるなり、吾人は覺醒せられずと云ふ、そは我國民が先天的に忠君愛國の情緒に富めることは吾人が國民の名譽によりて固く信認する所なればなり。誰か人性の善なるを以て教育を要せずと謂ふものあらむ、さらば何ぞ獨り國家主義論者の言を以て贅疣なりと謂ふや。吾人の見る所によれば日清戰爭このかた國家主義は名のみ唱へられて實はむしろ遺られたり。教育者は倫理の時間に勅語德名を講ずるを以て國家主義の道德を訓えたりと心得、教育の全系を包有的に統率する所以を知らず。政論家の國家を言ふものは、國性國體の觀察に本かず外邦の成見を假り來り、時に隨ひて機宜の辯を弄ぶもの多し、其說に根柢の拔く

枉屈するが如き、彼等が日常の行爲也。而して己れ悔ゐず、人咎めず、詐謀を以て機敏となし、構陷を以て政略となす、蕩々然として百鬼夜行の有様なり。是時誠意を以て國家を言ふものあるも徒に迂濶の議を買はむのみ。

國家的觀念に乏しきものは獨り政府、政黨、黨員、議員のみならず、實に全國の、選擧人、商工業家、概ね然らざるは無し、誠に地租增徵案に反對し、若しくは贊成せるものに視よ。反對せるものは農民地主にして、贊成せるものは商工業者なるは奇ならずや。農民の反對せるは地租增徵が直接に彼等に不利なればなり、商工業者が贊成せるは彼等に有益なればなり。あはれ是間に何の國家的意義ありて存せりや。國家が地租增徵の案を立てたるは、軍備擴張てふ國家的事業の爲なり、之を贊否する者は却て自家の利害より打算し來る。あはれ國民と國家との關係は是の如くにして圓滿なるを得べしとするか。吾人は一朝有事の日に際せばかくの如き民衆の甚だ賴み少かるべきを憂へずむばあらざるなり。かゝる民衆の選擧せる議員等も亦偏に撰擧區の利益を先にして國家全体の休戚を慮らず、畢竟選擧人の歡心を買はむが爲には如何なるものをも犧牲となすを避けざるなり。吾人は一旦

にして事多し、國民荷擔に疲弊せる今日、國家其の費を抛ちて教育に力む、國家と爲すも無きものを養ふの謂はれやある。是際學者にして大に國家的精神を振作する無くむば、所詮は死學者のみ。文學は國家的觀念に乏しき詩人、小說家によりて衰頽の極みに陷れり、國民の欲求は毫も顧みられず、彼等は詩人、小說家の私有私念を聞かせらるゝに倦み果てぬ。精靈界の慰藉を與へむもの、今や其人甚だ乏しきなり。國家的精神の政治界に乏しきや、政府も政黨も議員も選擧人も、目指す所は唯私利あるのみ、政治家の其節を賣るは猶ほ藝者の其藝を賣るが如し。個人主義を唱へたるもの何時しか國家主義に變じ、平民主義を說きたるもの忽ちにして藩閥の奴隷となり、超然主義の本尊にして憲法中止をさへ唱へたるもの、其都合の爲めには何時にても政黨と提携するを憚らず、政黨の進退は一に黨略に出で、黨員の左右亦私利に本づく。目的は手段を辨解すとは恐らく彼等の金科玉條とする所なるべし。されば手段としては虛言を忌まず、僞善を憚らず、而て其目的や私利のみ、野心のみ。中心相猜疑して肝膽相照すと揚言し、陰に兩端を持して愼重の態度と稱す。國家の公職を以て自黨の爪牙となし、若しくは選擧の利害を慮りて正理を

たり、日本國民にして其國を愛せず、其君に忠ならざるもの何處にかあるべき」と。果して然る乎、惟ふに是の如きは未だ國家主義論者の憂とする所を解せざるには非ざるか。吾人を以て見れば、國家主義は是迄よりも幾層の熱心を以て說かれざるべからず。聞き飽きたるものをして欲するがまゝに聞き飽かしめよ。我國民の國家的精神にして未だ攪醒せられざるもの尙ほ甚だ多き以上は、國家主義論者は是等の昧者の目覺むるまで、聲を限りに叫ばざるべからず。我國家は今日是の如き昧者の爲めに如何ばかり苦められつゝあるか。

吾人をして事實を語らしめよ。社會は公共心乏しき民衆によりて如何に苦しみつゝありやを思へ。公園の樹木だに警察の監視に非ざれば保護し難きに非ずや。人は己あるを知りて他あるを知らず、況や國あるをや。慈善は虛名の爲に爲さる、自己の名を高く標榜せらるゝに非ざれば、一錢の寄附にだも應せずと云ふ。萬一國家事ある時、位爵誘ふ能はず、勳章勸むるに力なくば、何によりてか國民の義勇心を鼓舞すべき。學術界は國家的觀念なき學者の多きが爲に殆ど死相を現せむとす、世利國益と爲す所無くして如何に自ら高ぶるとも、所詮は死學のみ。世末

絶えず、其說の詭激に亘るや、往々吾人をしてその公安に累するなきやを疑はしむるもの無きにあらず。例へば某新聞の一記者が『國家は一面に於て明に人民の爲に存在す、君主も亦慥に其一面に於て人民と共に國家てふ機關体の主要成分をなすもの也』と述べて民政主義の眞理を說き、若しくは某雜誌記者が英國の例を引きて我國体に比擬し、『女皇は君臨して治めず』の套語を以て立憲君主政体の眞相なりと論ぜしが如き、何れか民政主義の失敗に對する世界主義者流が憂憤の激語に非ざるべき。然れども大勢の赴くところ、區々の反抗また何爲るものぞ、國家主義が蕭々として社會の實勢力を把持すること故の如し。

六　結論

日本主義と世界主義との消長として見たる過去一年の國民思想はほゞ是の如し、されば今後の思潮を如何すべきか。社會の事は民人の意志の活動より成る、よろづ自然の徑行に委ね去らむはやがて人類自由の意志を放擲し去れるものなり。國家主義に反對するものは、動もすれば言ふ、『吾等は國家團体の語を聞き飽き

平時にあらしめば、是の如きは有勝なる瑣細の失言のみ、素より深く齒牙に懸くるに足らざるなり。而かも世論が是の瑣細の失言を提へて窮追して假借する所なく、事の結果をして尾崎氏の退官と憲政黨內閣の瓦解に終らしめたるは又以て突飛なる民政論に對する反抗の氣勢如何ばかり當時の社會に充滿せしかを想像するに足らむか。共和演說は畢竟民政主義と國体との關係問題を呈出し、國民をして十分是を考竅し、解釋するの機會を得せしめしものなり。尾崎氏の退官と憲政黨內閣の瓦解とは、即ち是解釋が事實の上に著はれたるものと見るを得べけむか。されば吾人は我國民、殊に幼稚なる政黨者流をして我國體の概念を痛切に會得せしむるの機會を作りたる一事に於て、共和演說の大いなる價値を認めむと欲するなり。

さはれ、尾崎氏の退官と是に續いて起りたる所謂政黨內閣の瓦解とは、所詮民主思想の敗北を證せるものに外ならざりき、世界主義者流の落膽如何ばかりなりしぞ。事の隱諱にかゝはるもの、彼等の無謀を以てしても流石に明らさまに言ひ表はし得ざりけむ、微言譬喩によりて厘に其の憂憤を漏らすもの、今日に到るも尙は

だに鬱勃たる憂憤の情遣り難き折柄なれば、反動の氣勢はさながら堤を決したらむ如く、蕩々然として社會に迸發せり。

憲政黨員の理想は英國流の民政主義にあり。彼等は陛下の御信任によりて其内閣を組織しながら、却てそを多數人民の意志を代表せる政黨の當然の權利なりと樣に思惟したりき。民政主義は即ち個人主義なり、個人主義なるが故に、君主は國家の主權に非ずして代表者なりと思惟せらる。民政主義は非君主政体なり、非君主政体なるが故に、君主は國權の本体なれども行用の權なしと思惟せらる。かく觀來れば民政主義は畢竟所謂三權分立を理想とするもの也。如上の意味に於ての民政主義が到底我國体國性と相容れざることは問はずして明なるべし。されば政黨以外の社會は一致して是に反對せしが、世界主義者流のみ獨り口を極めて是に謳歌し、帝國教育會の席上に公然勅語撤回の希望を演説せしものすらありき。

是時ゆくりなき一個の事實は、民政主義と國体との關係に就いて最後の斷案を促しぬ。そは他にあらず時の文相尾崎行雄氏がなしゝ所謂共和演説是なり。所謂共和演説をなしゝ尾崎氏の心事は今更是を問ふの要無かるべし、もし是をして

の樹立は是主義の宣傳にとりて百萬の援兵にも較ぶべかりき。

議院に多數を占むる政黨が内閣を組織すとは、取も直さず政治上の勢力が人民の手に移りたるの謂なり。我國體が果してかゝる意味に於ての政黨内閣を容れ得べきや否やは茲に論ずる迄も無けれども、當時伊藤侯に代りて内閣を組織したる憲政黨の多くの政治家は實に是の如き謬見を懷きしなり。されば彼等は君主の信認を形式上の事なりとし、議院に多數を占むる政黨には即ち時の内閣を組織するの實力ありと思惟したりし也。『内閣は憲政黨の出店なり』と公言するを憚らざりし一輩の政治家が、英吉利流の民主政治を以て我邦に擬せしは寧ろ明白なる事實なりとす。かゝる大謬見の上に憲政黨の内閣は兎にも角にも組織せられたり、彼等は二十年來夢想したる彼等の無何有鄕が一朝偶然にして實現せられたるに狂喜し、英佛流の突飛なる思想より目覺めて國體國性を熟考すべかりし時機なるをも辨へず、忌憚なく是大謬見を宣傳せり。彼等の言は最早や空想にあらずして事實なり、而かも是事實たるや一國政權の上に現はれたる最高の事實なり。世界主義はかゝる目前の大援に會して如何ばかり其心を强うしたるべき。左なき

義に謳歌せり。されど偶然なる政治上の事變よりして、一時是主客の位地を顚倒せしめたるは、三十一年に於ける思想史上の一大事實として特に大書し置くべきなり、政治上の事變とは言ふまでもなく七月に起りたる所謂政黨內閣の樹立を云ふ。

五　政黨內閣と國民思想

所謂政黨內閣の樹立が國民思想に及ぼしたる影響として見るべきもの、一にして足らざれども、所詮は世界主義の擴張に在り。是れ迄世界主義は言論の上にこそ唱へられたれ、未だ曾て政治上の勢力によりて扶育せられたる事なし。一西園寺侯ありしと雖も、二十年來國家主義によりて結成せられたる敎育社會をば如何ともする無かりき。基督敎會並に宗敎學校は、世界主義の實行の爲に多少の力を濫したりと雖も、日本主義が國家敎育によりて皷吹せらるゝに比すべくもあらず。世界主義の無勢力は素より國民性情に稱はざるにも由るべしと雖も、抑もそが政治、敎育の上に何等の根柢無きこと、亦其一主因なりしなり。されば所謂政黨內閣

基督教の雜誌『世界の日本』の一記者等は空谷の跫音として是を讃美せり。佛蘭西の一僧侶は『世界主義と日本主義』と題する一册子を公にして日本主義、國家主義の偏狹なるを駁撃せり。佛教と耶蘇教とは同舟難に遭うて呉越も其怨を忘るゝの顰に倣ひ、神道を味方とする日本主義に對して攻守同盟を作りたり。無節操なる國民新聞の如きはしば〳〵國家主義の頑迷を呼ばはりたり。教育報知記者は『日本主義と世界主義』と題し、日本主義の偏執を論じて『感情によりて立てる極端說』なりとせり。世界主義主張者ならざる一部の思想家も亦反對の意見を公にするものあり、建部水城の如きは『明治思想の變遷』を『日本』紙上に論じ、日本主義を以て時勢を知らずとなし、『十年前の國粹主義の覩然たる踏襲に過ぎず』と揚言せり。耶蘇教の舊派を以て目せらるゝ人々は『新世紀』と名くる一雜誌を發刊し、主筆小崎弘道氏は其初號に於て、『若し吾人にして泰西の政治主義を執らむか、吾人は幷せて其宗教主義(卽世界主義)をも執らざるべからず』と公言せり。凡そ是等の事實は、三十一年の後半期に於て世界主義的思想の鬱勃として再び興り來らむとするの徵なりき。

されど如上の反動は大勢に於て素より言ふに足らず、社會は依然として、國家主

四　明治三十一年に於ける二主義の消長

一度び教育の勅語に頓挫し、再び教育宗教衝突論に挫折し、三度び日清戰爭以後に於ける國民精神の勃興によりて大打擊を被れる世界主義は、明治三十一年に入りて漸く反動の氣勢を昂め來れり。一正一反の常理、むしろ自然の趨勢とや言はまし、そはすべての物其昌榮の極みに達すれば、人これに狎れて漸く其德を感せず、却て其缺處を自覺し初むればなり。國家主義今や累年の積勢に乘じて縱橫無盡に思想界を蹂躙したりしかば、其主張或は中正を離るゝあるを免れず、茲に漸く一部人心の不滿を招き、遂に世界主義者流の反動を誘致するに到れり、是れはた勢なりと云ふべし。

是年の一月、世界主義を以て目せられたる、西園寺侯は文相の椅子に憑れり。侯が國民新聞の記者に語りて『日本の文明は西洋流ならざるべからざる』を公言せしは、流石に時勢に憚りたればにや、其聲高からざりしかど、一國の文相が學政上の意見としては、慥に世界主義者流の耳には、野に呼べる人の聲とも聞えしなるべし。

意識を以て人道の理想に戻れる虚僞の觀念となし、そを勸奬する國家主義の道德を以て偏狹固陋なりとす。彼等は歴史を見ること國家主義者流の如く爾かく重からず、されば歴史によりて結成せられたる文物は必ずしも國民性情の中に拔くべからざる根抵あるを信せず、隨て是の如き文物にして彼等の理想とする所に違ふものは、外來一時の勢力によりて容易に矯正し、又は打破することを得べく且是の如き矯正もしくは打破は、必ずしも國民性情の滿足を傷くるものに非ざるを信ず。是點に於ても世界主義は全く日本主義と正反對の主張を有するものと謂ふべし。

是二主義の異同略ぼ是の如し。世には兩者の爭を以て名義上に過ぎずとなすものあれど、そは類同の一面を見たるのみ、實踐の倫理問題に關しては兩者は當然相爭ふべき理由を有するもの也。顧みれば維新このかた三十一年間の國民思想史は、所詮是兩者の頡頏消長に外ならざりき、殊に最近過去の一年に於て爭點の最も分明となれるを見る。是れ明治三十一年の思想を瞥見するに先ち、特に從來の思潮並びに日本主義と世界主義との綱領を明にしたる所以なり。

是に於てか日本主義は國性と國體とに本きて國家主義を執る。世界主義は即ち以爲らく、國家は方便なるが故に國家主義者流が思惟する如く爾かく尊重すべきに非ず、されば國性と云ひ、國體と云ふもの、時宜に依りて更革もしくは破壞する、亦必ずしも不可ならずと。されば世界主義は形式論の上に於ては國家を唯一方便とするに於て必ずしも日本主義に異なるに非ざれども、而かも國家其物の實質に關しては必ずしも國性又は國體の動かすべからざるものあるを認めず、是れぞが日本主義と異なる要點なるべし。

國家の概念に就いて世界主義の日本主義に異なること既に是の如し、其他もろ〱の實踐倫理問題に關して幾多の異説あるは、洵に已むを得ざるなり。其一二を言はゞ、世界主義は日本主義がやがて國家主義なるに反して個人主義なり。獨り社會道德に於て然るのみならず、政治上に於ては、個人を以て君主と並立する重要原素なるを認めむと欲す。されば朕は國家なりとのルイ十四世の言によりて尤も適當に言ひ表はさるべき我が國體に關しては、絶對的に日本主義と其解釋を異にせるもの也。世界主義の側にある人は、我國民が忠孝に關して有する道德的

三　兩者の比較

今是世界主義と先に述べたる日本主義とを比較せむか、目的に於ては兩者必ずしも相容れざるにあらず、そは個人を省いて別に國家無きを認むる點に於て兩者相同じく、所謂幸福とは意識あり人格ある個人に就いてのみ言ひ得べしとする點に於ても兩者相同じかるべく、又人生究竟の目的を平等圓滿なる幸福の實現に存すとする點に於ても亦兩者恐らくは相同じかるべければなり。さらば其爭點は是究竟の目的を實現する方法の上に存すと見るの外なし。日本主義は國家を以て是究竟の理想に到達する唯一の方便となし、唯一の方便なるが故に實際上國民道徳の最高標準となす。そは國家は偶然にして成立せるものにあらず、既に成立し又漸く發達するに隨れ、先に是特殊の國家を成立せしめたる所以の要素は益々其差別性を開發し來りて、遂に國家と實際上相容れ難き諸他の性質を現じ來るべし。されば世界に於ける各國民の到達すべき究竟の理想或は同一なりとするもそを實現する所以の方法は、各國民に於て各々異ならざるを得ざるべければなり。

一面に拘泥せむは謬らずや。忠君愛國を以て實踐倫理の標準と立するも、亦やがて人道究竟の大理想を蔑視して一國家一國民の小理想に執着するものと謂はざるべからず。且夫れ世界には世界の大勢あり、鎖國攘夷の昔ならばいざ知らず、苟も世界の一國として國際關係の中に存立せる以上は、是大勢に背戻せむは極めて無謀のわざなるべし。日本國民は如何に忠勇なりと稱するも、土地小にして國貧し、是貧小を以てして世界列國の强大と並立せむと欲せば、世界の大勢を迎合し、隨伴して、敢て抵抗せざらむことを務めざるべからず。若し國性國體にして是世界の大勢に適せざるものあらば、宜しく我を枉げて彼に調攝すべし、是れ今日の世に處し、我國家の安全及發達を企圖する上に於て、萬已むを得ざるなり。かの日本主義、及び國家主義なるものは己を見ること餘りに高くして是主客の辨を顚倒せり。

是の如きは所謂世界主義の主張なり。是種の論者の中には、或は世界主義の名によりて呼ばるゝを好まざるものあらむ。されど世界を先にして國家を後にする點に於ては、慥に是名稱に適應せるもの也。

是れ日本主義が同時に國家主義たる所以なり。

若し夫れ世界主義に到ては全く別種の原理に本くを見る。是種の思想によれば、世界上の人類は其の等しく人たる所以に於て歳時方處の差別を容るべからず、人類生存の目的素と平等絶對なる人道の圓滿なる實現に存する以上は、國性國体の差別見に執着し、國家を以て倫理の標準と爲さむは偏狭なるに過ぐ、人類の道德的意識の欲求する所のものはさる偏狭なるものに非ず、遙に高上に、遙に偉大なる理想にあるなり。畢竟國家は個人の爲に存するもの、個人が國家に盡すべき義務あらば、そは個人自らの幸福に利益あるが爲のみ。人の人たる所以の目的は單に其人の住する國家の幸福を圓滿に現ずるに依りて果さるべきものに非ず、唯吾人人類が世界永久の眞理と認めたる所に從ひて、天地と共に悠遠の生命を保つにあるのみ。かの國家主義の如きは、國家てふ一の形式を捉へ來り、強ひて個人を拘束せむと擬す、取も直さず方便の末に走りて目的の本を遺れたるもの、謬れりと謂ふべし。我國民はその人たるに於て世界の何れの國民とも同じく、我國家はその國たるに於て世界の何れの國家とも異ならず、さらば國性國體を言ひて偏に差別の

個人を離れて別に國家無く、隨て個人の幸福を損害して別に國家の繁榮を希ふの矛盾なるは言ふ迄も無し。又同じ人類として生を斯世に享けたるもの、若し得べくむば博愛平等の生活を營まむの願は、恐らく人類先天の性情なるべし。日本主義爭でか如上の眞理を認めざらむや。唯是等の目的に到達する實際上の主義として、國家に至上の權能を認めたるのみ。そは異なりたる人種が異なる風土に邦して玆に數千年の歷史を經由せば、おのづから國性國体の他邦に殊なるものを生ずべく、隨て世界平等の主義を以て直に是に臨むは、即是國性國体を無視し、其邦の自然の發達を拘束するの結果、所謂角を矯めて牛を殺すの弊に陷らむを恐るればなり。又個人主義によりて直に個人の幸福を現じ得べかりし時代は、既に歸らざるべう過ぎ去りたり、今の世にありて人類の集合生活は國家を單位とす、されば個人の幸福は國家の富强繁榮を通じて間接に到達し得べきのみ。如上の意味に於て、國家は個人の幸福を實現し、人道の發達を期成する方便なりと觀むも慥に一面の眞理なるべし。されど同時に認むべきは、國家が是場合に於て唯一の方便なることとなり、既に唯一の方便ならむには、即がて是れ實際上の目的にあらずや。

二　日本主義と世界主義

吾人の所謂日本主義とは、一言すれば日本の國性國体を第一義とし、外より來れる一切の勢力を箇中に調攝し同化せむとする主義の謂なり。漫に世界の文明と謂ふ、こは抽象の觀念に過ぎず、實在せるものは獨り國民の文明あるのみ。人の人たる所以に於て同ずる所あるべきは言ふまでも無し、されば抽象の觀念としては素より天下に人道ありと謂ふを妨げじ、されど人道の名によりて存在する實際の勢力は是れある無き也。若し夫れ理想としては人類平等の生活を希望するも不可ならじ、されど是に到達する方便としては、換言すれば實際上の主義としては、差別見に據るの外無く、所謂差別見の標準は國家なり。されば日本主義は日本國家の繁榮進歩を以て國民倫理の規準となす。實踐道德の規準としては國家以外に求むる所無し。

斯く日本主義が國家を以て實踐道德の規準と立するの故を以て、直に個人の幸福を蔑視し、人道の發達を希望せざる主義と見做さむはいみじき誤謬なるべし。

に日本思想が我國躰民性の歴史的研究に本き、外に向ては外來の文化を同化し、内に於ては異分子を淘汰せる形迹は尤も著しきを視るべし。但し是れ素より大躰の觀察なれば讀者も其心して覽るべきなり。（卅一年四月）

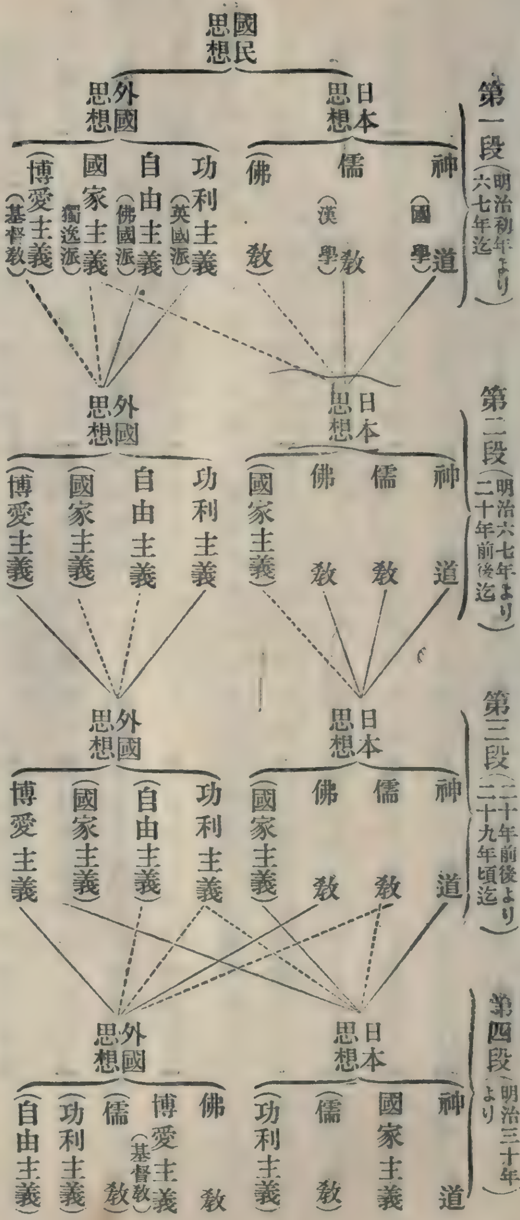
（編者附記。右の一篇は先に掲げたる「日本主義」、「國民精神の統一――帝國憲法、教育勅語及び日本主義」及び「國粹保存主義と日本主義」の三篇と重複する點多きも、著者が此等の思想を以て明治三十年間の思想を達觀したる一貫の觀察として、再び之を採錄す。）

過去一年（明治三十一年）の國民思想

一　明治三十一年以前の國民思想

歲革まり人老いたり、『新しき日本』も何時しか三十一の齡を數へ了りぬ。（以下は上記「明治思想の變遷」を概陳したる者なるを以て略す）

を試みたる時代なり。第三段は、二十年前後に於ける國粹保存主義の勃興、及び其結果として是二主義がやゝ鮮明なる反對を現はせる時なり。二十五年に於ける敎育宗敎衝突論も、亦是時期に屬すべし。第四段は、昨三十年春に於ける日本主義の新運動が國躰民性を規準として國民思想の統一を唱へたるときより今日及び今日以後に及ぶ。是時期にありては、日本思想と外國思想の區別全く明瞭となれり。精しくは本文と圖解とを對照すべし。圖中の線は、各時期によりて諸種の思想の離合を示す。中に就き、連線は其量に於て點線よりも大なるを表はし。括弧内にあるものは點線と共に其量の小なるを示す。又是表の中に日本思想と名けたるは、日本固來の思想及び是の思想が中心となりて外來の思想を統一したるものを總稱す。一言すれば日本固有の思想が主となりて外國の思想を客とせるもの也。而して是の日本固有の思想の中にても中心核子となれるものは、神道に本ける國家的觀念なり。又外國思想とは外國の思想を主として日本固有の思想を客とせるものを云ふ。讀者もし第一段より第四段までを通覽する時は、國民的意識の漸く明瞭となるに隨ひて、是二個の思想の差別も亦次を逐●て明晰となり殊



是表は、假りに三十年間の思想の變遷を四段に分てり。第一段は明治初年より六七年の頃に至るまで、即ち所謂皇學の幼稚なる保守的反動が、幼稚にして而かも強大なる歐化主義に對立したる時代なり。第二段は、民選議院首唱者の政體改革論に對し、保守論者が獨逸流の國家主義論と共に前代に比してやゝ強硬なる反抗

より多樣、多端、又多岐にして、必ずしも唯一の主義方針によりて活動するものにあらざれども、概して言ふ時は國民の思想が其道德主義によりて決定せられ、隨て間接に其萬般の活動を影響すべきは、毫も一個人に於ける場合と異ならず。されば一國民の根本思想の變遷として、主として其道德主義の發達を述ぶるも、强ちに不倫とは稱すべからじ。是短論文は、素是根本思想に就いて讀者をして一目瞭然たるを得せしめむことを期したれば、故らに煩瑣繁縟の事實を臚列して、さなきだに解し難き思想史に一層の複雜を來たすを欲せず。想ふに、讀者は是によりて、最近三十年間の思想史に就いて少くも大體の觀念を得たるならむ。若し夫れ、是根本思想の變遷が直接に又は間接に如何に政治、經濟、敎育、實業及び一般社會の狀態に影響したるかは、是より逐次に述ぶる所に就て仔細に考察すれば思半に過ぎむ。

最後に讀者をして是發達の徑行を一層明に了解せしめむが爲に左の圖表を添へたり。

明治思想發達一覽表

系統を言へば、そは慥に明治初年の所謂皇學によりて代表せられたる保守主義の流を汲めるものなることは明なれども、其性質に於て殆ど見紛ふまでに進歩し來れることは、猶人間が猿より出でゝ而かも其性質に大なる差別あるが如し。皇學的思想は、其本を糺せば本邦歴史と共に初まり、物部守屋の排佛論となり、和氣清麿の忠節となり、菅原道眞の和魂漢才論となり、眞言天台以下の佛教諸宗派を日本化する中心勢力となり、北畠親房の神皇正統記となり、德川時代の諸國學者の神道國教論となり、一時維新の改革に遭て其力を失ひ、更に十九世紀新文明の光によりて、新に其赫灼たる本來の光輝を反射し來りたるものなり。今の日本主義は、やがて其系統の正嫡にしあれば、其根柢は決して拔くべからず、其枝葉花實は年と共に盛になり行くべき也。げに是れ迄皇學、國粹保存主義等の幾度か起伏せし如く、一時の汚隆は或は是れ無きを保せじ、又其名稱の如きは或は渝ることあるべし、唯それによりて代表せらるゝ精神實質に到ては、時と共に發達進歩して、早晩遂に其當初の大目的を實現するの期に遭遇すべきは蓋し疑を容れざるなり。

以上は、明治維新このかた三十年間の國民思想變遷の一斑なり。一國の事は素

言ふまでも無く、歐化主義の流れを汲める洋行歸りの人を首めとし、宗敎によりて衣食する僧侶牧師は言ふを待たず、元來國粹保存主義の系圖を引ける人々の中にも、眞に國家國民など云ふ事に就いて科學的意義を解せざるものは、其外面の運動が所謂八ッ當りに類するに驚きて、何れも反抗の氣焰を揚げ、曾て宗敎々育衝突論の當時、高橋氏が井上氏に向て爲せるが如く、日本主義論者の人身攻擊をすら敢てするを憚らず、論難に繼ぐに罵詈を以てし、罵詈に繼ぐに讒誣を以てし、百方其勢を挫かむと力めたり。日本主義論者の中にも一時の客氣に驅られて詭激の言論を弄びしものありしは、世をして是新運動の性質を誤解せしむるの力ありしが如し、是れ同主義の人々の心潜に嘆惜する所なるべし。されど是等は、最近時に關はる事なれば、其影響の大小、勢力の消長は、今日豫め知り難きこと勿論なり。されば茲にはすべて臆說を爲さゞるべし。

さはれ、記者が是主義に對する私己の關係を離れ、上に述べ來りたる歷史的觀察にて明かに下し得べき程の判斷によれば、日本主義の運動は決して一二人の創意に成るものにあらずして、實に深遠なる根據を國民性の中に有するものなり。其

由主義との相容れざるは、論無きことなり。さりながら憲法發布以來、是種の極端論は、政治界には殆ど其跡を留めず、唯社會の中に一種の社會主義となりて存するに過ぎざれば、其反對も他に比すれば微々たるを免れず。獨逸の純理哲學は學理の研究としては擯斥せらるゝに非ず、只世の空論を高尚となし、毫も實世間の事に關與せざるもの是派の學者に多きが故に、是點に於て間々日本主義論者の攻擊を被れるのみ、無論根柢的に相容れざるものにはあらざるが如し。是れに反して、獨逸風の國家論が歡迎せられたるは、最も自然の事にして、現に憲法を初めとし、今日の國家主義論者の說は主として是れに據れり。是れ獨逸のと我の國體とは、英佛等のそれよりは比較的に我れに近きが爲なるべし。然れども日本主義論者の國家論の根蔕は、飽迄我國の歷史に本くものにして、只其性の近き所に從て彼邦の說を參照したるに過ぎざるなり。次に英吉利の功利論の歡迎せられたるも、そが我國民性の現世主義と近ければなるべし。然れども日本主義の現世主義が、かの福澤氏一派の拜金宗抔と同日に論ずべきものに非ざることは、是派の人の所論にて十分に世の誤解を辨ずるに足るべし。

義は、我皇祖建國の丕圖の中に、我國家主義の大理想を認め、又其歷史上の研究に本きて開濶、生々、尙武等のもろ〳〵の現世的性質を國民の特質として認めたれば、出世間的、非國家的なる基督敎と佛敎とが、先づ排斥せられたるは極めて自然なりと謂ふべし。かの宗敎々育の衝突問題の際、基督敎と共に業既に打擊を被らざるべからざりし佛敎は、是日本主義に於て遂に其の必然の運命に遭遇したるは、是非も無き次第なりとこそ謂ふべけれ。而して日本主義主張者の重もなる一人は、實に往年敎育宗敎衝突論を草して意外にも佛敎徒の來援を受けたる井上氏なるにても、佛敎徒が今更の如く是打擊に驚きたる迂濶さは知らるべし。若し夫れ、從來常に歐化主義の先天的反對者として、維新の初めより我固來の思想と提携し來りし儒敎が、是日本主義に歡ばれざるのみならず、却て排斥せらるゝの傾きあるは、全く是敎の保守退嬰的なるところがやがて日本主義の進步的なる所と衝突すればなるべし。然れども日本主義は、儒敎の全部を擧げて攻擊するものに非ず、忠孝を尙び、現世的なるの點に於ては、二者其軌を一にせるものなれば、其反對は佛耶兩敎に於けるが如く烈しからざること、亦自然の勢なるべし。又是主義と佛蘭西流の自

明、開濶、有爲、進取の人民なり、退嬰保守と憂鬱悲哀とは決して其性に非ざるなり。されば日本主義は光明を旨とし、生々を尙び、夫の退讓を重じ、禁欲を訓へ、厭世無爲を勸むる所のもろ〳〵の敎義を排斥す。又億兆一姓に出で、上下其心を一にし、内に臨みては、棣蕚相親み、外に對しては每に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず、是れ我國の宇内に冠絶せる所なり。是を以て日本主義は平時にありても武備を尙び、いよ〳〵國民の團結を鞏固にせむことを務む。然れども妄に自ら尊びて他を容れざるに非ず、國内を修めて海外に臨み、與邦と共に永遠の平和を樂まむことを希ふ。されば日本主義は世界平和の維持を希ひ、更に進みて人類的情誼の發達を期す。要は我日本建國の大理想を發揮し、我國民の大抱負を實現せむとするにあり。

日本主義の新運動は、玆に述べたる如く、國體と民性とに基けるが故に、差當り其攻擊の衝に當りたるものは、基督敎、佛敎にして、儒敎、獨逸風の形而上學、及び佛蘭西派の自由主義も亦多少排斥せられたり。而して他方に於ては、獨逸流の國家主義と英吉利流の功利論とは、大體より歡迎せられたり。そを如何にと云ふに、日本主

而して是主義の所謂一定の標準なるものは、我國體及び民性の科學的研究に本けるなれば、其取捨撰擇も、從來のもろ〳〵の主義に見る如く、杜撰粗笨にして蔽麥を辨せざる儔ひにあらず、隨てそが一時社會を動かし、物議を釀したるも避くべからざる勢なりと謂ふべきなり。是新運動は明治思想の發達上に最も重大なる意義を有せりと思惟するを以て、聊か其主張者の說を紹介せむに概ね左の如し。

日本主義とは、日本國民の守るべき主義と云ふ義なり。精しくは國體民性に基き、皇祖建國の丕圖を體認して其國家的大理想と國民的大抱負とを實現せむことを期する所の實踐道德の主義を謂ふ。大凡そ人種土地を異にする所の國家國民は、其發達の理想亦相同じきを得ず、故に世界の人文は一規にして律すべからず、國家國民の眞正なる發達は、其國民の自覺心に基かざるべからず。日本主義は、是の所謂國民的意識の上に立てるものなり。蓋し君民一家は我國體の精華なり、實に是れ我皇祖皇宗の、宏遠なる遺謨に基き、萬世臣子の永く景仰體認すべき所なり。されば國祖及び皇室は、臣民たるものが無上の崇敬を捧ぐべき所なり。是故に日本主義は國祖を崇拜して、建國の理想を奉體せむことを務む。又我國民は由來公

に拘らず、其所在の彼我に泥まず、無私公平の秤量によりて是を取捨し、撰擇せざるべからず。是を以て從來味方なりと思ひて相許したるものも、今や案外にも兩立する能はざる仇敵なること、又は從來不倶戴天の讎として相嫉視したるものも、今や思ひがけなく一堂に握手する等の奇觀を呈するに到れり、げに從來の有樣に比すれば、奇觀なりと雖も、實は當然の事にして、敵味方の區別なく其名目に泥みて同居したる是迄の有樣こそ、却て奇觀と云ふべけれ。是を要するに、是迄は單に名目の異同によりて離合せしものが、今や其內部の本質の如何によりて去就を決したるなり。是新運動の主動者となりたるものは、素より國家主義論者にして、そが據て以て斯く一切外物に對して公平なる撰擇取捨を爲したる標準は、我國體及び民性なりき。是國民思想の新運動を代表して興りたるものを日本主義となす。是れ昨三十年五月の事なり。

日本主義は以上述べ來りたる如き氣運に驅られて起りたるものなれば、そが國民思想に對する態度は、實に雄大なるものなり。即ち素是れ一定の標準に本きて、全國民の思想を統一せむと企つるなれば、其の關係影響するところ廣く且深し。

學者、佛教徒なりき。蓋し彼等は歐化主義とし云へば、彼等と先天的に相容るべからざるものと思惟し、日本在來のものとし云へば、先天的に一致すべき性質のものと速斷し、單に西洋、東洋の名稱の差等によりて離合したりし也。是れ他なし、彼等の目的は歐化主義其物を攻擊するにあり、されば其事業は國家國民の將來の爲に確乎たる道德主義を造ると云ふが如き遠大なる理由ありて爲されたるものに非ざれば也。謂はゞ彼等は何の理由もなく、何の目的もなく、(もし强ひて理由を求むれば歐化主義の跋扈は彼等にとりて不利なるが故に)主として名目の上に就いて所謂毛嫌ひを爲したるなり。然れども、今や偏狹なる盲動は國民的意識の覺醒によりて其の謂はれ無きこと漸く明かになれり。國民は其國粹の保存と云ふが如き事の以上に於て、我國家國民の世界的位置と、其前途と云ふ廣大且つ嚴肅なる問題に遭遇し茲に其國民的大主義を樹立するの必要を自覺しぬ。今や徒に我佛獨尊的の陋見を固守すべきに非ず。如何に古より我國に存在せしものにても亦我邦に固有せるものにても、苟も將來の國家國民にとりて益無きもの、若くは害あるものは、猶豫無く排斥せざる可らず。謂はゞ世界一切の事物に就いて、名目の東西

既に世界の一國として日本を觀察し、悠久なる其前途の爲に國民の實行主義を規定せむとする以上は、廣く知を世界に求め、而も國體民性の發達に裨益する程のものは、如何なるものをも是を攝取し、又國利民福の增進に有害なるものは、如何なるものにても是を排斥するの覺悟なかるべからず。されば、是廣濶なる國家主義者流の眼には、地の東西によりて好惡の情を挾むなく、時の古今に隨て褒貶の意を寄する事無かるべし。是公平無私なる取捨撰擇よりして、玆に從來國家主義の方法上に一新生面を拓き、爲に社會の人心を一時攪亂するの已むべからざるに到れり。是れ明治思想史の上に於ける一大進歩として特筆大書すべきものなり。

そを如何と言ふに、從來國民間の思想の爭に於て明かに現はるゝが如く、明治十年代に於ける西洋主義と保守主義との爭にありては、其區別の根據は主として西洋と日本との土地の差別にありき。故に保守者流は、西洋のものとし云へば一も二もなく一概に反對し、黐て國學、神道、漢學、佛等教は古より日木に在來せりとの廉にて聯合し、力及ばずながら西洋主義に當りたり。二十年前後の國粹保存主義にありても、亦多少是跡あり。即ち是主義に同情を表したるものは、國學者、神道家、漢

めて少數、且一時的のものに過ぎざりき。兎に角所謂國家主義は日清戰爭以後に及び、他年對壘し來りし歐化主義に對しておしなべて全勝を收めたり。

是に於てか國民思想は更に一歩を進め、將來海內にのみ注ぎて自家域內は其反對者、を認めたる眼を轉じて、今は即ち廣く世界に注ぎ、顧みて世界の一國として我日本を觀察せむとせり。先には國民思想は內に爭ひたり、今は則ち外に向ひたり。素より國內に於ても、例へば世界主義と國家主義と個人主義等の爭ひはありしかど、そは從來の如く國粹保存主義と歐化主義との爭の如く、其眼界國內に終始せしもののみには非ずして、廣く世界に對して一國の位置を考察したるより起りたりと見む方妥當なるべし。されば、外面上の形迹は相似たれども、內面上の精神に於ては大に相異るものありき。世界主義、個人主義を唱へて國家主義に反對するものも、其の說く所は、從來の如く徒に西洋に心醉し、歐化を唱ふるものにあらずして、少くとも表面上にては世界の大勢より打算し來りたる主義なりと稱す。されば二者の爭は何れにせよ、謂はゞ共に日本の世界的觀察に本づけるものにして、從來の歐化主義と國粹存保主義との爭の偏狹なるの比に非ずと謂ふべし。

る國家生存上の一大危機にして、隨て本邦政治史上の最大事實たると共に文明治思想史の局面を一變したる契點なり。 こは最近年の事なれば、精しく說くの要は無かるべけれど、是戰爭は社會の上層下層に論なく、孰れの方面に向ても最も活潑なる國民的運動を催起し、多年理論、否寧ろ空論によりて教育せられたる國民に向ひ、死活、興亡の嚴肅なる事實によりて、國家國民の眞意義を教へたり。 國家世界にとの關係は如何に、個人と國家との關係は如何に、世界に邦し、國家に人となるに於て、國家と國民とは什麽の覺悟無かるべからざるか、一國の道德主義は如何なるものならざるべからざるか、是等の問題を、今や國民は其血と涙とを以て經驗し、研究し、且解釋せり。 是に於て教育勅語は更に新なる光明に照され、多年模稜の間に半信半疑したりし忠君愛國の眞精神は、今や最も適切に會得せられたるを覺えぬ。是の如くにして國民的意識は、從來に較ぶれば、一層明瞭に、一層具象的に又一層生命と活力あるものとなれり。 素より戰勝の結果として、一部の國民の間に自尊自負の氣象を生じ、隨て排外の風を示したるもの無きにあらずと雖も、こは國民全體の上より見るも又一世の先覺にして國民指導の位地に在るものに就て見るも、極

教の援助を受けたる井上氏は、中心意外の思ありたるべく、又早晩佛教徒が基督教徒に對したると同一の攻撃は、即ち自家に對するの攻撃なることを知覺するの秋あるべきを思ひて、彼等が自己の淺見に慚愧するを氣の毒に思ひしならむ。而して當時は知らざる爲して、佛教徒の來援に任せしが如きは、氏も亦策士の術數を有せりと謂ふべし。

何は兎もあれ、是一事にて如何に當時のやゝ教育ある人すら、國家主義の眞精神に通せざりしかを想見するに足る。當時史學社會に喧しかりし、久米氏の「祭天の古俗」と題する一論文に對して、國學家、神道者流が學術界には許すまじき無法の迫害を行ひしにても、國家など云ふことの國學者間にも解せられざりしを見るべし。されば、歐化主義も亦是罅漏に乘じて尙ほ其餘勢を保ち、動もすれば捲土重來の勢を示したり。是時に當りて、外部より思ひ掛け無き一大刺擊の國民思想を根底より搖撼し、所謂國民的意識に明白なる自覺を與へたるあり。二十七八年に於ける日清戰爭即ち是れなり。

言ふまでも無く、日清戰爭は我邦が東洋平和の維持の爲に國命を賭して鬪ひた

く宗教は、差別的博愛を說く所の勅語と正に相反せり。又忠孝を以て道德の基礎となさゞる宗教は、即ち勅語の敵なりと。是れ亦やがて佛教の性質と正さに相適合す。是によりて見れば、井上氏は特に耶蘇教に就いて言へりと雖も其實は佛耶兩教に對して均しく打擊を加へたるなり。畢竟氏が擧げたる四個條の如きは、佛耶兩教の通性たると同時に、一切宗教の本旨なれば也。故に佛教徒たるものは、基督教徒と共に氏の說に對して駁擊せざるべからざる位地にありしなり。然るに事是に出でず、却て井上氏に從て基督教を攻擊し、敢て怪まざりしは實に奇怪千萬なりと謂はざるべからず。是れ佛教徒は、其の多年仇敵視し來りたる基督教が、偶、攻擊の對象となりたるを見、欣喜の餘り、一も二もなく、己れの敵とする基督教を攻擊するものは即ち己れの味方なりと夙斷し、そが却て佛耶兩教の共同の敵なることに心附かず、其の淺慮短見眞に憫笑するに餘りあり。所詮は基督教攻擊の一語に眩惑して、其攻擊の趣旨の如きは、一々精細に吟味するの遑なかりしに依るとは云へ、抑ゝ又教育勅語が國民道德の原理たる所の國家主義の性質を明にせず、隨てそれと宗教との關係等の諸問題は、未だ解了するに及ばざりしなり。想ふに是佛

算の氣習に驅られたるの形迹無きにあらず。先覺の士にありては、素より是事なかりしなるべしと雖も國民の全體に就いて是を視れば、所謂國民的意識は未だ十分明瞭に醒覺し了せられざりしに似たり。此事は當時の論文記事を一讀して知るべしと雖も、尤も手近き例は、佛教徒が教育宗教の衝突論に際して專心鋭意井上氏を援助し、共に基督教徒を攻擊したることなり。是れ今日より見れば甚だ笑ふべき矛盾なるにも係らず、當時の名僧智識達が、眞面目に是に從事したるを以て見れば、當時の人には國家主義の甚だ曖昧の中に誤解せられありしを想ふべし。そを如何にと云ふに、抑〻先に掲げたる井上氏が、據て以て基督教に大打擊を加へたる四個條の何れか移して以て佛教攻擊の好利器とならざるべき。井上氏は耶蘇教を攻擊して曰く、國家の差別を認めず、純然たる出世間の道德を以て唯一の道德とする宗教は、忠君愛國の上に立つ勅語と兩立すべかずと。而して佛教は實に是の如き宗教にあらずや。井上氏は耶蘇教を攻擊して曰く、重きを出世間に置き、現在世を以て未來世の門戶と爲す如き宗教は、勅語の現世的精神と相容れずと。而して佛教は即ち是の如き宗教にあらずや。井上氏又曰く、平等無差別の博愛を說

は是れ歐化主義を代表せる基督教と國家主義との格鬪にして、殊に防禦の位置に立てる基督教にとりては、啻に盛衰の問題たるのみならず、實に死活の問題を包有したるなり。

是爭論の勝利何れにありしや、單に議論上の爭としては、基督教徒にもそれぐ道理の取るべきあり、勿論最初より攻勢を取れる井上氏のかたに多少の優勢を認むと雖ども、何れを全勝、何れを全敗とは決し難かりしに似たり。然れども事實の上より見る時は、基督教徒の勢力是より俄に頓挫して、全く教育上に其根據を失ひ、唯其堡壘を守りて自活の道に汲々たるの勢あり。偶〻同教の中に改革の士あれば、そは從來の世界主義を捨てゝ其說を國家主義に調和せむと務めたるの人たるに過ぎず。基督教の逢迎主義是より漸く明なり。是に反して國家主義の道德は、是論戰によりて愈〻其教育上の基礎を固うし、其勢力延いて廣く社會の四邊に及び、漸く一世の思想を統一するの途に就けり。

然れども當時國民一般の思想未だ幼稚にして根柢より國家主義の眞精神を會得すること能はず、其の所謂國家主義なるものも、形式上より勅語を解釋し、漫に、

ざずとなす。是れ敎語の精神が全然現世的なると相容れざるなり。(第三)、耶蘇敎說く所の愛は無差別的博愛なり、然るに敎語示す所の愛は差別的の博愛なり。是を以て二者互に衝突するを免れず。(第四)、耶蘇敎の缺點として特に著しきは忠孝を言はざる事なり、啻に言はざるのみならず、往々是に反する敎旨あり。是れ敎語が示す所の克忠克孝の敎と容れざるなりと。氏は博引旁證、最も銳利明快なる論法を以て其旨趣を、敷衍せり。是れ實に基督敎徒の死活問題を含蓄せる最も手痛き攻擊なりしを以て、本多、横井二氏を初めとして、苟も耶蘇敎內に身を置くものは、筆に口に極力其論を駁し、就中高橋五郎氏の如きは『僞哲學者の大僻論』と題する長論文を雜誌國民の友に揭げ、井上氏の論旨を反擊し、且つ譏謗罵詈を極めたり。和漢學者及び佛敎徒は是に反して井上氏に左袒し、基督敎徒に當り、甲論乙駁、歸結の決すべき模樣なく、裁斷を後年の輿論に殘し、數月を經て漸く鎭靜せり。當時是爭論の盛なりしことは、實に驚くべきものにして、新聞雜誌として是爭論を揭げざるはなく、知名の學者にして贊否の聲を發せざるは無き有樣なりき。以て如何に是問題が當時の社會に重きを爲せしかを見るべし。其源は井上氏にありと雖も、實

進莫、敕育の敕語一び下りてより、從來の國粹保存主義が、一轉して國家主義の思想となり、益々其全捉の途を急ぎしには反して、自由平等を言ふこと厚くして、忠君愛國を說くこと薄かりし從來の歐化主義は、今や其所信を枉げ、敕詔の示し給へる國家主義の道德に調攝せざるべからず。西洋心醉の風是より漸く衰へ、基督敎亦漸く其世界的性質を改めて國家的となり初めぬ。國家主義は其勢に乘じて次第に歐化主義の城壘に迫り、茲に端なくも最も激烈なる爭論を惹起しぬ。所謂敎育宗敎衝突論是れなり。時方に二十五年の暮なり。

是爭論は、讀者の記憶せる如く、井上哲次郎氏が宗敎と敎育との關係に就いて敎育時論記者に對する談話に其萠芽を發し、次で『敎育と宗敎の衝突』と題する一論文に枝葉を成し、而して當時の宗敎敎育社會に、民選議院の爭論以後に倫ひなき論戰の花を咲かせたるものなり。氏の說の要に曰く、(第一)、耶蘇敎は國家の差別を認めず、其の說く所の道德は純然たる出世間の道德なり。是を敕語が忠君愛國を以て國民最高の德と爲せるに比すれば、全く兩立し難きものなり。(第二)、耶蘇敎は既に出世間の事を主とすれば、常に重きを未來に置き、現世は僅に未來世界の門戶に過

觀あり。偶々教育敕語の煥發するあり、國論是に於て、一定し、忠君愛國、擧國一致を以て國民道德の大旨趣として奉體するに至れり。是敕語の教育上、社會上に於けるは、猶ほ憲法の政治上に於けるが如し、共に人心を統一し、國民思想の大方向を規定するの一大要素なりき。（上三二二頁以下参照）

斯く記し來れば、我皇室が實に我國民全體の依賴する大支柱大中心なるの事實は、いよいよ明なりと謂ふべし。先に維新草創の際、擧國亂離して爲す所を知らざるに當りてや、かの五事の御誓文を以て天地億兆に誓はせられ、茲に明治新文明の大方針を示し、民をして其の向ふ所を知らしめられき。西洋心醉者流が、民選議院の設立を建白するや、國體の特性、民情の現態を鑑みさせられ、假すに年月を以てし、國民をして其準備を致さしめ、更に期に先きて欽定憲法を發布して我國體の萬邦に冠絶する所以を示し、以て國民の覺悟を定めさせられ、今や又維新以來麻の如く亂れたる德教の爲に、是千古不磨の大詔を下し給はり、民をして國民道德の大本歸趣を知らしめ給ふ。實に國民の盲動を導き、各ゝ其正路に就くことを得せしめ給ふ叡慮の程は、我國民の幾重にも感銘奉體すべき所なり。

に角獨立の日本思想によりて歐化主義に對壘せしは、實に是國粹保存主義を以て初めとすべし。是點に於ては、是主義は慥に今日の日本主義の先驅たりしもの也。

斯く國粹保存主義の勃興によりて代表せられたる如く、國民的意識は漸く其自覺の域に進みたれども、未だ俄に歐化主義積年の勢力を凌駕する能はず、其爭漸く激しからむとせり。宗教界に於ては、佛教は保守思想と相呼應し、以て歐化主義と密接の關係ある基督教を攻撃して甚た力め、漢學は國學と相携へて遙に佛教に聲援せり。廿二年二月に於ける憲法の發布は、我欽定憲法の性質を明にし、かの英佛諸國に於ける諸種の憲法と日を同うして論ずべき者に非ざるを知らしめしかば、多年佛蘭西風の民約憲法を望みたる自由論者は、定めて多少其の空想したる所と違ひたるを驚きたるべし。然れども是より政體上に關する急進論者の聲は、憲法解釋の上に多少の異議を挾むの外、氣勢頓に衰へ、獨逸的國家學と抱合せる一種の國躰論は、汎く國民の政治思想を其根本に於て統一せり。然れども社會上敎育上に於ては、西洋主義猶ほ未だ力を失はず、國學、儒敎亦一方に割據して各〻其雄を競ひ、人々其の信ずる所によりて左支右吾し、一般國民は其の適歸する所に迷へるの

へず、滅らざる限りは、依然として其勢力を保持すべし。其名或は變らむ、そを唱ふる人も或は變らむ、其の説く所の説の形も亦或は變らむ、されど其主義の實質に到ては時勢の進歩と共に益々進歩して、決して衰退すること無かるべし。國粹保存主義は慥に是の如き主義なりしなり。

げに國粹保存主義の唱へられたる頃より、國民思想の漸く其方向を轉じ來れるとは、掩ふべからざる事實なり。從來にありては、國民の思想を動かしたる主力は、常に西洋思想なりき。かの民選議院の爭論の際にありて、是を主唱せる者は素より論を待たず、是に反對せる主力も西洋學者なりき。國學神道の系統を引ける純粹なる日本主義論者も、是中にありしかど、そは極めて少數にして、特に言ふに足らず、爭論は主として西洋學者の爭論なりき。故に加藤氏一派の獨逸學者が民選議院を尚早とし、若くは非認するにも、其論據は一に西洋の學理にあり、一も本邦固有の國體民情を根據として立論したる者あらざりき。然るに國粹保存主義は、其根本の精神に於いて是等の説とは異り、其立論の基礎を外邦の學理に求めずして、飜て本邦の特質に求めたり。其説は如何に粗笨にあれ、其論は如何に幼稚にあれ、兎

も二も無く外邦の文物に心醉して、我の長所美所を抛棄するは、甚だ不可なりと說けるに過ぎず。然れば其所說の多少明確を缺きたるより、反對論者より、無差別に歐米の文物を排斥し、我佛をのみ獨り尊しとする固陋なる保守者流と同一視せられたり。こは誠に誤解なるべけれども、其說の消極的方面を說くに精しくして、積極的方面を說くに粗なるが爲に、國粹論者が自ら招きたる廉も多少あるべしと思はる。所詮は國粹其の物の性質に就て、確的なる科學上の說明を缺きたるの弊なりと謂ふべきか。

然れど國粹保存主義其物の價値は如何にあれ、そが國民思想を覺醒し、是れまで徹上徹下に跋扈し來りたる歐化主義の適否に就いて一大猛省を促したる功績は、明治歷史の上に特筆すべき者なり。げに一個の主義の勝敗は、一時の論戰に於て決せらるべきものにあらず、其主義の依て以て起りたる國民思想の根抵にして確乎不動のものならむには、終には最後の勝利を占むべきなり。國粹保存主義は、決して二三氏の創意に與りたるものに非ずして、維新以來歐化主義の爲に多年の屈辱を忍びたる國民精神の自然の發露なりとすれば、根抵たる國民の精神にして衰

かく西洋主義の中にも、おのづから三黨分立の姿ありけれども、民選議院の問題に關しては、紛を避けむが爲め其大勢の上より歐化主義と保守主義の爭として說述せり。先に述べたる如き歐化主義の勢力漸く其極端に近くに隨ひ、二十年間の新教育新時勢を經驗せる國民は、漸く中心に於て其弊を覺り來りぬ。今や一反動の提起せらるべき時機は方に迫りぬ。是反動の氣勢を代表して蹶起したるものは、雜誌『日本人』を機關とし、志賀、三宅、諸氏によりて唱へられたる所謂國粹保存主義なりき。

國粹保存主義とは如何なる主義ぞと云ふことに就きては、當時區々の論戰ありしが、詮ずる所、其名の示すが如く、我國粹を保存するにあり。既に保存すと云ふ以上は、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや論なし。而して特に是國粹を保存すべきを主とする以上は、是を打破するの反對主義を預想する亦勿論なり。國粹保存論者は、素より夫の歐化主義を以て是反對主義と思惟せること明なれども、保存せらるべき國粹の何なるかに就きては、明に說示する所無かりしが如し。唯漠然彼の長を取りて我の短を補ふは、是れ眞に一國文明に裨益する所以なり、夫の一

板垣諸氏の祖述したる所なり。第三は獨逸流の國家主義にして、こは加藤、海江田、諸氏の唱ふる所にして、近世獨逸の國家學者スタイン、ビーデルマン諸氏の說に本づく。是中尤も根蔕深く且勢力あるは、無論英吉利流の功利主義なり。然れども是主義は主として社會の實利にのみ注目し、政體等に關する大問題には比較的に冷淡なりき。然るに佛蘭西流の自由主義は、社會の根本的改革の根源を政體の革新に存せりとなし、目前卑近の功利を措きて、驀地に是大問題を捉へて是を鼓吹せり。是れ民選議院の首唱者が福澤氏一派の功利論者に非ずして、主として佛蘭西流の自由論者なりし所以なり。若し夫れ獨逸流の國家論者は、本邦の舊習を打破して西洋の新思想を輸入することに於ては、他の二派に均しと雖も、政治の問題に關しては全く佛蘭西流の自由論者に異り、飽迄君主の無上權を主張し、萬民平等の權理を認めず。是れ民選議院の設立に反對せるものゝ中に純然たる保守論者の外に獨逸學者の多かりし所以なり。社會上の勢力の上より見れば、獨逸派の勢力微々たりきと雖も、政府の要路に當れる人々の中には、彼地に遊びて國家學の講義を聽き、もしくは其感化を受けしもの割合に多かりしを以て、官吏社會には勢力ありき。

たれども、其の說く所は固陋に過ぎて、汎く時の人に容れらるゝに到らず。宗教界の人々が是等守舊派と連衡し、破邪顯正の旗幟を飜しけれども、基督教は歐化主義の後援に據りて、前後比類なき全盛を極めたり。世界的眼光を以て日本を觀察すと呼ばはりたる德富蘇峰の『將來の日本』は、一世の讀書社會に歡迎せられ、續て世に出だせる雜誌『國民の友』、亦青年書生に愛讀せられき。されども其の唱導したるは民約論の亞流なる平民主義なりき、其系統より云へば、無論歐化主義の一產物にして、我國體民性の特質、本邦固有の美所長所等に就ては、一も言ふ所なかりき。兎に角明治二十年の頃まで、國民思想の大勢を壟斷したるものは、西洋主義、歐化主義、隨て外物摸倣主義、外人崇拜主義なりき。

茲に一言すべきことは、吾人が是迄西洋主義、もしくは歐化主義として呼び來りしものゝ中に就て、審に是を檢すれば、更に數種の小分派の對立を見るべきとなり。其旗幟の最も鮮明なるもの凡そ三あり。第一は英吉利流の功利主義にして、こは福澤氏を首めとして、すべてミル、ベンサム等の說に私淑するものゝ唱ふる所なり、第二は、佛蘭西流の自由主義なり、こは民約論の譯者たる中江氏を首めとして、大井、

内閣を組織するに及び、西洋の文物は上下の社會を擧げて歡迎せられたり。自由主義の政黨が其機關新聞紙上に鼓吹せる民權論自由論は、依然として一部の社會を司配し、其首領が『板垣死すとも自由は滅びず』と叫びたる言葉は、改革に熱心なる人々には殆ど聖者の福音として傳へられき。天賦人權の説は更に男女同權の論を產み出だし、女子にして所謂憂國の志士と共に囹圄の人となるものすらあり。革命に關する飜譯小說は、盛に讀まれ、リットン、ヂスレーリ等の政治小說亦盛に世に出でき。當時和漢學者の間に多少の反動はありしかども、左したる效果もなく、從來の漢字を排せむとする『かなのくわい』さては國字をも共に捨てむとする羅馬字會等、踵を接して起りき。獨り學術の上にて、西洋の我に優れるのみならず、其文學にまれ、美術にまれ、我に取るべきもの無しとせられたれば、和漢の古書書は殆ど其價を失ひき。西洋風の假裝會、舞踏會は盛に奬勵せられ、大學々生は女學生と混同して英語にて忠臣藏を演じたるも是頃なり。西洋人と云へば、何處にか我よりも高等なる人間の如く思はれ、社會一切の事物の中にて我に取るべきもの殆ど無しと思惟せられき。斯かる時に弘道會の如き日本固有の道德主義を唱ふるもの起り

漠然たる信念と觀察とに本き、其保守的感情に導かれて、歐化主義の極端說に反對せしに過ぎざるべきか。

民選議院に反するものには、尙ほ早しとするものと絕對的に非なりとするものとの二種ありしが、廟議は遂にかの五事の御誓文に本き、欽定憲法制定の詔を奏請し(九年九月)、後に到りて國會開設の期をさへ定めたり(十四年十月)。こは素より萬機公論に決する當初の御誓文を貫通する聖旨に出づと雖ども、抑〻又一世輿論の向ふ所を容納させられたる大御心に依らずむばあらず。

政治上に於ける歐化主義の流行は、國民思想全躰の反射とも見るべきものなれば、そが社會の內部に於ける影響も亦推し測らるべし。されど社會の上に於ては、一國の政躰に於けるが如く直接の利害未だ甚だ明かならざるを以て、是れに反對する主義も亦現はるゝこと比較的に遲かりき。されば民選議院反對の聲可成りに喧しき時にも、帝政黨の如き保守主義の政黨の現はれし時にも、君父に對する義務より自己に對する義務を先にせる勸善訓蒙、智氏家訓等の譯書は依然として倫理敎科書として國民敎育に用ゐられ、殊に西南戰爭終を告げて、西洋心醉の政治家

るとするも、政府の事を與知するの權利は、納稅と相對する權利にあらず。況や一國の政府は、必ずしも約束に起るものにあらず、古來歷史上の沿革其源を異にする者あるに於てをやと。

是保守說の見るところは、歐化主義者流の見る所とは大に異なれるを認むべし、歐化主義者流は飽まで民を以て主となし、政府君主を以て民の爲に存在せるものとなす。然るに保守主義者流は、各國特別の歷史に本きて、政府と人民との關係おのづから定まれるものあるが故に、政府は必ずしも人民任意の約束に成るものにあらずとなす。兩者正に相反す。然れども當時の言論に就て見れば、保守論者が指摘せるは、我政府と人民の關係は歷史的に成りて歐米諸邦の比にあらずと漠然と言へるのみにて、一も國躰と云ふことに言到せず、想ふに政躰と國躰との差別の如きは、其の深く區別せし所に非ざりしならむ。且つ我邦にありて『政府と人民との關係』の如何なる點が、如何に歐米各國と異なるか、其歷史上の沿革の那邊に彼此の差ありや、等の疑問に對する精細なる解釋に至りては、是等の論者一言も說き及ばざれば、其說に果して如何程の確實なる論據ありしやも知り難し。想ふに唯ゝ

利なるものは威嚴以て是を奪ふを得ず、富貴以て是を壓するを得ず、蓋し天の均しく人民に賦與する所のものにして、而して斯權利を保有せむことは、亦人民の宜しく勤勉すべき所のものなり。云々。

こはまさしく天賦人權論にして、帝王にも乞食にも同等の權利ありとするものなり。

斯かる極端にして且幼稚なる思想によりて、國家の大事を料理せむとしたるも、所詮は明治初年以來の歐化主義の頂點に達したることを表はせる也。是過激なる歐化主義は、端なくも國民の間に枉屈せる保守主義の反動を惹起し、其結果は遂に民選議院反對論となりて顯はれぬ。こは當時獨逸學者の泰斗なる加藤弘之氏によりて其緒を啓き、西周、森有禮、諸氏是に和して一時新聞紙上の論壇に兩派互に火花を散して戰へり。其意見の要に曰く、制度憲法を創定せむには、先づ邦國今日の世態人情を詳察して、是に恰當適切なるものを撰ばざるべからず。今日未だ進まざるの民智に委ぬるに民選議院を以てせば、是れ愚人をして愚論を鬪はしむるに過ぎず。民選議院の主論者は、ルッソー氏の説により、政府を以て全く約束より成

一條あり、以て當時民選議院を主張したる諸氏の思想の如何に民約論に感化せられしかを知るべきか。曰く、

我輩の斯の政府を視ること斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外なかるべし。而して吾黨の目的は、唯〻斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして自主自由獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ。

同じ『本誓』の中に、『斯主義は愛君、愛國、一片至誠の上よりの發憤』なりと辨じ、天皇陛下御誓文の旨意を遵奉するの意に外なしと述べたり。されど當時諸氏は、是の如き極端なる民約論的民主思想と兩立すべき『忠君愛國』の道とは、果して如何なるものなるべきかを明かに自覺したりしや、否や、洵に疑はしき次第なり。是時民選議院の主唱者の一人板垣氏が、高知の青年を皷舞して起したる立志社の趣意書を見るに實に左の如き言あり。

夫れ我輩齊しく日本國の人民たり。則ち三千有餘萬人盡く同等にして、貴賤尊卑の別なく、常に其一定の權利を享有し、以て生命を保ち、自主を保ち、職業を勤め、福祚を長じ、不羈獨立の人民たるべきこと昭々乎として明白なり。是權

かくて所謂皇學者流の些細の反對を蹴倒して、歐化主義は一瀉千里の勢を以て進行せり。是際社會上下の事の注目すべきもの多々ありと雖も、是歐化の傾向は板垣、副島、後藤、江藤、四參議の民選議院設立の建白、及び是等の諸氏を中心とせる愛國公黨の組織に到て其頂點に達せりしが如し。

所謂民選議院設立の趣旨と稱するものは、今日より見れば誠に單純幼稚なる思想にして、所詮は歐米各國の政躰の美に眩惑し、民約論的の思想を以て是を解釋し、是を我邦に施さむと力めたるものに過ぎず。我國躰民性の特質、歷史、及び當世の現勢に就いては殆ど顧みる所無し。其觀察素より一面に偏れるの謗を免れず。四參議等の建白の要旨に曰く、方今政權の歸する所、上皇室に在らず、下人民に在らず、而して獨り有司に歸す、是を以て政令百端、朝令暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ。是を振求するの策、唯天下の公議を張るにあり、天下の公議を張るは、民選議院を立つるにあるのみ。夫れ人民政府に對して納稅の義務あるものは、理として當に其政府の事に關與するの權利あるべし、是れ天下の通論にして、民選議院の據て立つ所の原理なりと。同時に建白者諸氏が組織したる愛國公黨の『本誓』に左の

道の豪傑平田篤胤の如きは殊に殘酷なる迫害を受けたりき。然れども幕府の權威漸く衰へ、其根柢漸く搖ぎそめし頃より、國學者流は多年の壓制に對する反動として、陰に陽に尊王討幕の氣勢を助け、維新の大業を成就する上に於て多少の力を寄與したり。然れば、維新以後の社會が上下を擧げて偏に西洋に心醉し、是大業を成すに力ありし本邦固有の國學を顧みず、以て是を芟除せんとするの有樣を見て、爭でか多少の反動無くして已むべけんや。殊に一方には、朝廷にては國學の徒を用ひて復古の政を助けしめ、明治元年の祭政一致の詔を初めとして、同三年には神靈鎭祭の詔あり、大教宣布の詔あり、教部省を設け教導職を置き、神道國學を布く上に於て多少力を盡せしかば、歐化主義の大勢動かすべからざる際にも、社會の一部には國學の餘焔全く消えずして殘りき。是餘焔は明治六七年の頃に至りて一時に揚がり、國學神道の研究を以て東京に遊學せる書生一時頗る多かりき。されど、其勢ひ固より旭日中天の勢ある歐化主義に比すれば、十の一にも足らず、例へば一枚の板を提げて江河の横流を防ぐが如く、何等著しき効果を貽さゞりしは、是非も無き勢なりと謂ふべし。

> 此程横濱に居られし大原前侍従殿、昨十一日九ッ半に御入城に相成る。……さて通行の道筋にては、家々戸を鎖し、細紙札にて目張りをなしたり。通行の時道路にありし士民は皆平伏蹲踞せり。然るに西洋人は、更に我國人の爲す如くせずして、馬上にありて傲然と是を見物するに、誰も咎むることをせず、聊か故障あること無し。實に日本人の開けしこと是にて知るべし。云々。

數年前には、一諸侯の行列を妨げしとて外人を斬り捨てにせし勢なりしに、今は却て外人の無禮を咎めざるを開化せりとて賞賛す、時勢の變遷を見るべきなり。横濱は夙に互市場なりければ、外人崇拜の風も最も早く行はれたるべく、之に反して全國是風潮に靡きしは、明治十年近くにありしも亦怪むに足らず。當時の國民は、外を容るゝに急にして内を顧みるに遑無く、遂に全く我國粹を拋却して偏に外物を尊びしも、一國思想の發達上已むを得ざる一階段なりと謂ふべし。然れども是傾向に對して全く反動無きに非ず。明治六七年の頃に一時盛なりし皇學の如きは、其一例として見るべし。

顧ふに尊皇敬神を以て立てる國學が、幕府と相容れざりしは、自然の勢にして、斯

て、中には然らざる人もあれども、其の多くは何れも西洋思想を抱持し、所謂新文明の先覺を以て自任せし人々なりき。されば其主張唱道は、其說に漸急の差別こそあれ、西洋思想を以て一世を率ゐむとせるものに非ざるは無し。人若し當時の新紙をとりての其論說を讀まゞ、西洋主義、歐化主義が紙面に横流せるを見む。

げに當時の社會に最も勢力ありしは、一言すれば歐化主義なりき。是主義は其の現はれたる形の上より見れば種々あれども、其根本の目的は我邦一切の文物を西洋化するにあり。啻に其の衣と食と住とを洋にするのみならず、啻に鐵道を布き、電線を架し、其外部の生活を洋にするのみならず、國體も、民心も、出來得るならば其髮をも、眼をも、皮膚をも、洋にせむとするにあり。素より當時の急進者流と雖も、斯くは明に其目的を自覺せず唯漠然何とはなしに洋風を欽慕して是に摸倣せしならむも、其形迹に就て見れば、一般に甚だ極端無謀なりしなり。隨て是より漸く尊外自卑の風習を馴致したるは、是亦おのづからなる勢なりき。是の外を尊ぶの傾向は、明治の初年にも已に明に存せしことは、當時の横濱日刊新聞に左の如き記事あるにても知らるべし。

完成に近づかむことを期せり。當時朝野の心を一にして改進の道を急げる樣は是等の事實に就て見るも略ゝ明ならむか。

茲に是革新の氣勢を助長するに少からざる力ありしは、新聞紙なり。ごは朝野の間に立ちて、當時にありては活眼達識の士を多く記者として網羅したりければ、其の說く所は幼稚なる當代の社會にとりて光明となり、指針となれるも少からざりしなるべし。新聞の由來を尋ねむに、元治の頃、米人某が橫濱に於て每月數回期を定めて刊行せし『新聞紙』と稱せるが、本邦新紙の嚆矢ならむ。其他維新の前後、京濱間に萬國新聞、內外新報、中外新聞、藻鹽草等の數種ありしが、其頃のものには社說と云ふもの無く、唯公私の報導を秩序なく臚列せしに過ぎず。新聞紙本來の品性は、其當事者にだも知られざりし程なれば、まして社會の是に對する眼も甚だ低かりしものなるべし。されば兎にも角にも新聞紙の體裁を具へたるは、明治五年以後に出でたる東京日々、京濱每日（今の每日）報知、朝野、曙の諸新聞に初まれりと謂ふべし。是等新聞の記者は如何なる人々なりしと云へば、東京日々の福地、末松、京濱每日の沼間、報知の矢野、藤田（茂吉）朝野の成島、末廣、曙の岡本（武雄）等、當代の名士にし

己の利益の爲に造作したるものなれば、人民に都合悪しゝと見る時は何時にても是を改廢するの權は人民にありと云ふにあり。是れ佛蘭西大革命の一原因を爲せるまで彼邦にては勢力ありたる書なり。是の書一度び中江篤介氏によりて譯されてより、急進改革を喜ぶの士は、爭て是を讀みて其說を皷吹し、民權自由の聲一世を聳動せり。西洋に心醉せる當時の社會亦漫然是詭激の言說を看過して多く怪まず、一部の保守の士、もしくは先覺の士の外はそが我民情國體と相容れざることを認めたるものなき程なりき。げに代議政體は明治元年の五事の御誓文に本けりと云ふものから、そが開設をして一日を速からしめたるは、是民約論の如き書によりて淘冶せられたる急進者流の運動與て力ありと謂はざるべからず。

斯く民間思想の大勢が、西洋主義に靡ける間に、朝廷にありても人材公撰の詔あり(明治二年)。明治四年には廢藩置縣を斷行し、五年には初めて京濱間の鐵道を開業し、同し年に從來の太陰暦を廢して太陽暦を用ひ、八年には政體釐革の詔を發し給ひ、かの御誓文の意を擴充し、元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置きて審判の權を鞏くし、且地方官會議を招集して民情疏通の途を披き、漸次に立憲政體の

西洋の功利主義に本きて社會の教育に力め、英人スマイルス氏の諸著を譯して『西國立志編』『西洋品行論』などを公にせしは、福澤氏と共に其功沒すべからざるものありき。されど其說は福澤氏のかた遙に平民的、通俗的なりしが爲に、社會の感化力に於ては中村氏のかた、遙に劣れりしは是非も無し。

斯く上下の風潮は西洋主義に傾きければ、西洋語、殊に英吉利語を學ぶもの年每に增さり行き、隨うて幾多の著譯書は踵と跡と相接して世に出でぬ。其三四の例を擧げむに、歷史には萬國新誌、泰西通鑑、西洋英傑傳あり。地理、風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞錄あり。修身倫理には、智氏家訓、勸善訓蒙あり。政治經濟には、新政大意、立憲政體略、萬國公法、民約論、銀行論あり。其他開化問答、文明開化、世渡りの杖、道理圖解等、一々枚擧に遑あらず。鐵道電信より衣食住百般の有形的事物が、靡然として洋風に化しつゝある間に、是等の著譯が諸官私立學校の洋學教授と相呼應して、如何ばかり當時の人心を風化せしやは、恐らくは今の人の想像し得ざる所なるべし。民約論の如きは殊に甚し。是書は前世紀の佛蘭西人、ルソー氏の著にして、極端なる民主論なり。其要旨は、社會の主は人民なり、君主政府は人民が自

も、甘酒の作り樣と豆腐の製法は未だ之を聞かず。或は十二三の娘子が西洋流の學校に入り、又は西洋人の手に就き、西洋音の唄を習ひ、西洋風のメリヤスを組み、却て糠袋の縫ひ樣も知らず。或は和漢洋の書を讀みて三十一字も少しは出來れども人身窮理は忘却して自分の體の骨も知らず、風を引て容體を述ることも知らず』云々と說き、從來の敎育が實際の世事に疎遠なるを諷せり。福澤氏の是等の說は、今日より見れば何でも無き事なれども、維新草創の當時、廢れたりとは謂ひながら古來の武士道、儒敎、國學の敎、尙ほ人心に浸潤せりし際に於て、敢て斯かる說を唱道していさゝかも忌憚する所無き其識見と膽勇とは、眞に敬服すべきものなり。斯かる人ありて是實益功利の學を呼號し、其荊棘を拔き置きたればこそ、爾來諸般の西洋文物の斯くは容易に入り來り得しなれ。想へば日本の新文明が是『三田の先生』に負ふ所如何ばかり大なりけむ。其說の　にまゝ奇矯にしてやゝ正經に遠かれるものも無きに非ざれども、病に應じて藥を與ふるの道としては、寧ろ其眼識の明を稱うべきなり。『福澤全集』が明治の小歷史なりとの意も是邊りに存すべし。福澤氏の外に中村正直氏ありて、東京小石川に同人社と云へる私塾を開き、均しく

古動かざる者の如く思惟すれども、こはいみじき誤りなり。『忠臣二君に仕へ、甲州武士が徳川其他に仕へて働きたるも、亦天理人道に戻りたるに非ず。』年若き寡婦が落髪して尼寺に入り、亡夫の菩提を吊ふも天理人道なり、再縁して、子を生み、よく其子を教育するも天理人道なり。今の世に兄弟同胞が夫婦たらば、天理人道に戻るならむと雖も、アダムとイブの子供等は誰と縁組したるや。又日本書紀に仁徳天皇八田の皇女を皇后とすとあり、然るに皇女は天皇の妹なり。今より思へば不思議なれども、其時代には矢張り天理人道に基きし也』云々と說きて、本邦古來の固陋なる道德を根本より覆へし、又『權論』と云ふを說きて、楠正成は我邦にては古今に双び無き忠臣の鑑と稱せらるれども、湊川にて死なでもよきに死したるは、是れ權兵衛が褌にて首をくゝれると同じ事なりと論じ、苟も事の實際に益なくば、其行爲毫も賞するに足らずとの意を述べたり。又世の人が空名に拘はりて實益を知らず、爲す所概ね迂濶なりとて、『學校に石盤を用ひて數學には明なれども、店先の帳合には暗く、作文暗誦は上手なれども、手紙の文句は出來ず、窮理書は讀みたれども竈の築き樣と流しの水はきには工風を用ふるを知らず。化學の吟味は經たれど

示せるものは、最も熱心に歡び迎えたり。げに聖詔の示す所によりて、大體の方ながは定まれるものから、實行の機に臨みて聊か望洋の嘆を免れず。時の人が新に唱へたるものが果して永世の主義として依頼するに足るものか、其利何處にありて其弊何處にかある、等の問題は、未だ思料するの遑なく、ひたすら目前の急需に迫られて、新たなるものを迎ふるに忙はしかりしぞ自然なる。斯くて先づ入り來れるものは、西洋主義なりき。こは一旦國を開きて西洋の事物に親めば、見るもの聞くもの想ひしに優りて、驚かるゝもの多かりければなるべし。

是主義を輸入するの緣となりし事情はくさ〴〵あれども、朝にありては貴顯高官の人々歐米諸國を視察し、歸りて彼邦の文物の我れの比に非ざるを唱へしと、野にありては福澤諭吉、中村正直(敬宇)などの諸學者が私學を開きて盛に洋學を世に擴めしとは、其最も直接の緣となりしならむか。就中福澤氏は、慶應年間より已に是目的の爲に今日まで是年號の名を冠れる私塾を東京三田に開き、政治、道德、風俗、習慣、一に西洋の功利學によりて子弟を訓へたるは、是主義の擴張にはゆゝしき勢力なりき。其所記の一二の例を擧げむに、我國人は古より天理人道を一定不變、萬

一　官武一途、庶民に至るまで各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめむことを要す。
一　舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。
一　智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。
是五つの事は、洵に當代の急務にして、かねて永世の基礎なり。敕意の宏遠なること誠に感銘に堪えざるなり。上は國交政治より、下は文學美術に至るまで、一として是大旨に本かざるものなし。廣く會議を興し、萬機公論に決すべしとは、まさしく立憲代議制の濫觴にして、官武一途、庶民に至るまで各々其志を遂げしむとは、即がて門閥の舊習を打破し、廣く人才を天下に求むるなり。知識を世界に求むとは、廣く世界の文明を收容し、長短互に相補刪して我邦の新文明を開くなり。三十年間明治の歷史は何れか是大御心に本かざるべき。げに是五事の詔敕は明治思想の根源とこそ謂ふべけれ。
　遮莫、維新の革命によりて、社會百般の制度は殆ど其根蒂より破壞せられたれば、世はさながら饑え渴えたる者の如く、苟も是缺陷に投じて新世紀に處するの道を

志士亦爲すに所無く、國民一般の思想は謂はゞ渾沌の裡に自然の成行を待てる有樣なりき。幸に聖天子上に在まして、鋭意勵精輔弼の翼賛を納れさせられ、天祐を保全し、大業を克復し、茲に新政の大本、百代の鴻謨を立てさせられ、天下の人心を率ゐて向ふ所を一にせられたるは、洵に天地の佑澤、我國家の慶事なりとこそ謂ふべけれ。誠にかゝる危殆の世にありて、國家の中心として萬民を率ゐさせられたる我皇室の稜威功德の程は、我國人の夢忘るべからざる所なり。

されば維新以降の國民思想は、一に聖天子の叡慮によりて其方向決まれりと謂はむも不可なし。明治元年三月、恐れ多くも聖上には親しく紫宸殿に臨ませられ、公卿諸侯を率ゐて天地神祇を祭り、五事を以て天下の億兆に誓はせ給ひしは、とりも直さず我國民上下の思想を統一せむとの聖旨なりき。後年の國是は一に是五事よりして定まれるものなれば、こは吾等臣民の金科玉條として日夕體認すべきものなり。

一　廣く會議を興し萬機公論に決すべし。
一　上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

明治思想の變遷

（明治三十年史總論）

明治初年以來三十年間に於ける最近の歷史を述ぶるに先ちて、そが根柢となれる國民思想の推移を尋ねむに、そも〱維新の當時にありては、幕府仆れて王政古に復へりたれども、未だ然るべき政體だに定まらず嘉永このかた一國の怖れとなりし外國の事情も定かに知る由もなく、尊王討幕の餘焔は未だ志士の胸に消えざれども、誰ありて國論の向ふ所を一にし、萬邦對峙の中に我國民に千萬年の進路を示せしものなし。『廣く天下の公議を盡し聖斷を仰ぎ同心協力共に皇國を保護仕候へば必ず海外萬國と可並立候』とは、慶喜將軍が大政奉還の奏聞中の語なれども、狼狽爲す無きのさまはこゝにもおのづから現はれたり。　洵に數百年の長夢より目ざめたる國民が、頭を擧げて世界の大觀に眩惑し、一朝かゝる亂離の世に處し、剩へ外邦の交渉を控へたるもの、如何でか明確なる國民思想を作り得べき。　今や王政維新を促したる國學神道は是國家の大局面に何の力もなく、往にし日の攘夷の

き論法によりて解釋せられ得べきものに非ざるなり。吾等の見る所を以てすれば、水城は殆ど全く現下の思潮たる日本主義をすら誤解せるに非ずや。氏が是の如き言論によりて是の眞摯なる道德主義の問題を輕々斷じ去り、『迂』と嘲り『陋』と笑ひ、『病的思想』と罵詈し去るに至ては、吾等潜に有爲の學者たる水城の爲に甚だ歎惜に堪えざるなり。夫の文の莊にして語の快なるもの偶〻矯飾塗抹の誣を受けむのみ。

水城の說は日本主義に對する誤解の一例のみ。吾等は徒に誤解するものを議るにあらず、唯江湖有識の士が一段曠雅の襟度を披きて吾等の言に聽かむことを希ふや切なり。今にして國粹保存主義と日本主義との差別を說く、豈吾等の本志ならむや。

(三十一年四月稿)

くにして一時思想界を攪亂せるは素より免れざるの數なりとす。國粹保存主義の如き幼稚なる獨斷論を以て日本思想の本色となしたるの徒も、一見する所大膽無法の觀あるに驚き、危疑逡巡、俄に贊同の色を示さざるが如き、亦自然の勢なるべし。然れども單に東西内外の名義に拘泥して其離合を決めたる獨斷的思想を擺脫し、純然たる研究的態度を取りたるの一事は、實に日本主義の特色にして又國民的意識の發達を示したる所以なり。

吾等は玆に是主義の性質に就て多言すること能はず、唯以上擧げたる二大特色は、是主義と國粹保存主義の差別を最も明白に指定するものなるを注意するを以て足れりとせむ。夫の水城尙ほ且つ日本主義を以て『十年前國粹主義が夙に既に道破し了したる所を取りて衆人の前に開陳する醜然たる陋見なり』と公言する乎、斯の如く論じ來れば、水城が勿體らしく列擧したる所謂『同軌』の四ヶ條なるもの、悉く皆な杜撰無根の漫言たること問はずして明なるべし。想ふに水城は、依て以て是の如き斷案を下し得る所の事實の研究を經由せず、預め成心を挾み、思想開展の空想に擬して、漫然抽象的理義を揣摩したるものゝみ。明治思想の變遷は斯の如

ち日本主義に外ならず。

日本主義は國體の維持と民性の滿足とを以て國家の獨立、國民の幸福を保全し得べき二大制約となし、是二大制約を中心とし、核子とし、以て内外諸他の文物に對して公平なる研究を試み、是研究の結果によりて取捨撰擇を行ひたり。故に日本主義の眼中には國體と民性とを外にして、國の内外なく洋の東西なし。苟も國體民性に適合するものは、外邦の文物と雖も是を收容同化するに躊躇せず。是に反して、苟も是に有害なりと認むる時は、設令ひ數千百年の間、我國に存在し發達せるものと雖も是を排斥打破するを憚らず。要は毫しも名義外形に拘泥せず、唯其眞正の性質によりて取捨を決するの一事あるのみ。是を於て日本主義は內に向ては基督教と共に非國家的非現世的なる佛教を排斥し、保守的退歩的なる儒教の一部を排斥し、外に向て獨逸の國家社會主義を容れ、英國の功利實驗主義の一部を容れ、內外一切の文物に向て縱横の撰擇を行ひたりき。是に於てか從來國家主義とは離るべからずと信じ居りたる佛教徒（及び儒教徒）の如きは、大ひに狼狽し、俄に舊來誤て敵視したる基督教と聯合して是に反對するに至れり。日本主義が是の如

し、弘道會の如き儒教主義の團體が歐化主義に反對する時は、神道、佛教者流は期せずして是を助けたり。國粹保存論者が其保守主義によりて外國思想に反對するや、是を助けたるもの亦神道、儒教、佛教の者流なりき。夫の教育宗教衝突論にありても、井上博士の國家主義を援助したるものは、神道、儒教者流なるは論を待たず、非國家的主義者として基督教徒と共に井上博士を共同の敵とせざるべからざる佛教徒は、其の最も熱心なる贊成者なりき。夫の尊皇奉佛大同團と云ふが如き奇怪なる團體も、亦是幼稚なる獨斷に基けるものに外ならず。所詮日本主義以前の國家思想は洋の東西、國の内外によりて分派樹黨したるものなり。内國東洋の文物は必ず本來の性質に於て必ず一致すべきものなる乎、外國西洋の思想は果して本來内國東洋の文物に反對すべき性質を有する乎、將た又世界現下の局面に處して國家の獨立と進歩とを保全せむが爲に必要なる一國の道德主義は、是の如き國の内外、洋の東西によりて離合するが如き單純なる方法によりて樹立せらるべきものなる乎。是等は凡べて當時の思想に全く知られざる問題なりしなり。是の幼稚なる獨斷を離れ、汎く内外東西の文物に對して研究的態度を取りたるものは即

の變遷』を草したるか。何ぞ其題名の堂々として其所說の杜撰なるや。愼重なる學者の意見は決して是の如くなるべからず。

以上は日本主義の據て立つ所の國民的意識に就て概說したるのみ。其の執る所の方法に於ても國粹保存主義と日本主義との間には最も顯著なる差別あり、何ぞや、日本主義の硏究的態度是れなり。

抑々日本主義以前の凡ての主義は一個の獨斷の上に立てりき。獨斷とは何ぞや、他なし、洋の東西、國の內外を以て其取捨去就を決したること是なり。精しく云へば、苟も東洋もしくは國內に發達したる一切の文物は凡て本來一致結合すべき性質あり、是に反して西洋もしくは國外に興起したるものは凡べて本來是の東洋もしくは國內の文物に反對すべきなりとする獨斷說是れなり。是を以て明治初年の皇學者流にまれ、明治二十年の國粹保存主義にまれ、苟も外國思想に反對の態度を取りたるものは、何れも概して外國思想の全體に對抗し、飜て東洋又は國內に其歷史を有するものに對しては凡べて友朋與黨として是を收容し、是と結合せり。是を以て佛敎徒が耆督敎徒に反對する時は、國學者、儒敎者流は常に佛敎徒に左袒

痛切なる疑問として提供せられぬ。日本主義は是疑問に答へむが爲に起りたるものなり。

されば、日本主義の最大事業とする所は、世界今日の事局に處し、日本國家の獨立進歩と日本國民の安寧幸福とを保全せむが爲に、最も適切なる國民道德の實行主義を立て、是れによりて闔國の人心を統一するにあり。是に於て、先づ縱に成敗の跡を過去の歷史に徵し、横に興亡の理を世界の大勢に求め、國體民性を中心として、廣く且深く自他内外の事物に對して精微なる商量を遂げ、以て一國思想の指針たらむことを期せり。其目的は素より國民にありと雖ども、是主義の由て來る所は獨り國内のみに止らず、遍く世界列國の大勢より打算し來りたる者なり、是意味に於て日本主義は一個の世界的主義なりと謂はざるべからず。是を夫の國粹保存主義の主我的盲動と混同せむとするが如きは、全然歷史に盲なるものに非ずして何ぞ。水城が『日本主義は十年前國粹主義が夙に道破し了せる所を取り來りて新衣裳の下に衆人の前に開陳する醜然たる陋見なり』と罵詈せるが如きは、殆ど沒理の言に類す。抑々水城は如何の材料、如何の研究、はた如何の覺悟を以て『明治思想

無かりしなるべく、又一史學者の論文に對し、國學神道家者流が國家主義の名によりて無道の迫害を加へたるが如き醜態も無かりしなるべし。是の如き尙ほ幼稚なる國民思想を根抵より搖撼し、國民的意識に最も明白なる覺醒を與へたるものは、即ち二十七八年に於ける日淸戰爭なり。日本主義は是國民の明白なる自覺心を代表せる主義たるなり。

日淸戰爭によりて獲たる勝利は、一部國民の自負心を鼓舞し、排外自尊の病的思想を熾ならしめたるは甚だ悲むべき結果なりき。然れども遼東半島の地理と共に、東洋の局面世界の大勢は是の戰爭によりて初めて國民の間に知られたり。戰に勝ちたる國民は世界に於て尤も危殆なる位置にあるの國民なることを覺りたり。黃白人種最後の大格闘は如何に其千年の歷史を紹ぎて、將に絕東の風雲を掀飜せむとするか、黃人種最後の運命を決すべき一大危機の如何に肅々として眉睫の間に近づきつゝあるか、日本の戰勝は如何に外邦の猜忌を增し、如何に國民の前途に一層の險巇を加へたるか、戰勝の祝宴に醒めたる國民は悚然として怖れ、猛然として省みたり。是に於て、世界に於ける日本の位置てふ觀念は國民の間に最も

と國民の依て以て其獨立の存在を維持し得る所の國體及び國民性に就て明白なる概念を有せざるは言を待たず。當時國家と言ひ、國民と謂ふ所のもの、多くは單に外邦の思想を借り來りて漠然たる觀念を構成せしに過ぎず。我が國家、我が國民に就いては殆ど思料する所なかりしなり。國粹保存主義は、是間に一段の反省を齎らしたりと雖ども、畢竟未だ遙に國家主義と云ふを得ず。明治廿二年に發布せられたる欽定憲法は我國體の特性を明かにし、政治上に於ける民主主義者流の空想を打破し、以て國民の政治思想を統一し、同じく二十三年に煥發せられたる敎育の大詔は國民道德の大綱領を指定して以て國民の道德思想を糾合し、茲に國家主義の精神は初めて社會の人心を司配するを得たり。然れども是の如くにして成立したる國家主義の思想や、未だ國民の明白なる自覺心によりて樹立せられたるものにあらず、多少頑迷固陋の嫌ありしは時勢の然らしむる所、畢竟國民的意識を覺醒すべき十分の刺戟を缺きたればなり。もし當時國家及國民の概念にして明かに會得せられたらむには、夫の敎育宗敎衝突論に際し、本來基督敎と共に非國家的なる佛敎徒が、井上博士に左袒して却て基督敎を攻擊したる笑ふべき矛盾も

水城の言や洵に壯なりと謂ふべし。然れども如何ばかり確的の論據あれば水城は斯かる壯語を敢てし得たるぞや。是れ吾等の玆に問はむと欲する所なり。

苟も明治思想の歷史を理解し得たる人ならむには、國粹保存主義と日本主義との間に一の著大なる差別あることを認識せざるべからず。是の著大なる差別は、內にありては即ち國民的意識の明白なる自覺なり、外に表はれては即ち內外事物の眞正の性質に據りて、其取捨撰擇を決し、其方法の全く研究的なることなり。但し兩個の主義は、日本を主とし外邦を客とする事に於て、素と同系の思想に屬するが故に、是の差別は根本的なりと謂ふを得ずと雖も、其懸隔の大なる殆ど將に天淵の別あらむとす。水城是二大差別を看過して而て尙ほ『明治思想の變遷』を論じ得たりとする乎。未だ愼重なる學者の意見と謂ふを得ざる也。

然らば則ち何をか日本主義に現はれたる國民的意識の自覺と云ふ。他なし、國家及び國民の眞意義を解釋し得たる事、即ち是れなり。抑々國家及び國民の概念が自覺的に國民思想に上りたるは、明治二十二三年以後の事なりとするを妥當とすべし。其以前にありても、是を言說せるもの素より尠からざりき、然れども國家

雜駁なる思想の範圍に坐して、社會上國家上の實務に關し未だ一定の識見を立するに至らざるは、兩者同軌の一なり。思想開展の理勢に通せず自個の地位を覺知せざるは、兩者同軌の二つなり。第十九世紀の末葉に於ける世界文明、世界思想の大勢を了せざるは、兩者同軌の三つなり。大勢上より觀るに於いて大波瀾の後の小波瀾として、反動的復興の現象として、自動的態度を共有することなきは、同者同軌の四なり。

終りに大に日本主義を罵りて曰く、

所謂世界主義の時勢に後るゝこと數舍なるは更にも言はず、所謂日本主義亦國粹主義の後に出でゝ同一思想を反復する、若し以つて新と爲すか則ち迂、若し自ら其陳なるを知ると雖も、且其貌を新にし其の聲を大にして以て自ら售るに資せむとするか則ち鄙。鄙なる者と迂なる者と日本主義や必ず一に此に居らざる可からず。苟くも學識氣力に於いて日本思想の先覺者を以て任ずる者、固に宜く斯の如くなるべけんや。明治思想界の病的現象は吾世界主義及日本主義に於いて之を看る。

の時期となし、第二を懐疑の時期となし、第三を合成的建設的の時期となせる事に就ては、吾等茲に異議を唱へざるべし。唯水城が所謂第二期の懐疑説たる國粹保存主義の一時の反動的復興として日本主義を觀察したる事に就ては、眞に是れ蔽麥河嶽を辨せざる夙斷なりと謂はざるべからず。水城說を爲して曰く、

摸倣と自覺の二大主義明治の思想界を振盪するや、第三期的開展は日尙遙にして、乃ち這般二大主義の反動的復興は起れり。摸倣主義の反動的復興は即ち西園寺公望氏等の唱說に係る所謂世界主義即ち是にして、自覺主義の反動的興起は近來一派の儕輩の呼號に於ける所謂日本主義即ち是なり。所謂世界主義は單に過去に於ける歐西の文物思想を以て文明の究竟的理想と爲す漠然たる淺見にして、所謂日本主義は十年前國粹主義が夙に既に道破し了せる所を取りて、新なる衣裳の下に之を衆人の前に開陳する醜然たる陋見なり。

而して日本主義は國粹保存主義の單純なる摸倣に過ぎざるを證せむが爲に、二者の類似を比較して曰く、

然れども吾等は歴史上の一思想として國粹保存主義の功績を否定するものに非ざるなり。少くとも國民的意識の覺醒に一歩を進め、從來徹上徹下に全盛を極めたる歐化主義の適否に就いて、國民に一大反省を促がし、兎にも角にも獨立の日本思想に據りて歐化主義に對壘したるの一事は、明治思想史上に特筆すべき者なり。是點に於ては國粹保存主義は慥に今日の日本主義の先驅たりと謂ふべし。

是に於て吾輩は勢ひ日本主義に就いて一言せざるべからず。げに是主義や、其系統に於ては國粹保存主義の後を受けたるものなりと雖も其内容に於ては日を同じうして論ずべきものにあらず。今其差別を説明するに先ち、便宜の爲に世上の論者の誤謬を指摘せむ。而して是の如き誤謬の一例として水城學人の日本主義論を擧ぐべし。實に吾等は水城の如き少壯有爲の學者にして尚ほ且つ是幼稚の見をなするを見て、成心私情の如何ばかり論理の公明を累はすかと想へば、覺へず慄然たらずむばあらざるなり。水城希はくは心を虚しうして吾等の説に聽け、而して靜かに省みる所あれ。

水城が明治思想の變遷を論じて、是を人間思想開展の三大段に擬し、第一を獨斷

る制約の下に成立し得べきものなるか、換言すれば依て以て外來勢力を同化する所の主腦力、中心力は何處に求むべきかを說かず、唯嘈々然として國粹保存を唱へたるのみ。

且夫れ國粹保存主義論者の唱へたる所は、其名の示す如く、單に國粹の保存に止まる、故に其の外來勢力に對するの態度は全く受動的なり。彼等の所謂國粹を見るや、猶ほ古物の如し。其中何等發達の活力を具足せず、何等進步の性質を包有せず、只務めて其舊形を保ち、故色を失はざらむと欲するのみ。彼等は國體國性の特質が一國人文の大把柄なることを明知せざりしのみならず、未だ是の如き概念の依て立つ所の國家及國民の眞意義をだに解せざることは、彼等の言論に徵して尤も明白なる所なりとす。彼等の主義や素より國民の反省に本く、然れども國民的意識の發達の上より見る時は、從來物我を分たざるもの、玆に初めて自他內外の差別を自覺したるに過ぎず、未だ一國文明の特質を明にし、其の國體及び國性を以て國民的思想の中心となすに至らず、所詮は幼稚單純の主義なりと謂はざるべからず。

然の數なるべし。國粹保存主義は即ち是の如き反動に外ならざるなり。而して此の如き單純なる反動の性質として、其の外を排して己を伸ぶるに急にして、未だ顧みて自他内外の得失を比量するに遑あらず、是れ國粹保存主義論者か消極的に歐米を斥くるに急にして、積極的に自家の主張を暢ぶるに遑無かりし所以也。是を以て彼等は漫然國粹を呼ぶ、然れども其の所謂國粹の何物なるかに就いては一も明言する所あらざりき。當時反對者が是主義を目して攘夷論の再燃となしたるは、素より誤解なるべしと雖も、而かも國粹保存主義其物の性質として是誤解を招致すべき因縁を具足したりしに依らずむばあらず。是を要するに、國粹保存主義は思想發展の歷史に於て、國民が外來勢力の抑壓に反動し、翻て自己の存在を自覺し初めたる一契點を標示せるものなり。夫れ唯存在の自覺に止まる、自己の依て以て存在し、發達し得る所の諸般の制約に就いては未だ一も思料する所あらざりし也。其の言ふ所は全く抽象的なり、全く形式的なり、國粹を口にすれども其國粹の何物たるを說かず、彼の長を取りて我の短を補ふべしと言ふと雖ども、何物か彼の長にして何物か我の短なるかを明かにせず。抑も又是の如き折衷は如何な

思想の歴史は即ち國民的意識の發達の歴史なり。」明治の初めにありて、國民は外來文物の新奇と盛大とに眩惑し、未だ世界各國の人文は其國民的性質の必然の所生なることを覺らず、專念一意、歐米を崇拜し、追從し、摸倣して日も尙足らざらむとしたり。是時に當て國民は未だ自己の存在と獨立と特性とを覺悟せず、其意識は全然外界に投射せられ、偶々駭目驚心の事物に遭遇し、茫漠渾沌の中に其無我的活力を放散したるに過ぎず。既に我無し、隨て我と我に非ざるものとの明白なる差別を知らず、目的なく、考察なく、唯々本能的に盲動したるのみ。夫れ唯盲動なり、故に外物を摸倣せむが爲には、其數千年の歷史を打破するを憚らず、是歷史によりて陶冶せられたる特性を損害するを顧みず、猶ほ小兒の我れを虛うして偏に他の嚬笑に擬するが如きなり。明治の初め、歐化主義が國民思想の虛漏に乘じて一世の人心を風靡したる事實は、是の如くにして解釋せられ得べきのみ。

然れども小兒は長へに小兒たらざる也。國民性の彈性極限に達したる極端なる外物崇拜と摸倣とは、茲に端なくも國民的意識の反省を促がし、遂に多年の抑壓を忍びたる國民的特性をして猛烈なる反動を提起せしむるに到るは蓋し尤も自

の弊を覺り來りぬ。

國粹保存主義は是の如き時勢に乘じて起りたるなりき。然らば則ち國粹保存主義とは如何なる主義なるか。

雜誌『日本人』を機關として、三宅、志賀等諸氏の唱道せる所は、今日より見れば甚だ漠然たるものなりき。既に名けて國粹保存主義と云ふ、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや素より論無し。然れども、是の如き『國粹』の何物なるか、何故に內外萬千の事物の中、是の如き『國粹』の特に保存せらるべき價値ありとするか、社會經營の全局面に於て所謂國粹保存てふことは幾何か國家國民の幸福を增進するに益すべきか。是等諸般の問題に就いては一も明示する所なかりしなり。諸氏の說く所は、單に『猥りに歐米を摸倣する勿れ、我國粹は是を保存せざるべからず、一も二もなく外邦の文物に心醉して我の長所、美所、即ち國粹を抛棄するは甚だ不可なり』と云ふに過ぎず。是れ雜誌『日本人』の初號に徵して尤も明かなりとす。

是の如く、是主義の興りたる時代と其の依て立つ所の主張とを比照する時は、吾等は國粹保存主義の歷史的位置に就いて最と明瞭なる概念を得べし。蓋し明治

を組織するに及び、外尊自卑の氣風は上下に普く、有形無形一切の事物を擧げて西洋を模倣するに到れり。天賦人權說は男女同權論を産出し、『板垣死すとも自由は死せず』と云ふ夢の如き言葉は、殆ど聖者の福音の如く傳へられ、和漢の學は弊履の如く、淺薄なる飜譯書は殆ど無上の聖權を以て迎へられき。今の外山博士が『漢字に反對するものには何でも賛成する』と公言して、羅馬字會かなのくわいを起したるも是時代なり。西洋風の假裝會、舞蹈會は盛に奬勵せられ、大學々生と女學生と混じて英語演劇を催したるも是時代なり。所謂愛國の志士が民權自由の詭辯を弄して連りに好で囹圄の人となり、革命戰爭に關する飜譯小說の盛に行はれしも是時代なり。政治界に於ける帝政黨と敎育界に於ける弘道會とは、多少反動の氣勢を示したれど、南風遂に競はず、佛敎徒が是等、守舊派と聯合して『破邪顯正』の旗幟を飜したれども、其勢亦遂に振はず、基督敎は歐化主義の後援に賴りて前後比類無き全盛を極めたるも是時代なり。凡そ明治七八年より二十年に到るまでの十數年の間、國民思想の大勢は歐化主義によりて壟斷せられたりき。是に於て二十年間の新經驗、新時勢に敎育せられたる國民は、漸く中心に於て是極端なる歐化主義

ばあらず。

國粹保存主義は如何なる時代に興り、如何なる主張の上に立ちたるか。是二點を明にすれば、それが日本主義との關係及び差別はおのづから瞭然たらむ。

國粹保存主義は如何なる時代に興りたるか。抑明治の初年以來、歐化主義の勢力は、原燎の枯草を燒くが如く、社會の全部に蔓延し、徹上徹下、底止する所を知らず、一二皇學者流の反動ありと雖も、例へば、一掬の水を以て車薪の火に濺ぐ如し。其勢力の政治上に表はれたるもの、民選議院設立の建白となり、愛國公黨の組織となり、高知立志社の宣言となり、民約論的佛蘭西思想は一世を風靡せり。『我輩の政府を見ること斯の人民の爲に設くる所の政府と看做すより外無かるべし』とは、愛國公黨の『本誓』にして、『政府は約束より成り、納税の義務は參政の權利と相對す』とは、民選議院建白の主腦なりき。かゝる幼稚なる自由主義が政治界に大流行を極めつゝある間に、社會は盛に英米の功利主義、平等主義を歡迎し、君父に對する義務よりも己れに對する義務を重じたる勸善訓蒙、智氏家訓等の飜譯的倫理書は、公然として國民教育に用ひられ、殊に西南戰爭終りを告げて西洋心醉の政治家等が內閣

臨まむは、若かず、寧ろ初めより人に聽かざらむには。吾等は讀みて而して解せざる者を咎めず、そは其知見の進むに隨ひて早晩解し得るの時あるべければなり。されど解し得べくして而して解するを欲せず、若しくは解し得て而して尙ほ其成心の非を遂ぐるものは、げに思想界の外道とこそ云ふべけれ。

眞理は天下の眞理なり、一人の眞理に非ざる也。是を以て吾人は其言を採るもの〻爲に說かず、年齡の老弱を問ひ、出世の先後を見、而して其人の弱齡にして後進なるを見れば、則ち後れ到りて事を共にするを屑しとせず、斯の如きは一人の私見に雷同するのみ、天下の眞理に殉ずる所以に非ざるなり。か〻る襟度なく雅量なき者は、畢竟何事をか爲し得べき。吾等其所信を告白し、同志を天下に求めて其運動を共にせむことを望むや切なり。されど斯の如き瞶々者流に向ひては、むしろ吾等の說を讀まざらむことを希ふ。

今日に於て國粹保存主義と日本主義とを混同する者あるは吾等の甚だ遺憾とする所なり。是れ畢竟吾等の言說に對して眞摯なる包有的批判を施さゞりしが爲なりと雖も、抑又日本主義の由來せる歷史的徑行を審にせざるの弊に坐せずむ

限り西はピレニーの山を境として、アールヤ人種は自衛自全靜に時の到るを待ちたりき。彼等の西班牙、匈牙利、魯西亞、希臘の斃れたるは、猶ほ吾人の埃及、土耳其、安南、朝鮮の仆れたるが如かりし也。天吾人をして極東に邦せしむ、豈夫れ偶然ならむや。ツラン人種が最後の城廓は、吾人の大八洲にあり。再び風雲を掀飜して天下に雄飛すべき時代は、幾もならずしてツラン人種の頭上に落ち來らむ。十九世紀の末葉はアールヤ人種の第二の極盛期なり。然れども誰か安ぞ來るべき第二十世紀に於て人種競爭史上の局面に更に一回轉を起すこと、猶十五世紀に於けるが如くならざるを知らむや。

（三十一年一月稿）

國粹保存主義と日本主義

何ぞ世人の褊狹にして他の言説を正解する能はざるか、預め成心を挾みて他に

人種就中ツラン人種に對する一千年間の姿勢は、吾人已に是を知れり。西力東漸の急潮は十九世紀の末葉に臨みて澎湃として極東の海に注ぎ來りたる事實、亦已に了しぬ。而れども是西力の東漸は何處に到て究るべきや。其地を以て言へば、極東は即東大陸の極まる所、是より東の方海を指せば、萬里の煙波渺茫として涯際無きを見るのみ。其國を以て言へば、支那・日本は非アールヤ的國家の最後の遺孽なり。是生殘の遺孽にして東大陸の極東に邦するもの、今や戰勝千年の勢に乘じ來れるアールヤ人種の勢力の掩撃する所となる。ツラン人種最後の運命を決定すべき最後の大格鬪の早晩來るべきは、瞭々として火を睹るよりも明なる事ならずや。

眦を決して前途を望めば、覺えず骨鳴り肉躍らむとす。あゝ日本男子の眞に義憤すべきの時は夫れ來らむとする第二十世紀なる乎。

國家の强力を試むべき機會の接近することは、寧ろ眞正なる國民の樂しみ待つべき所なり。吾人安ぞ今にして徒に悲歌慷慨せむや。想ふに吾人の祖先は吾人が今アールヤ人種の凌辱を受け居るが如く、アールヤ人種を苦めたりき。然れば則ち今の吾人は古のアールヤ人種を以て自ら任ずべきに非ずや。東はヰスチュラの河を

も一國の道德は今尙ほ食人俗の狀態にあり。夫の公々然として人の國を盜み人の地を掠むるもの天下仰で强と稱す。德義、道理、人道は國家の暴横を爲す時の假面に用ひらる、要は獸慾の滿足に資するのみ。北米合衆國は、自ら自由、正義、人道を以て國是となすと稱す、而かも今回獨逸の暴横に對する彼が宣言に聽け。北米合衆國は自國の利害に關係無き限に於て、膠洲灣占領に容吻せずと言ふに非ずや。正義人道を以て國是と爲すものは、正義人道に背戾する者を敵として戰はざるべからず。自國の利害と關係無きが故に吾れ與らずとするものは、是れ自主のみ、自利のみ、豈正義人道ならむや。要するに、今の時は國家至上主義があらゆる方面に於て國民的活動の原動力たるの時なり。日本國民は飽く迄日本主義によりて今後の態度を決定せざるべからず。

進莫、人文史上より人種競爭として極東問題を觀察する時は、ツラン人種今後の運命果して如何。嗚呼是れ日本帝國民たる吾人にとりて最も重要なる死活問題に非ずや。

吾人は過去を知る。然れども未だ將來を知らざる也。アールヤ人種が非アールヤ

たらずして魯國たるが爲に、袖手して傍觀するに非ずや。若し東洋の平和を言はむか、朝鮮の支那の有たると、魯人の有たると、其安危同日の論に非ざるなり。膠洲灣占領の極東の平和を害すること、更に魯人の朝鮮を有するよりも甚しからむとす。而して日本は未だ一片の抗議だも挾まざるなり。今やアールヤ人種の勢力は極東の分野を掩ひ、交貫連綿してツラン人種の老帝國に集注す。曾て義憤の刄を提て膺懲の戰を起したる日本は、是同胞の存亡の危機に際して果して何事をも爲で能はざるか。吁アールヤ人種一千年の大運動に注目せよ。東洋の事局は膠洲灣の風波を以て終結すべきに非ず。今日鄰邦に施したる所、彼等は以て明日吾人に對せざるべき乎。波濤は遂に岸を打たずむば已まず。人種競爭の最終の大格鬪は、其れ我島帝國にあらむか。

吾人は玆に政論を爲すものに非ず、又外交を說くものにあらざる也、而かも一事の我邦人に告ぐべきものあり。世界の大事の、道理によりて爲されず、人道によりて爲されず、一に利害の爲に爲さるゝ事是れ也。人種競爭は利害の最も大なる競爭なり。今日一個人の道德は稍々進步せり、一錢を盜むも法律の罰を受く、然れど

茲に到れば、吾人の誇りとする所の日清戰爭は畢竟極東の奇禍ツラン人種の一大不幸に非ずや。

然れども日清戰爭は實に已むを得ずして起りたるものなるべし。吾人は今に及びて隣邦の頑冥を咎めず、唯謹で天命の司配常に正しきを享受せむと欲する也。

さもあらばあれ、日清戰爭に依りて世界に知られたる日本の强力は、アールヤ人種の極東攻擊の態度に多少の變更を與へたり。彼等は安南、暹羅、埃及に對せし所のものを以て、日本を待つべからざるを認識せり。是に於てか彼等は戰勝の結果として要求せられたる遼東半島の割取に容喙し、以て東洋の平和を危殆ならしむる所以なりと抗議せり。同時に彼等は日本の武强と共に、支那の文弱を確知し、大國古國たるの故を以て多少畏懼したる從來の態度を一變し、其國防の備はらざるに乘じて猥に沿岸の地を占領し、兵を陸し、砲を架し、軍艦を增發し、列强手を携へて互に其の暴慢を過不及なからしめ、東洋の局面を壓して以て事局の急轉を耽視せり。

是時に當りて日本の位置如何。嘗て東洋平和の擔保として、國命を懸けて爭ひたる朝鮮は、已に殆どアールヤ人種の保護國となれり。而かも日本は其對手の支那

嗚呼書して茲に到り、飜て日清戰爭の顛末を沈思すれば、吾人は憮然として長大息するを禁ずる能はざる也。嗚呼日清戰爭なるもの何が爲に起りしや。朝鮮の獨立を扶翼し、東洋の平和を維持せむが爲に作されたりと云ふに非ずや。朝鮮の獨立、東洋の平和、是れを以て名とするの戰は、天下の義戰なり。吾人は吾が國人が是天下の義戰を以て中外に誇耀するを不可なりとせざる也。然れども、吾人は是義戰を闘はむが爲に支那帝國を再び起つ能はざるべく打擊したるに非ずや、吾人實に是を悲むなり。支那は吾人と同人種に屬する唯一の帝國に非ずや。ツラン人種の國家は、極東以外に於て全くアールヤ人種の爲に勦滅せられたり。吾人の日本と支那帝國とは世界に於ける最後のツラン人種の國家として相抱擁し相提攜して其の運命を共にすべきことを誓ふべきに非ずや。支那は吾人の唯一の同胞なり。アールヤ人種は是の非アールヤ人種攻擊の最後の局面を以て、吾人の極東に擬せむとす。吾人は當に來るべき兩人種最後の大格闘を眼前に望みながら、是唯一の同胞に大打擊を加へて再び起つ能はざらしめ、而して自ら快しとすべきなる乎。嗚呼支那を半死せしめたる吾人は、自ら其一手を斷ちたる者に非ざるか。思ふて

若し十九世紀外交史の特徴たる權力平均てふ一事微りせば、魯國の朝廷は夙にコンスタンチノポリに移りしならむ。列强相牽制して其過重の權勢を容さず、是れアールヤ人種が非アールヤ人種を攻擊するの緩漫なる所以なり。アールヤ人種の各邦國は、互に猜疑疾視しつゝも尙ほ其の非アールヤ人種攻擊の事業を遺れず、彼等は權力平均の上に於て土耳其を歐洲の一角に殘し置き、更に等しく步武を進めて今や東方諸邦に干涉し初めたり。埃及先づ其の衝に當りてアラビー・パシャ國命を懷て仆れ(一八八二)、英露各々中央亞細亞を分割して、遙に成吉思汗・帖木兒の枯骨に鞭ち、南洋諸島亦血ぬらずしてアールヤ人種の正朔を奉ず。印度既に久しく起たず、緬甸亦國を成さず、西力漸く東して將に馬來半島の海角を越えむとす。是に於て清國安南を爭へども勝たず、暹羅も亦國勢競はず、湄公河東岸の地遂に安南と共に佛國の手に歸せり。スラヴ民族は中央亞細亞に同人種の制肘ありて十分に其羽翼を伸ばす能はざるを見、方向を轉じて東半球の上北部を橫斷し、黑龍江畔及びサガレン島より直に支那、日本の背後を衝き、遙に英佛獨の北進軍と呼應して、ツラン人種最後の國家に對して、一大包圍攻擊を行はむとす。極東の雲脚是に於てか急なり。

の及を提げて北境に迫り、第一魯土戰爭は一千六百七十八年を以て起りぬ。越へて二十一年、土耳其の權力は殆ど崩解し、波斯より追はれ(一七三四、エリワンに敗れ(一七四三)、對外の威力全く地に墮つ。一千七百七十三年、魯人大擧してドナウを越へ、鐵馬一路、直に土京を指せり。幸にして將軍ハッサンの力によりて之を擊退するを得たりと雖も、僅に一日の禍を緩うしたるのみ。一千七百九十二年、所謂ヤッシーの條約によりて土耳其の彊域はドニェステル河に退き、且土領內に存せるスラヴ人、希臘人等は魯人使嗾の中に、動もすれば叛亂を企てたり。今世紀の初に到り、アールヤ人種の同盟軍は遂に土耳其より希臘を奪ひて是を獨立せしめ、更に魯土戰爭の結果としてバルカン半島の大部分は事實上全く土帝の羈絆を脫したり。土耳其以外歐羅巴に於ける唯一のツラン人種國たる匈牙利も、コッスートの義戰遂に其獨立の功を奏せず。墺露聯合のアールヤ軍は之を墺地利に併せたり。玆に於てか中世紀に於けるツラン人種侵入の唯一の結果たりしマジャール民族の遺業も、遂に全くアールヤ人種の足下に仆れ畢むぬ。

匈牙利滅びムア追はれ、ツラン人種の歐洲に邦するもの僅に土耳其あるのみ、

の文化を修養し、其の倉に滿たし、其の馬を肥やし、國を治め民を齊へ、徐ろに時の到るを待てり。待ちたる時は遂に到りぬ。コンスタンチノポリの陷落は彼等にとりて出陣の曉鐘に均しかりき。是に於て彼等は防禦の態度を改めて靜に攻撃の姿勢を取りぬ。人種競爭の歴史は茲に其局面を一變せり。

顧みれば、三世紀より十五世紀に到る一千二百年間に於ける世界歴史の大觀は、非アールヤ人種のアールヤ人種攻撃に存せりき。然れども十六世紀以後は則ち是に反し却てアールヤ人種の非アールヤ人種攻撃を以て史的活動の一大主腦と爲さゞるべからず。喩へば奔濤岸を打ちて巖壁に遮斷せられ、飜て二倍の强力を以て反對の方向に退轉し來りたるが如し。非アールヤ人種は旗を卷き枚を銜みて、鐵鞭又北斗を指さず、首を回して境場を守り、自全の計に遑あらず、遙にアールヤ人種の馬首漸く南するを望み、悚然として怖れたり。

是に於てかコルドヴの政廳は半月旗を撤回し、『コラーンか、貢か、はた劍か』と呼びしもの、今や蹋天蹙地、僅にジブラルタルを渡りて、東南に走れり。オットマン土耳其も、ソリマン帝(一五五九)以後、又振はず。スラヴ民族はコサック族の故を以て、復讎

はざりしならむ。此を以て是を見れば、ビザンツ帝國の建立及び其沒落は、アールヤ人種の爲には共に其の時を得たるものと謂はざるべからず。是れ豈宛然たる天命攝理に非ずや。

加ふるに、アールヤ人種は西南にチャーレス・マーテルを有せしが如く、東北にスラヴ民族を有したり、是れ亦一の天惠なりし也。是民族の頑强剛毅は、匈奴韃靼の歐洲侵入にとりて幾何の障害なりしや。千二百三十六年以來中央亞細亞より潮の如く寄せ來りし蒙古人も、遂に深く日耳曼の境に入る能はず、サマルカンドの帝王帖木兒は、匈牙利を掠め、莫斯科を燒き(一三四八)幾度か魯西亞を蹂躙せり(一三九七)然れども遂に『スラヴ』人の頑强を奈何ともする能はざりき。一千四百七十四年に至りて、魯王イワンは遂に全く韃靼の人を外國に放逐せり。是を以て全體より觀る時は、セム、ツラン等の非アールヤ人種は羅馬帝國の末路より幾度か力を極めて、歐洲の中原に向て鞭を擧げたりと雖ども、其馬蹄の印する所、西南はピレニー山を限り、東北はヸスチュラ河を越えず、南部はドナウの中流、匈牙利の以北に入る能はず、中央歐羅巴は依然として『アールヤ』人種の爲に安全なる住居を供へたり。彼等は茲に其

の運命を免れざりし西羅馬帝國と共に希臘以來蓄積し來りたる文明をして北方、楚人の一炬に歸せざらしめむ爲めに、又一は西羅馬の殘墟に建立せられたる西歐諸國が、外來の攻撃に對抗して其の獨立を保持し得るに至るまで、ビザンツ帝國は歐洲東部の藩屏胸壁となり、以て年毎に增りゆく亞細亞民族の侵入を支へしなり。西方諸國の基礎全く成就し了るに及び、是帝國は玆に其の職能を全うして滅亡し、多年其の城壁裡に保存し來りし古代文物を西方諸國に撒布せり。這般の興亡、殆ど天のアールヤ人種に與みして故らに作爲したるの觀あり。想ふに、若しコンスタンチヌス帝が別に東羅馬の一帝國をボスフォラスの海頭に建立する微りせば、希臘以來の文物は西羅馬沒落と共に來りたる混亂時代の間に堙滅し了り、中世以來の邦國は、更に人文の大部を其初めより新たに建設せざるべからざりしやも知るべからず。且亞刺比亞、土耳其諸民族にして西帝國崩解の罅漏を衝きて歐洲中原を蹂躙したらむには、チュートン諸民族の運命はた測知し難からじ。若し又ビザンツ帝國にして、土耳其の民族の爲に亡ぼさるゝなく、其の獨立を永久に持續したらむには、古代文化の寶庫は空しく閉鎖せられ、西歐諸民族は永く其の澤に潤ふこと能

の寺院は回々敎の殿堂となり畢むぬ。是をツラン人種の極盛期となす。

是の如くセム人種は西南より、ツラン人種は東北より、共にアーリヤ人種の中堅を攻撃せりと雖ども、遂に其の志を果さゞりき。歐羅巴千五百年の歷史はアーリヤ人種の爲になされたる上帝の攝理なるの觀ありき。羅馬の末路よりビザンツ帝國沈落に到るまで、アーリヤ人種は常に防禦の態度を取り、外來の攻撃に對して自全の計に汲々たりしが、今や彼等が捲土重來の時機は遂に來りぬ。其最後の波動遠く及びて、遂に今日の極東問題を惹起すべき悠久なる攻撃的運動は初まりぬ。乞ふ先づ吾人をして十五世紀以前の歐羅巴史に就て一緬想せしめよ。

希臘は文藝の邦なり、歐洲の哲學文學美術の源泉なり。羅馬是を併せ、武力を以て是を世界に傳播し、各邦をして將に來らむとする新文明の爲に同一の文化を準備せしめたり。基督敎是に入りて忽ちにして四方に波及し、歐洲文明の基礎茲に成れり。羅馬帝國漸く衰へ、北方チュートン民族の侵撃漸く激烈なるや、コンスタンチヌス帝、都を東方に遷し、茲にビザンツ帝國成りぬ。是帝國が史上に於ける職能は、古代文藝の保存とアーリヤ人種の爲に東歐の藩屛たりしにあり。即ち一は滅亡

フン諸民族が數〻西羅馬を危うしたるが如く、彼れ等は幾度かコンスタンチノポリの帝座をして半月旗を望みて震駭せしめたり。凡そ一百年の間、アールャ人種の基督教國は、亞剌比亞人の名に寒心せり。是れ歷史上セム人種の全盛期なり。亞剌比亞民族已に西班牙半島を平げ、七百二十年ピレニー山脈を越て北の方佛蘭西に入れり。是れ實にアールャ人種の一大危機なりき。若し七百三十二年に於けるポアチエの大勝利微りせば、全歐羅巴は半月旗下の屬邦となりしやもまた知るべからざりしなり。是一戰に敗れてよりセム人種の變騎又西班牙を出でず、漸く退嬰衰弱の勢を示し來れり。

亞剌比亞民族のセム人種的勢力漸く傾くや、ツラン人種代て其遺業を紹ぎ、アールャ人種の上に大打擊を加へたり。是を土耳其民族となす。是民族は東羅馬帝國、及び亞剌比亞民族の衰頽に乘じて小亞細亞を掠略し、基督教徒の聖地なるエルサルムを占領し、大にアールャ人種を虐待せり。七回の十字軍茲に於てか起り、聖地回復の義戰凡そ二百年に亘れり。土耳其民族敢て沮喪せず、一千二百九十九年、土耳其帝國を建立し、一千四百五十三年遂にコンスタンチノポリを陥落し、聖ソフヰア

り東はコンスタンチノポリに到る歐洲の中原に出沒し、遂に匈牙利の一王國を建設せり。是れアールャ人種に對するツラン人種の攻擊期と稱するを得べし。

羅馬帝國の衰頽は、一方に於てツラン人種の攻擊と共に、他方に於てセム人種の侵掠を誘致せり。アッスリアの古帝國が一度び波斯に併せられ、再びアレキサンドロスに征せられ、三度び羅馬及びビザンツ帝國の司配の下に屈從せしより、セム人種は、歷史上久しく劣等の民族として常に他邦の羈絆を甘受せりき。然れどもあらゆる事情の下にありて其人種的特質を維持したる彼等が世界に雄飛すべき時代は終に來りぬ。是大任を負ひて蹶起したるものは亞剌比亞民族なりき。

亞剌比亞民族は西の方羅馬帝國に向てアールャ人種に對する多年の復讐を行へり。彼等の勢力はツラン人種に於けるが如く單純なる暴力に非ず、實に高尚なる宗教的熱誠に本けるものなりき。『コラーンか、年貢か、然らざれば劍か』。彼等は是方法によりて屢々一世紀間に於て當代世界の大半を征服したり。西は亞弗利加、西班牙、南部佛蘭西、及び地中海の諸島、東は波斯より印度に至るまで、北は小亞細亞以外に亞細亞にある羅馬領、悉く回々教の軍陣に降れり。猶ほゴート、ヴンダル、

北部歐羅巴に於ける大移動漸く靜かならむとするや、玆に三世紀より九世紀に到るまで新にツラン人種の大遷徙興りぬ。是が先鋒たりしものは、嘗て同人種の帝國支那を侵して擊退せられたるフン(匈奴)民族なり。彼等は今や轉じて馬首を西し、亞細亞の中原より歐羅巴に亂入せり。歐羅巴に於けるアールヤ民族の邦土は多く彼等の爲に蹂躙せられ、其足跡の印する所人畜殺され、市邑燒かれ、其殘酷狂暴は烈颱の如し。三百七十五年以後彼等はヲルガ、及びドンを渡りてゴート民族を掩擊せり。東ゴート王國一戰にして彼等の爲に斃され、チュートン民族も亦彼等の爲に驅逐せられ、黑海地方を捨てゝドナウ下流の地より深く歐洲の內地に遁逃せり。フン民族の酋長、アッチラの領地は、バノニア、及びダキアよりボヘミアの境界に及び、遠く今の佛蘭西に到れり。獨りスラヴ民族は歐羅巴東部の藩屬を以て自ら任じ、ドナウ右岸の地に頑强なる抵抗を試みたりと雖も、フン民族の爲に壓服せられて臣を稱せしもの凡そ一百年。羅馬の朝廷をして一時其名に震慴せしめたり。

ツラン人種中、フン民族に次ぎてアールヤ人種を苦めたるもの尙ほアヴール民族とマジャール民族とあり。殊に後者は九世紀の末より凡そ一世紀の間、西は佛蘭西よ

人種あり。是二人種は人類最古の文明を構成して、之を希臘、羅馬のアーリヤ人種に傳へ、希臘、羅馬是を北方歐羅巴の同人種に播布し、茲に歐羅巴文明の根據を確定せり。

ハム人種の文明は埃及と共に終始し、何等の發達を爲さゞりき。セム人種はアッスリアの滅亡と共に暫く雌伏し、ツラン人種は極東に邦せる二三を除きて、尚ほ遊牧漂泊の生活を離れず。獨り歐羅巴に繁殖せるアーリヤ人種の文明は、地利と人和とにより駸々乎として發達し、結で希臘の文藝となり、發して羅馬の武力となり、セム人種の基督教を收容しては其教化をして世界的たらしめたり。當時の世界はアーリヤ人種の勢力に風靡し、チベロ河上の七丘府は、東はユーフラート河より西は大西洋に、南は亞剌比亞の砂漠より北はドナウ河、及び黑海に至るまで、絶對的權力の所在として向仰畏敬せられたりき。是時に當りてセム人種は未だマホメットを得ず、後年馬をエルべに飲ましめたるツラン人種は尚ほウラル・アルタイの寒地に其黃羊を擁して眠りたりき。是をアーリヤ人種全盛の第一期となす。

然れども、羅馬帝國の主權漸く衰へ、ゲルト、チュートン、スラヴ等の諸アーリヤ民族の

かすべからざるものあり、何ぞや、人種競爭是れなり。アールヤ、ツラン、及びセムの三人種は、歴史の或部分に於て各々自家の主權の爲に優勝を中原に爭ひ、一起一伏、我れ彼を斃さずむば彼れ我を斃し、世界は年を追ふて遂に一人種の統一に歸せむとするの傾向を暗示せり。今や極東の雲行日に益々急、邦を茲に樹つるもの百年の將來を想へば、夜將に眠を成さゞらむとす。然れども人文史上より是を見る時は、東海の風濤は遂に一たび天に滔らざるべからず、其の來るや既に久しく千年の歴史あり。乞ふ吾人をして其徑行の大勢を述べしめよ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

試に東半球の地圖を披きて歐亞兩大陸の中心を指せ。南は葱嶺を限り、烏拉、アルタイ兩山脈の間に包まれたる、所謂キルギツの廣原は、實に世界歴史の源頭なり。ツラン人種は烏拉アルタイの間より東南北の三方を指して更に四派に分れ、ティツングス、マレー、タムール、フヰンの諸民族を爲し、支那朝鮮日本の諸國を建立せり。アールヤ人種はオクスス河の溪谷を出でゝ、南は波斯印度に入り、西はスリアより歐羅巴に瀰蔓せり。其の西南亞細亞及び亞弗利加に止れるもの、セム及びハムの二

人種競爭として見たる極東問題

人種は歷史上の一大事實なり、人文の特色は是人種的差別に本くもの多し。各人種の生理上及び精神上に於ける先天的特性が外界諸般の勢力と交貫して而かも其異彩を失はず、玆に洋の東西、時の古今に複雜多樣なる人文を經緯せるの事實は、歷史上最も注意すべしとなす。抑々是等人種は一元か、將た多元か、又は將來に於ても亦永く其差別を維持し、到底渾融の望無き者なるか。是の如き疑問は吾人の玆に考察せむと欲する所に非ず、唯歷史的事實として吾人の認識し得る範圍內に於ては、人種は數多の人種として現はれ、各々其人文史上の職能を異にせり。此點より歷史を通觀する時は、偶然なる外部の事情より生起する幾多の差別を超越し、各國民族を通じて人種の異同より起る所の精神的團結と分離とを認め得べし。歷史的活動の大主腦はた大把柄は實に是に存す。

渾圓球上邦を成すもの何ぞ限らむ。其盛衰興亡萬千同じからず、素より一規にして律すべからざる也。唯古今東西の歷史を大觀し來る時は、一事の確として動

き所以を認識するも、而かも二三の類似推測に於て其の然る能はざるが如き事例を見たるの故を以て、其の確乎たる認識を消却せむと務むるは、極めて怯懦なる所爲なりと謂はざるべからず。今の學者が其所信を公言して一世批議の衝に當るの勇氣なきは、畢竟其識見の短少と共に、是意志の薄弱なるに依らずむばあらず。深く恨とすべきなり。

以上は國家至上主義に對する吾人の見解なり。今日吾人の主義に就て疑を挾むもの多し、然れども其の難問する所、多くは幼稚淺薄、未だ十分吾人の意見を了解するに及ばず、況むや批判するに於てをや。夫の倖々の辯を弄するもの、須らく更に氣を平にして吾人の說に聽くべき也。

最後に一言注意したきは、國家至上主義の見解に關して吾人と竹內楠三氏一派との間に多少の差違あることなり。然れども是れ國家てふ事實に就ての說明の差異にして、實踐道德上、國家至上主義を是認し、主張するの點に於ては、毫釐も逕庭なし。是れ吾人が竹內氏と共に日本主義唱導者として其運動を一にする所以なり。

（卅一年一月）

ふ如き事實有りとするも、是單一の事例に基き、所謂類似推測の方法に依りて個人より家族、社會、國家にまで漸次其統一の範圍を弘めたる同一の傾向は、幾多國家をして更に一世界王國、若くは人道と云ふが如きものに合體せしむべしと斷言するが如きは、甚だ謂はれなきものなり。元來論理學の所謂類似推測は、推度法中の最も薄弱なるものなり。内部に何等因果もしくは倶存の關係を認むること能はず、唯他の場合に於ける類似事例によりて是場合亦然るべしと推測するものに過ぎず、故に是立證方法にして多少の依信を繫任せむが爲めに、是の如き類似の事例の非常に多數ならむを必とす。而かも如何に千萬の類似事例を萃め得たりとて、今立證せむとする事實の中に、或包有的即ち内面的必至の理由の發見せられざる限りは決して客觀的確實を稱するに足らず、故に千萬の類似あるも一除外例によりて打破せらるゝを得べし。今や難者は是の如き類似の僅少なる事例を根據として國家至上主義を否定せむと擬す。論據の薄弱なる、或は俗目を瞞着するを得むも偶々以て識者の一嗤に資せむのみ。

元來自己は其の當に然らざるべき理由を發見する能はず、却て其の當に然るべ

示して極めて明晰なりと思惟す。夫の世界王國と云ふが如きは、時務に疎きものの空想なること勿論なり。且、今日倫理學者は何れも國家を以て人類集合生活の上に於て至上の形式なることを認めざるは無し（尙是事實上の說明は拙著提要世界文明史に續きて近き內に表はるべき拙著十九世紀文明史中に詳述せんことを期す）。

第二の批難は前者よりも一層淺薄なる者なり。是說にはおのづから二個の預想を含む。第一、現在の國家體制外に他の體制の興起すべきことを想はしむるに足るべき一個以上の歷史的事實の存在、第二是の如き事實の存在を根據とせる類似推測是れなり。吾人は事實問題に於て第一の預想を否定し、論理問題に於て第二の預想を否定す。

人類の集合生活は一見すれば個人より家族、家族より社會、社會より國家と順次に發達し來りたるが如く見ゆるも、實は初めより國家てふ理想形式に向て進み、其人文の發達は即ち國家體制の進步に伴へるものなり。是れ素より事實解釋法の差違なりと雖ども、國家體制を以て人類の歷史と共に其發達を共にせりと觀むかた、遙に客觀的事實に稱へりと謂ふべし。良し又假に百步を讓りて眞に難者の云

第一は事實問題なり、而して其批判は全く包有的(イマネント)なり第二は類似推測(インフエレンス、バイ、アナロジー)にして其批判は全く超絶的(トラセンデント)なり。吾人は是二者の何れをも虚僞且淺薄として排拒するもの也。

第一の批難に對しては、吾人は全く(假設的)難者と反對の事實を認む。吾人の見る所を以てすれば史家の所謂最近世に於ける國家體制、及び其權能の發達は實に驚くべきものにして、百般の文物は盡く國家的意義を有せずむば已まざらむとす。玆に國家的とは國家の主權に對する服從と其發達に對する利益とを意味す。案より人文の進歩によりて人類共同の利害は益々進歩し、人道の名によりて幾多の事業は爲されたり。然りと雖も其實際的權能の所在は徹頭徹尾國家にあり。平等博愛的事業は、國家體制の完備に伴へる必然なる倶存的現象と見るを妥當とす。政治史家が十九世紀の三大傾向と稱する所の、人種國民的(レースネショナル)傾向、中央集權、及び立憲政治は、是國家生活が政治の上に發現したる者に外ならず。這般の事情を叙せむには厖然たる一大冊を要すべきを以て、玆に詳にする能はずと雖ども、今日世界の大勢は何れの事物に於ても國家體制が究竟の集合生活の形式なるべきことを指

論證を他日に期せむ。若し夫れ(三)の疑問に對しては、聊か辯明の急を要するものあり。

現在及び過去の事實に徵すれば、國家は人類集合生活の至上形式なることを認むる人も、往々にして將來に於ても亦然るべきや否やに就て疑を挾み、是點より國家至上主義を拒否せむと務むるものあり。是拒否の理由に就てはおのづから二説の提案せらるべきを見る。

第一、國家は現に人類生活の至上形式たるに相違なきも、今日仔細に人文發達の傾向を揣摩すれば、國家以外の他の更に高上なる形式に向て趨走するを見る。故に今日に於て國家至上主義を唱ふるは、故らに社會過去の狀態を保存して將來發達の新局面を壅塞するものには非ざるか。

第二、良し社會の現狀に就ては現在の國家以外に何等人類生活の新形式の將來に興起すべき理由を認識し得べからずとするも、過去に於ける歷史上の變遷によりて推測する時は、必ずや是が如き新形式の興起すべきものあらむ。故に國家至上主義を唯一なる方法目的（ミツテルツエツク）として推奨するは不可なり。

(一) 國家は人類集合生活(ゲザムトレーベン)の至上なる唯一形式なりや。

(二) 更に換言すれば人類幸福の統一的司配を有する集合生活の形式は國家以外に是れ無きか。

(三) 人類集合生活の至上形式は過去現在の歴史、及び事實に徴すれば國家なり。然れども將來國家以外に、他に更に高上なる集合生活の形式の組織せらるべき理由ありや。

に歸着すべし。更に是を歴史的方面より觀察して左の疑問となすを得べし。

吾人は(一)及び(二)に對しては無論然りと答ふべし。是證明に歴史的と現實的との二あり、歴史的には、世界文明史の上より人類集合生活が國家體制の發達に向て進行したる事實を明にし、國家が人類社會の實際的勢力の把持者として一切文物を統一し、司配し來りたる傾向を詳にし、現實的には現在社會の包有的批判により て、人生幸福の實現と國家てふ集合生活の形式との間に、必然離るべからざるの關係あることを證するにあり。想ふに苟も歴史及び人生に着眼するものならむには、是二個の事實は必ず承認せざるべからず。吾人亦是短論文に於て曲盡せず、其

らるべき者なり。而して現在と其實現との間を連結する所のものは所謂方法是れなり。方法は素より目的の研究より打算し來る、然れども吾人の行爲に對する上に於ては實に實際的の權能を有す。而して是方法にして唯一無二ならむには是の如き權能は當に至上なるべし。目的が時として吾人の心に一定の動學的效力を有する如く見ゆるは、實は目的自身にあらずして、是目的實現の爲に打算し來られたる方法の權能の現はれたるなり、是意味に於て方法は實際的目的と稱するを得べし。ハルトマン氏が別ちたる方法目的（ミッテルツエック）と究竟目的（エンドツエック）とは、正に吾人の今說きつゝある所の方法と目的との關係を文字の上に釋了せるものと謂ふべし。國家至上主義は究竟目的に非ずして方法目的なり、夫れ唯方法目的なるが爲に茲に至上主義なり。是の如く論斷し來れば是主義に對する群疑は一に恢々然たらむ。

以上說明と主義との區別を明にして、國家至上主義が、其名の示すが如く、主義にして說明に非ざるを辯じ、而して其の當に至上なるべき所以は唯一なる方法即ち方法目的なるが爲なるを說けり。故に吾人の論斷には尙ほ一個の假定あり。即ち是主義の唯一なりとの證據如何と云ふことと是れなり。是疑問を簡約すれば、

的現象の說明を能くせざることは素より當然のみ、實行と說明と其範疇に於て異なればなり。國家至上主義を說明的原理と思惟する輩は、先づ自ら這般の問題に對する自己の無能力を呈露し來る。

是主義が實踐道德の上に於て至上の權能を有すべき所以は主義の唯一なるものなればなり。人生の幸福を實現する方法にして同時に二以上あり、而して是二以上の方法にして効力に優劣なしとせば、吾人は其の何れを撰擇するも自由なり。是際特に其一を至上とすべき謂はれなし。然れども若し是方法にして唯一無二ならむには是れ當然至上なるべき方法なり。何となれば依て以て人生の目的を達すべき方法にして唯一ならば吾人は專念一向是方法に依傍するの外、行爲の規準とすべき者無ければなり。是塲合に於ては名は即ち方法なりと雖も、實行上目的と同等の價値を有す、ハルトマン氏の所謂方法目的 (Mittelzweck) と稱すべきものなり。是方法目的の觀念は國家至上主義の至上なる所以を了解する上に於て必要なる條件なり。

蓋し目的なるもの、其概念の要求する必然の性質として、現在以降に於て實現せ

らず。人生の幸福てふことは個人說もしくは世界說によりて說明せられ得べし然れども是によりて實現せられ得べからず。家屋の性質目的等の說明は直に移して是建築の方法となすべからず。說明を移して直に主義となさむと欲せば是に先ちて歷史的發達の一契點たる當代の社會を根蒂より打破せざるべからず。是を以て是の如き大膽無謀なる主義は所謂啓蒙時代にありて僅に行はれ得べきのみ。若し夫れ個人說と世界說との間に立ち、一個否唯一の實踐主義として奉行すべきものは國家至上主義のみ。

國家至上主義に對するもろ〱の誤解は、多く是說明と主義との差別を沒了せるに起因す、吳々も吾人の注意したきは、是主義てふことの明瞭なる解釋なり。夫の道德的意識の全範圍に於ける一切現象の說明を以て國家至上主義に要め、而して其の能くせざるを見て、是れ立せられ得べからずとする輩は、須らく退て吾人の言を三思すべし。國家至上主義は道德の究竟原理にあらずして究竟主義なり、帝國憲法が國家至上の法制なると同一の意味に於ての道德的至上主義なり。當眼の實務に對して吾人の行動を規定する主義は時と處とに限られざる一般の道德

々の人を外にして是あること無し。然らば則ち一切の幸福は其内容は如何にあれ、凡て個人の幸福なり。是の如く觀ずる時は、幸福の說明は個人說(主義に非ず)となるべし。良し又或一派の學者の說に隨て、國家に人格あり、且其幸福を意識する頭腦を具備せりとするも、個人たるものは自己の幸福と關係なきことを知りつゝ、國家の幸福の爲に盡力すべき謂はれも無し。是主觀的說明によれば個人說(主義に非ず)は慥に立せられ得べし。又是を客觀的に觀ずる時は、幸福は個人の幸福なるに相違無きも、是幸福の內容を檢すれば決して個人の間に終始するものに非ず。近き例は國家衰亡して尚ほ獨り幸なるものは無かるべし、故に其幸福は家族、社會國家及び一般人類の幸福と相關聯すべし。げに自愛を擴充して一般の人類にまで及ぼさむとするは吾人の究竟の理想なればなり。是點より見る時は幸福の客觀的說明は世界說(主義に非ず)となるべし。

是の如く、人生の幸福は說明の方法によりては、或は個人說となり或は世界說となる、理論としては共に是なり。然れども是說明を以て直に主義となし、所謂個人主義と所謂世界主義とを唱ふるものあるに到りては大に謬れりと謂はざるべか

汎立せられたる主義は、一般理義の説明と大に其性質を異にす。主義は現下當眼の事物に就て吾人の行動を規定す。而れども説明は只斯の如き行動の全系に就きて其の理義を指示するのみ。指示せられたる理義は如何に精細なるも、歳時方處の規定無きが故に、目前當路の實務に對して何等適切の訓誨を授くること無し。是の如き訓誨は一に主義の與ふる所なり。故に主義は一般の説明と目前の事實との交渉せる邊りに生じたる應用原理なり。故に是三者は互に函數的關係を保持せるものと見るを得べし。隨うて主義の不變に必要なる條件は、説明の遍通なることゝ、事實の同一方面に向て同質的の發達を繼續することとなり。

國家至上主義は其名の示すが如く、主義なり、説明には非ざるなり。是區別を明に了解せんには、其の『至上』なるべき所以の理もおのづから明なるべし。若し主義に必要なる一切の所依を離れて人生の幸福を觀せむか、見樣によりて或は個人説とも見らるべく、世界説とも見らるべし。説明としては、何れも一面の眞相を得たるものなり。そを如何にとならば、人生の幸福と云ふもの、畢竟是れを意識するものにとりてのみ幸福なること勿論なるべし。而して意識を有するものは世に個

視せざる限りは、決して立證し得べきものに非ず。國家至上主義は是歴史上の根據に立てるものから、そが如何なる意味にて至上主義なるかを説明するに非ざれば、大に淺見者流の誤解を招き易し。今の是主義を批難するもの、若し心を虚にして吾人の是より説く所に傾聽せば、甘じて非を遂ぐるものに非ざるよりは、必ずや豁然として悟入する所あらむ。

人生の目的は幸福にあり。國家至上主義は是幸福を實現する方便なり。是方便なるの一事是れ國家至上主義の見解に於て見逃すべからざる要諦なり。世上の誤解多くは是主義を以て人生の目的となすより起る。幸福以外に人生の目的あるべき謂はれ無し。

方便の主義にして、而かも至上なるの理由は如何。世人は是皮相の疑惑に把擒せられて倖々の辨を弄す。吾人は今の批評家の素養に就て恨無き能はず。

國家至上主義は實踐道德の主義なり。人生幸福の性質、理想等即ち道德的意識に關する説明とは全く其範疇を異にす。既に實踐道德の主義と云ふ、人生幸福の内容に就きて仔細の點檢を經由したるは素より論を俟たず。然れどもかくして

り其實現の方法に移るに及びて倫理學は茲に說明的より實踐的に遷る。所謂國家至上主義は是實踐的倫理學の唯一原理なり。

既に國家至上主義を以て實踐的倫理學の唯一原理となす、是主義は人生幸福の實現に關しておのづから唯一の方法ならざるべからず。而して是唯一の方法なる事に就きては、國家至上主義は確乎動かすべからざる歷史的根據を有す。

國家至上主義は是歷史的立證の上に立つ。苟も是主義を否定せむと欲するものは、第一是歷史的立證の全部に就て左の反證を擧げざるべからず。

一、人類過去の歷史は是を集合生活の點より觀察すれば、國家的體制の發達に非ざること。

二、歷史上、國家的體制の發達は人類幸福の進步の唯一なる所依に非ざること、換言すれば人類幸福の進步は國家的體制の發達と必然なる因果もしくは倶存の關係を有せざること。

三、將來人類の集合生活は、必ず國家以外の形式に依るべきこと。

吾人を以て是を見れば、以上列擧したる三ヶ條は、文明史上、苟も歷史的眞實を蔑

國家至上主義に對する吾人の見解

吾人が日本主義の一唱道者として國家至上主義を執れることは既に數々說きぬ。今や世上往々にして吾人の說を誤解するものあり。是れ說き得て未だ明ならざるが爲なるか、讀むもの解するを欲せざるが爲か、抑も又預め成心を挾みて他の言意を忖度するが爲なるか。兎にも角にも吾人は玆に一言の要あるを見る。希くは偏に己を立せむが爲に人に聽くもの、及び他を解する能はずして生中の批判を喜ぶものは、吾人の文を讀むこと勿れ。

吾人は國家を以て至上の權力と認め、其利福を以て道德の規準となす。是れ何が爲なるか、人生の幸福は獨り是によりて圓滿なるを得べければなり。

人生の目的は幸福にあり。所謂道德なるものは是幸福を實現するの方法に外ならず、幸福は形式上詮する所、自我の滿足なり。其內容如何に就ては、說明の方法殊なるに隨て幾多學說の異なるあれども主觀的に見て自我の滿足てふ一事は、一般道德の理想と云ひ、極致と云ふも敢て不可なかるべし。是幸福の內容の說明よ

幸にして權勢の爲に其所信を二三にするものあらば、大に悲むべきなり。然れども利器は是を用ひて其効を見ること無くむば、其利器たる所以の實遂に何處にかある。敵人前にあり、吾れ尚ほ其害を恐れて利刄を振ふ能はずむば、匣中の寶は吾に於て瓦礫と何ぞ擇ばむ。吾人は今の濟々たる學者をして碌々瓦礫に終らしむることを欲せざる也。

（卅年十二月稿）

枝葉に走りて、其根幹に歸ることを遺却し、人生に遠かるを以て却て高しとなし、遂に世人をして學問是れ閑事業なりとの妄見を抱かしむ。嗚呼是れ誰の術ぞや。今や方に學者各々自ら其天職を自覺し、其末を究むるもの、尙其本に歸るべき時に非ずや。實業實務に其の學を應用するを俗化として卑むことの毫も謂はれなきを認識し、濶大なる胸襟を披拂して共に俱に人生問題の解釋に協力すべき時に非ずや。吾人は所謂俗化を以て今日學者の品位及び價値を保たむが爲めの最大急務なるを絕叫して敢て憚らざる也。

或は謂はむ、學者にして社會の實務に關涉せむか、名利の爲に其說を枉げ、曲學世に阿るの弊あるを如何と。今の學者が政府の官吏となるを難ずるもの槪ね是事を言ふ。何ぞ其說の笑ふべきや。萬一是の如き事あらば、是れ是の如き學者の罪のみ。噎死するものは食を恨むべからず。時に是弊あるが爲に、學者は實務に關すべからずとするの理何處にかある。學者の知識は學理上の根據に立つ、其確信と觀察とは必ずや常人に超絕するものあらむ。更に實際の一面に習熟して、其學を適用せば、事業の擧がる亦常人に倍するものあらむ。畢竟學者は天下の利器不

運動に加はるを俗化と稱するを得べくむば、吾人は實に一切學者の俗化せざるを憂へむなり。俗の一字是を實際的の義に解し、而して學者の俗化を忌避するは、畢竟學者の天職に對する我國人の根本的誤解に本づく。學者と學問を尊崇するは吾人素より異議なし、然れども試に一度び是の如き尊崇を價する所以の理に想到せよ、社會に寸功なく、國家に寸益無きもの、其物類の如何に關せず、何處に『尊崇』すべき理由かある。夫の一面に學問學者を重して、而して一面に實利實益の業務を卑み、其事を俗事と稱し、其人を俗人と呼ぶ、是の如きは其眼識の幼稚、寧ろ憫笑すべきなり。學理に對して實際を俗化と呼び、學者に對して官吏を俗人と呼ぶ、是れ名目の左右、吾人何ぞ是を爭はむや。唯々是の如き俗化と俗人とを輕蔑するの傾向に到ては、社會國家の爲に斷々乎として其虛妄を排斥せずむばあらざる也。

嗚呼久しい哉、學者の本分の誤解せられたるや。古の人は其學を以て其行を定めたり。人生の實務を離れたる空理は其の務めて忌避したる所なりき。彼等は一切知識の統一と効果とは、人生問題の解釋に存することを確認したりき。吾人を以て是を見れば、是れ眞に學者の本分を會得したる者なり。今の學者は徒に其

べからざるか。假りに是說を爲すものゝ言によりて一個の學者を想像せよ、畢竟是れ死學者に非ずや。

學びて而して用ふる所以を知らず、知りて而して行ふ所以を覺らず、學者の品位、學問の獨立は是の如くにして初めて保ち得べきものなるか。然らば則ち品位と獨立とは獨り死學者に於て望み得べき者なるか。嗚呼天下の學者を誤るものは必ずや是種の俗說ならむかな。畢竟品位獨立とは何にぞ。其所信を以て社會を率ひ、其所學を以て蒙昧を導くを外にして何處に其品位と獨立とありや。實際世界と隔離し、獨善自尊の生活を營まば、其學他の累す所とならざるべし。然れども其存在の意義は何處にある。若し強て是を獨立と云はゞ、是れ寂滅的獨立なり。世界は是の如き學者の生死によりて毫も其利害を感ぜざるなり。一物生存の價値は其所屬團躰に貢献する利益の多少に依りて量るべし。吾人は現實世界に關與せざる學者を死學者と叫ぶ、抑々謬れるか。

且夫れ今の人の大々的誤解は實に俗の一字にあり。彼等は學者の俗化を難ず、所謂俗化とは何の意ぞ。若し大學敎授の官吏となれるを俗化と呼び、學者の社會

が如くなる能はずと雖も今の時に於て是方向に對ひて一大振揖と一大奬勵とを呼號せむことの必ずしも不急の事に非ざるを信ずる也。

屬者說を爲すものあり曰く學者は須らく俗流の表に超然たらざるべからず學者の品位價値是に存す。夫の學者にして社會國家の實務に交涉するものは學者の品位と價値とを捨て好で名利の濁流に投ずる者に非ずや。是れ學問の獨立と神聖とを瀆するものに非ずや學者の務めは專念一向其の志す所の學に從事して盡日尙ほ足らざるにあり何の遑ありてか俗流に棹し俗務に關るを得べきや。夫の身大學教授の職にありて傍ら行政立法の官吏となり或は社會實際の運動に加入するものは學者の天職を知らざる者のみ。學問の獨立如何ぞ是の如くにして支持するを得べきと。

吾人はかゝる俗說の今日に行はるゝを悲ますむばあらざる也。學問の獨立と云ひ學者の品位と云ふ誰か是を希はざらむや。然れども是の如き獨立と品位とを保たむが爲には學者は俗流の表に超然たらざるべからざるか。大學教授は政府の官吏となるべからざるか。將た又た一切の學者は社會實際の運動に加入す

ありき。然れども尚ほ人生實際の疑問に對し、一定の意見を以て一世の師表となるべきものを抱懷せりき。是れはたアレキサンドロスが帝王の威を屈して草莽赤裸の一犬儒を訪ひし所以に非ずや。時經ち世遷りて、人智漸く開くるに隨ひ、學問と實際と漸やく相隔離し遂に漸やく相反對するの勢を示し來れり。一藝一學の士、事に其專攻の部門に從ふもの、精一深く多とすべきものありと雖も、而かも毫も實際人生と毫も爲すなきもの多きに到りては、寧ろ學問の弊に非ずとせむや。醫學者が病理學を研究し、微を顯はし幽を闡き、錙分銖析、造化の妙工を看破せむと擬するは何が爲ぞ。畢竟其研究の結果を疾病治療の上に應用すること能はずむば、其價値の大半は玆に失了せられたりと謂ふべきに非ざる乎。所謂知識慾の滿足は素より人生の幸福に缺くべからず、然かも知識慾の滿足以外、毫も人生の實務に益する能はずと謂はゞ、吾人遂に學者なるものゝ實世界に用少きを悲まずむばあらず。素より今の世は分業の時なり。人間知識の範圍を以て言ふも、今は遂に古の比に非ず。是全般の所知を了して之を實際に施さむと要す、吾人素より其希望の易からざるを認む。知行合一を以て今の學者に望む、素より古の學者に望む

是を心に解せずして是を口にするものは、是れ形骸ありて而して生命なきなり。解する所ありて而して信ずる所無きは、是れ生命ありて魂魄無きなり。今の學者生命あるものの甚だ多からず、況んや魂魄ある者に於てをや。若し知行合一は魂魄あるものに於て初めて望み得べきを知らば、吾人又焉ぞ今日學者の茫々然として爲す所無きを怪まむや。

古の學者は其觀察の廣、思索の深に於ては、素より今の學者に及ばず。然れども吾人は知行合一の一點に於ては今の學者遂に遙に古の學者に及ばざるを慨かずむばあらざるなり。孔丘氏は徒に倫理の學說を說きしものに非ざりき、耶蘇、釋迦は徒に宗教の教理を論せしものに非ざりき、希臘印度の古哲學者は徒に宇宙人生の抽象思索に耽りたる者に非ざりき。彼等は己れ等が說きし安立道義の原理を以て啻り其知識慾の滿足に供へたるのみに止らず、直に取て以て、實際人生の主義となしたりき。彼等の主義は實に其生活によりて體現せられ、彼等の生活は其主義によりて發表せられ、二者の間に形影相離るべからざるの關係ありて存しき。素より彼等の中には、其天分の自ら其主義を行爲の上に現はすことを容さゞる者

能はざる所なり。苟も是を爲すには一世批議の衝に當り、毅然として自ら立つの覺悟あらむを要す。さもあらばあれ、眞正の學者は事遂に是に出でざるべからず。

知識、是れ畢竟何爲するものぞや。彼の前人の遺型に跼蹐し、其遺說を踏襲するもの、世は是を學者と言ふ、然れども是の如き學者はた是れ何爲るものぞ。彼の一篇を採り、此の一畫を剪り、補綴餖飣、以て眞理是に了すと稱するもの、世は是を智者と云ふ、然れども是の如き智者はた何爲るものぞ。夫の己を虛にして偏に他の意說を容るゝもの、むしろ活書僮に非ずや。古聖哲の言、三尺の童子尚ほ或は是を辨ずべし、然れども誰か三尺の童子を古聖哲の如く敬するものあらむ。何にぞや、他なし、彼は其の然り、且然らざるべからざる所以の理に徹底して而して其言を作したるもの、此は唯茫然として他の口吻を踏襲するに外ならざればなり。今の人古今東西の知識を萃め、博學多聞を以て世に誇る。然れども吾人は書典と字彙とを有す、是の如き學者の要を見ざるなり。學者の貴むべきは、中心自己の信ずる所を以て、小にしては是を身に行ひ、大にしては是を國に施し、一世の師表となりて夫の汶々たるものを救濟するにあり。あはれ今の學者は果して是覺悟ありや。

學問死活辨

（初め「死學者」と題す）

學ぶ所を行ひて以て宜きを得れば、學初めて其充全を稱すべく、行ふ所學に從て戻らざれば、行初めて其適切を誇るべし。知行合一は畢竟學者究極の標的たり。

天下の學者何ぞ限らむや、而かも其行に於て茫々然として見る所少きは何にぞ。所詮學者の信ずる所堅からざればなり。知る所以て行ふ、一見甚だ尋常容易の事なるが如し、然れども是れ學者としての最大難事なり。行爲は常に責任と伴ふ、一個人として社會國家に其人格の地歩を占得し、其生存の意義を明かにする所以なればなり。

其所信を公白し、嶄々然として依て以て其一念を貫徹す。是れ事に處して首鼠兩端を持するもの丶爲し能はざる所なり、機に臨みて狐疑逡巡するもの丶爲し能はざる所なり、私己の利害を秤量し勢權に依傍するもの丶爲し能はざる所なり。抑又其然る所以の理に徹底し、中心より其眞と義とを會得したる者に非ざれば爲し

告す。人生行爲中尤も陋醜なる者の一は、失心の死なり、狂亂の死なり、卑怯の死なり。或は償ふ可らざるの罪過を犯し、或は義務の重荷に堪えず、或は私情に刺激せられ、一死以て現世の繫累を脫せむとするが如きは、社會國家の倫理上許す可ざるの大罪惡たり。死を以て一切罪過に對するの辨解なりと思惟し、更に一層重大永久の罪過を加ふる所以なるを知らざるもの、其愚や則ち憫むべしと雖も、其罪や恕すべからず。社會は其私情に驅られて公義を顧みず、婦女子の涕涙に咽びて大丈夫の制裁を加へず、彼れ死せり、其罪恕るすべしと云ふ。あゝ是の如くにして誤て風を成さば、耐持堅忍、以て最後の義務を遂行するの美德は却て怯懦として誹誣せられむ。我邦人由來死を輕ず、國家の强力は實に是死を輕ずるの士風に歸因するもの多とし雖も、以て平時の則となすに足らず。吾人は是の死を恐れざる氣質の中、更に義務を重ずるの習性を馴致せむことを欲す。夫の慷慨氣を負ひ、謂れなくして匕首を弄するの輩に向ては、社會は須らく相當の制裁を加へざるべからざる也。

(三十年十月)

救濟の道を求め得たるが如き婦女子の輩は、實に薄志弱行の甚しきものにして、當然怯懦卑屈を以て批難せらるべき者たり。然どもあらゆる自殺は必ずしも然らざる也。且夫れ人は死すべき時に死せざれば、却て其生あるを悔ゆることあり。想ふに世間當に死すべくして而して死し得ざるもの果して幾何あるべきぞ。自殺を卑怯なりとするものは、漫て自殺をだに爲し得ざる卑怯漢の更に數多きを考へよ。吾人は淫を溺で生きるものが操を立てゝ死するものよりも、幾何か勇敢なるやを知る能はず。夫の徒に社會國家の禍となりて、而かも尙ほ其の蠢爾たる生命を維持する輩をして、自力によりて爲し得べき最高なる道德的行爲の何物なるかを覺悟せしむるは少くとも彼等の志操を鞭撻し、遷善力行の道に就かしむるに於て必要ならずとせざる也。

然れども死は之れを再びすべからず。吾人は一方に於ては生命の絕對的に貴重なる者に非ざるを信じ、他方に於ては自殺の必ずしも倫理に反かざることを斷言するを憚らず。然れども吾人は同時に、世人が是一大事件の決行に對して如何に至大の責任を帶ぶるかを自覺し、其措置の極めて愼重、極めて公明なるべきを勸

全なる意識に本くものならむには、之れ嘗に罪惡として批難すべきものに非ざるのみならず、却て一個の道德的行爲として是認せらるべき者たり。

げに人は如何なる場合に於ても其生命を維持すべき義務あるに非ず。若し世界中の何人も我存在の價値を認めず、却て我死滅によりて幸福を感ずるが如き場合に於て、吾は是のあらゆる苦痛を忍びて尙ほ且つ是世に生存らへざるべからざるか。是時に當りて自殺は決して何人に對する義務を缺如する者に非ず、されば一の罪惡に非ずして、單に一個の不幸なる生靈の不幸なる最後に過ぎざるべし。基督を賣りたる後イスカリオテのユダは何が爲に長へに生存せざるべからざるか。

若し人あり、一切義務の商量上、自己の死は自己の生よりも却て國家社會に有益なることを確認し、而して是の確認に本きて自殺を決行したりとせば、是れ實に志士仁人の行爲として賞讃せらるべきなり。世には怯懦を以て一切の自殺を嘲罵する者あり。如何にも夫の失戀に泣き、不遇に泣き、自己消化器の不良に原因する一般感覺の不快を以て、厚顏にも社會人生の缺陷に歸し、鬱悶憂憤の餘り、一死厓に

世界を離れたる一自然物に外ならざるべし。是時に當りては自己に對する義務と云ふが如きは全く無意義の文字ならずや。

故に自殺が道德上の價値を有する唯一の制約は、對他の義務より生ずる關係に存すべきことは勿論、更にそが罪惡と爲り得る條件も、爲り得ざる條件も、共に玆に存すべきこと明けし。

吾人の生活は所詮義務の連鎖なり。家にありては父子、兄弟、夫妻、主僕たり、社會國家に立ちては公民、臣下たり。其他師資、友朋、隣保、親戚に至るまで、分に應じて各々其の盡すべき義務を有せざるなし。一身を以て萬境に對す、其の遂行すべき業務は生を累ぬるも足れりとせざる也。もし吾人の生活にして一定の歲時方處に制限せられず、其能力はた圓滿ならましかば、吾人希くは平等博愛を以て實際の主義とせむ。而かも有盡有漏の身神には、素より是事あるを得ず、是に於てか義務の大小に隨て行爲に先後と輕重との差別あり。是に於てか道德は直觀のみを以て完きを得ず、良心は敎育を須要とし、道德的生活の一部は考察的生活となるに到る。夫の自殺と云ふものにして、若し一切義務の商量上、自己生存の利益を認めざる健

基督教徒、若くは基督教的倫理學者は自殺を以て神に對する義務を缺くものと說く。是の如き說は一笑にだも値せず。元來所謂神たるもの一の迷信ならば、是の妄想の假設物に對して、實在者たる人間が何等の義務を有すべき筈無ければ也。よし假りに是の如き妄想を眞なりと許すも、吾人自ら神の所生たる吾人の生命に關係するは不敬の所爲なりとの自殺を難ずる同じ理由によりて、自生をも罪惡とせざるを得ざるべし。人は衣食住によりて自己の生命を繼續し、疾病あれば藥餌醫療を加ふ、之れ即ち神の支配せる生命に干渉するものに非ずや。もし生活を自然の動機なりと謂はゞ、均しく自殺をも然りと謂ふことに於て百千の例證立地に辨ずべし。

又自殺は自己に對するの義務を缺くと說くものあり。然れども自己に對する義務とは所詮自家撞着の概念ならずや。一切他を離れて自己なるものの倫理學上果して何等の意義を有し得べき乎。由來義務とは對他の概念なり。吾人が自己を修むるの義務ありと思惟するは、之れ自己が他に對する義務を遂行するの必要より起れるもの、苟も他に對して何等義務を有すること無くば、自己は全く道德の

自殺論

行ひ志と違ひて望を前途に喪ふ時、或は世事の非なるを慨きて骯髒悲憤の情に勝へざる時、或は垢を含み嘲を忍びて世に立つ能はざる時、人往々自ら天命を裁して其生を絶つ。洵に悲むべき現象なり。廉恥を尙び氣慨に富める吾國人の間には殊に此現象の繁きを見る。

自殺は必ずしも惡しきことに非ず、隨分時と場合によりては却て生あるを悔ゆるも及ばざることあるべき也。されど苟も人生一切の義務を拋却し、斷絕して、尙ほ且其の罪惡たるを免れ得むが爲には、其制約として如何なる事情を須要とすべきかを考へざるべからず。一時の氣勢に驅られ、前後の分別無く、一向に死を急ぐが如きは、深く戒愼すべし。又斯の如き自殺に對しては社會は區々たる憐憫の私情を捨て公義公德の名によりて斷々乎として最も嚴重なる制裁を加へざるべからず。

然らば如何なる場合に於て自殺は道德上の罪惡たるを免るべきか。

つ。國民精神の統一に對する日本主義の責任實に茲に存す。

（三十一年七月）

最も自然の結果にして、吾人唱道者の初めより豫期したる所なり。基督教は勿論、從來國家主義と盲目的に一致し來りし佛教も、退嬰保守主義の儒教の一部も、共に其の攻擊する所となりたる等、一部の批評家より詭激の評を受けしも決して怪むに足らざるなり。實に盲目不條理なる平和は日本主義の希望する所にあらず。建國の理想を實現せむが爲めに國體民性の二大主腦によりて一國の道德主義を確定せむと欲するものは安ぞ憒々者流の區々の反對を顧慮するに遑あらむや。吾人にとりて研究の態度、時としては戰爭の態度なり。是の如きは國民精神の統一上、萬已むを得ざるなり。

以上論じ來りたる所によりて、憲法、勅語以外に於ける日本主義の職能おのづから明かなるものあらむ。今日政治上の大綱は憲法によりて統一せられたり、教育上の本領は勅語によりて明にせられたり。然れども政治、教育は國民思想の全部に非ず、寧ろ其表面上の一現象のみ。國民的意識を根柢より統一し、是の憲法と勅語とに適應するの國民精神を陶冶するは即ち是れ日本主義の本分に非ずや。國家の發達は民心の統一を須要とす、統一は主義を預想し、主義は國體と民性とに待

無く時の古今に隨て褒貶の意を寄すること無かるべし。是の公平無私なる撰擇によりて從來の國家主義の方法上に一改革を遂げたるは、明治思想史上に特筆大書すべき事實なり。抑々日本主義以前の凡ての主義は一個の獨斷の上に立てり。獨斷とは何ぞや、洋の東西、國の內外によりて其取捨を決したる事是れなり。精しく云へば、苟も東洋若くは國內に發達したる一切の文物は凡べて本來一致結合すべき性質あり、是に反して凡べて西洋に起源したるものは本來東洋の文物と兩立する能はざるものなりとするの獨斷說是れなり。內國と東洋との文物は何故に一致すべきものなる乎、西洋の思想は何故に東洋の文物と兩立する能はざる乎、將た又世界現下の局面に處して國家の獨立進步を目的とする一國の道德主義は果して斯かる單純なる方法によりて規定せられ得べきものなる乎。――是等の問題は從來の思想界に明かに知られざりしなり。是の幼稚なる獨斷を離れ、內外古今の文物に對して研究的態度を取りたるものは、明治思想史上日本主義を以て嚆矢となす。

是の研究的態度の結果として、日本主義が一時我思想界の平和を攪亂したるは

雲を掀飜せむとするか、同時に黄人種最後の運命を決すべき一大危機の如何に轟々として眉睫の間に迫りつゝあるか、日本の戰捷は如何に外邦の猜疑を增し、如何に國民の前途に一層の險巇を加へたるか。戰勝の祝宴に醒めたる國民は悚然として怖れ、猛然として省みたり。是に於て世界に於ける日本の位置及び運命てふ觀念は國民の間に最も痛切なる疑問として提供せられぬ。日本主義は是疑問に答へむが爲に起りたる者なり。（本巻三九九頁參照）

然り、日本主義は是疑問に答へむが爲に起りたる主義なりき。國民思想は是の日本主義に於て一大進歩を見たり、從來にありて眼局海内に偏依せるもの、今は則ち廣く世界を大觀し、顧みて世界の一國として我が日本を觀察せむとせり。既に世界の一國として日本を觀察し、國家の悠久なる前途の爲に國民的道德主義を規定せむと欲す、是に於て乎廣く知を世界に求め、苟も國體民性の發達に裨益する者は如何なるものをも是れを攝取し、國利民福の增進に有害なるものは如何なるものをも排斥するの覺悟無かるべからず。故に日本主義の眼中には國體民性に基ける國家の昌榮あるのみ。其方法に就いては地の東西によりて好惡の情を挾む

袒して井上氏に反抗すべき地位に在りしなり。啻に佛教徒自身が是矛盾を自覺せざりしのみならず、當時の世論亦是一大滑稽を看過して敢て怪むことを爲さゞりしは、吾人を以て是を見れば、畢竟國家主義の眞精神の未だ了解せられざりしが爲なりとするの外無し。

然らば則ち國家主義の眞精神は何故に了解せられざりしや。人文の進程尚ほ是を許さゞりしことも其一原因なりしなるべしと雖も、畢竟當時國民的意識を覺醒すべき十分の刺戟を缺きたればなり。是時に當りて外部より思ひ掛なき一大刺戟の國民思想を根柢より搖撼したるあり、二十七八年に於ける日清戰爭即ち是れなり。吾人嘗て是事を論じて曰く、

日清戰爭によりて得たる勝利は一部國民の自負心を鼓舞し、排外自尊の病的思想を熾ならしめたるは甚だ悲むべき結果なりき。然ども東洋の局面、世界の大勢は是戰爭によりて初めて國民の間に知られたり。戰に勝ちたる國民は世界に於て最も危殆なる位置に在る國民なることを覺りたり。黃白人種最後の格鬪は如何に西力東漸の千年の歷史を綰ぎて將に絕東の風

恥至極なる人身攻撃をすら憚らざりき。然れども曲辨舞辭は遂に眞理を如何ともする能はず、國民思想の大勢は歐化主義者流の囂々の間に暗移し、事實に於て國家主義の全勝を證明せり。是より歐化主義及び基督敎の勢力頓に挫折して、全く敎育上の根據を失ひ、自家本來の所信を拋却して國家主義の迎合に忙はしかりしは、素より自然の勢なりと謂ふべし。

然れども當時國家主義の眞精神は未だ十分に了解せられざりき。先覺の士に於て素より是事無かりしならむ、然れど思想界の大體に就いて是を視れば、所謂國民的意識は未だ明瞭に覺醒し了せられざりしなり。當時若し國家主義の概念にして明かに會得せられたらむには、敎育宗敎衝突論に際し、本來非國家的たるに於て基督敎に讓らざる佛敎の信徒が、非國家的敎義を痛駁せる井上氏に左袒して却て基督敎を攻撃したるが如き笑ふべき矛盾は無かりしなるべし。實に井上氏が擧げたる四箇條は佛耶兩敎の通性なり。井上氏は特に耶蘇敎に對して立言せりと雖も、實は是兩敎に對して均しく打撃を加へたるなり。當時佛敎徒にして眞に自家を解し、又國家主義の何物なるを解したらむには、言ふまでも無く基督敎に左

(一)耶蘇敎は國家の差別を認めず、是れ勅語が忠君愛國を以て國民道德の大本とせると相容れざる者なり。
(二)耶蘇敎說く所は出世間の道德なり。故に重きを未來世に置き、現在世は塵に未來世の門戶に過ぎずとなす。是れ勅語の精神が全然現世的なると相容れざる者なり。
(三)耶蘇敎說く所は無差別的博愛なり。然るに勅語に示す所の愛は差別的の愛なり。是を以て兩者相容るゝを得ず。
(四)耶蘇敎は忠孝を言はず、啻に言はざるのみならず、往々是に反對する敎義を有す。是れ勅語示す所の克忠克孝の敎と相容れざる者なり。
井上氏は博引旁證、最も銳利明快なる論法を以て是四箇條の旨趣を開陳し、二十有餘の雜誌によりて全國の輿論を喚起せり。是れ實に基督敎及び歐化主義の死活問題を含蓄せる最も手痛き攻擊なりしを以て、苟も基督敎若くは歐化主義を奉ずる者は、筆に口に力を極めて井上氏を駁し、就中高橋某の如きは『僞哲學者の大僻論』と題する一文を雜誌『國民の友』に掲げ、井上氏の論旨を駁すると共に破廉

說いて玆に至れば、讀者或は問はむ、政治思想は憲法是を統一し、敎育主義は勅語是を明にせり。是際夫の日本主義なるものは何の必要ありて唱道せられざる心からざりしかと。吾人是疑問を說明するに先ちて、最近數年間に於ける國民思想の趨勢を回顧せむことを要す。

抑々憲法發布、及び敎育勅語の煥發ありてより、從來の國粹主義は國家主義となり、所謂國民的意識は益々其の自覺の域に進みたり。是に於て乎、平等博愛をいふこと厚くして忠君愛國を說くこと薄かりし歐化主義者流は、自家保存の爲めに其所執を改造して、憲法、勅語の精神に調攝せざるべからず。然れども區々の彌縫は一時の苟安を僥倖するを得べけれども、素より歐化主義と國家主義の間の大々的空隙を補充するに足らず、一大衝突は遂に免るべからざるなり。二十五年の暮に於ける所謂敎育宗敎衝突論は即ち是れなり。是爭論は讀者の記憶せる如く、今の文科大學長井上哲次郎氏が『敎育と宗敎の衝突』と題する一大論文に端緒を發せるものなり。氏は耶蘇敎は勅語の精神に本ける國家主義の敎育と兩立すべきものに非ずとなし、左の四點を擧げて是を攻擊せり。

蓋し政治思想は憲法によりて統一せられたりと雖ども、教育界に於ける歐化主義と國粹主義との紛爭は尙ほ未だ一定するに到らず、佛教、儒學亦た各々一方に割據し人々其の信ずる所によりて行動し、左支右吾、一般國民は殆ど其の適歸する所に迷へるの觀あり。此時に當りて教育勅語の煥發せらるゝあり教育界の輿論是に於て一定し、忠君愛國、擧國一致を以て國民道德の大旨趣として奉體するに到れり。

是の如く見來れば我皇室が國民の中心の國家の支柱たるの事實は愈々明晰なりと謂ふべし。先に維新草創の際、かの五事の御誓文を以て天地億兆に誓はせられ、玆に明治新文明の大方針を示されき。次で西洋心醉者流が民選議院の設立を建白するや、國體の特性、民情の現態を鑑みさせられ、一國の輿論を容るゝと共に、實施の期に先ちて假すに研究準備の年月を以てし、更に期に先ちて欽定憲法によりて我國體の性質を明にし、以て國民の覺悟を定めさせられき。今や又維新以來麻の如く亂れたる德教の爲に、是の千古不磨の大詔を下し賜はり、以て國民道德の大歸趣を知らしめ給ふ。實に至仁至慈なる叡慮の程は我が國民の幾重にも感銘且つ奉體すべき所なり。

き。然れども政治上にありては、未だ俄に歐化主義積年の勢力を凌駕する能はず、政談時論の風調は依然として佛蘭西流の自由主義、個人主義、其大部を壟斷し、間々一二政黨の帝政主義若しくは國家主義と言ふものありしも、未だ汎く社會の認容する所とならざりき。是時に當り新に發布せられたる帝國憲法が我國體國性の特質を明にし、國民をして我が欽定憲法が英米佛諸國の憲法と日を同じうして論ずべからざる者なることを知らしめしは、啻に國民の政治思想を統一するの力ありたるのみならず、併せて國民的道德の根據を確立するの大勢力ありたること、蓋し疑を容れざるなり。當時英佛諸國に見る如き民約憲法の發布を夢想したる幾多の政論家は、其實際の希望と反せるものあるを見、不平怨嗟の聲を漏せしは、尙ほ讀者の記憶に殘り居るべき事實なり。然れども政治上に於ける歐化者流は是大憲によりて永く其言論を箝束せられ、憲法條章の解釋の上に多少の異議を挾むの外、氣勢頓に衰へ、大體に於て政治界に於ける國民思想の統一を見るを得たるは、我國家の一大慶事なりと謂ふべし。

帝國憲法が政治上に於て爲したる事業は敎育界に於て敎育勅語是を爲せり。

の説は今日より見て如何に單純に、如何に幼稚なりしにせよ、從來社會の上下を貫通して跋扈し來りたる歐化主義の進路を遮斷し、そが國體民性との適否に就いて一大反省を促したる功績は、實に明治思想史の上に特筆大書すべき者なり。從來一切の學説政論は、全く國體民性を無視したり。其の爭ひは如何なる場合にありても西洋主義の爭ひのみ。彼等の眼中には獨逸あり、英吉利あり、佛蘭西、亞米利加ありき、然れども未だ彼等自らが其の臣民の一員たる所の日本帝國あるを覺えざりしなり。是れに反して國粹保存主義は、兎にも角にも獨立固有の日本思想を根據として、歐化主義に對壘したり。是主義の永遠磨滅すべからざる歷史的意義實に是に存ず。吾人は明治二十二年二月の帝國憲法が是の如き氣運の下に發布せられたるを以て我帝國の一大慶事とする者なり。

當時國粹保存主義の勃興が國民的意識の自覺を助成したる事實は、社會の種々の方面に表れたり。多年基督敎の盛運を傍觀したる佛敎が、國學神道と相提携して是れに當り、久しく萎微振はざりし弘道會一派の道德的團體が漸く其儒敎的勢力の恢復を遂げしが如き、社會道德の方面に於て見るべきものの一にして足らざり

くも明治七年に開設せらるゝやも測られざりし民選議院の開期を、廿三年となし、以て政府及び國民に與ふるに其利害得失を研究比較するの時間を以てし、吾人をして今の如き完美なる立國憲法を見るを得せしむるの功績に向て、吾人國民は深く加藤弘之氏を始め當年の獨逸的國家主義者流を德とするものなり。

任他、明治初年以來急轉直下の勢を以て進行し來りたる歐化主義の前面に立ち、國民精神の覺醒を代表して初めて反抗の氣炎を揚げたるものを二十年に於ける國粹保存主義となす。是の主義や、今日より是を見れば、極めて單純幼稚の意見のみ。漫に國粹を說きて所謂國粹の何物なるかを說かず、漫に保存を言ひて而して何故に保存すべきかを言はず、其所說や形式的なり、抽象的なり。且夫れ其の保存を說きて進步を言はざるや、人をして彼等の所謂國粹を見る猶ほ古物の如きに非ざるかを疑はしむ。其中何等進步の活力無く、務めて舊形を保ち、故色を失はざらむを欲するのみ。其主張者は國體民性の特色が一國人文の大主腦たるべきことを明知せざりしのみならず、未だ是の如き概念の依て立つ所の國家及國民の眞意義をだに解せざりしは、彼等の言論に徵して尤も明白なる所となす。されど彼等

我が國體民性の特質を自覺し是特質によりて外來の文物の適否を批判せしものにあらず、單に學理上の爭論として是れに對せしなり。故に大體の上より見る時は、日本固有の思想と西洋思想との衝突と謂はむよりは、寧ろ獨逸主義と佛蘭西主義との爭論と謂ふを妥當とすべし。何となれば、民選議院の主唱者は、主としてルソー等に代表せらるゝ佛の民主主義を奉體し、其反對者はスタイン、ビーデルマン等の説に基ける獨逸の國家主義を私淑せる者なりければなり。

是を以て日本固有の思想、即ち日本の國體及び民性を中心とせる國民的思想は民選議院可否の爭論に際して未だ覺醒せられず、歐化主義は依然として其の全盛を持續せり。夫の國會開設の大詔が是れを二十三年に延期したるは獨逸主義の力にして、即ち佛蘭西主義の一頓挫と見るべきも、是の如き振古未曾有の立法機關の開設を見るに至りたるは、實に佛蘭西主義の大功業と謂はざるべからず。然り吾人は之を大功業と謂ふを憚らず、何となれば、良し明治七年に於ける建白者が理想としたる如き民選議院は、如何に不完全に又如何に有害なるものなりしにもせよ、立憲政體其物は、現在政體中の最も完美なるものに相違なければなり。而て

化の傾向の國家の大事となりて現はれ、初めて國民精神に反省を與へしものを明治七年に於ける民選議院の建白となす。

所謂民選議院の建白なるものは、畢竟ルソーが民約論の單純なる反覆に過ぎざる也。其主旨は、納税の義務は參政の權利と相對す、是れ天下の通理にして民選議院の據て立つ所の原理なりと云ふに過ぎず。建白者諸氏が同時に組織したる所謂愛國公黨の綱領中に左の如き文字あるを見る、曰く『我輩の斯の政府を視ること斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外無かるべし』と。是の如きは今日より見れば極めて幼稚なる政治思想にして、啻に政權發達の原理に通せざるのみならず、又我國體の歷史、民性の特質に就て一も思惟する所あらず、偏へに歐米文明の皮相に眩惑し、一も二もなく是れを摸倣せむとしたる盲動たるに過ぎず。當時の西洋心醉者流も流石に斯る極端說に遇ふて稍々反省する所ありしと見え、茲に端なくも一世の物議を釀し、民選議院可否の爭論は一時新聞紙上の論壇を賑はせり。然れども茲に吾人の最も注意すべき一事あり、他なし、當年民選議院の設立に反對したるものも、亦其主唱者と同じく西洋心醉者なること是なり。彼等は

然れども事物の發達には自然の順序あり、一正一反、さながら振子の擺動に見る如く、中正の極致に達する前には幾多の變遷を經由するを免れず。乞ふ吾人をして國民精神の統一史を回顧せしめよ。

明治の初年にありて西洋心醉の潮流一世に汎濫し、其俗を渝へ、其風を移し、徹上徹下殆ど底止する所を知らず、一二皇學者流の反動ありしと雖も、一掬の水は以て車薪の火を救に足らず、是に於て英國流の功利學は福澤氏の楠權論となり、楠正成は我國にては古來忠臣の鑑と稱せられたれども、湊川にて死せずともよきに死したるは權兵衛が褌にて首を縊れると同じと論ずるあれば、他方にては、忠臣二君に仕へず、貞婦兩夫に見えずとは、固陋の道德なり、天理人道は時と共に變化す、アダムとイブの子供等は誰と緣組したりやと說くあり。是に於て靖獻遺言は拋却られて西國立志編愛讀せられ、『武士は喰はねど高楊枝』と云へる諺の代りに、スマイルス氏が『金錢は品性なり』との格言行はる。要は我邦一切の文物を西洋化するにあり。啻に其衣と其食と其住とを洋風にするのみならず、國體も、民心も、出來得るならば其髮をも、其皮膚をも、其眼をも、西洋化せむと欲せしなり。而して是歐

國民精神の統一

帝國憲法、教育勅語、及び日本主義

帝國憲法、教育勅語、及び日本主義。――吾人は是を以て明治思想史上の三大事實となす。帝國憲法は國法の大綱を示し、教育勅語は教育の針路を明かにし、日本主義は國民道德の本領を指示するを主眼とす。若し夫れ大日本帝國の國體民性に基きて國民精神の統一を目的とするに至りては、三者其軌を一にす。

つら〳〵惟れば、大政維新の際、內外事態の激變につれて國論民心共に定まらず、世は渾沌の中に自然の成行を待てる有樣なりしが、幸に　聖天子上にましまして賢良輔弼の翼贊を納れさせられ、天祐を保全し大業を克復し、茲に新政の大本、百代の鴻謨を立てさせられ、天下の人心を率ゐて向ふ所を一にせられたるは、洵に天地の祐澤、國家の慶事とこそ稱すべけれ。畏れ多くも天神地祇を祭り、億兆臣民に誓はせ給ひしかの明治元年三月の五事の御誓文は、即ち是れ帝國百代の國是にして明治思想の根源なり。

時代精神の統一を要するの時にあらずや。吾人が自然の氣運に先ちて是必要を認むるは、畢竟國民的自覺の發達に職由す。是機に乘じ嶄々然として天下の公義を喚起し是の紛れたる思想の分裂に一振攝を加ふるもの、豈吾人の義務にあらずや、政治や、宗教や、文學や、國家の人文に對して素一體たり。須らく一大精神を以て是を統一し、萬派飛流注いで一壑にある底の大觀を成さゞるべからず。凡て大事業を成就して典型を後世に遺すの時代は、上下百方を通じ一國猶ほ一人の如く、一線以て萬條を貫き、部勒、法あり、大將數十萬の兵を將ゐて呼應牽聯、一歩も亂れざるが如くなるべし。山奔海立の歷史的大勳功は是の如くにして初めて成し得べし。而して今の日本に於て是國民的精神の大頭腦、大把柄たらむものは、吾人遂に是を日本主義に待たざるべからざる也。

（三十年十一月）

と謂ふが如きは、吾人を以て是を見れば所詮時勢を見るの明無き也。

見ずや論者の所謂啓蒙時代の精神は已に其極點まで發展せられ、國民は今や方に其過度の弊に苦みつゝあるを。士風の廢頽、節義の衰微を效したるものは昔日の楠權論的功利主義に非ずや。『日本は我母國とするに足らず、支那の爲に戰ふも日本の爲に戰ふも一のみ』と揚言するものを出だしたるは世界主義に非ずして何ぞ。基督教は日本臣民をして聖影を冒瀆し、之に對して禮拜を拒ましめしことあらざるか。是の如くにして歐化主義、世界主義の發達は尙ほ且足らずとするか。言ふ勿れ是れ其弊のみと。然り弊ならむ、而かも其の必然の弊なるを如何せむや。今や兵士を勵ます聲は『名譽』に非ずして『義務』なり、『報酬』なり、是れ豈古の武士道ならむや。夫の天下の人をして拜金宗の門徒たらしめしものは神道か、大和魂か、將た歐化主義か。吾人は現今人情の澆季風俗の廢頽を以て主として是歐化主義に本ける拜金宗の勢力に歸せむと欲するなり。其弊是の如くにして論者は尙ほ且つ歐化主義の勢力を足らずとする乎。

人事は偶然にして成らず、社會の發達は吾人の力行に待つもの多し。今の時は

福澤流の極端なる歐化主義をして更に其自由の發達を遂げしめむには』と。吾人遂に其意を解する能はず。

人生は多趣、多面、多岐なる、洵に論者の如し、而かも然るが故に思想の統一を否定するの理由何處にかあるや。吾人を以て是を見れば人生愈々多趣にして統一の必要愈々加はる。人生を説明するの方法は廬山の八面によりて人々見る所を異にす、吾人は是等の説明の何れをも否定せざるなり、唯其實行の主義に至りては則ち一ありて二無し。論者の如きは畢竟説明と實行とを混同し、而して二者の概念各々別種の範疇に屬するを覺らざるの弊に坐す。或は言はむ、一主義を活如たらしむるは反對の主義なり、其の反對の存するは他方の苦痛とする所なれども、其苦痛は却て之れをして腐朽枯死せしめざる所以に非ずやと。是れ寧ろ笑ふべきなり。試に問はむ、健全なる體軀は何の苦痛ありてしかく健全なりや。夫の外部の刺撃によりて、其生存を繼續するものは、未だ自動自覺の境地に達せざる自然物のみ。滯水腐敗の例を以て明瞭なる自覺を有する國家もしくは個人に比擬せむとす、甚だ幼稚の見と謂ふべき也。若し夫れ今の我邦には時代精神の統一尚ほ早し

先にも言ひし如く時代精神の分裂其物は決して喜ぶべきことに非ず、唯々更に完全なる統一に達せむが爲の準備として其用を見るのみ。吾人は思ふ、維新の改革と共に四分五裂したる國民思想は、爾來三十年間の獨立の發達によりて、既に其分裂の結果を收め了りたるには非ざるか。而して今や方に其の統一せらるべき時期に到達せるには非ざるか。國民的自覺の發達につれたる時代の大勢は暗移默徙の間におのづから是統一の氣運を形成せり。然れども已に是大勢を自覺したる吾人は其自由意志の活動によりて是氣運の進行を幇助するの責なきか。況や當に統一せらるべき時代精神の依然として分離せるが爲に、幾多弊害の濫釀せらるゝの事實を認むるに於てをや。

吾人と反對の意見を有する一派の學者あり、以爲らく『人生の多趣なる是を一主義に捕へむこと難し、故に經世家は成るべく寛容の精神を以て反對の見解を等しく思想の大海に游泳せしむるを要す』と。是派の論者又說を爲して曰く『今の世に於て日本主義、もしくは國家主義を以て國民の精神を拘束するは、維新の改革によりて端緒を開かれたる啓蒙時代の精神を半途にして遮斷するものなり。若かず

主義と國粹主義とに移り、今や形を變じて世界主義と國家主義との對峙を觀るに到れり。是等の名稱は主として倫理上に關せりと雖ども、百般の文物多少同一の影響を被らざるは無し。

吾人は以上の觀察によりて、最近三十年間に於ける國民的自覺の發達が時代精神の統一に向て着々其歩を進めつゝあるを確認す。試に今の世界主義を以て往日の歐化主義に比せよ、若しくは現時の國家主義を以て曩昔の國粹主義と較べよ、其の說く所の正偏優劣素と日を同じふして論ず可らざるものあり。是れ畢竟國民が多年の經驗に指導せられ、漸く自他の間に公平なる商量を遂げ得る所の吾人の所謂眞正なる國民的自覺に接近しつゝあることを示すものに非ずや。而して是の眞正なる國民的自覺を代表せるものは、所謂世界主義の極端に走らず、所謂國家主義の固陋に陷らず、國性民情の特質及び其發達の理想を自覺して、世界人文の我に及ぼす勢力を商量し、其生存及び進歩に必要なる條件を以て中正なる國家主義に歸する所の日本主義即ち是れのみ。吾人は時代精神の統一を以て日本主義の天職なりと信じ、且つ是統一が目下の急務なるを認む。

土壤を飾表せむことに務む。是れ國民的自覺の發達上所謂純客觀の階段にして極端なる歐化主義の行はれたる時代なり。是を宗教的意識の發達に比すれば、太古素朴の民族が天地の崇大に接し、自ら抑畏して自然現象を神として拜するが如し。然れども是の如き極端なる歐化主義を實際に行はむとするに臨み、其民情國性と相調和せず、往々枘鑿相容れざるものあるを經驗するに及びてや、玆に初めて各國人文の特性に想到し、彼と我と素獨立獨歩の發達を爲すべきものなりと斷定し、飜て自尊排外の精神を振起するに到る。是れ明治十年前後に於て皇學の勃興に伴へる保守論の精神なりとす。是れ國民的自覺の發達上純主觀の階段に屬す。是れ猶は自然宗教に反對して所謂主觀的宗教が萬有に遍在せる神は亦吾人の精神中にも現はるべきを信じ、隨て眞正の宗教は神を身外に拜するにあらずして、心內に觀ずるにあるを認むると相似たり。是の純客觀と純主觀との二個の傾向は實際上必ずしも截然相繼承せず、時に隨て盛衰起伏するを常とす、然れとも維新以來國民思想の變遷が其消長と提挈左右したるとは爭ふ可らざる也。殊に近來兩者の主張漸く極端を遠かりて中正に近き、先の楠權論と皇學論とは中ごろ歐化

事實を認む。

そも〳〵其の國民的たると個人的たるとを問はず、なべての自覺は三個の階段を經由して發達するを常とす。其初めは純客觀的にして、中ごろは純主觀的となり、終には主客兩觀の比量に本ける眞正の自覺に到着す。蓋し自覺の概念は第一自他の差別を預想す、自己の自己たるを覺るには、先づ自己ならざる他物の認識を須要とす、是れ素より論無きなり。而して自己存在の眞意義は自己と倶存せる一切の實在物と自己との關係を知了する上に存す。是れ亦當に然るべき也。唯是の自覺の眞境地に達し、自他の公平なる比較を遂げ得る前には、或は主觀の一面に偏依し、或は客觀の他面を過重す。是れ振子の中正を得むが爲には左右の擺動を免れざると一般、亦自然の數なりと謂ふべし。

今我邦にありては維新の改革は即ち國民的意識を覺醒せる曉鐘なり。吾人が一個の國民としての生活は實に是時を以て初まれりと謂ふも敢て不可無き也。唯創めて國民的意識に目覺めたるものが、頭を擧げて當眼先づ西洋諸國の燦然たる文物に眩惑したるを以て、他を擧げて己を卑ふし、偏に外邦の事物を移植して我

このかた引續きたる改革の精神も漸く靜穩となり、無謀なる急進と頑迷なる保守とは、朧ろげながらも漸く自他の長短を覺識し、民約論的急進派も彼我國情の差別を覺りて自ら猛省し、皇學的守舊派も漸く世界の大勢に鑑みて其反動の氣焔を收め、茲に共に眼を放ちて自國の世界に對する位置を考察し以て國家將來の方針を打算し來らむと企てぬ。德富氏の『將來の日本』志賀氏の『南洋時事』二類の書が、一時洛陽の紙價を貴からしめしは、所詮是氣運の高潮に乘じたるを以てなり。

顧ふに維新の革命は鎖國の覆面を轉落し、國民をして自國以外に世界あることを知らしめたりき。喩へば猶ほ多年暗室に拘禁せられたる人の一朝白日の下に放たれたるが如き也。一時外物に眩惑して自ら爲す所を知らず、手足の觸るゝ所、情意の催す所に隨て、偷合苟容是れ事とせしは、寧ろ自然の勢のみ。是明治十年以前の國民が殆ど無意識に盲動せし所以なり。然れども其以後に於ける國民思想の經過を依傍すれば、暗移默徙の間、おのづから一理の貫通するあり、照應收繳、以て其根本的動機を成しゝあるを見る。何ぞや、國民的自覺の發達是れなり。而して吾人は是の國民的自覺の發達は時代精神の統一に向て着々其步を進めつゝあるの

共に社會の活動の大頭腦大把柄たる封建制度の顛覆せらるゝや、多年形式主義の壓制に困みし人心は、茲に激烈なる反動を起して個人自由の發展を主張し、奔放騰逸、左支右吾、一時は其の停まる所を知らざるの勢ありき。一方には福澤氏の所謂楠權論の如き爭あり、他方には中江氏の民約論の譯書の都鄙に歡迎せらるゝあり。箕作氏の勸善訓蒙、もしくは西村氏の智氏家訓の如き個人的倫理主義は、孝經、論語に薰陶せられたる從來の人には如何に異樣の觀ありしぞ。眞政大意、立憲政體畧の如き政治書は、百ヶ條の德川憲法を見慣れたる眼に如何に奇怪に映せしぞ。功利主義、民約主義の西洋思想が急進者流の間に汎濫せし時に當りて、他方には國學神道の再興あり、平田流の所謂皇學は幕府の下に忍びたる久屈の餘勢を振起して一部の人心を風靡せり。觀來れば紛然雜然、其の歸向する所を知らず、保守と進步と、外國と內國と、政治、宗教、文學の上に到る處に衝突軋轢せり。今日より見ればかかる思想の分裂は一見甚だ奇怪なりと雖も、當時國民思想の不定なるや、是の如き異なる物を包容して毫も其弊害を自覺せざりしなり。

是の渾沌たる狀態は明治十年以後に到りて漸く剖判の氣運に向ひたり。維新

由なる發達を包容せる內面的調和に存ずべし。故に時代精神の分裂の時として喜ぶべきは、是の如き極致の統一に達するの一階段たるの場合に於てのみ、分裂其物は毫も希望するに足らざるなり。文藝復興期に於ける美術の分裂が中世の統一よりも喜ぶべしとなすは、是分裂が永久のものに非ずして彫刻と繪畫と建築との三者が個々相獨立して其內部の發達を成就したらむ後、更に其結合を再びするの時あらむを思へばなり。

飜て我邦の現狀を觀ずれば、吾人は時代精神の分裂漸く其主力を磨滅し、今や方に其統一の機に迫りつゝあるを見る。統一の弊や則ち沈滯腐爛、分裂の害や即ち扞格齟齬、其弊たり害たるに到ては即ち一也。吾邦の今日は方に是扞格齟齬の害を被りつゝあるにあらざるか。乞ふ吾人をして少しく是を陳べしめよ。

そもそも本邦國民が德川氏の司配の下に三百年の太平を樂みしや、所謂時代の精神は江戶覇府の權力を代表せる一種の封建的形式主義によりて兎も角も其統一を保ちたり。政治、宗教、文學、美術等一切の文物は、是形式主義の圏套に拘禁せられ互に其否塞をかこちながら兎も角も調和一致せりき。然れども維新の革命と

淡の完美を究めたり。人體を以て汚穢の肉塊と觀じたるの風全く地を拂ひ、優雅なる人物畫風景畫は盛に行はれ、憂鬱なる世界は茲に一種愉快の空氣を以て充たされたり。是に於て中世紀に於ける抽象理想主義全く仆れ、自由なる自然主義は旭日中天の勢を以て當代の美術界を風靡せり。建築、彫刻、繪畫は、宗教の束縛を離れ、各自其の獨立の進路を取りて自由の發展を求め得たり。美術史上希臘のペリクレース期を外にして他に比類無きラファエル時代の全盛は斯の如くにして發現せられき。此を以て是を見れば、文藝復興期は美術界に於ける精神的分裂の端緒を開きたり、然れども是の如き精神的分裂は、中世の固陋なる形式主義の統一を壞り、近代美術を啓發するに於て寧ろ大に必要なりしなり。是れ分裂の弊害に對する利益の一面也。(世界文明史三〇一―三〇七頁參照)

是例に於て見るが如く、時代精神の統一必ずしも喜ぶべきにあらず、其分裂亦必ずしも悲むべからず、要は進歩に益するの如何にあるのみ。然れども人文發達の極致は形式上素より分裂にあらずして統一に存すべし。而して是極致に當るべき統一は外部の壓力を以て一時の合同を强ゆる者に非ずして、必ずや各部分の自

人的自由を發展せむとする是時代の精神につれ、美術も亦古代傳說及び宗教の繫縛を離れて、自家獨立の進步に向ひぬ。中世の美術は徹頭徹尾宗教によりて統一せられたり。建築も彫刻も繪畫も一に宗教の頤使に任じたるを以て、其間に一致融合の存在するあり。是一致融合てふ形式的事實は、甚だ嘉みすべしと雖も、是れあるが爲に各科美術は其自由の發展を拘束せられ、沈停腐爛に陷るを免れず、是れ統一の利益に對せる弊害の一面なり。是弊の究まる所一切の製作は敎會の名に依りて立ち、美術家の名稱は多く湮滅し、其題目及び內容は一に宗敎的傳說の決する所となり、美術家の唯一の職能は唯僅に刀鋸の技巧にありき。文藝復興期に萌發したる近世的精神は方に是繫縛を打破すべく起りぬ。今や、良し敎會と美術と全く分離するに及ばずと雖も、美術家は超然として傳說證典の外に立ち、宗敎的題目に關しても一に自家獨立の思想によりて解釋し、古來陳套の資材に新生命を與へたり。さしも中世紀に賤まれたる天然も、今や彼等は快濶なる胸襟を披拂して其美を包容し、荒唐不自然なる從來の美術に更に一段の寫實的分子を貼襯せり。是に於てか人體解剖、遠近投射の研究漸く行はれ、光線空氣の影響は素より、色彩濃

國民精神の統一を論ず

(元「時代精神の統一を論ず」と題す)

獨逸に*Zeitgeist*（ツァイトガイスト）の語あり、茲に時代精神と飜す。一時代の人文の全部に貫通して其活動進歩の動機となる所の根本思想の義なり。

一定の歳時及び方處に於ける時代精神は必ずしも唯一ならず。否多くの場合に於ては、諸種の傾向互に交貫離合して其の歸向する所同じからざるを常とす。是れ社會的範圍の廣きに隨れて、おのづから萬人の思想の統一せられ難き事情あればなり。人文發達の上より見る時は、是時代精神の統一は必ずしも希望すべき事にあらず。沈滯固陋なる形式主義の打破せられたる曉には、從來の强制的統一に對する反動として社會人心に數多の異なりたる理想を惹き起すべく、斯くして惹き起されたる數多の理想の追求は、將に來らむとする統一時代に到達するの準備として極めて必要なる事也。

今一例として文藝復興期の美術を擧げむに、中世紀の宗教的形式を擺脫して個

の力なりき。ガリヤ人や、埃及人や、イスパニヤ人や、由來彼等と共に精神的抱合を遂げ得べきものに非ざりき。あゝ彼此の間に華夷主從の區別を立て、純ら權力關係を以て彼等に臨みたる羅馬人は賢なるかな。是壘柵を撤去したると共に、羅馬の國體及び國性は又舊時の觀を止めず、帝國は其精神的死滅と共に土崩瓦解したり。

嗚呼讀者よ、吾人を以て徒に羅馬史を談ずるものと爲す勿れ。諸君は現に新版圖を統一せむが爲に我國體を捨てよと說くものゝ我が國民の間にあるを知らずや。是輩の俗論素より深く意とするに足らずと雖も、基督敎的精神の一發表として是を見る時は吾人は慄然として寒心せずむばあらざるなり。あゝ彼等は國民の本分に戾らず、國家社會の安寧秩序を妨害せざる限りに於て信敎の自由を擔保したる憲法第二十八條の保護に對して、日夕國恩の廣大海の如きを感謝せざるべからざるなり。

（著者が世界文明史一七五―一九二頁參照）（三十年十月）

るのみならず、却て天帝の優渥なる恩澤を感謝するなり。今や人類が休息すべきの時期は來りぬ、囚虜の歎願と祈禱とは終に聽かれたり。羅馬府を陥れたるアラリックはゴート族なりと雖ども、吾人と等しく一個の基督教徒なり。彼は彼の同胞なる基督教徒を敬し、且爾等を救ふべし。あゝ國民の膏血に醉ひたる賣女羅馬府よ、爾の陥落は幸なる哉。（アウグスチヌス『神の都府』）

基督教徒は實に是の如き精神を以て羅馬帝國を見たりし也。彼等は陽に帝國の強大を希望し、而して陰に其滅亡を利とす。彼等は帝國に勸むるに、其國體と國性とを抛ち、彼等の所謂精神的統一を以て之に代へむことを以てせり。而して其當然の結果たる國家滅亡に際しては、却て敵將を歡迎し、黙て國家の滅亡は自教眞理の傳播の爲にせる上帝の攝理を出でずと説く。畢竟彼等は實に羅馬帝國の一大禍根にてありし也。

吾人史を讀み、つらつら古今邦家の盛衰を考ふれば轉ゝ感慨に勝えざるものあり。羅馬の國家は羅甸民族と其終始を共にしたりき。眇乎たる七丘府が、三大陸の版圖を擧げて一撮四隅に號令したるは、實に是一族の民衆が強固なる血族團體

國家の成立は勢力の集中を必とす、是の如くにして如何ぞ人心の散漫を統一することを得べき。

是れ事實の眞相を得たるの言なり。羅馬帝をして其の羅甸民族至上主義を捨てゝ一切蠻民に公民權を讓與せしめしものは、時勢の必要之を然らしめたる者なるべしと雖も、然れども抑々又基督敎徒が唱へたる平等主義の影響には非ざりしか。羅甸民族至上主義の抛却はやがて彼等が所謂精神上の統一に一歩を進めたるものには非ざりしか。更に帝國の崩解は此方向に百歩を進めたるものに非ざりしか。彼等は國體國性の國家の成立と如何の關係あるやを究めず、一向其特性を打破して萬人普通の性情の上に一國を改造せむと欲す。是の如くにして成り得べきもの、或は彼等の所謂神の國たらむ、然れども是れ國家の滅亡を希ふもの也。然り、彼等は實に羅馬帝國の滅亡を希望したりき。アラリックの羅馬を陷落するや、其市民たる彼等基督敎徒は手を額にして相慶賀し、却て忠實なる羅馬府民の悲歎を冷笑したりき。是時彼等揚言して曰ひけらく、

異敎者よ、爾等は我羅馬府の陷落を悲むか。吾人基督敎徒は曾に毫も悲まざ

世界に號令したるの事實は、實に羅馬帝國存在の第一義なりき。

　羅馬滅亡の原因は一にして足らずと雖も、是の羅甸民族至上主義の破壞が其の主要なるものなりしことは、何人も否定する能はざるべし。是民族は其人口を以てすれば僅々一旅の衆のみ。戰連りに勝ち領土亦擴張するに及びて、其の純粹なるもの漸く地方に分散し、爲に異民族を收容し以て幹部の勢力を補充するの已むを得ざるに到れり。是に於てか從來蠻族として輕蔑せられたるもの、今や羅甸民族と共に市民權を得、其兵勇將帥は多く傭兵を以て充たされき。事茲に到りて羅馬の國體及國性は半ば崩解したりと謂はざるべからず。アウグスチヌスは其著『神の都府』に於て是事實を表白して曰く、

　異教者よ、爾等が喋々する所の愛國心を消耗したるものは爾等の帝王には非ざりしか。吾人基督教徒何ぞ是に與らむ。彼等がガリヤ人、埃及人、亞非利加人、フン人、イスパニア人、スリア人に與ふるに羅馬の公民權を以てせし時に當り、彼等は愚にも是の如き尨雜なる群聚が一個の以太利の都府、而かも彼等が久來怨望したる其都府を、誠心誠意を以て保護し得可しと思惟したりし也。

の幹部若くは主腦に存し、是幹部主腦と幾多屬邦民族との間に權力上截然たる主從の區劃を有せし間は、羅馬一市の中央集權は以て地中海の四岸に號令するに足れりき。　想ふに羅馬以前に於ける東洋戰勝國の膨脹は、一に組織無き暴力に據り、國民と國家との間に何等の結帶を存せず。是を以て波斯は三戰にして亡びたり。希臘は其國民間に於ては共同的精神を維持したりと雖も、被征服者に對しては爲す所を知らず、是を以てアレキサンドロスの王國は杯土未だ乾かざるに忽ちにして四分五裂したりき。　然れども羅馬は其の尨大なる版圖に對して常に至强なる中央集權を忘れず、羅甸民族は國家の中心核子として幾多異民族の上に超然たり。チベロ河上の七丘府は、世界的王國の中心として絕對的權力を有すてふ觀念はあらゆる手段を以て屬國間に普及せられたり。　故に西羅馬帝國沒落の後にありても、羅馬の一語は無意識的畏敬を以て發言せられき。　羅馬の公法は實に是れ羅甸民族至上主義の權化にして、永く後世專制政治の模範となれり。　フリードリヒ・バルバロッサの獨逸帝國、若くはセント・ルイ、及びフヰリップの佛蘭西王國の如きは、主として是に則れり。　是の羅甸民族が國家の幹部若くは主腦として絕對的權力を挾みて

立つ所の特性あり、是特性を離れて又國無きなり。山河舊の如く民人依然たるも、其特性にして亡びむか、之れ已に一國の精神的滅亡に非ずや。是れ猶ほ精神病の爲に自我意識を更迭したるもの丶前後同一人を以て見るべからざるが如けむ。是を以て眞正の國民は常に國體國性に殉するの覺悟あるべきなり。況や是の如き國體國性を維持することは、啻り彼等基督敎徒の杞憂するが如く、國勢の擴張に不利ならざるのみならず、實に其最大至要の條件なるに於てをや。試に人類の功過錄たる歴史が到る處に吾人の所說を立證するを見よ。昔者基督敎徒は今日吾人に告ぐる所のものを以て羅馬人に訓へたりき。而して彼等の多くは羅馬の滅亡を以て是帝國が基督敎の精神を奉行せざりしが爲なりとなす。而かも事實は全く是に反對す、羅馬滅亡の一原因をなしたるものは實に基督敎主義なりとす。

羅馬帝國は今日學者の所謂都府國家（シチー・ステート）なり。其權力の中心は羅馬の一府にあり、之を掌握せるものは是が市民たる羅甸民族なりき。是羅甸民族の團結强固なりし間は、即ち羅馬帝國の全盛時代にして、一族の民人が結成したる國體及國性は、世界の四隅を擧げて一主權の下に隷屬せしむるを得たりき。羅馬の基礎は是國家

に、三千年の歴史によりて結成せられたる君臣同祖の貴重なる國民的意識を遺却して恨無しとするか。是れ一杯の糞土の爲に盈尺の美玉を抛つるものに非ずや。今の人是の區々たる新版圖の素と權力關係に於て統御せらるべきものたるを辨せず、却て其逢迎の爲に是金甌無瑕の國體を破壞せむと欲す。小慧世を誤るの徒は眞に憫殺すべきかな。

是の如き俗説を爲すものは今の基督教徒に多し。彼等動もすれば曰く、國家の統一は精神的一致を須要とす、我國體國性に拘泥するもの、抑も如何にして他邦民族と精神的握手を遂げ得べきか。今の時に於て膨脹的國民たらむものは、先づ其の固陋なる國體論を捨てざるべからず、而して萬邦普通の宗教的信仰に本きて其精神的一致を計らざるべからずと。

嗚呼彼等は我が特殊なる國體を認めざるか、抑々又認むるも是に執着するの不利なるが故に是を打破すべしと爲すか。君民同祖忠孝一致の國體を認めざらむか、是れ已に我が國民に非ざるなり。是國體を認めて倘ほ且つ是を維持するを不利とするか、是れ全く事理を辨せざる者なり。一國は倘一人の如し、其の據て以て

性化すべし、一切の精神的敎化は苟も成功の望あらば之を施すに猶豫せざるべし而かも實際上之を統率し約束するの主力は遂に是を强固なる國家の中央權に待たざるべからず。膨脹的國民にして若し權力關係上依て以て他を拘制し統率し得る所の幹部若くは主腦を有せざらむか、其主權はた如何ぞ長久なることを得べき。尾大不掉、名は則ち一國家たるも、實は則ち數州郡の集合に外ならざらむ。

如上の見地を以てすれば、吾人は我國民を以て膨脹的國民として最も恰當の資格を有せる者と思惟す。君民同祖、忠孝一致の國體は、其の强盛なる祖國の觀念に於て何物か是に比肩し得べき。國勢擴張の前途に於て、權力關係上、所謂幹部若くは主腦となりて外力の抵抗を排除し、若くは既に征服したるものを統率するに於て、何物の力が能く之に匹敵し得べき。今や吾人は臺灣に於て新版圖を得たり。是時に當りて臺灣の土蠻と吾人とが同一血族に非ずとの意識は是れ新版圖の統一上果して幾何の障害たり得べきる。吾人若し是祖國の觀念に基ける强盛なる權力を挾で之に臨み、而も尙ほ之を統治する能はずとせば、吾人は已に初めより是新版圖を收容するの能力なき也。抑々又吾人は是一塊蠻土の民心を收めむが爲

き實踐主義の境域内に於て、初めて其存在の意義を有し得べきに非ずや。そが實際上に及ぼす勢力は徹頭徹尾間接的なるを免れず。

今夫れ國家は實權の上に立つ、實權の強弱は即ち勢力の範圍を規定す。苟も一國家を結成する所以の約束は、實際上是實權に存す。故に國家と國民との關係は即ち實際上全く權力關係に外ならず、是の如き關係は、人種、歷史等種々の事情によりて親疎一ならずと雖も、要は主權を離れて團結無し。一國民が從來全く其歷史的生活を異にしたる他の國土、若しくは民族を屬邦として新に其版圖に收容したる場合に於て、二者の強固なる團結を成就せむが爲には、殊に是關係の緊切ならむを必とす。夫の精神的敎化なるものは、是緊切なる關係を成就するに於て、素より多少の力無しとせざるなり、然れども統一の主力は常に實權にあり。況や其民族の人文の程度、人口の多寡、土地の廣狹如何によりては、是の如き内面的約束の全く無效果なる場合多きに於てをや。

是を以て一國が其新版圖に對し、其屬邦たるの實益を收めむと欲せば、主として權力關係を以て是に臨まざるべからず。若し國性化し得べくむば則ち素より國

そも〳〵天地の剖判以來、分化は歴史の一大精神なり。人種の異同、國家の差別は時と共に峻鋭となり、先に曖昧なりしもの今は則ち明瞭となり、先に單純なりしもの今は則ち複雜となり、殊に近時國民的意識の覺醒と共に是區劃は殆ど外面に於て融合の望み無きに到れり。人文の發達は一面に於て人類共同の思想を催起するに於て大なる勢力ありしと、吾人素より是を認む。然れども一面に於て人類及び國民の特性が爲に一層明白なる發達を發展し來りたることは是れはた掩ふべからざる事實なりとす。前者は內面的、はた理想的生活に於て人類の平等性を開拓し、後者は外面的はた實際的生活に於て差別性を促進し來る。是の如きは數千年間、人類生活の兩面にして、今日以後の歴史も亦永く是鐵路に依りて進行すべきなり。故に吾人は所謂人道なるものゝ人文と共に究りなく進歩すべき者なるを信ず、然れどもそが吾人の內面的生活の範圍を超えて、直に社會の實際的主義となり得るの時あるを信ずる能はず。見よ、人道の發達は古と今と殆ど霄壤の差違あり、然れども今日人道の名によりて成立する實際的勢力は何處にありや。今や國家至上主義は實踐倫理の標準として認めらる。所謂世界的道德なる者は是の如

根本的動機となり居るの事實は何人も否定し能はざる所なりと思ふ。良し又嚴密なる歷史的批評の結果として多少異民族の血液を混ずることの立證せられたりとするも、吾人は是の如き立證が到底吾人の現實の意識を搖撼するの力を有し得べきことを信ずる能はず。何となれば團結の强固他に比倫なき國民的生活の二千五百年の歷史は、多少の異分子を鎔鑄して之を國民的團體の主腦に同化するの勢力を有すべければ也。是を以て吾人は今日に於て君臣一家の國體論を唱ふるを以て、敢て事實を曲解して一時の民心を皷舞する方便主義なりと思惟する能はず。

世に一種の論者あり、一家の國體論を難じて曰く、『君臣一家を以て我が國體の基礎となさむか、爲に一家ならぬ民人を我國民の中に包含し易からざること明けし。そは血統團結に重きを置くことの强き程血統を異にするものを同團結中に包含することの難かるべければなり。君臣一家に重きを置くことは果して能く我國の膨脹的國是と相容るべきか。試に問ふ、如何なる眼を以て新領土の民を見むとする乎』と。是說一見甚だ理あるが如し、然れども吾人を以て是を看れば未だ事實を盡さゞるの論のみ。

り一にして足らずと雖も、畢竟君臣の特殊なる關係に歸着するものゝ如し。惟ふに天孫是國土に降臨し、萬世不動の鴻圖を肇め給ひしより、三世の後神武天皇に到りて茲に中原を掃蕩し、海内を統一して都を大和に定め、爾來歷聖相承け、一系三千載、以て今日に至る。是帝國の國土は實に皇祖皇宗の創定し給ひし所、其國民は概ね神孫皇族の末裔にして、祖先以來皆是域内に生息し、一系の皇姓に奉仕したり。是を以て我邦にありては、皇室は國土及び人民の由來する所なり。夫の外邦に見る如く、數多の異人種群集し、契約若しくは强迫によりて君臣の關係を定め、以て國家を建設したるものと日を同じうして論ずべからざるなり。一國と一家との比較は殊に我邦に於て其適例を見る。即ち皇室は宗家にして臣民は末族なり建國當初の家長制度は、二千五百年を經由して大に其範圍を擴張したるも、其の本來の精神に於ては毫も異變あるを見ざる也。

吾人は信ず、我國體の特性は此の君臣一家てふ國民的意識に起源せる事を。吾人は此君臣一家てふことが果して嚴密なる歷史的批評によりて確證せられ得べきや否やを知らずと雖も、是の如き國民的意識の牢乎たる結成が現に國民的生活の

我國體と新版圖

(羅馬沒落史を懷ふ)

抑々我國體の宇內に冠絕せることは帝國々民たる吾人が中外に誇揚するに足る所なり。皇祖建國の初めより、萬世一系の天皇億兆に君臨して一日も帝座の空しきこと無く、統治の大權は常に其の掌握する所にして、叛臣賊子の得て是を覬覦するもの無し。時に世運の推移に隨ひ朝臣武家の跋扈せるありと雖も要するに主權行動の形式に變遷ありしのみ、主權の所在に到りては依然として天皇の掌裡にあり。是を以て政體時に更革せりと雖ども、國體は百世を通じて動かず、輓近大憲の制定によりて益々其丕基を固うしたり。夫の外邦にありて主權の推移頻繁にして同一の帝位異姓の人を迎へ、華夷數々其處を異にし、君臣動もすれば其次を倒にするの例を以て、是我金甌無缺の國體に比すれば、彼此品位の高低啻に霄壤の差のみに非ざる也。

是の如き天下無雙の國體は如何にして成立するを得たるか。其遠因近緣固よ

は只基督教徒が吾人に對する先天的反抗の念慮を絶ち公明なる熟慮によりて一日も早く反正の途に就かむことを切望す。

（卅年七月稿）

を守り、且之を進むることを訓ふるものを以て人類同胞主義なりとせば、吾人は奮て之を非とするものを敵とせむ。然れども吾人は之に先ちて國家主義を唱道するものなり。主觀的に個人の圓滿なる發達を希ひ、客觀的に人類の完全なる幸福を望むは、素より人間道德の理想なり。然れども之を實現する唯一の方法は只國家主義あるのみ。吾人が生活の必然的形式たる國家を外にして、眞に個人、人類を以て事とするものは、之れ破壞のみ、敗德のみ、罪惡のみ。其志ありて其道を知らざるもののみ。憫むべきかな、基督敎徒の愚蒙なるや、彼等は國家主義は國家の幸福を始とするを以て個人人類の利益を沒却すと云ふ。あゝ彼等は歷史に於ける國家發達の意義を解せざるものに非ずや。

之を要するに國家の前途に關して忠誠なる國民の有すべき信仰は國家主義あるのみ、日本主義あるのみ。あゝ國家主義なる哉、日本主義なるかな。人道の花も是中に開くべく、個人の實も是中にみのるべし。誰か日本主義を以て狹隘なりと謂ふか。日本主義に對する紛々たる飛蛾的批評の如きは眞に國家道德の批判者の言に非ざるなり。一々其誤謬を糺すの勞は、到底吾人の堪ゆる所に非ず。吾人

すべきか、兩者其一を擇ばざるべからず。而して其本來の面目を失ふに至ては即ち一のみ。要するに基督教の歷史は變遷の歷史たると共に滅亡の歷史なり。會な其名稱と系統とを同じくするも、其中心の教義に於て異ならば之れ滅亡に非ずして何ぞや。

蓋し國家は動的にして宗教は靜的なり。國家の基礎は人類活動の實勢力を把持す、其の進化は能動的なり、同化的なり。然れども宗教の性質たるや一定不變なり、之を以て國家に對するの態度は常に受動的はた被同化的なり。歐羅巴に於ける基督教と國家とは其性質に於て已に早く乖離せり。而れども種々の讓步調攝の下に國家の中に存在して今日尙ほ多少の勢力を有するは、畢竟之れ二千年の惰性のみ。東方亞細亞に邦して人種國體を殊にする日出帝國の賢明なる學者は、何を苦で是歐洲人文の廢物を珍重せむとするか。吾人の解する能はざる所なり。

個人主義と人類同胞主義とは基督教の中心思想なり。若し各個人が各々其義務と權利とを自覺し、眞に國家の良民たるの道を訓ふるものを以て個人主義なりとせば、吾人何ぞ個人主義主張者たらざらむや。若し人類同胞をして公共の德義

て、基督教は常に國家の發達と衝突せざるを得ざりき。是に於てか自家生存の爲に國家に對して不斷の調攝を怠らず。其平等の教義は差別の利益の爲に曲解せられざるべからざりき。其の世界を獎めたるの口を藉して國家を説き、絶對的博愛を稱へたるの舌を以て忠孝を訓ふるに及びて、基督教は茲に全く教祖基督の眞教義を遺却し、其經典解釋より生ずる矛盾の彌縫の爲に汲々として勞苦するに至れり。

所謂羅馬教は政教混合を以て批難せらる。之れ眞正なる基督教徒の口より出づべき當然の批難なり。然れども一面に、政教二者の間に一大鴻溝を劃する所の基督教が漸次其勢力を失墜し來れる事實は、他面に於て羅馬教の興起し來れる事實にあらずや。現今の基督教が政教一致の方針に傾き、其經典を曲解して一に國民的たらむと務むるは、自家保存の已むを得ざるに出づ。政教一致、豈之れ基督教の眞主義ならむや。

歐洲今日の基督教は、所詮一箇のディレンマの上に横はれり。國家の利益を計畫すべしとの誓詞の下に國家の保護を受けむか、將た又其保護を離れて甘じて滅亡

的自覺心の發達は國民的文學の勃興となり、更に國家的宗教の成立となれり。是に於てかフスヰクリフルーテルの遺業は更に一層嚴密なる國家的の意義を以て紹述せられたり。又外にありては、國家の發達につれて起りたる國際の關係を規定するの法理は、更に飜て一層國家の獨立を確定するあり。內にありては、群小貴族は漸く其權力を失ひ、封建制度の遺習は次第に地を掃ひ、ますます國家中央集權の基礎を固むるあり。百般の文物一として國家權能の發達に幸せざるなし。是に於てか宗教の中苟も多少の生命あり、活動あるものは、佛、獨、魯の諸國に見るが如く、何れも國家的假面の下に其本來の面目を掩蔽せざるものなし。若し彼等にして教祖基督の眞意を享けて、civitas Dei を說かむか、彼等は一日も國家保護の下に生存することを得べからざりしなり。

蓋し基督教の眼中には世界ありて國家なし。個人ありて家族なし、人類ありて國民なし、人類は國家君父に反きても神に従はざるべからず。基督教史中の所謂血證死は所詮國家の叛逆のみ。まことに是平等無差別的理想は實に人類の到達すべき最高の境地なるやも知るべからず、然れども之を現實世界に訓ふるに及び

見るに至れり。夫のバイエルンのルードキヒとが公然たる告文によりて『教會は名譽と權力とを有すべからず只國家の名譽と權力とに無害なる限に於て其分を守るべし』と命令したるも實に是時代の精神に驅られたるものなりとす。

外部に於て漸く其勢力を失墜せむとする時に當りて基督教は更に內部に於て一大打擊を被れり、ルードキヒが所謂 Macht und glanzlose Religion の設計は茲に其實現を見るを得たり。內部の打擊とは何ぞや他なし所謂宗教革命是れなり。宗教革命と共に教會は國家に隷屬し其教義の獨立信仰の權力等は一切の華麗なる外觀と共に悉く褫奪せられ終りぬ。毫も宗教革命に關係せざる邦國に於ても宗教は全く國家の下に屈從し數百年の間支撐せられたる精神的獨立の教義は以來國家的たるべしとの條件の下に僅に其殘命を保つの果敢なき運命に到達せり。是れはた國家の發達に伴へる必然の現象ならずむばあらず。

然れども今日の國家は最早や宗教改革時代の國家にあらず。其躰制に於て其精神に於て益に〳〵進歩せるの國家なり。實に近世歐洲各國に於ける國家的統一の傾向は人文史上に尤も著しき事實なりとす。今試に其二三を擧げむか國民

ども時已に遲かりき。否帝國の沒落はむしろ基督敎の認容の爲に速められき。由來敎會と國家とは其利害に於て異なる所あるを以て、敎會の盛衰は是世界的帝國の滅亡と相關せず。寧ろ却て帝國古代の傳說を利用して自家の敎義に資し、現世的王國の建立を以て聖敎弘布の方便として神の攝理に成るものとなし、帝王を以て是の如き方便を供給する使僕となせり。羅馬帝國の滅後にありては敎會は幾多の異なりたる國民に通じて人心統一の唯一の機關たりき。然れども是の如き敎會も神政（テオクラテー）を現ずるを得ず、國家現實の事業に關しては、何等直接の勢力を有したるものに非ず。政敎二界は兩々相並行して尙は截然たる區劃を維持したりしなり。然れども兩者漸く其職分を自覺して各々其權勢を張らむとするの曉に及びては、衝突は遂に避くべからず。寺領地方權等が敎會の手に入りたるは、實に基督敎會が政敎二界の上に絕對の權力を有せむとする希望の端緒として見るべく、敎會が國家を蔑視するの傾向も亦漸く增長するに至れり。自家の職能に不明なりしが爲に、多年是根本的反對主義と提携し來りし國家も、是に至りて漸く其迷妄を脫し、宗敎を嫌斥するの感情亦漸く萠起し、遂に法王の命令に反對するの王侯を

彼等の謬見は素より其迷信に本くと雖も、抑々亦公平なる史的研究に勝えざるの弊に坐す。

國家發達の歷史を見るに、古代は暫く言はず、西曆紀元後にありては、社會に二個の勢力ありて頗頻關聯せるを見る、國家及び基督教會是れなり。是二者は多くの塲合に於て相反對し、互に其優勝を競ひたり。是二者は其初めにありては、衝突支吾の憂なきものとして思惟せられたりき。即ち彼は現在世の實際に關し、此は未來世の理想を事とす。彼は法制によりて外部より社會を支配し、此は信仰を以て內面より人心を指導す。彼は物質的即形而下の人世を統御し、此は精神的即形而上の世界を司掌す。其事に從ふ所兩々相分れ、毫も抵觸すべからざるの區劃あるべきものと思惟せられき。然れども肉と靈とは同一の人格に於て統一せらるゝが如く、人生の事業は是の如く相絕緣せるものにあらず、其間豈永く衝突なきを得むや。

元來羅馬帝國が基督教を抱合したるは、當時人心の上に强大なる勢力を有せる宗教の力に依りて、帝國版圖の統一を幇助せむとするの一時の權策に出づ。而れ

る響きを含有せることを知るか。

吾人は言へり。基督教の創唱せられたる時代は國家の體制未だ整はず、隨て其本來の意義の未だ明白ならざりし時代なり。而て二千年の間、國家の發達に並行して自家生存の爲に不斷の調攝を怠らざりし基督教は、漸く其本來の面目を亡ひたるのみならず、國家との關係に於て殆んど彌縫すべからざるの破綻を呈露し來れり。今や世界的宗教の覆面は當に脱落せらるべきの時期に到達せり。今や明瞭なる國家的意識は是の如き異端の跳梁を容認すべからざるの時代に到達せり。是大勢の集注せる所、所謂國家主義となり、更に吾人の日本主義となる。基督教徒が公正なる國民的自覺に本けるは是偉大なる主義を目するに、舊神道の復興もしくは一時の反動を以てするは恰も垂死の病者にして強健なる少年の生長を危むに似たり。

吾人の確信は人文史の證明する所なり。吾人先づ基督教の本國たる歐羅巴に於て、國家の發達と相關聯して其の如何に變遷し、其の如何に滅亡に近きつゝあるかを一瞥せむ。基督教徒の見るところの歷史は教會史にあらざれば、神學史なり、

テルボルヒの監督僧の公言したる所、豈宗教と國家の關係に對する最も眞率にして、又最も明白なる宣言に非ずや。

基督教徒は必ずや言はむ、是れ舊時の教義のみ、基督教は活ける宗教なり、何ぞ時と共に推移せざらむや。今の基督教は個人主義なり、人類同胞主義なり、而して同時に國家主義なり。宇内の文明と人類全體の幸福の爲に、國家人種の差別を包容せる世界的王國の建設を以て、其究竟の理想となす。regnum hominis と civitas Dei と、豈其間を連結するの橋梁無しと謂はむやと。

嗚呼吾人豈是辯解を否定するものならむや。若し國家的體制の發達し來れる今日に於て、基督教徒獨り依然として中世紀の舊迷妄を維持し、國家の覆滅を明言して憚らざるものありとせば、之れ適者生存の原則に對して、一大奇蹟的除外例に非ずや。基督教徒と雖も自滅を好むものに非ざるべし。時勢と推移して其教義を改易するが如きは、寧ろ當然の事なりと謂はざるべからず。然れども彼等基督教徒は果して是の如き『教義の改易』てふ現象の眞の意義を知るか。彼等は果して彼等が輕々辯解し去らむとする是一語の中には、基督教其物の死活問題の嚴肅な

如何せむや。其親を愛せずして他人を愛せば之れ悖德なり、其國を愛せずして他國を愛するものは之れ不忠なり。吾人の本國敵邦と戰ふ、是時に當りて吾人は一派の基督教徒の言の如く敵邦に與して吾人の本國に刄向はば如何。平等の愛は現世に於て決して行はれ得べからざるなり。彼の佛陀教、基督教の無差別的博愛主義は、國家の覆滅を計畫するものと云はざるべからず。『吾人が偶然に生を享けたる邦土の如きは吾が祖國となすに足らず、淸國の爲に戰ふも、日本の爲に戰ふも、吾に於ては一のみ』と揚言する基督教徒、現に我邦に存在するを知らば、基督教徒は是の如き批難を陳腐として、關せざるを爲すと能はざるべきなり。

（三十年七月）

宗教と國家

『基督の王國を是世のものとせむとするは謬見なり。人國は遂に天國たることを得べからず。國家は基督教によりて成立せず、又成立すること能はず』。是れペー

ものなり。個人、家族、社會に於ける一切の進退行動は國家の權力の下に絶對的服從を須要とす。只是國家の主義とするところに背戻せざる限りの範圍に於て、是の如き個人、家族、社會は各々其活動の自由を有するのみ。而して國家が是の如き權能を有するに到りしは、畢竟個人の圓滿なる幸福を實現する唯一且必然の方式として歴史的に發達し來りしものに外ならず。是を以て國家の盛衰は、必ず是國家を組成する國民利福の增減に隨伴すべし。所謂人類的情誼は實に國民的昌榮の間に興起すべき自然の感情なりとす。歴史を見よ、博愛の精神の至醇なる發動は、實に近世の尤も發達せる國家的活動と相伴へるに非ずや。國家主義の進步は事實の上に於て、世界主義の進步を意味す。國家主義を以て絶對的に世界主義に反對すと云ふものあらば、之れ全く人文發達の歴史を知らざるものなり。

然れども是の如くにして國家主義と共に發達し來れる世界主義は、基督敎徒の一派の夢想する如く絶對的平等なるものにあらず、他愛的感情其物は決して制裁せらるゝを甘ずるものに非ず。若し成し得べくむば一般衆庶に對して平等無差別の愛情を傾くるを得む。然れども吾人は實際上幾多の繫累に拘束せらるゝを

からざる破綻を暴露し來り、漸く其本來の面目を亡ふのみならず、終に國家以外に放逐せられむとするの非運を見る。蓋し勢の然らしむる所又已むを得ざるなり。

國家を以て倫理の標準とする所の國家主義の道德は、啻に人文史上最近の建設にかゝるのみならず、又其最終の發達ならずむばあらず。吾人は素より主觀的には個人の無限の幸福を希ひ、客觀的には世界の平等の博愛を望む。之れたしかに吾人の理想なり、然れども之れ抽象的理想なり。是具象有限なる現世に於て到底其實現を望み得べからざる者なるを如何せむや。然れども吾人は現に其生活を托し、其發達を圖り得べき國家と稱するものを有す。國家は吾人の勞働に報酬を予へ、吾人の希望に滿足を與ふ。其地盤は立て步むべく、步て進むべし。此の實を卽ての虛を選び、刻下の急務を捨てゝ空想の幻影を慕ふ、是の如くにして吾人は尙ほ且世界主義を惝怳すべき者なるか。

されば吾人が國家至上主義を唱ふるは、決して理論としての個人主義、若くは世界主義を否定せるが爲にあらず、只國家に於て實行道德の標準、及制裁を認識したるが爲のみ。蓋し國家は吾人の行爲を統一し實力の權威を以て吾人に命令する

り、終に國家的なるに至りて初めて其中正の見地に到達したるが如し。太古素朴の民が務めて自ら抑畏して一に天然を崇拜し、高大無限なる天地を以て信仰の對象となすは第一期なり。此時代の道德は血族團體に對する個人の盲目的服從にして、個人存在の意義の如き全く知られざりしなり。よし一個人が其所屬の血族團體に乖離したる場合に於ても、そは個人もしくは人權の名によりてなされたるものに非ず。漸く進みて自己亦宇宙の一部なるを自覺し、眞の宗教は神を外に拜するに非ずして內に觀ずるにあることを認むるに至りて、宗教はこゝに主觀的となり、道德はこゝに獨善的、はた省察的となれり。然れども基督敎の出現は、間もなく是主觀的傾向を打破して、再び博大なる世界主義の建立となり、近世佛國に於ける個人主義の唱道ありしを外にして、大なる反對を見ずして今日に至れり。然れども十九世紀の末葉に至り、國家の自覺心の發達につれて、是の如き平等主義の漸く排斥せらるべき時期に到達せり。基督敎の創唱せられたる時代は、人生に於ける國家及び生存競爭の意義の未だ明白ならざりし時代なり。二千年の間、國家の發達に並行して不斷の調攝を怠らざりし基督敎は、今日に至りては殆ど彌縫すべ

初より國家なる形式ありて吾人の自由なる活動を拘束したるに非ず。

已に人生の幸福と云ふ。之を主觀的に見る時は畢竟個人の幸福に外ならず。何となれば幸福とは自我の意識を豫想し、意識は個人を外にして見るべからざればなり。(國家を以て人格となし其活動に心的現象を擬するは所詮是れ形容にして心理上全く意味無きことなり)。然れども之を客觀的に見る時は、個人の幸福は必ずしも個人の人格に於て終始するものにあらず。家族、社會、國家及び一般人類に關係するところ少からず。自愛を擴充して家族より世界に及ぼさむとするは實に吾人の理想とするところなり。是の如く單に人生の幸福を主觀的に見るは即ち個人主義の依て起る所以なり。然れども是二者は單に空想上の理論としては、多少の興味無きに非ずと雖も、現實世界に於て吾人が行動の實際的主義としては毫も其價値あるものに非ず。何となれば是等は吾人が生活の必然唯一の形式なる國家の利福を損害するものなればなり。

今之を人文發達の歷史に案ずるに、宗教及道德は相並びて、初めは純ら客觀的、はた自然的なりしが、轉じて純ら主觀的、はた省察的となり、再轉して所謂世界的とな

は人道は全く現實の生活に關せざる抽象的はた理想的觀念に過ぎざるのみ。

人類は何が爲に殊に國家と云ふが如き差別的團體を作れりや、何が故に個々孤立して獨善の生活を營まざるか、將た又何が故に一般世界と共同無差別的生活をなさざるか。是單一なる事實の解釋は即ち是れ國家主義が實際倫理の最高標準たるべき理由の最も確實なる說明に非ずや。若し人類の間に性情の睽違なく、利害の衝突無く、強力の壓制なく、進步の希望なく、勢力の不平均なる分配無くむば、世界主義もしくは個人主義は事實の上に於て已に發現せられたるなるべし。然れども吾人は個人の上に家族をつくり、家族の上に社會を作り、更に其上に國家を形成して以て統率一致の主權を認めたるは、人類幸福の維持增進に於て必然の徑行に出でたるなり。國家の職分は社會の平和を保ち、利福をすゝむるにあり。強力以て之に臨むは、無數個人の一致の運動を須要とすればなり。其の國外に向て獨立を保ち權勢を張るは、畢竟自國と利害を殊にする他の勢力の侵凌に對して國民の自由なる發達なるを擔保するに外ならず。所詮國家は人類生存の目的即ち人生の幸福を大に圓滿に實現せんが爲に建立せられたる者なり。別に個人を離れ、

なり。

日本主義は倫理、宗教に於て、所謂世界主義、及び個人主義を排し、國家主義を唱道す。而して宗教は其本來の性質に於て遂に國家主義と兩立する能はざるを以て、茲に日本主義は一切の宗教を排擊す。其理由の如きは明々白々、苟も迷信の中に困睡せる宗教徒、若くは曖昧遲疑、私情の爲に公明の進退を敢てし得ざる二股學者の外、識者の夙に認むる所なりと雖も、左に簡單に之を述べむか。

人動もすれば世界と云ひ、人道と云ふ。然れども、個々獨立し、各自主我的活動に餘念なき國家の雜然秩序なき集合を外にして、いづこに世界、人道なるものあるか。世界人道の名によりて存在する實際の勢力は果して何こにありや。人文史上、人類共有の利害の漸く增進し來り、茲に人道(Menschheit)と云ふが如き觀念の發達を見るに到りたるは事實なり。然れども之れ人道其物が實際の規準となりたるの結果に非ずして全く國家の發達進步に伴へる自然の現象に外ならず。『世界の公民』とは古より往々唱道せられたることなりきと雖も、之れ只一片の空語のみ。吾人は國民としての外は現世に存在することは能はず。國家を離れたる世界、もしく

片の塵影も盈尺の美玉を曇らすに足るべし。吾人の見るところを以てすれば今日幾多の新紙上に表はれたる日本主義の反對論の多くは是批評の第一義に於て闕如せるもの、其所論亦多くは淺薄輕浮にして吾人と共に日本主義を語るに足るもの甚だ少きを恨む。

狹隘なり、排他的なりと云ふの理由に據りて日本主義を難ずるものあり、是れ笑ふべきなり　若し日本國家の健全なる發達を以て國民的道德の原理となす事を以て、即ち世界、人道と云ふが如き平等遍通なる抽象觀念を離れ、別に國家を以て實際倫理の標準と爲す事を以て、狹隘なりと稱するを得ば、日本主義は素より狹隘なる主義なるに相違なし。日本主義は國家を以て至上の權力と認め、其利福を以て道德の規準となし、苟も之に反するものは盡く之を排斥す。苟も主義として立つ所あるもの自ら然らざるを得ず又然らざるべからざるなり。是意味に於て日本主義は慥に排他的なり。

然れども當に狹隘なるべくして而して狹隘に、當に排他的なるべくして而して排他的なる、又何の不可かある。反對者は未だ日本主義を解すること能はざりし

にして、尙ほ是模倣擬似の境地を出でざるは、日本文明の名譽の爲に吾人の甚だ遺憾とする所也。

（卅一年十二月）

世界主義と國家主義

日本主義に對する世評は、誤解否むしろ曲解に出づるもの多し。畢竟之れ反對者が公平なる商量を遂げずして、豫め猜疑、嫉妬、又は憎惡の念を以て吾人の言說を臆度したるに因らずむばあらず。苟も一の新主義を唱道するものが、其の初め多少の反對に遭遇するは、極めて通例の事にして、何人と雖も免るべからざるの數なりとす。然れども吾人が日本主義を批判せむと欲せば、宗敎家は須らく其非宗敎家に對する先天的反對論を超越して、批評的立場を取らざるべからず。一般世人は其唱道者に對する個人的感情を放棄し、忠實親切の眼を以て其所說の大綱を領會せむことを務めざるべからず。若し猜疑、嫉妬、憎惡の見を以て之に對すれば、二

想を判定し得べしとするなり。是の如くにして彼等は或は獨逸の純理哲學を奉じ、或は英吉利の經驗哲學を執り、或は佛教もしくは基督教の神學的哲學を信じ、彼此相排擠して其無終、且無益の爭鬪を繼續せむとす。吾人を以て見れば、是の如きは國民的哲學の職能を會得せざるの弊にして、畢竟我哲學思想の幼稚を表白する者に外ならず。

吾人は現今我邦の學者が、其先入初學の道に於て互に流派を樹て、或は英を稱し或は獨を尊ぶを以て、洵に謂はれ無き事と思ふ。外國人が其の特殊の國民性情によりて構成したる哲學思想を漫然取り來りて、直に我が哲學と稱し、我が原理と唱ふるは、畢竟我國民的特性を蔑視せるものと謂はざるべからず。既に哲學を以て數學、もしくは理化學、論理學等の純知力的科學と同一視すべからずとせば、單純なる奴隷的摸倣の謂はれ無きこと、問はずして明なるべし。吾人は國民的文學、國民的美術を要すると共に、敢て國民的哲學の樹立を皷吹する者也。

遮莫、政治、法律、文學、美術、今や不十分ながらも各々國民的意識の覺醒に伴うて、漸く自主的發達の途に就かむとするの今日、人類知識の王冠を擔へりと稱する哲學

の特色を印するは、畢竟時代の精神と、國民的特性との影響なりと見ざるべからず。

以上の見地より歴史的に哲學を觀察する時は、吾人は哲學的眞理の考察に於て國民各其の職能を異にすること、猶ほ政治、文學、美術に於けると一般なるを認むる也。謂ふ勿れ、獨逸哲學は深遠なり、英吉利哲學は確實なりと。所謂深遠、所謂確實、何れか國民的特性の反射として主觀的のものならざるべき。宇宙の眞理恐らくは單一なるべし、所謂國民的哲學は、各々其國民的特性に隨ひて、是單一なる眞理を解釋し、批評し、歴史的發達によりて漸次是に接近するものには非ざるか。

是の如く見來れば、世に世界の哲學なるもの無し、只國民哲學あるのみ。哲學の最も健全なる發達は、哲學者各々其所屬國民の特性に縁りて、哲學的主材を抱容し、同化し研究するにあり。己に異なるもの直に虚僞となすが如きは、畢竟哲學其物の性質を誤解するの弊に坐す。

然らば則ち我邦の國民哲學は如何。

吾人を以て見れば、吾邦の學者の多數は、哲學を以て世界的となし、數學、物理學、化學、論理學等と同一視するが如し。彼等の多くは單一の標準を以て諸他一切の思

思辨考察素より知力を主とすと雖も、而かも是が活動を規定するものは寧ろ人性の全體なり。而して感情や、意志や、一切の人心に於て必ずしも恒久一定の性質を帶ぶるものに非ず、是に於てか哲學的考案も亦歳時と方處とによりて各々特殊の潤色を被らざるを得ず、國民的哲學の起る所以也。是を以て哲學史は單一哲學の歷史に非ずして、幾多の國民的哲學及び其交渉の歷史なり。哲學上に所謂眞理なるものは絕對的のものに非ずして相對的のものなり、彼を以て此を律し、此を以て彼を規するを得ず。獨逸の觀念論的哲學は、英吉利人より見れば實に是上も無く馬鹿氣たるものならむ、而かもそが獨逸哲學者の眼に確的疑ふべからざるの眞理なるは、猶ほ經驗哲學の英吉利人の眼に瞭然として火を睹るが如きなり、而して獨逸人より英吉利人の經驗哲學を見ば淺薄言ふに足らざらむ也。畢竟兩者の哲學の差別は即ち國民的特性の反射なり。絕對的眞理として一面に執着せむは、甚だ謂はれ無き事と謂ふべし。勿論人は依て以て人たる所以の通性を有す、是通性は人心中の最も一致し難き美的嗜好に於ても尙ほ是を見る。知力を主とするの哲學亦素より是通性を有すべし。是通性以上更に歳時と方處とによりて萬千不同

客唯々として退く。

國民的哲學

國民的哲學と謂はゞ、人或は曰はむ、國民的數學無く、國民的物理學無きが如く、世豈國民的哲學なるものあらむやと。 夫れ然り、豈夫れ然らむや。

凡そ人心活動の上に於て尤も普遍なるものは知力に若くは無し。 數學は純然たる知力の學なり、二に二を加へて四となることを肯定するは、人知の必然なり。數學の應用とも見るべき物理、化學、若しくは數學と均しく殆ど全く知力の範圍に終始する論理學的原理の如きは、一切の歳時方處を通じて一切の人類の等しく肯定せざる能はざる所也。

哲學は即ち然らざるなり、素是れ宇宙及び人生に關して究竟の原理を考定せむと擬するの學、是を以て是が研究に資するものは人心一部の知力と云ふが如きものゝみならず、感情も、意思も、凡そ心性の全體を擧げて是に關與せざる能はず。 其

一の方便なり、必然の方便なり、國家を外にして人生無ければなり。故に人生の理想境の國家に對するの關係や、包有的にして、超絶的に非ざるなり、吾等國家至上の主義を唱ふるもの即ち是が爲のみ。國家は至上の權能を有す、人生實際の生活に於て關與し得ざる所無し。然れども若し夫れ人性の圓滿なる發達を沮害するが如きは、善良なる國家の意志と稱するを得ず。國民として國家保護の下に生活する間は、如何なる法制に向つても、絶對的服從を表せざるべからざるは勿論なりと雖も、吾人は常に吾人が國家を結成したる當初の目的に照鑑して、人生究竟の意義を遺却せざらむことを希望せざるを得ず。國民的道德は常に是の如き樞要に關して一段寛裕なる見地を存せむことを要す。

吾等の見る所を以てすれば、國家は實際の生活と直接利害の關係あるものを制治することに於て、其存在の眞意義を有す。夫の國家當頭の事業に裨益せざるの故を以て、總ての事物を拘束せむと要するもの是れ豈に人情の圓滿なる發達を妨げ、隨て國民の精神的生活の範圍を減殺することによりて、寧ろ國家存在の目的に反對するものに非ずや。吾人豈純理哲學の爲に殊に言を爲すと謂はむや。

然れども實踐道德の教義以外に於ける一切のものを排斥すと言はず。日本主義は却て國家の幸福を殺害せざるあらゆる文物を增進して人性の圓滿なる發達を希望するものなり。

客是に於て吾等の言を遮り問うて曰く。吾子說くところ極めて明瞭なり。然れども既に揚言して日本國民の活動を指導する根本主義なりと稱す。是主張を擴充して其究竟の地に到らば、一切の云爲にして是主義の目的に密接ならざるものは、空理閑事として斥けられむ。是時に當り純理哲學の如きもの、尙ほ日本主義の容認するところと爲るを得るか。

答へて曰く、客の言ふ所何ぞ一に事理に通せざるの甚しきや。客知れりや、吾等が國家主義を唱ふるは何の爲なるかを。吾等が國家を先にするの理由は、即ち倫理學が國家を以て人生の必然形式なりとするの理由なり。もし理によりて究竟の見地を示さば、人生の目的は完全なる幸福に存し、完全なる幸福は人性の圓滿なる發達に外ならず。其の家族を作り、社會を組織し、更に之を統率するの國家を結成す、唯是目的地に到達するの方便に過ぎざるなり。然れども是の如き方便や、唯

哲學と撞着すべしとするか。

客知れりや、日本主義は世界遍通の人道を規定するものにあらずして日本國民の道德を指摘せるものなり。其根據は國民の特性にあり、其目的は國體の發揮にあり。眞に倫理學の原理に伴ひ、差別的發達を推奬するものにして、今日日本の爲に道德主義の確立を計らば、誰か是道に出でざるものぞ。是故に特殊の國民に於ける實踐道德の原理として、日本主義は倫理學の學理に率由す、而かも倫理學は實驗上に根據せる合理的人生觀に外ならず。然らば則ち、日本主義と哲學とは、毫も相背馳するところ無きのみならず、後者却て前者の所依たらずんばあらず。

客知れりや、日本主義は超理的信仰を以て吾人の感情に投ずる者に非ず、却て實驗的、はた合理的研究の結果によりて本邦國民の靜平なる理性に訴ふる者なるを以て、隨て超自然的抽象原理の根據を要せざるなり。道德主義は國民性情と相合致するを須要とすとは吾人の確信なればなり。然れども吾等が國民道德の根據として、何等の超自然的原理を要せざるの故を以て、直に純理哲學の成立を拒否するものとなすの理由將たいづこにあるべきや。日本主義は實踐道德の敎義なり、

る一切の知識を統一して、吾人が精神的慾望に滿足を與ふる世界觀、及人世觀を構成する最高科學なり。二者の間、形式上何れの點に衝突ありとするか。

客知れりや、日本主義は宗敎に非ず。隨て或一種の超理的信仰に據るに非ざれば肯定すること能はざるが如き非科學的敎理を含有せざるなり。日本主義は理想を立す、建國當初の國民的抱負を實現すと云ふもの、卽ち是れ。而かも是れ現實世界の自然的過程に依傍して到達し得べしと預定せるもの、如是信念の地盤は純ぱら實驗の範圍に存す。日本主義は世界を後にして國家を先にす。而かも是れ漫に己を樹てゝ他を排するに非ずして、人文進步の原理に本きたる公正なる歷史的研究の結果に出づ。吾等の日本主義は一切の宗敎を排す。而かも是れ一種の民族的自負心、もしくは不合理的嫌惡によるに非ずして、一は國民性情及歷史の精核なる檢覈に由來し、一は國家の發達及利害の周到なる洞察に起因す。是の如きは皆是れ國民の最も明瞭なる自覺心の活動にして今日の最も進步せる科學的研究に確實なる根蔕を有せるもの、徒に先代の證典を崇拜し、他邦の文物を摸倣するものと日を同うして論ずべきに非ず。是の如き道德主義は何れの點に於て純理

日本主義と哲學

屬者客あり、吾等を難じて曰く、所謂日本主義は來世を說かずして現世を說き世界を取らずして國家を取り、平等を排斥して差別に執着し超自然を棄てゝ自然に就き、飽くまで科學的實驗的の立場に住まりて國家及社會の道德を樹立せむと要するもの。是れやがて一切純理哲學を擯斥して實驗、自然、唯物の主義を說くものに非ずや。吾子は嘗て純理哲學の可能を說きて木村鷹太郎氏等の一輩を淺薄狹量なりと罵れるもの、今や是の如きは吾子が平素の持論と相撞着するものに非ずやと。

吾等答へて曰く、否、大に否。吾等は日本主義を固執す。而かも純理哲學の研究に熱心なること、今尙昨の如し。是二者は毫も相背戾するものに非ざればなり。

客曰く、希くは其說の審なるを了することを得むか。

曰く甚だ善し。客知れりや。日本主義は、日本國民の性情に遵ひて建國當初の精神を實現せむとする國民的道德の敎義なり。純理哲學は實驗科學の收得した

而して要は我邦建國の精神を發揮し、我が國民の大抱負を實現せむとするにあり。そも〳〵信仰は之を内に啓發すべくして、之を外より襲用すべからず。日本主義は今日吾等の創造したるものにあらずして、國民が三千年の歴史的檢證に本ける確實なる自覺心の最も明瞭なる發表に外ならざるなり。其の由來するところ深く國民の特性に根據し、遠く建國の精神に淵源し、牢として拔くべからず。夫の漫然外敎を借り來りて、餖飣補綴せるものと、素より同日の論に非ざるなり。日本主義は大和民族の抱負及理想を表白せるものなり。日本主義は日本國民の安心立命地を指定せるものなり。日本主義は宗敎にあらず、哲學にあらず、國民的實行道德の原理なり。

吾等は以上の確信によりて日本主義に贊同す。希くば最も健全なる國民的道德の確立を望むもの、建國の精神を發揮して大和民族の偉大なる抱負を實現せむと欲するもの、及び人道の最も忠誠なる伴侶とならむと欲するものは、吾等と共に來れ。來て而して吾等と共に日本主義を贊唱せよ。

（三十年五月稿）

を以て之に代ふべきか。吾等が主唱する所の日本主義即ち是れ。

然らば則ち、如何なる者か是れ我が日本主義の目的綱領なる。

君民一家は我が國體の精華なり。之れ實に我が皇祖皇宗の宏遠なる丕圖に基くものにして、萬世臣子の永く景仰すべき所なり。故に國祖及皇宗は日本國民の宗家として無上の崇敬を瀝すべき所。日本主義は是故に國祖を崇拜して常に建國の抱負を奉體せむことを務む。我が國民は公明快濶の人民なり。有爲進取の人民なり、退嬰保守と憂鬱悲哀は、其性に非ざるなり。是に於てか日本主義は、光明を旨とし、生々を尚ぶ。是に於てか夫の退讓を重じ、禁欲を訓へ、厭世無爲を鼓吹するもろ〳〵の教義を排斥す。億兆一姓に出で、上下其心を一にし、內に臨みては棣蕚相親しみ、外に對しては每に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず、是れ我國民の萬邦に冠絕せる所なり。是を以て日本主義は、平時にありて武備を懈らず、愈、國民的團結を鞏固にせむことを務む。然れども妄に己を樹てゝ他を容れざるものに非ず、國內を修めて海外に臨み、與國と共に永遠の平和を享受せむことを希ふ。是に於てか、日本主義は、世界平和の維持を務め、進みて人類的情誼の發達を期す。

にして別に人類的情誼なるもの之れ有らざるなり。夫の人類的情誼の最高標章として認むべき國際公法の如きも、之を執行するの主權なきを以て、所詮各國民の高尚なる道念に訴ふるの外無きなり。而して是の如き道念は、國家の完全なる統率の下に於てするに非ざれば、決して其發達を見るべからざるなり。

之を要するに、現實界に於ける一切の活動は其の國家的たることに於て最も有効なりとす。國家は人生寄托の必然形式にして、又其主上權力なり。今日に於て若し平等にして現はるゝの日あらば、そは萬有發達の原理たる差別の中に於てせむ。世界的王國の成立の望無きことは、猶 civitas Dei の現世に見るべからざるが如し。所詮國家は吾等の生活に於ける道德の標準たらざるべからず。是の如き國家的主義に背戻するの宗敎は、國家の爲に排擊せざるべからざる、素より論無し。

吾等は人文の發達が確實なる道義的信念に負ふ所、甚だ少なからざるを確認す。夫れ唯是の如き事實を確認するが故に、其の國民性情と國家主義とに對する利害適否に就て深く軫念する所あるのみ。若し今日及將來の我邦の道德を以て、佛陀敎、若くは基督敎の手に一任するの甚だ危險なることを認むとすれば、吾等はた何

りとするも、人生の成立に須要なる實利を惡み、人欲を排し、社會國家を以て事とせざる、素より明らけし。基督教の所謂神の國、はた是れ何處にありや。一切造化を以て平等無差別なりとし、國を以て民を分たず、均しく神の子なりとなすもの、將た又一國の差別に執着し、忠君愛國を説くを以て、迷妄笑ふべしとなすものは、如何ぞ國家の目的と相兩立するを望むべけむや。今の基督教徒が自敎と國家主義との調和の爲に、喋々辨明する所のものは、一切牽强附會の説のみ。

蓋し國家は、人類發達の必然なる形式なり。人は一人にして生息すること能はず、茲に必ず家族を成す、家族にして生活すること能はず、茲に必ず社會を成す、社會の上更に統治の主權を確定して、之を制御す。要は民衆最大の幸福を企圖するにあり。是に於て國家は自己の權能によりて、外に對しては一國の獨立を全ふして其勢威を皇張し、内に對しては國民の秩序を維持して其利福を増進せむことを務む。是れ人類發達の須要なる條件なり。夫の人道、若くは人類的情誼なるものは、今日人文の進歩に伴へる諸般の交通聯合によりて、やゝ發達し來りたりと雖も、之れはた國家の完全なる成立と共に初めて其萠牙を發したるもの、國家的道德を外

國民は各々其の到達すべき理想を異にす。是の如きは實に我國民が建國の當時に於ける一大抱負にあらずや。

今日の宗教は是の如き民族と毫も爲すなきなり。是を以て我國固と一の宗教を有せず、二千年の歷史は遂に宗教と抱合すること能はざりき。彼の基督教徒が遙に其の母國を離れ、其の故舊を辭し、萬里の波濤を凌ぎて平等博愛の教理を我に傳へんと擬するもの、其の信ずる所に忠なる素より深く多とすべしと雖も、其無謀無識にいたりては寧ろ憫殺に勝えざらむとす。

國民的性情に一致せざるものは、遂に其の完全の發達を望むべからず。而かも若し國民の福祉を增進する上に於て、多少の裨益ありとせむか、吾人は吾人が自由の意志によりて、是が扶植を務むる亦可ならずとせず。然れども宗教は到底國家の利益と相背戾するを如何にせむや。國家は現世に立ち、宗教は未來を尙ぶ、國家は差別を立て、宗教は平等を說く、其間おのづから枘鑿相容れざるものありて存す。よし佛陀教の涅槃は一切煩惱を解脫して、不生不滅無爲寂滅の妙境なりと云ふ。是の如き消極的觀念に止らずして、光明大悟と云ふが如き積極的意義の存するあ

を其の活潑々地たる現世的思想に較ぶれば、素より言ふに足らざるのみ。是を以て我邦固有の神道は全然現世教たり。夫の主ぱら未來死後を說き、もしくは超絕の世界を愉悅する印度歐羅巴的宗教の比にあらざるなり。

吾人は現世に生息す。百般の改善進步は悉く皆現在に就て爲すべきのみ。世を厭ふて遁るゝ所無く、現世を外にして人生あること無し。若し世に理想なる者ありとせば、そは現實世界の自然的徑行によりて到達せらるべきのみ。苟も吾人が現世の幸福に貢獻する所無からむか、一切の事物は吾人其の貴むべき所以を知らず。是の如きは我が國民の根本的思想に非ずや。我が國民は是の實際的傾向を有するの點に於て、支那民族に類すと雖も、而かも彼れの如く保守的、はた回顧的ならず。其の國民的抱負の偉大なる夙に神孫降臨の事蹟に照して、百世の臣民が其の遺業を奉體して怠らざる所なり。其思想は獨逸的純理哲學の高遠に乏しと雖も、アングロサクソン的常識の發達は、尤も我が長所とするところ。若し夫れ其の社會的生活を尙び、國民的團結を重じ、君民一家、忠孝無二の道德を維持するは、現世的國民として皇祖建國の鴻圖を大成すべき運命を擔へる所以に非ずや。各國

なる牽制に對する國民の意識的はた無意識反抗を到るところに發見するならむ。

西人動もすれば我國民を以て佛教徒となす。然れども吾等は疑ふ、眞に佛陀教の精神を奉じて人生の理想となすもの、果して幾何あるべきや。彼の緇衣にして經を手にするものと雖も、果して是信念を有するものありや。一種當眼の迷妄に驅られて、所謂淨財を木偶賣僧に進むるを事とするものは、未だ以て佛教信者と云ふべからず。一種の社會的形式に束縛せられ、祖業を繼紹して其頂を圓にし、其衣を緇にし、口に佛教を唱へ、手に佛典を持するものは、未だ以て佛教徒と云ふべからず。あはれ今日の佛教と稱するものは、殆ど空虛なる形式主義に非ざるか。佛教徒と稱せらるゝ我が國民にして、眞に佛教の信仰に憑據して、其思想行爲を規定するもの、果して幾何ありや。形式は能く無を化して有となす。所詮佛教は決して是國民的性情の中に根據を有せるものに非ざるなり。

基督教の如きも亦然り。宿惡と云ひ、贖罪と云ひ、靈魂不滅と云ひ、神の國と云ふ其の超自然的、はた無差別思想は正に我が國民の性情と相反せり。我が國民の思想は由來現世的にして超世的にあらず。多少幽界の觀念無きにあらずと雖も、之

上に及ぼしたる勢力の至大至深なるに至りては、吾等の殆ど想ひ及ばざる所なり。我國民にありては則ち然らず。一篇の古事記、是れむしろ歴史なり、神話に非ざるなり。よしや所謂日向人種にして印度亞里安族の爲に驅逐せられたるドラビダ人、若しくはドラビダ人と交渉したる或一派のツラン人種なりとするも、韋陀的神話と古事記との比較は、いよいよ明に我が民族的性情の非宗教的同化力の強大を證明するものに非ずや。素より多少の迷信の我が國俗の間に存在せるもの無かりしに非ず、然れども一も宗教的發達を遂げ得たるものあらざりき。佛教は是等幾多の迷信を吸收し、國家の權力の下に殆ど強制的に傳播せられたりと雖も、已に大陸ツランの間に其殊性を失ふこと尠からざりし印度亞里安的超世虚無の宗教觀は、果して能く幾何の根據を我が國土の中に有することを得たりしや。顯密二宗の幽玄なる教理は祈禱修法の現世的行事を外にして何事を我邦人に訓へ得しや。淺薄なる厭世思想と冷淡なる形式主義とに依りて我が文化の發達を妨害したるの事實を外にせば、佛陀教の勢力果して何處にかありとするや。一雙の活眼を破して、上下二千五百年の歴史を通觀し來らば、必ずや是の如き非日本的文化の強固

ざるなり、三千年の文物歷史は、明に之を證して殆ど餘蘊なし。夫の外教を拉取して偏に之を强ゆるものゝ如きは、徒に國性に戻り、民情に違ひ、其結果たゞ〳〵國家の發達進歩を沮害するに終らむのみ。吾等は各國々民は其特質に隨うて、其發達の制約を殊にすべきものあるを確信す。

そも〳〵宗教とは何ぞや。之を要するに、現實生活の自然的經過によりて到達すべからざる、一種超自然的理想を思慕し、或超理的方法によりて之に到達し得べしとする所の一種の信念に非ずや。是の如き信念の哲學上認容し得べき者なりや否やに就きては、吾等茲に之を說かじ。又一の社會的現象として、或民族間に於ける人文の進步に裨益したる所ありしや、素より疑を容れず。然れども人種の同異を分たず、特性の差別を顧みず、建國の精神如何を察せず、彼に施したる所直に我に擬し、以て彼と一樣の結果を收めむと要す、無謀も亦甚しからずや。印度歐羅巴民族は由來宗教的熱情に豐富なるの點に於て、世界多く其比を見ざる所、形而上學と超自然的宗教とを抱合せる彼等が古神話は、夙に將に來らむとする後代文物の性質を預告せり。若し夫れ宗教が、彼等の文學、美術より社會的、はた國家的生活の

るより、建國當初の精神は不幸にして十分の發展を見る能はざりき。今や十九世紀人文の高潮に駕し、明治聖代の餘澤を享けて、茲に中正なる國民的意識の中に我が日本主義の唱道を見るに至りたるは、我邦文化の史上に於て、一新紀元を劃したるものと謂ふべきなり。

吾等は我が日本主義によりて現今我邦に於ける一切の宗教を排撃するものなり。即ち宗教を以て我が國民の性情に反對し、我が建國の精神に背戾し、我が國家の發達を沮害するものとなすものなり。吾等は素より世界一切の民族に向て、彼等の宗教を放棄せよと勸むるものに非ず。歐羅巴の文明史上に於ける宗教の職能は、寧ろ太だ炳焉たるに過ぐ。夫の科學との衝突を捉へて以て宗教の有害を說くものゝ如きは、人文發達の一面に於ける道德の意義を解せざるの徒のみ。然れども吾等は思ふ、宗教は今日多數の宗教徒が盲信する如く、啻に決して人類の先天性たるを必とするものに非ざるのみならず、夫の宗教的民族と稱する者も、知識の進步と共に漸く其迷信を擺脫し、超自然的信仰に代ふるに、實踐道德の原理を以てせむとするは、今日世界文化の大勢なり。況してや我國民は由來宗教的民族に非

日本主義

熟々本邦文化の性質を考へ、宗教及道德の歷史的關係を審にし、汎く人文開展の原理に徵し、國家の進步と世界の發達とに於ける殊遍相關の理法を認め更に本邦建國の精神と、國民的性情の特質とに照鑑し、我國家の將來の爲に、吾等は玆に日本主義を唱ふ。

日本主義とは何ぞや。國民的特性に本ける自主獨立の精神に據りて建國當初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理、即是れなり。

そも〳〵國家の眞正なる發達は國民の自覺心に基かざるべからず。國民の自覺心は國民的特性の客觀的認識を得て初めて生起することを得べし、而かも是の如き國民的特性は、精覈なる歷史的、はた比較的考察に依るに非ざれば、認識することを得べからず。吾等の所謂日本主義は決して夫の偏に己を樹てゝ他を排せむとする、狹隘なる主我的反動と日を同うして論ずべき者に非ざるなり。我邦歷史ありてよりこゝに二千六百年、中ごろ誤て外來の文化を過重し、國民の性情を蔑視した

第二期（三十年五月より三十三年七月まで）

國家主義の時代

對しては善、吾人の理性に對しては眞、所謂哲學的三位是なり。是三つのものは吾人が理想的形式として相一致するものに非ずや。啻に形式上相一致するのみに非ざるなり。蓋し吾人の理想とする所は、差別と平等、個體と種族、具象と抽象との間に於ける圓融和合の狀態に存すと謂ふを得べし。眞とは是の如き關係を理性の上に觀じたるもの、遍通の原理によりて個々の事物を說明せむとする即ち是れなり。善とは是の如き關係を行爲の上に現はしたるもの、個體的利害を以て種族的幸福の上に隷屬せしむるもの即ち是れなり。美とは是の如き關係を形體の上に表はしたるもの、具象と抽象との圓融は即ち是れなり。眞善美は三位にして一體なるものに非ずや。

是れ甚だ空漠たる思想なり。而かも是れ吾人が目今の信仰なり。吾等は善と美との實際的現象としての差別を認識すると同時に、理想としての一致を想念することを忍ぶ能はず。

（全集一卷一部三一二—三一四參照）（廿九年七月）

もの素目的學上より見たるものにして、素純理哲學の根據に立つ。是を以て多くの實驗學者は、吾等が茲に掲げたるが如き言議を以て、一種の空想と爲すものあらむも知るべからず。吾等は斯の如き輩に向つて辯を作すの遑を有せず、彼等は假に吾等が一家言として是を讀むべき也。

人の自然界の他の生物と異なるは、畢竟其の自由の生物なるの點に存す。自然界を支配せる法則は、人間に於て其の必至的性質を失ひ、飜て内心の自由なる規定となる。是を以て、人は自己の立法者なり、其内心に規定する所の命令は、彼が依て以て行動せざるべからざる所の法則なり。故に人を動かすものは Müssen に非ずして Sollen なり。既に Sollen を以て自己の命令者となす、是を以て彼が目的として進む所のものは Seinsollendes なり。恰も梅實の梅樹となるべき運命を有するが如く、人は人の當になるべき所のものにならざるべからず。只梅と人と異なる所は、彼には意識なく、此には意識あり、彼を支配するものは外部に於ける器械的勞力にして、此を命令するものは内心に於ける自由意志なるに存するのみ。

然らば則ち何物か是 Seinsollendes なりや。吾人の感覺に對して美、吾人の意志に

をして或遍通の目的、若くは旨義の下に適應せしむるにあり。而して其次第は主義、原理と云ふが如き抽象的事物の媒介に依傍するを要す。美術の目的は單に具象の中に抽象、個躰の中に遍通を表現するにあり。其の目的を達する所以の次第は、徹頭徹尾、具象的事物に夤緣するを必とす。其の他美と善と相背戻するの點少からず。尤も卑き道德、例せば所謂本能的道德と稱する所のもの丶如きは、成立の緣を感覺に假ること多きを以て、隨て美的なるに近し。是に反して最も高尚なる道德は、考察冥想の中に入ることいよ〱多きを以て、美を隔つこといよ〱遙なり。夫の道德的生活は考察的生活なりと云ふが如きは、明に美と善との相同じからざることを指示せるものと謂ふべし。

是を以て見れば實際的現象としての善と美とは全く相異なれるものと云ふべし。ハルトマンを紹介せる論者の言當れり。

理想としての善と美との一致

然れども實際的現象として差別の相容れざるものあるの善と美は、吾人の理想として融解一致するの傾向あるものなることも亦遺却すべからず。理想と云ふ

の三異相なりと說く。是れ古來學者の間に異論多かりし問題の一にして、今日と雖も一派の純理哲學者を外にしては、多くは是に向て或綜合的設想を言ふことを難るもの多きが如し。

然れども是問題の歸着する所は、獨り理論の範圍に止るにあらず。延て社會實際の上に影響する所無しとせず。所謂實際社會に於ける美術道德關係論は、實に是疑問に屬する答案如何によりて決せらるべきものなりとす。

實際的現象としての善と美との差別

は甚だ明なることにして、ハルトマンなどの夙に說きし所なり。そを如何と謂ふに、美は獨り所謂美象の中に表はるゝも、善は却て事實の中に表はる。現實界に關して或利害を有せざるものは、道德上何等の意義を有すること能はず、是點に於て是二者は全く其の趣を殊にするものなり。次に美は感覺に縁りて表現せらるゝを必とせず、時間若しくは空間は美術の依て以て成立する所の第一義なり。善は必ずしも然らず、義務の衝突、良心の煩悶等其の他の道德的考察は、全然吾人が心性中に終始して毫も外界に表はれざるものあり。次に道德の目的は個々の行爲

清曠無垢の雅懷を披て精鑑し去らば、宗敎美術の價値自ら明ならむか。九變の巖土にさすらひて三界の苦惱を濟ひ、圓滿無邊の大慈悲を以て普ねく一切衆生を度せむとするの妙相高容を仰げば言絕ち語斷じ、恍惚の間、一脈の靈氣相通ずるありて、茫然悲想の中に萬法一歸の妙悟に徹底す。是の如きは宗敎美術の吾等に與ふる感情に非ずや。奈良の古美術は美術家の景仰措かざる所、今や倶舍衰へ、三輪癈れ、法相斃れ、華嚴僅に存じて、佛敎往年の隆盛又見るを得べからずと雖も、今日最高の本邦美術は實に是等諸宗の遺賜に非ずや。今や世は不信の世となりぬ。一代の衆生利と慾に走りて超世の大理想を知らず、宗敎美術玆に全く泥土に委し去られたるの觀あるは、豈當代文物の一大缺陷に非ずや。（全集一卷一部七五九一參照）（廿九年六月）

善と美の關係

近頃世上論者の善美關係論を言ふもの少からず。或はハルトマンに本きて、善と美の相合ふは偶然なる結果のみと言ひ、或は眞善美の三者は同一不二なる理想

るべからざればなり。**吾等は戰爭と名くる一種の競爭にのみ特別の罪惡ありと思惟するを欲せず。**

宗教と美術

吾等は宗教小説と共に宗教美術を推奬す。人或は其の個人的傾向を不可とすと雖も、吾等は却て宗教的至高の精神を躰現し得たる美術に於て、少くも一種最高の美的發表を認識し得べきを信ず。古に於ても然り、今も來らむ世も亦然るべし。

歐洲美術の歴史に於て、最も純潔に最も高尚なる製作物は多く宗教的美術にありしことは、甚だ明瞭なる事實なり。東洋にありても佛菩薩相、玉帝君王道相等の宗教的事物を以て、所謂畵道十三科の首位をなしたるが如き、如何に美術の品位を昂めたる所以に於て力ありしかは、何人も知る所なるべし。夫の有名なる藥師寺の三尊銅佛、呉道子の釋迦、牧溪の觀音、若くは運湛二慶の佛像、巨勢、託摩等の佛畵曼陀羅の如きものを取て、バルテノンの古像、ゲントの三尊の如きものに對照し、徐に

宗教と道德とは本來已に相兄弟たり、猥りに壘壁を築きて二者を別つべきに非ざるなり。宗教が實際的制裁を有する間は是れ即ち道德にして、道德が理想的精神を鼓吹する間は即ち是れ宗教なり。宗教も道德も其の對象とする所は人生及び人生の理想なり。世に宗教を以て單に獨斷となし、倫理學を以て批評學若くは記述學となすが如きは、偏僻不通の說なりと謂はざるべからず。若し宗教より道德の分子を省き、道德より宗教の分子を取り去らば二者共に破滅せざるを得ざるべし。

（廿九年五月）

戰爭は競爭のみ

戰爭は競爭の一種のみ。唯競爭の器械として學術が知識を用ひ商業が財貨を用ふる代りに、戰爭は人命を用ふるのみ、所詮 Krieg は Kampf の一族名と見るを妥當とすべし。

平和は現世に於て望むべからず、人類の慾望が進步に存する間は、競爭は遂に免

實世界にあらずし未來彼岸の世界にあり。想像と死に緣るの外は是に到達するの途無き一種の超絕的世界也。旣に超絕的なり、如何なる矛盾、撞着をも包容して綽々として餘裕あり。於是乎種々の神祕奇怪なる屬性を以て纏飾せられ、又種々の神祕奇怪なる儀式によりて崇拜せらる。代累り年移るに隨ひて、形式は實質を被包して當初の精神又見るを得難きに至るも、其起源に溯れば宗敎は遂に道德的理想に外ならず。故に種々の神祕的形式と屬性とを宗敎より剝ぎ去らば殘る所は吾人の良心の命令及び其の希望に過ぎざらむのみ。今更に宗敎の目的とする圓滿なる世界は何が故に現世にあらずして未來彼岸に存ずるかを考ふれば、宗敎の本來道德と兩岐無きこといと〱明なるべし。蓋し宗敎に所謂未來の世界は道德理想の客觀化せられたるものとして勢ひ然らざるを得ざるなり。道德的理想の所詮現世に於て到達するを得ざること億萬刧尙一日の如くなるを思はゞ、宗敎が其の理想的世界を全然超絕的となせしは洵に至當なりと云ふべし。死は人生に於けるあらゆる積極的制限の否定なり。宗敎が是死を以て彼岸に達する必至の條件となせしは亦洵に其の當を得たりと云ふべし。

りて現實を照らし其の希望と幸福とを來らむ世に繫けしものには非ざるか。猶太敎も是なり、基督敎も是なり、回佛以下の諸宗敎亦是に非るは無し。詩歌は人心の抱懷せる理想を表彰せるもの、而かも是理想を尤も具象的に表彰したるものは則ち宗敎也。宗敎はあらゆる詩中の尤も詩的なるものと謂ふべき也。

理想の上に其の根據を有せることに於ては、道德は毫も宗敎と異なること無し。而かも宗敎の途に道德たらず、道德の途に宗敎たらざるは、是理想を表彰するの方法に於て其の間に異なる所あればなり。道德的理想は心性組織の必然なる結果として道德的意識の中に生ずるものなるを以て、心性發達の未だ圓滿ならざる現實の狀態にありては、是理想に對する意識は自ら不明瞭なるを免れず。吾人が現在にありて其の理想的狀態として想像する所のものは、所詮是不十分なる意識の上に本ける一種の想像に過ぎざるを以て、勿論終極絕對の理想を知るに由なし。宗敎は是現在の不完全なる意識を超脫し、吾人が主觀的理想を外界に投射し、良心によりて代表せらるゝ吾人が道德的要求を客觀化したるものに外ならざる也。而かも理想と現實とは到底兩立すべからざるを以て、宗敎に所謂理想的狀態は現

かんと欲して聞く能はず、奕々として忡傷する所のもの、一念の天來、詩人の口を假りて茲に微妙の詩歌をなす。哲學思想が幾十百年の歷史を重積して、而かも明瞭なる斷定を下す能はざるもの、零丁たる詩歌一篇、正に是幽深の意を瀝盡す。夫の宗教なるもの、其の末流は源泉の淸きを傳へず、星霜の經過と共に其の舊態を止めざるに至ると雖も、而かも其の教祖が一代の風雲を掀飜して新に信仰の光を濁世に放ちし時にありては、是れ只詩歌なりしのみ。詩歌は物質に對する心靈の表象なり、現實を以て滿足し得べきものにあらず。何れの時代にか詩歌あらざるべき、何れの時代にか宗教なかる可き。オクスス川の谷間に、白牛黃犢を友として、錦光燦爛たる曙光の影を望みては無限なるアデチ女神を愉悅し、暴風雷雨の裡には、インドラ神の爭を認めたりし古アリアンは更にも言はず、赫灼として燃ゆるが如き熱天の下、綠葉蔚蒼たる椰子樹の蔭に、ソーマの酒を供へて、吠陀讚誦を朗咏せる黑色長身の印度人より、氷雪皚々として一花一葉の紅綠なく、滿目慘澹の世界に穴居して而かも死後此光の輝き亘れるあなたに、黃金の角ある馴鹿の群なす樂土あるべきを夢想するチュクチエン人に至るまで、皆是れ其のさゝやかなる理想の光によ

斷より生ずる苦樂を以て其の應酬となすが如きは宿命の觀念の如き要するに道義的應報を現世の範圍内に於て說明せんとするよりは已むを得ざる消極的必要に出でたるものにして決して以て人心の最深處に根柢せる道德心の要求を滿足せしむるに足らず。於是正當なる應報を死後の世界に求むるの洵に必然の人情と謂ふべし。マヌの法典に曰く

其の言語的なると、形躰的なるとを問はず凡ての行爲は其の善惡の應報を有す、人の行爲より轉生は生ず。　（マヌ、七、三）

以上本章の所論を約束すれば、解脫、知識を重ずること、及び輪廻の三は印度思想の三大要素にして、解脫は厭世思想を豫想し、思想の自由は知識を重ずることを假定す。輪廻の思想は靈魂不滅、生命同一、及び道義的應報の三に基く、是れ印度思想の梗概也。

（二十九年四月）

詩歌宗教及び道德

詩歌のひゞきは人心最奥の音樂なり。吾れ人の言はむと欲して言ふ能はず、聞

爾の敵に親切なれ木は己れを切る樵夫にも其の陰を惜ます。善人は最下等の動物にも慈悲心を垂る。月はチャンダラの陋屋にも光を注ることを否まず。社會上の差別をなす者は之れ痴人のみ、貴き人には全世界之れ一家族なり。生活は汝に貴重なる如く他の生物にも然り。善人は他に對して慈悲あることと猶己に對するが如し。

薄伽梵歌にも至る所同一の精神を鼓吹せり。曰く、

予は友も敵も有せず、予は凡ての人に對して一樣なり」（第九章）

之れ即ち反面より見れば生物の種類、社會上の階級の如き素假相變體に過ぎざることを示せるものに非ずや。此の平等は婆羅門各派に普通なる思想にして佛教に至りしは玆には言はず。

道德上の應報も亦間接に輪廻の思想をなす一原因なり。凡て道德上の價値が必ず應報あるべきことは人性に必然なる感情的要求にして、靈魂不滅の思想を構成する一要義なり。現世の不完全なる此の應報は必ずしも其の當を得たるものに非ず、善人往々にして窮苦の中に死し、非道者屢々幸運の寵兒となる。良心の判

之を殺すことを容さず、寧ろ甘じて其犧牲となるべきを敎へたるが如き其根本的動機を尋ね來れば此生命同一の思想に本けるが如し。吾人は吾人自らの生命を貴重するが如く他の生物の生命をも貴重せざるべからず、元之れ同一の生命なるを以て自他の間に輕重の差違あるべきに非ざればなり。闍伊那派の如きは Go preach the Gospel to every creature と云ふ本文を實際に應用したるアッシシの聖フランシスよりも猶一層親切なる熱情を以て下等動物に對せしなり。既に凡ての生物の同體なることを認めたる以上は此等の生物が互に生を轉じ形を換え得べきこと即ち輪廻を信ずるは素より當然のことなりとす。

印度人は此の生命同一の思想を擴張して博愛平等の慈悲心を成せり。社會的階級、貧富の隔絶等より生ずる差別は一切生物の同體を認めたる彼等の眼中には外形上の假相より外に何等の深重なる意義を有する者に非ず、王者も乞食も其の大體に於て些の上下の差別なし。故に自己の社會的勢力を利として他を迫害するが如きは、其の尤も戒避したる所なりき。彼等は絶對平等なる唯一實體即ち神の前にあらゆる人爲的はた現象的小差別を沒了したるなり。故に曰く、

せしが、之れ予輩が茲に解釈せんと欲する最後の問題なり。予輩は此原因として靈魂不滅、生命の同一、道義的應報の三を擧ぐべし。

靈魂不滅の信認は言ふ迄もなく輪廻の觀念を預想せざるべからざる者なり、若し靈魂にして死滅せば素より輪廻すべき謂はれなければなり。此觀念は何れの民族にありても、古代にありては必ず信ぜられたる者にして、蓋し人性に必然なる思想ならむ。其原因を講究することは本論の趣旨に非ざるを以て之を省く。

生命同一は蓋し印度人民の特有の思想ならん。彼等は以爲く、あらゆる生物は其本體を一にす、其形狀種類を見れば千萬の差別あれども、其本質に至ては唯一平等にして差異あることなし。故に人も犬も蟲も鳥も悉皆同一生命を共有せるに外ならず。蓋し之れ印度人が自然界に對する熱愛に起因したるものにして、吠陀讃誦を一貫せる凡神的精神は實に之なり。吠檀達派が萬有を擧げて梵となし、無數の個體我は所詮唯一なる自我即ち梵の一部に過ぎずと説きしも、畢竟此理想の最も著明に顯はれたるに外ならざるなり。此思想は亦闍伊那派の教義に大なる影響を及ぼしたり。此派が生物を殺すを以て非常の罪業となし、毒蟲身を螫すも

人生は所詮慾望に本く、慾望を果さんが爲に人は作業せざるを得ず、已に作業を免れず、故に亦輪廻を免れ能はざるなり。印度人は此無限の生死轉生を以て最大の惡事となせしものなり、之を免るゝは即ち解脱なり。故に解脱を目的せる印度思想は即ち輪廻を免るゝを目的とせるなり、其唯一の方法は一切慾望を絕ちて梵の唯一實體を冥想し、眞正の知識によりて個體我の本來空なるを悟了するにあり。是れ輪廻の觀念の理論的基礎なり。

斯の如き信仰が一たび人心の中に固着したる以上は、其思想生活の上に如何なる影響を及ぼすべきや。茫々たる死後の暗黑界にありて無限無窮なる轉生の運命は方に吾人を待ちつゝあるなり。吾人の現世に處する法を如何すべきや。さなきだに外界の知識に乏しく、內面的考察に富み、徒に無限無形の半面を想像して有限有形の半面を遺却したる印度人は、此の恐るべき嚴格なる問題に面し、其死後の運命に向て如何に沈深なる思想を運らせしや。那の如き民の他の民族に比類なき厭世鬱憂の思想を懷くに至りしは、蓋し自然の結果と謂ふべき也。

然らば即ち此印度思想に、しかく大なる影響を與へたる輪廻の觀念は何に起因

は無し。此觀念は希臘の哲學者、埃及の僧侶及び基督教の一派等に於て見る所なりと雖も、印度の外の印度歐羅巴族には概して多く行はれざりしものなり。印度にありても最初より行はれしに非ざることは、吠陀讃稱の中に之を見ざる一事を以てするも、畧之を知り得べし。即ち吠陀經にありては死者の靈魂は(他の印度歐羅巴族に於て普通に見る如く)只ヤマの光明天上に至りて、永遠の福祉を受くると言ふに止まり。所謂輪廻轉生の觀念は實にウパニシャドに始まると謂ふ。是とても初は殊に深遠なる理論に本きしにあらずして只單純なる實際的動機に因せしものならんと思はる。其の說く所によれば人は其作業惡ければ輪廻して現世に復り、其不幸なる存在を經過して其罪障を滅せざるべからずと云ふにあり。然れども後の婆羅門諸哲學派に至つては哲學的及び心理學的の高尙なる理論を根據として之を說くに至れり。其說によれば、吾人が輪廻を免れざるは、吾人の精神が梵を離れて有限なる個體的生存を維持し、此假相世界の諸般の繫縛の累はす所となるが爲なり。即ち換言すれば、吾人の慾望と作業とは輪廻の因なり、是れあるが爲に吾人は生死の巷を流轉して其の哀むべき生活を限無く反覆せざるべからず。

言はしめ『賢人は吠陀を退くること穀粒を求むるものゝ秕を捨つるが如し』と言はしめたり。若し夫れ

爾が學びたる吠陀は名のみ、而れども世には名よりも大なるものあるを知らずや。

と言ふが如き快濶自由なる思想は何物か能く之を束縛するものぞ。以て吠陀教に對する公然たる反抗として見るも敢て不可なかるべし。薄伽梵歌、吠檀達、尚且然り、其他の諸派が陰に陽に反抗の氣炎を吐きたるもの一にして足らず。カピラが吠陀讃稱の神聖を否定し、ラーマーヤナとマハーブハーラタは自ら吠陀に等しと稱しマヌの法典に『取るべきものは精神のみ』と言へりしが如き、多く言說するの要なかるべし。此懷疑的自由思想は六哲學派中に於て已に其萠芽を發し佛教に至て其極點に達し、遂に公々然吠陀の教義を破壞するに至れり。

三　輪廻

輪廻の觀念の最も發達して複雜なる形樣を有する者古代の思想中印度の如き

否定し、又カナーダが元子の最始の活動をアドリシタに歸せしが如き、予輩は彼等と彼等が排擊せんとせし異教者との間に何等の差違あるを見ず。

洵に此言の如し、彼等は形式上、はた外面的には社會の制裁上已むを得ず吠陀教義を認めたるも、其內心に於ける理性は遂に之に滿足すること能はざりしなり。薄伽梵歌は吠檀達と共に吠陀教の尤も忠實なる辯護者と稱せらるゝもの而かも吠陀教が虛禮を主として徒に來世の幸福を求むるを嘲りて左の如く言へり、

溢れたる泉を以て圍まれたる所に井水の用なきが如く、眞の知識を有せる婆羅門には吠陀は何等の用ふることなし。

又曰く、

爾若し知識によりて迷妄を擺破せば、習慣的信仰は爾を累はすことなかるべし。爾の心、吠陀を離れて冥想の中に入らば、爾は初めて眞の崇拜に至るを得べし。

(薄伽梵歌第二章)

吠陀の束縛を脫し獨立の思想によりて精進せんとする向上的傾向は尙吠檀達派をも例外に殘すことを肯せず、遂に彼をして『吠陀を知るは精神を知るに劣れり』と

に到る所に露はるゝなり。思想の發達と共に舊信仰に滿足する能はずして隨時新信仰を得んとするは洵に自然の勢力なりと謂ふべし。乞ふ左に少しく之を説かん。

所謂印度哲學の六正派は異端外道の徒に反して、吠陀教の教權を維持すと稱するものなり、而かも其の說く所を見るに却て往々之に反するものあり。例せば勝論派の如き、僧佉派の如き殆ど無神論に近し、彼等は佛教の如く公然吠陀教を排斥せずと雖も其教義に反するに至ては即ち一なり。現に印度の一學者は左の如く言へり（ジエーコブ氏譯吠檀達綱要第十一頁參觀）

> 蓋し彼等（六派）は吠陀教の主權に反せざる樣に其懷疑的辨論を造りしなり。彼等は其主權を保たんが爲に二途あることを認めたり。即ち一方には吠陀經典の自由解釋を容れ、他方にては繁縟なる吠陀的儀式に代ふるに哲學的考察を以てするの必要あることを認めたり。前者によらざれば其教權を維持する事能はざるべく、後者微せば蔚勃たる彼等の理性は永遠舊信仰の束縛を脱すること能はざるべし。然れどもカピラが最上實體の存在を

即ち實際的勢力なり。蓋し吠陀教時代にありてはマクス・ミュラー氏が言へりし如く、詩人は即ち預言者なり、預言者は即ち君主なり、廣大無際にして神秘不可思議に充滿せる宇宙に對して其解釋を與へたるものを非凡なる英雄、若しくは神的人として崇拜することは原始時代にありては極めて自然の事なりしならん。於是僧侶なる一階級出來りて元來超自然的事物を解釋する智力は同時に實際社會上の權力となりしなるべし。此の如き階級が其社會的勢力と位置とを維持せんが爲に、自家の信仰を以て人民を訓導し、若し從はざるものあれば威力を以て之を迫害せしことは亦極めて自然の結果と謂つべし。古來各國に於て宗教的階級が社會上の勢力を得しは多く此理による、印度に於ても蓋し然り。吠陀教の僧侶は其特權を維持せんとして社會的勢力によりて人民の信仰の自由を束縛したるが爲めに吠陀以降の思想は吠陀的信仰を以て正教となし、之に從はざるものを異端となして排斥せしならん。然れども余輩の見る所を以てすれば此社會的勢力は決して印度人民の思想の根本とも云ふべき思想の自由を抑制する能はずして、吠陀經の束縛に反對して其獨立の信仰を得んとするの傾向は各哲學派を通じて陰に陽

科學的原理は、良し明確に論理的に了解せられざりし迄も、印度人の單純なる心性によりて髣髴の間に認識せられしことは蓋し疑ふべからざるなり。

印度人は實躰と同一視するまでに知識を尊崇せり、故に知識の命令は最上の命令として遵奉せし所なるべし。即ち彼等は思想の自由獨立の爲には何等の障碍をも打破するの精神ありし事は、何人も其自然の結果として豫期する所なるべし。然れども茲に印度思想の歷史上一見矛盾の觀あるものあり、即ち吠陀教の尊信是なり。實に古代印度に於ける唯一の信仰として吠陀の古典が絶對的特權を維持せしことは宗教、哲學の史上に於て甚だ顯著なる事實にして、人をして殆ど壓制的に其教義を遵奉せしめ、之に背戻するものは異教者として社會的迫害を加へしが如し。思想の自由を主張すべき印度人が却て吠陀經の特權を維持せんが爲に斯の如き束縛を加へしとすれば、之れ大なる矛盾なりと謂ふべし。吾人は此間の疑義を如何に解釋すべきや。

予輩の見る所にして大に謬らざれば、印度人が思想の自由を尊びし事は疑ふべきに非ず、吠陀教の特權を主張したるは之れ恐くは思想的勢力に非ずして社會的

と言ひしが如き、其の細説に至ては各々其趣を異にすと雖も、知識を尊崇せし根本的原理に於ては概ね相同じきが如し。凡て如何なるものも全く自己と絶縁せるものは吾人之を知るを得ず、吾人の思想と吾人が思想し得たる對象とは或る神祕なる關係によりて必ず多少共同の性質を有せざるべからず。換言すれば、吾人の實躰と其對象の實躰とが互に合一するに非ざれば知識てふことは極めて無意義の事となり了るべし。之を以て印度人は知識は單に心性上の現象に止らずして、吾人の生存實在等に關して極めて嚴格なる意義を有せりと考へしなり。彼等が其全力を傾けて知識を愉悅し、迷妄を忌避せしこと誠に以あるなり。其の求むる所既に眞正の知識にあるを以て形躰上の禮拜、祈禱等は蓋し印度人が當初の本志に非ざりしならんか。薄伽梵歌第十章に『最上の禮拜は沈默なり』と訓へしも、蓋し此間の消息を漏らしたるものに非ざるなきを得んや。

以上述べし所は蓋し印度人が知識を以て解脫の緣とせし理由ならん。凡て二物相互に影響し得んが爲には其間に共通の分子を存せざるべからず、一の共通性なき二物は如何にするとも相作用すること能はざるなり。此の動かすべからざる

しなり、彼等が道義の最高なる原理は實に此中に存すればなり。故に曰く、

打勝つものは虛僞に非ずして眞理なり、幸福を得るの途は眞理によりて開かるゝなり。 （ムンダカ・ウパ、三、六）

世界に於て眞理の如く人を清淨にするものはなし。 （薄伽梵歌第四章）

彼等は實在と知識とを同一視したるなり、即ち知識を以て眞の實體となし、虛僞を假相とせり。故にカピラは其僧佉格言集三章二十四節に曰く『繋傳は迷妄の所爲なり』と。此點に於ては古代の哲學思想の東西一軌に出るもの少からず。プラトーン、ソクラテースが眞理と臆說とを區別して、眞理を知るは即ち眞理に到達する所以なるを示し、殊に知識と道德とを同一視して、智者即ち德者なることを主張したりしも、又王陽明が有名なる知行合一論の如きも、又孔子が朝に道を聞て夕に死すとも可なりと言ひしが如き、將たベーコンが

The truth of being and the truth of knowing is all one.
A man is but what he knowth.
(Essay. in Praise of Knowledge).

(存在の眞理と知識の眞理とは同一也、人は彼の有せる知識に外ならず)

等の思想の第一に向ひし所は天に非ず、地に非ず、日月山川にあらずして、自己なり、自己の運命未來の問題なり。

吾等は何處より來れりや。誰によりて吾等は生存し終に何處に歸せんとするや。吾等は誰によりて支配せらるゝや。吾等は一定の法則を歩み居るか。吁爾神を知れる人々よ。

『シエターシワタラ・ウパニシャド』は實に此偉大なる問題を以て初まれり。各哲學派は此問題を解釋するを以て解脫の方便となせるなり。故に知識を希望するの熱情は其敎義の到る處に露はる。彼等は眞理を知ることを以て眞理になることと同一視せるなり。之れ物質的知識の發達せる近世人の恐くは容易に想ひ到らざるの所なりと雖も、心性發達の上に於て自然の階段なることは古代人民が一般に此傾向ありしを見ても知ることを得べし。

人如何なる物を考ふるも彼は其物に行く、神を考ふる人は神に到達したる也。

(薄伽梵歌第八章)

之れ薄伽梵歌の吾人に語る所、印度人が其滿腔の誠意を以て信仰せし眞理なり

三世紀に印度に行きしとき、印度人が生と死の問題に其日を暮らし居りしに驚けりし一事を以ても想像することを得べし。實に智力はアリアン人種の心性に於ける最大動機なり。彼は外界に對して心性の遙に優秀なるを認めたり、あらゆる外界の事物は當に心性の希望に適應すべきものなることを認めたり。故に心性の要求は天地の間に最大の要求にして又最大の權力なり、心性は外界を超駕して無限の力を有し外界は心性に對して所詮隷屬に過ぎざることを認めたり。此唯心的傾向は印度歐羅巴族の過去の哲學史に於て常に最大の勢を有せしものにして印度に於ては殆ど絶對の權力を逞ふせり。畢竟之れ印度の氣候風土共に人をして懶惰ならしめ、且生活の困難なきを以て身體の活動を要せず、社會生存の爲めに競爭することを須ひず、之を以て客觀世界に就て物質的知識を得るの機會に乏しかりし爲め也。智力は其活動の對象を得るに非ざれば已まず、而かも外界に向て考察するの機會なき印度人にありては、飜て内面的考察即ち『自我』の考察に向て其の智力的勢力を傾倒するに至れることは極めて自然の結果なりとす。之れ吾人が印度人にありて吠檀達以下の唯心的、主觀的思想を得たる所以にあらずや。彼

するに當りて最も重要なる問題なりとす。

二　知識（即ち内面的考察）を重んず

一般にアリアン人種は知識を重ずる人種なり、故に又知識を渇望する人種なり、幾多の人種中今日獨り印度歐羅巴民族が世界文明の前面に當りて、暗に知識界の趨勢を制する力あることは洵に偶然ならずと謂ふべし。アリアン族の中天竺半島に南下したる所謂印度民族にありて、此傾向は最古の時代に於て尤も明晰に發揮せられたり。而して其の發揮せらるゝや、歐洲に於けるが如く客觀的物質的の方面に向はずして、純ら主觀的精神的の一面に傾きたることは其の尤も著しき顯象なりとす。蓋し之れ祖先の固有せる原性が國土の自然狀態の爲め感化せられたる結果なるべし。往古の印度人民が内面的考察を發達せるは吾人の驚嘆する所にして吾人は人間歷史中尤も古き尤も貴き其典籍に向て深く彼等に謝する所なかる可らず。想ふに幽玄なる考察は當時獨り識者の間に行れたるのみにあらずして、普通人民も知識的問題に冷淡ならざりし事は、夫のメガステネスが耶蘇紀元前

師婆陀摩那か如何に苦痛忍耐せしかを見れば、之を模範とする後世末派の苦行略々想見すべし。其の克己的精神の盛なるは實に驚くべきものにして、一度誓ひたることは如何なることあるも之を履行せざるべからず。其經典には比丘、比丘尼が巡禮の途上盜賊に會するも逃避すべからずと教へたりと云ふ。又此派は嚴に肉體の情慾を禁遏し宗教的自殺を勸奬せり、彼等は宗教的自殺を以て最後の解脱なりとせり。形體的方法も一たび此點に至れば、寧ろ考察的方法の目的とする所に背戾せりと謂ふべし。何となれば考察的方法の主とする所は內面的知識によりて解脱を得るにあり、此知識を得るに非ざれば、其手を絶ち其足を截るも、決して目的を達せりとは謂ふべからず、況して中道にして自殺して自ら知識の緣を斷滅するが如き、之れ則ち未來輪廻の因緣を搆成するものにして大に解脱の精神に反せるものと謂ふべきなり。然れども之れ素より婆陀摩那の素志に非ずして末派の輩が本末の辨を誤りたるの弊に坐するならんか。故に予輩は一般に言はんと欲す、解脱を得るの方便はもと內面的考察にして形體上の諸形式は內面的考察の目的に到るの準備なりと。然らば則ち內面的考察とは何ぞや、之れ印度思想を論

五は形體的方法に屬す。耐持とは情慾を抑制することにして、勤務とは宗敎的儀式を峻守するを云ふ。容止は態度を正うすることにして壓息、禁忌は呼吸を抑止し若くは制限し、五官を拘束して放縱ならしめざるを云ふ。此五者は要するに八戒中の三即ち內察、禪定、三昧に至るの準備に過ぎず。然れども此派が非常に形體的方法を主としたることは、古來著名のことにして其の慘酷なる難行に堪へたる克己の精神は今日の人をして心膽を寒からしむるものあり。其例を擧げんに、數十日間斷食し、或は信ずべからざる程永く水中に潛伏し、或は飮食を斷ちて數十日間土中に埋伏し、或は灰土を體に塗り、或は燒石上に偃し、樹上に倒懸し、或は地上を轉展して數千里を巡禮し、或は火を食ひ、或は刺上に伏し、或は多年手を握りて爪甲手背を穿つに至る等一々列擧に遑あらず。闍伊那派にありても形體的方法が其本來の主義にあらざりし事は、解脫を妨ぐる原因として(一)業障、(二)精神の眞知識を妨ぐる障碍物(三)身體に合し居る精神が感覺の對象上に發動せんとするの傾向、等を擧げたるを以て見るも明かなり。然れども此派も又瑜伽派と同じく形體的方法を極端まで實行したるものにして、其の慘烈なること亦瑜伽派に劣らず。其祖

ず故に吾人の當に務むべき所は苦痛の臭骸を脫却して精神本來の狀態に復歸するにあり。故に現世の生活を離れて涅槃の淨樂に入ることは吾人が最大の目的なり。吾人は如何にして此目的を達すべきか、如何にして未來の輪廻轉生を免れて其精神的實在に復歸するを得べきか、印度哲學派が此目的に達するの手段として選みたるもの、各々多少の差別あれども、大體二種に分つことを得べし。即ち一は闍伊那派、瑜伽派の一部によりて代表されたる形體的方法、一は吠檀達派が主として唱道したる考察的方法なり。闍伊那、瑜伽と雖ども全く考察的方法なしと言ふにあらず、闍伊那にて涅槃の緣として三寶を主張し、所謂正信、正知を說きしが如き、又瑜伽派にありて內察、禪定、三昧を八戒の中に加へしが如き、考察を主とせしを見る。否此二派にありても其主眼とする所は寧ろ考察的方法にありて形驗的方法は只之に到るの方便に過ぎざりしなり、予輩は唯考察的の外に形體方法あることを示さんが爲に、殊に之を分ちたるのみ、然らば則ち形體的方法とは如何。

形體的方法とは、一言すれば情慾を禁遏し希望を制止し、其他凡て形體的活動を羇束するを云ふ。瑜伽派の八戒は解脫の方便なり、其中耐持、勤務、容止、壓息、禁忌の

達派の世界觀に比して其差頗る大なり。而かも六句の離散を以て涅槃となしたるが如き、解脫を以て人生の目的とせしを見るべし。瑜伽派と僧佉派とは一は有神敎にして一は無神敎に近し、一は苦行を以て方便とし、一は考察を以て手段となすも、其解脫を目的とするに至ては一なり。闍伊那派が僧佉派と同じく精神と物質との二元を立てしは共に吠檀達派に反せりと雖も、而かも精神を分ちて常滿精神、解脫精神、繫縛精神の三となせしが如き、其の如何に解脫を重せしかを見るに足るべし。其他波儞尼派は文法上の深遠なる考察によりて吠檀達派と同じく萬有の本體として梵の唯一實在を認識し、差別相の原因なる無明の束縛を打破して梵に合一するを以て解脫とせしが如きは吠檀達派の正統を繼ぎたるものと謂ふべし。夫の斫婆迦派が現世の快樂を主張して解脫を目的とせざりしが如きは、蓋し瑜伽、闍伊那諸派の嚴酷なる禁欲苦行の敎義に對する反動的思想として見るべきものにして、決して之を以て印度思想一般の趨勢を疑ふべきに非ざるなり。

此の如く印度の各派は解脫を目的とするを以て、隨て厭世主義なり。吾人が現世の生活は所詮前世の作業に因れるものにして吾人の精神の本來の目的にあら

の果なり、靈魂不滅、因果應報及び平等は相待て輪廻の思想を構成すればなり。又一歩を進めて考ふる時は、解脱と靈魂不滅と、隨て輪廻、應報、平等とは元來相離るべからざるものなり。斯の如く項を分ちたるは唯議論上の便宜のみと知るべし。

一 解脱

解脱は印度の各哲學派を一貫する最も著しき思想なり。古代希臘に、支那に、羅馬に興起せし哲學派一にして足らずと雖も、現世の繋縛を脱して精神の自由を得んと欲するの希望の實際に顯れたるもの、印度に於けるが如く著明なるものはあらず。印度に於ける各哲學派は、世界觀に於て多く相異なれりと雖ども、其目的とする所は一の解脱にありし事は實に驚くべき一致なりと謂ふべし。且や此解脱の觀念は單に受動的信仰の如きものに非ずして、常に活勢的勢力を人心に及ぼしたるものなるを以て、印度思想の歷史の眞相を知るに缺くべからざるの鍵鑰なりと謂ふべし。勝論派の如きは所謂六句若くは十句を預想して世界の成立を說明したるを以て、一種の無神論として見ることを得べく、梵を以て唯一實體とする吠檀

印度思想の梗概

二三年前より印度哲學の研究漸く學者の間に行はる、然れども印度思想全體に就て其特色を明にせるもの少きを恨とす。是一篇は專門の士の爲に物せるものに非ずして主として世上一般の學者をして印度思想の梗概を會得せしめんとするにあり讀者諒焉。

吠陀敎の後を享けて起りたる所謂六哲學派に普通なる主なる思想として予輩は次の三を擧ぐべし。

一、解脫。
二、知識を重んず。
三、輪廻。

此三は予輩が敢て印度の三大思想と名けんと欲する所のものなり。此外厭世、自由思想、靈魂不滅因果應報、平等等の普通思想あれども、一々項を改めて列擧する の要なきが如し。何となれば厭世は解脫の因にして、自由思想は知識を重じたる

何れの時代に於ても常に發達の餘地を有すべければなり。吾れ人が今日の狀態に於て今日の純理哲學的考察を要すること洵に已むを得ざるなり。

(十)木村君の如き人はかゝる案定を無用なりと謂はむ。予は如是笑ふべき批難に答ふる代りに試に君に反問せむ。人間の或者は何故に哲學を要するかと。哲學を要せざる人に哲學の必要を悟らしめむことは何人も恐くは能はざる所、此を以て獨り予に責むるはそれは酷いと云ふもの也。純理哲學を案定するは人心の至性なるを證せよと、木村君は頻りに迫れども、予はむしろ哲學史の事實なるを承諾せむ人の、如何にしてかゝる無謀なる質問を試み得べきかを君に反問せむとす。

最後に予は木村君に向て予が目下の事情に於て爲し得べき最大の敬意と愛情とを捧ぐ。文壇の敵、私家の一味、學者の雅量當に然かあるべきものに非ずや。

（二十九年四月）

廿九年五月公にしたる『哲學と安心立命』及び『純理哲學と實驗哲學』の二項は所論この一文に同じきを以て揭げず

（編　者）

學に於て實驗的なるを得たるべきかを驚くなり。

(八)嚴密に謂ふ所の實驗的知識が世に所謂實驗科學となるの順序と、所謂實驗科學なるものが所謂純理哲學に移るまでの徑行とは、其方向に於ては同じきも、世の純理哲學を主張するもの丶論ずる如く、其性質に於て全く同じと謂ふを得ざることは予之を認む。然れども已に、所謂實驗科學の成立を以て一部の事實を說明するに必要なりとせるものは、何故に獨り純理哲學によりて全分の綜括を爲すことを拒否するか。蓋し是れ世に解すべからざるもの丶一なり。

(九)純理哲學は素より實驗哲學に基く。實驗科學の不斷に進步せむ限りは、是等科學の結果を綜括して根本原理を案定する純理哲學も亦不斷に改造せざるを得ざるべし。故に原理自らとしては絕對的に眞理たるを得べからずとするも、當代學術の進步の程度に於て、最大なる蓋然理を以て案定し得らるべき最高級の原理たるに於て毫も妨ぐる所無し。若し實驗科學の最後の發達を竢て而る後、初めて斯の如き原理を案定すべしと謂はゞ、吾れ人は未來永刧如何なる哲學的世界觀をも有すること無かるべし。何となれば科學は今日吾人の想像し得る限に於ては、

家となりて自殺し得ざるの理由あらず。人は靜平なる心狀と確實なる意志とを以て自殺を決行し得べきなり。安心と滿足とは由來其類を異にするもの也。予は夫のスピノザが世には厭世もなし、樂天もなし、只認識あるのみ、と云ひしは實に哲學者たるものゝ安心を尤も明に表明したるものと思惟す。予が先に哲學者は人間最高の知識の上に其安心を求むるを得べしと謂ひしは、是意に外ならざりしなり。

(七)木村君は議論の方法に於て、吾々素樸漢の未だ學び得ざる、(又學ぶを欲せざる)幾多の長所を有す。俗に所謂我田引水法の如き蓋し其一也。君は日本現代の哲學者中間々高山君の如き主義の人ありと雖も、有力なる多數は、恐くは實驗論に傾向せりとて、外山、元良、井上、中島の諸教授を引かれたり。知らず君は何によりて予の主義なるものを知り得しか。予の主義なるものゝ井上、中島諸教授と大に同じからざることを如何にして知り得しか。知らず、又是等の諸教授は木村君の所謂實驗論者と稱せられて果して滿足せらるべきか。予はむしろかゝる手近かの事項を斷ずるにさへしかく非實驗的なる木村君が、如何にして獨り君が深遠なる哲

るの運びに至らず。然るを毫も他の意を忖度するの勞を取らず、自家の用例によりて直に他を律し、彼の此に非ざるを批難するが如きは、所謂平地に波瀾を起し、故らに事を構へて辯を弄するの地を造るものと云ふべし。木村君の予に對する議論は無慮數十頁に餘れども、少くとも其小半は斯の如き揚足取的の文字に過ぎざりしは、予がくれぐれも君の爲に惜む所なり。

(六)哲學必ずしも安心立命を與へずとの君の持論は、予之を領せり。然れども予は君の意見に從ふ能はず。予の見る所を以てすれば、所謂安心なるものは、君の思惟する如く、必ずしも神の存在、若くは靈魂の不滅の證明の上に立つものに非ず。眞理は君が謂ひし如く洵に哲學は朴訥漢なり、有りのまゝに直言して憚る所無し。眞理は裸體のもの也、或は其不快なる醜躰を示すことあり。然れども人は事實の認識によりて其命を立て其心を安ずること能はざるべきか。樂を樂と觀じ、苦を苦と觀じ、裸體なる眞理の當に然かあるべき理法を觀ずるを得ば、人は是單純なる認識によりて安心立命するを得ざるべきか。予は思ふに世人は多く(木村君も亦)安心立命と云ふことゝ、幸福と云ふことを混雜せるが如し。安心立命せるもの毫も厭世

ふ所の實驗によりて毫も純理の思索を要せずと呼號する學者は、何れの時代にありても、自家撞着に陷らざるを得ざるべし。

(四)木村君は元來奇言を好む人と見受けらる。形而上學無くば世界は散漫矛盾なるかと論ずる一項の如き、予は切に君の言辭の輕噪なるを惜む。天文學は客觀的に宇宙を統一的に說明し、心理學は一切の事物を將て之れを所謂主觀的に說明す、科學豈宇宙を統一的に說明し能はざらむや、と論ぜられしが如きに到ては、予は敢て君を以て純正哲學の趣味を解せざる人と言はむ。

(五)予が木村君に於て惜む所の一は、君が辯論の世話に謂ふ揚足取に類するもの多きことなり。自家の定見に憑りて他を撿覈せむとする素より論無し。而かも充分他の論旨を辨へず、ひたすらに己れによりて人を推すの弊は、其の究まる所遂に偏に己を樹つるに非れば已まざるの獨斷に陷るべし。一例を擧げむに、君は予が用ひし觀念なる語を捉へて滔々數百言の反駁を試みられしが、予が所謂觀念は廣義に所謂獨逸語のイデーを飜したるものなることを諒せられなば、毫も異存あるべき筈無きに非ずや。言語は思想の符號なり、殊に譯語に至ては今日未だ一定す

られたり。よしや木村君は少讀主義(君の造語に倣ふ)の人なりとも、君が今古の大學者と尊崇せらるゝロック、ヒュームは已に熟讀せられたるべし。然るに是の如き言を爲さるゝに至ては予は聊か氏が言行一致せるや否やを疑はざるを得ず。ロックが本體若くはアリストテレースが第二本體に重きを措かざりしは事實なり。去りながら知識は諸種の觀念の調不調、若くは結不結をば、夫の四種の關係に緣て見たるものなりと云へるは、果して何を意味せるものなりや。所謂差別と云ひ、關係と云ひ、倶存と云ひ、實在と云ふ、是れはた實驗を超越せざるものなるか。況してやロックが所謂合理的判斷と云ふものゝ如きは、寧ろやがて木村君の說を否定するものには非るか。ヒュームに就て謂ふも亦然り。經驗の反覆は吾人をして觀念の連結を感せしめ、遂に知らず〳〵是感を外物に移植するに至るてふ彼が說は、とりも直さず彼が拒否せむとする因果の觀念の客觀的基礎を建立せむとするものには非ざるか。加ふるに彼が所謂習慣其物と雖も、所詮精神的の因果連絡に屬するものに外ならず。されば是亦ヒュームが所謂實驗以外に於ける因果の客觀的基礎を是認するものと見ることを得べきに非ずや。獨りロックヒュームのみならず、嚴密に謂

(一)木村君が與へたる純理哲學の定義の全く歴史を蔑視したるものなることは今更言を待たず。隨て君が所謂純正哲學者とせらるゝものは、殆ど過去の或學者に就て、若くは君が行論の都合の爲に、抽象せられたる一個の空想に過ぎず。而して是の如き概念の下に予をも投入せられ、實際予の有せざる種々の屬性を強て附着せられたるは迷惑是上も無し。君は何處よりして予を以て君が所謂形而上學者とせらるゝデータを得られしにや、予はそを聞かむことを望む。君は他人を認識するの方法に於ては獨り非實驗主義を採らるゝや、いと覺束無し。

(二)實驗てふ文字の意義は木村君の論中に於て甚だ不明なり。君は是字義を以て殆ど自明のものにてもあるかの如く用ゐられしが、予は今日實驗哲學に關しての一要疑問は、實に是實驗てふ文字の意義を明にするにありと信ずる也。實驗を以て毫も純理を取扱はざるものと見むには、實驗科學なる語は自家撞着なりとの批難は、慥に木村君の辯明を待つ程には道理あるものと信ずる也。

(三)木村君はロック、ヒュームを楯にして云々せられ、是二氏の說の已に純正哲學の論據に立てるものあることを注意せし予を以て、他人に內兜を見はすものなりと嘲

る所爲にして眞摯なる思想家の屑とせざる所なりと信ずれば也。

（二十九年二月）

木村鷹太郎君に答ふ

予が木村君と辯難の筆を交ふるや、其期する所は世上論辯家の徒らに言疵を提へ譏罵を恣にするは倣はず、持久執着、具に事理を曲盡し、各々意見の窮極の異同を明にして而して已まむとするにありき。そは純理哲學と實驗哲學との關係論は決して一二學者の私論に非ず、吾邦今日の哲學界に於て明に決定せざるべからざるの疑問なりと信じたればなり。然るに不幸にして微恙未だ全く癒ゆるに至らず、醫師は出來得る丈け讀書執筆の時間を制限すべきことを懇切に予に忠告したり。故に甚だ遺憾ながら本號には單に木村君に對して同君が二三の誤解を正すに止めむ且木村君の問題に對する所論は、既に公にせられたるもの丶みにては、甚だ粗笨簡截にして、未だ同君が立脚地を十分に明にするに足らず。故に一兩月の後予が微恙全く癒ゆるの時、又、木村君が其間に六合雜誌、眞理、及本誌等に顯はれたる諸種の論議に對し、更に十分精細なる積極的論證を公にせられたらむ時に於て予の鄙見を遺漏無く陳ぶるも亦晩きに非ざるべきか。世上の識者及び木村君は予が筆の短きを怪ます、意行きて事從はざる予が衷情を憐察せられなば幸甚。

平なる讀者は予輩の意を領せられしならむか。　木村鷹太郎君は予輩が哲學雜誌百五號に載せし文中の兩洋比較論を以て全然妄言妄語なりと斷言せられたり。木村君の誤解は予輩敢て之を意とせず、又木村君の理由なき言によりて其所信を動かすの讀者あるを信せずと雖も、予が不文なる、高明なる讀者の中或は木村君と同一の誤解を懷ける者なきを保せざるを以て、茲に言者の責任を充さむが爲に、聊か予輩の說を敷衍せり。　妄言妄語と高罵せられたる木村君も亦其責任を盡されむことを希望す。もし君にして尙予輩の說の詳細なるを望まれなば、予輩は更に筆を起して數十倍の長論文を草するに躊躇せざるべし。

以上は木村君に對する反駁に於ては寧ろ餘論のみ。　次回には形而上學と經驗哲學との關係を論じ、木村君の餘りに科學的なる眼孔は全く予輩の意を誤解せるを辯じ、且氏が所謂經驗哲學の性質價値に就て聊か反對の意見を陳述せんと欲す。茲に予輩の豫め注意し置かむと欲するは、予が故らに木村君に反して主はら論證的筆法を用ゐたる事なり。　蓋し他人の足跡に依傍して其言疵語弊を捉ふるは極めて容易なる事なれども、之れむしろ俗目を瞞着せむとする所謂揚足取の卑劣な

活動を束縛せられたる支那人には自由、高尚なる美術を有すべき因縁を缺ける也。希臘人が美術に對する觀念も、亦ボサンケー氏が精論せし如く、全く實際的思想を解脱する能はざりしと雖も（ボサンケー美學史一七―一七六頁參考）、吾人はプロチヌスが實感と美感とを別ちたるの教義の已にプラトーン、アリストテレースの中に胚胎せるを見るに難からず。之を支那人に比すれば其思索の徑行は天淵の差別ありと謂ふべし。

是を要するに、宗教無き民族は其思想の理想的ならざるを證するものなり、宗教は所詮理想の上に建立せられたるものなれば也。美術なき民族は其心性の自由ならず、且想像に乏しきを示すもの也。斯の如き民族を實際的なりと謂ふは誤りなるか。一の宗教なく、一の神話なく、一のエポス無く、一の純理想學無く、一の自由技術なく、有る所の者は教訓、典故、衣食居住の作法、座作進退の禮儀、君臣父子、戰爭、貨殖に關する教義のみ。如此民族を實際的なりと謂ふは果して誤れるか。チュラニアンは實に如此民族なりしなり、支那人は實に如此民族なりしなり。

予輩は哲學、宗教、文學、美術に就て東西兩洋の思想に就て簡略なる比較を試みたり。事體元重大にして、此一小論文に於て其精細を望むべからざるも庶幾くは公

一七四——七六頁參考)。　其宗教的目的の爲に作られたる偉大なる建築物、即ちTope Vihara、若くは塔(パゴダ)の如き、後世をして彼等が出世間的信仰の爲に瀝盡したる熱誠の如何に莫大なりしかを想はしむるものあり。　然れども宗教なく勇者(ヘルド)なき支那民族は其文學に於て叙事詩(エポス)を有せざるが如く、其美術に於て殿堂(Tempelbau)を有せざるなり。建築に關して古代支那人が吾人に殘したるものは水道、壁道、長城の類のみ。　彼等は『無限』に感動して大宇宙の不可思議力の讃美の爲に彼等が美衣美食を購ひ得べき勞資を抛つの非實際的なるを覺りしなり。　佛教傳はりてより印度のPagoda風の建築入り來りたれども、勿論美術的發達を爲さずして已みにき(カリエール、文明史に關聯せる美術史、一卷一八七——一八八頁參考)。　繪畫も實用に供するのみにして、壁畫の如きもの古代に於て之れ無かりしが如し。　音樂は儒教の重器にして、孔子の如きは大に之を尊重したりしが、其の目的は德性の教訓感化にあり、純然たる審美的價値と意義とを認識するが如きは彼等の想ひ到らざる所なりき。　總じて支那人は美の觀念に乏しき民族なり。　蓋し美を愛するの心は自由の心なり。　美術はシャスレルが所謂るDie Erfüllung des Gesetzes auf originelle und zwanglose Weise なり。　利用厚生の爲にあらゆる精神的

のあるを見む。英雄崇拜の缺乏せる支那人は一卷のEposをだに有せざるなり。小抒情詩は詩經以下の諸典に乏しからずと雖も、其情淺薄、其意近實、熱誠を缺き、想像に乏し。格調の形式を重ずる弊は詩的情熱を以て人心を感激するの力に乏しく、散文を以て優に其目的を達し得べき教訓記錄典故を配列して詩人の能事となすに至れり。思想力が自然力に打勝ちて自然と心靈との間に適當の調和を保ちたるは希臘美術の特性なり。よしやプラトーンの哲學の如く其表象を一向に理想的はた共同的にして未だ個人的特性を發揮するに到らずと雖も、フヰデアス、ミュロン、乃至プラキシテレースの塑像は、其理想の高遠にして其の技術の卓絶なることに於ては希臘民族が萬世に誇り得べき所なり。希臘人が精神の健全なる主權を將來に得るの準備として、先づ自然と精神との調和を爲したるに反し、印度人は其の幼稚なる精神はた大膽なる想像を使役して一意自然を支配せむとしたる結果は、遂に徒に神秘誇大なる妄想の中に陷りたり。然れども自然美を愛するの精神は躍躍として其美術の上に顯はれしことは、同じく東洋に邦せる埃及、巴比倫の美術が單に數量的なりしに比して、明に亞里安族の特質を表せるものと謂ふべし(リュブケ美術史、

其價値を有せしのみなりき。

宗教發達の時期を大別して自然的(フヒジツシユ)、人視的(アントロポロギシユ)、心理的(プシユコロギシユ)の三期となすことは何人も異論無かるべし、(マクスミユラー氏、モツフアー氏の宗教哲學參考)。自然的とは凡ての現象を作動者として考ふるの謂にしてマクス・ミユラー氏が所謂All that had to be expressed had to be changed into actorsの時期なり(同氏自然宗教論、三九〇—三九二頁)。之れ人視的時期に達するの階級にして、或學者は是を活勢的(ダイナミツク)時期と稱せり、(モツフアー氏なりと記憶す)。人視的時期は吠陀及び舊世界宗教の全體を包含す。心理的時期は即ち婆羅門教、回々教、佛教、及び基督教の時代なり。或人が宗教なりと稱する支那の儒教が何れの時代に屬すべきものなるかを一考すれば、予輩は更に明に該民族が無宗教の民族として、如何に想像信仰に乏しき乾燥なる實際的生活を營みたるかを想見するに足らむ。

更らに一歩を進めて文學美術に就て簡單なる觀察を下さむ。ホメール的詩人が二大叙事詩、ペリクレース時代の諸戯曲は言はずもあれ、若しヱンチダード、吠陀、及びヷルミーキの諸作を以て支那の古文學に比せば、理想的冥想的なる亞里安族の思想と實際的記實的なるチユラニアン族の心性と兩々相對して、益々其特性の顯著なるも

配すと謂ひ、又天に從ふと云ふが如きは、只之れ冷淡に自然法を說けるものに過ぎずして、後世の道と同一なり。敬之の章には天は高く上にあれども近く人間を瞻視すと云へるが如き、多少宗教的なれども、而かも人生に對する何等の關係勢力を言はず、宗教的意識の根本たる恐怖、讚美の情の如きは絕て之を見ず。頌の如きは皆君侯に捧ぐるの頌にして神を頌美するものに非ず(周頌、魯頌、商頌等參考)。そもそも勇者(ヘルド)は各國民族の幼稚なる宗教心にありて神として崇敬せらるゝを常とす。勇悍偉大なる人物に於て國民の自己より大なるもの、神々しきものを認め、自己の惝怳渴仰する理想の實現を認むるを以て、恐怖嘆美の情は遂に彼を神として崇拜するに至る。故に宗教心に富める民族は一神教に達する第一步として自然の宗教と共に英雄宗教を有す、是故に亞里安民族は到る處として其ヘルドを有せざるは無かりき。希臘のペルソス、ヘラクレース、エーデプス、羅馬のロムルス、ロムス、獨乙のジーグフリード、ヲルフ、デトリヒ、印度のRâma, Krishna、波斯のKyros等數ふるに遑あらざるなり。而かも古代の支那人は一の勇者を有せざるなり。彼等は見ゆる物の外に見えざる物を要せざりき。あらゆる說明は日常の物質的生活の利害に關して

ける吠陀及び佛教、波斯に於ける『ゼンド・アヱスタ』(VendidadとKhorda avestaとを含む)猶太教の舊約全書、基督教の新約全書及び回々教の聖書コラーン是れなり(マクス・ミュラー氏は聖書の五生所と題して支那をも加へたれども、支那の詩、書、易、孝經等は宗教的經典と稱すべからず、――同氏『宗教の起原及發達』五三八――五五三頁參照)。然るに面積歐洲に超へ、人口世界の四分の一を有する支那の大國に於て一卷の宗教的經典を發見する能はざるは、寧ろ驚くべきことに非ずや。勿論世には聖書無き宗教もあれば(マクスミュラー氏同前、五六三頁參觀)之を以て全く支那に宗教無しと斷ずべきに非ず。然れども予輩は他の理由よりして支那に宗教なく、よしありとするも其意識は極めて薄弱、且特殊のものにして亞里安、セミチックの諸民族に見る如き宗教の概念を以て之に臨むべからざることを信ずるものなり。勿論天、帝等の文字は詩、書以下の古典に數々見る所なれども、其意義大に今日の宗教に所謂神若くは天帝と異なるものあり。殊に詩經の如きは黍離に悠々蒼天、是何人哉と云へる殷墟の嘆(?)を初めとして、天作、旻天、有成、時邁、時競、思文、敬之、桓、般等に昊天、上帝のことを言ふもの甚だ多しと雖も、吾人は一も宗教的渇仰を認むる能はず。思文の章に天に

すに足らざるなり。支那人が思想の理想的ならざりしこと、又其の想像力に乏しかりしことは想見するに餘りあり。

亞里安民族とチュラニアン民族との間に想像力の差違あることの一例として、予輩茲に死に關する亞里安族の思想を擧ぐべし。そも／＼死てふ現象の怪奇不可思議なることは、夙に印度歐羅巴民族の想像を其解釋の爲に苦めたり。波斯人は以爲く、人の死するはDrug Nasu即ち屍渣が地獄より來り、之れを觸るゝものを不潔にし、又之を殺す、之れ惡神Angra Mainyu即ちAhrimanの作用なりとせり。希臘人も亦是と同様の考を有せり(Darmesteter, Zend-Avesta I. Intro. lxxxvi) 印度人も亦然り、(Rigveda X. 18.1) 皆死を一の力と見なせるなり。屍體を燒く風習は、畢竟不潔を清めんが爲に出でし者にして元と亞里安族より起原せるもの也。支那人にありては、亞里安人がかくまでに怪み究めたる幽玄無比なる現象に對して何等の疑問をも呈出するとを爲さゞりき。否彼等は凡てのものに向て無益なる疑問を呈出せざりし也。死は只一例に過ぎざるのみ。

今世界に於ける宗教的經典を數ふれば其主なるもの凡そ六あり、即ち印度に於

イラニアン族の關り知らざる所なり。印度にありては、惡鬼は追々宗教的思想より離れたれども、波斯にありては永く其一半を領し、アフラマツダとアングラマイニユの反對せる善惡の二主義は、マツディズムの首尾を貫通せり。而も印度に於けるIndraがAhiに對する如く、波斯にありてAtarはAzi Dahâkaに對し、Indra VritrahanのVerethraghnaに於ける、はたYamaのYamiに於ける等、吠陀的信仰の痕跡を止めて掩ふべくもあらず。且アフラの中のAhura Mazdaが漸くあらゆる神の父として考へらるゝに至りたるが如き、吾人をして吠擅達の梵天に對する印度思想の一神的傾向を想はしむるものあり（東方聖書中ダルメステテル氏ゼンド、アヱスタ、序論參考）。獨逸及北歐羅巴の神話も皆亞里安族固有の宗教思想に本くものにして、何れも想像力の富贍なると、宗教的向上精神の確實不撓なるとを證明せざるは無し。吾人飜て支那を見れば、其の最古の記錄と雖も、吾人に一の神話を語るもの有らざるなり、支那人は未だ曾て自然現象の中に彼等の宗教心を挑發するものを認識する能はざりしなり。ヱベル氏は史前の支那人が神話を有せるの證として周の祖先（?）が巨人の足趾を踏みて孕めりと云ふ傳說を擧げたれども（Weber, Weltgeschichte, I. S. 46. f.）是れ決して其の證と爲

るもの而かも「溢れたる泉を以て繞られたる所に井水の用無きが如く眞智を有せる婆羅門には吠陀は何等の用あることなし」（薄伽梵歌第二章、尙薄伽梵歌に就ては吾友姉崎正治氏が六合雜誌に掲載せるものを觀よ）と喝破せるに非ずや。其他カピラが吠陀讃稱の神聖を否定し、『ラーマーヤナ』と『マハーブハーラタ』は自ら吠陀に等しと稱し、マヌの法典に『取るべきものは精神のみ』と訓へしが如き、何れも吠陀に對する反抗の氣焰に非ざるは無し。是懷疑的傾向は明に六哲學派に萌芽し、佛教に到りて其頂點に達したるものなり。斯の如き考察的活動の凜々たる發展は、退嬰辭讓を旨とし、目前實際の利害に貪緣せる支那人の夢にだも知らざりし所の者也。

次に宗教的文學に就て少しく比較し見むに、印度歐羅巴民族は各〻其祖先がバクトリアの祖國に於て作りたる神話と傳說とを有し、外界の狀態に隨て多少之を變形せりと雖も、慥に之を繼續せり。吠陀アヱスタ、ホメール、獨逸及北歐羅巴の神話是れなり。印度希臘の神話は世人多く之を知れり。今波斯の所謂マッヅディズムに就て一言せむに、自然界に不易なる法則の存在すること及び爭鬪あること、而して是爭鬪に善惡の二素あること等は、全く印度イラニアン族の思想にして、純粹なる

愈々其の生活に離れ、知識と實際とは哲學者に於て毫も相關する所無きに至れり。蓋し支那には純理哲學なく、自然哲學無く又論理哲學無く只倫理哲學ありしのみ。其の教義の人生に密接せしは怪しむに足らざる也、是れはたチュラニアン人種の特色なりとす。更に一歩を進め、哲學歴史の進行に就きて之を觀る時は、是般の事體は更に明瞭なるべし。支那の學者は數千年の間、一向に孔孟を祖述して敢て其樊裡を脱する能はざりし間に、如何に亞里安族の思潮が宗教證典の束縛を破り、不羈自由なる理論的考察に依りて活潑々地の發展をなしたるかは、中世紀に於ける歐洲哲學史を解せるものゝ何人も熟知する處なり。印度の如き宗教的民族にありても亦然り。吠陀教の僧侶は一時宗教的はた社會的特權によりて一切の外道を壓制したりしが、思想の獨立自由を求むる反抗は、已に六哲學派の中に陰に陽に顯はれたり。勝論派若くは僧佉派の如きは殆ど無神論に近し、即ちカピラが最上實體の存在を否定し、カナーダが元子最初の活動をアドリシタに歸せしが如き、予輩は彼等と彼等が陽に排擊せむとせし異教者との間に何等の差違あるを見ず(ジエーコブ氏譯吠檀達綱要第十一頁參觀)。薄伽梵歌は吠檀達と共に吠陀の最も忠實なる辯護者として知らる

す。勿論予輩は印度哲學を以て亞里安族の思想なるを預想せり。何となれば博士バルドキン氏が熱心に論證せる如く（バルドヰン氏史前の民族、二一六―二四二頁參考）よし亞里安人が天竺半島に南下するに先ち Arabian Cushites が印度に植民したりしにもせよ、戰勝者たる、而も後世まで雜婚を禁じたる安里安族の根本的思想は依然として保存せらるべきを信ずればなり。若し夫れ印度、希臘兩哲學は其發達に於ては大に異なるものありと雖も、所詮風土の關係の然らしめし所にして、其元精的部分に於て其軌を一にせるものなり。

更に一歩を進め、哲學者其物に就て之を見る時は、東西兩洋一層明なる差別を見るを得べし。東洋の學者にありては其知識は即ち其生活なりしなり、彼は其の信ずる所の眞理を以て直に生活の原理となす。彼等が知識は實際的のものに限りしを以て、即ち實行すべからざる何等の敎義を有せざりしを以て、其の知識は多く自ら其生活なりしなり。故に論語は孔子の生活にして、道德經は老子の傳記なり。人生問題に於けるソクラテース以下の希臘哲學者は多少其敎義によりて生活したりと雖も、是れ寧ろ少數のみ。亞歷山、希臘、羅馬の哲學より近世に至れば其敎義は

的方法のみにして勉强力行を排し却て勤生勞神の末道となせり（道德經、十六、二十、二十八、五十二章參考）。

支那最古の哲學として見るべき易及び繫辭傳は更に明に是傾向を表はせり。抑も繫辭傳の哲學は進化論なれども、進化論其物を說明せむが爲に非ずして、依て以て人生の實行に應用せむが爲なりき。蓋し以爲らく、天地萬有の運行し變化し又發達する所以の道只一のみ。太極より天地剖判し、乾坤より男女成り、日月推移し、四時代謝し、生死交り、榮枯繼ぐ、皆是れ同一陰陽の理、隨時隨處、萬殊の事物に待應して其形を變じたるのみ、易の道即ち是れなり、之に順ふものは榮へ、之に逆ふものは亡ぶ。人事に吉凶あり、禍福あり、生死悲歡兩々相對して人は其間に展轉す、是れ則ち易道の順逆に依りて二氣兩面の反影を見るのみ。故に身を全くし、生を壽ふせむと欲せば、須く是大道に順應せむことを要す。故に君子の居を安ずる所は易の序也、居る時は其象を觀、動く時は其の變を見る、是を以て天之を祐く、吉にして利あらずと謂ふこと無し、と。予輩は是短文に於て一々擧證引例すること能はず、讀者は、繫辭傳に於ける一、二、四、六、七、十一、十二諸章を參照せられむことを望む。

是を要するにチュラニアン、及び亞里安兩民族の哲學思想は根本的に其趣を異に

學は孔子及其他の學者に比すれば多少純理哲學の思想を含有し、明晰なる世界觀を有せりと雖も、而かも道德經八十一章の大旨意は哲學上の論據によりて世に處し身を全うするの道を講じたるのみ。其世界觀として見るべき分出論の如きも、其人生觀に於ける復歸主義、將た厭世主義を演繹する上に必須なる方便として說明せられしのみ、其の實際的傾向を主としたることは恐らく孔子に讓らざるべし。唯人世の幸福を求むるの方法に於て一は出世間的にして一は世間的なるの差別あるのみ。且老子の復歸厭世の敎義と雖も、決して印度亞里安族が內面的考察によりて解脫を愉悅したると同日の論に非ず。印度人にありては解脫を得る方便は唯心的活動に依りて法界を厭離し、若くは之に反對し、若くは之を絕滅するにあれども、老子にありては、只大道の自然に結合し、從順し、若くは適應するにあり、故に涅槃と復歸と其形同じきも其實大に異なる所あり。ストア派も亦自然に順へと敎へたれども、老子の敎とは多少異なる所あり。即ち是派にありて德に達するの道に積極消極の二法あり。力行勉强我より進みて自然に合する積極的方法を以て、寧ろ退嬰消極的方法よりも主要なるものとせり。然に老子にありては只消極

の盡力を示すことなく一意自然の勢力に屈從し唯々現世に憑據して追從夤緣違はむことを是れ恐るゝのみ。現世を外にして彼等は何の求むる所なし故に宗教神話等の理想的産物は彼等の絶て知らざる所なりき。亞里安民族が心性の外界より優秀なるを認めたるに反し彼等は廣大なる自然界に對して人心の小弱にして言ふに足らざる者なることを認めたり。大自然界に對して唯心的說明を試みるが如きは彼等の夢にだも想ひ到らざる所其唯一の目的は只自然の法則に順應して天分の幸福を享くるにあり。故に其觀察の範圍は純ぱら具象相對の世界に止り絶對なる宇宙の實體等に關して殊に考察する所無し。彼等は時に是超自然的實在を口にすと雖も只依て以て人生實際の上に應用せんが爲なり故に超自然界及び自然界は人事界に關係する限りに於て研究せられたるのみ。一言すれば人は如何にして幸福なるを得べきか是問題は彼等が知識せんとする唯一の對象なりし也。

孔子は是支那思想の實際的傾向を尤も明白に且尤も誠實に代表したるものなり。後世の支那學者之を以て正學と爲したるは洵に以ありと謂つべし。老子の

するものと謂ふべし。

是を要するに印度哲學は吠陀及び吠陀以前にありては主ら客觀世界の讃美と解釋とに向ひたりしが六哲學流の興起するや單に宇宙論に止らず引て實際の問題に入り玆に解脫を以て人生至極の淨樂となすに至れり。解脫輪廻等の人生問題に關する觀念の起りしは實にウパニシャドに初まりしものにして吠陀讃稱の中には之を見ず、單に死者の靈魂はヤマの光明天の上に至りて永遠の福祉を享くると謂ふに止りしなり。是思想の徑行は希臘哲學に於てターレス以下の自然哲學者が主ら宇宙論を說き、ソフヰスト、ソクラテース以後に至りて初めて人生問題に容喙し、遂にストア、エピクル諸派に到達したると其趣を同うせりと謂ふべし。

飜て支那古代の哲學思想を顧みれば吾人は全く特異の面目を發見すべし。希臘、印度に於ける亞里安民族が其の簡素なる心情を拔きて大宇宙に面するや、兎にも角にも其の不完全なる知力を以て少しも臆する所なく、其存在成立に對して偉大なる解釋を予へんとしたるに反し、チュラニアンなる支那人は外界に對して全く受動的の位置を取り、自然を說明し、自然に抵抗し、若くは自然を厭離せんとする些

ること無し。

印度の各哲學派は上述の如く各々其宇宙論を有すと雖も、其側面に於て實際的教義を有することを忘るべからず。

吾等は何處より來れりや。誰によりて吾等は生存し、終に何處に歸せむとするや。吾等は誰によりて支配せらるゝや。吾等は一定の法則を歩み居るか。吁爾、神を知れる人々よ。

シエターシワタラ・ウパニシャドは實に是疑問を以て初まれり。僧佉派は內面的考察によりて物質と精神との差別を自識し、其自我の純一無垢にして現象世界にありて永劫不易なることを覺悟することを以て人生の至樂と爲し闍伊那、瑜珈派の如きは殊に實際的敎義を重じ、肉體の苦痛を以て精神の解脫を得るを目的となす。波儞尼派は文法上の深遠なる考察によりて、吠檀達派と同じく、梵の唯一實在を認識し、差別相の原因なる無明の束縛を打破し、梵に還沒するを以て無上の淨樂となせり。又斫婆迦派は瑜珈、闍伊那諸派の嚴酷なる禁欲苦行の敎義に反して快樂主義をとれり。如是實際的方面は希臘に於けるソクラテース以後の主觀的哲學に相當

の尤も著しきものを吠檀達派の教義を含蓄する所のウパニシャドとなす。ウパニシャドは吠陀教の意義を一層幽玄に解釋したる一種の祕密教にして、由來首尾を一貫せる哲學的系統を爲すものに非ず、只隨時隨所種々の方面より眞理を模索せんと務めたるものなりと雖も、其遍通の目的は一身の『自己』及び世界の『大自己』を知らむと欲するにあり。是自己は當初は物質的のものとして考へられしが、其概念は人智の進歩と共に精神的となり、遂に肉體とは全く異なれる自覺的自己として考へらるゝに至れり。其の教義に公開、祕密の二部ありて、其説明の方法は多少相違せりと雖も、要するに梵天の唯一實在を豫想し、宇宙萬有及び個體的自己は凡て是最上實在の分出せる一部にして個々獨立自存せるものに非ず、賢人哲士は自己を冥想することに依りて宇宙の本體たる梵の大自我に還沒し得べしと謂ふにあり。其他勝論派は宇宙を極微の結合なりと觀ずる多元論を主張し、瑜珈派は個體的精神を唯一なる宇宙的精神の發現となし、自然界即ち物質界を以て是現象を生せしむる差別的原理なりとせり。其他各學派の所論多少相異なれりと雖も、ソフヰストト以前の希臘哲學者の如く、何れも大宇宙の成立を解釋せんと企てたるものに非ざ

哲學との比較を爲さむが爲に殊に讀者の一顧を煩したるのみ。

希臘半島に於ける亞里安族の哲學は畧々上に述べたるが如し。今暫く印度に於ける亞里安族の思想を尋ぬるに、其思想變遷の傾向の甚だ希臘に似たるものあり。吠陁以前の信仰に就ては暫く言はず、そも〳〵印度人も亦他の印度歐羅巴族の如く隨時隨所、山川、草木、日月、星辰を神化して之を崇拜したるの時代あり。然れども漸く因果體相の理を辨へ、人間と自然との關係に想ひ到りたる時は、彼等は最早や、如是信仰を以て滿足すること能はず、進で宇宙萬有の根本主義を知了せむことを欲す。『誰か祕密を知れりや、誰か玆に之を告示せしや、何處よりか是の限りなき物象の出で來りしや。神自らの存在せしは後世のこと也、誰か此大宇宙の何處より出で來れるかを知るものぞ。最も高き天に在す最も高き聖者、彼はそを知らむ、否恐くは彼も之を知らじ。』（プライデレル宗教哲學卷三抄錄）。梨倶吠陀の詩人が斯の如き疑問を唱ふるに至りては、人格的神たるインドラ、アグニ等は最早や從來の如く宗教的主權を掌握すること能はず、吠陁教は如是偉大なる答案を呈出すること能はざる也。吠檀達教を初めもろ〳〵の婆羅門哲學は是解釋の爲に喚起せられたり。其

知覺、觀念、知識の現象に就て疑問を呈出したるに過ぎずして、慾望あり、道德ある人生の實際問題に入りて當來の實務を思議することを爲さゞりき。ソクラテースに至りて初めて眞面目なる道德に就て立言し、獨りソフヰストの如く個々の知覺、觀念に就て爲すに止まらず、夙に知と德とを以て人生最高の部能となせり、而かも尚未だ人生の價値問題に就て幸福の大小を論ずるに至らず。プラトーン、アリストテレース、よりエピクルス、ストア諸派に至るに及び、初めて哲學上諸種の問題を捉へて之を人生幸福の一契點に集中し、希臘哲學は玆に其の主觀的頂點に達したり。希臘哲學の是期に於ける發展の要領は所詮客觀より主觀に進み、宇宙より人生に進み、知覺より意志に進み、物理より倫理に進みたるもの也。然れども是れ決して希臘哲學最後の歸趣を示すものに非ず。若し夫れ一轉して猶太、亞歷山の哲學に入り、再轉して新ピタゴリアニズム、新プラトニズムに入るに及び、舊時の思想を襲ぎて更に本來の新面目を啓きたりと雖も、其發達の順序の如何に外界より內界に移りたるか、又其推移の次第の如何に考察的なりしかは、吾人の注意を要する所なりとす。以上は苟も哲學史を解するものの何人も熟知する所なれども、後文支那

に於て尤も明晰に發揮せらるゝを常とす。故に予は暫く古代文明史に於て東西兩洋の思想を觀察せむ(茲に謂へる東西は地理上より別てるに非ずして、東洋とは主として所謂チュラニアン民族を云ひ、西洋とは主として亞里安民族を指せり、故に印度波斯の如きは西人の所謂東洋に邦すと雖も、予は之を西洋の中に編入す)。

先づ哲學思想に就て一言せむに、希臘哲學の歴史は何人も知る如く、宇宙論に初まり、學者が殊に倫理人生の問題に指を染めしはソフォスト、ソクラテース以後なりき。即ちターレス以下のイオニアの自然哲學者は、專ら可覺的現象の區域に止まりしも、而かも物質的原理によりて宇宙の成立を考索したる物活(ヒロツォイスト)論者なりき。ピタゴラス派の哲學者は、數量を以て事物の形質を構成するの原理となし、パルメニデス以下のエレア派の哲學者は實在の唯一不變なるを主張したり。要するに皆是れ客觀世界に對して其存在變化の原理を究めしものにして、吾人は是間に人生の實務に關する何等の敎義をも求むる能はざるなり。夫のアナクサゴラスが νοῦς の自存と全能を説くところに至りて、希臘哲學の局面は一轉して詭辯學者に移り、茲に人間思想の確否に關して主觀的考察を爲すに至れり。而かも是れ只主として

世界の思潮に先鋒たらむことを期するの吾人は、吾人が實際的思想の素地の上に亞里安民族が純理的傾向をとりて勸戒調和するの勢を取らざるべからずと。烱眼なる木村君は予輩が言を捉へて揚言して曰く、亞里安人は東洋人よりも遙に實際的なり、高山君が東西比較論は全然根據無き妄言妄語なりと。吁果して然るか、予が東西比較論は彼の論文の主題に非ざりしを以て、簡單なる數行の文字は素より予が意を盡すこと能はざりし也。予は何等の理由をも與へずして、漫然他を排斥する無法なる論者と論鋒を交ふるの無益なるを知らざるに非ずと雖も、已に他の爲に何等の根據無き妄言妄語なりとまで罵詈せられたる以上は、言者が當然の責任として、先づ是結論に達したる由來を明にし、以て讀者の高判に供し、次に木村君に向て予が說を妄語なりと痛罵せられたる十分の理由を問はざるべからず。而して他の論點を措て、殊に東西思想の比較論をなさむとするものは、獨り木村君に對してのみならず、世界に於ける我邦文化の位置を明にする必要ある今日、殊に學者諸君の一顧を煩はさむと欲するが故なり。

數千年の歷史の中に現はれたる民族の特質は其の最も至醇なる形に於て古代

は失禮ながら木村君が公平なる眼を以て再讀の榮を給はらむことを望む。

木村君が予に反對する主點は實驗哲學の精神を顯さんが爲に形而上學を排するにあり、予も亦是點に向て氏が妄を辯ずべし。然れども君は其他予が所説に向て數多の異議を挾めり。予を以て之を見れば所詮是れ君が曲解詭辯の結果にして、木村鷹太郎君の名譽の爲には寧ろ不問に附するを可とすべしと雖も、君が揚足取の如何なる性質のものなるかの一例を示さんが爲に、且は其問題の稍重大なるものあるを以て、左に少しく之を辯せむ。

予は先に世界に於ける東洋思想の位置に就て一言せむが爲に、其の西洋思想に對する簡短なる比較を爲して曰へらく、東洋人の思想は實際的なり、彼にとりては如何なる知識も人生の實務に利害の關係を有するの限に於て其の知識たる價値を有す、故に彼は深く純理を思索し、形而上的事物に向つて幽遠なる考察を爲すこと無し、是れ彼が長所にして同時に又短所なり。西洋人、殊に亞里安人の哲學思想は之に異なり、一方には其の思索は益々抽象的となり、他方に於ては益々實踐躬行に離る、是れ其長所にして又其短所なり。東洋人たる吾人は、思想的大國民として

を撿覈せむとする木村君の意に滿たざりしものありしならむ。予は君の所論を讀み、予が用意の足らずして偶々君の誤解を招きしもの多きを知り、深く自ら之を慚づ。

然れども予は君が勇壯なる議論に於て毫も得る所無かりしを悲む。あはれ形而上學を排し實驗哲學の精神を明にせんと呼ばはりたる君が議論の如何に平凡膚淺なるよ。予はむしろ斯くばかり薄く、弱き地盤に立てる君の聲の、如何にしてかくは大に高きを得たるべきかを想ひて、轉た君の大膽勇氣あるに驚く。なみなみには優に解し得らるべき章句の瑣尾を捉へて、我は顏に吐かれたる氣焔とやらの高さによりて、思想家たる君の面目の如何ばかり高まりたるかを見て、予は寧ろ君の爲に之を惜む。

總じて他の所論を評せむには、被讀者に對する讀者が當然の義務として先づ前後の語意により大體の歸趣を誤らざらむことを務めざるべからず、彼の一句を捉へ、此双語を摘み、之を自家の成心に投じて之を云々するは所謂揚足取の所爲のみ。予が先に掲げたる一篇はやがてかゝる論者の頂門に一針を加へたるなりき。予

東西思想の比較一斑

木村鷹太郎君の駁論に對して、其一

本論は予が養痾の爲に昨年十二月より滯在せる温泉場の客舍に於て草せしものなり、座右に參考書少きが爲に已むを得ず記憶のまゝ、又は備忘錄に記入せるものより例證を引きたれば中には少々の誤謬なきを保せず、且病餘身心共に疲勞し居れば其行文自ら木村君のゝ如く雄壯なること能はず、讀者諒焉。一月二十九日於熱海客舍。

予が去年十一月の本誌(哲學雜誌)雜錄欄内に於て『島國的哲學思想を排す』と題せる時論一篇を揭げしは、聊か今日學者の思索の方法が日に偏狹固陋に傾き、一向に己を樹てむことに急にして、他に向て眞摯なる含蓄的研究を作す者いと少きを慨きてなりき。惟ふに當今學術界の公平なる觀察者は、夙に予輩の言を諒せられしならむ。然るに言の木村君の上に及べるものありしが爲に、端なくも篤學なる同君の激怒に觸れ、予が僅々數頁の所說に對し無慮數十頁の反駁を辱うしたるは、予輩の幾重にも好意を謝する所也。彼の一篇は其目的以て單に學術社會の注意を喚起するにありしを以て、其用語々氣の如き素より精確なる科學的嚴密を以て一切

照せんことを希望するにあり。比較的攻究の必要は近時漸く學者の間に認識せられたるが如し、然れども其識見卑淺にして其思索の粗笨なるもの多きは頗る悲むべしとなす。例せば『嗜好は美學の基礎なり、日本の幽寂の美は西洋美學の二大範疇なる優美と壯美との何れにも屬する能はざるが故に須く東洋の新美學を作るべし』と論ずる者あるが如き、平生美學を專攻する予輩と雖も呆然として言の加ふべきを知らざる也。予輩は我邦の青年學生に向て、敢て獨創の意見を構成する前には豫め十分純然たる客觀的考究に其身を委ねむことを勸告するものなり。一旦に一書を讀みて夕に一說を構へ、猥に異を樹て新を衒ふは遂に思想的大國民の風度に非ざるなり。

（卅八年十一月）

する能はざる所以の一なり。

序に木村鷹太郎君は『近來倫理學上に形而上學的の論を入るゝこと流行す、之れ思想の退歩なり』と云へり。予輩は其の思索の偏狹卑淺なるを惜むと共に、聰明なる氏が何故に識者の一嗤を買はむが爲に、故らに斯る放言を臚列したるかを怪む。氏又曰く『近來大學々生中の或人等より發表せられたる倫理學説の傾向に由て見る時は大に形而上學的にして淺薄なり』と。予も亦今六月より九月に亘りて道德の理想に就て本紙上に鄙見を吐露せることありしもの、木村君の言に對して聊か路傍の人と一般ならざるものあり。聞く、君は形而上學打破を以て自ら任ずと、理由無き斷論を列ねて漫に他を罵詈するをやめて、何ぞ正々堂々の論鋒を用ひざる。證據無き惡言は偶々自家を賤ふするのみにして、毫も他を輕重するの力無きものなり。遮莫、予輩は今日黄口の青年が動もすれば好で大家碩學にして初めて爲し得べき隨筆樣の斷文を弄ぶの弊あるを悲む。

以上少しく岐路に入りたるが如し。要は島國偏狹の習氣を擺脫して成るべく其胸襟を濶くし、忠實なる客觀的考察と精細なる含蓄的批評によりて具に商量比

物は各々其歴史を有す、吾人が爲し得べき最大の効果は歴史的理想に向て其發展を奬勵し、助長するに存す、あらゆる客観的價値は歴史を外にして存在するものに非ざる也。經驗論者或は謂はむ、歴史は因果の繼續のみ、豈所謂理想なるものあらむやと。是れ甚しき謬見にして、經驗論が遂に哲學として立つ能はざる主なる理由の一なり。畢竟是れ目的學に就て誤謬ある概念を有するの弊に坐す。(三) 予輩は信ず、器械的説明は其れ自らに於ては決して虚僞に非ず。抑も事物を觀察するに因果の點よりするものと目的の點よりするものとの二法あり。是二者は由來異級の平面に在るものにして、其性質上毫も相衝突すべきものに非ず、唯是器械的説明によりて或事物の完全終極の解釋を得んと要し、又得べしと迷信する時、初めて虚僞に陷るなり。器械的説明は所謂 Progressus in infinitum なり、事物の終極に就て何等の説明を與へ得るものに非ず。是れ只目的學の立脚地より初めて爲し得べきのみ。(四) 故に若し宇宙の進行に就て或合理的意義、即目的を案定する能はずむば哲學は慥に其一脚を失ひたるものなり。理想てふ觀念が純正哲學の根據に立つは洵に必至の理なりと謂ぺふし、是れ倫理學、審美學が遂に全く經驗説を以て説明

すとせば、予輩はせめて我學者が外物に向て常に忠實なる客觀的考察を爲し得るの餘裕を蓄へむことを切望せずむばあらず。身未だ獨逸語を能くせず、而して獨乙哲學を學ばずして可なりなどと言ふが如き、意氣頗る勇ならずとせず、而かも遂に思想的大國民の雅量に於て缺損する所あるを奈何。

我國人の思想の主觀的に偏するや、安心立命を以て直に哲學の能事終れりと思惟するもの少からざるが如し。安心立命、是素より哲學の目的なり、然れども『安心立命』にして正確なる客觀的根據を有するものに非ざるよりは、何を以てか傖夫野人の迷信に異なる所あるべき。思想の深淺は安心の高下を規定す。是を以て『主觀的に滿足を與ふるもの、必ずしも客觀的に正確なるものに非ず。哲學者が俗人と異なる所は世界最高の思想に駕して安心立命の地を求むるにあり。且夫れ』人類思想の前面に立ちて、後代の爲に一片進歩の標章を止めずむば、學者の責任何によりて全ふしたりと云ふを得べきか。予輩は近く吾友建部君の實在論に慊焉たらざる所以の一は實に爰に存す。斯の如きは所詮歴史的精神の缺乏に基因するに非ざるか。言ふまでも無きことながら、吾人は歴史の中に生息す。宇宙の事

く科學の性質本領を解するに及びて終極の疑問の遂に秤量規矩によりて釋了すべからざるを悟るや、茲に再び純正哲學の必要を感ずるに至るなり。科學自らも亦事物終極の原理を解せむが爲に、預め知識の能否、範圍等に就て敎を純正哲學に待たざるを得ざるに至る。予輩は斷言す、歷史は哲學に非ず、起原發達を以て一切を說明せんとするものは其愚遂に及び難し、今日の極端なる經驗論者は今世紀の初期の哲學史を實地に復習するもの也。さりとは餘に御丁寧過ぎたりと謂はざるべからず。

予輩を以て木村君を捉へて故さらに言を爲すものと爲す勿れ。以上は只我學者の思想の如何に偏執にして實際的なるかの一例を擧げたるのみ。さはれ純正哲學の本領は從來多く世人に誤解せられたり。之れ洵に已むを得ざるものあるべし、然れども苟も世界の大思潮に棹し、身學者を以て立たむと欲するものは、濶大なる胸襟を披き、眞摯なる客觀的考察と精細なる含蓄的批判とを以て他に接せざるべからず。予輩はもし出來得べくむば我學者諸君に向て一定の哲學主義を構成することの餘りに早急ならざらむことを乞はむと欲す。是れ實際望み得べから

きや。予輩平生務めて寛裕ならむを欲す、而かも我學界百年の爲に斯の如き論法を歡迎する能はざるを恨みとす。今世紀の初に當りてオーギュスト・コムトは人心發達の歷史を區劃して神話的、純正哲學的、及び積極的の三段となし、純正哲學の時代漸く去らむとするを說き、形而上學は國民の病的思想なりとまで廣言せり。一時歐洲の思想界は慥に彼が影響を受け、積極論的、はた非知的傾向は到る所の新紙雜誌に現はれたりき。然れども人心は遂に此の如き驚くべき預言者の告示によりて其本然の思想を枉屈する能はず、純正哲學に對する知識的慾望は既にロック、ヒームの本國なる英國に於てすら、益々盛になり行けるに非ずや。人は自然的なると同時に超自然的なり。純正哲學によりて安心立命の地を得むとするは人心の本然に本く。夫の淺膚皮相の輩己を推して他を强ひんと要するも豈久しく其功あるを得むや。純正哲學にして無用ならば宗敎、美術、文學も亦無用なり。サムブルを取りてバランスを打ち得るものに非ずむば一切事物凡て無用ならむのみ。予輩は斯かる黃金時代の來ることを望まざるなり。蓋し科學の方に開くるに當てや、一時人心之に眩惑して依て以て一切萬有を解說し得べしとなす、而れども漸

日斯かる意見を吐露するは頗る奇怪なり。事新しく言はずもののことながら、觀念の起原及び歷史は旣に一び觀念として顯はれたる後の意義及び眞僞を決定し得べからず。一の觀念の確否は全く觀念其物の現實的內容に依て批判せらるべき者なり。空間てふ觀念の起原は幾何學の命題の眞僞と何等の關係ありや。よしエムピリチスムスにして正しきも、將たナチヴィスムスにして正しきも、三角形の三角の和は常に二直角なり。幾何學の命題は其れ自らに於て其の眞僞を決すべきのみ。故に純正哲學の第一義は知識論によりて觀念の起原を知ることに非ずして、只是觀念の內容を明晰にし且其相互の關係を確實に知るにあり。是れ一見炬火よりも明なるに非ずや。且夫れ尤も明晰なる觀念は最も終極の發達に求めざるべからず、單に知識論によりて純正哲學の問題を決せむと欲するものは、冠履を顚倒せるものと謂ふべし。木村君の思辨は概ね是類なり。更に君に向てロック、ヒュームム等自らの已に一大純正哲學的假定の上に立てることを看取せむを望むが如きは、抑も又無理の注文なるべし。而かも口を開けばカントを淺薄なりと誣り、獨逸哲學の思想は幼稚にして學ぶに足らずと罵倒す、何ぞ其の自ら重ぜざるの甚し

め任意に想像して而して後世人之に和したるものに非ずして、人性本然の必至なる需要に本く。木村君は哲學歷史を以て一二學者の製造物となすか。カント徹せば獨乙近世の形而上學は與らざるならむと云へるが如き、洵に皮相幼稚の見なりと謂ふべし。然れども元來審美的嗜好に乏しき人にとりて、美術は何等の價値無きが如く、勿論如此慾望無き人にとりては純正哲學は無用の長物たるに相違無し。蓋し木村君の如く、生れつきたる人は僅に知力的勞力の一半を節儉し得ることを上帝に感謝するの義務あるものなり。

純正哲學を言ふものは知識論を知らずと、木村君は連りに言ふ、何ぞ事理を解せざるの甚しきや。げにや木村君が所謂曠世の大哲學者ロックは凡ての哲學的研究は先づ吾人が觀念の起原の研究を以て初まらざるべからずと說きたりき。木村君が所謂淺學無比なるカントも亦吾人が能力及び知識の範圍の批判は純正哲學の研究に先だゝざるべからずとの旨意を以て、例の純理批判を著はしたりき。然れども是れ謬見なり。發達論と現實論とは其の意義の關係に於て全く其範圍を殊にすることは、今日苟も哲學を口にするものゝ知る所、聰明なる木村君にして今

木村君は、よし一言も其理由を述べざるも、斯る結論を公告するまでには精細確乎たる論證を經たるべければ也。君が此文は古來碩學大家のものせらるゝてふ隨筆樣のものにして、何等の證明なく、單に吾人末學の注意を惹起するものに過ぎざるを以て之に對して予輩の意見を述ぶるの要なかるべし。然れども異を好む世人、淳朴なる地方教育者の、不幸にして未だ木村君の雷名を耳にせざるものは、或は其説を奉信するもの無きを保せず。且世の淺薄なる經驗學者が純正哲學を難ずるもの、百年以來同一の論法に出づるを以て、茲に二三言以て其妄を辯ずるは穴勝徒勞にも非ざるべきか。

純正哲學は人心の至性に本くものにして、知識終極の原理と宇宙の本躰とを明にせんとするもの也、吾人は一個の人間として個々殊別の現象に終局する能はず、尚一歩を進めて實在の眞相を知らむことを希ふ。個々の現象は多く散漫として矛盾に滿つ、吾人は其原本的原理の中に其調和を見むことを希ふ。是を以て吾人は特殊の科學が教示する所の特殊の典則を以て滿足すること能はず、進で是衆多の典則を貫通せる終極的原理を案定せむことを希ふ。斯の如きは一二學者が初

か。況んや東西文明の調和を說くの今日、弘く兩洋の思想に對して客觀的はた含蓄的批判を以てするに非ずむば、如何ぞ二十世紀の思想界に立ちて、其木鐸となり、先鋒となるを得べけむや。予輩は思ふ、東洋の實際的思想は將來世界思想の恰好なる調和點となるべきもの、宜しく乘じて進むべく、守りて退くべからざる也。

近頃敎育時論に木村鷹太郎君の『思想界の雜感』と題する壯快なる一文を讀むの榮を得たり。曰く『形而上學を喜ぶものは未だ知識論に淺き輩なり、獨乙の形而上哲學は思想の混亂と淺薄との結果なり』。又曰く『カントは思想歷史に大害を殘したる人なり、英國に於てカントの前に於てロック、ヒューム等の大哲ありて懷疑論――實驗論を唱へ、全く形而上的の妄を打破りたり。然るにカントは是等先哲の論を知らず、之を不問に附して又々形而上の問題を引き起し、今日所謂獨逸哲學と云ふ一種無益の哲學を成すに至れり』。又曰く『憫むべきかな、形而上學者、ロック及ヒュームを讀め、必ず從來の愚なりしを感せむ、カント學派の哲學は研究せずして可なり』と。斯く引用し來らば、氣早やなる讀者の中には或は木村君の健康に就て疑を挾むものあらむ、然れども如此は寧ろ無禮なる疑なるべし。何となれば

か、又た現に妨げつゝあるかは、當路の士の夙に熟知する所なるべし。殊に、獨逸哲學の如きは、未だ曾て學ばざるものは、遙に仰で以て高遠となし、幽玄となすも、遂に之を解するもの鮮し。少しく自ら學びたるものは、其思想の抽象的なるに驚きて漫に排けて空理となし、無益となす。若し夫れ眞に其堂に上り、カントヘーゲル、ショペンハウエル等と同一の平面上に對話するものに至ては、極めて寥々たるが如し。獨逸人はアリアン族の粹、其思想は風土歴史の上より一種特殊の發展を爲せしもの、其の言ふ所東洋の日本民族に近からざるものあるは素より其所なりとす。もし寛裕他に對し、沈靜自ら持し、具に商量比較の勞を忍ぶに非ずむば、爭でか茫々たる學海に棹して彼岸に達するを得むや。物質的功利の有無を以て直に事物の眞價を推斷するが如きは遂に思想的大國民の風度を缺けるものと言ふべし。獨逸人も日本人も同じく人なり、嘗て三論、法相の空宗を歡迎したる國民は、奈何ぞ今日獨逸哲學の妙理を會心するの雅量を缺くべけんや。況んや純正哲學的希望は敢て甚だ本邦人に乏しとなさず、是れはた人心の至性に屬するもの、區々物質的知識を以て漫然之を窒抑せむとするは果して學者の本分を盡したりと謂ふを得べき

をなせし主義を以て直に實踐の主義となせし所以を知らざる可らず。蓋しかの實際的主義は直ちに其實際に向つて一種の意義を有すべきものなり。是點より見る時は其敎義を以て直に實踐の主義となせし印度、希臘、支那の古哲は慥に人生及び哲學の全分を理解したるものなり。然れども後世文化進み、學術開くるに隨ひ、アリアン族の思想は漸く一方には益々抽象的に進み、他方には愈々實踐躬行に離る、是れ一分の學のみ、人生全分の學と言ふべからざるを。是れ或は已むを得ざるの結果ならむ、而かも東洋の實際的思想は是點に於て一等を西洋に駕するものと謂はざるべからず。よしや今日東洋は哲學、科學に於て遂に西洋に及ぶ能はずとするも、其學術一として人生の實務に關して或意義を有せざるもの無きの一點に於て慥に西洋に優れる也。實際的人民として吾人は常に唯一の目的を人生の上に置く、故に如何なる抽象的學術も一度び吾人の手に離るれば、忽ち具體實際の意味を有し、社會人生の事物に向て或意義を有することを誤らざる也。自己を識るは最上の知識なり。實際的傾向の我邦人の長所なるを認めたるの予輩は、同時に其哲學思想として一大短所なるを認めざるべからざる也。

想ふに吾邦人の思想の極端なる實際的傾向が如何に形而上學の進歩を妨げし

僅に古事記ありと雖も予輩は性質上大に吠陁、アエスタ若くは希臘、北歐羅巴の神話に異なるものあるを見る。希臘哲學の初期は純然たる客觀世界を以て其思索の對象となしたりき、其の人生問題に入りたるはソフォスト、ソクラテース以後にあり。然れども支那の詩、書、易は初めより人生の實際問題を離るゝ能はざりき。西洋に於ては哲學思想の歷史は常に進步的なり、凜々として恒に活潑なる發展を爲し來れり。東洋の思想は之に反して多く保守的なり、退嬰辭讓を旨として、動もすれば獨り其安心立命を樂まんと欲す、故に予輩は支那古代の哲學に於て所謂歷史的發展なるものを見る能はざるなり。予輩は日本民族の思想が全く支那的なりと信ずる能はざる幾多の理由を有す、然れども其のアリアン族に近きよりは寧ろ支那人に近きことは爭ふべからざる也。日本人は支那人と同じく實に實際的思想に富めるの人民なり、是れ一の缺點なり、然れども實際的人民として日本人の思想は印度歐羅巴族に見るべからざるの長所あることも亦大に注意せざるべからず。蓋しあらゆる人間の活動は、其の有形無形を論ぜず、所詮其能動者たる人間の活動なり、故に其本來の性質上、當に人生に關して或意義を有する限に於て、其價値

入を是れ主とす。先づロックを讀みたるものは終生ロックを脱する能はず、先づカントに接したるものは終生敢てカントの外に出でず。畢竟彼等が胸襟の窄少なる、莞爾容與として優に比較的研究を爲すの餘地無きの弊に坐す。斯の如く見來れば、彼等が所謂一定の見地なるものも亦甚だ有難きものに非ざる也。若し滔滔たる衆俗と偏見者流と相比周し、一世靡然として誤て風を爲すあらば、島國民族の思想は將に永く苟安小成に局蹙して遂に發達の期無からむとす。是れ深く憂ふべき事に非ずや。所詮是れ狹隘なる主觀的傾向が思想界の趨勢を左右するの致す所なり。是當路の障壁を打破し、博大なる心容を拔きて汎く客觀的考察を奬勵するに非ずんば、爭でか世界的思潮の前面に立ち、二十世紀の思想界に向て日本の名譽を昂揚するを得むや。

東洋民族は概して實際的なりとは吾れ人の常に考ふる所なり。讀者若し試に倫理、哲學、宗敎の上より印度、希臘、支那を比較せば燎然として明ならむ。宗敎は理想の上に立つものなり、支那日本に何等固有の宗敎ありとするか。アリアン族の神話は明に其の想像的、沈思的の民族なるを證すと雖も、東洋遂に一の神話なし。

試に是點より我思想界の現狀を觀せよ。苟も少許の知識を有するものは早く已に一定の見地を占め、一切の事物之に照準して其是非を批評するの僻なきか。彼等は偏に概括に急にして資料の精博ならむことを願はず、一部特殊の典則をとりて直に依て以て全分の事物を拘束せんと要す、而かも遂に同異全分の差等に就て其妄を悟るに由無し。定形已に胸に成りて外萬殊の事物に接す、己れに同じきものは之を取り、異なるものは之を捨つ、是を以て事を制するや情を以てし、物を別つや類を以てす。於是偏執なるものは益々偏執となり、其學愈深くして其迷愈大なり。彼等自らは素より公平至正なりと思惟す。是れ當に然らざるべからず、何となればば人は其知る所のものゝ外は何物をも信ずる能はざればなり。既に成心を以て萬物を觀る、苟も一見己れに同じからざるものは深く討索尋究の道を悉さずして一概に淺薄虛僞なりと罵倒す、故に碩學大哲は彼等に於て何等の研究を要むるを得ず、況や又何等の歎美をや。彼等が自信の強堅にして意の壯快なるは甚だ喜ぶべきが如しと雖も、偏に己れを樹つるを知りて他を容るゝ能はず、徒に其異を知りて其同を察せざるの小量は頗る憐むべしとなす。彼等多くは素據る所無し、只先

島國的哲學思想を排す

人は言ふ、島國民族は概して氣字狹少にして他を容るゝの量に乏しと。果して然るか、予輩は是言の我思想界の現狀に適切なるものあるを見て甚だ之を悲む。想ふに殆ど全く世界文化の潮流に觸れずして東瀛の端に邦すること三千年、一旦文化の東漸に遇ひ、三十年來冉々として移植模倣に暇あらずと雖も、深く國民の稟性に根蔕せる島國的習氣は俄に擺脫すること能はず、其思想動もすれば偏狹固執に陷り、寬裕博雅の襟度を缺くは蓋し又已むを得ざるの勢ならむか。遮莫、國民的思潮の前面に立ちて提撕指導の責ある學者諸君は此際大に戒心せむんを要す。

予輩後學の徒敢て此倖々の言を爲すは、先進の諸氏に對して少しく遜讓の意を盡さゞるに似たり。然れども予輩をして忌憚なく言はしめば、從來我邦學者の思想は餘りに主觀的なるに過ぐるなり。勿論人に向て主觀的ならざれと勸むるの無理なるは尙全く自己を捨てよと求むるの無理なるに等しからむ、然れども予輩の望む所は、只各自の主觀を擴張して成るべく客觀に近からしめよと謂ふにあり。

に長くして旨とする所のあまりに飽氣なしとするも、何はともあれ、吾等は古典攻究の價値と歷史的研究の必要とを認めたるの一點に向て全幅の同情を寄するにためらはざるべし。

吾等をして古來の大思想の上に立たしめ、高遠悠大なる精神に皷吹せられて其の建築に一片の瓦を添へ、其の織文に一縷の糸を加へて、後代の爲に一際美はしく豐なる遺物を造らしめよ。

實に然り、洵にシルレルが言ひけん如く、古の尊き知識はあらゆる時代に活き居るなり。世界の思潮は幾千年の時を通じて賢き人の思想に與へ、又貢がれて、遂に今日の文化を成しゝなり。是故に世界的思想の歷史に於ける自己の關係的位置を知らんと欲せば、歷史上の發展を知悉せんことを要す。是れ今日の所謂歷史的研究の思想の修練上にも、發達上にも、絕對的に必要なる所以なり。そは歷史的發達を外にして所謂獨創の意見なるもの有るべき由無ければなり。吾等の言ふ所を以て不急無用の論なりとなす者あらば、其人は當今文學界の如何に歷史的精神に乏しきかの實情を知らざるの人なり、吾等豈辯を好む者ならむや。(二十八年十月)

し、打て一團となし、急がず、逼らず、着々歩武を占めて不退轉に精進するの向上的精神を興奮し、以て世界的大思潮の先鋒たらんことを期せざるべからず。東西思想の牴觸を見ては急遽狼狽して東洋的科學の創作を叫び、先哲古典の浩瀚解し難きを見ては意氣俄に沮喪して漫に獨創の意見を唱ふるが如き、之れ近眼者流に非ずむば、薄志弱行の徒のみ。吾等は再び前言を提起す、日本將來の學者に要する所のもの三つあり曰く忍耐、曰く精勤、曰く及び遠大なる目的と。

世にはかゝる近眼者流の多き中に間々

古典攻究の必要

を認めたる青年學者の卓拔なる意見に接するは吾等の甚だ喜ぶ所なり。先には哲學雜誌に『現時の學術と古典の攻究』と題する快心の一論文を見、やがて前號に讀者の注意を惹きたりしが、近頃又帝國文學紙上に、上田敏君のものせる『典雅沈靜の美術』と題する麗はしき一文に接し、一讀傾蓋の思あり。よしや情熱の高きに眩みて君が論に幾多の矛盾と撞着ありとするも、よしや薔薇花の如き美はしき衣を纏ひて、君が審美論のいかにも若々しく見ゆるとするも、よしや君の論の前置の餘り

は連續なり、生ける發達を爲しつゝあるなり。眞に世界文化の進歩の爲に貢獻する所ありし學者の思想は、今尚昔の如く凛々として活き居るなり。プラトーン、アリストテレースの思想を死せりと謂ふものあらば、其人は學問の何たるを知らざるの人なり。誠に過去の思想を理解するものに非ずば、如何でか將來の學問に益することを得べき。明治の學術界は知新を名として近眼膚淺の弊に陷りぬ、との哲學雜誌の一記者の苦言は、洵に時弊に適中せりと謂ふべし。今や我邦の青年は古典の研究は扱て措き、あらゆる先哲の思想を斥け、世界的思潮の外に身を拔き、單身赤手所謂『獨創』の思想を發揮せんとす。腹空しく心のみ高き年少の鋭氣、無邪氣にして愛すべきもの無きにも非ずと雖も而かも實學に益なくして徒に後生を誤るの少からざるは識者の潛に眉を顰むる所なるべし。今日我邦は殘念ながら未だ西歐の思想を理解するに至らざるなり。よし東西思潮の優劣は暫く之を言はざるも、吾等は尚未だ西洋の文明を綜合し得るの位置に達せざるなり。まして二思想の上に超駕して之を勸解裁斷し得るの日に至ては尚甚だ遠からず。大なる事業は大なる準備を要す、深く考へ、博く學び、古今東西の思潮を尋究し、拆て分朱と爲

勤と之を導くの遠大なる目的とによりて初めて成され得べきのみ、一時無謀の客氣は之を謹まざるべからず。今日の青年は兎角

獨創の意見

を作らんことを急ぐ、動もすれば大言して曰く

今日の書を讀むもの死文死語を見るのみ、博く讀まんことを思ふて深く思ふことを爲さず、別に一隻眼を具ふるにも非す、特得の見地を有するにも非ず、徒らに其の讀み得たる死文と死語とを剪裁して其識を衒ふの要に供ふるに過ぎざるのみ。此の如くにして已まば、是れ六尺の身を以て糊と剪刀との用を爲すのみ、嗚呼人にして獨創無し、鸚鵡と何ぞ擇ばむ、猿猴と何ぞ擇ばむ。

是れ東洋の新美學を作れと論せしと同じ人の語なり、當今是と同じき考を有する一派の青年甚だ多きが如し。其意氣や洵に嘉すべし、其の時弊に中れる所も亦全く應與の益なしとせず、而かも只一時の空論放言に止まりて實行の決して之に伴ふ能はざるは論者自らの已に萬々承知のことなるべし。まことや世界の思想

と言ふが如きは論者自らが西歐美學に於ける知識の皆無なるを自白したるもの、是の如き意見を懷て勸解裁斷を口にするはそも〳〵分外千萬の事なりと謂はざるべからず。美學は美術を説明するものなるも、しかも美學は單に美術によりて立てられたるものに非ず。特殊の美術より歸納せる特別の典則は之れ特別なる美術の典則なるのみ、美學の原理には非るなり。げにや例せば人體の『シムボリク』、建築、音樂等に關して西人の説く所は、直に移して吾人の好尚を律すべからざるも、美學の原理に至りては元より平等普遍の人心に根據し、牢として拔くべからざるもの無くむばあらず。之れやがて美學が一の科學として成立し得る所以に非ずや。且夫れ我邦の人の多くは美學を以て偏に標準の學なりとのみ心得、其本領の説明學に在るを知らざるもの〻如し。而して漫然東洋の新美學を作れなど叫ぶものあるに至ては、吾等は其學風の輕佻にして、其思索の淺膚なるを悲まずんばあらず。二物を調和せむと欲するものは勿論双方に就て十分なる知識を有せざるべからざるなり。

吾等は想ふ、東西文明は遂に調和せられざるべからず、然れども是れ只忍耐と精

の責務ならずとせんや。

請ふ看よ、演劇界に於ける新舊二派の競爭、美術界に於ける裸體畫是非の爭ひ、小說界に於ける飜案可否の論、若くば文體、國字、語法に關する諸說の衝突、是れ等は果して何事を意味するものなりや。其形の上より見れば洵に瑣少の末事なるが如きも、而かも其由來を追踪すれば何れか東西文明の牴觸に非ずとする。若し夫れ倫理、宗教、教育の問題に入るに及びては、西洋の思想、各々其殊を保ち其異を樹て、峻として枘鑿相容れ難きもの多きが如し。一葉以て天下の秋を知る、我國文學の士の之に對する覺悟如何、敢問、々々。このごろ

東洋の新美學

を作れと唱ふるものあり、吾等は其の深く東西二文明の調和に注目したるの言なるを喜ぶ。獨り其の說く所の淺膚杜撰にして識者の一笑に資するに過ぎざるを憾みとするのみ。

西歐の美學は西歐特殊に思想を反映せる美術より歸納せる一特殊の典則のみ(日本人第五號)

東西二文明の衝突

人は己れの知る所の外は何物をも信ずる能はず、其學ぶ所に偏するは洵におのづからなる勢なりと謂ふべし。是を以て洋學者は一切事物を拘束するに西洋の學理を以てせむと欲し、時と處とに隨て斟酌應與する所以を知らず、其同を知て其異を見ざるの弊に陷るもの、比々として然り。西學に闇き人は、之に反して重きを自國の特質に措くの餘り、知らず〱己れを揚げて他を抑へ、偏に其異を見て其同を察せざるの弊あるを免れず。偶々同異全分の差等を辨じ、勸解調和の必要を說くものあるも、一知半解の臆斷に終らざるもの罕なるは、是れ亦おのづからなる數なりと謂ふべし。

東西二文明の牴觸は漸く政治社會を去りて、文學美術の境域に移りつゝあるは、吾れ人の大に注意すべきことなりとす。是れ文化發達の途上に於て免るべからざるの階段として、吾等の素より豫期せし所、敢て今更の如く騷狂するを要せずと雖も、而かも之に向て適當の準備を懈らざることは、吾人が日本文學に對する當然

は無益に非ず沙翁の戯曲は不用に非ず人生は決して虚無に非ざるなり。

Life is real! Life is earnest!
　And the grave is not its goal,
"Dust thou art, to dust returnest,"
　Was not spoken of the soul.

（廿八年六月—八月）

敢なみ、不平慷慨の中に一生を送る人の如き、畢竟知識の足らずして道念の淺きが爲のみ。予輩は厭世主義を奉ずること能はざる也。

吁、理想と現實と、是れ洵に悲むべき而も亦喜ぶべき對比なり。心に理想を持して而して身は現實に蹉跎す、是れ悲むべし、而かも身は現實に跼蹐して心は理想に徜徉す是れ實に喜ぶべきに非ずや。望みなき生活はそも如何に悲しかるべきぞ。限られたる前途の中に生活するは、猶ほ牢獄の中に幽囚せられたるに同じからざるか。理想は吾人に命と望とを與へて吾人をして不滅ならしむ。よしやゲーテが言へりし如く、吾人が望と謂へる所のものは die Wände, zwischen denen man gefangen sitzt, mit bunten Gestalten und lichten Aussichten bemalt. に過ぎずとするも、是れはた何の妨ぐる所ぞ。人は其心に信ずる所のもの丶外は何事をも信ずる能はざるなり。人生は多幸なり、何となれば多望なればなり。進歩と自由と活動とに於て、人生は其唯一の幸福を發見すべければなり。希望は未來にあり而かも未來の『明日』の如きを悲むなかれ。人生は *Selbstzweck* なればなり。よしや太陽は漸く其熱度を減じ此世界は早晩冷却して、あらゆる生物の全く絶滅するの期ありとするも、希臘の文化

道德の進歩に於て力無きことに至ては一なり。以上述べし道德的理想の觀念は、是二者を調停して庶幾くは誤なきを得んか。然れども實際上如何にして是原理を應用するを得べきか。吾人の義務には少くとも二個の異なりたる原理あり、吾人自らに對するものと一般人間の生活に對するものと是れなり。吾人が或特殊の場合に臨みたる時は、是二大原理の標準に照鑑して其義務を決せざるべからず。然れども吾人は如何にして之を爲し得べきか、如何にして或特殊なる行爲の個人の現化若くは一般人間の生活に對する利害の多少を考定し得べきか、之れ唯吾人の實際的知識に依頼するの外無きなり。多くの場合に於ては、個人に對する義務と一般人間に對する義務と相一致せず、公私同時に兩全を期し難きことあり。是時に際して吾人は十分愼密なる考察によりて比較上利益多き方向を取らざるべからず。故に道德的生活は即ち考察的生活なり。故に高尙なる道德は高尙なる知識を豫想す、知識は道德に於て缺くべからず、現實と理想とを調和するものなればなり。吾人は無知の人に向て道德を要むべからず。夫の知識ある人は幸なり、彼は理想と現實との調和に於て其の多望なる未來を有すればなり。猥に世を果

は現實に關す。重に理想的道德を論ずるに當りては、吾人は形式を以て足れりとすべしと雖も、實際或特殊なる場合に於ける義務を定むるに臨みては、是二面を併せ考へざるべからず。嚴密に言ふ時は、總ての善は多少現實を超越するものなり、而かも吾人は道德的生物として是非とも善を行はざるべからず。是に於てか吾人は常に現實に撞着するの運命を免るる能はざる也。故に吾人は現實が吾人に容す範圍內に於て善を行はざるべからず。吾人が理想的狀態に達するは、現實を破壞し顚滅して新に理想と稱するものを製造するに非ず、唯夫れ現實を通じて是目的を達し得べきのみ。吾人は理想的生物たると同時に、現實的生物なり。現實的生物として吾人は現實界の存在を維持し、尊敬し、且發達することを務めざるべからず。理想的生物としては、吾人は現實に滿足せず、造次顚沛の間も理想に向て精進せんことを努めざるべからず、故に吾人は現實界が容す限りの範圍に於て、出來得る丈多く理想界に近かざるべからず。然れども吾人は如何にして是『範圍』を定限することを得るや。

直覺論者は形式即理想の一方に着眼し、功利論者は實質即現實の一面に執着す。

在に生息するのみならず、過去にも未來にも生息す。是に於てか人は初めて自己生存の價値を知り、又隨て其人間としての義務を自覺す。是に於てか活動の廣さと深さとは共に漸く增大し、幸福も亦隨て增大す。要するに、人の人たる所以は、是理想を有するの點にあるなり。是理想を認識し進步し現化するとに於て、人生は其唯一の意義と價値と幸福とを有すべし。然れども吾人のくれぐれも注意すべきは、理想と現實との關係にあり、即ち理想を現化するの適當なる方法を講ずるにあり。是目的に向て吾人は現實界の事物に就て十分の知識を有せざるべからず。從來の學者動もすれば、道德と實際的知識とを峻別して、二者相關する所無しとし、甚しきに至ては二者相容れずとなす、蓋し大に謬れり。吾人が所謂理想的狀態は人間全體の現化なり、一部分の發達を言ふに非ず。心性の各部が圓滿なる生長を爲すに非ざれば、人間全體の圓滿は望み得べからず。今左に道德の發達と實際的知識との關係を一言せん。是れ理想と現實との關係を會心するに於て缺くべからざる也。

一般に言ふ時は、道德に形式的及び實質的の二原理あり、前者は理想に關し、後者

德腐敗の原因なりとまでに說かしめしに非ずや。斯かる不完全なる人間を以て、斯かる不完全なる世界に處す、勢素より不完全なる結果を生せざるを得ず。故に人間を要して完全圓滿ならんことを求むるは、寧ろ自然に反せりと謂ふべし。吾人は飽くまで吾人が本來不完全なる生物なることを明白に自覺せんことを要す。實際に事物を判斷するには、常に其立脚地を茲に置かざるべからず。偶々現實を遺却して偏に理想の一面に準據するは、實際上は勿論、道德上にも亦甚だ價値少きことなり。吾人は理想を想望し、之に到底せんことを務む、之れ道德的生物として、吾人が內心の必然なる結果として、吾人の務めざるべからざる所なり。而かも理想は唯現實を通じ、現實に依りて接近し現化し得らるべきものなることを記憶せざるべからず。夫の厭世者流は實に是人生第一の要諦を逸す。

然れども人が他生物と異なりて道德的生物なるは、實に其理想的生物なるが爲なり。理想の觀念を人心より取り去らば、人は橫目縱鼻の犬豚たらんのみ。理想は自覺力の發達と共に必然に吾人の心中に生じ來れるものにして、人は是光によりて萬有の趨向する所を知り、人生の究竟する所を察す。是に於てか人は嘗に現

は必ず一害を意味し、一長は必ず一短を假定す。一物の强大を維持せんが爲に數多の弱少は之が犧牲と爲り、一物の生存を繼續せんが爲に數多のもの、之が爲に滅亡するを免れず。表面に美はしき調和の顯はるゝ所は、即ち裏面に痛ましき不和の存する所なり。平和は爭鬪によりて維持せらるべく、完全は不完全によりて成立するを得べし。個々物は種族の犧牲にして、個人は國家の手段なり。幾多の自然的法則あるも、多少の變更なくして實際に應用し得べきもの幾何かある。文學と美術との眞に美はしき所は、現實を離れたる所に存す。凡ての知識の大半は、實際的に對し理想的として區別せらる。斯の如き不調和は、啻に客觀世界に存するのみならず、吾人々間の一身中にも是れあり、是點に於て、人は惜に小宇宙なり。人所謂病的現象とは所詮身體の一部が獨立の發達を爲せしものには非ざるか。人は謂ふ、健康なる精神は健康なる身體に宿ると、而かも活力の熾盛が思想の精緻を妨ぐるは、今日心理學者の普く容す所に非ずや。心性は素渾一なるべきものなり、而かも其各部は多く互に相反撥し相衝突し、完全に一致するもの甚だ多からず。感情と理性との對比は言はずもあれ、意志と理性との撞着は、グリーン氏をして道

も暮れ、其夜も明けぬ、小兒は逸早く床を出でゝ其母に問て曰く『今度こそ來たらう、明日は』と。母は首を掉て曰く、否我兒よ、今日一日を暮し、今宵一夜を明さではと。小兒は不平そうに默しぬ。其次の朝再び同一の問を繰返せば、母も亦同一の答を繰返しぬ。小兒は堪らず泣出して曰く、『母樣そんなら一體いつ來るの？』母は憮然として泣兒の頭をなでゝ曰く、我兒よ、明日てふものは長へに來らざるなりと。吁是一小話、是れ吾人にとりて恰好の敎課にあらずや。吾人は明日を暮さんと欲するも、而かも明日は長へに來らざるなり、吾人は今日を以て滿足せざるべからざるなり。夫の理想なるものは是猶明日の如きものには非ざるか。

然れども、是が爲に猥に人生を不幸なりと爲す勿れ。吾人、否吾人のみならず、一般生物は活動せざれば滿足する能はざる樣に造られあるなり。夫の最大の幸福なるものは即ち最大の滿足に外ならず、而かも活動は不滿足を意味し、不滿足は不幸を意味す、然らば即ち不幸は幸福の母と謂ふべきに非ずや。故に吾人は不滿足なるが故に滿足し、不幸なるが故に幸福なり。是言語上の矛盾が實際上に調和せらるゝは豈天然の妙理に非ずや。げにや、宇宙間は不和と撞着とに充滿せり、一利

得べし。之れ實に人生の極致、道德の理想にあらずや。』

難者或は問はん、然らば即ち是の如き理想は何れの日にか實現せらるべきや。若し永久到達し得べからざる目的ならんには、寧ろ之れ常住の苦痛を吾人に與ふるものには非ざるか。希くは理想と現實との關係に就て詳細なる說を聞くを得むと。善いかな難者の問や。

理想と現實、吁是れ吾人にとりて悲むべき差別なり、而かも現在に於ては現にあるより外にあること能はざるを如何せんや。世界は常に現實なり、而かも單に現實なるに非ずして、理想に對して現實なり。世界は其の現實なる間は長へに理想に達すること能はず、而かも其存在する間は常に現實ならざるを得ず。理想は遂に永遠に無窮に到達すべからざるなり。少時嘗て一小詩を讀む。一個の小兒或夜寢床に就く時其母に問て曰く『母様(かあさん)明日(あす)つて何時(いつ)來(く)るの？』。母は答へて曰く、今宵一夜を明さば明日となるべし、と。其夜は明けぬ、小兒は前夜のことを思ひ出し其母に問て曰く『母様(かあさん)明日はもう來たの？』。母は答て曰く、今日一日を暮し、今宵一夜を明さばやがて明日となるべしと。小兒は不思議そうに屢に首肯きぬ。其日

前段の議論に於て予輩は發達の原理の只差別の一方にあることを豫想せりき。然れども實際に於ては、差別主義と共に平等主義も亦等しく發達することを忘るべからず。全體は漸〻部分に別るゝも、部分は常に全體に復せんとするの傾向あり。是傾向は全體の調和を維持し發達を奬めんと務むるの平等心(有意識的若くは無意識的)となりて表はる。是事は自然歴史に於ても將た人間歴史に於ても甚だ顯著なる事實にして、是傾向の進歩を以て道德發達の標章と見るも敢て不可なきなり。或生物學者の如きは、是平等心の發達を說明せんと欲して、生物元來一體より別れしを以て再び一體とならんとするの先天的傾向ありと說けり。予輩は其說の可否を知らずと雖も、之を吾人の意識に訴るも、はた歴史上の事實に徵するも、是平等心の存在し且發達しつゝあるは疑ふべからざるなり。既に是事實を認めたりとせば、予輩は前說より更に一歩進めて、人生の前途の多望なることを斷言するを得べきか。平等の中に差別を收め、差別の中に平等を現じ、千萬億兆の個々體が各自の內面的結合によりて、恰も精神的一體となるを得ば、形體の差は其中に沒了して而かも其人格を失はざる所謂差別即平等平等即差別の妙境に達するを

き。先にも述べし如く、予輩の斷言し得るところは、道德全體の進歩のみ、道德全體の進歩とは一の善若くは一の惡に就て言ふにあらずして、人間の活動力の增進すること、即ち人間の自己現化を指すなり。人生終極の目的は所詮、大の幸福に外ならず、而して是幸福は人間が其本然に固有せる能力を自由に活動せしむるに在り。善と謂ひ惡と謂ふ所のもの其物が獨り吾人の幸福の原因となるに非ずして、唯本然的能力の活動する一形式として、吾人が幸福の原因となり得るのみ。予輩は善德が如何に進化と共に增大したればとて、是一事のみを以て人生の幸不幸を論斷し得べきに非ず。是事に就きて最も主要なる條件は、一般に人間が本然に有する能力の活動の增加に在ることを遺るべからざるなり。故に予輩は人文の發達と共に善の必ずしも增進せず、惡の必ずしも減退せず、寧ろ苦快二者が常に並行して進むが如く、善と惡とも亦恒に同一なる關係的位置を保ちて共に增進するものなることを信ずるものなり。然れども人生の幸福は善惡に依らずして、主として活動に因るを以て、夫の道德的厭世主義は人生を解せざるものと斷言するを待べし。

各部分の間に矛盾衝突を生ずるの機會亦益〻繁多となるべし。所謂道德とは、是各部分の平均調和を保つに必要なる制限を維持することにして、所謂不道德とは是制限を破壞し、若くは破壞するの傾向あるものを云ふなり。故に世の進むと共に、其の廣さに於ても亦深さに於ても、善惡共に多樣となり、其間の差別愈〻峻銳となり、愈〻明晰となるべきは自然の結果なりとす。希伯來の聖書によれば、初め神の世界を創造するや、先づ明と暗とを分てりと。實にや世界の歷史は、是語の如く善惡の差別を追窮することに外ならずと見るを得む。後世基督敎の人間觀が是意を享けて、歷史を以て是差別的原理の完成せる記錄となせるもの洵に其理を盡せりと謂つべし。是を以て之を見れば、歷史の終極は、萬有の中に貫徹せる二個の原理（人間にありては善惡の二主義）の全く現化せられ、尤も明かに區別せらるゝの時なるべきか。斯の如く論じ來らば、讀者或は問はん、『爾は進化と共に罪惡の愈〻增大するを認めたり、良し善德の是と共に進步するにもせよ、是の如きは果して人生の勞役に價値する所の報酬なるべきか』と。善い哉問や、乞ふ少しく之を說かむ。

予輩は初めより或樂天論者の如く敢て善の獨り增進すべきことを主張せざり

く勇氣、曰く誠實、曰く廉直、曰く克己、曰く正義、曰く慈悲、是れ皆文明の資なりと。

蓋し分化は發達の原理なり。初めは渾然として其一を保ちたるもの、後には分化して其異を見るに至る。之を生物發生の順序に照せば、尤も明晰なる概念を有するを得べし。分化は一面より見れば不調和を意味す。生物が一細胞より成りし間は、其作用も亦極めて單純なるを以て、不調和てふことは絕て無かりしも、其體機漸く複雜となるに隨ひて、各部の機關は各、其絕對自由なる活動を爲す能はず、是に於て生存の必要上、各機關は互に其作用を節制して以て全體の調和を得んことを務めざるべからず。是各部間の節制は進化の高等なる階段に以て殊に複雜なりとす。故に其外面の美はしき調和は、實は內部の烈しき不調和の平均を表彰するものに外ならず。若し是平均にして一朝破壞せられんか、忽ち局部より延いて機關全體の運行を障害し、甚しきに至りては生物の生存を危ふするに至る、所謂疾病は即ち是れなり。故に生物に於ける疾病の數は、進化と共に增進すと謂ふを得む。社會に於けるも亦然り、人心漸く發達し、社會漸く繁雜となるに隨ひ、社會全體の健全なる生存を維持せんが爲に、其各分子間に於ける制限亦益、繁雜となり、隨て

るに、人文の發達は愈、社會を墮落せしめ、人性を腐敗せしむるものなり。

ルッソーが是說は、全く根據無きには非ず、而かも單に事物の半面のみを見たるに過ぎず。文化漸く進み、社會の組織漸く複雜となるに隨ひ、單純なる古代に於て見るべからざりし諸種の惡德の生じ來りしとは、洵にルッソーが言に違はず。然れども、是と共に、古代には見るべからざりし善德も亦多く發達したることを忘るべからず。是れ人心の組織多樣複雜となり、其の廣さに於ても又深さに於ても、大に其活動の範圍を增大したる自然の結果に外ならず。人の人たる所以の特質は、實に是進步發達の中に存する也。若しあらゆる生物の時間的生存は自己現化（ゼルブストフエルヰルクリフング）を目的とすてふバウルゼン、カリエル、グリーン諸氏の說にして眞ならんには、吾人は歷史の經過と共に道德の進步をも容さゞるべからず。吾人は未だ全く人間が當に有すべき道德を有するまでには進步せざるなり。本然の自己を現化して道德の理想に達する目尙遠しと雖も、而かも念々刻々是方向に進みつゝあるなり。僅に一面の利害を見て道德の墮落を說くものゝ如き、蓋し眼孔豆の如き輩のみ。功利論者のミルすら猶左の如く言へるに非ずや。曰く、人間の最も高尙なる性質は何ぞや、曰

以上は快樂の上より人世の價値を見たるの論なり。次に道德の上より立論したる歷史的厭世主義の梗概を觀察すべし。

道德の上より論じたる歷史的厭世主義は、主としてルソーの唱へし所にして、前世紀の後半期には、盛に歐洲大陸に行はれ、佛蘭西革命の一原因をも作せるものなり。其說に據れば、吾人は歷史を上代に溯るに隨ひて、愈、多く人間の德義と純潔とを見る。今日にありても最も高尙なる道德は、文明の中心たる巴里府には見る可らずして、却て質朴なる田舍の間に存す。蓋し學藝の進步は道德を腐敗せしめ、階級の高卑は人間を墮落せしむ。元來平等なる人間が人文發達と共に漸く貧富賢愚の差別を生ずるや、一方には傲慢と專橫とを生じ、他方には卑屈と詐僞を生ず。あらゆる事物は其天眞の價値を失ひて、一に方便上より其上下を論ずることゝなり、人生自然の性情を滿足するに何等の用無き金剛石眞珠の如きもの、獨り尊重せらるゝに至る。人に於けるも亦然り。實用有爲の人物は多く世に用ひられず、浮華無益の徒獨り社會に跋扈し、學術の如きも、亦人品を高め道德を全ふする眞の學問は行はれずして、談笑燕遊の資を爲すが如き社交上の末技のみ榮えゆく。要す

論者は以爲く快樂の增加は苦痛よりも大なりと。予輩は何れを取るべきか。勿論予輩は快苦の多少のみによりて此問題を決せんと欲するものに非ず、人生の價値を決する條件の他に更に重要なるものあるを信ずるものなり。然れども予輩を要して強て此二者の多少を問ふものあらば、予は寧ろ同等なりと答へん。快樂苦痛は素功利論者が思惟するが如く數量上の比較を容れざるものなれども、若し予輩に全智力ありて精細に之を知るを得ば、必ず其の然るべきを信ずるなり。蓋し快と苦とは形影相離るべからざるものなり。此處に一尺の快あれば彼處に一尺の苦なかるべからず、苦痛は畢竟快樂の消極に外ならざればなり。快樂のみ增加し、若しくは苦痛のみ增加することは蓋し有り得べからざるのことなるが如し。之を振子の擺動に喩れば、或は其眞相を想ふに庶幾からんか。振子が鉛直の中線を軸として左右に擺動するは、猶吾人の感情が非快非苦、即ち無感の狀態を起點として上下に活動するが如し、故に其活動は如何に大なるも双方同等に增加するを以て其總計は不易、即常に零なるべし。但此說は吾人の感情が標準的狀態にある間に於てのみ言ひ得べきは勿論なり。

(二)先見の力發達すると共に憂愁畏怖の念增加して吾人を苦むることは洵に事實なり。然れども快樂に於ても吾人は同樣に言ひ得べきに非ざるか。若し吾人の快樂にして何等の豫期なく、只單に其の來る瞬間に於てのみ感ずるものならんには、其の品位、將た其價値、果してよかく希望すべきものなりや。且吾人の心性は一種特殊の組織を有す。即ち過去に於ける快樂は之を記憶し、隨意に之を追想して自ら樂むを得るも、苦痛は多く直に遺却して吾人の記憶に止らざるなり。蓋し苦痛は消極的の性質を有し、各種の苦痛の間に類似の點少きを以て自ら類想法によりて快樂の如く容易に伴生せざるが爲ならんか。之れ亦自然の妙理なり。(三)及び(四)に就ても(一)と同樣に言ふことを得べし、即ち他の悲哀を悲むの情と共に他の快樂を樂むの情亦發達すべし。單に苦痛の一面のみを見たるものは實に偏頗の說と謂ふべし。

之を約言すれば人文の發達と共に苦痛の廣さは其の深さと共に增大せることは事實なり、而れども快樂の廣さと深さも亦之と同時に增大せり。二者の增大せる比例に就て厭世論者は以爲く、苦痛の增加せる割合は快樂よりも大なりと、樂世

遂に全社會に及ぶに至る、之を以て一擧一動尙苟くもすべからず、前視後顧萬一の過失あらむことを恐る、故に其心の平和なること絕えてなし。斯の如きは夫耕婦織以て天年を送る農夫の安樂なる生活に孰れぞや。(四)人文の發達と共に同感の情亦發達するを以て、人は自己のことのみならず、他人の悲哀にも自己と同一の感情を有せざるを得ず、終には萬人の悲哀を一身に擔ふに至るべし。之れ或は高尙なる德義なるべきも、而かも堪ゆべからざる苦痛なるを奈何せん。

以上の說は各々多少の道理の認むべきものあれども、何れも其一を知りて其二を知らざるものなり。公平なる讀者は他の半面を考察せんことを要す。即ち(一)人文の發達と共に缺乏の增加するは事實なり、而れども之を滿足せしむるの方法も亦增加す、此二者は常に相並行して發達するものなり。多くの場合にては或新なる事物の出來りたる後に於て慾望の發達するを例とす。麥酒なくして麥酒を飮まんと欲するの情あるべき理けなればなり。又人は其力の及ぶ所のものを慾望す。若し否らずして貧民にして華族の慾望あらば之れ實に人生の不幸なるべきも、實際にありては人々その分に應じて其慾望を有す。之れ自然の法則なり。

り說くものとの二種あり。前者は歷史の進步と共に快樂漸く減少し、後者は人文の發達と共に罪惡漸く增加することを主張す。ショペンハウエルは前者を代表し、ルソーは後者を代表す。

快樂的厭世主義の論據は畧、次の四點にあるべし。

(一)凡ての生物は其組織の複雜となるに隨ひ苦痛を感じ易きものなり、人文の發達とは要するに缺乏を感ずることの增加することに外ならず。故に人文愈、進めば欲望、困難、失望(エントトイシユング)も亦愈、增加す。(二)人文の發達と共に人は未來を察するの力亦漸く發達すべし。動物は只現在のみを見、現在のみを經驗す、故にその苦痛や只現在の苦痛のみ。然るに人は進步するに隨ひ、未だ苦痛を受けずして已に早く苦痛を思ひ、また死せずして已に早く死を憂ふ、來らざるものを畏怖し、去りたるものを悔恨す、之れ進步の賚なり。人智の發達は所詮苦痛の時間を擴張することなり、自殺の漸く增加する亦以ありと謂ふべし。(三)人文發達と共に人は啻に肉體上の欲のみならず、漸く精神上の欲望を增加す、飽くことを知らざる名譽心、虛飾心は常に其心を苦む。且人は發達すると共に社交的範圍漸く膨大し、一身の關係する所

泉なることを遺却したるにあり。此ことは後に至りて論ずるの機會あるべきを以て玆に贅せざるべし。

一概に論ずる時は、此問題を觀るに三個の方面あり。即ち第一は快樂の上より、第二は道德の上より、第三は歷史の上より觀察するなり。上に述べたるは、概ね初めの二者の何れかに屬するものなり。人間は常に發達するものなるを以て、單に某時某處に於ける靜勢的狀態を以て立論するものは人生全體に對して其眞相を看破せんこと頗る困難なるべし。是故に凡て道德上の問題を論ぜんと欲するものは、常に自ら進步の一階段に立てりと思惟し、以て過去現在の發達經過の狀態より遠く將來を慮らざるべからず、單に快樂若くは道德の上より觀察したる議論は此點に於て大なる弱點を有するものと謂ふべし。故に予は此等の說を批評することを爲さずして歷史上より立論せる厭世主義に就て少しく論ずる所あるべし。

玆に歷史的厭世主義と謂ふ所のものは、厭世主義を歷史的發達の上より證明せんとしたるものにして、要する所は、人文の進步と共に人間の不幸と罪惡の增加することを主張するものなり。此說にも亦快樂の點より論ずるものと道德の點よ

ショペンハウエルの言の如し、然ども予輩は是が爲に人生を厭ふべきものとは思はざるなり。人は動もすれば人世を目的なき旅行に喩ふ、予も亦之を首肯すべし。而かも古の傳說に見ゆる神の罰によりて何の目的も無く、是非なく彷徨するが如き旅行にはあらずして、當に一の漫遊に喩ふべし、漫遊には何等終極の目的とては無けれども、漫遊其物は即ち其目的なり。人生も亦之と同じく、よし終極の目標なしとするも、生存其物が即ち生存の目的なり。漫遊の途上にありて、一山一水時と處とに隨て各其滿足を得るも、一として一定終極の滿足を與ふるものなし。畢竟遊行其物が目的なればなり。ショペンハウエルが墓中の人に向て再び現世に生るるを願ふかと問はゞ彼等は必ず其頭を掉るべしと言へりしは蓋し當れり。何となれば何人も如何に愉快なる漫遊と雖も同一の道を再びすることよりは、寧ろ室内に偃臥するを撰むべければなり。

然れども斯の如きは何れにしても淺薄なる議論のみ。ショペンハウエルの根本的缺點は尙此外にあり。即ち氏が人心の本然に根蔕せる理想の存在を認めず、又心性本然の性質として此理想に向て精進するの自己活動は人生幸福の唯一の源

於て何の關する所ぞ。人生は猶ほ太洋の中心に泳げるが如し、一擧一動は所詮死を避けんが爲の煩悶に外ならず、而かも死は早晩免るべからざるの運命にあらずや。人は死せんが爲に、將た其の哀むべき存在を長ふせんが爲に、生活するものと謂ふべし。無慈悲なる天は之に加ふるに空虚なる希望を人に與ふ。「明日は如何にかなるだらふ」。人は皆しか言ふと雖も、誰か其「明日」に遇ひしものぞ。學生は教室の中に大息して曰く、吾れ是校を卒業して獨立自由の身とならば如何に幸なるべきかと。生計に苦む人は嘆じて曰く、吾れ若し官に就き俸給を得ることを得ば如何に幸なるべきかと。壯年は慨嘆して曰く天我れに時と機會とを與へて某の事業に盡力するを得せしめば如何に幸なるべきかと。彼等は只如何に幸なるべきかを望みたるのみにして、其の如何に幸なるかを知らざるなり。斯の如く觀じ來らば誰か人生を樂しとするものぞ。

予輩は答へて言はん、若し一定の滿足を得る能はざることを目的なしと謂はゞ、予輩は此意味に於て人生の目的なきことを首肯すべし。日に新なる希望を生じ、長へに滿志飽慾の期なきことは人生の特色なり。死の避くべからざることも亦

起して之を得んことを欲す。斯の如く凡ての快感は所詮失望（エントトイシエング）となり了るなり。若し意志にして此活動を脱離せんと欲する時は、忽ち苦惱に陷り、安逸に在らんよりは、寧ろ困難と苦痛とを求むるに至る。意志は此二ツの感情の間に彷徨して而かも何處にても其滿足を得ること能はず。之を棘に滿てる極めて細き道に喩ふ、人一方の棘を避けんと欲すれば他方の棘に觸る、所詮血を流さゞるを得ざる也。

予輩は斯の如き說を以て人生を誣ひたるものと謂ふを躊躇せず恐くは之れショペンハウエル氏が私の經驗に過ぎざらんのみ。苦痛と苦惱の人生不幸の原因たることは素より氏の言の如し、而かも其の喩へたる棘に充てる路は餘りに狹きに失せるものと謂ふべし。予輩は多言するを須ゐず、社會の實際に反したる言なりと謂ふを以て滿足すべし。內に愉快なる家庭あり、外に忠實なる朋友あり、社會は自己を優遇し、自ら立ち、人を扶け、健康に、長年なる人、斯の如き人も亦常に棘を踐みて血を流しつゝあるの人なるか。予輩は信ぜざるなり。然れどもショペンハウエル或は言はん、是れ枝葉の論のみ、世界の多き人數の中には爾の云へるが如き多幸なる人も或は之れあるべし、而かも生活全體が目的なき盲目なる活動なることに

往日の厭世主義に遠かりて一種の形を變じたる樂天主義に傾きたるに掩ふべくもあらず。ダルキン、スペンサー諸氏の進化説は、此間にありて多少の勢力を有せしことも明なりとす。

シヨペンハウエルは其純理哲學の上より厭世主義を主張したる人也。今日より見れば、誤謬多き説なりと雖も一時歐洲の思想を震撼したるものにして、優に予輩の一顧を價値するものなり、左に少しく之を述べん。

シヨペンハウエルが厭世論の根據は其「意志」の性質にあり。氏にありては意志は知力なき原理、(帝國大學教授ケーベル博士が「ショペンハウエル氏の意志は智力なきか」の一論文を參觀すべし、哲學雜誌第九十九號にあり)目的なき煩悶なり。之れ元來何等目的の觀念なく、只生活せんと欲する盲目なる意志として存在せるを以て、何等の利益、事情も之に滿足を與ふるを能はず、滿足は所詮目的を豫想すればなり。加ふるに不平、と失望（エントトイシユング）、と苦懶、とは意志の內容をなせる三要素なり。不平は慾望を起して人をして活動せしむ。若し此慾望にして達せられざるときは痛激なる苦と變ず。若し達せられたる時は、人は其刹那に於て快樂を感ずべし、然れども之れ只一彈指の間のみ。彼は義もなく更に新しき慾望を

故に全體の上より見る時は世界は幸福と希望とに充滿せるものと謂つべし。此思想はボリンクブローク及び其詩人ポープによりて大に鼓吹せられたり。彼の人間論に於ける有名なる左の數句は洵によく此意を盡せるものといふべし。

All nature is but art unknown to thee;
All chance, direction which thou canst not see;
All discord, harmony not understood;
All partial evil universal good.
And spite of pride, in erring reason's spite,
One truth is clear, whatever is, is right.

要するに樂天思想はライブニッツ、ポープに至りて其の頂點に達せりと謂ふべし。近世に到りてハートレー以下の功利論者の樂天主義はライブニッツのに比すれば殆ど全く哲學的基礎を有せず單に苦樂の通計を以て此問題を決せんとしたる極めて幼稚なる思想なり。然れども獨り英國のみならず歐洲思想一般の傾向は(中にはマンデヰユ、ショペンハウエル、ハルトマン、其他詩人の人生悲觀はあれども)漸く

望すべからず。又永遠なる神靈の定めたる世界の價値目的は到底有限たる人心の判斷し得べき所に非ず。神は完全なり、吾人の幸福は只神を想望することによりて得らるべきのみ。

然れども樂天主義はライブニッツに至て尤も明瞭に、且尤も鞏固なる哲學的の基礎の上に立てり。氏は神の存在を證して而して後罪惡の存在する所以を說明せり。以爲く、神の絕對なる意志は唯神の智慧によりて制限せられ得へし、此制限は吾人が呼びて神の正義となす所のものなり。神は其智慧が最良なりと認むる所のものを決行するを以て、其所造は凡て完全なり。此世界は神の所造にして而かも獨り不完全なることを得べけんや。此世界は尤も多くの實在と、最も多くの幸福とを有す、而して此幸福は全世界の所有にして一個人の私物にあらず。自然界に於ても、又心靈界に於ても、完全の程度に無限の階段あり、而して此等のものは互に相夤緣して完全なる全體の調和を爲す、大自然の進行は即ち此精神に據るものなり。神が此世界を造りしは、全體の完全と幸福とを增進せんが爲なり、罪惡は此目的に向て避くべからざるものなること、猶二山の間に谷無きを得ざるが如し。是

み。且夫れ現世の生活は未來の幸福を享受するに必要なる準備として凡ての人間は漸く進みて神となり、獨一の眞神と共に永遠の福祉を樂むを得べし。斯の如くにして基督教の厭世主義は漸く樂天的傾向を帶び、現世の罪惡は未來の希望の中に沒了せらるゝに至れり。アウグスチヌス以下の神學は暫く言はず、吾人の次に注意すべきは蓋しジョルダノ・ブルーノーなるべし。此人の說は實に萬有神教の基礎にして、後年スピノザによりて大成せられたるものなりブルーノーに據れば、全世界は神靈の所現なり、神靈は無限無窮、萬有の中に貫通して其活動の根源となる。世には全く罪惡なるもの無し、一物に害あるものは他物に利あり、死も決して惡むべきものにあらず、只人智の不完全なる、宇宙全體の調和を達觀するの明なきを以て、各々取る所を持して或は以て害となし、或は以て惡となすのみ、畢竟迷妄たるに於ては則ち一なり。此樂天的思想はスピノザに至りて一層明晰となれり。スピノザ以爲く、吾人動もすれば人生の價値を判せんと欲す、之れ要するに吾人の感情的性質に起因するのみ。世界のあらゆる生存、變化、發達は所詮無限なる宇宙的心靈の永遠なる、必然の秩序によりて制定せられたるのみ、吾人は其一絲の輕重をも企

し得べきものに非ず、只夫れ靈魂が此形骸を解脫して無限の實在に還沒する時に至て、卽ち死後に於て、達し得べきのみ。死は是故に失に非ずして得なり。「吾は吾體中にある神靈を自由にせんが爲に煩悶するなり」とは、此等の學派の套語なりしなり。是れ印度の吠檀達派が梵に還沒するを說きしと同一致なりと謂ふべし。羅馬の哲學は希臘思想の反覆に過ぎざれば言はず。基督敎的神學の說は厭世樂天の二面を具ふるが如し。其說によれば、此世界は罪惡と苦痛とに充滿し、吾人の生活は猶異鄕に於ける旅行の如きのみ。此世には何物も吾人の精靈に滿足を與ふる者あらず、眞の圓滿なる幸福は未來の生活に於て望み得べきのみと。此點より見る時は、此世界は基督敎徒にとりては厭世的なり、而かもアレキサンドリア若くは印度の厭世主義とは全く其趣を異にす。卽ち此敎はプラトーンの說の如き罪惡を以て生存上永遠不易なる者となさずして、人間自自の行爲の結果なるを以て、自己の意志を以て之を消滅するの方便を發見するを得べきを信ぜる也。天地萬物は神の惠によりて存在し、繼續す。基督敎徒は必ずしも世界を厭離するを須ひず、只神と世界の中間に立ち、分を知り命を樂み、敬虔の意を澁して神に仕ふべきの

ても亦然り、古代の文學、書經、易經の如きものを見るに、其樂天的傾向は瞭々として明なり。繫辭傳に樂天知命を説き、又「一陰一陽、謂之道、繼之者善也成之者性也」と説けるが、如き、其一端を知るに足るべし。老子の如き寧ろ例外として見るべきのみ。去て希伯來人を見るも、其の舊約全書に皷吹する所は概ね樂天的なり（よし此樂天主義は後世基督教の宇宙的樂天主義と混同すべからざるも）。之を以て之を見ればば人間は由來必らずしも厭世的に非ざりしが如し。

希臘初世の哲學者の意見は甚だ明瞭ならず。ソクラテース、アリストテレース、ストア派エピキュロス派等が皆人生の目的、即ち summum bonum を以て暗に達し得べきものと假定せるの點より見れば、樂天主義と謂ふを得べく、而かもソ氏が夢無き眠の如くんば死は生より樂しと云ひ、プラトーンは觀念論によりて人間の墮落を説き、ストア、エピキュロス諸派が節慾苦行を説きしを察すれば、多少厭世的臭味を帶びたるが如し、而かも其大體の傾向は樂天的なりと謂ふを得ん。キニズムより所謂アレキサンドリアの希臘哲學に至りては厭世的傾向漸く顯著となり、新プラトーン派若くは新ピタゴラス派に至りて一層明瞭となれり。幸福は現世にありて到底達

人生の價値及厭世主義

人生の價値如何。生れたる人は生れざる人(若しかゝる人ありとせば)よりも多幸なるか。之れ人間ありてより以來今日に至るまで、幾度か說明せられ、幾度か反覆せられ、而かも尙未だ一度も滿足に解釋せられざりし一大疑問なり。厭世と樂天と何れか人生の眞相を得たるものぞ。

是を古代の思想に徵すれば、此疑問の解釋は、多くは宗教的に非ざれば過境的なり。而して各國に於ける最古の民族は槪して樂天的なりと言ふを得ん。印度アリアン族の如きも、印度にありては吠陀以後、希臘にありてはホメーロス以降にありては、其文學は一般に厭世的風調を帶び、吠檀達以下の哲學に至りて其極度に達したりと雖も、アリアン族の祖先が本來厭世的にあらずして、快濶天を樂むの民なりしことは、吠陀以前の信仰の如何に眞率に、又如何に快活なりしかを見て之を察するを得べし。一度びオクソス河の谷間を出でゝパンジャブの平原に下るや、其氣候風物の勢力實に其厭世的傾向の原因となるに足るものありしなり。支那にあり

先鋒たる人間は、無終の終に於て何處に到底すべきかを、何人か想像し得るものぞ、吾人が理想は、謂はゞ暗夜の燈のみ、行々時と共に新ならざるは無し、宇宙の永遠なる旅行にありて僅に脚底盈尺の地を照らし得べきのみ。理想の境地に至りては人智は遂に如何とも測るべからず、經驗的理論は其道を超絕的哲學に讓らざるを得ざる也。

以上述たるが如く予輩は實際上の道德より立論し來りて、漸く其論階を登りつめたるの極は、勢ひ終に純理哲學の境域に入らざるを得ず。道德的理想の極致と其根據とは共に吾人が經驗的知識を超絕するを免れざるなり。

（廿六年六月稿）

に見るべきなり。故に大なる人は現在の長き人なり。故に最も大なる人の生命には過去無く未來無く唯永遠なる現在あるのみ。而かも斯の如きは洵に千百世の一人にして、人間歷史中僅に五指を屈するに足らず、不完全なる衆生凡夫は是等の人の中に自己が髣髴し煩悶する所の理想の權化を認むるを以て、驚嘆尊崇の念に堪へず、神とし、佛とし、日夕禮拜して尙慊らざるは、洵に人性の自然にして、道德の宗敎と一致するの點は實に玆に存する也。

然らば則道德最終の理想は最も博大なる人道に存するか。人道以上に道德の發達すべき餘地無きか。人道は少なくとも人類歷史の片影によりて其必然の進路なるに庶幾きが如し。人道は果して眞に宇宙道德の極致なるか。予輩は是問題に向て茫然として答ふる所を知らず。大宇宙の永遠なる進歩に於ける道德の未來は廣大無邊にして、人性の小智の規度し得べき處に非ず。吾人が今日無終の後に達し得べきを想望する所の平等即差別的人道其物は大宇宙の道德的歷史に於て、僅に其一頁に過ぎざるべきことを想へばなり。夫の無始の始にありて道德的歷史の今日あることを誰か預知したるべき。然らば即ち萬有を將あて宇宙發達の

同情を有せざるべからず。吾人が今日の狀態にありては是同情の範圍極めて狹隘にして、未だ全く目前の繫縛を脫する能はずと雖も、而かも其進步の方向は、正に時と處の制限を打破し、現在自己を中點として其同情を縱橫に擴張するに存す。即ち其初めは自己、而かも目前の自己を省きて他に何等の其心を累するもの無かりしが、漸く發達するに隨ひ、家族、社會、國家等に向て空間的に其同情を弘むると同時に、祖先、子孫、邦家、社會の過去の歷史及び未來の運命等に向て、時間的に其感情を博うするに至る。誰か其子若くは其孫の利害を以て自己に痛痒無しと言ふものぞ。誰か直に其身の後に來るべき國民の盛衰を以て意に介する無しと謂ふものぞ。是未來の感情は高尚なる人物に於て殊に多く發達せるものにして、古より或は人道の爲に血を流し、或は命を邦家に献げたるものは、所詮是感情の常人より深且博なるものありしに因らずんばあらず。基督、釋迦若くは孔子、ソクラテスの說く所を聞かば、彼等が一時一代を以てこれを爲さず、自己を擧て人道の中に渾化し、千百代の末世を軫念すると、猶其兒を愛撫するが如きものあるを見ん。故に大なる人は一時に生活せずして萬世に呼吸す、靈魂の不滅てふとは斯かる人に於て眞

發達の歷史に徵すれば、吾人は纔に是方向に向て進行しつゝあり。人間は是の歷史の永遠なる進路の中にありて、厪に方に其產聲を擧げたるのみ。ゲーテ謂へらく吾等の文學は斷片(ダス、フラグメント、デル、)の斷片(フラグメンテ)なりと。歷史は文學に比して更に零丁たる斷片ならんのみ。吾人は厪に方に永遠なる宇宙歷史書の第一頁を繙したるのみ。未來の如何になり行くべきかは、吾人の正に知り得べき限に非ざれども、過去の經過にして將來の趨勢を指示して大に誤るなくんば、宇宙の道德は正に是方向に進みつゝある也。是理想を預想するに非ずば、過去の歷史は遂に其眞相を知るべからず、個人の道德的希望も亦遂に其根據を失ふべき也。想ふに眇たる個人の身を以て博大無限なる人道の中に其主我的傾向を沒却せんことは、曠劫の後に非ざれば望み得べからざることならん。而かも是希望の徒に空想に止らざることは、少なくとも現に未來に關する念慮の漸く發達せることに依りても明なるべし。蓋し人道なることは某時某處の人間を指すに非ずして、過去現在未來の三世に涉りたる人間全體に就て謂へる也。即ち某の詩人が謂ひけん如く『永遠なる今(エトルナル、ナウ)』に於ける人間を謂へる也。故に眞に人道の友たらんものは、三世曠劫に涉りて一樣常住の

め、其發達を以て個人の理想と爲すに至るべし。左に少しく之を詳說せん。

そも〳〵人心一度び狹隘なる主我的境域を脫するを得ば、彼は同時に自己の外に社會を認むべし。而して其內性の必然なる要求として、人生の理想は狹隘なる自己の幸福に在らずして社會の人格を高め、其幸福を進むるに在ることを發見すべし。然れども是れ功利論者の所謂最大數の最大幸福とは大に異なり。若し個人を以て目的と爲すに足らずとせば是の個人の自己たると他人たると、若くは其の一人なると多數なるとに論なく凡て目的と爲すに足らざるべし。功利論者の說は、ヴントが言ひし如く少しく範圍の弘き利己主義に過ぎざるのみ。彼等は社會、國家、一般人間が恰も個人の如く、其人格と理想とを有することを認めざるなり。已に是一事を逸す、是れ全く倫理學を逸したるものなり。

更に是階段を超ゆれば、個人が社會の一部分たるが如く、社會亦一般人間(メンシュハイト)の一分子に過ぎざるを認むべし。而して社會は是一般人間の人格を昂め、其理想の現化を幇助することに於て、其存在の最高の意義を認識すべし。勿論斯の如き高尙博大なる觀念は有漏有盡の人類に於て長へに望み得べからざるべし、然れども人類

道義的宇宙歴史の當に到達すべき理想は果して那邊に存するか。是れ予輩が是より考察せんと欲する所なり。

個人と社會との關係は予輩已に之を言へり、其の個人に就て謂へりしもの、直に移して社會の上に應用することを得べし。蓋し心性の發達とは要するに明白に自己を覺識することなり。故に心性の發達とは畢竟自己の範圍の擴張せらるゝことに外ならず。未開人にありては、自己は世界の中心なり、彼れ若し外物を認識したりとせば、其外物は自己の生存に或利害の關係を有する限に於て、其存在の意義を有するのみ。況して他の人格を尊敬するが如き、又況して社會、國家、人類全體の人格を認識するが如き、彼等の事に非ず。人心漸く進歩すると共に、人間は單に生存するものに非ずして、發達せんが爲に生存すること、單に自己の爲に生存するのみならず、社會、國家及び一般人間の爲に、又之に依りて生存することゝ、隨て是等のものゝ進歩は、亦個人の理想なること、等を覺識するに至るべし。要するに人心は進歩するに隨ひ深さと共に廣さを增すもの也。啻に個人の人格に就て明晰なる概念を有するに至るのみならず、他人、社會、國家より、遂に一般人間を一體として、其人格を認

(若し予に此新名辭を用ふるを許さば)の近世紀とも見るべき者なり。是時代の歷史にありては精神的分子は漸く物質的分子を超駕し、其生活は社會的、智力的となれると共に道德的となれるものなり。故に人間は離群索居せずして、家族、社會、國家を組織し、唯々盲目なる本能の支配する所と爲らずして、自ら考察し、推度し、單に生活の必要に左右せられずして、行爲の善惡正邪を辨別す。人間は萬有歷史の前面に立てるものにして、宇宙全體が如何程進歩したるかを示す所の標章なり。されば沙翁謂へらく、

> What a piece of work is a man! how noble in reason! how infinite in faculty! in form and moving how express and admirable! in action how like an angel! in apprehension, how like a god! the beauty of the world! the paragon of animals!——*Hamlet* II. 2.

人間の位置已に斯の如し。故に人間の進歩即ち宇宙の進歩なるとは、猶ほ道德の進歩即ち人間の進歩なるが如し。是を以て人間は宇宙間の他物に比して遙に甚大なる負擔を荷へるものなり。然らば則ち人間を先鋒として進歩しつゝある

と心肺臓髄との間に自ら効用の上に差等あるが如く、猶ほ同一戯曲中の凡ての人物が、劇的動作の完成の上に於て、同一の價値を有せざるが如く、人間の活動も亦其間に高下無きを得ず。然らば何物か人心の活動に於て最高の價値を有するか。是れ必ずや人の依て以て人たるを得る所のもの、換言すれば、人間特有の長所ならざるべからず。蓋し道德性は其最高なるものゝ一たるを失ざるべし。道德は人心最高の原理にして、又最高の活動なり。宇宙萬有が無始より展轉進化して、初めて今日に成すことを得たりしもの、即ち是に外ならずと見るべければなり。道德の人心に於けるは猶ほ人間の宇宙に於けるが如し。道德的活動は人間にとりて最も重要なる意義を有するが如く、人間の活動は宇宙にとりて至大なる關係を有す。人は是點に於ても亦小宇宙なり。今萬有發達の歴史を大別すれば、非道德的及道德的の二と爲すことを得べし。非道德的歴史とは無生物より植物、動物に到るまでの發達の順序にして、道德的歴史とは即ち人間進歩の經過なり。故に吾人の通例謂ふ所の歴史なるものは、決して吾人々間のみに關し、他に何等の因縁無きものには非ずして、萬有發達の大歴史中、其道德的部分のみを指すものにして、萬有歴史

一言せり。是事は近年進化論、生物學等の發達の爲に大に其科學的根據を强めたるが如しと雖も、他の眞理の如く、已に古代より純理哲學上の思想として多少鼓吹せられたり。プラトーンが實體論の如き其の著しき者なり。近世にありてはライプニッツが原子論を唱道し、萬物の差等は之を構成する原子に差等あるが爲、而して原子の差等は其觀念の明不明に依るとなし、進歩とは所詮無意識的知覺より漸く有意識的知覺に進むとに外ならざるを說きしが如き、又ショペンハウエルの如き、意志の發達を以て萬有を說明せんと欲し、將たヘルデル、グリーン、近くはカリエル等が非人格的神又は宇宙精神を說きしが如き、若くはハルトマンが無意識哲學の如き、其詳細なる點に於ては素より相異るを免れずと雖も、其大體の精神に至ては概ね其軌を一にせるが如し。所謂具體(若くは結象)一元論も亦是に外ならず、予輩は先づ讀者の許を得て是原理を預想せん。

人間の能力に幾多の種類あること、及び是等の能力を圓滿に活動せしむることの人生最大の幸福なる所以の理は、已に之を述べたり。然れども是等の能力には各高下の差等あることを記憶せざるべからず。猶ほ同一の體機に於て爪髮手足

觀念を有するを以て、非我的平等心は愈々發達するに至るべし。即ち彼の理想は差別的たると同時に平等的となり個體的たると同時に普通的となるべし。社會は個人の人格を撲滅して自己を發達するに非ず、個人は社會の人格を否定して自己を現化するに非ず、此れ即ち佛教に所謂平等即差別、差別即平等の妙境なり。道德の主觀的理想實に茲に存す。

本論（三）

予輩は説明の便宜上、主觀客觀の二方面より道德の理想を觀察すと雖も、決して異りたる二樣の理想ありと謂ふに非ず。主觀的に人心活動の原理となるもの、即ち客觀的には一般生物發達の原理なり、元之れ謂はゞ同一物の雙面に過ぎざるのみ。前章已に主觀的に人生の理想を示したれば、予輩は茲に宇宙全體をば道德的立點より觀察して、其發達の最終の目的の那邊に在るかを案定せんと欲す。

予輩は先に、萬有の發達は或點より見れば、物質精神二素の消長に過ぎずして、其理想は精神素が全く物質素を超駕し支配し自由獨立の活動を有するに在ることを

凡て自己の現化は其第一の條件として社會を要す。社會を外にして一切の現化發達は望むべからず。而かも社會は個人を外にして存在し得べきものに非ず。此二者は全と分との關係にして、到底相離るべからざるなり。然れども社會は他の無機物若くは下等動物の集合躰とは大に趣を異にし、其れ自らの人格を有す。此人格は個々人の人格の外になし、其れ自らの理想と發達の方法とを有す。社會は個人に依りて自己を發展すること猶個人が社會に緣りて自己を現化するが如し。而かも個人は社會の方便に非ず、社會亦個人の方便に非ず。此間の關係は頗る妙なり、個人と社會とは自己より自己を見れば各々目的なれども、自己より他を見れば互に方便なり。之を喩ふれば心胸腦髓手足口鼻皆之れ生命維持の點より見れば方便に過ぎざれども、此等の者より生命維持を見る時は亦之れ方便に過ぎざるが如し。個人は其發達と共に自覺心漸く明瞭となり、智力、意志、感情共に進步するを以て、自己の人格を一層明晰に意識し、自己の生存の價値、自由、獨立、等に就て愈、確乎たる地歩を占むるに至るべし、即ち個躰的となるべし。然れども之と同時に人間各自の社會的位置、社會と個人との關係、及び社會の理想等に就て朋晰なる

に潜在せる本來自然の理法に從ふべきを説き、書經に人心と道心とを分ち陽明は良智良能を論じ、將たライブニッツとヲルフが生物の活動を生存及び進歩の二にありとなし、圓滿を以て理想となせる、斯の如きは所詮冥々地に自己の現化を認識せるものに外ならざるが如し。快樂論者の勇將ミルすら已に此の理を認めしが如し。即ち氏が快樂の中に分量と種類との差別あるを認め、麥酒を味ふの快樂と慈悲を行ひたるの滿足とは、此度に於てのみならず、其類に於て異なるを認め、最高の善は最高の快樂に存することを説き遂に「豚と爲りて滿足せんよりは寧ろ人となりて不平ならん」と喝破したるが如き、之れミルが其本領の快樂論を離れたるものにして、同時に人間特有の活動を認め、且人生の滿足は此活動に外ならざるを認めたるを以て、予輩が所謂自己活動の説に一歩を寄せたるものと謂ふべきなり。

以上道德の主觀的理想の那邊に存するかを論せり。今道德的立點より社會及び世界を觀察するの前に此主觀的理想の將來進むべき方針に就て少しく意見を陳べん。然れども此ことは客觀的考察の後に於て一層明瞭なるべきを以て玆には其大體に止むべし。

時に隨ひ處に應じて此等の生活を各々完全に營まんことを望む。吾人の幸福は實に茲に存する也。是故に吾人の本然に有する能力をあらゆる方法を以て發達せしむるは人生の最高の目的にして、吾人の意志の常住の方向は實に是にあり。斯の如き生活は一面より見れば、最大の幸福なるが故に最高の善なり。此境地に到るを得ば、人は其の何故に、將た何の爲に善なるかを問ふを要せず。之れ既に絕對の善なり、無限の善なり、自依、自足、又他に待つ所なきの善なり。然れども斯の如き理想的狀態は吾人の到達し得べき所にあらず。所謂漸接線的（アシンプトーチック）に、無限に、不退轉に、精進すべきのみ。

二

此自己現化若くは自己活動を道德的原理として唱導せしは比較的に近年の事なれども古來主なる學者は暗々の中に此思想を有せりしが如く思はるゝは頗る注意すべきことなりとす。プラトーンとアリストテレースとが德を行ふことを以て最高の善となし、ストア派が自然に從ふを以て所謂人生の理想となし、將た易に一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也と說て、老子が私心を去り我慾を閉ぢ大道の分出（易の哲學は進化論にして老子の世界觀は分出論なり）によりて各人の胸中

りて何等の執意を要せずして行ひ得る行爲には眞の道德的價値無きことを主張するものなり。此事は凡て道德的行爲に對して人は滿足するものなるに、本能的行爲は少しも人に幸福の意識を與へざる一事を以て見るも明なるが如し。然れども此點に關しては反對說にも理由の認むべきものあるを以て、更に愼密なる考察を要す。故に予は予の說の未定なることを茲に一言し置くべし。

這般の議論は暫く措きて予は予が本論を繼續すべし。凡て本然の能力を完全に活動せしむることは一般生物幸福の原因なり。然れども予輩は茲に生物學上の實例を擧ぐるの遑なし。而して此ことは心性の凡ての部分の最も多く發達したる人にありて最も明晰なるべきは素より論を竢たず。人は其發達の階段に應じ、其天性に隨て當に爲すべき活動の形式あり、之れ天性の要求なり。若し吾人の內外の事情が此要求を滿足することを得ずとするも、吾人は其時と所とに於ける最大の幸福を享受するなり。吾人は遊び且働き、想像し且成作し、戀愛し且憎惡し、服從し且支配し、夢み且歌ひ、研究し且沈思せんことを欲す。親に向ては子、師に對して弟、友に對しては友、敵に對しては敵、妻に對しては夫、他人に對して他人、吾人は

意に變易し作滅し得べきものに非ずして、吾人心性の本然に深遠なる根據を有し、道德的生物として吾人の必然に有せざるべからざるものなり。故に心性の實在を容せるものは、同時に理想の實在をも許容せざる可らず。理想は活動が客觀的事實なるが如く、主觀的事實なりと謂ふを得べし。良しや吾人が愉悅懷慕する所の理想が客觀的に到達し得られずとするも、此理想に向て進むことによりて吾人の幸福亦漸く增進するとせば、吾人亦何の恨む所かあらん。予輩は此點に於て飽く迄多樂主義を取らんと欲す。

前に述べたる予輩の說は、一個の假定を有することを忘るべからず、即ちあらゆる意志の活動は不調和不圓滿を預想せるものなりとせり。論者或は言はん、活動は不調和を預想することを要せず、完全なる調和も亦活動することを得べし天體の運動は全く圓滿なる調和を有するにあらずやと。此の說は盡力（エフホルト）は德義の要件なりや否やの疑問に關聯して一の注意すべき說（ギザッキ氏倫理哲學參考）なりと雖も、予は之を信せず。意志に關せざるものは、勿論道德上の價値を有せず、而かも意志は元來其性質として盡力を要するものなればなり。予は是故に本能若しくは習慣とな

らず。若し論理上活動の存在せる事實と理想と兩立し難き場合にありては、予輩は勢ひ後者を否定せざるべからず。今此矛盾を按ずるに最大なる活動の最少なる活動と等しきとは事實上決して有り得べからず。故に予輩は完全なる自己現化は理想的觀念に止まり實際有り得べからずと結論せざるを得ず。故に自己の現化は常に不完全にして隨て活動も亦常に不十分なり隨て幸福も亦長へに不圓滿なり。此不完全なる自己と活動と幸福とは相展轉して無始の過去より無終の未來まで永遠の發達を爲すとも、而かも其圓滿の域は遂に達し得べからざるなり。此不退轉の精進と無間斷の活動とは、吾人及吾人の幸福の進歩し增加する所以なり。尙此事は後章詳論するの機會あるべきなり。

斯く言はゞ人或は言はん、理想が單に吾人の空想に過ぎずとせば、吾人は虛無の希望を以て生活するものと謂ふべし。道德の如き虛無を理想とするもの何の用ふる所ぞと。之れ太だ誤れり。よし理想の客觀的實在を容さずとも、そは吾人の必性の必然なる要素として主觀的に實在するものなり。予輩は茲に讀者が必然なる文字を輕々しく看過する勿らんことを望む。理想は普通の想像と同じく、任

大の幸福は生活の目的たること亦勿論なり。然るに自己を現化し終らざる間は、活動は常に不完全なる活動なり、随て其幸福は常に不圓滿なるを免れず。然れども自己を現化し終りたる時は、即ち活動の消滅したる時なり。何となれば凡ての活動は意志の作用にして、意志は慾望を預想し、慾望は不圓滿を預想するを以て、圓滿なる自己現化にありて活動の有るべき理由無ければなり。既に活動なし、之れ滿足無きなり、幸福なきなり、然らば即ち生活の目的は遂に幸福の消滅に到底せんとするにありと謂はざるべからず。予輩は此矛盾を如何に説明すべきか。今一方より考ふるに活動の極は即是自己現化にあり、而して自己現化即是れ寂靜無活動の狀態なりとせば、最大なる活動は活動の消滅と同一なりと謂はざるべからず。一見甚だ奇怪なるが如しと雖も、予輩を以て之を見れば、全く解釋の道無きにあらず。抑も活動の存在せること、又此活動が意志の作用にして、意志の作用が或る不滿足を預想することは事實なり、故に辯論上の便宜の爲に消却し得べきものに非ず。然るに最高の目的、即理想は其實際上に於ける觀念、及び此觀念によりて生せられたる勢力の如何に現實に、又如何に強大なるにもせよ、所詮想像の一種に外な

の意識及事實は共に其說を否定することを種々の例によりて論證したり。予輩の所說略々亦之に依りて明なるを得たるなるべしと雖も、更に一步を進めて暫く積極的論辯を試みんと欲す。

予輩は先づ前述の論據によりて次の如く斷言するを得ん。曰く、凡て生活の價値は快樂にあらずして、生物が本然に有するあらゆる能力を正當に、且健全に使用することなり。隨て生活の目的は啻に此等の能力を正當に、且健全に使用するのみならず、尙十分に、自由に、之を活動するにあり。然れども完全なる活動は素發達を預想す。何となれば吾人が本然に有する將然的能力は常に發展進步の傾向を有するを以て、此能力を完全に活動せしめんが爲には之を完全に發達即現化せしむることを要すればなり。故に生活最後の目的は自己の現化にあり、而して其最大なる幸福即ち滿足は自己の活動に存すと謂ふを得べし。斯の如く言はゞ、讀むもの或は怪まん、最後の目的は即ち最大の幸福に非ざるか、然るに自己の活動を以て最大の幸福となすと如何にと。然り之れ實に道德上の大謎語なり。已に活動を以て幸福となしたる以上は、最大の活動の最大の幸福たるは言ふ迄も無し。又最

盾なる苦樂の感情の上より言ふ時は、悲哀は常に悲哀にして、恐怖は常に恐怖なり。而かも吾人の人格即自覺心の上より之を見る時は、最大の快樂と最小の苦痛とは吾人の意志の本來の目的に非ず。吾人の意志の慾望する所は吾人の本然の中に將然的に含有せし活動力を自由に發展し十分に現化するに存す。吾人は素より飲み、食ひ休み、眠り、遊び、戯るゝことを欲するも、而かも之と同じく愛し、憎み、悲み、苦み、嘆き、怒らんとを欲す。要するに吾人が本然中のあらゆる種類の精力を盡く活動せしめんことを希望す。苦と樂は自覺心の中には其の目的たるに於て消極的たると積極的たるとの差別なし、只吾人の活動力の發表の形式として意識中の狀態に過ぎざるのみ。此自己活動こそ即ち之れ人生に滿足を與ふる根本的原理なれ。

ウォルヅヲース歌て曰く

If life were slumber on a bed of dawn,
Toil unimposed, vicissitude undown,
Sad were our lot.

以上は快樂論者が(一)目的と手段即慾望と快樂との關係を誤解せること(二)吾人

もの、將た何等の滿足を吾人に與ふべきや。誰か爭鬪と犧牲とは洵に人生に缺くべからざる要素にあらずとするや。之れキーランドの幸福なる傳奇が吾人を樂ましむるに足らざる所以にして、吾人が却て尤も悲慘哀絶なる抒情詩と戲曲とを喜ぶ所以の理亦茲に存す。悲慘なる抒情詩、戲曲にありては吾人は其中の人物と共に、常に吾人の達すべき理想の常に眼前に横はるを認むるも、而かも、長へに之を捉ふる能はざるなり吾人は死生の間に煩悶し、輾轉反覆此理想に到らんことを希ふ。敵人吾を欺き、吾を陥れ、無情の風は吾を殺し、又吾を活す、或は久來の望將に捉へんとして幸運忽ち背き、或は絶望の淵に沈まんとして眉間俄に希望の光を認む吾は義人と共に爭ひ、苦み、惱み、憤り、戀人と共に憧れ、悲み、嘆き、狂す。吾人が本然の活動力は餘蘊なく發表するの機會を得るを以て、吾人は茲に最も深痛なる快樂を感ずるなり。アリストテレース、シルレルは同情を以て、ヒュームは審美的感情を以て、大西祝氏は社會的感情を以て此悲哀の感情を説明せんとせしも、予は其根本的原因は實に此自己活動の滿足に存せることを斷言せんと欲す。茲に一事の注意すべきものあり、悲哀恐怖の情が直に快樂を與ふると云はゞ之れ素より言語上の矛

蓋し詩歌は人生と人情との恰好なる鏡なり。如何なる詩歌が尤も深く吾人を樂ましむるか。そは平和、滿足、幸榮を描きたるの詩ならんか。パウルゼン氏が引きたるキーランドが「アリスチプ」(Aristipp)は實に此種の詩なり。アリスチプや、ライスや、クレオニダスや、ムザメリオンや、凡て吾人が平生希望する所のものを有せる也。彼等は富み且美はしき邸宅に居住せり、彼等の容姿は美にして其身軀は健全なり。彼等は明晰なる理解力と穎敏なる智慧とを有し、如何なる事に遇ふても錯誤したること無きなり。彼等は自ら樂み、且人を樂ましむるの力を有せり。殊に幸なるは彼等は其さゝやかなる希望の中に其れ／＼の哲學を有し心を安じて世に立つを得たるなり。斯の如く愉快なる、幸福なる事情に充てるにも係らず、アリスチプは何が故にかく堪え難き書なりとするか。其の眞ならざるが爲か、恐くは然らず。之れ將た此書中に見る如き生活の堪え難きに依るにも非ず。唯々此書を讀むに當りて吾人が衷心の最も深き動機は全く活動を欲けるが爲、即ち不滿足なるが爲ならずんば非ず。誰か全く抵抗なく爭鬪無くして生活し得るものぞ。若し些の困難なくして達し得べきものならんには吾人の日夕愉悅する所の眞理なる

なり。よしや勞動其身に迫り、苦痛其胸に燃え、憂情其心を纏ふとも、靜寂無爲にして些の活動なき生活には優りなん。如此生活は（もしありとせば）吾人にとりては何等の趣味も無く、到底堪ゆべからざる生活ならん。多忙、憂愁の人が無事寂寞を希ふはこれ一時の情のみ。凡ての狀態は死より寂しく又靜なるは無し。然れども喪心狂情に非ずんば、何人か敢て其不幸なる生活を以て死の平和に換へ得るものぞ。之れ活動が其苦なると樂なるとを問はず、凡て人生に滿足を與ふることの證據として見るべからざるか。樊籠の裏にあり自ら勞せずして食餌日に給するも、誰か飢餓に苦みて山野を涉獵するを以て寧ろ禽獸の滿足ならずとするか。古より自由を以て人生最大の樂事となすもの、畢竟活動の自由を意味するに外ならず。

此事を以て優に所謂悲哀の快感を說明し得べし。此一種特異なる心的現象を說明するもの、或は審美的感情に歸し、或は社會的性情に本くとなし、學者多く其說を異にすと雖も何れも其一面の眞を得たるに過ぎず。其根本的解釋は予輩が所謂自己活動說に於て求めざるべからざるなり。試に少しく之を說かんか。（全集第三卷五、三一頁以下參照）

何に恐るべきものなるかを示せり。要するに沙翁は人生の幸福は天性の優劣美醜に關せずして只各自固有の精力を適當に使用するに存するの理を明にせんと努めしなり。是を以て天は信神の念深きにも係らずリチャード二世を助けずして却てヘレナに福を與へしなり。彼に放逸にして此は自ら助けたれば也。云々　（沙翁評註プラネット英譯九百十乃至十三頁）

快樂論者は苦痛を以てあらゆる行爲の消極的動機と爲すと雖も是亦事實に反す。痛に苦みて醫師を迎ふるが如き場合にありては此説當れりと雖も凡ての場合に應用すべきにあらず。小兒の嬉戲するは苦痛を遁れんが爲なるか。詩人が詩を作るは苦痛を避けんが爲なるか。何ぞ夫れ然らん。衝動は苦痛に先ち故に又快樂に先つ。前文已に此意を盡せるを以て又多言を要せざるべし。

又快樂論者は一切の慾望は快樂なりと主張すと雖も事實は正に之を否定す。即ち吾人は往々啻に甘じて苦痛を受くるのみならず自ら進で悲哀の渦中に入ることあり。之れはた日常の事實なり。之れ人性は素苦痛なくして滿足する能はず苦痛も快樂と共に其本然の能力を現化するに於て缺くべからざる活動なれば

は、百事皆此活動に係らざるはなし。ハムレットの如きは特に此原理を尤も正確に說明したるものなり。見よ此のハムレットにありて、思想の力は餘りに强大にして、人間本然の活動力を抑塞し、其自由を束縛し、其進路を防遏し、天賦の精力をして用ゆる處なからしめたり。現實の事物を超駕して電光の如く獨り理想の世界に飛躍する思想の力に伴はんには、彼れのあらゆる活動はあまりに緩漫なりし也。彼が事業の標準は活動に非ずして思想なり。之を以て凡百の事物多く彼が志に違ひ、外界と內心との調和の途殆ど絕えて、彼が本然の活動力は空しく此中間にありて爲すこと無き也。智力は彼を誤り、意志は彼を陷れ、良心は彼を詒きて彼は全く心性の健康を失へり。彼は斯くして厭世悲哀亂心の人となるに到れる也。沙翁は其喜劇に於ても亦徒に虛榮に誇り、沈思に耽り、以て人生本來の活動を欲くことの不幸なる結果を皷吹せり。リチャード二世は懶惰と逸樂との爲に、タイモンは放埒なる奢侈と慈善との爲に、何れも適當の活動を欲きたるが爲に、厭世の憂苦に陷れるを說けり。而かもアントニーに於て彼は强大なる活動力を罪惡の爲に使用したる結果の如

手記の中に於て沙翁劇の道徳の原理を論じたる一段は吾人の注意を値するものなれば左に掲ぐ。

沙翁の道徳上の意見の根據は、凡て人は天然に彼が用ゆべき活動力と此活動力を正しく導くべき克己自節の力とを以て生れたりと云ふにあり。吾等は何處より來り、將た何處に往かんとするかは、哲學宗教を待て解釋し得べき問題にして、詩人若くは歴史家の與り知る所に非ず。只「人は彼が來りし如く其の行く處を忍ばざるべからず、成熟して而して已まんのみ」「何故に我れ在るかは之を造化主に問へ、予は唯爾在ることにて十分なり」是等の文字は、沙翁が此道徳上の意見を明白に示すもの也。此『何處より（ホエンス）』と『何處に（ホイザー）』に向ては人は全く受動的なれ共、生活の間は能動的也。沙翁は蓋し人間と自然界とに貫通せる作用を考察し、明に活動の目的は活動其物に存することを認めたり。是に於てか、彼は其戲曲の到る處に發揮せられたる原理を確め得たり。即ち自然は人に其勢力を假すも而かも之を與へず、彼をして其一生の間に之を活用し之を現化して再び已れに還さしむと。是故に沙翁が道徳にありて

よりて得たる快樂と慾望したる物とを混同したるもの也。人は快樂によりて自己を滿足せんと求むるを得べし、然れども自己を滿足するの快樂は決して緣て以て自己を滿足せんと欲する所の者に非ず。此事は十八世紀の初めに行はれし慈善心の利己的なりや否やの爭論に於て已に明にせられたるものなり。バトラル一輩の學者は、予輩が先に引きたる飢餓と食事との例によりて、利己論者の誤謬を指摘せり。曰く食慾は已に快樂の前にあらざるべからず、慾望は其目的物に終ると。快樂論者を仆すの寸鐵なりと謂ふべし。蓋し人の生るゝや、各々本然の能力を齎し來る、此能力を尤も完全に發達するを得たるものは尤も完全なる人間なり。世に所謂不幸なる人とは、畢竟するに、或事情に因りて此活動を障碍せられたる人のみ。夫の鬱憂の中に快々として其不幸なる生活を送る人、其原因は或は失意の戀に存するもあらん、或は名譽心の挫折に基するもあらん、或は財產を失へるに因るもあらん、而かも詮する所、其心性本來の活動を沮碍せられ中折せられたるに依らずんばあらず。是に於てか、外部に現はるべき活動は飜て內心を苦め厭世悲哀の人となりて、不自然の最後を遂ぐるもの比々皆然り。批評家ゲルヰヌスが沙翁

なり。二者の區別甚だ明瞭なりと謂ふべし。然れども凡ての場合に於て此例に見るが如く、目的は快樂にして、事物は手段なるか。吾人餓て食卓に就けりとせよ、其目的は食物を喫することによりて將に得んとする快樂にありて、食事は其手段に過ぎざるか。今音樂を好める人が閑を偸みて合奏會に赴きたりとせよ、其目的は快樂にして音樂は單に其手段に過ぎずとするか。バイロンは只自已の快樂を得んが爲に、將たベンサムの言の如く、最大多數の最大幸福を得んが爲に、亡國の餘韻を歌ひ、英雄の故業を吊し、燃ゆるが如き罵世の情血を瀝盡し、失意の愛を嘆じ、人世の虚榮を嘲りしか。釋迦が人爵を捨て王宮を去り、須彌栴檀の山の月に色即是空を觀せしもの、之れ亦快樂の爲なりしか。快樂論者を除ては何人か然りと謂はん。此等人間の行爲は人心本然の性質として其衷心に感ぜる衝動と活力とが外界に現はれたる形式に過ぎずして、之に依りて得たる滿足は即ち人心本然の活動力が壓抑障碍を排斥して自由なる發展を遂げたるに因る。故に此内部の衝動と、之を自由に活動せんとするの慾望とは、已に快樂の前に存して行爲の動機となれるものにして、此快樂自らが此活動の原因と爲るに非ず。快樂論者は畢竟滿足に

之を見るのみ。意思を動かすものは快樂を與ふることを預約するものに非ざれば、苦痛を避くることを預約するものゝみ、故に慈善事業も、一杯の葡萄酒も、其意思の目的たるを得る所以の理に至ては一も異なること無し。彼等は事物を別つに快樂を與ふるの差等を以てし、而かも其内面的性質の全く相異なるものの有ることを認めず。ミル氏の如きは此間の差別を認むと雖も、之れ氏が純正の快樂論者に非ざる所以なり。這般の疑問は元來吾人の意識上の事實によりて判斷するの外、他に何等の標準なきもの也。快樂論者の言ふ如く、吾人が一切の行爲は凡て快樂を得んが爲なるか。否々、吾人の意識と種々の歷史的觀察とは共に之を是認せざるなり。

第一快樂論者の抱ける目的と手段との概念の中に大なる誤謬あり。今吾人凍寒に苦む時は其身を暖めんことを欲す。此目的を達するには種々の方便あり、衣服を重ぬるも一方なり、運動するも亦一方なり、薪炭を取りて之を燃すも亦一方なり、吾人にとりては此等の方便は何れにても可なり、唯欲する所は凍寒の苦を免るゝにあるのみ。此場合に於ては目的は快樂にして、運動、衣服、薪炭等の事物は手段

Wirkt Natur, wirkt Menschengeist, und beide
Sind ein Abglanz jenes Urlichts droben,
Das unsichtbar alle Welt erleuchtet.

以上は道德的理想の純理哲學的基礎に就て一言したるなり。次に進で主觀的理想に就て論ずる所あるべし。

本論（二）

以上は道德的理想の問題に對する予輩の立點を預め提起したるなり。今やいよ〳〵本論に入り主觀的理想を論ずるに臨みて、先づ人間の幸福は畢竟自己活動に外ならざることを明にせざるべからず。此目的の爲に初めに快樂主義の大謬見を正さんことを要す。

快樂主義の誤謬に就ては前章已に言ふ所ありしが、其詳說を本章に讓りて、僅に大躰の論に止めたりき。快樂論者の說によれば意志の動機は凡て只快樂のみ、其對象たる事物の性質に就て何等の差別を認めず、只々快樂を與ふる媒介物として

依なる自然界の一部にして、只生存競爭の進化律を外にして何等の原理をも有ること無し。吾人を有するものは神ならず、吾人自らなり、善惡は超自然的起原を有するものに非ずして、吾人の生存の適不適に據るなり。ルソーが「人々よ、罪惡の源を求むる勿れ、汝等自らこそ其起原なれ」と言へりしは、洵に理ありと言ふべし。云々、

神を容さゞるは則ち善し、運命を許さゞるも亦大に善し、而かも生存競爭を以て道德標準を定めんとするに至ては更に大に不可なり。予輩はグロートの如く道德を見ると宗敎の如くなるを須ゐず。又ヘルデル、グリーン諸氏の如く、宇宙的自我と言ふ如き大膽なる假定を設くるを必とせず、唯宇宙其れ自らは道德的計畫(を、有するに非ず)にして、宇宙の部分なる萬物は個々相緣りて、是計畫を現化することを假定するを要するのみ。即ち吾人が道德的なるは畢竟宇宙其れ自らが道德的なるが爲にして、吾人が理想を有するは宇宙其れ自らが理想を有するに依る。ゲーテ歌ふらく

So im Kleinen ewig, wie im Grossen

想の根據は單に器械力なるか、將た純理哲學的基礎を有するか。

是れ甚だ困難なる疑問なり。予輩の現に思考する所によれば、宇宙其れ自らは一の道德的計畫なり。吾人が道德的なるは畢竟宇宙其れ自らが道德的なるが爲なり。予輩は何の故に然るかを知らずと雖も、或道德的計畫は慥に宇宙の目的、少くとも目的の一なり。是れ宇宙の中、若くは外に或一定の原因ありて宇宙をして是目的を達せしむと言ふに非ずして、宇宙其れ自らが是の計畫に外ならざるを言ふなり。予輩を以て有神論者と爲すものあらば之れ予輩の意を誤れるもの也。有神論者は神の意志によりて是道德的計畫を說明せんと欲するも、是れ寧ろ宗教的信仰のみ、科學的には容すべからず。意志とは吾人々間の如き人格を具へたるものに就て初めて言ひ得べきものにして、吾人が何等の知識をも有せざる神なるものに向て漠然吾人と同樣の性質を附會するは、何ぞ古代人民の自然宗教と異なる所あらんや。予輩は想ふ、道德を說明するには、斯の如き假定を要せず、宇宙其れ自らが道德的計畫なりと言はゞ則ち足れりと。ギヂッキ曰く、

是世界は神、惡魔若くは運命等によりて支配せらるゝものに非ずして、自由、自

は物質素漸く其力を滅じて精神素漸く其勢を増すにあり。其發達の初期にありては、全く物質的法則の支配する所となり、精神素は殆ど零位なりしが、進化するに隨ひ物質律の支配漸く微弱となり、精神律の權力漸く强大となる。人間にありては精神は遙に物質を超駕して之を支配すれども、尙未だ完全なる自由を得るに至らず。人間を有限若くは不完全なりと言ふは、其全く物質の繋縛を解脫せざるを謂ふなり。若し理想的狀態に達するの日ありとせば、物質は精神の活動に必要なる最少限に於て存在するに至るべき也。是進化にありて、精神發達の形式の主要なるものは、自覺心漸く明晰となるにあり。自覺心の發達は、即ち自覺心を構成する心性全躰の發達に依り、心性全躰の發達に於て主要なるものは、理性の發達及び道德心の進步にあり。故に凡て進化の一要件は道德心の進步にありと言ふを得べし。然るに道德心の進步とは一の理想に向て精進するの謂に外ならず。是に於て予輩は停りて一考するを要す。是等の事實は、是等以外の事に就ては何事も吾人に語る所あらざるか。斯の如き進化を支配する原理は盲力なる器械力の偶然なる作用に過ぎざるか將た又他に原因あつて存するか。一言すれば道德的理

は數潜むか、龍隱るゝか、未だ俄に知り易からざるなり。蓋し進化律は是不可思議的の可覺的形式を具へたる者に過ぎざるを以て、盲目なり、自己の意義目的を知らざる也。純理哲學は這般の考察の爲めに吾人を待ちつゝあるなり。

予輩は是純理哲學上の大問題に向て多く言ふと能はず。之を爲すには更に弘汎なる觀察を要するを以て、倫理學の範圍内に於て俄に斷定し難きものあればなり。唯或一面より萬有發達の大躰を觀察すれば、進化とは所詮精神物質の二者の消長に外ならざるが如し。物質、即吾人が通例無生物と名くる者にも、幾多の發達の階級あること、猶生物界に高下の差別あるが如し。即ち例へば物理學的凝聚力は物質最低の性質と見るを得べく、漸く進で化學的親和力となり、電氣となり、磁氣となるに至て、遂に其最高點に達す。尙進で生物界に入れば、初めはアミーバの如く單に衝擊を受くるに止れども、高等と爲るに隨て漸く意識を生じ、自覺を生じ、道德心を生じ、遂に人間に發達す。故に萬物を一列に見る時は、磁氣電氣等は不完全なる感覺力と見るを得べく、又將然的自覺心とも見るを得べし。之を實物に繫げて考ふれば、地水火風等の元素より、植物、動物、人間に到る階段にして、其進化の方向

的差別を滅却し、あらゆる生物は本來何等の差別あるに非ずして、進化律に適應せる程度の多少によりて其發達の階級に差等を生じたるに過ぎざることを說明するにあり。是論は先に一言せし如く或制限の下には予輩も亦之を主張すること、決して進化論者の後に立たず。然れども一切進化は畢竟盲目なる器械力の作用のみと言ふに至ては、予輩臂を攘て之を斥けざるべからず。予輩を以て之を見れば、進化論の反面に暗々たる不可思議的境界の横はるあり、進化論者が說明したるは只不可思議的が外に表はれて可覺的形式を具へたるの一部のみ。抑も凡ての生物は何が故に進化するか。進化論者は是問に對して所詮『進化する先天的傾向あるが故に』と答ふるの外無かるべし。然れども已に是一事を假定す、即ち萬事を假定するなり。自然淘汰の律とは是傾向の單に名稱を變じたるものに非ずして何にぞ。是傾向其物は如何にして生物の中に先天的に存在せしか。已に傾向と云ふ、然らば其目的はた其方向は那邊に存するか。生物界の進化の蹤跡に依傍することによりて、予輩は這般の事物の眞相に就て何事をも揣摩すること能はざるか。想ふて玆に至れば、進化論か說明したる所は、僅に水面の泡沫のみ、幽暗なる洋心に

して存在することを指示するものには非ざるか。然り、理想は何人も之を認むべし。吾人の知らんと欲するは理想と吾人との關係如何にあり。抑も理想は吾人に關して超在的のものなるか、將た又含蓄的のものなるか。理想の觀念は如何にして吾人の心中に存するか。意志あるものは必ず希望す、希望は遂に理想(意識の有無を論せず)を豫想せざるを得ず。理想は何故に吾人と離るべからざるか。予輩は是に於てダルキン氏の批評の第二點に移る。

今予輩の說を明にせんが爲に進化論の假定を提起すれば左の如し。

(一)　實體の存在。

(二)　此實在の本然に含蓄せる進化的傾向。

(一)に就ては玆に多言するの必要なし。進化論者は敢て生活の起因を問はず、又宇宙の本躰に就ては何事をも言はず、唯等しく生命を有せるものが、進化律によりて、如何に其の下等なるアミーバの狀態より、自覺心、道德心を有せる人間の如き高等なる階段に進步し得べきかを說明するにあり。即ち換言すれば古來多くの學者が唱導したる靈智的生物と非靈智的生物、道德的生物と非道德的生物、との根本

豫め與へられたる是等の材料の外に一歩も踏出すこと能はざるもの也。今夫れ非道徳のものより道徳的のものを產出せしめんとするは啻に論理的矛盾に陷るのみならず、又啻に其證せん所のものを假定する所謂 ὕστερον, πρότερον の誤謬に陷るのみならず、更に又自己の可能的範圍を超越して、權限以外の領地に侵入したるものと謂はざるべからず。於是乎進化論畢竟是れ超自然論若くは純理哲學のみ。進化論の能事は、所詮豫め與へられたる道徳心の始原狀態よりして、進化論の原理に據りて、其發達の次第を尋究するに存するのみ。道徳心の主腦は絕對的命令若くは義務心に存す。吾人は『ある』に滿足せずして、當にあるべき所のものにならざるべからず。單に『なす』に滿足せずして、當に爲すべき所のものを爲さゞるべからず。あらゆる利害方便の外にありて 'Thou shalt' なる內心的命令は、毫も假借する所無き也。同一行爲の間に善惡是非の兩面を峻別し、一方を愉悅し、他方を嫌避するは、何によりて然るか。是吾人が道徳的生物として爲に活動し、爲に希望し、爲に生存する、或一種の高等なる目的の存在を指定するものに非ざるか。即ち吾人の當に到達すべき一の理想が『あらねばならぬ』若くは『せねばならぬ』てふ觀念の對象と

の道德心は所詮自然界の器械作用に外ならず。宇宙の間實に是器械的作用あるのみ。

以上述べたる所は道德心の發達を器械的勢力に歸せんとするダルキン氏の說なり。是說の先天的分子を含有することは今更言ふまでも無し。予輩の決せんと欲する所は、是先天的分子が物質界を支配する器械力によりて進化するか、將た現在吾人が目擊する器械力以外に或超自然的動機を假定するの必要あるかにあり。全く器械的に說明せんとしたるダルキン氏の說は果して正しきものなりや。氏の說は二個の點より批評するを便利とす。即ち一方よりは氏が假定する先天的分子の性質如何を研究し、他方よりは進化論の原理が果して何等の超自然的意義をも含蓄せざるやを吟味すべし。

第一の點に關しては多く言ふの要無かるべし。絕對的命令の遂に經驗的に說明すべからざることは何人も首肯せざるべからざる所なるべし。進化論の務めは要するに既在の本能、習慣、其他諸〻の條件を假定し、而して後是等のものが箇中の原理によりて、隨時、隨處、如何に發展し、如何に變化すべきかを說明するにあり。

性も道德心も)斯く考へ來れば外界の物質的現象と其實質に於て毫も差あることを見ず。世の學者の中には道德心を人間の元精的(エッセンシャル)性質と爲すものありと雖も、進化論者の眼より見れば生存の繼續、發達を助長する限に於て、其功用を有する所の言はゞ偶有的(アクシデンタル)性質のみ。人間の體機は道德心の有無に關せず、進化の大法に從て活動し發達すること、猶汽笛を鳴さゞるも汽車は依然として進行するが如し。故に(進化論者によれば)進化の階段を大別すれば、

(一)初めに自然淘汰によりて内外兩界の相適應することを要し、

(二)次に是關係に對する意識生じ。

(三)最後に是等の關係が生存の繼續、及び發達に於ける傾向、若くは功用を認識す是れ即ち良心なり。

要するに道德心とは、諸々の社會的關係を認識することにして、下等生物の社交的本能が人間の意識の中に顯はれたるものに外ならざる也。社交的本能とは、習慣の固定したるものにして、習慣とは生存競爭の際に爲したる無暗(むやみ)なる活動の或物が、自然淘汰の理法によりて、殘りたるものに外ならず。是を以て是を見れば、人

れば、生活とは內部の關係を外界の關係に適應せしむることに外ならず。未だ意識無き發達の初期にありても、生物の行動發達は凡て內外兩界の順應調和に據りしなるべく、發達の或階段に至りて、所謂靈智(インテリヂエンス)なるもの生じ來りしなるべし。然れども是靈智なるものは或學者の考ふるが如く靈妙不可思議なるものに非ずして唯是迄進化の自然法によりて成立せる內外兩界の關係の意識に外ならず。是意識の用は、所詮是迄生活の發達を助けたるもの丶功利を認識し、且將來に於ける進化を助長するに存す。人間の進化を支配する唯一の法則は物理學的因果律に外ならず、獮猴の族が自覺あり、道德ある人間に進化したる理法は、林檎が地に墜ち、氷塊の溶解する自然法に異なる所無し。是發達の方法は全く器械的なり。故に人を猿より區別する特性と雖も、亦是器械的作用の所生なるざる可らず。鷲の鋭き眼を有する、蜂の毒ある針を含める、獅子の猛烈なる力を有せる、皆是れ自然陶汰の理法によりて器械的に生せられたるが如く、人間の直立體勢を有せる、過去未來を熟慮するの理性を有せる、將た善惡正邪を辨別するの良心を有する、亦是れ一切自然淘汰の器械力によりて生せられたるもの丶み。凡ての內界の精神的現象は(理

前者は即ち自然界に普通なる物質的法則、即ち一般進化の原則を以て道德をも說明し去らんとするものにして、後者は所謂進化論以外に超自然的根據を要むるものなり。故に是問題はやがて唯理論(若くは自然論)と超自然論(若くは純理哲學論)との別るゝ所にして、道德的理想の根據は是によりて決定せらるゝものとす。

予輩は預め研究の結果を前提せん。曰く、予輩は道德的現象を說明せんが爲には或超自然的(即純理哲學的)假定を要すと。

予輩の論を確實にせんが爲に、暫く一切道德を器械力によりて說明せんとしたるダルキン氏の進化論的倫理說を批評すべし。蓋し氏の意見は自然論者の意見を尤も飾り無く、尤も正直に發表したるものなればなり。

一切道德は器械的起原を有すとは、進化論的倫理學の第一假定なり。以爲く、人類の祖先は其組織の中に毫も道德的分子を有すること無かりしが、長き時の間の經驗、遺傳に因りて、終に道德的となれる也と。是說の誤謬は夙に先哲の指摘せし所にして故らに予輩の喋々を待たず。經驗論及び進化論は、如何にしても非道德的のものが道德的となれることを說明する能はざるなり。蓋し進化論者の考によ

精神的神靈の緣て以て自己を現化する所のものにして、歷史は是現化の形成なり。故に人間最後の目的は、自己中に神を現ずるにあり。是れはた最高の道德、最高の知識なり、云々（ファルケンベルヒ氏近世哲學史二五四頁以下）。

二氏が是大膽なる純理哲學的假定は果して許容し得べきものなりや、否や。將た一派の學者が謂ふ如く、道德的現象は何等の哲學的假定無くして說明し得べきものなりや。是疑問を決し置くことは予輩にとりて必要なり。やがて是れ道德的理想の根據に對する疑問なればなり。

是疑問を說くに先ち、予輩は二個の預想（フォルアウスゼッツング）を有す。即ち道德的觀念の先天的起原を有すること、及び其人心の進步と共に發達することと是れなり。故に予輩は所謂先天論者に非ず、所謂經驗論者に非ず、是二者を綜合したる先天的經驗論を主張するものなり（是ことは茲に論ずるの遑無し、暫く之を預想す）。次に起るべき問題は是發達の根據を如何に說明すべきかにあり。若し茲に靜勢的狀態に在る將然的道德心と、是に應對する外界との存在を假定せば、以て是道德進化の一大現象に向て滿足なる說明を與へ得べきか、將た他に何等かの根據を預想するの必要あるか。

世を通じ、如何なる世界に於ても圓滿に現化せられざるべきを以て、吾人は是能力の本然の如何なる性質のものなるかを知る能はず。而かも天が人間に賦與せる精神的本體は、實に是能力を有することの意識に外ならざるを以て、是能力に對する觀念、及び人間の進歩が是能力の現化に存することの觀念は、やがて人間の原動力なり。社會の組織、習慣希望、法律等、凡て人生及社會の改善を目的とするものは、所詮是觀念の所生なり。人は是に依りて過去を解し、現在に處し、未來を察す、云々　(倫理學序論、百八十九頁)

是の如き說はグリーン氏に初まりたるに非ずして、ヘルデル(一七四四―一八〇三)既に甚だ之に似たる說を唱へたり。曰く、神、唯一無限なる精神的(非人格的)原力（ウルクラフト）なる神は、凡ての物の中に現はる。個々體に於ける又宇宙に於ける活動と圓滿とは神の活動力と智慧と善とに適應す。全宇宙は唯一無二の生命が種々の階段に現はれたるものに過ぎず。歷史とは所詮自然作用（ナツールプロツエス）の進歩と發達とを示せるものに外ならず。人間は自然發達の最後の兒にして、他物に於ける物質作用は、彼にありては、道德的と變ず。是の自然界の最後の發達點たる人は精神界の最初の出發點なり。人間は

圓滿に近けば、全體亦益、其理想に近く。全體は個々體の人格を沒却して自己を完成するに非ずして、只全體の中に個々體を收め、個々體の中に全體を現ずるのみ。差別即平等、平等即差別の妙境即是なり。道德的理想は個々體の主觀にのみ存せずして、個々體より成りて而かも個々體以上の意義を有せる全體の中に客觀的に存在するもの也。然れども個々體を離れて別に全體無きを以て、是全體に於ける客觀的理想の完成は、個々體に於ける主觀的理想を待たざるべからず。故に道德的理想の性質を明にせんと欲せば、主觀的及び客觀的の二樣の立點より考察する所無かるべからず。前者は客觀的理想に應ずる個々體の心的狀態にして、後者は個々體の主觀理想に對する全體の客觀的狀態なり。グリーン曰く、

或媒介により或一定の制限の下に而かも常に自覺心と自己を客觀化する力とを以て、一の靈活なる宇宙精神は、人間の中に漸く自己を再現す。是原理の人間に存するの故を以て、人は一定の能力を有し、而して是能力を現化することはやがて人の眞の善なり。何となれば人間のあらゆる滿足は唯是能力を現化することに於て求め得べければなり。然れども人の能力は過現未の三

に葬られざるもの稀なり。現實と理想とが一般に悲むべき對比と信せらるゝ世界は、そも如何なる不圓滿の世界ぞや。此不圓滿なる現實世界にありては、イエスイトの貴重なる套語を實踐的主義として實行し得るの日恐くは無かるべし、恐くは未來永遠無かるべし。而かも念々是理想に向て不退轉に精進することは、道德的生物として人間生活の第一義なることを忘るべからざる也。

本論(一)

行論の便宜の爲に預め予輩の結論を提起すべし。

個人は獨り以て道德を成すに足らず、必ずや社會に於てす。社會は個人の集合に非ずして、一の道德的團體として其人格を有す。國家亦然り、人類亦然り。個々體を離れて素より全體無きも、而かも全體の中には個々體中に見るべからざる一の生命と人格とを具ふ。是人格を高め、是生命を進むるは個々體最終の目的にして、是目的に達することに依りて、個々體亦自己の圓滿なる個體的理想に達することを得べし。個々體の人格愈明なれば同時に全體の人格亦愈明となり、個々體愈

予輩は功利論者に非ず、況してイエスイトに非ず。予輩の所謂善は某時某處に於ける或特殊なる事情の下に於ける快樂若くは幸福に非ず。隨て隨時隨處外界の事物と共に推移する無常流轉の對象に就て言へるに非ずして（次章に於て示さんが如く）、或永遠の理想に就て言へるのみ。故に目的てふ語をして一時方便の目的に非ずして、一般人生最終の目的即理想を指さしめば、予輩は敢て『目的は手段を神聖にす』てふ套語を迎ふべし。世には一の實にたゞ一の目的あるのみなればなり。人生道德に關するあらゆる事物は是目的を標準として其各自の相對的價値を有すべきのみ。是目的に適應するものは單に一時方便の善たるに止らずして、永遠必然の善なり。是意味に於ては目的は慥に手段を神聖にするものなり。前に擧げたる例の如きは、某時某處に於ける特殊なる目的を達するに過ぎざるのみ。蓋し是世界の不完全不調和なる、其間に幾多の矛盾と撞着とを含有するを免るゝ能はず。道德界に於て最も著しとす。目的と結果とは多く相違ひ、最高の德義と一時の功利とは多く相容れず。ソクラテスは毒せられ、耶蘇は磔せられ、孔子は飢餓を免れず。道德的理想の化身とも仰ぐべき千古の哲人は、現世に於て涙と血の中

げにや功利論者こそ以上の批難を免れざるものなれ。如何なる種類の事にても、苟も吾人が現實の快樂を增進するものは、功利論者の眼には凡て善行たるを失はず。彼等の目的は自己に非ざれば自他にあり、自他に非ざれば其現在の社會にあり、而かも人類最後の目的たる道德的理想に着眼すること無し。故に其の以て善と爲し德と爲す所のものは、所詮某時某處の特殊なる事情の下にありて善若くは德たるを得べきのみ。故に彼等が善は、謂はゞ方便的、一時的の善のみ。彼等は此一時方便の善を得て滿足す、故に其手段の能く是目的を達するものは凡て善なりと謂はざるべからず。故に功利論者の說を擴張すれば、夫の病を治せんが爲には、妻は賣淫するも可なり、寃罪に苦める義人を救はんが爲には、衞卒を殺害するも可なりと謂はざるべからず。イェスイトは實に之を主張せり。彼等は羅馬舊敎の敎權を維持せんが爲には如何なる手段をも避けざりき、彼等は是が爲に幾多の節義ある新敎徒を迫害し、殺戮するに忍びたりき。斯くの如きは所謂『目的は手段を神聖にす』てふ有名なる套語の意味なりしなり。

然れども予輩を以て是を見れば、是套語の意義は未だ十分に理解せられざりき。

れども予輩と直覺論とは甚だ親密なる關係を有することを自白すべし。何となれば過現未の三世を通じたる一般人生の幸福に利あるものならんには、吾人の良心は之を是認せざるべからず、一般人生の幸福は道德の理想にして、良心は此理想が主觀的に人心中に表はれたる者に外ならざればなり（是事は玆に詳說するの遑無し、他日を待ちて論ずることあるべし）。所詮善の對象は相同じきも、其の善を爲す所以の理由に於て相異なるのみ。直覺論者は善惡に就て何等の客觀的說明を與へず、彼等の說を擴張すれば小刀は小刀其物の爲に善き小刀なりと言ふ笑ふべき斷定に陷らざるを得ざるべし。之れ實踐的敎義としては或は不可なしとするも、倫理學說としては極めて不完全なる者と謂はざるべからず。故に予輩は之を道德的不可思議論者と稱せんと欲す。

難者又或は言はん、道德的價値にして果して汝の言の如く、其外に對する目的如何に存し、一も其物自身に由來する所あらずとせば、汝はイエスイトが套語なる『目的は手段を神聖にする』と主張するか。然らば則ち虛言も人殺しも、其目的如何によりて或は善行たるを得るかと。予輩は一言此誤解を辨せざるべからず。

慈善の如きは、人間最高の道德の一なるを以て、意志と結果との不調和亦尤も甚しきものには非ざるか。快樂論者が、此不調和の事實よりして、却て之を以て不道德と爲すが如きは、菽麥を辨せざるの僻論と謂ふべし。是事は尚次章に論ずべし。

斯の如く論じ來らば、烱眼なる讀者は必ずや予輩を難じて言はん、現實の結果に據らずと言はゞ汝は即ち汝が反對なりと言へりし直覺論者なるに非ずやと。然れども是れ未だ予輩の意を解せざるなり。予輩と直覺論との區別は十分明白に爲されざるべからず。

一言以て予輩と直覺論者とを別てば、予輩は道德的標準を意志以外に置き、直覺論者は意志其物の中に求むと言ふを得ん。予輩が現實の結果如何に係らず、或る行爲を善なりとするは是行爲の意志其物の爲に善となすに非ずして一般人間の幸福を維持し增進すべき本來の性質を有するを以てなり。故に予輩は主觀的價値を認むることに於ては直覺論者に同じ、客觀的價値を認むることに於ては快樂論者に同じ、而かも一般人生の幸福を以て道德の理想となし、是理想を以て道德的標準と爲すに於ては二者を超越す。是間の差別は明に爲されざるべからず。然

等は慈善の中にて、殊に自他の利益を與ふるものゝみを善と爲すと雖も、一時の外面的利益は直接又は間接に、何等か他の不利益の原因と爲らざることを如何にして確信するを得べきか。現實界の複雜を極めたる事物に就て、其結果の影響する所を窮盡するは、吾人にとりて甚だ容易ならざることなり。是事は單り慈善のみならず一般に『善』に對して言ひ得べきなり。予輩が現實に於ける結果如何を善惡の標準と爲すことを肯せざる所以の一は實に玆に在り。是唯理想に準據して其本來の性質の果して善果を生ずべきや否やによりて判斷し得べきのみ。蓋し意志と行爲の結果と相齟齬し若くは撞着するとは此世界が道德的に不圓滿なる證據にして、是不調和の必然に存在する間は、予輩は、現實の結果のみによりて直に道德的價値を判斷し得べからず。凡て道德的價値の愈高尙なるものは意志と結果と愈、離隔し。愈、卑近なるものは愈、接近す。是點より推論する時は、現實の結果と常に完全なる調和を有するの意志は、道德的價値の最低なるものと謂ふを得ん。予輩は思ふ、這般の理を明斷に會心することは、倫理學上甚だ必要なることなり。快樂主義、進化論の如き、所詮此歷史的觀念に乏しきの弊に坐する勿らんや。蓋し

現實界の事物は、直覺論者の言の如く、種々の矛盾撞着に充滿せるものにして、其意志の當初の目的は多少變更改易せられざること無し。而かも意志其物が是等の變易に係らず一定不易の價値を有すること、猶自然現象は種々の障碍力の爲に實際には重力の法則遁りに測定すべからざるも、而かも重力其物の法則は一定不易なるが如し。故に凡て行爲は其現實の結果を離れて善惡を別ち得べし。例せば慈善は其れ自らの性質上、他の苦痛を和げ幸福を增進するの傾向を有するが故に善事たり。而かも慈善を受けたる人が之によりて或は愈、懶惰となり放蕩となり得べきも少しも問ふ所に非ざるなり。

予輩は是慈善に於て道德的現象の遂に快樂主義若くは進化論を以て說明すべからざるの一適例を認む。快樂主義も進化論も、要するに現在の結果を以て善惡の標準と爲すを以て、彼等は自由競爭を停止するの故によりて、進步を沮害する慈善事業を以て惡事と爲さゞるを得ざるべし。然り彼等は多く慈善を以て惡事と爲すなり。而かも單に其結果を論ずる時は、凡ての事物の勢力は、某時某處に終結するものに非ざることを以て、吾人は何れをとりて之を判斷するを得べきか。彼

予輩が茲に所謂生活は某時某處に於ける生活に非ずして過現未の三世を以て永遠なる現在となせる一般人間の生活（アルゲマイネス、メンシユハイツレーベン）なり。若し善惡の標準は何處にありやと問はゞ、所詮此一般人間の幸福に對する利害なりと答へん。尙此事の詳細なる說明は次章に讓り、茲には予輩が所謂善の意義を確かめて豫め他の誤解を防ぐべし。

直覺論者は予輩の說に反して必ずや言はむ、善事は必ずしも善果を生せず、惡業必ずしも惡果を結ばず。高潔なる心事を以て爲したることも往々にして意外に不幸なる結果を自他に及ぼすことあり、之に反して非常の惡意を以て行ひたることも往々にして社會に洪福を齎らすことあり。世事を支配するものは唯偶然のみ、吾人は是偶然の結果に據りて其行爲心術の善惡を判すべからず、道德的價値は唯夫の意志の源泉に就て照鑑すべきのみと。

是批難や洵に善し、而かも狹隘なる(是派の死敵たる)功利的議論たるを免れざる也。予輩は素より或特殊の行爲の道德的價値を實際の結果のみに據りて判斷せんとする者に非ず。唯行爲の本來の性質にして一般人間（アルゲマイネ、メンシユハイト）の幸福を增進すべき傾向を有せんには、其現在の結果如何に論無く、予輩は之を善なりと言ふに躊躇せず。

善き小刀が物を切るの用を善く果すが如く、各、其の當に爲すべき事を善く成し遂ぐる人に過ぎざるべし。今一般に善人と言ふ時は、此『善』なる語は果して何事を意味すべきか、先に擧げたる場合とは全く異なりて一種特別の義を有すべきか。予輩以爲く決して然らず、唯善き職人、父、子、友人、公民等のあらゆる性質を一身に俱有したる人に過ぎざるべし。彼れ若し之に反對の性質を有せりとせば、少くとも其反對せる部分に於て善人に非ざるべく、若し盡く是等の性質に反せりとせば、彼は遂に一の惡人たらんのみ。予輩は信ず、善人とは一個の人間として人間の完全なる生活に必要なる、人間の當に爲すべき事物を爲し遂ぐるあらゆる性質を其身に俱有したる人なりと。

既に斯の如く善人の定義を下し得べしとせば、凡て善とは行爲の結果に關係して言へることとなるは問はずして明なるべし。善とは生活の必要を辨じ得べき性質にして、生活とは世界に於ける吾人が生存の狀態に外ならず。然らば即ち生活上の事物に何等の關係無くして、而かも善なるものは決して有り得べからざる也。唯予輩が功利論者若くはスペンサー一輩と異なるは此生活の解釋如何にあり。

は其外面の表彰に關せずして、其の絶對的性質、若くは行爲の本來の性質如何によりて決定せらるべきのみ。其の結果は良し其身を亡ぼすとも、他人を害するとも、良し全世界を顛覆するとも、其の本來の性質にして良心の是認する所のものならんには尙少しも善心善行たるを妨げず。善は其れ自らの爲に善にして、惡は其れ自らの爲に惡なりと。是論の誤謬多きは今更言ふまでもなし。要するに快樂主義は客觀の一方に偏し、直覺論は主觀の一方に僻す、中正を得ざるに至ては共に一なり。眞理は是二者の中間に存すべく、而かも之を求むるには此二個の極端說の矛盾を包含し且調和するに足るべき一層高尙なる原理を要すべし。左に少しく之を說かん。

今一の小刀を善き小刀なりと言ふ時は、吾人は是『善』なることによりて何を意味するか。能く切れ、容易に損せず、且使用し易き、一言すれば善く小刀の用を辨ずるを謂ふなるべし。今或人を善き職人なりと言ふ時は、勞働して怠らず、報酬に對して十分の効果を奏する人ならざるべからず。善き友人と言はゞ、其人は能く友人たるの義務を盡すの意に外ならざるべし。善き子、善き父、善き公民と言ふも、所謂

て必ず或具象的事物を預想す、即ち林檎を食したる快樂、海水に浴したる時の快樂等の如く一定の對象を有せざるべからず。實物に關係なき一般の抽象的快樂は吾人の考へ得べき所にあらざる也。今快樂論者は最高の善を以て最も希望すべきものと爲し、隨て最大なる快樂となす。然れども甲に非ず乙に非ず、一般に最大量の快樂なるものは吾人の正に想像し得べき所にあらず。即ち之れ心的狀態と爲り得べからざる所の或者を想像せんとするものに非ずや。快樂の總計はグリーン氏の言へる如く決して快樂に非ず、只だ之れ論理上若くは數量上の觀念に止り、實際に享受し得べき者に非ざるなり。然れども吾人が最大の慾望即最高の善を想望することは心的事實なり。然らば則ち其根據を外物以外、即ち主觀の中に求めざるべからず。予輩は之を自己運動(ゼルブストベエーグング)の結果として、得たる滿足に歸せんと欲す。尙是事は本論に於て十分に詳說せん。

快樂主義の誤謬は右にて畧〻之を知るべし。直覺論者は之に反して以爲く、人類以下のものにありては善惡は結果の如何によりて之を分つと雖も、人の意志の發表に對する道德的價値を論ずるに當りては全く異りたる意義を有す。即ち善惡

りと。是說は幸福は慾望の充足に存することを認め而して慾望の充足とは所詮慾望の對象を得ることによりて生ぜらるべき快樂に外ならずとなせる也。是說の誤謬は夙に諸先輩の注意せし所にして爰に予輩の喋々を要せずと雖も試に其缺點の一二を指摘せんに、是說が幸福は慾望の充足に存することを認めたるは甚だ善し、若し否らずとせば吾人は不幸を慾望することゝなるべければなり。然れども慾望の充足は此慾望の對象を得たる結果として生ずる快樂なりと斷じ、吾人は此快樂を得んが爲に慾望し活動すと爲すは蓋し大に謬れり。慾望其物を充足したる爲に生じたる快樂と、慾望の對象其物を得たる爲に生じたる快樂とは自ら差別あり。吾人が食せんと望むは飽食によりて得たる快樂を望むなるか。吾人が他の不幸を憐み、若くは或獻身的事業を行はんとするに當て吾人は是等の行爲によりて當に得らるべき快樂を預想するか。否必ずしも然らざる也。慾望は多く對象に止まる、必ずしも此對象を得たる結果等に就きて思惟する所あらざる也。加之、快樂論者の說に隨へば、善は畢竟快樂なるを以て、吾人が最高の善を愉悅するは即ち最大の快樂を想望することに外ならざるべし。然れども快樂の性質とし

道德の理想を論ず

序論

道德は理想を豫想す。凡ての道德的活動は是理想に到達する爲の煩悶に外ならず。吾人が善惡と謂ふ所のものは所詮是理想の現化に對して言へるものにして、是現化に利あるものは善にして之に害あるものは惡なりと言ふを得ん。然れども主觀的立點よりして之を觀る時は、吾人は理想の何物なるかに就て明瞭なる意識を有せざるを以て善惡を判斷する標準も亦隨て一ならず。其の相反對せる學說は概して快樂主義と直覺論との二に別つを得ん。今暫く此二派の說く所を聞かむ。

快樂主義は、一般に或行爲若くは性質の善惡を決するに、是等の行爲性質が自己及び他人に及ぼす結果を標準とす。即ち自他及び社會の幸福に對して利あるものを善となし、害あるものを惡となす。然らば幸福とは何を謂ふか。快樂論者は以爲く快樂なりと、即ち吾人の快樂を增すものは善にして、之を減ずるものは惡な

爲妙用蒙莊氏因之以荒唐繆悠之辭語于世而淸談者倣。

玄牝の章、將欲歙之の章、上德不德の章、等は皆之れ枝葉のみ、末流のみ、老子哲學の大旨義にあらず。斯の如き一章一句の上に就て言を立つるもの、老子大體本領を誤解せるは、素より其の所。盧山の左右を望みて以て其の峰巒を爭ふものと其の痴何ぞ異ならんや。之を祖述せるもの、之を排斥するもの、共に其の本體を覺らず、漫に養生の說となし、異端の敎となし、古今茫々三千年、其の本來の面目を抉摘せるもの無きに至りては、吾人豈老子哲學の爲に其の不幸を悲まざるを得んや。

（廿七年六月頃稿）

爲のみ。老子が社會國家の必然なる分出の理法に生ぜられたる現實界なるを遺忘し、人爲を以て强ひて之れを將然的虛爲に復歸せしめんとせしは、猶舷を擠て舟を行らんとするものと一般にして、此の點に於ては遙に儒家道義論の着實なるに如かず。老子は純理に於ては儒家を超ゆる數十等の上に在れども、實際上の學說に於ては儒家に降る數十等の下に在り。之れ吾人が先に老子の學を以て出世間的となし、孔子の說を以て世間的と爲しゝ所以なり。

老子の說は啻に儒家の爲に誤解せられたるのみならず、申商韓非の陰謀說、劉伶、阮籍の放逸主義、將た又老學の正統を享けたりと稱せられたる抱朴一輩の道家者流は皆之れ老子の流を汲みたる者、而して其の意を誤らざるもの殆どあるなし。異端辨正に「闢老氏」の一文を揭ぐ、其の中に謂へるあり、曰はく

曰、玄牝之門爲㆓天下根㆒、綿々若㆑存、用㆑之不㆑勤、此養生之言也、而爲㆓方士祖㆒焉、曰將欲㆑翕㆑之、必因㆑張㆑之、將欲㆑奪㆑之、必因㆑與㆑之、此陰謀之言也、范蠡用㆑之以取㆑呉、張良本㆑之以滅㆑項、而言㆑兵者尙焉、曰大道廢有㆓仁義㆒、曰失㆑道而後德、失㆑德而後仁、失㆑仁而後義、失㆑義而後禮、々者忠信之薄、而亂之首、此矯弊之言、而放蕩者宗㆑之、至㆓其以㆓事物㆒爲㆓粗迹㆒、以㆓虛空㆒

理、以之立德則眞知實踐、以之立言則開物成務、以之立言則垂法後世、此之謂正道、堯舜禹湯文武周公孔子孟子及程張張朱之相傳者是也、外是爲虛爲無爲頓悟捷徑、謂之異端、如老子楊墨莊列釋氏雜興者是也。

如斯は只叙述の文としては則ち可、若し之れに托するに褒貶の意を以てせりとせば則ち不可なり。儒を以て正道となさば老子は素より異端、老子を以て正道となさば儒即ち異端のみ。儒家の所謂正道異端は學說上の眞理に就いて謂へるに非ず、只彼此差別の名稱のみ、此際寓するに黜陟是非の義を以てすべからざるなり。韓退之が道德を以て虛位となすは則ち可なり、其の虛位なるが爲に直に以て小人の道となすもの、畢竟老子の高尙なる哲理を解せざるの罪に坐す。之れを要するに老子は多く支那學者の爲に誤解せられたり、否、寧ろ理解せられざりしなり。

遮莫、孔老二氏は徹頭徹尾絕對的反對をなす者に非ず。其の國家の理想を上代に置き、無爲樸訥を以て德敎の極致となすに於て、共に其の致を一にす。然れども儒家の無爲は有爲中の無爲にして、老子の無爲は無爲中の有爲なり。前者の理想は可能的にして、後者の理想は超絕的なり。之れ畢竟其の立脚の地に異にするが

佛老之說、不待深辨而明、廢三綱五常一事、已是極大罪名、其他更不詳說

又曰はく

倫理謂父子親、君臣義、夫婦別、長幼序、朋友信也、老莊獨々善不仕、是滅君主之義

韓退之曰はく

大學曰、古之欲明明德於天下者、先治其國、欲治其國者、先齊其家、欲齊其家者先脩其身、欲脩其身者、先正其心、欲正其心者、先誠其意、則古之所以正心誠意者將以有爲也、今也欲治其心而外天下國家、滅其天常

此等の論難は批評として價値無きこと、吾人の已に述べし所によりて知るを得べし。三綱五常を廢し、天下國家を外にして、寂寞無爲の大樸に復歸するものは、素より老子の說にして、其の據るところ只其の世界觀なる分出論にあり、儒者が猥に自家を標準として之れを批議するは大に誤れり。故に吾人は斷言す、老子の說を駁せんと欲せば、先づ其の哲學原理とする所の分出論を討つか、然らざれば其の立脚の地を老子の說中に置かざるべからずと。詹雪崖曰はく

夫道一而已矣、二之則不是、原於天備於人散於日用事物之間、全躰大用、無往非實

理なるを認めたりとせば、復歸論は分出論より演繹せらるべき正當の結果に非ざるを明にせざるべからず。吾人を以て之れを見れば老子の道義論の誤謬は已に分出の必然不易の理法なるを認めながら、尙區々人爲を以て眞に道の本躰に復歸し得べしと信せしにあり。抑道はあらゆる制限の外にあり故に之れより生ずる分出も亦其の根本なる道を除きてはあらゆる制限の外にあらざるべからず。故に分出の一元子なる吾人よりして之れを見る時は確固更易すべからざる必至の理法によりて成立せしものならざるべからず。然るを如何ぞ分化の大法によりて生じたる眇乎たる吾人が此の大法自身に背馳して隨意に其の根源に復歸するを得べけんや。復歸は純然たる超絕（トランスツエンデント）的理想にして可能（メイグリヒ）的理想にあらず。老子が道義論は先づ其の可能的なることを豫想臆斷したるものにして、之れ實に諸般誤謬の端なり。而して此の誤謬は畢竟分出說の眞相を誤れるより起りたるものにして、此の點に於ては老子は到底自家撞着の批難を免るゝ能はざるべし。古來老子の批評家は此の根本的缺點を難せずして徒に其の表面上の結果に就いて云々するものは少しも老子の說を動かすに足らざるなり。朱子曰はく

せざりしかを見るべきなり。今吾人の言を證せんが爲に、二三の例を擧げん。謝上蔡（良佐）は宋儒の俊英、決して尋常平凡の學者に非ず、其の老子の「道」を排するの言に曰はく

無可無不可、苟無道以主之、不幾於猖狂自恣乎、此佛老之學、所以自謂心無所往而不能應變而辛得罪於聖人也、聖人之學不然、於無可無不可之間有義存焉

可も無く、不可もなく、到底萬殊の事物に應待するを得るもの、即ち之れ老子の所謂道なり。此道や絶對無限、元來仁義の差別を超越す、安ぞ仁義を以て之れを規束するを得んや。人の道を得たるもの、即ち所謂道の本躰に復歸したる者にありては、是非無く、善惡なし、又安ぞ罪を聖人に得るの理あらんや。其の所謂可も無く、不可も無きの間、義ありて存するもの、老子が道德以下の仁義なり。故に謝氏と老子とは全く其の立脚の地を異にす、老子は復歸を主として治國修身の道を末とするもの、即ち超實際的なり。謝氏は之れに反し治國修身の道に本きて平等無差別を拒否するもの、即ち實際的なり。故に若し謝氏にして老子の説を撃破せんと欲せば、先づ哲學的原理に據りて分出論の眞理ならざるを證するか、將た又分出論の眞

や、老子が隨時臨機の臆斷にあらずして、皆其の根蔕を世界觀なる分出說に有するものにして、此處に此の分出說あれば、那處には必ず當に其の結果として復歸說、無爲主義あるべく、此處に無爲主義、復歸說あれば、那處には必ず當に其の原因として分出說あるべきなり。此等の學說は、老子にありては、双々相倚り、個々相連なり、渾然として斷制すべからざるの一全躰を爲せり。是故に老子が道義論を駁せんと欲するの人は、必ず先づ其の根本なる分出論を破らざるべからず。若し夫れ事玆に出でずして單に其外面的結果の道義論のみを排斥して異端邪道を罵倒するものは、啻に老子の學說に對して其の價値を損するの勢力なきのみならず、却りて自家の不學短見を表白するに過ぎざるのみ。

予輩は儒學者流が老子を批評せるもの概ね皆此の類なるを恨とす。宋儒等の中には往々其の分出論に向ひて論難を試みたるもの無きにしも非ずと雖も、之れ寧ろ稀有絕無の例として見るべきのみ。之れ畢竟老子の學說が渾然として一哲學系統を組織せる所以の理を悟得する能はざるの致す所なりと雖も、又以て支那學者の思想の如何に具躰實際の上にのみ制限せられ、抽象的純理を思索するに適

る純理なり、斯の如きは支那當代にありて絕えて其の倫を見ざるところ、儒家者流の目して空理妄想となしたる所のものにして而して吾人が稱して當代唯一の哲學思想となす所以なり。其の厭世を說き、孤立を說き、無爲を說くや、皆之れ治國修身の常道を棄絕したるものにして、儒學者が斥けて異端左道となせしもの、實に玆にあり。全然立脚の地を異にせる儒老二家が枘鑿相容るゝ能はざるは、素より其の所。唯吾人の爰に注意すべき一事は、從來儒家の批難に依りて直に老學の是非を斷ずべからざること是れなり。何となれば彼等は批評の標準を自家學說の上に置き、眞に老子本來の面目を解せし者に非ざればなり。彼等の批評は全く主觀的なり、根本的に異なれる二學說が各自の立脚地に據り、自己の主觀に照らして、他を規束することは、理に於て爲し得べからざる也。今夫れ儒老二家が其の目的（ゲーゲンスタンド）を等しうするの點ありとせば、そは只治國修身の敎にあらん。宜なる哉、儒家の老子を難ずるもの論鋒を玆に攢むるや。然れども之れ偶其の外面に顯れたる敎義の相似せるのみにして、其の內面より之れを見れば、二者全く其の根本を異にす、故に元來相比較すべきものに非ざる也。無爲主義や、孤立主義や、厭世論やはた復歸說

と云へり。孔子は禮を以て仁義に入るの關門となし、老子は仁義を出づるの關門となす。畢竟物一にして見る方向の相背馳するのみ。其の人を改善するや、老子は先づ内(心)よりして、責むるに直に復歸(理想)を以てし、孔子は先づ主として外(容)よりし、敎ふるに禮儀(實際)を以てす。中庸を安行利行勉强行を說き、論語に喪事不敢不勉と云へるが如き、又以て孔子が如何に德敎上重きを勉强力行によりて馴致せられたる外部的制裁に措きしかを見るべし。所詮之れ老子の學の絕對的に純理を以て萬事を拘束せんと欲し、孔子の說の終始實際的應用の旨義としたるの結果にして、前者の出世間的にして後者の世間的なる所以なり。

第三章　結論

予輩は前二章に於て老子の世界觀と人世觀とを論述したれば、本章に於ては、大體の上より二三の所見を陳じ、以て老子哲學の結論となさんと欲す。

讀者は此れ迄論せし所によりて、老子の學說は如何に抽象的に傾けるかを見しならん。道と云ひ、分出と云ひ、はた復歸と云ふ、皆之れ具躰現象の世界を超越した

に曰はく、禮は忠信の薄にして亂の首なりと。韓非子解老篇に、此の道德的分出を説いて甚だ當を得たり、其の文に曰はく

道有積而德有功、德者道之功、功有實而實有光、仁者德之光、光有澤而澤有事、義者仁之事也、事有禮而禮有文、禮者義之文也、故曰失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、禮者忠信之薄、亂之首

老子の所説斯の如し。讀者は宜しく太初渾一の道を以て其の唯一の理想となせる彼れが眼中に、仁義禮智等の差別的制限の如何に劣等なる地位を占めしかを想見すべき也。但吾人の殊に讀者に注意せんと欲するは、老子が仁義を擯斥罵倒せしは、決して憤世不平の一時的客氣に本けるに非ずして、自家哲學の第一原理なる分出説の中に確乎たる基礎あることと是れなり。是の點に於ても孔老二子は全く其の説を異にす。老子は禮を排して忠信の薄、亂の首となせりと雖も、孔子は之に反し禮を以て「親疎を定め嫌疑を決し、同異を別かち是非を明にする所以なり」(禮記)と云ひ、又 [illegible]

道德仁義、非禮不成、教訓正路、非禮不備　(禮記)

の說を爲すや、主旨を松柏の後凋に歸す。老子は現世を超えて理想の世界を求め、孔子は現世の中に最良の國家を望めり。吾人は兩者の間に此の根本的主義の相背馳せるものあるを忘るべからざる也。

老子の人世觀を了るに臨み、一言すべき者あり、何ぞや、道德の分出說是れなり。世界觀に於て、分出說に據りて萬有の成立を說きしが如く、老子は人世觀に於ても亦分出說に據りて、德仁義禮の成立を說明せり。道德經第三十八章に曰はく

上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德、上德無爲而無以爲、下德爲之而有以爲、上仁爲之而無以爲、上義爲之而有以爲、上禮爲之而莫之應、則攘臂而仍之、故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、夫禮者忠信之薄、而亂之首也。

道は渾一無限、世界的(コスモロギシュ)にも、道義的(エーチッシュ)にも、無數の事物に應待する無限の將然力(メーグリヒカイト)を具備す、一方には世界的に分出して陰陽和氣物質となり、他方には道義的に分出して德仁義禮となる。道は先づ德を生じ、德は仁、々は義、々は終に禮を生ず。其の道義的完全の度は道を去るの距離に反比例す。故に道獨り絕對至善にして、餘は悉く其の相對差別の中に多少各自の是非を寓するのみ。道は根本にして禮は末葉、故

に、國危うして忠臣あり、家傾きて孝子あるは孔老二家共に認むる所、而も老子は「六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠臣あり」と謂ひ、孔子は歳寒うして松柏の後に凋むを知る」と謂へり。蓋し老子は謂へらく、孝慈や、忠臣や、畢竟六親和せず、國家昏亂せるより起こる所のもの、即ち其の家國の不和昏亂を豫想せるものなるが故に、決して吾人の希望すべき所のものに非ず。吾人は寧ろ忠臣なく孝子なきの家國を作ることを務めざるべからず。畢竟蠋は敗菓に生じ、螢は清流に產せず忠孝の差別を生ずるの國家は腐敗せる國家なり、須からく大初無爲の舊態に復歸せざるべからざる也。已に國家を非認す、何の違ありてか此の國家中に生ぜる忠臣孝慈を以て言を爲さんや。孔子は則ち然らず、以爲へらく、旣に必然なる推移によりて有爲有差別となれる現世は再び之れを無爲無差別なる太古の狀態に復歸するを得べからず、須からく世に處し、時に從ひて、事の宜きを行ひ、仁義道德を明にして以て世人をして名敎の下に歸向せしむべき也。故に孔子は衰世其の物に就いては多く言はず、只斯の末世に臨み、此の衰邦に處すべき道德を明にして玆に忠臣孝子を勸奬せり。老子の言を立つるや、其の重點を國家混亂の四字に措き、孔子

以上述べたるが如く、老子の説は主として個人的にして國家的に非ず、否、其の學説は寧ろ國家の成立及び其の生存競爭を以て衰世の末事となせり。一言すれば國家の成立を不可となせる一種の非國家主義なり。其の説素と退嬰無爲を旨とするを以て、少くとも消極的に國家の進歩を沮害し、社會の文化を妨礙すべきは論を待たず。若し之に一鞭を加ふれば則ち激烈なる破壞主義、若しくは虚無主義に化し了はるべきは甚だ見易きの道理なりとす。老子の學は實に國家の大敵也。之に依て治を爲さんとするの君主あらば、立地（たちどころ）に其の社稷の滅亡を免れざるべし。後世儒家の一輩が此の説を捉へ來て老子を攻撃せしは、世間的學者として固より彼等が當然の事業なりとす。孔子と老子とは此の點に於て尤も著き兩極的反對を呈せりと謂ふべし。即ち老子は虚昧自然の無爲を以て爲政治民の極致となせども、孔子は之れに反し、天下國家を爲むるに九經ありと謂ひ、天下に王たるに三重ありと謂ひ、古の明德を明にせんとするもの先づ其の國を治むと云へり。二者の間已に此の根本的差違あり、餘は言はずして可なり。故に同一事物を觀るにも、二家の觀察點の全く相反するは頗る注意するの價値あり。今其の一例を擧げん

國家なり。有名なる道德經第八十章は老子が理想的國家として見るべき者なり、曰はく

小國寡民、使有什伯之器而不用、使民重死而不遠徙、雖有舟輿無所乘之、雖有甲兵無所陳之、使民復結繩而用之、甘其食美其服安其居樂其俗、隣國相望、鷄狗之聲相聞、民至老死不相往來、

人或は此の章を以て老子が終生轗軻、志を當世に得ざるの餘、晩年一小邦を得て以て其の道を施さんとするの希望を表せりとなす、之れ恐らくは臆說ならん。能く老子の學說を考察し、且彼れが如何に其の說を躬行せしかを思へば、吾人は寧ろ老子に於て斯の如き希望なかりしことを信ずるの至當なるを想ふ。蓋し之れ老子、身、衰周に生れ、勝文浮質の弊に堪へずして遙に上代淳朴の風を理想して自ら懷を遣りしのみ。吁戰國紛爭の際悠然として時流の表に聳立し、褐を被、玉を抱きて懷抱を上代に托し、遺生を太古に寄するもの、其の襟胸の淸曠蕭遠なる、今日尙吾人をして欽慕に堪へざらしむる者あるに非ずや。想ふに老子は啻に斯の如き國家を理想せしのみにあらず、躬親ら斯の如き國家中に生息したるなり。

不肆、光而不耀　（第五十八章）

大道甚夷、而民好徑、朝甚除、田甚蕪、倉甚空、服文綵、帶利劍、厭飮食、財貨有餘、是謂盜誇、非道也　（第五十三章）

爲學日益、爲道日損、損之又損、以至於無爲、無爲而無不爲、取天下常以無事、及其有事、不足以取天下　（第四十八章）

要するに老子の政治論は自然の道に隨ひ、爲すなくして民を治むるにあり、程伊川が「天地無爲にして化を成し、聖人有心にして而して爲す無し」と云へるもの、眞に老子の意を得たりと謂ひつべし。

老子の説に從へば、社會萬衆の間に個人各自の當に孤立すべきが如く、天下萬邦の中に在りて邦國個々亦當に孤立すべし。邦内萬戸の中にありて戸々亦當に孤立すべく、戸中衆人の間にありて人々亦當に孤立すべし。斯の如く觀來れば國家は畢竟個人の群集にして國民の結合にあらず、故に老子は時に國家を言ふと雖も實は唯個人あるのみ、故に國民的若しくは社會的運動に就いて一も言ふ所なし。夫の寂寞無爲、亂國盛なるが如く、治國虛しきが如しと云へるものは老子が所謂る

す。畢竟民の治まらざるは、上治むるを以てなり、民、法を犯すは上、法を布くを以てなり。死を畏れざる者は上以て奈何ともす可らず、畢竟嚴刑以て之を威せばなり。今如し上にして渾然として爲すなく、悶々として施す所なければ民自ら正に歸し、世勞せずして治まらん。夫の大道は爲す無きが爲に全く、虛然なるが爲に久し。天下の泰平を致さんと欲せば治者須らく無爲虛無ならざる可らず、繁文縟禮は亂の階にして峻刑極罰は亡の兆なり。故に聖人は無爲にして爲さゞる所なく、無言にして言はざる所なし。讀者左の數章を吟味せば、予輩の所說自ら明ならん。

道常無爲、而無レ不レ爲、侯王若能守レ之、萬物將二自化一、化而欲レ作、吾將レ鎭レ之以二無名之樸一、無名之樸、亦將二無欲一、不欲以靜、天下將二自定一

(第三十七章)

天下多二忌諱一、而民彌貧、民多二利器一、國家滋昏、民多二伎巧一、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有、故聖人曰、我無爲而民自化、我好レ靜而民自正、我無レ事而民自富、我無レ欲而民自樸

(第五十七章)

其政悶々、其民淳々、其政察々、其民缺々、禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏、孰知二其極一、其無レ正邪、正復奇、善復爲レ妖、人之迷、其日固已久矣、是以聖人方而不レ割、廉而不レ劌、直而

の神を勞するのみ、處世の要道は退守虛默、無爲寂寞の中にありと爲せしもの、吾人老子に於て之れを見る。此の二人は當代思想の兩極を代表せるものにして、彼れは進歩、此れは退嬰、彼れは實際的、此れは理想的、彼れは社交的、此れは遁世的、兩々相對峙して思想の双關を爲す。倫理政治に於ける老子の學說は斯の如くにして一種の特色を呈せり。而して要するに戰國當時の世態氣運實に之れをして然らしめたる也、

道義論に於て復歸說と、孤立主義とを唱へたるが如く、老子は其の政治論に於て、無爲主義を主張せり。復歸說や孤立主義や、また無爲主義や、皆之れ其の世界觀なる分出論（エマナチヨンスレーン）より演繹せらるべき必要の結果なることは、予輩の說を待て後知るを要せざる也、

無爲主義とは其の字の示すが如く、爲すこと無きの謂なり、即ち自然の大道に隨ひて少しも人爲を加ふること無きの謂なり、老子蓋し以爲らく、治者巧智を以て民を御するときは民亦巧智を弄して姦を爲す、治者法令を以て民を束る時は民亦法令に乘じて惡を作す、治者嚴刑を以て民を威す時は民亦嚴刑に狎れて死を畏れ

り。

(六)兩者共に孤立主義にして共に一種の厭世敎なり。

二　政治論

蓋し想ふに、周道の衰ふるや、倫常地に墮ち綱紀振はず、人心日に澆季に赴き、社會年に腐敗して、上代先王の遺道塵を蒙り光を失ふや久し。大は小を併せ、強は弱を壓し、末學の徒道を說くや、詭辯を揮ひ、小巧を弄して以て一時を欺くのみ、政府の治を施すや、文禮繁縟、稅斂重厚、徒に下を虐げ上を利するのみ。仁義は欺かれ、忠良は害せられ、曲巧小慧の徒獨り其の威を逞うす。是時に當たり英材卓識の士の世に處せんとするもの進んで世を救はんか、將た退いて身を全うせんか、擇ぶべき道此の二あるのみ。世道の頹廢を慨き名敎の委徹を嘆じ、憤然起ちて天下に周遊し、到る處先王の遺言を祖述し、民をして其の歸向する所を知らしめんと務めたるもの吾人孔子に於て之れを見る。衰世の末路又救ふべからず、進んで人を以てことを爲さんよりは、如かず退いて自ら淸うして其の獨を守らんには、飾釘補綴は徒に其

より見るも、著き相似の點を有す。之れを比較的に研究するは哲學史上頗る趣味ある事業なるべけれど、今之を詳説するの餘地なきを以て、左に兩者異同の梗概を掲ぐ。

(一)兩者共に其の哲學の重點を倫理論に置けり。

(二)如何にせば吾人は現在にありて最大幸福を得べきか」、之れ兩者が人生問題の極致にして其の解釋に於ても相一致せり。

(三)兩者共に自然の道に隨うて生活するを以て人生の理想となす、ストア派にありては之れを德と云ひ、老子にありては、之れを復歸と云ふ。

(四)但ストア派にありては、德に達するの道に積極、消極の二種あり、力行勉强をれより進みて其の身を自然に合するは即ち積極的方法にして、退いて情を去り慾を絶ち、以て其の身を淸うするものは即ち消極的方法也。然れども老子にありては、只消極的方法のみにして却りて前者、即勉强力行を排して勤生勞神の末道とせり。

(五)故に老子の學は全然保守的にしてストア派の説には稍、進歩の分子を含め

之れ老子が理想的人物なり。希臘哲學に通曉せる讀者は必ずや一見してストア派の理想的人物と酷似せるに注意するならん。德(ツーグンド)を有するものは眞の哲人なり彼れは凡ての善に向つて其の心を搖かさず、德の外に善なきを知ればなり。彼れは不幸に陷つて悲まず、幸福にありて歡ばず、萬殊の幸福は擧げて德の中に含有せらるゝを知ればなり。德とは何ぞや天然の道に隨つて生活するを云ふ。德を有するの人は耳口の慾を顧みず、口體の奉を願はず、自然の道に非ざれば也。死に臨で其心を喪はず、あらゆる苦痛は彼を害する能はず、良し、時に外來の苦痛を感ずるも、彼れが胸裏の德は少しも其の累する所とならず。彼れは外物の表に超在す、故に富貴も詒くべからす、權勢も威すべからす、一言すれば彼れはἀπαθήςなり(アパテスは外物に動かされざるの意)。斯の如きものはストア派が理想的人物なり。茲に德と云へるは自然に隨うて其の身を處するの謂にして、老子が太初の道に歸るを說きしと其の致を同うす。故にストア派が德を以て人生最高の目的とせるは老子が復歸を以て唯一の幸福となせるに等し。

抑ゝ老子とストア派とは啻に大躰の原理に於てのみならず、倫理論全躰の組織上

と云ひ「知我者希、則我者貴」と云へり。老子は啻に孤立を說きたるのみならず、其の身實に之れを行へり。才の世に知らるゝを望まず、學の世に行はるゝを願はず、我れ獨り人に異にして母に食はるゝを貴ぶと言ひ、褐を被、玉を懷き空漠たる天地の間に、知己なく、友朋なく、而も傷まず、悲まず、又怨みず、逍遙自若として世を去りしを思はゞ、千歲の下何人か其の高節坦懷を慕はざらんや。然れども斯の如きは老子に在りて決して寂寞に非ざりしなり。大道の根原に復歸せる彼れが眼中には、宇宙萬有、皆其の驩友のみ、山や川や、日月や、星辰や、自己其の一分たると同時に、是等のものも亦自己の一部なり。吠檀多教が「我れは梵也」と云へるは實に此の境地なり。一たび此の超自然の域に入れば、厭世も無く、孤立もなく、樂天もなし。渾然道と同化して一躰となり、眼中只無差別平等あるのみ、否、一の「無」あるのみ。老子の不遇を悲むものは未だ老子を解せざる者也。

讀者は以上述べたる所によりて、畧ゞ老子が理想的人物を想像することを得べし、

知者不言、言者不知、塞其兌、閉其門、挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、是謂玄同、故不可得而親、不可得而疎、不可得而利、不可得而害、不可得而賤、故爲天下貴(第五十六章)

想ふに、如是厭世的思想は東洋固有のものにして、印度の吠檀多教、佛教、共に其の執を一にす。支那にありては夙に老子以前に存せし所のものにして、老子は尤も明晰に之れを發揮せしもの也。

　復歸說の結果として老子は厭世論と共に孤立主義を主張せしこと、予輩の前に言ひしが如し。此の主義は老子が實行的倫理論中、尤も必要なる部分を占むるものなり。蓋し以爲へらく吾れ人已に生を現在の中に享く、遁れんと欲するも、現在を除いて行くべき處なく、厭はんと欲するも現世を外にして就くべき物なし。吾れと現世とは到底相離るべからず。吾人此の際に處して最大幸福を得るの手段は只一あるのみ。只成るべく外界の交通を絕ち、自己一身の範圍内に於て滿足を求むるの一あるのみ。社會同胞は我れに於て爲す所なし、我れ只我れを以て足れり。故に老子の倫理論は主として個人的にして社會公衆に對して博大なる人道(メンシユリヒカイト)を示すが如きことあるなし。今老子の言を道德經中に求めんか、「我獨泊兮其未兆如嬰兒之未孩」と云ひ、「清靜爲天下世」と云ひ、「與物反矣然後乃至大順」と云ひ、

我有三寶、持而保之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先」

ず、國家を結合せざるべからず、是に於てか、勢ひ情慾生じ、希望起こる。 現世と慾望とは形影相離るべからざるなり。 而して慾望なるものは復歸を妨ぐる最大障碍物なり、然らば復歸は遂に現世に於て望むべからざる也。 於是乎老子の厭世論と孤立主義と起こる。

厭世論は復歸說の必然なる結果なるを以て亦分出論の必然たる結果なり。 讀者は玆に於て、老子の世界觀と人世觀とは、緊々相環聯せるを見るならん。 蓋し老子は以爲へらく、現象世界に生ずる諸の惡德は、畢竟分出によりて太初の道に遠かりたるが爲に生じたるもの也。 混濁界に純一を望み、差別界に平等を思ふは、猶木に憑りて魚を求むるが如し。 現世の事々物々は一として吾人の迷妄を增し、吾人の神靈を勤らす者に非ざるはなし、故に此の絕對の理想に達せんと欲せば、吾人は宜しく此の現象世界を厭離せざるべからず。 是を以て老子は啻に學を斥け、世を遠けしのみならず、尙進みて自己が不幸にして生を濁世に享けたるを悲めり。 即ち第十三章に曰はく

吾所以有大患者爲吾有身、及吾無身、有何患

認むと雖も、世人の其の同を見て其の異を知らず、猥に混同比擬を試むる者の如き、予輩の同意する能はざる所なり。若し夫れ無名の眞如に於ける、玄の不可思議に於ける有名の消滅に於ける、無爲の寂滅に於ける、復歸の涅槃に於けるが如き、兩々相似たりと雖も、吾人は此の二家の間に根本的差違あることを忘るべからず。即ち佛氏は天地を以て幻妄となし、四大を以て假體となし、萬有一切を擧げて空なりとなす。老子にありては全く之れに反し、道は非實在にして現象世界は實在なり。佛氏にありては涅槃に入るには一切現象を消滅空了せざるべからず、然りと雖も老子の復歸は只有限の無限に混入し、差別の平等に歸し、所生の大母に還るを謂ふのみ。我れ道に歸るも萬有は依然たり。之れ佛老二家の世界觀の相異に原けり。

以上論じたるが如く、老子は復歸を以て人生の最大目的となせり。夫れ唯復歸以て其の生を壽うし其の神を全うすべし。故に此の目的を達せんが爲には、慾を斷ち、情を殺し、國家を去り、世界を離れ、一切衆縁を擺脱せざるべからず。然りと雖も吾人已に此の世に生れたる上に於ては、其の生を保たんが爲には、衣食せざるべからず、家居せざるべからず、生好の安全を得んが爲には社會を組織せざるべから

脱して悉く皆無上絶對の萬有精神即ち梵の中に沒了するのみ。梵より出でたる吾人が再び梵中に歸る時にありては、我なく彼なく、主觀と客觀との別なく、我即彼なり、我は天地なり、宇宙なり、萬有、我と同一躰にして、我即ち梵なり我に是れ即ち汝なり」――之れ吠檀多教の復歸説なり。嚴君平が老子を解して

天地人物、皆同元始、共宗祖、六合之内、宇宙之表、連屬一躰

と言へる、直に移して吠檀多教を解き得べし。但同教の老子と異なる所は、復歸の方法にあり。前者は知識を以て解脱(即復歸)を得べしとなし、後者は知識を斥けて初めて復歸(即解脱)を得べしとなす。是點に於ては老子は寧ろ基督教に近し。基督教は以爲へらく、世界萬物の眞理は到底有限なる人智の曉得し得べきに非ず、只信仰と克己とに倚りて利己の意思を變じて萬人博愛の同情を擴張し、個躰我の差別を滅して、宇宙愛の平等中に沒了し、玆に初めて救を得べしと。之れ老子が廢學無迷を説けると異工同致なりと謂ひつべし。

事の序に一言すべきものあり。世の學者概ね老子の説を以て佛教に比す、蓋し佛老二者の類似は古來學者の夙に注意したる所にして余等も亦大躰に於て之を

し、相關聯して一畫を增損する能はざるは予輩の甚だ老子の學說に於て多とする所なり。列子が吾が心逆順するなければ則ち鳥獸の吾れを視る、猶其の儕の如けんと云ひしも、はた淮南子が

天地宇宙一人之身也、六合之内一人之制也、是故明於性者、天地不能脅也、審於符者怪物不能惑也、故聖人者由近知遠、而萬殊爲一、古之人同氣于天地、與一世優游

(本經訓)

といへるもまた同一意也。

論じて玆に至れば、吾人は吠檀多(ヱダーンタ)教の復歸說と老子の復歸說との間に驚くべき類似の點あるを見るなり。抑、吠檀多教にありては、萬有皆悉く梵の中にあり、梵は天上天下唯一無二の本躰にして萬有之れに依り、又此の中に存在す、現象世界なるものは、畢竟は吾人に最上知識なきが爲に、即ち無明中に在るが爲に起こる一種の迷妄たるに過ぎず。吾人が各個の「我」は即ち梵の一部にして其の實躰は唯一の梵なり。吾人が現象世界に無數の固躰我を認識するは即ち吾人の無明のみ。一旦此の無明を去りて最上知識を得たる後にありては、各個の我は小差別小相對を離

人生動於邇、則人物應於遠、人物動於此、則天地應於彼、彼我相應、出入無門、往來無戶、天地之間、虛廓之間、遼遠廣大、物類相應、不失毫釐者、同體故也、是故聖人不出戶反於死生之說、察於是非之理、通於利害之元、達於治亂之本、以己知家、以家知彼、事得其綱、物得其紀、動知所之、靜知所守、道德爲父、神明爲母、清靜爲師、太和爲友、天下爲家、萬物爲體

（道德指歸、不出戶篇）

萬有、道より分出せるを以て、我れと萬有と其の根を同うし、六合の內、宇宙の表、元同一體に屬す、故に理に大常あり、法に大致あり、陰陽五行の變化凡て一軌に出づ。何爲れぞ天下を周游し、汲々として力學するを須ひんや。斯の如きは力を用ふると愈々勞して、其の心愈々昏し、如かず靜寂其の獨に反り、其の心を省察して大道の「母」に復歸せんには。故に曰はく「聖人は行かずして知り、見ずして名け、爲さずして成す」と。學を外に求むるは迷妄の端にして、內心の道に歸するは悟道の緒なり。故に曰はく「學を爲せば日に益し、道を爲せば日に損す、益は濁世の末道、損は太初の常理なり」と。

予曩は此の說を以て萬有一體論と名けんと欲す。其の分出論、復歸說の間に介

茲に一事の注意すべきものあり。他なし、老子が所謂愚は吾人が通例謂ふ所の愚にあらず、其の口を極めて罵倒したる學も、亦眞正の學を指しゝに非ざること是れ也。何となれば老子が人世哲學の極致とする所道德經五千の言の「モーラル」は詮し來たれば、一愚字の外に出でざればなり。抑〻萬有は唯一無限なる道より分出せるもの、圜輿の間、道を外にして存在せるものなし。故に道を知るは即ち之れ絶對の知識を得るに等し。學の要は道を知るにあり、眞に道を知らんと欲せば、己れ道の中に入らざるべからず、道と同體ならざるべからず。即ち本體の「我」に復歸せざるべからず。而して道唯我れに存ず、我れの中衆理已に具はり、萬象自ら有す。之を以て學は之れを內に求むべくして之れを外に待つべからず。先天的に自己胸奧に存在せる道を外にして却りて知識を外に求むるもの、猶水を去りて魚を求むるが如し、誤らざるを得んや。故に曰はく、「自ら知る者は明なり」と。又曰はく、

不出戶知天下、不窺牖見天道、其出彌遠、其知彌少、是以聖人不行而知、不見而名、不爲而成　（第四十七章）

嚴君平之れを解して甚だ明瞭なり。其の言に曰はく、

聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作而不辭、生而不有、成而不恃、功成而弗居、夫唯弗居是以不去

又曰はく

聖人後其身而身先、外其身而身存、非以其私耶、故能成其私　（第七章）

又曰はく

富貴而驕、自遺其咎、功遂身退、天之道　（第九章）

蓋し以爲らく、人塊然として天地の間に立つ、眇たる蒼海の一滴のみ。我れ巧を以てすれば他も亦巧を以て應ず、我れ力を以てすれば他も亦力を以て待つ。天地の間、六合の中、弘大悠遠、物類無數、風を異にし、俗を殊にし、變化窮なく、利害是非錯亂して綜ぶる所なし。我が獨力以て天地を制するを得んか、進みて之れに當たる、則ち可なり、然らざれば則ち徒に究生勞死せんのみ。斯の如きは寧ろ退て獨を守り、情を絕ち、一切物我の交通を遮斷し、以て我が天眞の道を全うするに如かざるなり。進みて富まんよりは寧ろ退いて賢ならんには如かず、進みて賢ならんよりは、寧ろ退いて愚ならんには如かず。況や自ら足らば貧是富にして愚即賢なるをや。

教を罵りて「大道廢有仁義、六親不和孝慈起」と喝破し「絶仁棄義、民復孝慈」と說けり。

故に老子はまた富貴利達を賤み、自ら足るを以て最上の幸福となせり、

知人者智、自知者明、勝人者有力、自勝者強、知足者富　（第三十三章）

甚愛必大費、多藏必厚亡、知足不辱、知止不殆、可以長久　（第四十四章）

禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足常足　（第四十六章）

知足の足は常に足る。老子蓋し以爲へらく、限なき外界の慾望に對して、限ある吾人が滿足を得べき方便は唯是れのみ、唯是れ知足のみ。棲々遑々旦夕勤勞して已まず、之れを售りて賣れざらんことを恐れ、之れを得て失はんことを憂へ、釣玉鼠尾、物を待ち類に應じて多々益〻其の滿を知らざるが如き、徒に其の眞を疲らし其の生を苦しむるのみ。酒を嗜むは敗酒の謂に非ず、肉を欲するは腐肉の謂にあらず、人生、生を貴ぶ、豈勞生の謂ならんや。此等の點に於て老子の說は、殆どストア派の道義論と契合せるもの少からず。

老子は又切に謙退辭讓の安生の道なるを說けり、之れ復歸說の必然なる結果に外ならず。曰はく貴は賤を以て本となす。又曰はく、

て萬有に遍在せる道は亦吾人個々の胸裏にも存す、只太初の本原を去ること遼遠なるを以て本來渾全なる道は差別相對の間に沒了し去られて、動もすれば其の天眞を亡はんとす。然れども此の道は即ち我が本體なり、眞相なり、吾人が其の生を全うし其の神を保つは一に此の道を保全するに依りてなり。故に吾人は差別を去り、相對を離れ、現象假相の「吾」を擺脱して本體眞相の「我」に復らざるべからず。莊子が我之所以爲我者、豈我也哉、我猶爲身者非身、身之所以爲身者、以我存也、而我之所以爲我者、以有神也、神之所以留我者、道使然也と云へるは、老子の說く所と符契を合するが如し。

夫れ然り、吾人が大初の道に復歸するには虛無恬澹ならんことを要す。謂ふ所、靈を致す極に、靜を守る篤ければ、萬物蜂起して我れに當たるも我れ其の動かす所とならず、依然として其の復を見るのみ。其れ唯虛無なるを要す、是を以て世に處するや、保守を一つとせさるべからず、退嬰を務めざるべからず、無爲ならざるべからず。保守、退嬰、無爲の三者は老子が處世の要道也。是故に老子は學を惡み、智を斥けて、「絶學無憂」と云ひ、「絶聖棄智民利百倍」と說き、「慧智出有大僞」と論じ、仁義五常の

また曰はく

俗人昭々、我獨若レ昏、俗人察々、我獨悶々、澹兮其若レ海、飂兮若レ無レ所レ止、衆人皆有レ以、我獨頑似レ鄙、我獨異二於人一而貴レ求二食於母一　（第二十章）

又曰はく

知二其雄一守二其雌一、爲二天下之谿一、爲二天下之谿一常德不レ離、復二歸於嬰兒一、知二其白一守二其黑一、爲二天下式一、常德不レ忒、復二於無極一、知二其榮一守二其辱一、爲二天下谷一、爲二天下谷一、常德乃足、常德乃足、復二歸於樸一　（第二十八章）

又曰はく

天下有レ始、以爲二天下母一、既得二其母一、復知二其子一、既知二其子一、復守二其母一、沒レ身不レ殆、塞二其兌一、閉二其門一、終身不レ勤　（第五十二章）

之れに依りて之れを見れば、吾人道に復歸するには、先づ其の慾情を絶たざるべからず、其の兌を塞ぎ其の門を閉ぢ、口體耳目の累を離れ、虛靜恬澹、自ら守る時は、心自ら其の常に反り、渾然無垢、平等差別なる大道の淨域に入ることを得るなり。　蓋し吾人が道に復歸すとは我の外にある道の中に入るの義にあらず。　分出により

對差別は道の末にして道の本にあらず、故に吾人は須らく此の相對差別の世界を去りて平等絶對の本體に復歸せざるべからず、斯の如くにして初めて其の生を保ち、其の神を全うすべし。仁義や、禮容や、皆之れ差別のみ、醜美や、賢愚や、皆之れ相對のみ、尙ぶに足らざる也。故に曰はく、

天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、故有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、……是以聖人處無爲之事、行不言之敎 （第二章）

また曰はく

大道廢有仁義、慧智出有大僞、六親不和有孝慈、國家昏亂有忠臣、 （第十八章）

此の他「聖人不仁、以百姓爲芻狗」（第五章）と云ひ「始制有名、名亦既有、夫亦將知止、知止所以不殆」（第三十二章）と言へるが如き、要するに此の意に外ならず。然らば則ち此の差別の世界を脫して平等の道に復歸せんとするには吾人は當に如何すべきか。

老子之れに答へて曰はく、

致虛極、守靜篤、萬物並作、吾以觀其復、夫物芸々、各歸其根、歸根曰靜、靜謂復命、復命曰常、 （第十六章）

に其の身を處すべきか。天地は道より分出せる所のもの、天地の間に生息する吾人と道との間には、そも如何の關係ありて存するか。如何せば吾人は其の神を全くし其の命を壽うするを得べきか、如何せば吾人は煩惱劫苦の世にありて最大の幸福を享け得べきか、其の理想とすべき人物、はた國家は如何。——是等の疑問は、老子が其の人世觀に於て、主として解釋せんと務めたるものにして、其の視點は孔子と共に、全く人心的(Anthropocentrisch)なり。茲に讀者の特に注意すべきは、倫理政治に於ける老子の學說は、到る處分出論の大統を貫徹して驚くべき一致をなせることなり。是の故に其の世界觀に於ける分出論を明瞭に理解せる人に非ざれば決して其の人世觀に於ける復歸說を會得すること能はざるべし。

老子が倫理論の原理は復歸說にあり。以爲へらく、道の物たる渾然純一、名なく狀なし、其の分かれて德となり、物となり、萬有となるに及びて、茲に初めて差別あり。是に於てか、彼れと此れと相容れず、强と弱と相立たず、大小相並ばず、醜美善惡協和せず、爭奪茲に起り、愛憎茲に成る。道を去ること愈〻遠ければ差別愈〻大にして愈〻複雜なり。爭奪起こる、是を於て天壽全からず、愛憎成る、之を以て精靈常に勦(いたは)る。相

薄なる、遙に老子の高遠深邃なるに及ばざるを見るのみ。蓋し孔子の學は世間的にして、老子の學は出世間的なり、孔子は人世を觀じて世界に及ぼさんとし、老子は世界を觀じて以て人世を規せんとす。前者は現在を以て過去に溯らんとし、後者は過去を移して現在となさんとす。前者の說を立つるや、人生を中心とし、後者は世界を中心とす、前者は有限相對の中に其の滿足を得んことを希望し、後者は有限と無限とを聯絡し、相對と絕對とを調和せんことを理想とす。人世觀に於ける孔老二家は互に兩極的反對を爲せりと謂ひつべし。

斯の如く、老子の學說は孔子に比して、遙に抽象的に發達したれども、尙全く支那的思想の一般傾向を離れたるものに非ず。即ち老子は其の學說の重點を孔子と同じく政治修身の上に措きしなり。斯く言はゞ、讀者或は老子の說を以て純理に本けりと說きし予輩の言の前後相撞着せるが如きを怪まん、然れども實は決して然らず。立論の上より言ふ時は、老子は勿論純理を先にしたりと雖も、結果の上に於ては、殊に實理を主としたるのみ。實にや道德經八十一章中、專ら純理を說けるもの僅に十數、餘は多く處世脩身の道に非ざるはなし。吾れ人は如何に天地の間

時に具體的事物を離れて純理上に渉れるもの無きに非ずと雖も、之れ只實用の學を演繹解釋する上に於て已むを得ざるに出でたるものにして、決して彼等が本來の目的に非ず、豫め純理的系統を立てゝ、而して後之れを實理に及ぼしたるものに至りては蓋し稀なり。我が老子の學が、有限相對の世界を唯一の目的とせる儒家一輩の爲に異端邪道視せられたるは、畢竟其の説の抽象的純理に原く者多ければなり。

試に當時支那學統の中樞なる孔子の説きし所を見よ「治國平天下」と謂ひ「修身在正心」と言ひ、社會國家の政治的論説に非ざれば人倫道德の修身的教義に過ぎず。時に「明德」と言ひ「天命」を説かざるに非ずと雖も、皆之れ政治倫理、即ち實理の樊籬中に於て之れを説き去りしのみ。之れを老子が開卷第一に「道可道非常道、名可名非常名」と唱破せしに比すれば、二者思想の趨向する所何等の相違ぞや。さりながら予輩は敢て孔子を以て老子より卑しとするものに非ず。倫常亂れ、綱紀廢れたる戰國時代にありて、天下の民をして虛理空論に走ることなく、專ら實際有益の事を行はしめんとせしは、孔子が千古の卓見なりと雖も、只哲學者としては、其の説の淺

の空說を構へて自ら喜ぶものあり、其の愚笑ふべし。

以上述ぶる所を約するに、老子の世界觀は分出說なり、萬有の根原は唯一無限の道にして現象世界は其の分出の末段なり。 吾人は先づ道の本躰を說き、老子の說の二元論、又は進化論に非ざるを辨じ、分出の階段を叙して其の必然の根據を老子經中に見出だす能はざるを注意し、次にプローチンと老子との分出論の異同を說了せりと思考するを以て、之れより章を改めて老子哲學中の尤も趣味ある人世觀に入り、倫理政治の上に於ける老子の學說を詳述せん。

第二章　老子の人世觀

一、倫理論

抑々支那學說の傾向は概して實理的にして純理的に非ず、其の說く所は詮するに、以て眼前當路の實際問題に應用せんとするにあり。 言ふべくして行ふべからざるものは凡て排斥して以て空論となす、故に偶々稍々抽象的の學理に遇へば則ち以て異端となし、左道となし、以て先王の遺法に非ずとなす。 夫の孔孟の說く所、

に明言せられたる分出說の原理は、啻に世界觀の上に於て大體ての首尾を貫徹するのみならず、其倫理道德を解說する上に於て實に其の唯一の鍵鑰たり。事態已に如斯なるにも係らず、吾人は此の天といふ文字を以て神と同一視せんが爲に、道德經八十一章を通せる分出論の大旨義を拋棄せざるべからざるか。之れ豈學者の研究法ならんや。況や第四章に於て、老子自ら明かに、天地の主宰者たるが如き神の存在を否定せるをや。即ち第四章に道を敍して曰はく

吾不㆑知㆓誰之子㆒、象㆓帝之先㆒。

老子は斯の如く神の有らざるの前、已に道ありきと明言せるに非ずや。神、道によりて生せらるゝものとせば、物質と等しく分出の一階段、之れ已に神に非ざるなり。帝安ぞ吾人が所謂天帝即ち神と同義ならんや。老子且言はずや、自ら生せざるものは長久なりと。然らば則ち道の所生なる神は長久にあらざるなり。無常一時の存在を有するもの、安ぞ吾人の所謂「神」ならんや。彼の西人の老子を見るもの「天」「帝」等の文字に遇へば直に文字上の意義を移して即ち是れ神なりとなし、甚しきに至つては（ハーバート・ジャイルス の如き）強ひて自家基督教の教理に擬し、附會杜撰

文字は支那に於て古來慣用せる文字にして老子以前の書籍に於て極めて普通の語なり、以て「天」てふ觀念が如何に當時支那人の思想に親密なりしかを察するに足る。老子も亦其の說を爲すに當つて、世人をして之れを解するに容易ならしめんが爲に、はた又其の日用慣用の語なるを以て、知らず、識らず、之れを用ひたるは、其の書を著すに當たり、其哲學を系統的に叙述せず、文字の適否等に就て多く仕心する所なかりし彼れが如き者にありては素よりあり得べき事、否寧ろあらざるべからざる事なり。安ぞ之れを以て其の世界觀の上に於て萬有の主宰者たる人稱的神（ペルゼーンリツヒ）の存在を認めしものとして見るを得べけんや。吾人は、道德經の如き元來秩序的、系統的に著作せられざる、言はゞ隨筆の如き書籍を讀むに當たりては、須く其の大綱を取つて其の末節の小差違、小矛盾を調和することを務めざるべからず。到る處片言雙句を捕捉して直に其の學說となし、其の大統の旨義に於て果して一致するや否やを顧ざるが如きは、學者の當に爲すべき所に非ざるなり。今若し此の「天」といふ文字が果して吾人の所謂神と同義にして老子實に之れを認めたりとせば、道德經開卷第一章に喝破せる大主義は如何に之れを解釋すべきぞ。此の第一章

の宗に似たり、吾其の誰が子なるを知らず、帝の先に象れりと。又曰はずや、物あり混成す、天地に先ちて生ず、以て天下の母となすべしと。又曰はずや大道は汎兮として其れ左右すべし、萬物之れを恃んで以て生ずと。此等の章句は明々地に分出の大法を辨じ、萬物一切道に依つて生じ、道に依つて成るを示せるものに非ずして何ぞや。若し道自身を以て即ち神となすこと、猶スピノザが本躰（ズブスタンツ）を以て神となせるが如くんば、老子は實に有神論者ならん。然れども吾人が所謂神なるものは此分出の理法中其の身を容るゝの處あらざるなり。若し悽愴著蒿の精尙且之を神と云はゞ、即ち已まん、然れども分出の大法は吾人の所謂神あるを容さざるなり。之れ多言を要せず、吾人を以て之を見れば燎然火を見るよりも明なり。

試に暫く老子を以て有神論者となすの說を聞かんか。レッグは「治人事天、莫若嗇」（五十九章）「夫慈以戰則勝、以守則固、天將救之、以慈衛之」（六十七章）「善爲士者、不武、善戰者不怒、善勝者不與、善用人者爲之下、是謂不爭之德、是謂用人之力、是謂配天」（六十八章）等の文中に散見する「天」といふ文字を捉へ來たりて以て、天命を支配し、人事を左右するの全能力を有する吾人が所謂神と同一視せり、之れ蓋し大なる誤謬なり。抑、天といふ

じ、地、草木を生じ、草木、種子を生じ、種子、人を生ず。

之れを老子が道、德、物、勢、若しくは一、二、三の說に比すれば、自ら思想上に根本的差違あるを見るに足る。此點に於て老子は寧ろプローチンが太一、理(ヌース)を生じ、理、精神(ゼーレ)を生じ、精神、物質を生ずと云ひしに近し。

老子の世界觀を終ふるに臨み一事の辨せざるべからざる者あり、即ち老子は吾人が謂ふ所の神の存在を認めしや否やの問題之れなり。吾人は之れを以て老子の學說中殊に條を改めて辨明する程の價値ある問題に非ざるを信ずと雖も、世の老子を論ずるもの往々其の有神說なるを主張するものあるを以て、茲に一言の已むべからざる者あるを覺ゆ。

吾人は斷言せん、老子は決して吾人が所謂神の存在を認めずと。如此は一たび善く老子道德經を讀むものゝ疑を挾むを得ざる所、疑ふらくは世の學者、何が故に老子の有神論者なるを認むるか、之れ吾人の寧ろ怪訝に堪へざる所なり。老子曰はずや、無名は萬物の始、有名は萬物の母と。又曰はずや、天地は仁せず、萬物を以て芻狗となすと。又曰はずや、道は沖にして之れを用ひ、或は盈たず、淵兮として萬物

甲は實在より非實在に至り、乙は非實在より實在に至る。如斯分出の方向全然相背馳すること、之れを喩ふるに、彼の燈火の火炎に遠かるに隨つて漸く薄弱となり、遂に暗黑に終はるは以て前者の世界觀に比すべく、河川の源泉淸澄にして下流漸く混濁するは、以て後者の人世觀に比すべし。而かも無限絶對なる本體が分出して物質世界に終はるに於ては兩者共に一軌に出づ。尙此の事に就きては倫理政治の章に於て詳論すべし。

玆に一事の注意すべきことあり、即ち老子の分出説は決して單純なる物質的原理に非ざることゝ是れなり。之れ實に其の說の高尙非凡なる所以にして、吾人が每に耶蘇紀元前六世紀の哲學思想として驚嘆する所なり。希臘および印度に在りても、古代の思想は概ね具體的、即ち物質的なり。ショペンハウエルが東洋唯一の哲學として私淑せし吠檀多教の世界觀も亦老子と等しく分出說なれども、其思想は物質界の樊裡を出でず、決して老子に於て見る如く具體の世界を超え、純理に就て專ら思索せしの比にあらず。即ち「タイチリーヤカ・ウパニシャド」に曰はく、

其自己即梵天より精氣(エーテル)を生じ、精氣、風を生じ、風、火を生じ、火、水を生じ、水、地を生

し、其の完美なる內容の外に溢流することに依つて成るものとせり。彼は又分出の目的を太一の有せる主義（ウルゲーナ）に歸して曰く、

分出によりて現實世界の生ずる原理は、太一が唯一なると同時に至善なるが爲なり。善の善たる所以は他の爲に自己を分つにあり。故に太一若し至善なりとせば、自巳より他を生ぜざるべからず、即自ら分出せざるべからず。

是れプローチンが分出說の梗概なり、讀者之れを老子の說に比較せば、其の綱領の略ゝ相同じきを見るべし。然れども前者は後者に比すれば、議論精密にして殊に分出の必然なる根據を說きたるが如き、後者に於て見る能はざる所なりとす。今尙ほ細目に亘りて其の異なる點を擧ぐれば、前者は太一を去るの遠邇を以て實在の强弱となし、分出の末段、即ち物質を以て非實在となせりと雖も、後者は全く之に反し、無屬性なるの故を以て道を無即非實在となし、現世界を以て有即實在となせり。前者は至善なる太一より分出せるの故を以て現象世界を美なりとなす一種の樂天主義なれども、後者は之れに反し、現實界を以て純一無限なる太一の墮落せるものとなす、一種の厭世主義なり。此點に於ては兩者の見る所兩々相反す、即ち

以て太一(ウルアイチ)となせり。其說に曰はく、

太一の物たる絕對無限、唯一にして單純なり、茫然として形色の捕ふべきものなし、あらゆる屬性と名稱(ベチンヌンゲン)とを超越し、言ふべからず知るべからず、只總ての形容と屬性とを抽象し去りて吾人は僅に其彷彿を認め得るのみ。太一は「ウージア」(οὐσία)に非ず、生命に非ず、美に非ず、理(ヌース)に非ず。純一や至善や共に之を表はすに足らず、否太一といふ名稱すらも本來附すべきものに非ず。

太一分れて數多となる。然れども太一は此分化によりて其絕對的超越(アブソルート、トランセンデンツ)に缺損する所ありと思ふべからず。一即ち多となるに非ず、一は無始無終曠劫依然として一なり。只多は一より生ずるを以て此點に於てのみ一は多なりと謂ふことを得べし。一は多の中にあらず、何となれば多は一より後に生じたるものなればなり。故に多は一より分割(タイルング)に依りて生じたるものに非ず。何となれば若し分割に依りて生じたりとせば之れ一の一たる所以を失へばなり、之れ分割にあらず、變化にあらず、只分出(エマナチヨン)として見るべきのみ。

プローチンは又分出の必然なる理法を以て太一に固有せる一種微妙の能力に歸

て萬物を蓄ふる者」となし、「道德は則ち自ら形する能はず、物に依つて而して後形顯る」と言へるは、之れ道の外預め物質といふ本體の存在を豫想せる二元說にして、老子の分出說を誤解せる者なり。又玆に德と稱するものは即ち第四十二章の「二」即ち道より剖判せる陰陽二力を混一したるものとして見るを得べし。之を要するに、老子は唯分出の形迹を叙述せるのみ。渾然平等なる道が如何にして殊別差等ある現象世界に變遷するかに就きては、少しも其の必然の理法を明にせざるなり。

此分出說は老子哲學の第一原理なり。故に人若し之れを誤らば、獨り其の世界觀を解する能はざるのみならず、倫理政治に於ける老子の說を會得するに於て非常の困難を感ずべし。分出說は實に根幹本流なり、幾多の枝葉細流、時に隨ひ、物に應じて起こると雖も、詮ずる所分出說の大統に歸着せざるはなし。厭世論も、復歸說も、孤立主義も、萬有一體論も、虛無主義も、要するに此の分出說が其の待應する事物に隨つて其の形を變じたるものに過ぎず。此の事は猶ほ後章に詳說すべし。

分出說を唱へしものの古來少からず、其の尤も著明なるものはプローチン(Plotin)なり。今其の說の要點を擧げて老子の說と比較し見ん。プローチンは宇宙の本體を

べからざるか、分出の大法は何の目的はた何の主義に依りて行はるゝか。老子は此の必至の原因に向つては、一も言ふ所無きが如し。其の說く所は只分出の狀態のみ、其の精神に至りては吾人少しも之れを知る能はざるなり。第五十一章も亦分出の理法を說けり、曰はく

道生之、德蓄之、物形之、勢成之。

此の文に因つて之れを見れば、分出の順序は道、德を生じ、德、物質を生じ、物質、勢を生じ、以て萬有を成すとせるが如し。道は萬物を包み、衆理を綜ぶ、然れども其萬有無數の殊別に應せざるべからざるの故を以て、道自己は無差別無定限なり。此道分出變化して、先づ成るものは德なり。德は已に屬性あり、定限ありと雖も、道を去ること尚未だ遠からざるを以て、未だ具體的に非ず、目見るべからず、耳聞くべからず、道と物質との間に立ちて本體と現象との中間を媒する一氣の精力なり。德次に分化して物質となり、茲に初めて具體現象の世界となる。物質生じて而して後其の遠近剛柔の關係に因りて其間に勢を生ず、勢生じて能く萬物を整理し、初めて秩序ある現象的自然界を形成するなり。東坡が德を以て「群衆を收養し、辨して以

爲二、二與一爲三、自是往而萬物生。

是れ亦所詮理外の文字、固より解すべからず。此の章を註するもの、古來概ね此の類なり、亦以て合理的解釋の困難なるを見るに足る。或學者は是れを解して一を以て道となし、二を以て陰陽となし、三を以て陰陽の相合して成れる者となせるが如し。悟眞に曰はく、

道自虛無生一氣、便從一氣產陰陽、陰陽再合成三體、三體重生萬物。

司馬溫公曰はく、

道生一、自無而有、一生二、分陰分陽、二生三、陰陽交而生和、三生萬物、和氣聚而生萬物

淮南子天文訓にも亦老子の意を敷衍して、此れと同一の解をなし、林希逸、嚴君平も略之れと同說なるが如し。吾人も亦此の說を以て妥當なりと思考す。是れによりて之れを看るときは、道の剖判して萬物を分出するや、渾然として虛無なるもの、所謂る反の理に因りて陰陽なる二個の反對せる原理となり、此の二個の原理相抱合して和氣を生ず、此の三者よりして初めて萬物生ず。是れ甚だ理義の明晰を缺けりと雖も、然れども全く揣摩し難きに非ず。然れども何故に道は分出せざる

即ち第四十二章に曰はく

道生一、一生二、二生三、三生萬物。

吾人を以て之れを見れば、老子は只分出の大體を觀せしのみにして、其の必至の理法に就ては、多く思考する所なかりしが如し。道一を生ず、其所謂一とは何物ぞ二と云ひ、三と云ひ、萬物と云ふ、其の間何等の必然なる關係あるか。單に文字上よりは到底解釋の途なきが如し。今試に諸註者の説を稽ふるに、王弼は之れを解して曰はく、

萬物萬形、其歸一也、何由致一、由於無也、由無乃一、一可謂無、已謂一、豈得無言乎、有言有一、非二如何、有一有二、遂生乎三、從無之有、數盡乎斯。

之れ徒に理義を弄して其の數を比擬したるのみ。無は何故に一なるか、三は何故に數の極なるか。言といふもの無に對して何の關係かある。一より萬物まで發達の間に在りて言といふもの何の力かある。斯の如きは文字を飜弄して幽玄を衒ふもの、殆ど兒戲に類すと謂ひつべし。東坡の解に曰はく

夫道非一非二、及其與物爲偶、道一而物不一、故以一名道、然而道則非一也、一與一

るものにして老子の意に非ず。張橫渠が老子を駁して「無者無物却有理、有此理則有矣、老氏乃云、物生於有、有生於無、和理也無、便錯了」と云ひしは全く無の意義を誤解して積極的屬性と混同せるものなり。詹雪崖が之に和して

老氏以動植物之生於氣、又本於理、先有理而後有氣、則未有氣之先、理於何處安頓、果如其說、和理也無之矣

と云ひしは、要するに分出論を解せざるの致す所にして、一たび之れを解せば、理氣合一論を以て無限唯一の本體なる道を規束するの短見なるを悟るに難からざる也。

既に老子の世界觀を以て分出說とせば、無限、無窮、無屬性なる道より有限、有窮、有屬性なる萬有は如何にして分出し來れるか、本體如何にして現象を生じ得るか、はた兩者の間如何なる必然なる關係あるか、之れ次に起こるべき自然の疑問なりとす。老子の之れに對する答は如何。

吾人は老子が此の問題に向つて明瞭なる解說を與へざりしを遺憾とす。道德經八十一章中之れが直接の說明をなせるは只四十二及び五十一の二章に過ぎず。

字之曰道　（第二十五章）

反者道之動、弱者道之用、天下萬物生於有、有生於無　（第四十章）

人或は老子の說を以て進化說となすものあり、英人ハーバート・ジャイルスの如き是れなり。然れども、予は之れを取らず。所謂進化說は萬有永遠の實在を豫想せるものにして、萬有の外に原因實躰を許さず、理氣體用ともに現象世界の中にあり。之れに反して老子は萬有は無より生ずとなし、以て其の始あるを說き、明に萬有實在の大原因となるべき曠劫不易なる本體を認識せり。即ち古より今に至るまで其の名以て衆甫を閲ぶるもの、之れ即ち明かに萬有分化の大原因を指摘せるものに非ずや。老子は此の本體を外にして萬有の存在及び變遷を解釋すること能はざりしなり。故に曰はく、吾れ何を以てか衆甫の狀を知るか、即ち此を以てなりと。嚴君平が道德指歸に曰はく、天地人物皆元始を同うし、宗祖を共にす、六合の內宇宙の表一體に連屬す（不出戸篇）と。稍々分出說の旨義を得たりと謂ひつべし。然れども老子の說は古來往々學者に誤解せられたり。淮南子老子を解せる文中に、「夫精神者、所受於天也、而形體者、所禀於地也」と言へるが如き、天と地との二元を豫想せ

のものなり。

道は萬物の始なり、あらゆる屬性を抽象し、あらゆる定限を超越す。故に道に無なり、何となれば若し之れを有なりとせば、之れ已に有なる屬性の爲に定限せらるればなり。道を以て無と云ふは、之れ屬性を附すると異なり、何となれば無は唯消極的の意義を有するのみにして、只有を否定するに止まり、少しも積極的の屬性を意味するものに非ざればなり。無は有を生じ、有は萬物を生ず。萬有は道を離れて存せざれども、道は萬有を超えて依然たり。曰はく、

視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一、其上不皦、其下不昧、繩々兮不可名、復歸於無物、是謂無狀之狀、無象之象、

（道德經第十四章）

道之爲物惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮其中有物、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、其中有信、自古及今、其名不去、以閱衆甫、吾何以知衆甫之然哉、以此

（第二十一章）

有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、

を去り、一歩を進めて、道及び其の現象世界との關係に就きて稍精細なる科學的研究を試みんとす。

老子の世界觀は分出論(エマナチョン)なり。其說によれば萬有には無上絕對の原因ありて存す、萬有は此原因中より分出せられたるものなり。此原因は無限、無窮、無屬性にして、萬有の將然的(ポテンチエル)實在を保有し、而も萬有の分出によりて少しも其の絕對無限を害せらるゝこと無し。之れ此の太初の原因自ら變化して萬有となるにあらず、萬有の此の中より分出するは此の無限無窮なる大原因中の實在の溢流に據るものにして、此の溢流の爲に此の大原因は些も其實在を損するものにあらず。分出せられたる萬有と太初の原因との關係は、猶燈火の光線に於けるが如し、燈火は光線に非ざれども、光線は燈火に依らざれば存在せず。光線の發揚は些の損失を燈火に及ぼさゝるが如く、萬有の分出は太初の原因に何等の影響をも及ぼすこと無し。現象世界に於ける一去一來、一興一廢は、分化せられたる萬有の離合成壞に過ぎずして、萬有の依て生じたる本體、即ち太初の原因に至りては、無終無始、寂焉寞焉として變化することなし。此の太初の原因は即ち老子が名けて道とせし所

き者なし、已に名あるもの、已に之れ太初の道に非ず、故に曰く、無名は萬物の始なりと。 無名の中萬有を葆み、不言の間衆理を含み、幽玄微妙、見るべきの色なく、聽くべきの聲なく、繫ぐべきの狀なし。 恍然惚然として捕捉する所を知らず、無形、物を始め、不繫、物を成し、萬物以てはじまり、以て成りて而して其の然る所以を知らず。 所謂恍惚の中象あり、窈冥の中精あり、衆甫の依りて出づる所、至大、至小、至美、至眞の極、空、時、方の間に離合する萬有を統轄し、而して己れは則ち生死變化の外に立ちて茫々として冥し。 東坡が所謂逝くものは斯の如くにして而して嘗て逝かず、盈虛は彼れが如くにして而して卒に消長する所無きもの、列子が所謂「有生不生、有化不化、不生者能生々、不化者能化々」「生物者不生、化物者不化、自生自化自形自色」なるもの即ち是れなり。 既に屬性なし、以て弱なるべく、以て強なるべく、以て柔なるべく、以て剛なるべく、以て陰なるべく、以て陽なるべく、以て明なるべく、以て窈なるべく、以て天地を包裹すべく、以て無方に應待すべし。 氣形質具して而して未だ離れず、列子が渾淪と名けしもの即ち是れなり。 老子の道を叙する概ね斯の如し。 妙理甚だ言ひ難しと雖も、而れども條理の著落略見つべし。 吾人は斯の如き漠然たる註解

吾人の思想は、是に於てか轉じて『常住なる實體』を想ふに至る。斯の如き實體は、必ずや空間上無限ならざるべからず、有限なるものは萬有實在の原因となる能はざればなり。必ずや時間上無窮ならざるべからず、始あり終あるものは萬有流轉の原因となること能はざればなり。必ずや性質上無定限ならざるべからず、既に一定の屬性を有せるものは無限なる萬有屬性の原因となる能はざればなり。此の無限、無窮、無屬性なる萬有實在の本體は即ち老子が名けて道とせし所のものなり。

道の道とすべきは常の道に非ず、名の名とすべきは常の名に非ず、無名は萬物の始、有名は萬物の母。之れ老子が開卷第一章に道を叙したるの言、老子の哲學原理は總て此の數語の中にありと云ふも敢て過言に非ず。道已に無限なり。無窮なり、又無屬性なり、元來以て道と稱すべきに非ず。以て道と稱する、之れ即ち屬性を付するを以てなり、名は其の說明上已むを得ざるに出づるのみ。天地未だ有らざるの前、萬物已に成りし後、道は常住無窮にして終始する所なし。變化極まりなき現象世界の原因となりて、而も其の煩はす所とならず、萬有成壞して增損する所なく、億刧依然として天地の外に超越す。名の以て名くべき者なく、物の以て擬すべ

老子の哲學

第一章　老子の世界觀

流轉變遷暫くも定なきものは現世の狀態なり。古往今來茫々幾成壞、滔々として其の底止する所を知らず。昨の世界は今の世界にあらず、今の世界また安ぞ明の世界に非ざるを知らんや。念々刹那の間、來るや電のごとく其の影なく、去るや風の如く其の跡を見ず。天地萬物、之れ一大走馬燈、其れ何處より來り、何處にか行かんとする。實にや「萬有流矣」とは、此の天地に對して劈頭先づ吾人の胸裏に起る所の思想なり。然れども想ふに、流るゝもの、何によりてか流る、遷る者、何者か之れを遷す。自ら流るゝもの、他をして流れしむると能はず、自ら遷るもの、他をして遷らしむる能はず、無常は常住を豫想し、複雜は單一を假定す。於是乎、吾人は流轉せるものゝ中に、流轉せざるもの、變遷せる者の中に、變遷せざるもの、動けるものゝ中に、靜かなる者無常なるものゝ中に、常住なるもの、一言すれば、吾人は萬有の依て以て成壞し、依て以て流轉する一大原因を惝怳するを禁ずる能はず。「萬有流る」てふ

未だ嘗て愁なしと言ふものを見ず。

――ブラウニング

（廿五年十二月）

に代りて、彼等が缺焉として等しく嗟嘆するの感情を歌ひたる者に非る乎。人間の歴史は希望の歴史なり、否希望を求めて煩悶するの一大哀史なり。吁希望乎、希望乎、希望は終に得べからざる乎。世界の『時』と生命とが滔々として此大目的に向て進行するにも係らず、五千年後の今日尚此問題の解釋に一歩を進めたるの跡を見ず。豈悲しからずや。

嗚呼寧ろ知らんや、厭世なる二字は此未解の疑問に向て最後の答案を與ふるものに非ざるかを。之れ吾人々類が終極の運命を指定するものとしては極めて無慈悲なる解釋なり。然れども吾れ人は誤謬なき運算によりて得たる答案の少量なるが爲に、其の正確なるを拒否するの理由を見ざる也。予は切に此運算の誤りあらむことを祈るのみ。

以上は予が厭世論の大意なり。予は厭世主義の現在の社會にとりて極めて有害なるを熟知す。夫れ唯熟知す、之を以て愈々之を暴露して、敎を大方に請ふの必要あるを認めたる也。否らざれば、予豈好で此鬱憂なる長文字を草せんや。

世には神なしと言ふもの往々あれど

消ゆるや、却て一層明晰に一層痛切に(所謂比照作用によりて)無限の暗夜てふ恐るべき觀念を吾れ人に與ふるに非ざる乎。何れにしても、吾人の少しも得る所なきは一なり。

嗚呼正義、道德、自由、幸福、快樂、是れ時の古今を論ぜず、洋の東西を論ぜず、坤輿ありてより以來齊しく人間の咨嗟霓望したりし所の者なり。何故に此の數者は現世に存する能はざる乎。吾れ人は五千年の歷史を通じて只怨恨の聲を聞くのみ、遂に滿足の聲を耳にせざるなり。世に聖人賢人と名くる人々は、即ち此問題を解釋せんと試みたる者に非る乎。世の所謂仁人義士なる者は、其博大なる同胞心を擴張して、世人をして(無益ながらも)等しく之を享受せしめんと試みたる人々に非る乎。世の所謂改革家なるものは、此等のものを得んが爲に當代の社會を破壞したる人々に非る乎。世の宗敎家なる者は、此等のものと此世との間を調停し、吾れ人をして其希望を未來に委ねしめ、代ゆるに信仰なるものを以てせんと企てたる者に非る乎。世の所謂暴君虐主なる人々は、此等のものを熱望するの餘り、偶々之を求むるの方法を誤りたる者に非る乎。世の詩人戲曲家なるものは、全世界の人間

らず、笑ひ得るか爲にあらず、理屈を言ひ得る爲にあらず、數學に長ずる爲に非ず、只吾れ人自らの品位を自覺し得るが爲なり。木石は自己てふことすらも自覺せず、若し自覺せば之れ已に木石に非る也。禽獸は僅に自己を自覺せりと雖も、能く自覺の品位を自覺せざる也。若し禽獸にして、假令へは自己の哀れむべきことを自覺したりとせんか、之れ既に禽獸に非る也。今一片の肉を執て犬に投與せよ、奔躍尾を揮ひ欣々然として喜色あらむ。一個の時器を取て之を卷くこと數回せよ、四六時中切々として暫くも停らず。此二者は自己を知らず、又は自己の品位を知らざる也。今吾れ人が營々として一の事業に従事し、自己及び自己の品位を自覺するの暇あらざるを以て、否暇あらざらしむるを以て無上の快樂となすあらば、之れ人たらずして寧ろ獸と器たるに非ずや。吾れ人は『豚となりて笑はんよりは寧ろ人となりて泣かんと欲する者也』。よし數歩を讓り、事物を究索するの盡力を以て人間の品位に對して恥ぢざるの快樂なりとせんか、之れ安ぞ暗々たる大空を橫るの流星を凝視して、白日の巨光に比せんと欲するに異ならんや。一點流星の光は、其の顯るゝや、吾れ人を圍繞せる冥眇幽深なる暗黑を照破するに足らずして、其の

をば得べきが如く夢むるは、未來を以て實在せるものと誤信するに坐するなきを得んや。吾れ人は知らざるべからず、萬物の實在するは只現在に於てのみ、此念々刹那一髪の間に於てのみ、吾れ人萬物は實在するを得るなり。未だ來らざる者と已に去りたる者とは、皆共に實在せず。未來と云ひ、過去と云ひ、只吾れ人が心性の假像のみ。實在せざる過去未來に於て、吾人追懐想像する幸福は、吾れ人が此世の實在(現在)に於て少も輕重する所なき也。吾れ人が此冷酷無慈悲なる現在に堪ゆる能はず、未來の希望を夢みて、僅に其生を樂むは、吾れ人の憐れなる運命にありては、已むを得ざる事なりと雖も、之れ豈夢中金を拾ふて覺後猶富めりとなすものに異ならんや。

樂天家は吾人の説に反して言はん、如何なる事業にありても、吾れ人が其目的に達せんとして鞠躬するの盡力は、一の快樂なり、厭世論は之れ懶惰者の言のみと。予は斯説を以て吾人々類の頭上に一大侮辱を加へたる者なりと言はんと欲す。吾れ人は、神が吾人に賦與せる靈魂の指す所に非ざれば、高潔なる快樂の存在せさるを信ずる者也。人類が禽獸木石と異なる所以のものは、其の話し得るが爲にあ

吁皮肉の絆しに繋かれずば、吾れ人は浮世の涙は知らざりしなり。吾れ人が胸奥に潜める靈魂は此一片の悲歌に對して、果して相和することなからむや。

五。ゲーテが言ひし如く、吾れ人は只現在に於てのみ生活する能はざるなり。何となれば『現在』なる者は、極めて冷酷に極めて無慈悲なる者なればなり。誰か『現在』に於て希望を見出し得るや、誰か現在に於て圓滿を享け得るや。希望には羽翼あり、常に眉間盈尺の前に飛翔するが如きも、吾人は永久之を捉ふる能はず。希望は猶影の如き也、我走れば彼亦走り、我止れは彼亦止る。希望に達せんと求むる者は影を超えんとする者と其痴何ぞ擇ばん。『未來に望む』てふ語は、實に吾人が現在の命なり、而して此現在の命の現在にあらずして、却て未來にあるは甚た奇怪なる事なりとす。抑も未來とは未だ來らざるの謂なり、已に來らば之れ現在にして最早や未來に非る也。未來は明日の如く到底吾れ人の經過する能はざるの時なり。吾れ人が『未來に望む』は可なり、然れども此未來の早晩來らんことを思惟するは大に誤れり。吾れ人にして同時に未來と現在とに生活し得ざる以上は、吾れ人の希望は到底達し得べからざる也。予は思ふ、吾れ人が斯の如く得べからざるの希望

塞かれるかを示すものには非る乎。此苦痛悲哀の間に人と爲れる吾れ人が、只消極的に其存在を認むるを得るは素より怪むに足らず。只吾れ人は斯の如き重大なる苦痛悲哀を消極的の外知覺し得ざる程に、訓練馴致せられたる吾れ人の運命の、如何に果敢なきかを思はずんばあらざる也。厭世詩人バイロン歌ふて曰く

うつせみのためにに　　我は生きじ
　自然の影にぞ　　我はやどる。
聲なきみそらに　　月しみれは、
　くもらぬかゝみに　　我がたまうつる。
おくつき前に　　ひとり立てば
　靜けき森に　　歌ぞきこゆ。
うるはしき天地に　　などひとり
　無からむにも劣る　　我等の世ぞ、
皮肉のほだしに　　繋がれずば、
　浮世のなみだは　　知らざらましを。

『山も川も海も林も吾れ人が其一部たると同時に、此等も吾れ人の一部たり』。吾れ人は自滅して無となるも、同時に全宇宙となりて再現するなり。然れども明に客觀と主觀とを分ち、自己と外物とを時間と空間とに制限せられたる二個の物體として之を思考する間は、歎美する我と歎美せらるゝ物とを知覺する間は、我れと外物との關係、若くは外物相互の關係を自覺する間は、現世の利害得失てふ觀念の意識中に存する間は、否意識自らの存生する間は、吾れ人は到底高尚絶對の美妙的快樂を享くるを得ざるなり。已に然り、予は問はんと欲す、現世の記憶の存する間は吾人は、何が故に此美妙的快樂を感ずる能はざる乎、此『リリーフ』と現世とは、何が故に兩立する能はざる乎。此『美』に感じたるの瞬間は只無意識なるのみ。予は無意識を以てショペンハウエルが如く、吾れ人が考へ得べき最高の樂地なりと思はざるなり。無意識中には苦痛なき代りに、快樂もなし。予は眞の積極的快樂（若しあらば）に比して、比較的に苦痛の地位あるを信ずる者なり。而して吾人は此無意識中に陷りてすら、無限なる苦痛の壓束を解脱したるの思あるのみならず、無限なる快樂を受くるの思あるは何故ぞ。嗚呼之れ此世の生活が如何に苦痛に充ち、悲哀に

超過し、差引き快樂なる世なりとせば、吾れ人は人間自然の情として務めて愉快なる此世の記憶、及び此記憶を認むる自己の意識を保持せざるべからず。此世果して樂しからん乎、此世の記憶自己の意識を失ふに當ては、勢ひ不快の感覺を興すべき理なり。然るに事實全く之に反し、吾れ人は務めて現世の記憶を失はんと欲し、之を失ひたる時は悲みの代りに無上の快樂を感ずるは何故ぞ。吾れ人は記憶を奪ひ、理性を亂る酒をば『憂の玉箒』なりとて愛するなり、感覺を奪ひ意識を盲するの睡眠をば『日毎の天使』なりとて悅ぶ也。殊に吾れ人は高尙なる『美』に感じたるの時、著しく此事を見る也。

自然界の美景を見、若くは人間界の美人に遇ひ、此上もなく感動せられたるの時に當り、吾れ人の心性は如何なる狀態に在りや。各人の經驗せる如く(若し審美的眼孔あらば)吾れ人は恍惚として我れ吾を忘るゝ也、嗒焉として物と我とを辨せざる也。己れの見居ることも、又物の見られ居ることも、一切忘れ去りて、我身は其美形の中に吸入せられ、我と物とは渾然融化して一體を作る也。已に無意識なり、已に無感覺なり、現世の利害喜憂は最早や一點塵を擧げて吾人を煩はさゝるなり。

して此世に存するや否やを疑はんと欲する者也。苦痛は吾人の世界に充滿し、快樂とは只苦痛の不在なる場合に名くる者に非ざる乎。吾れ人は茲に至てショペンハウエルが『人間の爲し得べき德義は只愛憐（ピテー）のみ』と言ひしことを、げにもと思はざるを得ざる也。

抑も又何故に、人は文學美術に於て悲哀窮苦の情を寫すに工にして、歡愉愛樂の態を描くに拙なりや。吾れ人が所謂愛は悲哀の愛のみ、文學美術は何故に涙なくして美なる能はざる乎。等しく人の性情を發揮すと云ふ、喜も亦悲と齊しく一の情に非ずや、何んぞ彼に巧にして此に拙なるや。抑も亦何故に戲曲演劇に於て屢々實驗する如く悲哀に動くことに切にして、歡樂に感ずることに冷なる乎。凡て吾れ人は其の知る所に工にして知らざる所に拙なり。吾れ人が經驗せし所、若くは記憶する所に符合する者には、經驗せず記憶せざる者よりも同感を表するの情遙に大なる者あり。是を以て之を見れば、皆之れ吾れ人親ら此世にありて悲哀を經驗したること、歡樂を享受せしよりも遙に深大なるが、爲に非るなきを得むや。

四。若し此世にしてよし快樂に充ちたりとはゆかずとも、快樂の量苦痛の量を

の幸福なる樂園を想像する所以の者は、之れ現世の不幸なる狀態に反照して、おのづから吾れ人の胸中に起りたる者に非る乎。彼の勁節高義の士ケートーが死に臨み、『我が寃に死すゝを以て我靈魂の不滅なるを知る』と叫びしも、寒風氷雪の間に蟄居するチユクチエン人が其靈魂の未來に於て『堅氷の海を閉づることなく』『黃金の角ある馴鹿』を至る所に見出し得べき樂園の北方にあるべきを確信せるも、要するに此世の正義に悖り、悲哀に充てるの反證として見るべからざる乎。『天國』なる思想は、古今東西を通じて遍く人心に浸染し居らざるはなし。若し此世にして樂天家の言の如くならんか、吾れ人は何に滿たずして、此世より一層完全なる他界の觀念を起し得べきや。

三。試に此世の快樂と苦痛とを比較し見よ。吾れ人は積極的苦痛を思ひ得るも、殆ど積極的快樂と想像する能はざるに非ずや。之れ甚だ著しき事實なりとす。吾れ人が所謂快樂は概ね受動的にして、只苦痛の去れることによりて僅に感じ得べきのみ。之に反して苦痛は殆ど消極的には考ふべからず。之れ豈此世にありて苦痛の遙に快樂に超駕せるを示す者に非ずや。否吾人は寧ろ積極的快樂の與

を得ざるに非ざるよりは、故らに哲學の範圍に入らざらんことを務めたり。讀者之を諒せよ。

一。樂天家の說に隨へば、絕對の善は吾人々間の務めなりと。實に然り、絕對の善とはカントが說ける如く、完全なる德義と完全なる幸福とより來る。然れども此二の者は少なくとも此世に於ては一致せざる也。否啻に一致せざるのみならず、兩立すべき者に非るなり。吾人は此二者の中の何れかを擇ばざる可からずとせば、吾れ人は如何にして絕對の善を求め得べきか。予は少なくとも德義の點に於て、厭世家は遙に樂天家の上にあるを思ふ也。

二。吾れ人の宗教心は如何にして起りたりや。吾れ人は政府なき人民にも、家屋なき蠻族にも、宗教あるを見るは何故ぞ。人の思想は多く比照（コントラスト）より起るは心理學者の齊しく認むる所なり。之を以て大旱ありて雲霓を想ひ、白日ありて暗夜を懷ひ、苦痛ありて快樂を思ひ、有ありて無を思ふ。吾れ人が宗教心は此世の變遷究まりなきものを見て、一定不易なるを想起し、有限相對なる者を見て、無限絕對なるものを愉悅することによりて起りたる者に非る乎。吾れ人が蹻足頓手して未來

覺らざるなり。吾れ人は失敗に遇はんが爲に盡力し、死に終らんが爲に生くる者に非ざる乎。

抑も知らず、吾れ人は何故に死を恐るゝ乎。吾れ人の生活は畢竟生死の間に包まれたる無限なる時の一刹那に過ぎず。生れざるの前は死するの後と共に、吾人に於て等しく無意識なり。吾れ人の悲哀は素より意識あるによりて生ず。已に生前の悲しきを覺えず、安ぞ獨り死後を之れ恐るゝの理あらんや。啻に恐るゝの理なきのみならず、現世の苦痛を解脫して無意識中に歸するを以て却て幸福なりとせざるべからざる也。故に予は想ふ、世人が死を恐るゝは死後を恐るゝに非ずして、只死する時の苦痛を恐るゝに非ざる乎。若し人あり、寒月朧下の墓門を叩き、其中に永眠せる死人に向つて『汝等は再び此世に出づるを欲する乎』と問はゞ、彼等は必ず齊しく其頭を振るならむ。

以上は全く理論を離れて、讀者が普通の情性に訴へたるのみ。讀者は斯の如き理由を以て滿足する能はざるべきを慮り、逐一左に其理由を述べんと欲す。予は元來本題の寧ろ感情的のものにして、理論的のものに非ざるを思ふが故に、事止む

ある。思ふて玆に至れば、吾れ人は闇然として踟躕せざるを得んや。予は想ふ、世人が悲哀苦痛失望を口にすること甚だ輕きに過ぐ。是等は吾れ人の希望に附着することと、恰も影の形に從ふが如きを想ひ見よ。希望なくして生活する能はざるの吾れ人は、亦悲哀苦痛失望なくして生活する能はざるを想ひ見よ。吾れ人は猶冷然としてポーブが『人は決して幸ならず、然れども常に幸ならんとす』と言へる詩句を誦し得る乎。『常に幸ならんとす、』之れ寧ろ初より幸ならざるに如かん乎。言ふ勿れ、之れ單に希望の延期なりと。到底達すべからざるの延期は之れ却て無限の苦痛に非ずや。

又一方より觀察すれば、要するに吾れ人は唯死を免れ、若くは延期せんとして、旦夕盡力するに外ならず。然れども之れ最後に失敗せざるべからざるの盡力なること明白なるに非ずや。吾れ人の生活は恰も岩礁に充てる大海の如し。吾れ人が輾轉起伏して之を避けんとするも、『死』なる險巖は冷然として避くべからざるの路を遮て、吾れ人を迎へ居るなり。吾れ人自ら知らず、愚にも種々の妄想を懷て自ら慰め自ら勵し、一擧一動は即ち此の最も不幸なる岩石『死』に近く所以なるを

希望は遙に絶對眞如の空に向ふを如何せんや。思ふに吾れ人は何故に絶對なる目的を放棄して比較的の世界に滿足せざるべからざる乎。吾れ人は如何にしても自ら圓滿なる理想を挫折して、卑陋なる慾望の犧牲とならざる可らざるの理由を見る能はざる也。

試に問はん、吾れ人は旦夕何に據りて其生を樂むか、言ふまでもなく希望あるに據りてなり。げにや、人は家なくして生くるを得、衣なくして生くるを得、食なくして生くるを得、然れども一彈指の間も希望なくして生くる能ばざる也。人間の歷史は希望の歷史に外ならず。見よ、頑冥樸樕なるノース人は何が故に『ヲータン』を信じたる乎。何故にエリヤは死を神に祈りしか。何故に羅馬の狂詩人は身を以て火山の坑に投じたる乎。何故に亞剌比亞の豫言者は劍影の裏に天國ありと叫びし乎。佛蘭西革命の義士が何が故に醜穢なる一女子を拜して道理の神となしたる乎。彼等は各々其可憐なる希望を夢みたればなり。顧ふに人間ありてより幾十千年の間、生々死々したる無限の蒼生は、各々其希望を齎らして生れ來らざるはなし、而して怨嗟憂悶の中に其生を送り、失望落膽して死し去らざる者果して幾人か

ぞや。自己より高きもの、自己より大なる者に向て、絶えず呻吟する一の希望に過ぎず。然れども、此希望の目的は永久達し得べからざる也。何となれば既に意志と言ふ、意ふ所なかる可らず、若し其の意ふ所の希望に達したりとせんか、意志は其の意ふ所を失て茲に自滅すべければ也。意志は萬物の生命なり、萬物苟も死せざる以上は、意志は必ず其の得べからざる者に向て恨望するを免れず、故に吾人の生命は到底不滿足不完全なる生命なりと。ショ氏が此論は巧に其本領なる宇宙意志論との聯絡を通じ得たりと雖も、之れ只其の巧なるに止るのみ。予は吾れ人の厭世思想は此の如き複雜なる理論の結果として生じたる者としては餘り簡單なるに過ぐるを思ふ。學說としては予はハルトマンの說を賛する者也。氏はライブニッツの樂天主義に一頓挫を與へて曰く『然り、ライブニッツが言ふ如く、此世界はあらゆる世界の中にて尤も完全圓滿なるに近き者ならん、然れども之れ少くも世界なきに比すれば遙に劣れる極めて不完全不圓滿なる世界なり』と。吁誰か或物は物なきに勝ると云ふ乎。世の所謂完全と言ひ、幸福と言ふ、皆之れ比較的の語のみ、獨り吾れ人が願望する所は比較的の者に非ずして、吾れ人が靈魂に固有せる先天的

すべきを夢想して疑はざる所の者に非ずや。此世果して厭ふべき者ならん乎、此等の者は皆空名に過ぎずして、吾れ人は苦痛其物の爲に苦み、悲哀其物の爲に悲むなり。『厭世』の二字は實に吾れ人のあらゆる希望に向て死刑を宣告せんとする者に非ずや。予輩自ら斯語を發するは、吾同胞兄弟に向て自殺を勸告するの思なくんばあらず。只悲むらくは、經驗と知識とは吾人の感情に反し、吾人をして厭世主義の一大眞理に非る乎を疑はしむる者ある也。吁吾れ人が希望と幸福とは、此一『乎』字の上に懸れり。誰か一轉語を下して吾人が誤謬を直すものぞ。吾人は切に我説の空想虚誕ならんことを祈るなり。昔者權力を冀ひてサタン亡び、知識を望みてアダム落ちぬ。人世字を知る、夫れ憂の初なる乎。

何を以て此世厭ふべきが如しと言ふ乎。ショペンハウエルは宇宙意志論を以て巧に之を論せり。然れども、予の見る所を以てすれば、之れ唯厭世論を以て強て其哲學上の主義と矛盾せざることを示したるに過ぎずして、厭世論なるものは、彼が哲學を離れて別に存在せしこと疑なき也。ショ氏の說に曰く、宇宙の本體は一の意志にして、百般の現象は其形を變じて表はれたるもの也。吾れ人の意志とは何物

能はざる乎。予はライブニッツの『オプテミズム』とショペンハウエルの『ペシミズム』とを以て、一に渠等の境遇に歸することの幾分の道理なしとは思はざるに非ず。只斯る論者が同一論法を以て『眞の幸福は厭世者の門にあり』と言はれたるハルトマンをば如何にして說明し去るかを危むのみ。

要するに、吾れ人が好で世を厭ひ、若しくは好で世を厭はんとするの傾向あるは、抑も何が爲ぞ。之れ予が讀者の前に呈出したる一大疑問也。

彼の性癖と境遇とを以て主觀的に解釋せんと努むるは、之れ預め其原因の客觀的實在を拒否したる極めて理由なき不當の說と言はざるべからず。予は常に疑ふ、是れ此世の眞に厭ふべき者なるが故に非ざる乎。

吁予は敢て『世實に厭ふべし』とは言はざるなり。之れ言ふ能はざるに非ず、言ふに忍びざれば也。吾れ人が此世に棲々遑々として錙銖の事物に齷齪し、寒暑痛痒少しも厭はざる所以の者は、要するに此世が十分なる報酬を以て吾れ人の勞苦に報ゆるあらんことを確信すればなり。富貴とは何物ぞや、名譽とは何物ぞや、若しくは正義自由とは何物ぞや。之れ皆吾れ人が煩悶怨嗟の間猶早晚吾れ人を歡迎

安せざるの我に利なきは、三尺の童兒と雖も之を知る。彼る聰明睿智の人往往之に反し、終生落々として絶つべからざるの羈絆を絶ち、離る可からざるの世に離れんとして呻吟するは之れ何が爲ぞ。吾人が甘せざるべからざるの此世に甘ずる能はざるは、理性ある吾人の行爲として寧ろ怪むべからずや。吾れ人は笑ふの樂しきを知り、泣くの悲しきを知る。吾れ人は此世に在る以上は強ても笑ふべきものなり、好て泣くものあるに至ては、之れ寧ろ解すべからざるに非ずや。

是れ勿論各人の境遇性癖等に依る者あらむ。然れども誰か各人の理性が其境遇と性癖とを造らざるを知らむや。吾れ人はバーンスをして『人は哭かんが爲に造られしものよ』と嘆かしめ、バイロンをして『なからむにも劣りける此世』と慨しめ、ハムレットをして『我體の露となり。ても解けよかし』と悲ましめ、漢人をして『人生不滿百却懷千歳憂』と歎せしめ、兼好法師をして『萬事皆非なり』と叫ばしめ、紫式部をして『何處とも身をやる方の知られねば憂しと見つゝもなからうる哉』と哭せしめたる者を以て、單に彼の性癖と境遇とに歸す可き乎。抑も吾れ人は彼等の性癖境遇未だ成らざる前其之を發揮し其之を助成したる一大原因の外に存することを思ふ

厭世論

厭世論、是れ極めて不愉快なる問題なり。予は啻に讀者の讀むを欲せざるを知るのみならず、予自らも亦之を筆にするを好まざる也。其の玆に論ずるを敢てする所以の者は、情已むを得ざる者あるを以てなり。是れ或は自家一個の空想ならんも知れず、若し等しく主觀的空想に止らば、予は切に『マクベス』の匕首たるも『ハムレット』の幽靈ならざるを祈る也。

予は常に疑ふ、吾れ人が厭世的詩歌を讀むや、之を惡み嫌ふことをせずして、却て同情を表するは何が爲ぞ。其の耳に響くや恰も我故鄕の音の如く、其の心に感ずるや、恰も我靈魂の囁きの如く、少しも晦澁解し難きの跡あらず、猶永別の友、兩々手を握て宿情を媚語するが如き思あるは何が爲ぞ。世と共に存するの吾れ人が世を外にするの思想と合調するは寧ろ奇怪なる現象に非ざる乎。已に世に生る、此世を除て存する處なし、此世を惡で逃るゝ所なし。我れと世とは到底離る可らざる也。已に離る可らず其世に甘じ其分を樂むの我れに利にして、世を惡み其處に

の營々として走生奔死するに等しきなきか。光を含み世に混じ長統の跡を尋ね劉子の流を汲み濁醪一引、俯して萬物の擾々焉たるを望むは快は即ち快なりと雖も、醉生夢死、草木と何ぞ擇ばん。吁、人は空名の爲めに生れたるか、將た行樂せんが爲めに生れたるか。果して然らば是れ夸父日を追ふの痴を學ぶにあらざれば禽獸草木と其命を等ふせんとするものなり。予甚だ之に惑ふ。

南華老人は言へらく、大覺ありて其の大夢なるを知ると、佛氏は論すらく、離慾の寂靜は四諦を悟る所以なりと。已めよ、若し人生を以て夢となさば、迷へるも悟れるも等しく是れ夢にあらずや。縱ひ身を觀じて岸頭離根の草とし、命を論じて江邊不繫の船となすも、期する所は一の墓門にあらずや。生前の事業夢中の觀の如く、死後の名聞草露の如くんば茫然たる吾が生、夫れ何くにか寄せん、大哀と謂はざるべけんや。嗚呼人生終に奈何。予往を顧み來を慮り半夜惘然として吾れ我を喪ふ。

（廿四年六月）

り其英名を不朽に傳へんとするにあり。然れども星遷り世變り之が洒掃の勞を取るの人なく、雨雪之を碎き、風露之を破り、今や塊然として土芥に委するも人絶て之を顧みず、先人の功名得て而して傳ふべきなし。思一たび此に至れば彼の廣大なる墓碑を立てゝ名の不朽を願ふものは何等の痴愚ぞや。嗚呼劫火燗然として一たび輝けば大千旦に壞す、天地又何の常か之れあらん。想ふに彼の功業を竹帛に止めて盛名の窮なきを望むものは、其痴之に等しきを得んや。

悟れ、一瞬の須臾なるも、千歳の久しきも、天地の無窮なるに比すれば等しく是れ一刹那なるにあらずや。名其死と共に滅するも、死後千年を經て亡ぶるも、其終あるに至ては一なり。人生を此世に享け此一時の名を希ふ五十年の目的、遂に之に過ぎざるか。予甚だ之に惑ふ。

功名朝露の如し、賴むべからず、人生終に奈何。藐然として流俗の毀譽に關せず、優游自適其の好む所に從ふ、樂は即ち樂なりと雖も、蟪蛄草露に終ると孰れぞや。栖栖遑々、時を匡し道に順ひ、仰で鳳鳴を悲み、俯して匏瓜を嘆ず、之を估て售れざらんことを恐れ、之を藏めて失はんことを憂ふ、之れ正は即ち正なりと雖も寧ろ鳥獸

人生終に奈何

人生終に奈何、是れ實に一大疑問にあらずや。生きて回天の雄圖を成し、死して千歳の功名を垂る、人生之を以て盡きたりとすべきか。予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を樂む、何ぞ須ひん、身後千載の名、人は只行樂して已まんか。予甚だ之に惑ふ。蝸牛角上に何事をか爭ふ、石火光中に此身を寄す、人は只無常を悟て終らんか。予は甚だ之に惑ふ。吁、人生終に奈何。將た人は只死するが爲に生れたるか。

嘗て一古寺に遊ぶ、檐朽ち柱傾き、破壁摧欄、僅に雨露を凌ぐ、環堵廓然として空宇人を絶ち、芒々たる萋草晝尚暗く、古墳累々として其間に横れるを見、猛然として悟り、喟然として嘆ず、吁、天下心を傷ましむる、斯の如きものあるか。借問す、是れ誰が家の墳ぞ、吊祭永く至らず、墓塔空しく雨露の爲に朽つ。想ふに其の生れて世に在るや、冲天の雄志躍々として禁ふる能はず、天下を擧て之に與ふるも心慊焉たらざりしものも、一旦魂絶て身異物とならば、苔塔墓陰、盈尺の地を守て寂然として聲なし、人生の空然たる哀むべきの至ならずや。後人碑を建て之に銘するは其心素よ

第一期

（二十四年より二十九年九月まで）

倫理問題研究の時代

目次

第三期　雜篇

第三期(三十四年八月より三十五年終焉まで)……八五一

(信仰覺醒の時代)

第二期 雜篇

第二期（三十年五月より三十三年七月まで）……二五五

（國家主義の時代）

目次

之に加へて研究及び信仰を概括して思索と稱せしのみ。茲に讀者に謝すべきは本卷の扉には「時論及思索」の文字を刻せし事にして、その文字は守本文靜氏が從軍出發前の揮毫に係かり、編者は本卷印刷の前には之を「時勢及思索」と命名する事を決せしも、扉に刻したる文字を修正する事を忘れ、その儘に印刷せし者なり。此は再版の時に訂正すべし。

送り假名、句讀その他編纂校訂の事は總て前數卷の例による。本卷に掲げたる著者の肖像は三十二年十二月の撮影にして傍に在る犬は當時著者の愛犬、散歩逍遙の友たりし者なり。手蹟二葉、一は日蓮上人論最初の草稿にして一部分破れて存せざる者を補綴したる者、二は偶然に殘りたる未刊の一草稿なり。

明治三十八年七月十日

故著者が九年前に
大學の門を出でたる日

齋藤信策
姉崎正治

變化と連續との表裏隱見の關係は、本卷を通讀せば炯眼の人の容易に看取し得る所なり。

本卷の材料もその量甚だ多く、到底一卷に收め難きを以て上下二卷に分たんとの考へなきにあらざりしも、然かすれば、恰も第二期の中央にて二分せざるべからず、此くするは著者一生の思想史を觀るに甚だしき不便を來たすを以て、如何にしても之を一卷に收むるを期し、即ち材料に多少の取捨を行ひたり。著者の研究思索に關する材料の幾分を捨つるは編者等に於て忍び難き所なりしも之を斷行し、日本主義の辯護に關して多少重複せる者、一時の時論に過ぎざる者、特に教育制度に關する雜論を捨てゝ本卷を一千餘頁に止むるを得たり。此等の除かれたる材料は他日外篇として出版する事あるべし。又先に述べたる中等倫理教科書は著者の國家主義に移らんとする時代を代表し、三十一年一月に出版したる「世界文明史」は著者の國家主義若くは民族主義を見るべき者なれど、故ありて全集中に收めざりしを以て、別に讀者の參考を望む。

本卷を「時勢及思索」と名けしは、著者の「時代管見」中前半を時勢と命名せしに據り、

倫理説に傾くに至れり。三十年春再び京に入るに及びては、著者は殆ど全く國家主義、日本主義の使徒として世に現はれ、その間盛にこの主義の爲に破題の活動をなしたり。されどこの間にありても著者はこの倫理主義を以て人生の根本的説明とせずその實行的主義に外ならざる事を明かに自覺し居たれば、形而上的要求又心情の聲はその間にも時々に現はれ、終に三十三年の春には身を丁酉倫理會に投し、「人の本分」を論じ、宗教家の覺悟を説くに至れり。表面は國家主義の波濤洶湧の中にも、千尋の底靜かに眞珠の光りを藏したりしなり。この際著者が肺疾に罹りて歐洲行を斷念するに至りし事は、彼れをして益す直覺心情の人たらしめ、病勢稍寛にして再び文筆を執るに及びて彼れは「美的生活論」者として一世を驚かしぬ。これより著者は人生の活ける事實に基きて、人心の活ける要求を重んじ、終に熱烈なる日蓮崇拜者となりてその一生を終れり。この第三期に於ける信仰の傾向は第二期の國家主義に比して、一見豹變の如きも、その素地は仙臺時代にも、近松研究の中にも、人生理想の研究にも十分に存し、第二期の諸論議中にも時々隱見し、特にその終りには益す明白の自覺に向ひつゝありし自然の結果に外ならず。此等の

序言

樗牛全集第四卷には故著者が人生に關する研究、思索、信仰の跡を傳ふべき遺文を收む。即ち仙臺在學の頃、一少年にして思ひを人生の問題に潛め始めしより、卅二歲を一期として信仰の光明を望みつゝ此土を辭せし時まで、著者一生の思想史は收めてこの一卷に在り。この間に於ける著者が思想發達の徑路は、文藝評論に於けると同じく、而かも亦彼に於けるよりも一層劃然として三期に分つべし。第一期は二十五六年仙臺在學の頃より始まり、二十九年大學卒業の時までの倫理問題研究時代にして、始めには文學の側より人生問題を觀察せし者漸く轉じて、弘く社會生活と形而上基礎とより倫理を研究したるはこの時期にあり。第一期の結果は著者をして永遠なる人生の理想を完全に實現するは不可能の事にして、人はその一端の實現に滿足すべく、而して此は社會生活の中に發見せらるべきを明かにしたるにあり。著者はこの觀想を抱いて仙臺に入り、その間學校教育の實務に當り、且つ「中等倫理教科書」を著はしたれば、その思想は漸く明白に國家主義の實際



故高山林次郎著

樗牛全集
第四卷

時勢及思索

明治三十八年

東京 博文館

吾人は須らく現代を
超越せざるべからず
高山林次郎